

# 四 日 市 遺 跡 3

— 玖珠工業団地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(3) —

2020

大分県立埋蔵文化財センター



南方（伐株山）から四日市遺跡を望む



第3次調査区を北東から望む



鹿を描いた線刻絵画土器（第15次調査S K 271出土）



矢じりを描いた線刻絵画土器（第15次調査S K282出土）

## 序 文

本書は、大分県教育委員会が大分県地域づくり機構大分県土地開発公社から依頼を受け実施した玖珠工業団地造成工事に伴う四日市遺跡埋蔵文化財発掘調査の報告書です。調査は、平成14年度から平成29年度にかけ16次にわたり行われました。そのうち今回は、第2次～第9次、第12次～第15次調査についての報告です。

遺跡の所在する玖珠町は、大分県の西部に位置し、西流する玖珠川沿いに形成された玖珠盆地を中心に、周囲には山地が幾重にも連なっています。盆地周辺の山地はメーサ（卓状台地）と呼ばれる独特な山容を呈しており、その四季折々の姿は私たちの目を楽しませてくれます。

玖珠町の遺跡は玖珠盆地周辺に多くみられ、旧石器時代から近世にいたる人々の営みを知ることができます。

四日市遺跡の調査は、約10万㎡の台地上の全面に及びました。その結果、弥生時代集落の全容を把握することができ、加えて、弥生時代中期の大型掘立柱建物跡や鹿の線刻絵画土器などの貴重な遺構・遺物が多数確認されました。

本書が広く活用され、埋蔵文化財の保護・啓発、さらには学術研究の一助となれば幸いです。

最後に、発掘調査ならびに報告書の刊行にあたり、多大なご支援とご協力をいただきました関係各位に対し、衷心から感謝申し上げます。

令和2年3月31日

大分県立埋蔵文化財センター

所 長 江 田 豊

# 例 言

- 1 本書は、大分県教育委員会が大分県土地開発公社から依頼を受けて実施した玖珠工業団地造成事業に伴う四日市遺跡発掘調査の調査報告書である。
- 2 調査は、平成14年度の第1次調査から平成29年度の第16次調査まで毎年継続して実施した。このうち、本書は第2次調査（平成15年度）、第3次調査（平成16年度）、第4次調査（平成17年度）、第5次調査（平成18年度）、第6次調査（平成19年度）、第7次調査（平成20年度）、第8次調査（平成21年度）、第9次調査（平成22年度）、第12次調査区域3及び区域4（平成25年度）、第13次調査（平成26年度）、第14次調査（平成27年度）、第15次調査（平成28年度）の発掘調査報告書である。
- 3 発掘調査のうち、第5～9、12～15次調査では、実測作業・写真撮影・発掘作業員の労務管理等の業務について、大分県立埋蔵文化財センター職員の監理のもと発掘調査支援委託業務として委託し実施した。
- 4 出土遺物の整理作業・報告書作成に伴う諸作業については、大分県立埋蔵文化財センター職員が担当した。また、第7～9、12～15次調査については、遺物の洗浄・注記・接合・実測・トレースについて、埋蔵文化財発掘調査に係る整理作業業務として委託し実施した。
- 5 出土遺物ならびに図面・写真等は、大分県立埋蔵文化財センターに保管している。
- 6 本書で使用する測量座標値は世界測地系で、方位は座標真北である。
- 7 本書で使用する遺構名称は、SB：掘立柱建物、SD：溝、SF：道路状遺構、SH：堅穴建物、SK：陥穴・土坑・貯蔵穴等、SX：不明遺構等である。
- 8 本書の執筆分担は以下のとおりである。

第1章	江田 豊
第2章	後藤一重
第3章	横澤 慈
第4章	後藤一重
第5章	松本康弘
第6章	松本康弘
第7章	松本康弘
第8章	小柳和宏
第9章	小柳和宏
- 9 本書の編集は、松本康弘、横澤慈、後藤一重、小柳和宏が協議して行った。

# 目 次

第1章	はじめに	1
1	調査の経緯	1
2	調査の体制と概要	1
3	本年度の調査概要と調査体制	6
第2章	遺跡の位置と環境	7
1	四日市遺跡の位置と地理的環境	7
2	四日市遺跡の立地	8
3	四日市遺跡の歴史的環境	8
第3章	第6次から第9次調査	13
第1節	各調査区の概要	13
1	第6次調査	13
2	第7次調査	14
3	第8次調査	14
4	第9次調査	15
第2節	四日市遺跡第6次・7次・8次2区・9次調査の成果	17
1	調査区の基本層序	17
2	旧石器時代・縄文時代の調査	17
3	弥生時代の調査	35
	(1) 竪穴建物	
	(2) 掘立柱建物	
	(3) 土坑	
	(4) 溝	
4	近世及び時期不明の遺構	73
	(1) 土坑	
	(2) 溝	
	(3) 道路状遺構	
5	調査区等出土遺物	81
第3節	第8次調査1区の成果	88
1	調査区の基本層序	88
2	旧石器時代の調査	88
3	弥生時代の調査	91
	(1) 竪穴建物	
	(2) 土坑	
4	近世以降の遺構	102
	(1) 溝	
	(2) その他の遺構	
5	調査区出土遺物	106
第4節	第9次調査4区の調査	109
第4章	第12次調査	115
1	はじめに	115
2	旧石器時代	116
3	縄文時代	117
4	弥生時代	118
	(1) 竪穴建物	
	(2) 土坑	
第5章	第14次調査	153
1.	はじめに	153
2.	縄文時代	153
3.	弥生時代	158
1	竪穴建物	
2	貯蔵穴	



3	小児用墓棺	
4	その他の遺物	
第6章	第15次調査	193
1.	はじめに	193
2.	弥生時代	193
1	竪穴建物	
2	貯蔵穴	
3	小児用墓棺	
4	掘立柱建物	
5	その他の遺構出土遺物	
6	四日市遺跡（第15次調査）における放射性炭素年代	
第7章	第13次調査	255
1.	はじめに	255
2.	弥生時代	255
1	竪穴建物	
2	貯蔵穴	
3	土坑	
4	小児用墓棺	
5	掘立柱建物	
3.	古墳時代	387
1	周溝墓	
第8章	第2次から第5次調査	393
第1節	はじめに	393
1	調査経過	393
2	調査概要	394
第2節	第2次調査区	395
1	概要	395
2	弥生時代	396
(1)	竪穴建物	
(2)	掘立柱建物	
(3)	土坑	
(4)	溝	
(5)	円形周溝遺構	
3	古墳時代	412
(1)	竪穴建物	
4	まとめ	416
第3節	第3次から5次調査区	417
1	概要	417
2	弥生時代	418
(1)	竪穴建物	
(2)	掘立柱建物	
(3)	土坑	
(4)	溝	
(5)	円形周溝遺構	
3	古墳時代	519
(1)	周溝墓	
4	中・近世	528
(1)	土坑	
(2)	切岸	
5	まとめ	529
第9章	おわりに	531
遺物観察表		533
写真図版		593

## 第1章 はじめに

### 1 調査の経緯

四日市遺跡は、大分県北西部、玖珠郡玖珠町が所在する玖珠盆地のほぼ中央部を流れる玖珠川にそって形成された丘陵上に位置する。この丘陵を含む玖珠盆地一帯が、九州横断自動車道（長崎～大分）の開通及び国道210号線、国道387号線といった基幹道路の集束地域となった。さらに玖珠町内に「玖珠インターチェンジ」が設置される運びとなり、かねてより玖珠町が抱えていた人口減少や高齢化などへの対応策として、新たな基幹産業の誘致による地域活性化を求められていた。特に四日市遺跡が所在する台地は、九州横断自動車道玖珠インターチェンジから直線距離で約2kmと近接した位置にあり、かつ台地上は400,000㎡近い面積が確保されるもので、生産拠点及び加工品の物流面でも非常に評価される場所であった。

玖珠町の地域経済の活性化対策として工業団地の整備を行う構想が本格的に始動したのは、1994年に作られたマスタープラン「内陸型工業団地基本計画及び基本設計委託業務基本計画報告書」であった。以後このマスタープランにしたがって具体的な事業が進められるようになった。1999年（平成11年）に、工業団地予定地内の取り扱いについて関係部局との協議を行い分布調査及び試掘調査を実施した。その結果、台地上のほぼ全域で弥生時代・古墳時代・中世などの遺構や遺物が存在することが確認された。台地上のほぼ全面に遺跡が存在することから、開発部局である大分県商工労働観光部産業振興課企業立地推進室（現商工労働部企業立地推進課）及び土地開発公社（現大分県地域づくり機構大分県土地開発公社）と協議を重ねた。

当初は、調査対象範囲が100,000㎡を超えることから、単年度での調査は困難であったため、平成14年度から平成32年度に及ぶ長期にわたる年次計画を作成し、この年次計画をもとに計画的に調査を進めていた。ところが、平成28年度末に工業団地をめぐる情勢に大きな変化が生じる可能性が高まったため、大分県地域づくり機構大分県土地開発公社と協議を行い、当初の調査計画を前倒しにし、平成29年度に本調査をすべて終了することとなった。また、報告書については、平成28年度刊行に加え、平成30年度から3ヵ年で報告書を順次刊行することとした。

なお、調査に至る詳細な経緯については、平成28年度刊行の『四日市遺跡1』で報告しているのので、それを参照願いたい。

### 2 調査の体制と概要

本調査は、平成14年度の第1次調査から平成29年度の第16次調査まで毎年実施した。ここでは、本書で報告する調査回数についてのみ、調査体制と調査概要を述べる。なお、所属等は調査当時のものである。

#### 第2次調査（平成15年度）

##### 調査体制

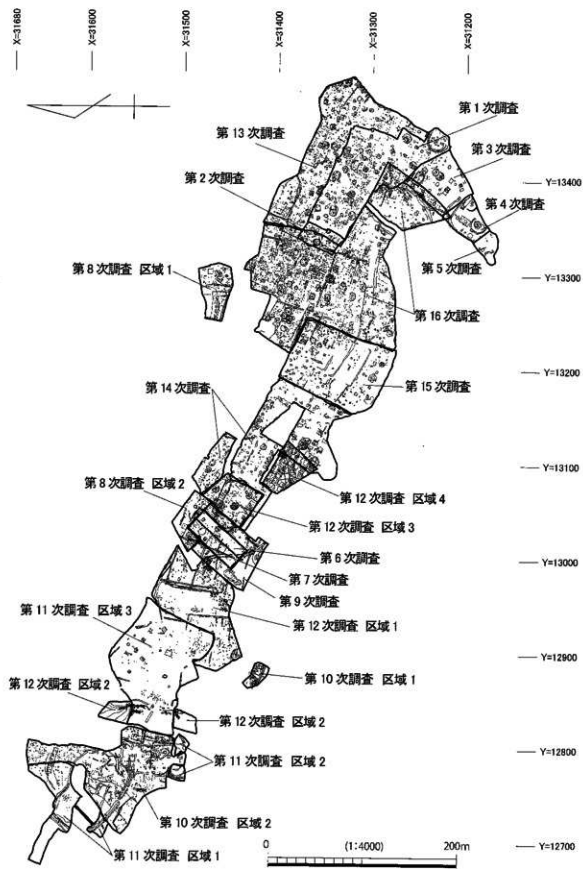
調査主体	大分県教育委員会
調査総括	深田秀生 大分県教育委員会教育長
調査員	今水一成 大分県教育庁文化課長
	麻生祐治 大分県教育庁文化課参事兼課長補佐
	清水宗昭 大分県教育庁文化課参事兼課長補佐
	小柳和宏 大分県教育庁文化課発掘調査大型事業担当副主幹 調査担当
	吉田朋史 大分県教育庁文化課嘱託

調査期間 平成15年12月15日～平成16年3月16日

調査面積 800㎡

##### 調査概要

調査区は第1次調査区の西側隣接地で、弥生時代の竪穴建物、円形周溝溝構、小児墓棺などが確認された。



第1-1図 四日市道跡第1次～16次調査区配置図 (1/4000)

## 第3次調査（平成16年度）

## 調査体制

調査主体	大分県教育委員会		
調査総括	深田秀生	大分県教育委員会教育長	
調査員	伊藤正行	大分県教育庁埋蔵文化財センター所長	
	益永孝則	大分県教育庁埋蔵文化財センター次長	
	小柳和宏	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査第二課資料管理担当副主幹	
	松田幸之助	大分県教育庁埋蔵文化財センター嘱託	
調査期間	平成16年6月1日～10月5日		
調査面積	800㎡		

## 調査概要

特筆すべき遺構として、床面積100㎡を超える弥生時代中期の大型掘立柱建物2棟が確認された。

## 第4次調査（平成17年度）

## 調査体制

調査主体	大分県教育委員会		
調査総括	深田秀生	大分県教育委員会教育長	
調査員	渋谷忠章	大分県教育庁埋蔵文化財センター所長	
	益永孝則	大分県教育庁埋蔵文化財センター次長	
	小柳和宏	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査第一課大型事業担当副主幹	
	下田智隆	大分県教育庁埋蔵文化財センター嘱託	
調査期間	平成17年9月1日～10月31日		
調査面積	800㎡		

## 調査概要

第4次調査は、第3次調査区の南側、弥生時代の集落の南端部にあたる場所を調査した。調査の結果、弥生時代中期の大型円形竪穴建物と方形の竪穴建物の他、貯蔵穴や掘立柱建物、古墳時代の主体部に箱式石棺をもつ円墳、方墳が確認された。

## 第5次調査（平成18年度）

## 調査体制

調査主体	大分県教育委員会		
調査総括	深田秀生	大分県教育委員会教育長	
調査員	小玉学司	大分県教育庁埋蔵文化財センター所長	
	岡本義博	大分県教育庁埋蔵文化財センター次長	
	小柳和宏	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査第一課大型事業担当主幹	
	下田智隆	大分県教育庁埋蔵文化財センター嘱託	
調査期間	平成18年11月20日～平成19年1月19日		
調査面積	800㎡		

## 調査概要

第5次調査は第4次調査の南側を調査した。第4次調査の高台から緩やかに下る部分の調査を行った。遺構の分布は薄かったが、掘立柱建物、土坑、溝が確認された。

## 第1章 はじめに

### 第6次調査（平成19年度）

#### 調査体制

調査主体	大分県教育委員会		
調査総括	小矢文則	大分県教育委員会教育長	
調査員	福田快次	大分県教育庁埋蔵文化財センター所長	
	坂本嘉弘	大分県教育庁埋蔵文化財センター次長	
	岡本義博	大分県教育庁埋蔵文化財センター次長	
	横澤 慈	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査第一課大型事業担当主事 調査担当	
調査期間	平成19年11月15日～平成20年1月15日		
調査面積	800㎡		

#### 調査概要

第6次調査は、前年度の第3次～第5次調査区から西へ約400m離れており、四門市遺跡が展開する台地のほぼ中央部分にあたる場所である。弥生時代の竪穴建物が集中するエリアからは大きく離れているが、竪穴建物6基の他、掘立柱建物、溝、土坑、ピットが確認された。

### 第7次調査（平成20年度）

#### 調査体制

調査主体	大分県教育委員会		
調査総括	小矢文則	大分県教育委員会教育長	
調査員	佐藤英一	大分県教育庁埋蔵文化財センター所長	
	坂本嘉弘	大分県教育庁埋蔵文化財センター次長	
	宮永敬三	大分県教育庁埋蔵文化財センター総務課長	
	横澤 慈	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査第一課大型事業担当主事 調査担当	
調査期間	平成20年12月8日～平成21年2月3日		
調査面積	800㎡		

#### 調査概要

第7次調査は、第6次調査区の西側をほぼ同規模の面積で調査した。第6次調査で確認された土橋を持つ溝については、その向きを北西に向け伸びていることが改めて確認された。

### 第8次調査（平成21年度）

#### 調査体制

調査主体	大分県教育委員会		
調査総括	小矢文則	大分県教育委員会教育長	
調査員	佐藤英一	大分県教育庁埋蔵文化財センター所長	
	坂本嘉弘	大分県教育庁埋蔵文化財センター次長	
	栗田勝弘	大分県教育庁埋蔵文化財センター次長	
	宮永敬三	大分県教育庁埋蔵文化財センター管理予算班主幹（総括）	
	横澤 慈	大分県教育庁埋蔵文化財センター大型事業班主事 調査担当	
調査期間	平成21年6月11日～9月30日		
調査面積	2,772㎡		

#### 調査概要

第8次調査は、第6～7次調査区の北側及び第2次調査区から北西約100mの北側斜面沿いに台形状にせり出した平坦部分の調査を行った。遺構の密度は高くはないものの、弥生時代を中心とした遺構の分布が確認された。

## 第9次調査（平成22年度）

## 調査体制

調査主体	大分県教育委員会	
調査総括	小矢文則	大分県教育委員会教育長
調査員	山口博文	大分県教育庁埋蔵文化財センター所長
	坂本嘉弘	大分県教育庁埋蔵文化財センター次長
	宮内克己	大分県教育庁埋蔵文化財センター次長
	栗田勝弘	大分県教育庁埋蔵文化財センター次長
	春山義光	大分県教育庁埋蔵文化財センター管理予算班課長補佐（総括）
	高橋信武	大分県教育庁埋蔵文化財センター資料管理班主幹 調査担当
調査期間	平成22年5月6日～8月26日	
調査面積	2,338㎡	

## 調査概要

第9次調査区は、第6次～第7次調査区の南側に位置する。この調査では、特に第6～第7次調査で確認されていた溝が、ほぼ南北方向に掘られ、台地を東側と西側を遮断するように構築されていることが確認された。

## 第12次調査（平成25年度）

## 調査体制

調査主体	大分県教育委員会	
調査総括	野中信孝	大分県教育委員会教育長
調査員	宮内克己	大分県教育庁埋蔵文化財センター所長
	小林昭彦	大分県教育庁埋蔵文化財センター次長
	春山義光	大分県教育庁埋蔵文化財センター管理予算班課長補佐（総括）
	後藤一重	大分県教育庁埋蔵文化財センター大型事業班参事（総括） 調査担当
調査期間	平成25年5月13日～平成26年1月21日	
調査面積	10,605㎡	

## 調査概要

第12次調査は、第11次調査で確認された石棺群の北側及び南側の拡張部分と台地中央部第9次調査に隣接した部分の調査を行った。石棺群周辺の調査では、第11次調査と同様、石棺墓と道路状遺構が確認された。

## 第13次調査（平成26年度）

## 調査体制

調査主体	大分県教育委員会	
調査総括	野中信孝	大分県教育委員会教育長
調査員	松村洋一	大分県教育庁埋蔵文化財センター所長
	後藤一重	大分県教育庁埋蔵文化財センター次長
	藤田幸三	大分県教育庁埋蔵文化財センター管理予算班主幹（総括）
	松本康弘	大分県教育庁埋蔵文化財センター県事業班主幹 調査担当
調査期間	平成26年5月13日～平成27年1月19日	
調査面積	8,494㎡	

## 調査概要

第13次調査は、第1次調査区北側に隣接する平坦部分を調査した。四日市遺跡の弥生時代の集落として最も密集に遺構が分布する部分の調査を行った。調査の結果当初の想定どおり、弥生時代の多数の堅穴建物、貯蔵穴とともに掘立柱建物が調査区全域で確認された。

## 第1章 はじめに

### 第14次調査（平成27年度）

#### 調査体制

調査主体	大分県教育委員会
調査総括	工藤利明 大分県教育委員会教育長
調査員	後藤一重 大分県教育庁埋蔵文化財センター所長 小柳和宏 大分県教育庁埋蔵文化財センター次長兼県事業班参事（総括） 安藤正廣 大分県教育庁埋蔵文化財センター管理予算班主幹（総括） 松本康弘 大分県教育庁埋蔵文化財センター県事業班主幹 調査担当
調査期間	平成27年5月13日～平成28年1月19日
調査面積	9,480㎡

#### 調査概要

第14次調査は、台地の中央部第12次調査区の北側から東側に隣接する部分を調査区とした。後世の造成により遺構の残存状況は良好ではないが、弥生時代の堅穴建物、貯蔵穴、小児用甕棺墓などが確認された。

### 第15次調査（平成28年度）

#### 調査体制

調査主体	大分県教育委員会
調査総括	工藤利明 大分県教育委員会教育長
調査員	後藤一重 大分県教育庁埋蔵文化財センター所長 小柳和宏 大分県教育庁埋蔵文化財センター次長兼県事業班参事（総括） 安藤正廣 大分県教育庁埋蔵文化財センター管理予算班主幹（総括） 松本康弘 大分県教育庁埋蔵文化財センター県事業班主幹 調査担当
調査期間	平成28年6月16日～平成29年1月11日
調査面積	7,600㎡

#### 調査概要

第15次調査区は、第14次調査区の東側に隣接した部分で、弥生時代の集落中心部周辺に当たるため遺構密度も濃密であった。特筆すべき事例として、第15次調査の際に確認された土坑の覆土中において2頭のシカを描いた壺型土器が、堅穴建物から縁をイメージした銅歯文を描いた壺型土器が出土している。

## 3 本年度の事業概要と調査体制

平成28年度の「四日市遺跡1」（第1次調査）、平成30年度の「四日市遺跡2」（第10次調査、第11次調査、第12次調査区域1・2）に続き、発掘調査報告書の「四日市遺跡3」（第2～9次調査、第12次調査区域3・4、第13～15次調査）の刊行を行った。加えて、来年度の報告書刊行に向け、遺物整理作業を実施した。

#### 調査体制

調査主体	大分県教育委員会
調査総括	工藤利明 大分県教育委員会教育長
調査員	江口 豊 大分県立埋蔵文化財センター所長 執筆担当 松本昌浩 大分県立埋蔵文化財センター副所長 松本康弘 大分県立埋蔵文化財センター企画普及課長 執筆担当 後藤見一 大分県立埋蔵文化財センター調査第二課長 横澤 慈 大分県立埋蔵文化財センター調査第一課主査 執筆担当 服部真和 大分県立埋蔵文化財センター調査第二課主任 後藤一重 大分県立埋蔵文化財センター企画普及課嘱託 執筆担当 小柳和宏 大分県立埋蔵文化財センター調査第一課嘱託 執筆担当

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 1 四日市遺跡の位置と地理的環境

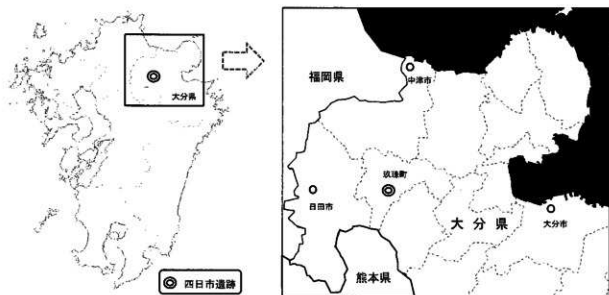
四日市遺跡は、大分県玖珠郡玖珠町大字四日市字上の原及び字西の原に所在する。

玖珠町は大分県の西部に位置しており、九州島の内陸部にあたる。玖珠町を含む周辺の地域は山地が大部分を占めており、平野部は少ない。周囲の山は、耶馬溪溶岩や万年山溶岩の堆積物が侵食されて形成されたメーサ(卓状台地)と呼ばれる特徴的な山容を呈する。これらの山々は地質学的に貴重なもので、景観的にも独特な様相を呈する。

これらの山地を縫うように玖珠川が西流しており、玖珠川に沿って当地域では最大の平野である玖珠盆地が形成されている。盆地は、玖珠町の東に隣接する九重町にもおよび、東西10km余、南北2kmの細長い形状を呈する。玖珠川は九州最大の河川である筑後川の上流にあたり、その源は盆地東方の玖珠郡と大分郡の境界である水分峠付近や久住山麓などに求められる。玖珠盆地周辺では、太田川、森川、松木川、町田川などの小河川が北側や南側から玖珠川に合流する。各々の小河川では、川に沿うように河岸段丘などの狭小平坦面が形成されている。平野部の少ない当地域において、これら川沿いの平坦面は水田等の農地や集落として利用されている。

玖珠盆地の標高は、東端で約380m、西端で約310mである。盆地内は概ね平坦な地形を呈している。しかし、細かく見てみると、玖珠川の流路移動の痕跡や、河岸段丘の形成などが各所にみられ、微起伏が比較的顕著な状況が観察できる。現在では、大規模な圃場整備事業が盆地内の各地域で実施されるなどにより、本来の微地形が失われた箇所も多い。盆地の周囲には、万年山、宝山、大岩扇山、小岩扇山、伐株山などの山々が展開する。これらの山々は、前述したメーサ地形を呈するものもあり、独特な景観を呈する。これらの山々は、標高700～1100mで、盆地平野部との比高差は400～800mである。また、これらに加えて、先の山々から派生した丘陵や独立丘陵がみられる。その標高は400m前後を測り、上面が比較的平坦な地形を呈し、盆地平野部との比高差は50～100mである。後段で詳述するように、盆地を見下ろすこれらの丘陵上には先史時代からの遺跡が多数確認されている。

次に、玖珠盆地と九州島内各地の地理的關係についてみてみる。玖珠盆地の西方は、山塊の中を縫うように流れる玖珠川に沿って西進すると、約20kmで大分県(旧豊後国)の西端に位置する日田盆地に至る。日田盆地周辺には各時代の遺跡が数多くみられる。玖珠盆地からみて、最も近い遺跡密集地がこの日田盆地である。日田盆



第2-1図 四日市遺跡位置図



地から西進すると、すぐに福岡県（旧筑後国）にはいる。さらに川を下ること約20kmで朝倉市に至る。朝倉市からさらに約20kmで久留米市に到達する。河川を媒介に筑後方面中樞部と繋がる様子が分かる。玖珠盆地の北方は、盆地から小河川に沿って北上すると、約10kmで旧豊前国である旧下毛郡に入る。豊前国に入ると玖珠川水系から離れ山国川水系となる。山国川水系の小河川に沿って下り、さらに山国川本流に沿って約20km行くと、周防灘に面する大分県中津市に至る。中津市及び山国川を挟んだ福岡県側には各時代の遺跡が集中する。中津市からは、北九州市經由の陸路や周防灘に直接乗り出す海路により、西瀬戸内地域と繋がっており、その東方には古備や畿内が見える。玖珠盆地の東方は山地が連なる。旧筑後国の中心である大分市へは直線距離で約40kmを測り、途中には玖珠川水系と大分川水系を分ける分水嶺がある。河川交通が利用し難く、筑後方面に向かうのに比べ難儀な道程であったと思われる。最後に玖珠盆地の南方は、盆地から小河川に沿って南進すると約20kmで熊本県（旧肥後国）の小国に至る。

以上のように、玖珠の地は豊後国に属しながらも、筑後国や豊前国、肥後国に非常に近い位置関係にある。険しい陸路が無く豊後国中樞部への道程に比べ、距離的に近い周辺の国々への親近感が強かったかもしれない。特に、玖珠川（筑後川）により結ばれる筑後国方面は、実際の距離以上に極めて近い存在であったと考えられる。豊後国内陸に位置する玖珠の歴史・文化の形成には、このような地理的な関係が少なからず影響しているものと思われる。

### 2 四日市遺跡の立地

四日市遺跡は、玖珠盆地北西側の独立丘陵上に立地する。標高は360～380mで、平野との比高差は30～50mを測る。丘陵上からは、西流する玖珠川と盆地平野部を眼下に広く見渡すことができる。丘陵上は、西側が山地形を呈するが、中央部から東側にかけては比較的平坦な部分が多い。丘陵上の平坦面は東西約0.65km、南北約0.05～0.2kmで、概ね西から東へ、また一部では南から北へ傾斜している。

弥生時代の集落のうち、中期は丘陵上の中央部から東側にかけて広く展開しており平野部に近い東側の密集度が高く、後期～古墳時代は主として東側にみられる。墳墓は、古墳時代前期の古墳が東側の平坦部端部に集中し、これとは反対の位置にあたる平坦面の西端に石棺群がみられる。また、古墳時代後期の横穴墓群が中央部南側の斜面に展開する。一方、西側の山地形の部分には中世の城跡や寺院跡がみられる。

### 3 四日市遺跡の歴史的環境

玖珠盆地周辺や玖珠川支流の小河川沿いのほか、少数ではあるが山間の丘陵上などにおいて各時代の遺跡を確認することができる。なかでも、本遺跡の所在する玖珠盆地周辺には遺跡が特に集中しており、先史時代以降、本地域の中心的な役割を担っていたことが分かる。以下、各時代の概要を述べる。

**旧石器時代** これまで玖珠町内では、旧石器時代のまとまった遺物が出土する遺跡は確認されていないが、盆地を離れた山間部の丘陵・台地上に立地する小岩屑遺跡などで、石器が少数採集されている。玖珠町の所在する筑後川上流域では、隣接する日田市天瀬町の台地上などで良好な遺跡が多数確認されている。これらの遺跡からは、西北九州産黒曜石やサヌカイト・安山岩製のナイフ型石器・細石器などが出土している。今回の四日市遺跡の調査でも旧石器時代の遺物包含層が調査されており、今後盆地周辺の丘陵上からも遺跡の存在が確認されることが期待される。大分県では、大野川流域の火山灰台地上などで遺跡が集中することが知られている。大野川流域の遺跡では、大野川河床などにみられる流紋岩を材料にした石器が出土している。これに対し、本遺跡の所在する筑後川上流域では、流紋岩以外の石材が主に利用されていることが注目される。このような石材利用状況の差は、後期旧石器時代の集団関係などを考えるにあたり極めて示唆的な状況と思われ、遺跡・遺物の具体的な比較検討作業が期待される。

**縄文時代** 二日市河穴、中西遺跡、西田遺跡、八幡中学校遺跡などの遺跡が確認されている。

二日市河穴は松木川が玖珠盆地に流入する場所に位置する。縄文時代草創期から後・晩期までの遺物が層位的に出土している。特に草創期から早期にかけては良好な包含層が残されており、土器編年研究の好資料となっている。また、黒葬人骨も確認されており、本地域における縄文時代の生活を知ることでできる良好な遺跡である。

八幡中学校遺跡は大田川沿いの段丘上に位置し、後期後葉の西平式土器とともに、土壘や溝状遺構が検出されている。

中西遺跡と西田遺跡は、盆地南側の緩斜面に位置する。縄文時代の遺物は、弥生・古墳時代以降の遺構埋土などから出土している。中西遺跡では、後期の石町式土器を中心に少数の早前期土器もみられる。西田遺跡では早期、前期、後期、晩期の土器が出土しており、量的には晩期前葉の土器がややまとまっている。また、扁平打製石斧が200本以上みられ、後晩期段階における原初の農耕の可能性を示唆するものとして注目される。

弥生時代 玖珠盆地周辺では、四日市遺跡をはじめとし、陣ヶ台遺跡、瀬戸遺跡、名草台遺跡、且ノ原遺跡、瀬戸口遺跡、豆田遺跡、小竿遺跡、早水野中遺跡、坂口遺跡、白岩遺跡などが確認されている。

これらのうち、四日市遺跡、名草台遺跡、且ノ原遺跡、陣ヶ台遺跡、瀬戸遺跡は丘陵上に立地する。四日市遺跡の調査は丘陵上全面に及び、中期・後期終末期の集落全容が明らかになった。特に中期については、竪穴建物跡や貯蔵穴などが広く丘陵上に展開し、加えて大型掘立柱建物跡も検出されるなどから、本地域の拠点集落と考えられている。陣ヶ台遺跡は、盆地南側の伐株山からのびる丘陵上にあり、盆地を見下ろす位置にある。後期の竪穴建物跡と溝が検出されている。瀬戸遺跡は盆地から森川をやや遡った丘陵上にあり、後期の竪穴建物跡から石包丁が7本まとめて置かれた状態で出土している。名草台遺跡は瀬戸遺跡西方に位置する丘陵で、中・後期の竪穴建物跡や土坑が確認されている。且ノ原遺跡は盆地北側に位置し、盆地を見下ろす丘陵上にある。発掘調査は行われていないが、弥生時代各時期の遺物が採集されている。

瀬戸口遺跡、豆田遺跡、早水野中遺跡、坂口遺跡は盆地内の段丘上や微高地などに立地する。瀬戸口遺跡、豆田遺跡では、中・後期の竪穴建物跡や小児甕棺墓、木棺墓などが確認されており、盆地を囲む丘陵上の遺跡と同様な内容の集落となっている。

また、白岩遺跡は四日市遺跡西方の丘陵上にある。遺跡からは山頂部を取り囲むように溝が検出されており、いわゆる「のろし台」的な機能を有する後期の高地性集落として注目された。

古墳時代 墳墓として、四日市遺跡、小竿遺跡、八幡中学校遺跡、おごもり遺跡、瀬戸墳墓群、千人塚古墳、亀部起古墳、將軍塚古墳、陣ヶ台姫塚古墳、陣ヶ台彦塚古墳、鬼塚古墳、鬼ヶ城古墳、四日市上ノ原横穴墓群、鷹巣横穴墓群、志津里横穴墓群などがある。これらの多くは盆地周辺に位置している。

小竿遺跡、八幡中学校遺跡では石棺墓群が検出されている。小竿遺跡は50数基の石棺墓や土壘墓で構成される古墳時代前期の集団墓地で、副葬品をほとんどたない。八幡中学校遺跡でも20数基の石棺墓や土壘墓が検出されている。

おごもり遺跡は、石棺を主体部とする5世紀前半の大規模な方形周溝墓である。石棺内からは豊富な副葬品が出土しており、小竿遺跡や八幡中学校遺跡の被葬者よりも上位に位置づけられる。

瀬戸墳墓群は盆地に北側から流れ込む森川を望む丘陵上にある。このうち1号墳は径約18mの円墳で、中央部に竪穴石室と箱式石棺があり、墳裾にも2基の箱式石棺がある。3世紀末から4世紀初めに比定されるもので、3号主体部からは仿製変形五孔文鏡などが出土した。千人塚古墳は瀬戸古墳西方の台地上にあり、主体部の石棺には4体が埋葬されていた。亀部起古墳は玖珠地域唯一の前方後円墳で、おごもり遺跡のすぐ北方に位置する。全長48mで、円筒埴輪などから6世紀の築造と考えられる。

將軍塚古墳、陣ヶ台姫塚古墳、陣ヶ台彦塚古墳は、盆地南側の伐株山からのびる丘陵上に位置する円墳である。鬼塚古墳は7世紀初頭前後の円墳で、横穴式石室内に同心円文等の装飾がみられる。

鬼ヶ城古墳は瀬戸古墳南方の丘陵上に所在する。主体部の横穴式石室内に線刻があり、7世紀初頭前後に比定される。

横穴墓群は各所にみられ、このうち発掘調査が実施されたものは、本遺跡に加え四日市上ノ原横穴墓群、鷹巣横穴墓群、志津里横穴墓群などがある。四日市上ノ原横穴墓群、鷹巣横穴墓群は瀬戸古墳に西方に位置するもので、6～7世紀にかけての埋葬が確認されている。志津里横穴墓群は、盆地に北側から流れ込む太田川を望む位置にある。これらの横穴墓群の分布から、古墳時代後期には盆地周辺部のみならず、盆地に流れ込む河川流域に

第2章 遺跡の位置と環境

番号	遺跡名	縄 代						番号	遺跡名	縄 代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世			近世	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世
1	四日市遺跡	○	○	○	○	○	○	41	岩室遺跡							○
2	岩崎台遺跡				○			42	旦ノ原遺跡			○				
3	平井台古墳			○				43	松山1号墳				○			
4	志津里遺跡				○			44	井尻日鏡田遺跡			○	○			
5	志津里横穴墓群				○			45	曹田遺跡			○				
6	八幡中学校遺跡		○		○			46	四日市横穴墓群				○			
7	太田遺跡			○				47	二日市古墳				○			
8	角塚山城跡						○	48	二日市洞穴			○				
9	太田巨石遺跡		○					49	五行塚遺跡				○			
10	太田本村遺跡		○					50	恵良城跡						○	
11	平原遺跡							○	51	松山2号墳				○		
12	森城下町跡							○	52	斯ノ本遺跡						
13	平原横穴墓群				○				53	船岡山古墳				○		
14	上ノ原遺跡			○	○				54	船岡山石棺群				○		
15	中原古墳				○				55	籠水遺跡				○		
16	下埴垣遺跡				○		○		56	船岡山横穴墓群				○		
17	下埴垣横穴墓群				○				57	亀都起古墳				○		
18	白岩遺跡			○					58	祇園遺跡			○	○		
19	谷ノ瀬遺跡				○				59	おごもり遺跡			○	○		
20	野田古墳				○				60	六十六間遺跡				○		
21	野田城跡						○		61	山王古墳				○		
22	野田山遺跡				○				62	寺山遺跡						
23	池の原B遺跡			○	○				63	下横尾遺跡				○	○	
24	池の原遺跡			○					64	瀬戸口遺跡			○	○		
25	井ノ尻遺跡			○					65	豆田遺跡			○	○		
26	井ノ尻古墳				○				66	中山田遺跡						
27	上ノ原横穴墓群				○				67	小竿遺跡				○		○
28	十の釣遺跡				○				68	早水野中遺跡			○			○
29	名草台遺跡			○					69	将軍塚古墳				○		
30	廣葉横穴墓群								70	陣ヶ台姫塚古墳				○		
31	治野当遺跡		○						71	陣ヶ台遺跡			○	○		○
32	平台遺跡				○				72	陣ヶ台彦塚古墳						
33	西遺跡			○	○				73	伐株山城跡						○
34	瀬戸古墳			○					74	砂大寺A遺跡			○			
35	瀬戸遺跡			○					75	鬼塚古墳				○		
36	平田山土屋跡						○		76	中西遺跡			○			○
37	鬼ヶ城古墳				○				77	西田遺跡			○	○		
38	般若寺1号墳								78	冷酒庵C遺跡			○			○
39	般若寺2号墳								79	冷酒庵A遺跡			○	○		
40	アタタメ遺跡						○		80	冷酒庵B遺跡			○			○

表2-1 四日市遺跡周辺の遺跡地名表



第2-2図 遺跡分布図 (1/40000) (国土地理院発行2万5千分の1地形図「豊後森・天ヶ瀬」に加筆)

も有力な勢力が成長していたことが分かる。

集落として、西田遺跡、冷酒庵B遺跡などがある。両遺跡とも盆地内南側の緩傾斜地に立地しており、5～7世紀代のカマド付竪穴建物跡などが確認されている。近接して鬼塚古墳がある。

このほか治別当遺跡からは、古墳時代初めに比定される銀などの木製品が出土している。遺跡は盆地に北側から流れ込む森川沿いの低地に立地し、導水施設などの可能性も考えられ杭列などが検出されている。

古代 古代に位置づけられる遺跡は少なく、西田遺跡、四日市遺跡などが確認されているのみである。

西田遺跡では、7世紀後半～8世紀初めの大型土坑から須恵器門面硯が出土している。しかし、遺跡の調査区内からは円面硯と同時期の建物等が検出されていないため、どのような施設に伴うものかは判断としない。古代における玖珠地域の状況を知る手掛りとして、福岡県の太宰府蔵司西地区出土の木簡資料がある。木簡には「久須評」の文字がみえ、玖珠の地に「評」が存在したことが分かる。奈良時代の玖珠郡は3郷からなる小郡である。このうち小田郷は、西田遺跡の所在する現在の小田地区を中心とする地域と推定される。西田遺跡は小田地区の有力な集落と考えられ、郡（評）衙や郷あるいは駅に係わる施設があった可能性も考えられる。

四日市遺跡では9世紀代の木棺墓が検出されている。木棺墓内からは隅入方鏡、越州窯青磁唾壺などが出土しており注目される。

中世 中世の玖珠郡は「国伴持切ノ国」と呼ばれ、郡内には豊後清原氏の系譜をひく森氏、小田氏、松木氏、魚返氏、古後氏などの勢力が割拠する。これら諸氏に係わる山城跡が郡内各所にみられ、伐株山城跡、角埋山城跡、野田山城跡、魚返城跡、古後城跡など約20箇所が確認されている。

このうち伐株山城跡は、記録にみえる高勝寺城、玖珠城にあたと考えられ、14世紀の南北朝期や16世紀の豊隆戦争の際に戦いの舞台になったことが分かる。山上には、土塁により囲まれた一辺25～60mの方形あるいは長方形の遺構が7箇所みられ、発掘調査により16世紀代を中心とする遺物が多数出土している。

角埋山城跡は、16世紀前半に大友氏が玖珠郡衆に対し堀の拡張などを命じた在番を命じるなど、大友氏にとって軍事上重要な城として把握されていたことが分かる。この角埋山城跡には、大友氏除国後の16世紀末に豊臣配下の毛利高政が入る。現在残る穴太積み石垣はその際に築かれたものと考えられており、中世の山城から近世城郭に変わる姿がみられる。発掘調査により、門跡なども確認されており、近世城郭初源期の姿を留めるものとして全国的にも注目されている。

また、野田城跡、松木城跡、岐都城跡などでは多数の欽状堅堀が確認されている。これらは比較的小規模な山城ではあるが、高い防御機能を有する。これらの山城は各々玖珠盆地の西方、東方、南方の入口を守る位置にあり、角埋山城跡とあわせ、玖珠盆地防衛システムを担うものであったものと思われる。

このほか、小岩屋山の中腹に位置するアタメ遺跡からは、火葬骨が納められた褐輪四耳壺が出土している。時期的には12、13世紀頃のものと考えられている。遺跡は玖珠盆地を一望できる場所で、自然地形を利用した径約8mの塚状の場所に埋納されていた。

近世 江戸時代になると、慶長6年（1601）に四国から久留嶋康親が玖珠・日田・遠見三郡1万4千石で玖珠郡衆に入部する。久留嶋氏は、文祿・慶長年間に毛利氏が近世城郭として整備に着手した角埋山城には入らず、麓に陣屋を築造し、東側に城下町を整備した。また、陣屋北側および南西側に家臣団の屋敷を配置した。これらの地区には、現在でも武家屋敷の佇まいが残る。

森藩は、豊後国内で居城を持たない唯一の藩であったため、代々の藩主は居城築造が悲願となっていた。八代藩主通彦は、陣屋の裏手に三輪宮の造営を行なった。これは石垣を整備するなどの大規模な土木工事であったため、三輪宮造営に名を借りた擬城建設であったとも言われている。

平原遺跡では、石畳の道路が確認されている。この道路は、地元では「参勤道」と呼ばれ、昭和30年代までは生活道として利用されていた。城下から東方の丘陵に上がり、別府湾に面する日出町豊岡の頭成港まで続く道路である。幅2～3mで、0.3～1.0m程の石が敷かれている。

### 第3章 第6次から第9次調査

#### 第1節 各調査の概要

四日市遺跡第6～9次調査は、四日市遺跡が所在する台地のほぼ中央部にあたる。発掘調査は平成19年度に第6次調査（1,600㎡）、平成20年度に第7次調査（800㎡）、平成21年度に第8次調査（2,772㎡）、平成22年度に第9次調査（2,338㎡）として実施した。

四日市遺跡の発掘調査は、平成15～20年度の調査は事業側の都合で調査期間を6ヶ月のうち、当該年の調査面積を800㎡、発掘調査期間を1.5～2ヶ月程度として進めていた。平成18年度の第5次調査までは、台地東部の集落の中心的部分の調査を進めていたが、台地の北麓から台地上の工業団地予定地への取り付け道路の施工を優先させる都合上、平成19年度からはその本線部分及び切土に伴う削平部分を対象に、本調査を実施することとなった。このあたりは、平成10年に実施した確認調査結果から、第1～5次調査に比べ遺構の分布密度が低いエリアと想定されたため、調査面積を従来の2倍の1,600㎡として、第6次調査に着手した。しかし、調査を進めるとこのエリアでも弥生時代の竪穴建物や溝、貯蔵穴等、遺構分布密度が第1～5次調査と遜色ない状況が明らかになったため、第6次調査は1,600㎡の内、東半部の800㎡の調査を完了させ、残りを平成20年度に持ち越すこととなった。平成21年度からは事業者と協議の結果、調査規模を拡大し、半年程度の発掘調査を実施することとなった。平成21年度の第8次調査は、台地上の道路部分に加え、本線及びポケットパーク予定地である台地の北側に台形状に迫り出す緩斜面上にも調査区を設定した（8次調査1区）。また、平成22年度の第9次調査では、次年度に予定される横穴墓のおおよその基数を把握するためのトレンチ調査も行った（9次調査4区）。

#### 1 第6次調査

第6次調査は先述のとおり1,600㎡を対象として、平成19年11月15日から調査に着手した。調査区を設定後、重機を使用して表土層を除去した後、第2層の上面で遺構検出作業を人力で行った。その結果、弥生時代の遺構として竪穴建物6棟、獨立柱建物1棟、集落を区画すると思われる溝2条、貯蔵穴等の土坑数基、近世の溝、その他多数のピット状遺構を検出した。特に区画性の強い溝S D17・S D18は両者の間を土橋状に掘り残しており、集落の出入り口であると想定され、かつ溝が環濠のように集落を取り巻く施設である可能性があり注目されるものであった。検出した遺構が当初想定を大幅に上回ったため、調査予算の制約もあり、SH48とS D17は検出とS D17の一部トレンチ調査までに止め、残りを第7次調査に先送りすることとし、調査未了の範囲にブルーシートを敷いた上で埋戻しを行い、平成20年1月15日に調査を完了した。出土遺物はコンテナボックス11箱であった。

以下に調査の経過を列記する。

平成19年11月15日	調査区の設定、重機による表土除去開始
11月21日	人力による遺構検出作業開始
11月27日	土層堆積状況確認のため調査区西隣際にサブトレンチを設定し掘り下げ
12月5日	竪穴建物S H51が半分調査区外に残るため周囲を拡張しS H51全体を出す
12月6日	検出した遺構の掘削開始
12月27日	年内の調査終了
平成20年1月8日	調査再開、遺構の完掘作業
1月10日	空中写真撮影実施
1月15日	調査未了範囲にシート設置、調査区を埋戻し調査完了

### 第3章 第6次から第9次調査

#### 2 第7次調査

第7次調査は第6次調査で設定した1,600㎡のうち、調査を完了できなかった西半部の800㎡を対象に、平成20年12月15日から再度表土を除去し調査を行った。調査では第6次調査で検出までに止めたS H48とS D17が対象で、それに加え弥生時代の遺構面の下層を確認する目的で、谷地形に厚く堆積した第Ⅱ層～第Ⅳ層の掘り下げを行った。その結果、包含層から石畿1点と数点の微細な剥片が出土したが、多くは縄文時代早期に帰属するものであろう。また、数基のピット状遺構を検出したが、明確に人為的遺構といえるものはなかった。なお、第6次調査終了から11ヶ月しか経過していなかったが、第6次調査では確認していなかった数基の方形土坑が確認されたため、掘り下げを行ったところ、小型の重機で掘削した痕跡であることが判明した。第6次調査終了から第7次調査の着手までの間に掘削された擾乱で、おそらくこのあたりに自生するヤマイモの採掘を目的としたものであろう。調査は1月27日の埋戻しで完了した。出土遺物はコンテナボックスで5箱であった。

以下に調査の経過を列記する。

平成20年12月15日 調査区の設定、重機による表土除去、測量基準点の設置

12月17日 表土除去終了、人力による遺構検出作業開始

12月18日 調査グリッド杭設置

12月22日 S D17他遺構掘削作業開始

平成21年1月6日 下部遺構確認グリッドの設定、掘り下げ

1月13日 積雪のため作業休止

1月20日 空中写真撮影

1月23日 人力掘削作業終了、全体遺構実測図の作成

1月27日 調査区の埋戻し、調査完了

#### 3 第8次調査

第8次調査は大きく2つの調査区に分かれる。1区は第16次調査からやや20mほど北に離れた場所で、1,652㎡を対象とした。2区は第6・7次調査区に北接する場所に設定した1,120㎡で、合計2,772㎡である。調査は1区から2区の順で進め、平成21年6月1日に1区の表土除去に着手し、引き続き2区の表土除去を行った。1区では竪穴建物2棟の他、小児用甕棺を埋めた土坑S K223や、完形の石廬丁2点が出土したS X9などを確認した。2区では第6次調査で確認した竪穴建物S H46の西半部を調査した他、弥生時代の貯蔵穴と考えられるS K210や、近世以降の溝S D15・16や道路状遺構S F6を確認した。また、1区・2区とも旧石器確認の目的でグリッドを設定し人力で掘り下げたが、旧石器時代の遺構・遺物は確認されなかった。調査は10月9日に埋戻しを完了し、調査を終了した。出土遺物はコンテナボックス35箱であった。

以下に調査の経過を列記する。

平成21年6月1日 1区の表土除去開始

6月11日 1区の遺構検出作業開始、2区の表土除去開始

7月7日 1区の調査と並行して2区の遺構検出作業開始

8月7日 1区S K223の掘り下げ、倒置した状態の小児用甕棺が出土

8月11日 1区の空中写真撮影

8月17日 1区の調査区平面実測図作成

9月9日 1区の旧石器確認グリッドの設定、掘り下げ

9月15日 2区の空中写真撮影

9月16日 2区の旧石器確認グリッド設定、掘り下げ

9月17日	1区の遺構発掘等終了
9月30日	2区の遺構発掘等終了
10月5日	調査区の埋戻し開始
10月9日	調査区の埋戻し完了、調査終了

#### 4 第9次調査

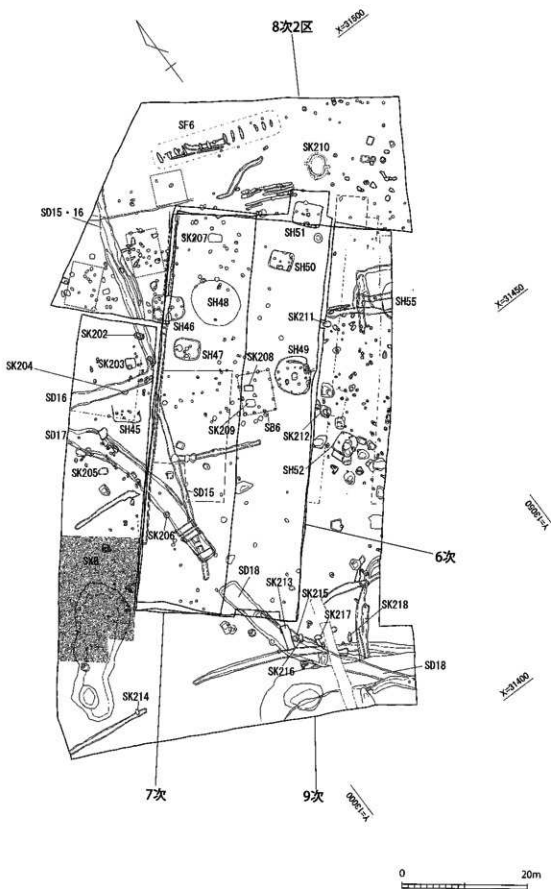
第9次調査は第8次調査2区を除く第6・7次調査区の周囲に設定した調査区で、調査面積は2,318㎡である。形状が「コ」の字形になることから、便宜上これを1～3区に区分した。また、平成23年度に横穴墓域の調査を予定していたため、その調査料算出のためのトレンチ調査を第9次調査4区として実施した。4区の面積は20㎡である。平成23年度に第10次調査として実施した横穴墓の調査成果については、平成30年度に刊行の報告書『四日市遺跡2』に掲載している。第9次調査は平成22年5月6日に着手した。遺構としては弥生時代の堅穴建物3棟の他、第6・7次調査で確認した区画溝SD17・18の延長部をそれぞれ調査した。また、陥穴1基と、調査区の南端部付近で旧石器のブロックSX8や、近世墓SK214・215・216等も確認された。調査は平成22年8月31日に埋戻しを完了し、調査を終了した。出土遺物はコンテナボックスで21箱であった。

以下に調査の経過を列記する。

平成22年5月6日	調査区の表土除去
5月11日	人力による遺構検出作業開始
5月25日	横穴墓域に調査トレンチ（4区）を設定、人力による掘り下げ開始
5月28日	4区の遺構実測、4区の調査完了
7月5日	旧石器確認グリッドの設定、人力での掘り下げ
7月21日	調査区の空中写真撮影
8月20日	旧石器確認グリッドSX8の遺物出土状況写真撮影
8月26日	調査区的人力掘削終了、調査区の埋戻し開始
8月31日	調査区の埋戻し完了、調査終了

以上の調査のうち、以下、調査地のまとまりごとに、第6・7次・第8次2区・第9次調査、第8次1区、第9次4区の順に報告する。





第3-1図 第6・7・8・2・9次調査平面図 (1/600)

## 第2節 四日市遺跡第6次・7次・8次2区・9次調査の成果

### 1 調査区の基本層序

四日市遺跡第6次・7次・8次2区・9次調査区は、地形としては6・7次調査区の南端部付近が372.6m前後で最も高く、そのから北側へは70m程なだらかな緩斜面が続き、その先は急斜面となって麓に至る。一方の南端は傾斜がきつくなっている。

調査地の基本層として、序第3-2図に第6・7次調査の土層断面図を示す。基本的な層序は台地の全体で大きくは変わらないが、地形によって多少の差異が認められる。第Ⅰ層は褐色を呈する表土層、第Ⅱ層は黒褐色土（いわゆるクロボク）層で、粘性に乏しく締まりも弱い。第Ⅲ層は黄褐色土で、平坦地では堆積が薄く面的な広がりがりとしては捉えられないが所々にブロック状に混じり込んでいる。これは約7,300年前の鬼界カルデラの噴火地積物であるアカホヤ火山灰（K-Ah）層で、とくに斜面部分では比較的厚みを持って認められる。第Ⅳ層は暗灰褐色土で、縄文時代早期の層に相当する。第Ⅴ層は淡黄茶色粘質土で、第Ⅵ層への漸位層である。第Ⅵ層は黄色ローム層である。上部はやや軟質のソフトロームで、下部は粘質が強く硬く締まるハードロームとなる。このローム中に極めて部分的に旧石器のブロックが確認されるが、このエリアでは第9次調査区以外では確認されなかった。また、図示していないが、斜面部で上部が削平された部分ではⅥ層の下位に暗色帯（Ⅶ層）、その下に再度黄色ローム（Ⅷ層）の堆積が認められた。

以上の層序について、台地の高所部分の平坦地（土層図の南端部付近）では表土を除去するとローム層が検出される状況で、後世の耕作等によりかなりの削平を受けている状況が窺える。弥生時代の遺構は堆積の薄い部分では第Ⅴ・Ⅵ層のローム層上面で検出されるが、堆積の比較的厚い部分では第Ⅱ層から掘り込む可能性が高い。しかし、黒色系埋土の遺構をこの層理面で検出することは困難を極め、大部分は第Ⅲ・Ⅳ層まで下げた時点で確認したものである。

### 2 旧石器時代・縄文時代の調査

四日市遺跡では第1次調査で旧石器のブロックが確認されていることから、弥生時代の調査が終了後、部分的に旧石器時代の遺構・遺物を確認するため調査グリッドを設定し、人力でその掘り下げを行った。その結果、第9次調査区で1箇所のみ明確な旧石器ブロックを確認したが、その他は微細な剥片が散発的に出土するものの、明確なブロックとよべるものは確認できなかった。

縄文時代については、9次調査で1基の陥穴を検出しているが、遺物の出土がなく確実に縄文時代に帰属するものかは明確ではない。そのため本報告でも縄文時代の遺構である可能性を含みつつ、時期不明の遺構として扱うこととする。その他、調査区から石鏃等の石器が一定量出土しているが、四日市遺跡全体から石器の出土は極めて少ない。陥穴と石鏃等の石器が中心であることから、主にキャンプサイトとしての利用が想定される。

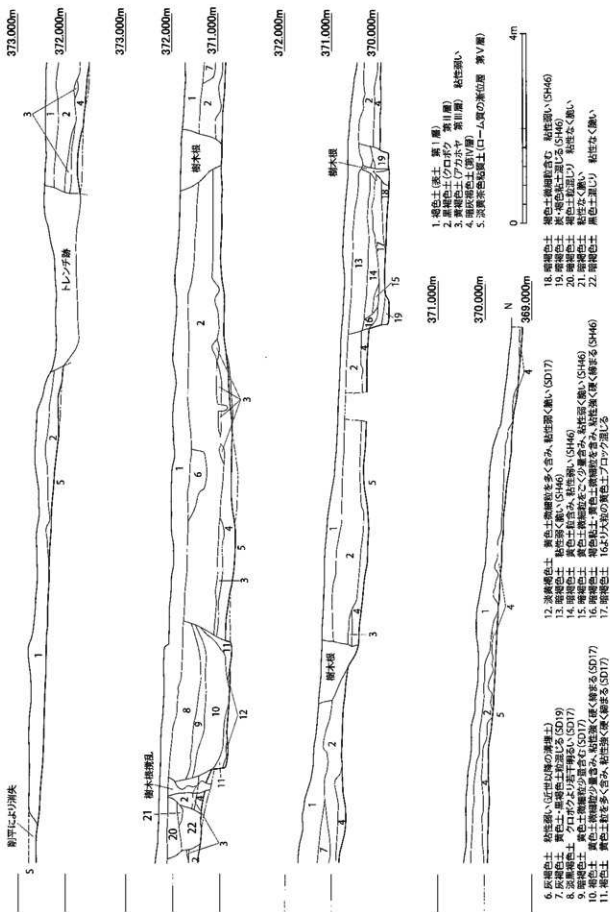
#### (1) 旧石器ブロック

##### S X 8 (第3-3～7図)

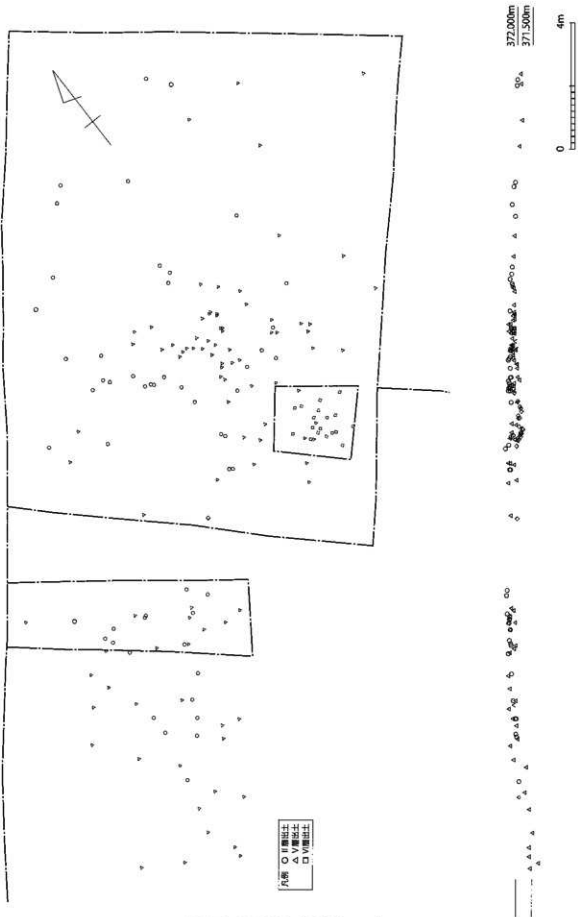
第9次調査の南西部で検出した旧石器のブロックである。第Ⅱ層の掘削中から、石器の剥片等が比較的まとまって出土したことから、当該範囲周辺を調査区の形状に合わせて旧石器確認のためグリッドを設定し、人力で掘り下げを行った。調査範囲は20m×12m程度である。その結果、第Ⅱ層（黒褐色のクロボク層）・第Ⅴ層（黄色ロームへの漸位層）・第Ⅵ層（黄色ローム）中からそれぞれ石器の出土をみた。

S X 8の全体図を第3-3図に示す。東西約11m、南北約25mの範囲で、旧石器の出土が認められた。特に中央部に濃密な分布が認められ、南北両端部は散漫な分布状況を示す。このうち、下層の状態を確認するため北半部に東西約12m、南北約16mの調査区を設定し、また南側には東西約8m、南北約2mのトレンチを設定し、その掘り下げを行った。

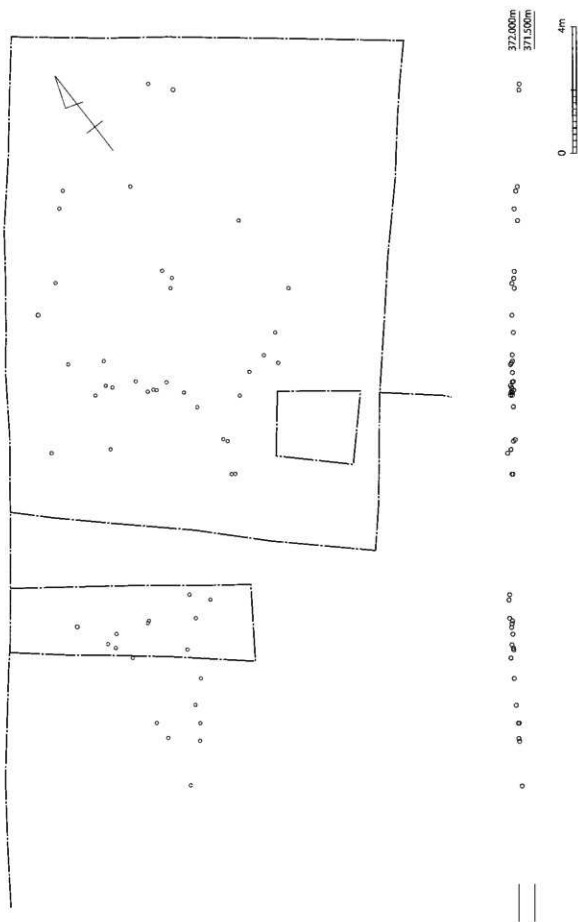
次に各出土層ごとの状況を見てみる。第3-4図は第Ⅱ層での出土状況である。分布範囲は東西約8m、南北約



第3-2図 四日市道路第6次調査区土層断面 (1/80)



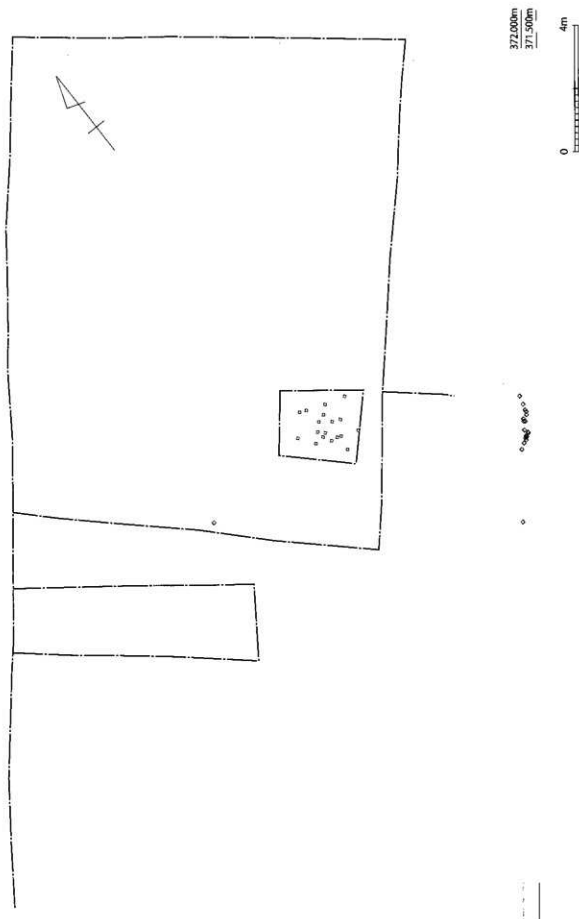
第3-3図 SX8平面・立面図 (1/120)



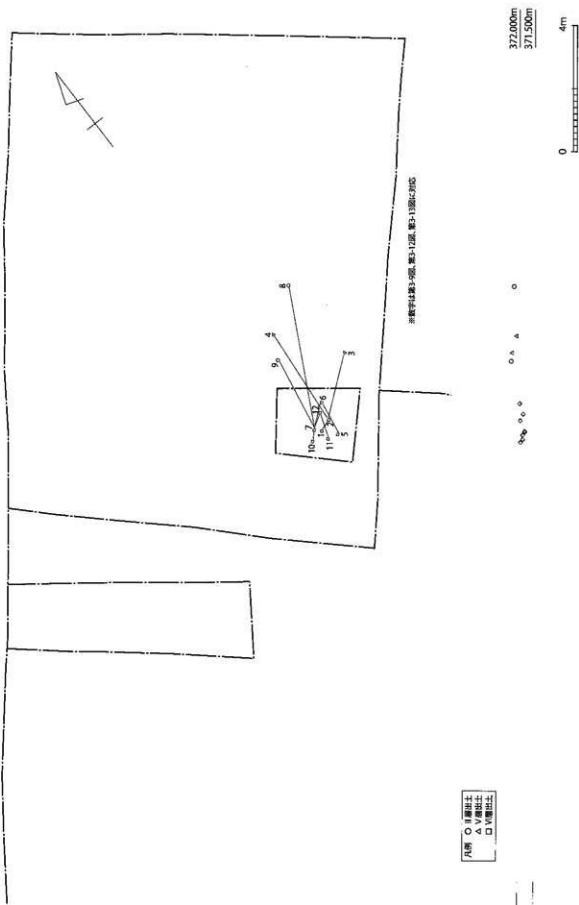
第3-4図 SX8遺物出土状況図(Ⅱ層)(1/120)



第3-5図 SX8遺物出土状況図（V層）（1/120）

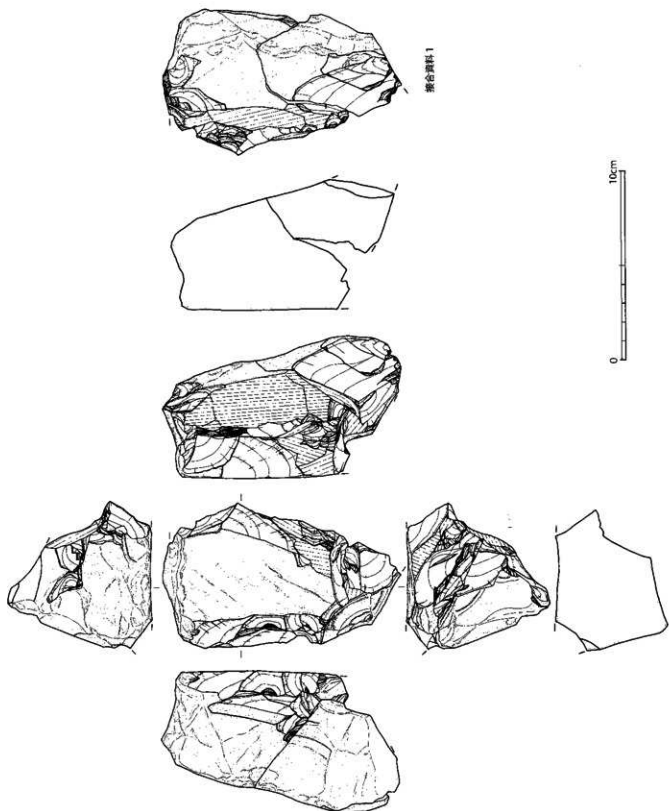


第3-6図 S X8遺物出土状況図 (VI層) (1/120)

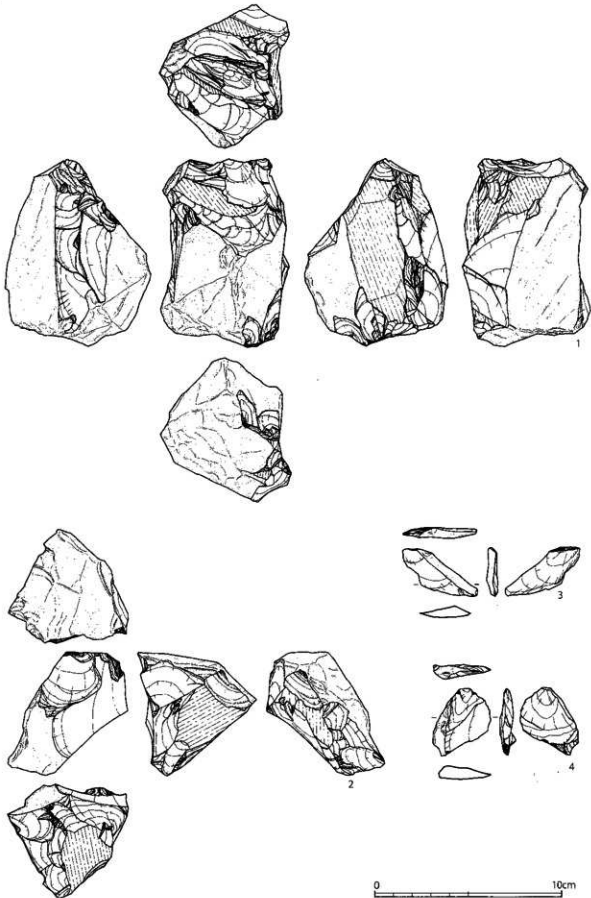


第3-7図 S X 8接合資料出土状況図 (1/120)

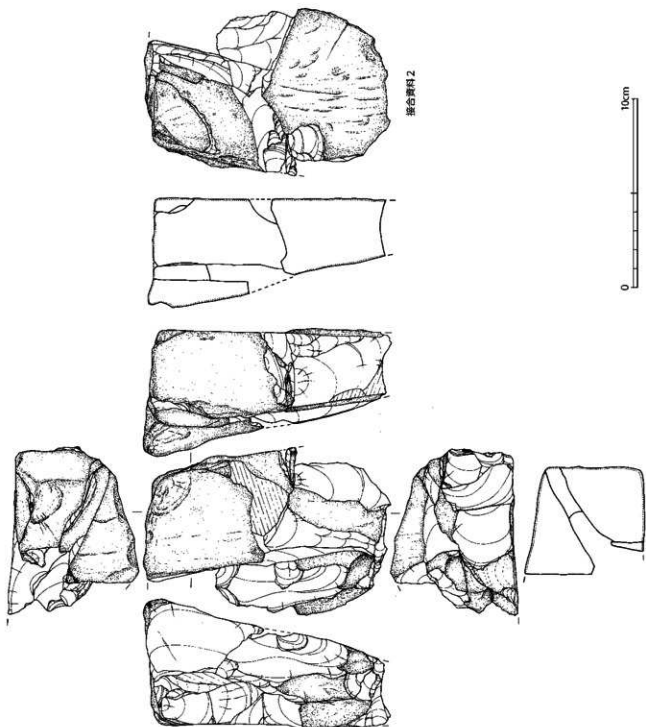




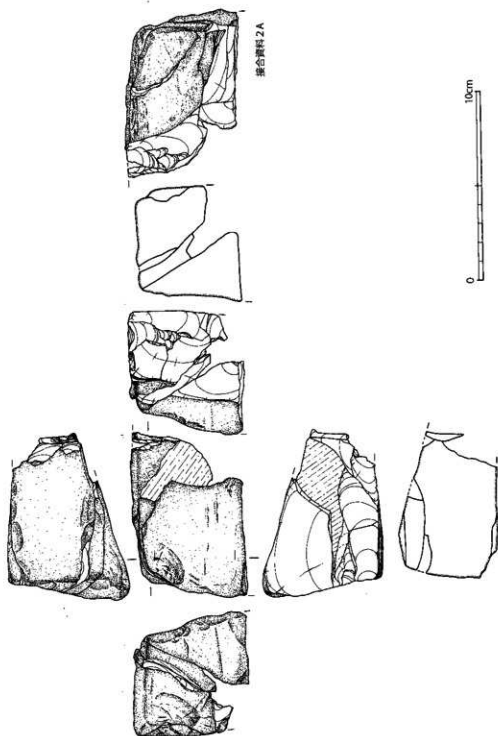
第3-8図 S X 8出土遺物実測図① (1/2)



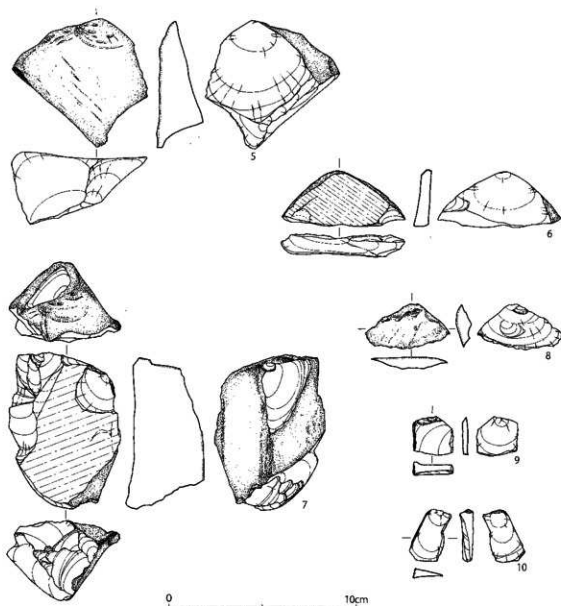
第3-9図 SX8出土遺物実測図② (1/2)



第3-10図 S X 8出土遺物実測図③ (1/2)



第3-11図 SX8出土遺物実測図④ (1/2)



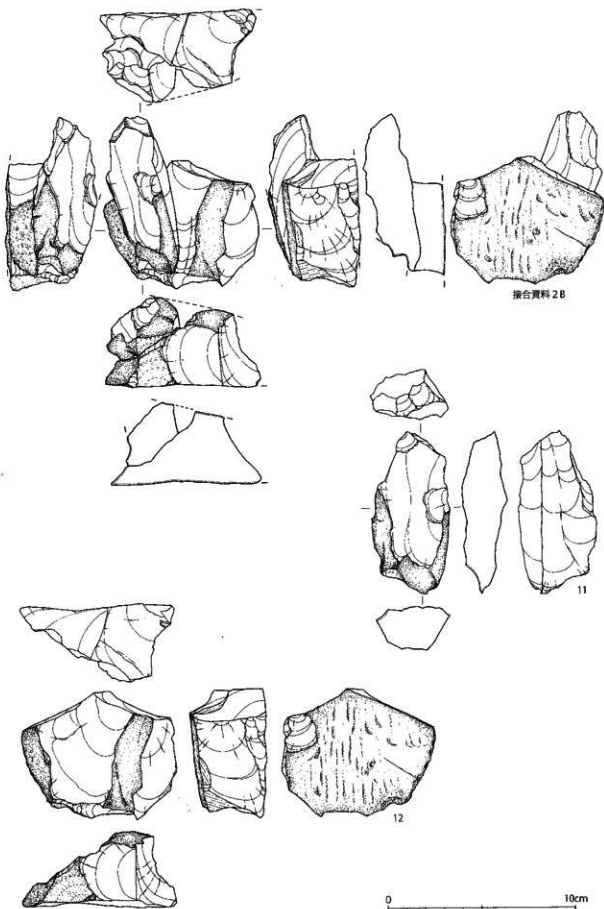
第3-12図 SX8出土遺物実測図⑤ (1/2)

22mで、全体的には散漫な分布状況を示す。出土した標高は約372.0～372.4mの範囲におさまる。出土した石器は微細な剥片が中心である。

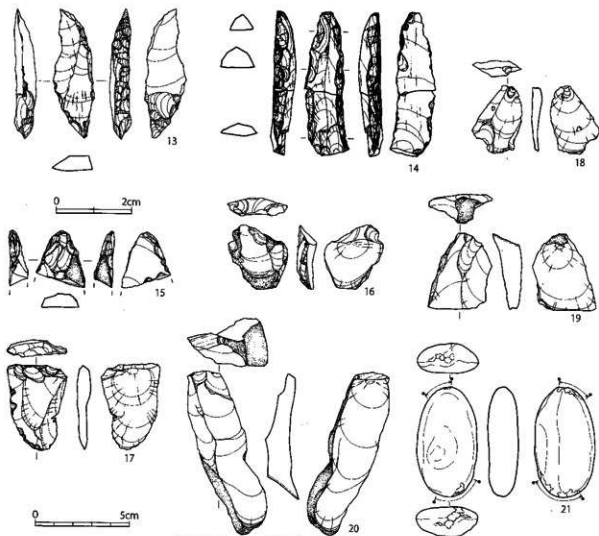
第3-5図は第V層の出土状況である。分布範囲は東西約11m、南北約25mで、ほぼSX8の全域から出土が認められる。特に北半部の中央部で濃密な分布が認められ、南半部や北端部では散漫な出土状況を示す。出土標高は傾斜地もあるため一様ではなく、約371.3～372.2mと幅がある。遺物は微細な剥片が中心であるが、第3-14図14の三稜尖頭器が出土している。しかし本資料は第VI層出土の破片と接合するため本来は第VI層に帰属するものである。また、第3-14図13のナイフ形石器が出土している。

第3-6図は第VI層の出土状況である。この層の確認は北半部調査区の南端部付近に設定した東西約25m、南北約25mのグリッドを中心に行っており、そこからの出土が中心であるが、1点北半部調査区の南辺中央付近から出土している。検出標高は約371.8～372.0mである。この層からは接合資料をはじめ、三稜尖頭器等の遺物が確認された。

第3-7図は、第3-8図及び第3-10図に示す2点の接合資料の分布状況である。接合資料は2個体あり、接合資料



第3-13図 S X 8出土遺物実測図⑥ (1/2)



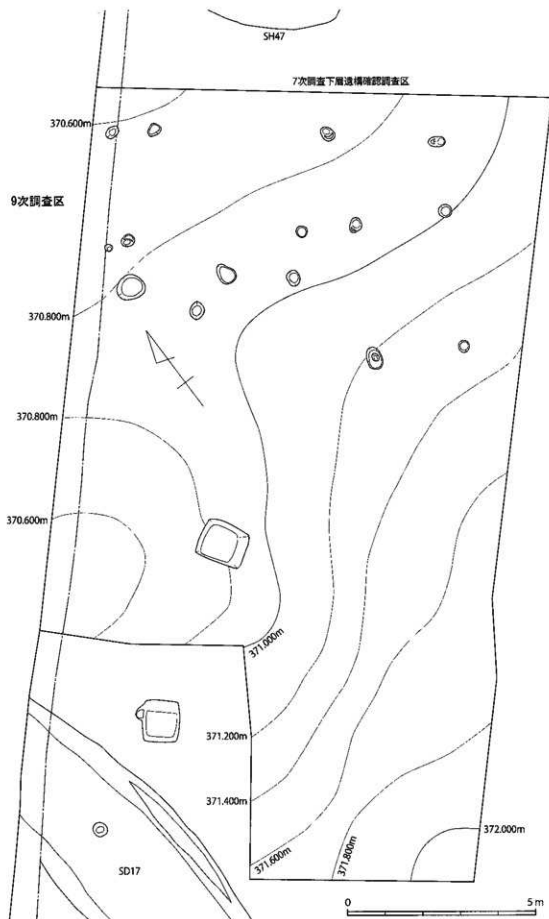
第3-14図 SX8出土遺物実測図⑦ (1/1・1/2)

1は4点が接合する。第3-8図1・2の石核は第VI層から、3・4剥片は第V層からそれぞれ出土している。3・4の剥片は1・2に比べ出土レベルが高いので、何らかの形で遊離したものであろう。接合資料2は8点が接合する。第3-12図5・6・7・10、第3-13図11・12は第VI層、第3-12図8・9は第II層から出土したもので、8・9は遊離したものである。こうした状況から、この接合資料は第VI層に帰属するもので、第II層及び第V層から出土した資料はいずれも小さな剥片であることから、何らかの形で遊離したものと判断される。

SX8出土遺物を第3-8図～第3-14図に示す。

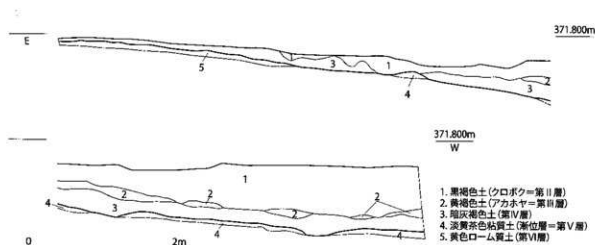
第3-8図は接合資料1の全体図で、第3-9図に示す4点が接合する。第3-9図は接合資料1を構成する各石器である。1は泥岩の石核で、重量は670gを測る。4面に自然面を残し、一部には節理面が見られる。2も石核で、重量は520gを測る。3は剥片で、上面には自然面を残し、この面から剥離を行っている。4も剥片で、自然面がわずかに残る上面を打面とし剥離を行っている。各資料の接合状況は、4は2と接合し、1と3及び2・4の接合したものが接合する。

第3-10図は接合資料2である。接合資料2は第3-11図に示す、6点が接合する接合資料2Aと、第3-13図に示す2点が接合する接合資料2Bが接合したものである。接合資料2Aを構成する各石器の個別図を第3-12図に示す。5は剥片で、背面と上面に自然面を残し、上面を打面として剥離を行う。6は剥片で、上面にはわずかに自然面を残し、この面を打面とする。背面は節理面である。7は石核で、上面及び腹面には自然面を残し、背面側



第3-15図 四日市遺跡7次調査旧石器調査区平面図 (1/100)





第3-16図 四日市遺跡7次調査旧石器調査区土層断面図(1/50)

は節理面となる。腹面側には8の剥離面が見られる。重量は198.4gを測る。8は横長の剥片で、7の石核から剥離している。9は方形状を呈する小型の剥片で、側面にわずかに自然面が残る。10は小型の縦長剥片である。各資料の接合関係は、5の一端に10が接合し、5と6、6と7、7と8・9がそれぞれ接合する。第3-13図は接合資料2Bで、2点が接合する。11は縦長の剥片で、下部に自然面を残す。腹面側は12の石核と接合する。12は石核である。3面に自然面を残し、背面側は11の剥離痕が残る。重量は214.4gを測る。この接合資料2Bは接合資料2Aの下部に接合する。接合資料2の石材はいずれも泥岩である。

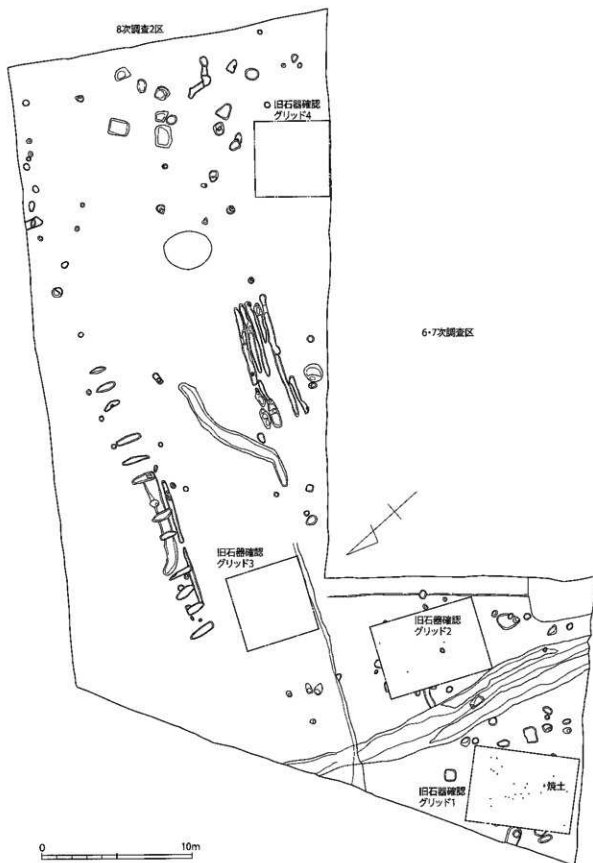
接合資料以外のSX8出土石器を第3-14図に示した。13は腰岳産黒曜石を素材とするナイフ形石器である。縦長剥片を素材とし、基部及び右側面に丁寧な調整剥離を施す。第V層から出土した。14は三稜尖頭器である。14は泥岩の縦長剥片を素材とし、左右両側面に丁寧な調整剥離を施す。第VI層と第V層から出土したものが接合している。15は下半部を折損するため詳細は明らかにできないが、頂部に細かい調整剥離を施すもので、ナイフ形石器の可能性がある。第VI層から出土した。16は泥岩の剥片で、腹面には打点が残る。第V層からの出土である。17は流紋岩の縦長剥片を素材とする剥片で、側面に微細な剥離が残る使用痕剥片である。腹面には打点が残る。第V層から出土した。18は泥岩の剥片で、腹面には打点が残る。第V層からの出土である。19は流紋岩の剥片で、自然面に残る上面を打面とし、腹面には打点が残る。第VI層からの出土である。20は泥岩の縦長剥片で、節理面となる上面を打面として剥離を行い、腹面には打点が残る。側面及び下部には自然面が残る。第VI層からの出土である。21は拳大の円礫を用いた敲石で、上下両端に敲打痕が残る。第II層からの出土である。

## (2) 下層遺構確認グリッド

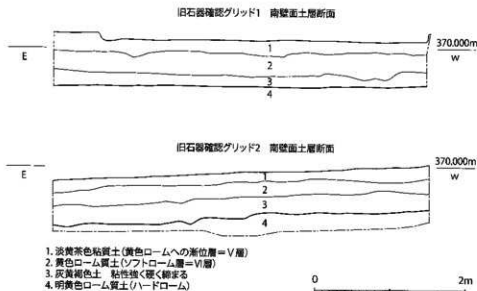
第7次調査及び第8次調査2区において、旧石器時代及び縄文時代の遺構・遺物を確認する目的で下層確認調査区を設定し、その掘り下げを行った。

### 第7次調査下層遺構確認調査(第3-15図)

第7次調査において、弥生時代遺構の調査後に下層遺構の有無を確認する目的で調査区を設定した。調査範囲は東西約12m、南北約15mで、南端部はさらに6m×6mの範囲を拡張区として追加した。このエリアの上層図を第3-16図に示す。調査区の西側にいくにつれ、第II層のクロボク層が厚く堆積しており、谷地形を呈していることが分かる。層厚は約10～65cmである。第II層の下には第III層のアカホヤ火山灰が部分的に堆積する。第IV層は10～30cmの厚みを持ち、地形に沿って堆積する。第V層は谷部分で主に認められ、堆積の薄い東側では第VI層の黄色ロームとなる。遺構は第IV層を掘り下げた時点で、第V層及びVI層の上面で検出を行った。その結果、14基のピットと、1基の小型の土坑を検出した。しかし、いずれも遺物の出土がなく、時期の特定はできな



第3-17図 8-2次調査旧石器調査区平面図 (1/250)



第3-18図 四日市遺跡8-2次調査旧石器調査区土層断面図 (1/50)

かった。また、明確に人為的遺構と断言できるものもなかった。その他、堆積層中からは微細な剥片を中心に出土したが、図示できるものはない。層位から主に縄文時代早期に帰属するものであると考えられる。

#### 第8次調査2区下層遺構確認調査(第3-17図)

第8次調査2区においても、近世以降及び弥生時代遺構の調査後に下層遺構の有無を確認する目的で調査区を設定し、その掘り下げを行った。調査区は4箇所設定し、グリッド1・2は東西5m×南北7m、グリッド3・4は東西5m×南北5mである。

この調査区の層序を第3-18図に示す。層序は共通しており、第V層の下に黄色ソフトロームの第VI層が堆積する。層厚は約20～30cmを測る。その下に粘性が強く硬く締まる灰黄褐色土が、約25～30cmの厚みを持って堆積する。そのさらに下で黄色のハードローム層を確認している。

旧石器確認グリッド2でピット1基を確認した他、グリッド1では小さな焼土の広がりが見られた。ピットからの出土遺物はなく、時期は特定できない。また、明らかに人為的遺構と断定できるものではない。遺物はグリッド1で20点余り、グリッド2では3点出土しており、いずれも微細な剥片を中心とする。グリッド3・4では遺構・遺物ともに確認できなかった。

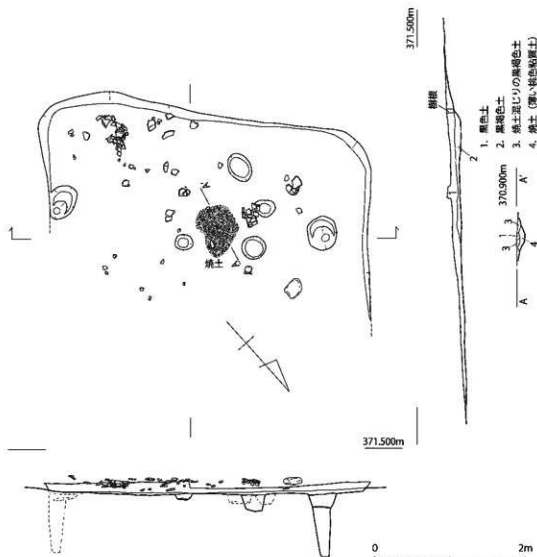
## 3 弥生時代の調査

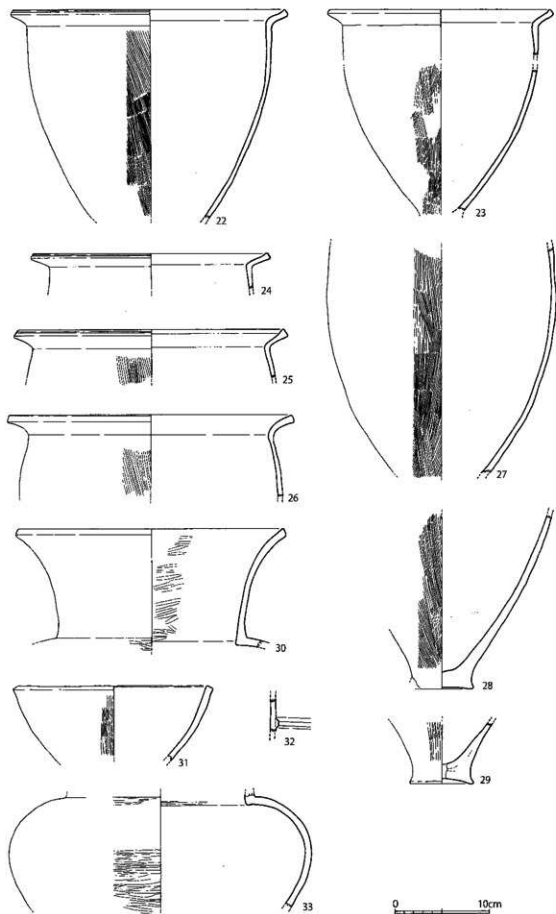
## (1) 竪穴建物

四日市遺跡第6・7次、8次2区、9次調査で確認した竪穴建物は全部で9棟である。平面形状が円形となるもの3棟、方形となるものが6棟ある。このうちSH55は大部分が隣接する第12次調査3区にあるため、次章で報告する。円形の建物は直径約6～7.5m、方形のものは1辺約3～4.5mと、円形の方が方形のものより一回り大きい。方形の竪穴建物では、基本的に東西軸方向の2本のピットが主柱穴となるが、これは南北に緩く傾斜する地形であることに起因するものであろう。また、南壁側に土坑を持つものが多い。この土坑上面に祭祀行為と思われる土器を据えている事例も見られる。

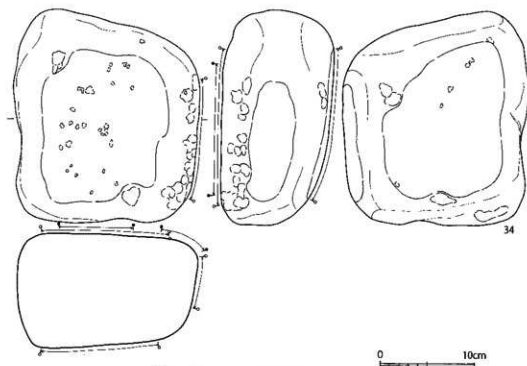
## SH45 (第3-19図)

第9次調査で検出した竪穴建物で、平面形状は方形となるが、北半部は後世の削平により失われている。東西4.34m、南北は現存範囲で3.02m、深さ0.18mを測る。埋土は上層が黒色土、下層は黒褐色土である。床面で5基のピットを検出しており、このうち東西の壁際に穿つ2基が主柱となる。また、中央部で炉跡である焼土の広がり認められた。炉跡は浅い皿状の掘り込みを持つ。遺物は検出面を中心に出土しており、多くは床面からは





第3-20図 SH45出土遺物実測図①(1/4)

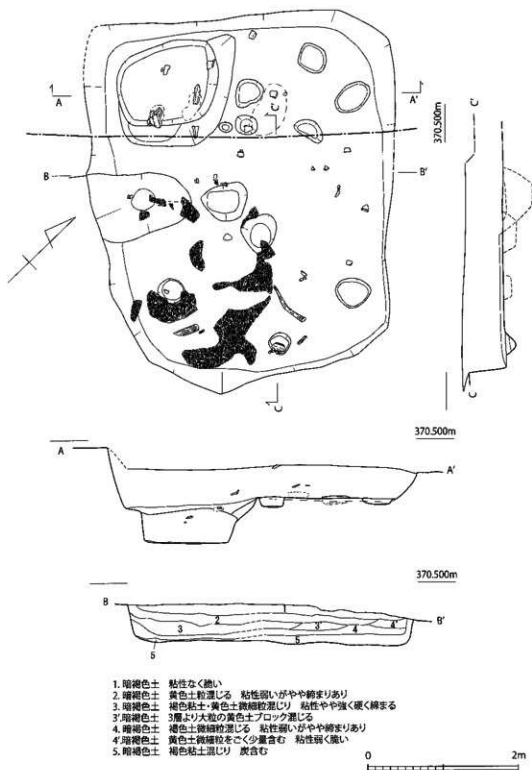


第3-21図 SH45出土遺物実測図② (1/4)

浮いた状態である。

出土遺物は第3-20・21図に示した。22～33は弥生土器である。22～29は甕で、口縁部は外反させ、端部は上方へ積み上げて肥厚させる。30・33は壺で、球状の胴部に緩く外反する口縁が付く。31は鉢である。32は胴部に断面M字状の凸帯を貼り付ける甕の細片で、外面には赤色顔料を塗る。34は石皿で、上下両面を使用面とし、1つの側面には敲打痕が残る。

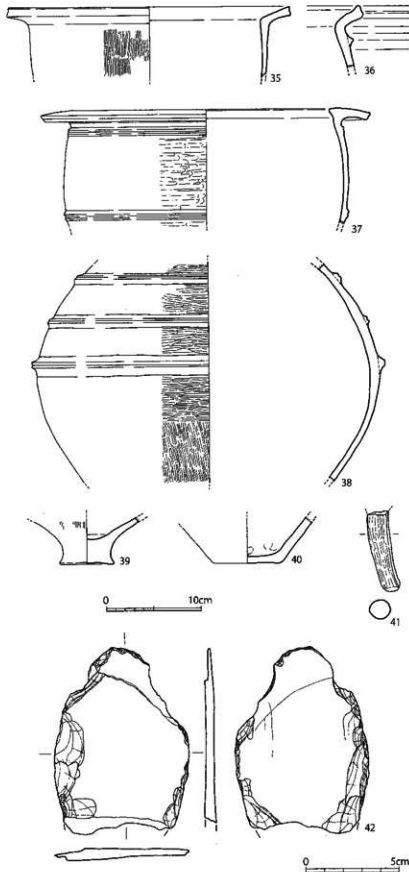
以上の遺物から、SH45は弥生時代中期後半に比定される。



第3-22図 SH46実測図 (1/50)

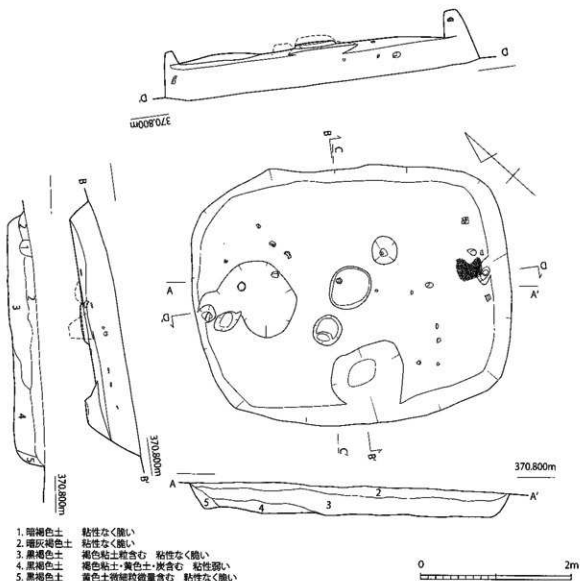
SH46 (第3-22図)

第6・7次調査及び第8次調査2区で検出した竪穴建物である。第6次調査でまず東半部を調査し、第8-2次調査で残る西半部の調査を行った。平面形状は方形で、東西5.12m、南北4.13m、床面までの深さ0.4mを測る。柱上は暗褐色土で中位では黄色ロームが、下位では褐色粘土の微細粒を含む。また、西半部では底面で暗褐色粘



第3-23図 SH46出土遺物実測図 (1/4)

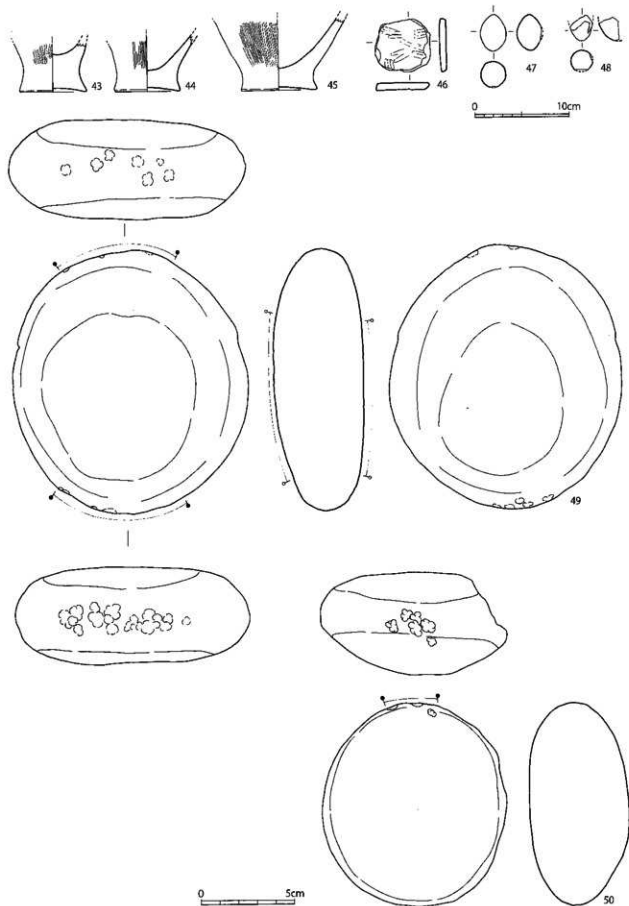




土を含む暗黄褐色粘質土の貼床層が確認できた。屋内遺構はピット8基と炉跡となる土坑、南壁中央と南西隅の隙間に土坑を伴う。南壁中央の土坑は長楕円形状を呈し、長辺1.32m、短辺0.89m、深さ0.40mを測る。南西隅の土坑は隅丸形状で、長辺1.58m、短辺1.39m、深さ0.46mを測る。形状から2基の土坑が重複しており、掘り直しが行われている。また、貼床層を除去した段階で2基の小規模なピットを検出した。西半部では床面を中心に堅果類と思われる炭化物がややまとまって出土したことから、水洗選別を行うため土壌のサンプリングを行った。サンプルについては現在分析作業中である。

出土遺物は第3-23図に掲載した。35～40は弥生土器である。35・36は甕で、36は頸部下に断面三角形の凸帯を巡らす。37は口縁部を外側に大きく拡張する鋤先口縁の甕で、口縁下と胴部の最大径部分に断面M字状の凸帯を貼り付ける。外面はミガキを密に施す。38は胴部が球状に膨らむ甕で、外面に断面M字状の凸帯を3条巡らす。胴部下半は縦位、上半は横位のミガキを密に施す。39・40は底部で、39は壺、40は甕であろう。41は土製の支脚で、断面は円形を呈し、外面にはミガキを施す。42は扁平打製石斧で、側縁に粗い剝離を施す。

以上の遺物から、SH46は弥生時代中期後半の遺構と判断される。



第3-25図 SH47出土遺物実測図 (1/4)

#### SH47 (第3-24図)

第6次調査で検出した竪穴建物である。平面形状は方形を呈し、東西4.22m、南北3.39m、深さ0.50mを測る。埋土は上層が暗灰褐色土、下層は褐色土や黄色ローム粒を含む黒褐色土である。床面中央に焼土を含む浅い土坑があり、これが炉跡である。ピットは5基確認できたが、東西両壁際に穿つ小規模なピットが主柱穴となる、2本柱で上屋を支える構造をとる。西側主柱穴の側には浅い皿状の落ち込みがあり、また南壁際には土坑が1基併う。土坑は長辺1.00m、短辺0.87m、深さ0.20mを測り、内部は摺鉢状を呈する。遺物は小振りの土器片が多いが、建物の中央付近から土弾が出土した。

出土遺物は第3-25に示した。43～45は弥生土器の底部で、いずれも甕である。46は弥生土器の破片を加工した円盤である。47は土弾で、平面形状は算盤玉形、断面は円形を呈する。48は上半部が欠失するがこれも土弾であろう。49は円礫を素材とした磨石で、上下両面に使用面が観察できるほか、長軸側の側面には敲打痕が残る。50は円礫を用いた叩石で、長軸側の一端に敲打痕が残る。

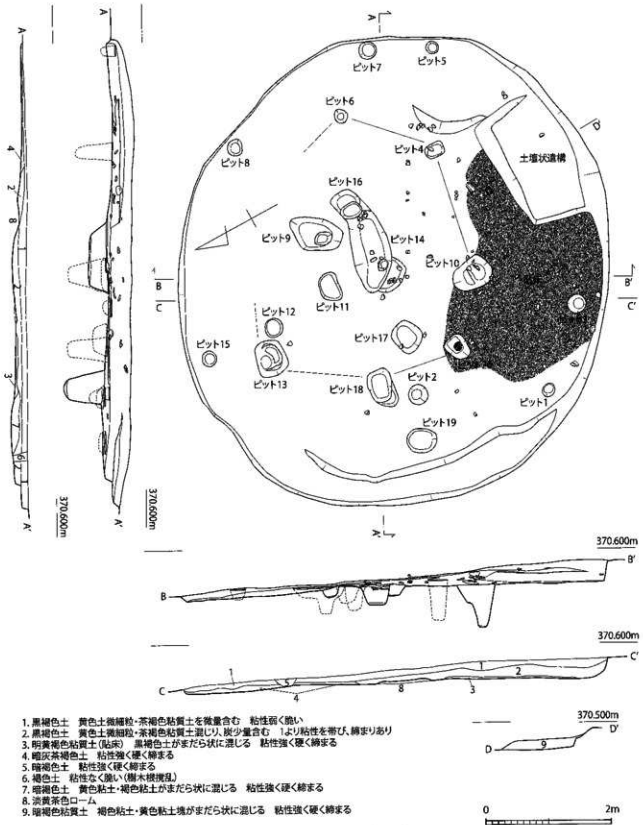
以上の遺物から、SH47は弥生時代中期後半に位置づけられる。

#### SH48 (第3-26図)

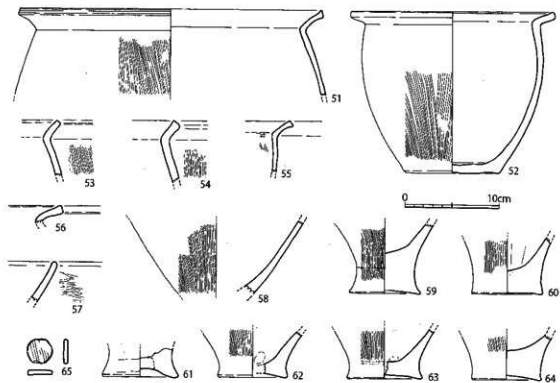
第6・7次調査で検出した竪穴建物である。第6次調査では平面プランの検出にとどめ、内部の掘り下げは第7次調査で行った。平面形状は円形で、東西7.40m、南北7.21m、深さ0.35mを測る。北側では床面まで10cm程度しかないので、かなりの削平を受けている。埋土は黄色ロームの微細粒や茶褐色粘土の混じる黒褐色土が主体である。床面では20基のピットや小規模な土坑を検出しており、規模や深さからこのうちのピット4・6・10・13・18・20が主柱穴となる可能性が高い。ピット20には柱の痕跡が認められた。また、ピット17は底面にわずかながら焼土や炭の広がりが認められたことから、これが炉跡である可能性が高い。一方、南部では黒褐色土が斑状に混じる明黄褐色粘質土の貼床層がみられ、その一端に土壇状の高まりが認められた。この土壇状の高まりは上面で長辺1.92m、短辺1.04m、下端部で長辺2.07m、短辺1.24mを測り、高さは0.16mである。検出状態を記録後に断ち割りトレンチを入れたところ、褐色粘土・黄色粘土混じりの暗褐色粘質土を盛って構築していることが分かった。この土壇状遺構や貼床層を除去したが、下部から遺構は確認されなかった。遺物は弥生土器の小破片の他、磨製石鏃が出土している。

出土遺物は第3-27・28図に示した。51～64は弥生土器である。51～56・58～64は甕である。52は底径が広く、器高もほかに比べて低い鉢状を呈する。57は鉢で、外面にヘラミガキを施す。65は弥生土器片を転用した加工円盤である。66～73は石器である。66～68は打製石鏃で、66・67は基部が凹基、68は平基となる。69・70は磨製石鏃で、69は両面に整形の擦痕が認められるのに対し、70は平滑に仕上げている。71は下層出土の剥片で、石材は珪化木である。72は砥石である。73は厚みのある円礫を素材とした叩石で、上面及び長軸の両端に顕著な敲打痕が認められる。

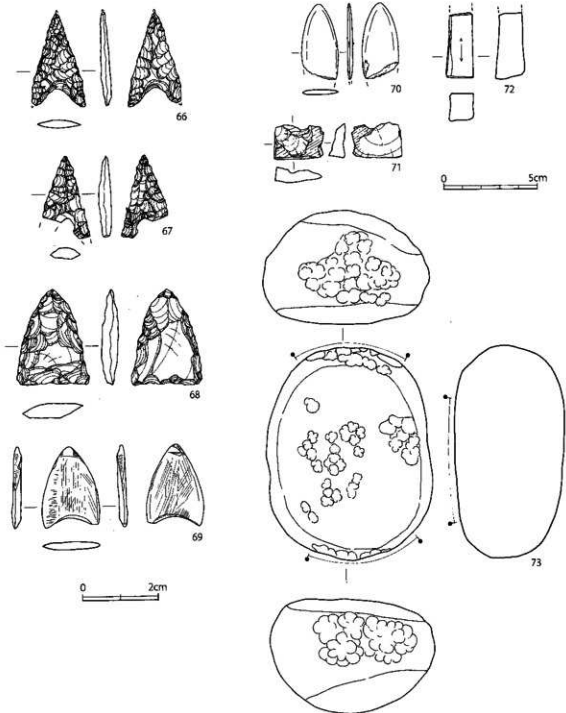
以上の遺物から、SH48の年代は弥生時代中期後半に位置づけられる。



第3-26図 SH48実測図 (1/60)



第3-27図 SH48出土遺物実測図① (1/4)



第3-28図 SH48出土遺物実測図② (1/1・1/2)

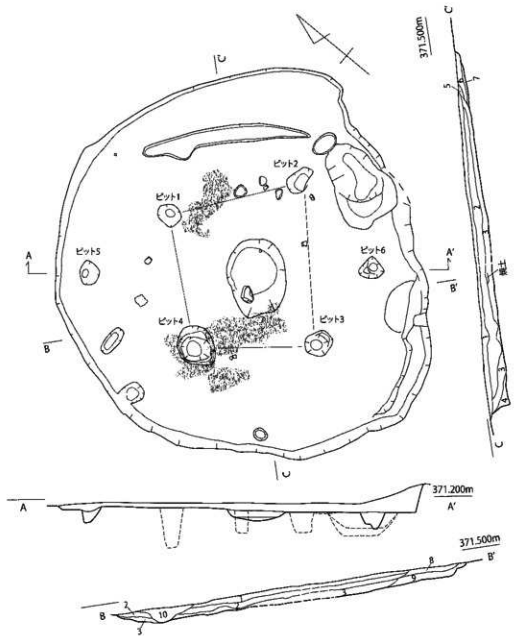
SH49 (第3-29図)

第6次調査で検出した堅穴建物である。平面形状は方形気味の不正円形形状を呈し、東西5.91m、南北6.19m、深さ0.45mを測る。埋土は5層に大別できる。1層は暗褐色土、2層は少量の黄色土塊を含む褐色土、3層は炭や黄茶色土塊が混じり硬く締まる褐色土、4層は黄色土や茶色土の混じる暗褐色土、5層は茶色土や明黄茶色土塊の混じる暗褐色土である。このうち1～3層が4・5層を切っている。また、3層の上面を中心に焼土の広がりか認められた。付属する遺構としてピットは11基あり、このうちのピット1・2・3・4・5・6の6基が支柱となる可能性が高い。土坑は2基あり、中央の土坑は長辺1.22m、短辺0.93m、深さ0.15mの規模で、上部から大振りの石が出土した。もう1基は東壁際に穿つもので、長辺1.42m、短辺0.95m、深さ0.36mを測る。内部は南側にステップ状の段が付く。また、北部で東西方向の溝状遺構が1条ある。土層の所見では切り合いが示唆されることから、当初円形の堅穴建物が築かれた後、それを1回り小さくして方形の堅穴建物に作り替えている可能性がある。この溝は建替え後の建物に伴うものと考えられる。方形とも円形ともとれる平面形状の不明確さも、この建替えが原因であろう。建替えを前提とすると、当初の円形建物に伴う支柱はピット1・2・3・4の4本、建替え後の方形建物に伴う支柱は東西壁際のピット5・6の2本と考えられる。

出土遺物は第3-30図に示した。74～76は弥生土器である。74は壺ないしは鉢で、口縁は緩く外反する。75は器台であろう。76は高坏で、板形の坏部に裾が緩く開く脚部が付く。77～79は石器である。77は扁平打製石斧で、上半部を欠失する。78は砥石で、上面の両側辺部に擦痕が認められる。79は石鏝の未製品と思われるもので、側縁に刃部調整を密に施す。石材は漆黒色を呈する黒曜石で、腰岳産のものであろう。

なお、76の高坏については調査時の取り上げラベルを基に遺物整理を進め、本遺構に帰属するものとして扱われてきたが、報告書作成の段階で後述のSK209から出土した高坏の所在が確認できないことが分かった。写真及び実測図を確認したところSH49からこれほど残りの良い高坏が出土した記録はなく、おそらくラベルの誤記載により、取り違えた可能性が高い。従って、76の高坏は本来SK209に帰属するものであることを付記しておく。

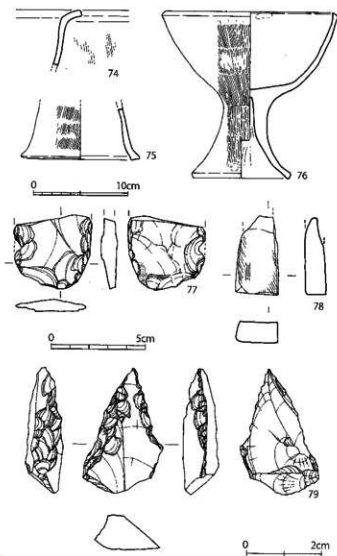
76を除く出土遺物から、SH49は弥生時代中期後半に比定するが、遺物が少ないため建替えの時期差までは明らかにできない。



- |          |                          |
|----------|--------------------------|
| 1. 暗褐色土  | 粘性なく脆い                   |
| 2. 褐色土   | 黄色土塊少量含む 粘性弱いがやや締まりあり    |
| 3. 褐色土   | 黄褐色土塊・炭滓じり やや粘性強く硬く締まる   |
| 4. 暗褐色土  | 黄褐色土混じる                  |
| 5. 黄褐色土  | やや粘性あり                   |
| 6. 暗褐色土  | 黄色土塊凝粒含む 粘性なく脆い          |
| 7. 黄褐色土  | 粘性なく脆い                   |
| 8. 暗褐色土  | 黄色土・赤色土混じる 粘性なく脆い        |
| 9. 暗茶褐色土 | 茶色土、明黄褐色土焼遺る やや粘性強く硬く締まる |
| 10. 茶褐色土 | 粘性なく脆い(樹木根痕混)            |

第3-29図 SH49実測図 (1/60)





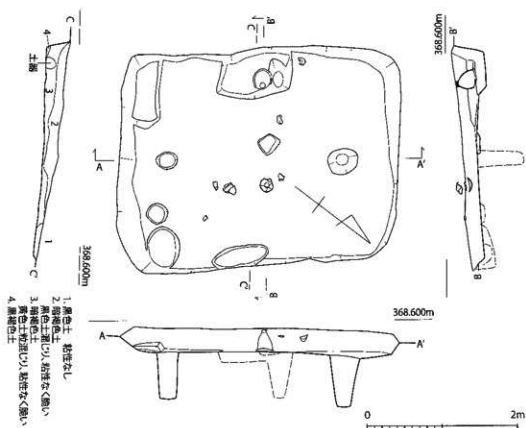
第3-30図 SH49出土遺物実測図

SH50 (第3-31図)

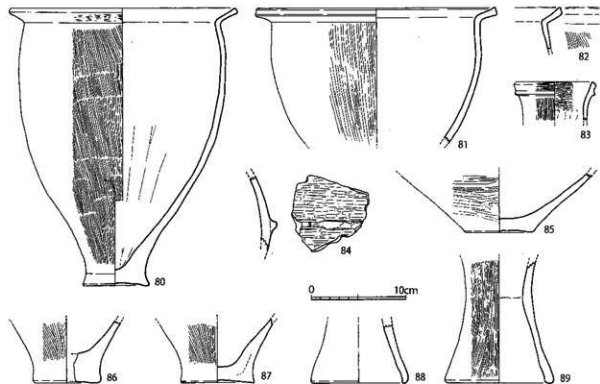
第6次調査で検出した竪穴建物である。平面形状は方形で、東西3.73m、南北2.88m、深さ0.30mを測る。埴土は上下2層に大別でき、上層は黒色土混じりの暗褐色土、下層は黄色ローム粒の混じる暗褐色土である。東西西壁の中央付近に穿つ2基のピットの柱で、建物の中央には焼土の入った浅い土坑があり、これが炉跡である。南壁際の中央には平面方形の土坑があり、長辺0.98m、短辺0.67m、北端部はピット状に一段深く掘り込んでおり、深さは最大で0.60mを測る。この土坑の検出面で倒置した状態の甕(第3-32図80)が出土しており、祭祀行為の跡と考えられる。他に数点の弥生土器が出土したが、いずれも検出面近くからの出土で床面からは浮いた状態である。

出土遺物は第3-32図に示した。80～89はいずれも弥生土器である。80は甕で、壁際の土坑上面に口縁部を下に倒置した状態で据えられていた。81・82は甕、83は細口壺である。84は内傾する胴部に断面台形の凸帯を貼り付ける壺で、外面にはミガキを密に施す。85は甕の底部で、胴部の立ち上がりは広く、外面にはヘラミガキを施す。86・87は甕の底部、88・89は器台である。

以上の出土遺物から、SH50は弥生時代中期後半に比定する。



第3-31図 SH50実測図 (1/50)



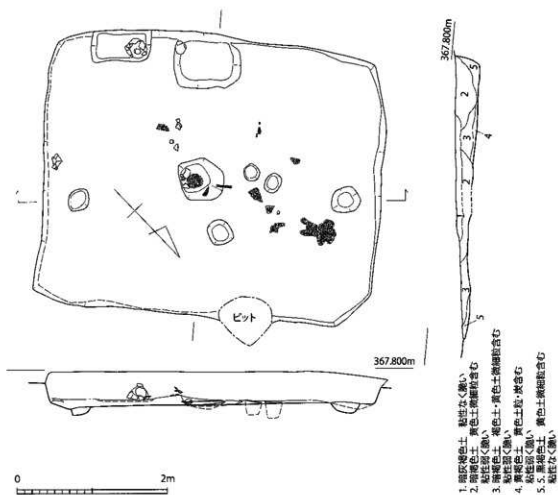
第3-32図 SH50出土物実測図 (1/4)

SH51 (第3-33図)

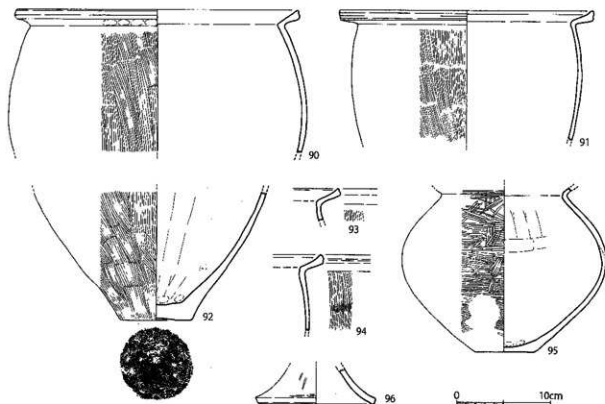
第6次調査で検出した竪穴建物である。平面形状は方形で、東西4.48m、南北3.71m、深さ0.43mを測る。埋土は5層に大別でき、1層は暗褐色土、2層は黄色ロームの微細粒を含む暗褐色土、3層は褐色土及び黄色ローム微細粒を含む暗褐色土、4層は黄色ローム粒や炭を含む黄褐色土、5層は黄色ローム微細粒を含む黒褐色土である。付属遺構は東西両壁近くの中央部に穿つ2基のビットが主柱穴で、建物の中央には炉跡である浅い土坑が認められる。南壁際には2基の土坑があり、中央の土坑は長辺0.88m、短辺0.74m、深さ0.12mを測る。その0.32m東側にもう1基土坑があり、長辺0.79m、短辺0.41m、深さ0.05mを測る。この土坑の上で、口縁部を欠く弥生土器の壺(第3-34図95)が底部を上にした状態で出土した。SH50同様、住居の廃絶に伴う祭祀行為であろう。

出土遺物は第3-34図に示した。90～96は弥生土器である。90～94は甕で、いずれも口縁は外反し、端部を肥厚させ上端を積み上げる。92は底面に1箇所粉状の圧痕が認められる。95は胴部が球状に膨らむ壺で、外面には横位のヘラミガキを密に施す。96は高坏の脚部である。

以上の出土遺物から、SH51は弥生時代中期後半に比定される。



第3-33図 SH51実測図 (1/50)



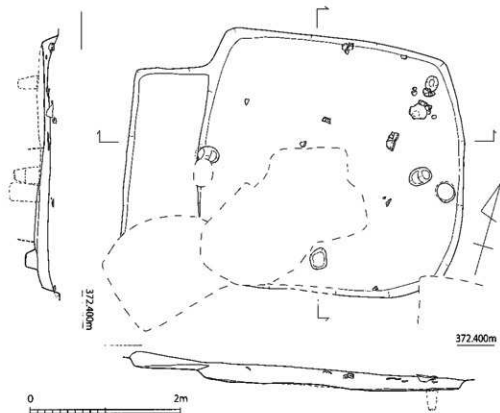
第3-34図 SH51出土遺物実測図 (1/4)

S H52 (第3-35図)

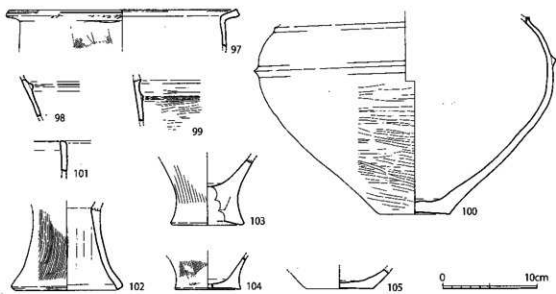
第9次調査で検出した竪穴建物である。中央部から南西隅部にかけて大規模な攪乱を受ける。平面形状は方形を呈し、西側は張り出し部を有する。東西3.95m、南北3.38m、深さ0.24m、張り出し部の長さ2.22m以上、幅0.95m、深さ0.21mを測る。付属する遺構としてピット4基を検出しており、このうちの東西壁側にある2基のピットが主柱穴である。主柱穴はいずれも屋内側にステップ状の段が付く。

出土遺物は第3-36図に示した。97～105は弥生土器である。97は甕で、口縁は外反し端部は肥厚する。98・99は胴部に断面M字状の凸帯を貼り付けるもので、98は甕、99は壺か甕か判然としない。100は胴部が膨らむ壺で、胴部に断面三角形の凸帯2条が確認できる。外面は粗いヘラミガキを施す。101は鉢であろう。102は罎台の裾部である。103～105は底部で、103・104は甕、105は壺である。

以上の出土遺物から、S H52は弥生時代中期後半に比定できる。



第3-35図 SH52実測図 (1/50)



第3-36図 SH52出土遺物実測図 (1/4)

### 第3章 第6次から第9次調査

#### (2) 掘立柱建物

第6次調査では掘立柱建物を1棟検出した。このエリア一体で唯一確認されている掘立柱建物である。

#### SB6 (第3-37図)

第6次調査で検出した掘立柱建物である。桁行は北辺では4間であるのに対し、南辺では3間、梁行3間となる。柱間寸法は、北辺桁行では1.31～1.95mに対し南辺では1.88～2.61mとばらつきがある。梁行では1.60～1.71mと比較的近似値をとる。建物内部には2基のピットがあり、屋内横持柱である可能性が高い。両者の柱間は4.30mを測る。建物の主軸はN-63.3°-Wで西に振れる。埋土は黒色土ないしは黒褐色土である。図示できるような遺物は出土していない。なお、建物の範囲内には2基の方形土坑SK208・209が並列して存在する。この土坑と掘立柱建物が関連するかどうか、同時存在か時期差があるのかは不明である。

遺構の詳細な時期は明らかにできないが、埋土が堅穴建物と共通する黒色土や黒褐色土であることから、弥生時代のものである可能性を考えたい。

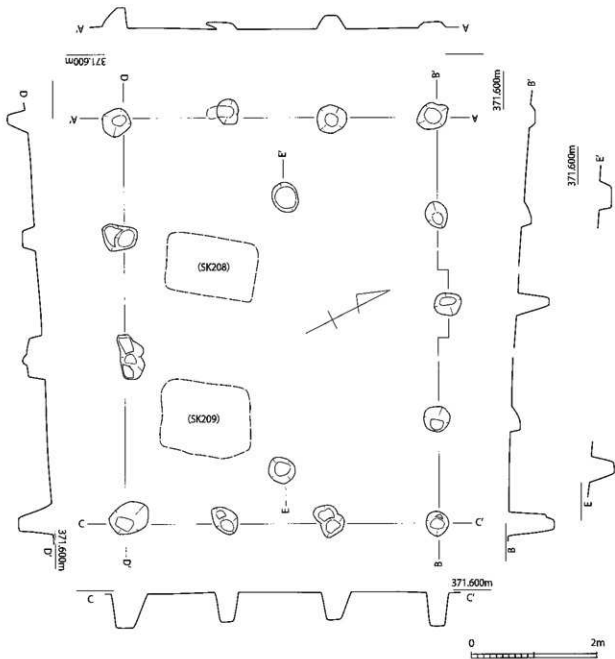
#### (3) 土坑

土坑は一定量確認しているが、ここでは遺物の出土があったもの、特徴的なものについて報告する。なお、遺構種別として土坑とひと括りにしているが、中には貯蔵穴や炉跡等も含んでいる。

#### SK203 (第3-38図)

第9次調査で検出した土坑である。平面形状は隅丸方形で、長辺1.79m、短辺1.58m、深さ0.38mを測る。土坑の西隅部には方形の浅い掘り込みがあり、さらにその一端にはピット状に一段深くなっている。遺物は土坑の中位から上部にかけて散発的に出土している。

出土遺物は第3-39図に示した。106は鋤先口縁となる弥生土器で、内外面ともに赤色顔料を塗彩する。高坏であろうか。図示できるのはこの1点だけであり、遺構の帰属時期を明確にできないが、弥生時代の遺構の可能性が高い。



第3-37図 SB6実測図 (1/60)

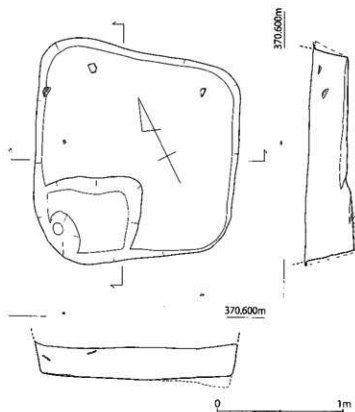
## SK204 (第3-40図)

第9次調査で検出した土坑である。北側をSD16に切られているが、略円形を呈し、長辺0.91m、短辺0.63m以上、深さ0.16mを測る。土坑の東端部寄りで石皿と、その下や土坑の東半部を中心に弥生土器がまとまって出土した。

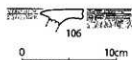
出土遺物は第3-41図に示した。107～112は弥生土器で、いずれも甕である。口縁部は外反し、端部は丸く肥厚する。111・112は底部で、111はやや凹み底、112は平底である。113は直角三角形をした石皿で、上下両面とも使用痕が認められる。

以上の出土遺物から、SK204は弥生時代中期後半に比定できる。

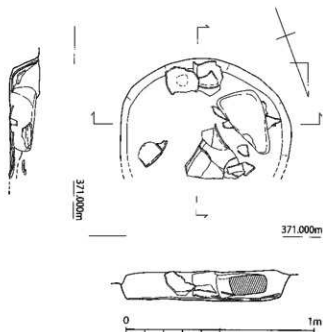




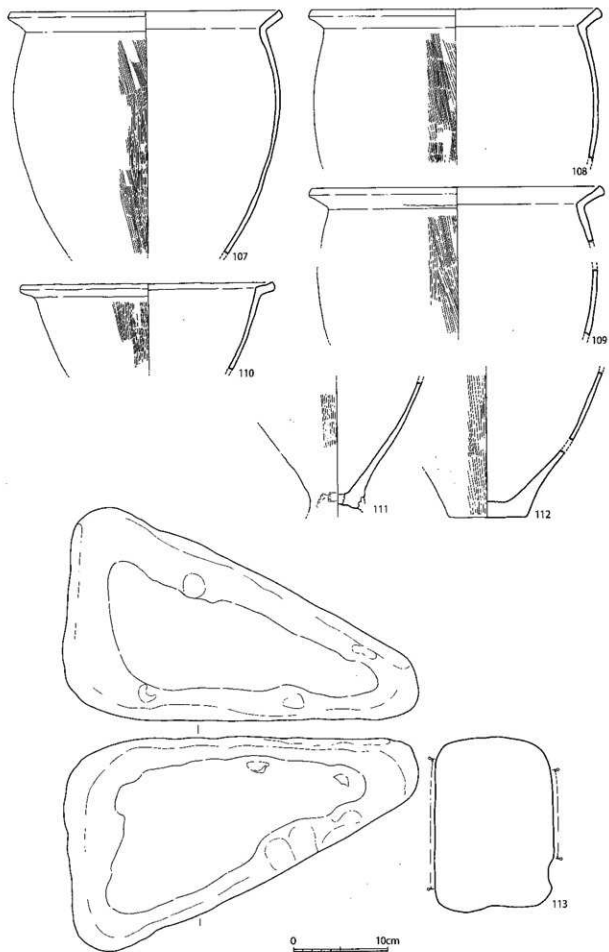
第3-38図 S K 203実測図 (1/30)



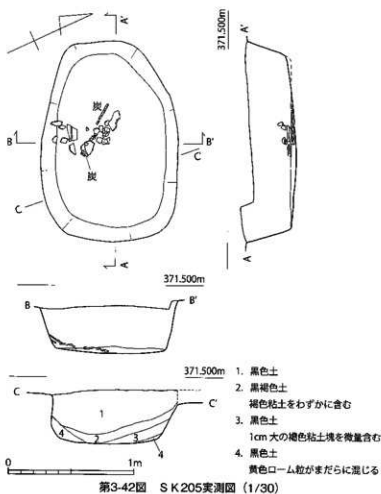
第3-39図 S K 203出土遺物実測図



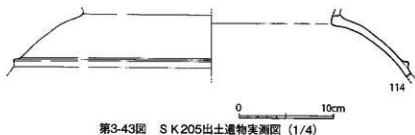
第3-40図 S K 204実測図 (1/20)



第3-41図 SK204出土遺物実測図 (1/4)



第3-42図 SK205実測図 (1/30)



第3-43図 SK205出土遺物実測図 (1/4)

S K205 (第3-42図)

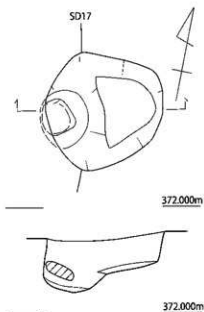
第9次調査で検出した土坑である。平面形状は隅丸長方形気味の長楕円形で、長辺1.59m、短辺1.10m、深さ0.42mを測る。掘土は黒色土を主体とし、下部には褐色粘土塊をわずかに含む黒褐色土や黄色ローム粒がまだらに混じる黒色土が薄く堆積する。土坑の中央から南端部の底面付近にかけて弥生土器の壺の破片や炭がややまとまって出土した。

出土遺物は第3-43図に示した。114は弥生土器の壺で、口縁部を欠失する。内傾する肩部に断面台形状の凸帯を貼り付ける。他に図示できる遺物はないが、本資料からS K205は弥生時代中期後半に位置付けられる。

## S K 206 (第3-44図)

第7次調査で検出した土坑である。S D17を切るもので、平面形状は五角形気味の円形で、東西・南北とも0.94m、深さ0.41mを測る。埋土は褐色土で、下層には黄色ローム塊を少量含む。内部は東半部にステップ状の段が付き、西側はさらに一段深く掘り込んでいる。そして、西側は検出面よりオーバーハングし、その箇所から石皿が1点出土した。

出土遺物は第3-45図に示した。115は石皿で、上面は使用によりわずかに凹みが認められる。他に図示できるものがなく、遺構の帰属年代は明らかにできない。ただし、S D17の埋没後に構築されているので、弥生時代中期後半以降である。石皿が出土しているので、弥生時代の遺構として捉えておきたい。



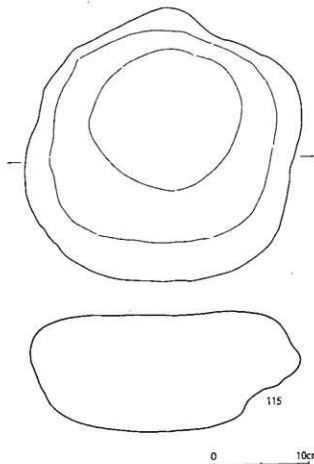
## S K 207 (第3-46図)

第6次調査で検出した土坑である平面形状は隅丸長方形で、底面がフラスコ状に広がるため検出面よりも底面の方が大きい。検出面で長辺2.19m、短辺1.35m、最大部で長辺2.36m、短辺1.47m、深さ0.80mを測る。埋土は7層に分層でき、黒褐色土・暗褐色土・黄褐色土が互層状に堆積する。特に3層・5層・7層では黄色ロームの混じりが多く認められる。遺物の出土は多くはない。遺構の形状から貯蔵穴と判断される。

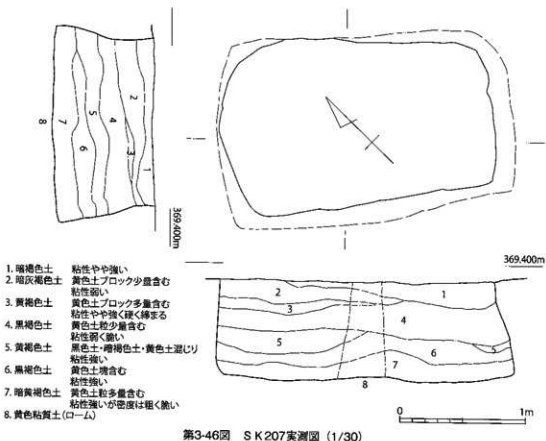
出土遺物は第3-47図に示した。116は弥生土器甕の底部である。図示できるものはこの1点だけであるが、周辺の竅穴遺物と同時期に機能していたと考えるのが自然であり、弥生時代中期後半の遺構と判断したい。



第3-44図 S K 206実測図 (1/30)

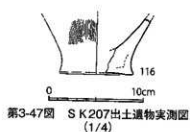


第3-45図 S K 206出土遺物実測図 (1/4)



#### SK 208 (第3-48図)

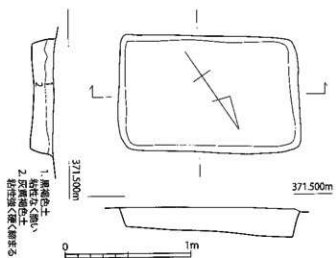
第6次調査で検出した土坑である。掘立柱建物SB6の内部に当たる位置で検出したもので、SK 208の1.37m南にはSK 209が並存するように位置する。平面形状は隅丸長方形を呈し、長辺1.45m、短辺0.93m、深さ0.22mを測る。埋土は2層認められ、上層は締まりのない黒褐色土、下層は粘性の強い灰黄褐色土である。図示できるような遺物の出土がないため遺構の時期や、SB6との前後関係は明らかにできないが、遺構埋土や形状から弥生時代の遺構と判断する。並存するSK 209は祭祀土坑の可能性があり、遺構規模や形状が似る本遺構も同様の性格を持つ可能性もある。



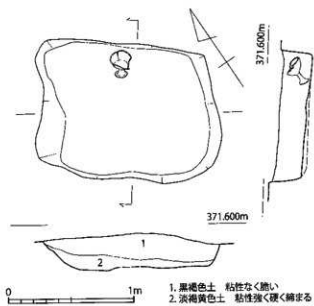
#### SK 209 (第3-49図)

第6次調査で検出した土坑である。SK 208の南1.37mに位置し、SK 208と並存するように構築されている。また、位置的にはSK 208同様に掘立柱建物SB6の内部にあたる。平面形状はやや丸みを持つ隅丸長方形で、長辺1.49m、短辺1.07m、深さ0.27mを測り、遺構規模は先のSK 208のほぼ近似値をとる。埋土は2層認められ、上層は粘性のない黒褐色土、下層は粘性の強い淡黄褐色土である。土坑の北壁のほぼ中央で、弥生土器の高坏が壁に倒れかかったような状態で出土した。このことから、この土坑は祭祀行為の痕跡ではないかと考えられる。

出土した高坏は、SH49のところで触れたように取り上げ時のミスでSH49からの出土として取り扱われており、第3-30図に掲載の76の高坏がそれである。それ以外に図示できるものは出七していない。高坏の出土から、SK 209は弥生時代中期に比定する。なお、SB6の時期が必ずしも明確ではなく、SK 209がSB6と時間的に共存するのか、あるいは前後関係があるのかは明らかにできない。



第3-48図 SK 208実測図 (1/30)



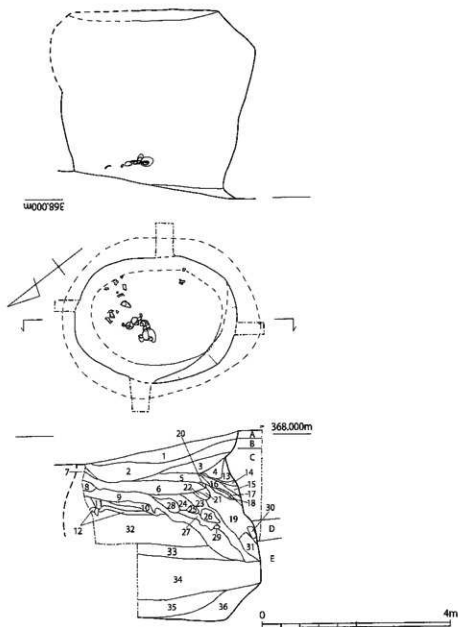
第3-49図 SK 209実測図 (1/30)

## SK210 (第3-50図)

第8次調査2区で検出した土坑である。平面形状は楕円形を呈するが、内部は約0.6m下がった所で一端括れ、そこから底面に向かってフラスコ状に広がる形状をとる。そのため検出面よりも内部の方が一回り大きい、オーバーハンクした状態となる。遺構の規模は、検出面で長辺3.47m、短辺2.64m、内部の最大長4.18m、最大幅3.38m、深さ4.01mを測る。深さが4mもあることから安全上全ての発掘は行えず、最終的には上半部を調査した後、重機を使用して部分的に掘り下げを行い、深さと堆積土層の確認を行った。土層堆積は複雑で、黒色土ないし黒褐色土と黄褐色土が斑状に重なっている。また、検出面から約1.2m下では、土坑中央から西側へ斜めにはしる堆積層がいくつも確認できるが、これは地山が落盤して形成されたものである。遺物は土坑の中央から北半部の、検出面からの深さ約0.70～1.00mのあたりでややまとまって出土したが、それ以下からはほとんど出土はみられなかった。これらの遺物は土坑の埋没過程でできた窪地に、不要になった土器等を廃棄した結果残されたものであろう。遺構の機能としては、フラスコ状に広がる形状から貯蔵穴と考えられる。

出土遺物は第3-51図に示した。117～131は弥生土器である。117～124は甕である。117～122は口縁が外反し、122は端部の上方向への積み上げが顕著である。124は小型の甕で、胴部から頸部への屈曲は緩く、口縁部もわずかに外反する程度である。125～128は壺である。125は胴部が膨らみ、頸部から短く外反する口縁部が付く。126・127は赤彩を施す広口壺で、126は口縁部が鋸先状となる。127は肩部に断面M字状の凸帯を貼り付ける。128は赤彩を施す細口壺で、球状に膨らむ胴部から頸部がすぼまり、口縁部が上方に長く延びる。頸部には断面三角形の凸帯を巡らせる。129～131は底部で、129は外面に赤色顔料を塗彩する。132は縄文土器の浅鉢である。口縁部は外に大きく開き、端部は短く上方に折れる。口縁屈曲部の外面には1条の沈線を施す。晩期前葉のものである。

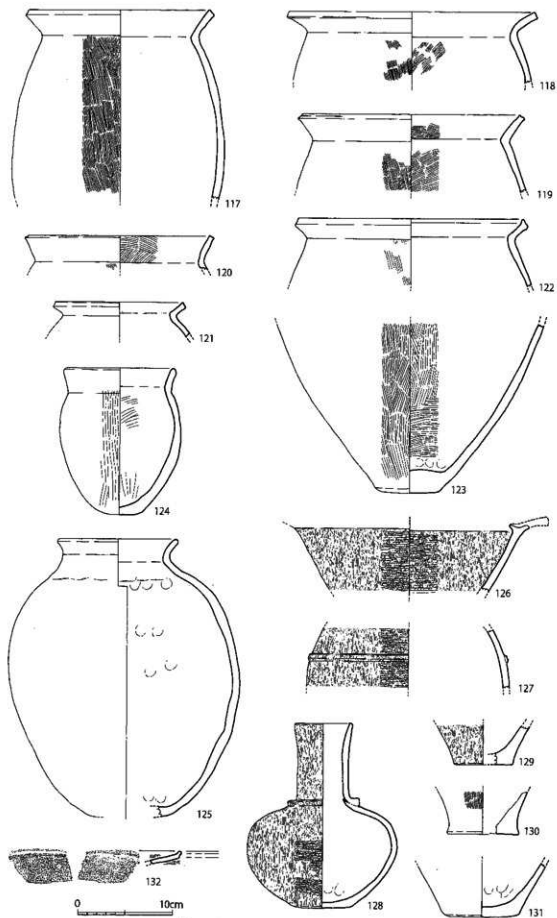
以上の遺物について、弥生土器は中期後半と後期終末のものが混在している。117～123・126・127は中期後半、124・125・128は後期終末に位置付けられる。遺物からは弥生時代後期終末に比定できるが、あくまでそれはSK210の最終埋没年代であり、遺構の規模を勘案すると貯蔵穴として機能していた時期と埋没時期の間には一定の時間差が存在する可能性もある。貯蔵穴と壺穴建物が相互に関連して存在するならば、SK210も中期後半に機能していたと考えられ、実際にその時期の土器も出土している。しかし、出土状況では中期と後期の土器が混在しており、単純に機能時期を中期、埋没を後期とするには違和感が残る。床面からの出土等、確実な状態で資料の出土がないため、ここでは埋没時期が後期終末であることを確認しておきたい。



- |                  |                  |                       |                |
|------------------|------------------|-----------------------|----------------|
| 1. 黒色土           | 白色粒子少量含む         | 21. 茶褐色土(地山崩壊土)       | A. 黄色ローム       |
| 2. 黒色土           | 白色粒子多量含む         | 22. 黒色土               | B. 灰黄褐色ローム     |
| 3. 黒色土           | 2より白色粒子少ない       | 23. 黒色土               | C. 明黄色ハードローム   |
| 4. 黒褐色土          |                  | 24. 黒色土               | D. 淡黄白色砂       |
| 5. 黒色土           | 白色粒子少ない          | 25. 暗黄褐色土(地山崩壊土)      | E. 淡黄白色砂 硬く締まる |
| 6. 黒色土           | 白色粒子をこくわずかに含む    | 26. 黄褐色土(地山崩壊土)       |                |
| 7. 暗褐色土          |                  | 27. 黒色土               |                |
| 8. 黒褐色土          | ロームのブロック含む       | 28. 暗茶褐色土             |                |
| 9. 黒色土           | 下部にロームの大ブロック多量含む | 29. ブロック状の黄褐色土(地山崩壊土) |                |
| 10. 暗褐色土         | やや粘性を帯びる         | 30. 黒色土               |                |
| 11. 黒色土          | 軟質               | 31. 黄褐色土(地山崩壊土)       |                |
| 12. 茶褐色土         | やや粘質             | 32. 黄褐色土              |                |
| 13. 暗黄褐色土(地山崩壊土) |                  | 33. 淡褐色土              |                |
| 14. 黄褐色土(地山崩壊土)  | 軟質               | 34. 明黄色ローム(ハードローム)    |                |
| 15. 暗黄褐色土(地山崩壊土) |                  | 35. 明黄色土              |                |
| 16. 黒色土          | ロームブロック含む        | 36. 明黄色ロームと淡黄白色砂の混合土  |                |
| 17. 黄褐色土(地山崩壊土)  |                  |                       |                |
| 18. 黒色土          |                  |                       |                |
| 19. 黄褐色土(地山崩壊土)  |                  |                       |                |
| 20. 茶褐色土(地山崩壊土)  | ロームブロック含む        |                       |                |

第3-50図 SK 210実測図 (1/80)





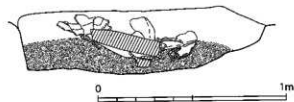
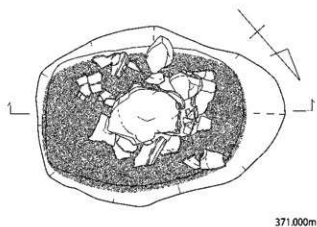
第3-51图 SK 210出土遺物実測図 (1/4)

## SK211 (第3-52図)

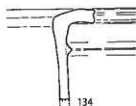
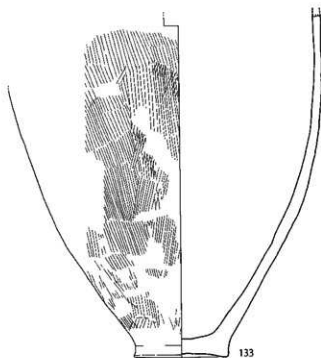
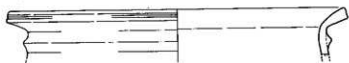
第9次調査で検出した土坑である。平面形状はやや歪な卵形を呈し、長辺1.32m、短辺0.95m、深さ0.33mを測る。土坑のほぼ中央上部に40cm大の石皿があり、その下から弥生土器の破片が固まって出土した。埋土は黒色土系のもので、石皿及び土器がまともって出土したところより下位では焼土や炭が多量に混じった黒色土(図中アミかけ範囲)が見られ、壁面も被熱により赤く変色していた。また、底面には焼土の広がり確認された。こうした点から本土坑は屋外炉の可能性が考えられる。

出土遺物は第3-53・54図に示した。133は大形の甕で、口縁部は外反し、端部は肥厚する。頸部には断面三角形状の凸帯を貼り付ける。134も甕で、口縁部は外反した後水平に折れ、上端に面を作る。頸部には断面三角形状の凸帯を巡らせる。135は石皿で、土坑の中央で土器の上に置かれていたものである。

以上の遺物から、SK211は弥生時代中期後半に位置付けられる。

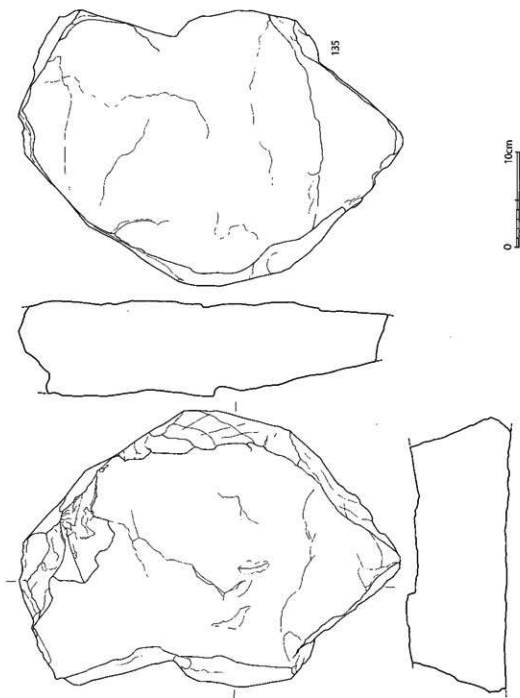


第3-52図 SK211実測図(1/20)



第3-53図 SK211出土遺物実測図①(1/4)

0 10cm



第3-54図 SK211出土遺物実測図② (1/4)

## (4) 溝

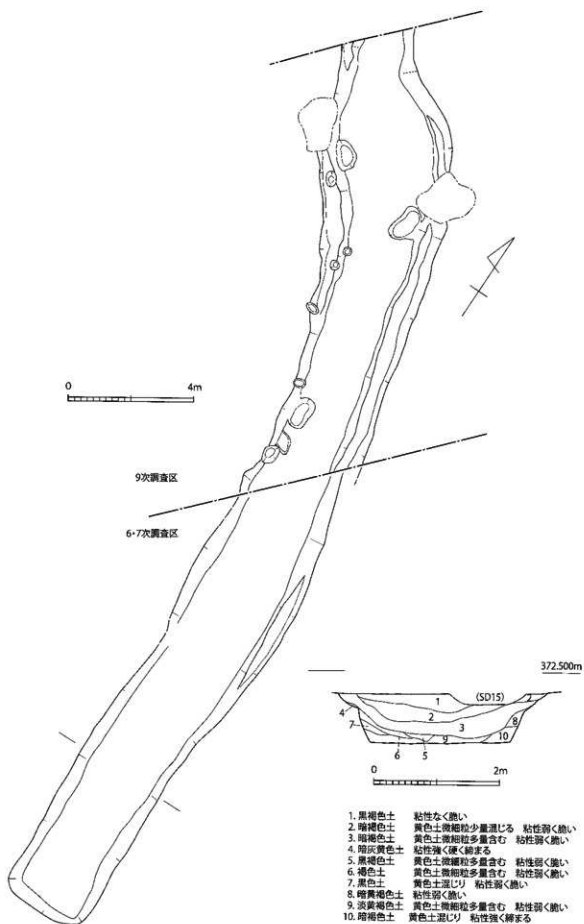
本調査区では、弥生時代の溝2条を確認した。SD17・18は遺構の方向や規模、埋土等が共通することから同時に存在したもので、両者の間は土橋状に掘り残されている。そうした点から台地を遮断するように開削し、集落の内外を区画する施設と考えられる。

## SD17 (第3-55図)

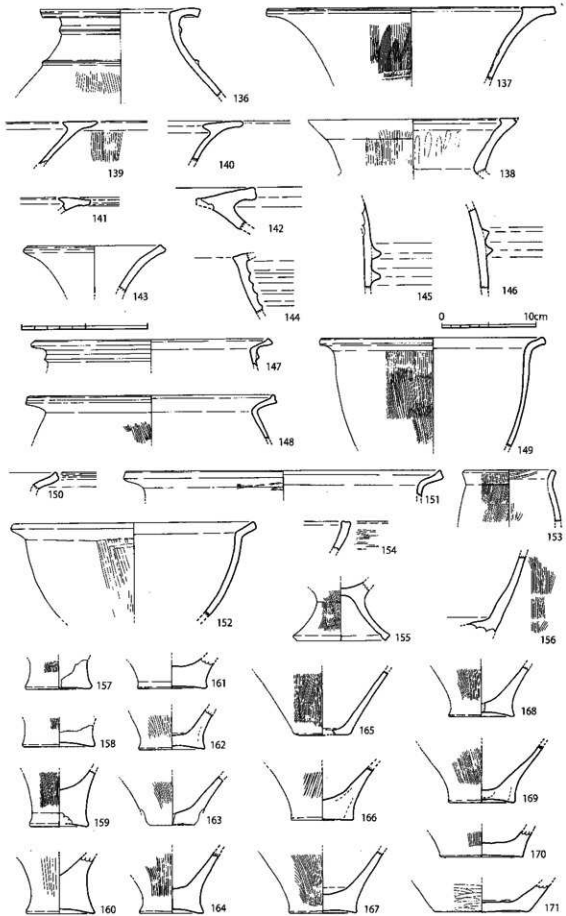
第6・7次、9次調査で検出した溝である。調査地の最高所から少し下がった位置から掘り始め、北～北北西の方向に続く。SD17から4.84m南にはSD18があり、方向が一致することから両者是一对の溝で、一部を土橋状に掘り残しているものと考えられる(第3-60図)。第6次調査で検出した時点では、これが集落の出入り口になり、集落を巡る環濠である可能性も考えたが、周辺の調査の結果、溝は環濠にはならず台地を遮断するように延び、9次調査の先で削平により失われていた。遺構の規模は、検出範囲で長さ30.2m以上、最大幅4.2m、深さ0.78mを測る。埋土は複数層に細分できるが、主に黒色土ないしは黒褐色土、褐色土や暗褐色土からなり、下部の堆積層には黄色ローム粒を多く含む。溝の断面形は逆台形状を呈し、底面はほぼ平坦である。このSD17・18より西側では竪穴建物が極端に少なくなることから、この溝は集落の内外を区画する施設である可能性が高い。SD17とSD18の間の土橋状に掘り残された部分が、集落の出入り口にあたるのであろう。

出土遺物は第3-56～58図に掲載した。136～177は弥生土器である。136～146は壺で、136は口縁部を外に大きく拡張し、胴部は膨らむ。頸部と肩部にそれぞれ断面三角形の凸帯を巡らせる。137～141は広口壺、144～146はその胴部である。144～146は外面に断面三角形の凸帯を数条貼り付ける。147～153は甕である。147～152は口縁が外反し、端部は肥厚する。147・148・150・151は端部を上方へ揃み上げる。147は頸部に断面三角形の凸帯を1条施す。154は鉢、155は高坏である。156～171は底部及び底部付近の破片である。172・173は鼓形をした器台で、外面にはハケ目を密に施す。174・175は蓋、176・177は高坏である。178は弥生土器の碎片の周縁を加工した円盤である。179～189は石器である。179は削器で、下端縁に連続的な刃部調整を施す。石材は姫島産黒曜石である。180～183は扁平打製石斧で、180・183は周縁部に刃部調整刻線を密に施すが、181の調整は粗い。184は円礫を素材とした磨石で、上下両面が使用により平滑化している。185・186は叩石で、筒縁の一端に敲打痕が認められる。187・188は磨製石瓶丁、189は磨製石蕨である。

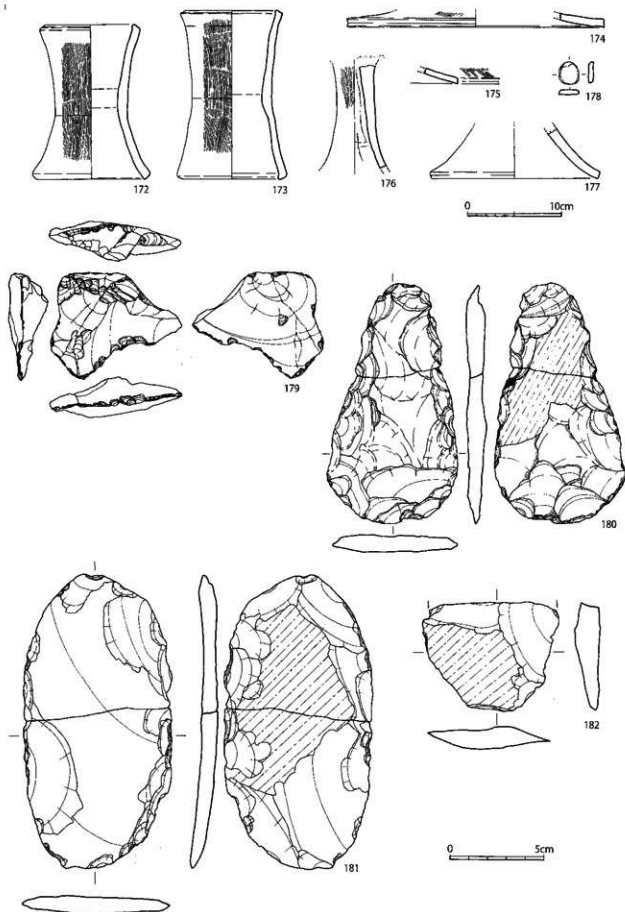
以上の出土遺物から、SD17は弥生時代中期後半に比定する。



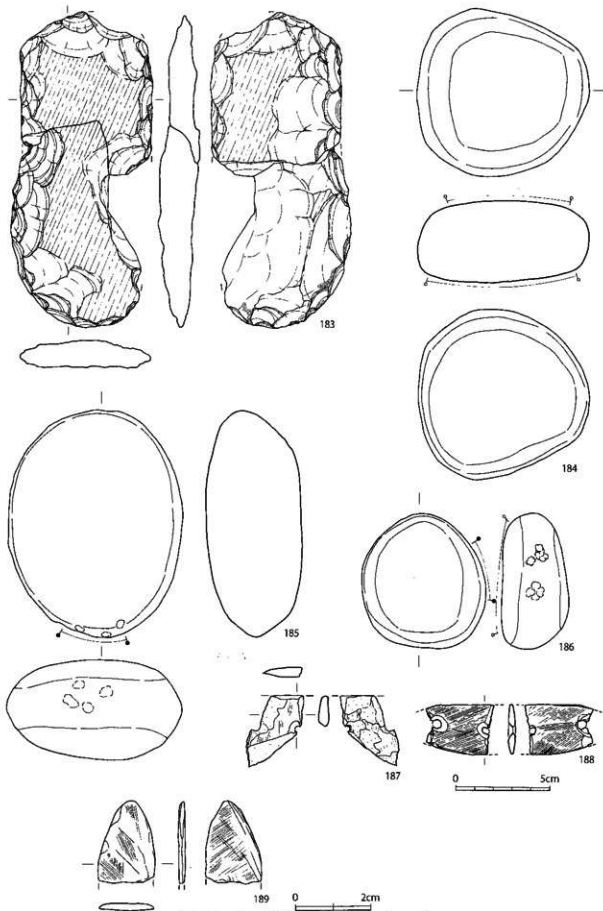
第3-55図 SD17実測図 (1/120・1/60)



第3-56図 SD17出土遺物実測図① (1/4)



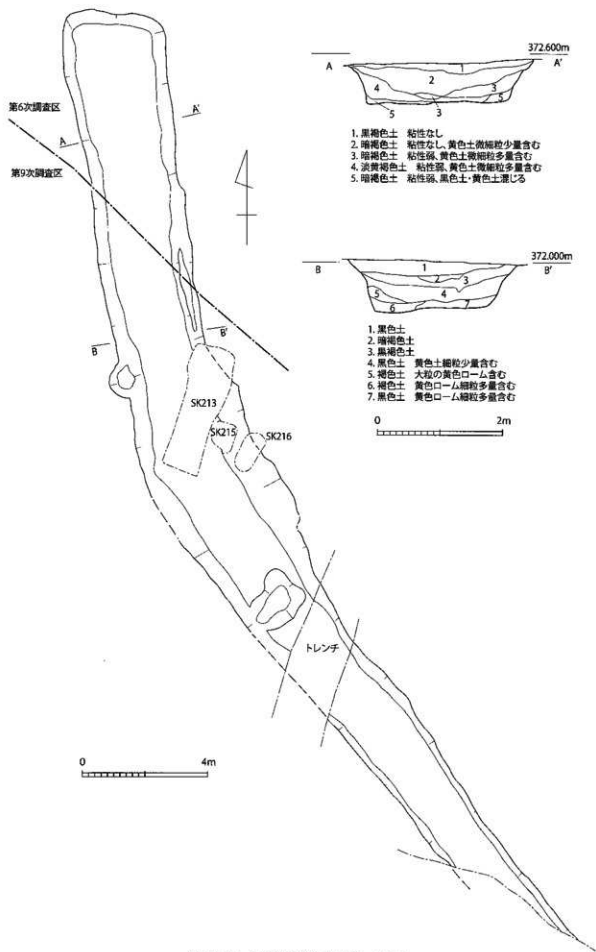
第3-57図 SD17出土遺物実測図② (1/4・1/2)



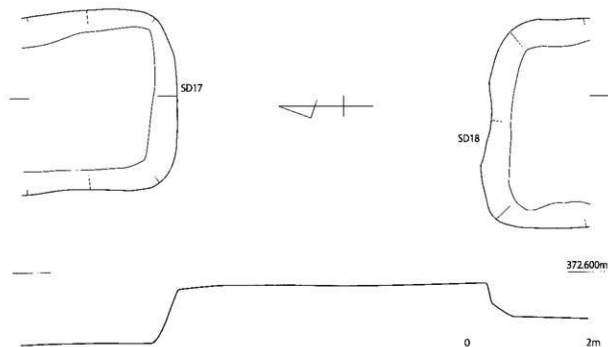
第3-58図 S D17出土遺物実測図③ (1/2・1/1)



第3章 第6次から第9次調査



第3-59図 S D 18実測図 (1/120・1/60)



第3-60図 SD17・18土橋部実測図 (1/60)

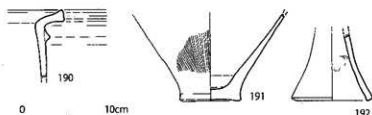
## SD18 (第3-59図)

第6次及び第9次調査で検出した溝である。先述のSD17とは規模や方向から一連のもので、SD17との間4.84mは土橋状に掘り残されている(第3-60図)。

SD18の北端部は隅丸方形状で、南側は上部を削平で失うため幅・深さを減しながら調査区外に続く。長さ33.39m以上、最大幅3.83m、深さ0.85mを測る。埴土は5～7層に分層でき、黒色土ないしは黒褐色土、褐色土や暗褐色土からなる。下部の堆積層には黄色ローム粒を多く含む。溝の断面形は逆台形状を呈し、底面はほぼ平坦である。主に南側斜面部を調査したためか、SD17に比べ遺物の出土は極めて少ない。

出土遺物は第3-61図に示した。190～192は弥生土器である。190は甕で、口縁部は外反し、端部を上方へ極み上げる。頸部には断面三角形の凸帯を貼り付ける。191は甕の底部、192は高坏の脚部である。

以上の出土遺物から、SD18の年代は弥生時代中期後半に位置付ける。



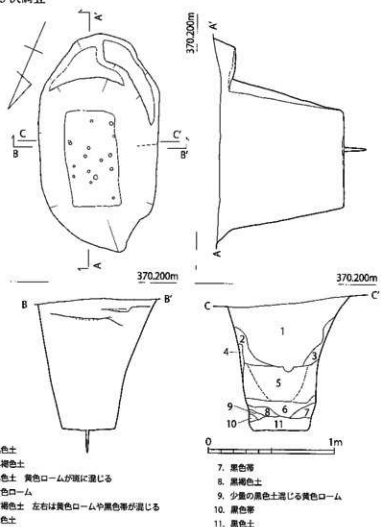
第3-61図 SD18出土遺物実測図 (1/4)

## 4 近世及び時期不明の遺構

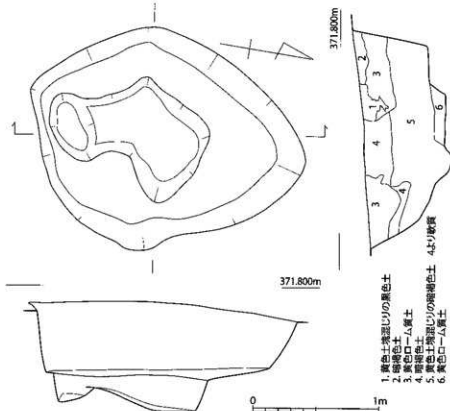
本項では主に弥生時代以降の遺構について報告する。遺構としては土坑、溝、道路状遺構がある。

## (1) 土坑

弥生時代以降に属するであろう土坑も複数確認しているが、ここでは主に遺物の出土した遺構や特徴的なものを中心に報告する。報告する土坑は8基で、中には陥穴や土坑墓も含んでいる。特に近世の土坑墓は第9次調査の南端付近で少しまとまって出土した。



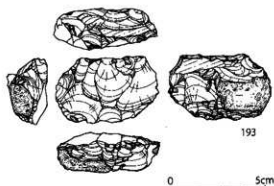
第3-62図 SK202実測図 (1/30)



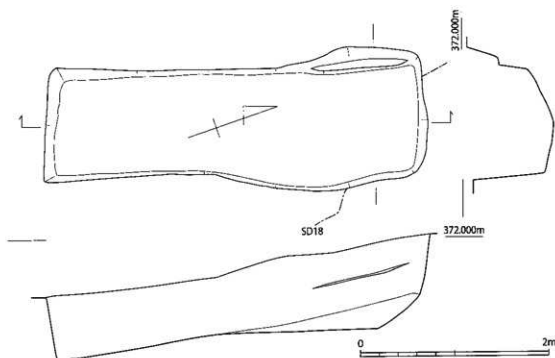
第3-63図 SK212実測図 (1/30)

## S K 202 (第3-62図)

第9次調査で検出した土坑である。平面形状は長楕円形を呈し、長辺1.74m、短辺0.96m、深さ1.21mを測る。埋土は黒色土ないし黒褐色土で、壁際では黄色ロームや黒色帯などの基盤層の粒が混じる。断面形は逆台形を呈する。底面は長辺0.76m、短辺0.42mの隅丸長方形で、無数の小ピットが確認された。この床面ピットは杭を挿し込んだ痕跡で、その深さは0.18mを測る。遺構の機能としては陥穴である。図示できるような遺物の出土がなく、遺構の時期は明らかにできない。陥穴は縄文時代の遺構として扱われることも多いが、旧石器時代や弥生時代以降にも存在するので、時期比定には慎重であるべきである。



第3-64図 S K 212出土遺物実測図 (1/2)

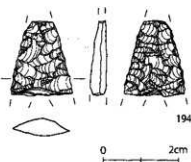


第3-65図 S K 213実測図 (1/40)

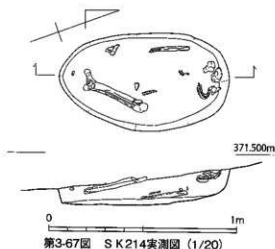
## S K 212 (第3-63図)

第9次調査で検出した土坑である。平面形状は菱形に近い卵形を呈し、長辺2.27m、短辺1.78m、深さ0.87mを測る。底面の中央には深さ約0.30mの不整形な掘り込みが伴う。埋土は上部は黒色土・暗褐色土・黄色ローム質土が複雑に混ざり合うが、下部は黄褐色土塊の混じる暗褐色土が安定した堆積を示す。

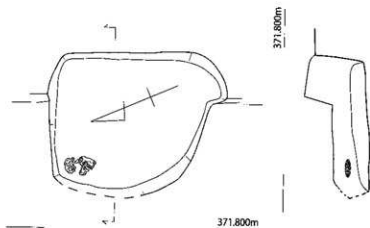
出土遺物は第3-64図に示した。193は漆黒色を呈する腰岳産黒曜石の石核である。他に図示できる遺物がなく、遺構の時期は明らかにできない。



第3-66図 S K 213出土遺物実測図 (1/1)



第3-67図 SK214実測図 (1/20)

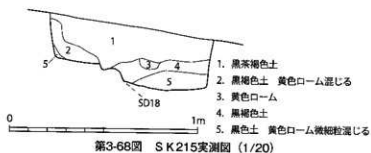


371.800m  
371.800m  
1m  
第3-68図 SK215実測図 (1/20)

SK213 (第3-65図)

第9次調査で検出した土坑である。弥生時代の清SD18を切る土坑で、平面形状は長方形を呈し、北端部はやや影らみを持つ。長辺4.08m、短辺1.46m、深さ0.89mを測る。

出土遺物は第3-66図に示した。194は打製石鏃で、先端および基部を欠失する。石材は腰岳産黒曜石である。このほかに図示できる遺物はなく、遺構の時期は明らかにできない。SD18を切るため、弥生時代中期後半以降の遺構である。

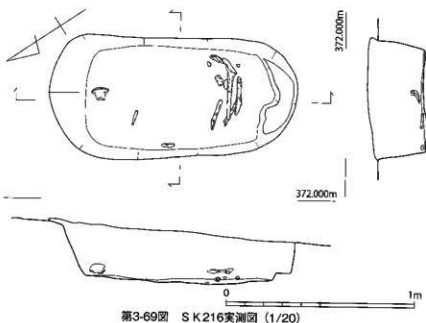


372.000m  
1m  
第3-68図 SK215実測図 (1/20)

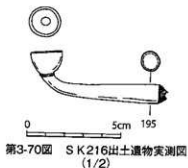
1. 黒茶褐色土
2. 黒褐色土 黄色ローム混じる
3. 黄色ローム
4. 黒褐色土
5. 黒色土 黄色ローム微細粒混じる

SK214 (第3-67図)

第9次調査の南西端付近で検出した土坑である。平面形状は長楕円形を呈し、長辺0.90m、短辺0.52m、深さ0.14mを測る。本遺構の最大の特徴は骨の出土であり、北端部付近で下顎骨が、東部から南部にかけて足の骨が出土した。従って土坑墓であり、埋葬状態は頭位を北に向けた横臥屈葬と判る。遺物の出土はないが、9次調査区の南端部付近では数基の近世墓が点在しており、本遺構も近世に属するものである。



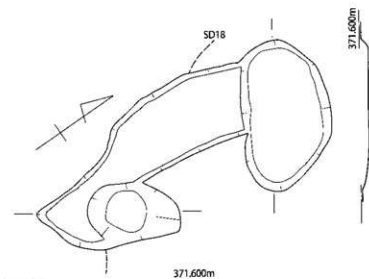
372.000m  
1m  
第3-69図 SK216実測図 (1/20)



5cm 195  
第3-70図 SK216出土遺物実測図 (1/2)

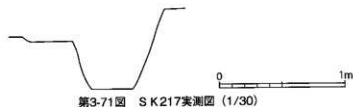
## S K 215 (第3-68図)

第9次調査で検出した土坑である。弥生時代中期の溝SD18を切って構築しており、平面形状はやや歪な隅丸形状を呈し、長辺0.96m、短辺0.76m、深さ0.33mを測る。堀上は黒茶褐色土や黒褐色土、黒色土で、壁面や底面近くでは黄色ロームの粒が混じる。土坑の北西端から顎の骨等が出土した。従って、本土坑も土坑墓であり、頭位を北に向けている。図示できる遺物の出土がなく、遺構の詳細な年代は明らかにできないが、S K 214同様に近世に属するものである。

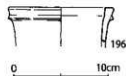


## S K 216 (第3-69図)

第9次調査で検出した土坑である。弥生時代中期の溝SD18を切って構築している。平面形状は長楕円形状を呈し、長辺1.32m、短辺0.65m、深さ0.27mを測る。土坑内からは北壁際の床面直上から頭骨の一部が、南半部からは折り曲げた状態の足の骨が出土した。従って、本土坑も頭位を北に向けた屈葬状態の土坑墓であると判る。また、頭骨の少し南からは煙管が出土しており、副葬品として納められたものであろう。



第3-71図 S K 217実測図 (1/30)



第3-72図 S K 217出土遺物実測図 (1/4)

出土遺物は第3-70図に示した。195は銅製の煙管雁首である。遺構の年代を明らかにできる遺物がいないが、煙管の出土から近世以降であることは判る。本遺構も、S K 214・215同様に近世に属するものである。

## S K 217 (第3-71図)

第9次調査で検出した、SD18を切る土坑である。平面形は不整形で、両端の土坑を浅い溝状の落ち込みで連結したような形状を呈する。北端の土坑は長辺1.20m、短辺0.71mで、深さは0.07mと浅い。南端の土坑は長辺0.75m、短辺0.47m、深さ0.63mを測る。この両者をつなぐ落ち込みは長さ2.00m、幅は最大で0.62mで、深さは0.04mしかない。遺構全体で長辺2.51mを測る。複数以降の重複と考えられるが、黒色埋土のため切り合い関係は明確に把握できなかった。

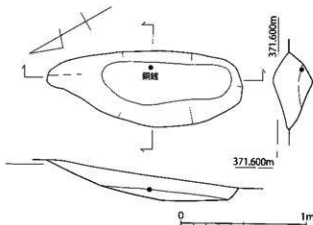
出土遺物は第3-72図に示した。196は陶器の甕である。口縁下に断面三角形の凸帯を1条巡らせる。

遺構の時期は、SD18を切ることから弥生時代中期以降であることは確かだが、詳細な時期は不明である。

SK218 (第3-73図)

第9次調査で検出した土坑である。平面形状は南北に細長い長楕円形で、長辺1.54m、短辺0.60m、深さ0.31mを測る。土坑の中央、東壁寄りの底面近くから銅銭が1点出土した。土坑墓が点在するエリアにあることから、本土坑も墓の可能性が考えられる。

出土遺物は第3-74図に示した。197は中国の北宋銭で、銭文はつぶれているが祥符元寶と判読できる。初銭は1008年である。北宋銭の出土から中世以降の遺構であることは確実で、銅銭の出土と、周囲に近世墓が分布することから、本遺構も近世墓である可能性がある。



第3-73図 SK218実測図 (1/30)

(2) 溝

SD15・SD16 (第3-75図)

第6次調査、第8次調査2区、第9次調査で検出した溝である。最初第6次調査で弥生時代の溝SD17を切って南北方向に延びる溝として確認し、次いで8次調査2区でその延長部分を調査したが、第9次調査では第6次調査と8次調査2区の間をつなぐ部分と、そこから西へ折れる溝を新たに確認した。この南北溝と東西溝の分岐地点がちょうど第6次調査と第9次調査の境目にあたり、両者の関係が必ずしも明確ではなかった。しかし、調査記録を詳細に検討すると、第8次調査2区で検出した部分は深さが2段に分かれており、あたかも2条の溝が重なっているような状況が読み取れた (A-A断面)。また、第8次2区の土層所見からこの溝は2層の埋土からなり、2条の溝の切り合い関係がある事が裏付けられた (B-B断面)。すなわち、溝の東側にあたる1層の褐色土が、西側の溝埋土である2層の暗褐色土を切っていることが分かる。また、第6次調査の溝との関係では、この溝の延長が第8次調査の西側に続くことから、遺構の形成順としてはまず第6次調査と第8次調査2区の西側の溝が構築され、その後、第9次調査及び第8次調査2区の東側の溝、すなわち南北から東西方向へ折れる溝が掘られるのである。以上の所見から、前者をSD15、後者をSD16として扱う。

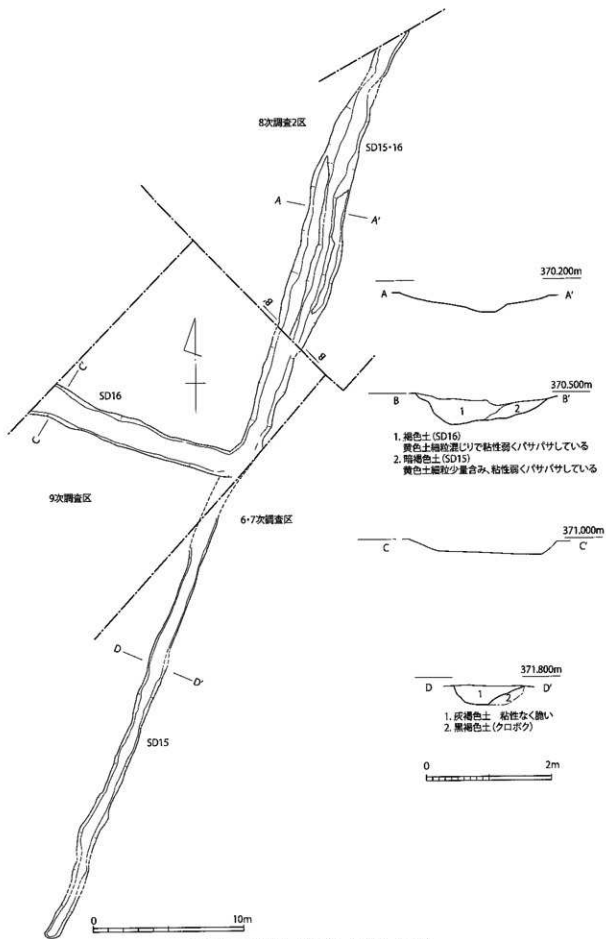
SD15は南北方向に続く溝で、8次調査2区を超えてさらに続くため全体の規模は明らかにできないが、検出した範囲で長さ64.53m以上、幅1.29m、深さ0.30mを測る。SD16は東西方向から第6次調査と第9次調査の境付近で北に折れるもので、東西方向の長さ14.78m以上、幅2.05m、深さ0.26m、南北方向の長さ31.70m以上を測る。西側はさらに第12次調査の区域1に続く。遺物は第8・2次調査区を中心に、弥生土器や近世陶磁器等が出土したが、両者の重複箇所で一括して取り上げており、どちらの溝に帰属するものかは明らかにできない。これらの溝は、近世以降の耕作地の区画等に関する施設と思われる。

出土遺物は第3-76図に示した。218～220は弥生土器で、218・219は釜の可能性が高い。220は釜の底部である。221～225は陶磁器類で、221は壺、222は合子蓋、223・224は肥前系染付磁器の丸碗、225は陶器摺鉢である。226は弥生土器片を転用した加工皿、227は鉄釘である。

以上の遺物から、SD15・16の年代は18世紀以降と判断される。



第3-74図 SK218出土遺物実測図 (1/1)



第3-75図 SD15・16実測図 (1/250・1/60)

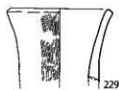


(3) 道路状遺構

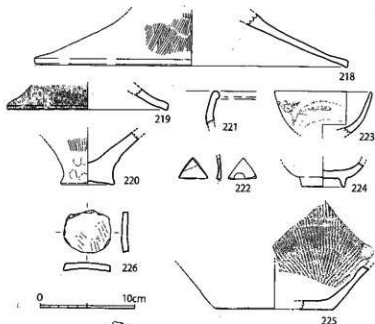
S F 6 (第3-77図)

第8次調査2区で検出した道路状遺構で、南北方向の短い溝状の土坑やピットが連続するもので、東西方向に続いている。付近に耕作に伴うと思われる溝が集中する箇所があり、本遺構も耕作に関する遺構とも考えたが、不定形な連続土坑であることから道路遺構と判断する。遺構の範囲は長さ約18.9m、幅約3.4mを測り、各土坑の深さは0.1m程度と浅い。地形的には堅穴建物等が分布する緩斜面から、このS F 6の北端あたりから傾斜がややきつくなる地形の変換点にあたる。調査前にもほぼ同位置には東西方向の道があったので、それはこのS F 6を踏襲している可能性が高い。また、S F 6はS D 15・16に直交する方向に続くことから、道路の位置や方向はこの地割に沿っている可能性が高い。

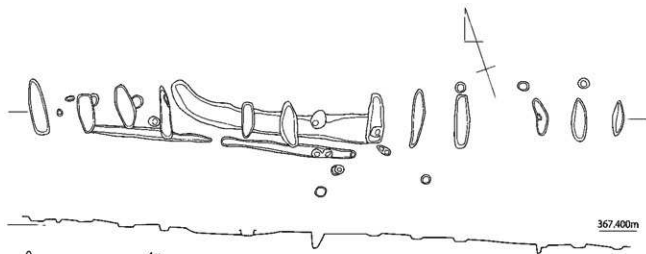
出土遺物は第3-78図に示した。228は口縁部上端に幅広い面をもつ弥生土器で、釜先口縁となる甕であろう。229は弥生土器の細口甕である。以上、図示できるものとして弥生土器が出土しているが、これらはいずれも混入品で、遺構自体は近世以降に属するものであろう。S D 15・16との関連で捉えれば、18世紀以降の可能性が考えられる。



第3-78図 S F 6出土遺物実測図 (1/4)



第3-76図 S D 15・16出土遺物実測図 (1/4・1/2)



367.400m

第3-77図 S F 6実測図 (1/120)

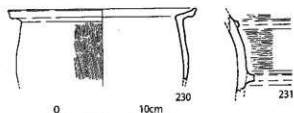
## 5 調査区等出土遺物

第3-79図は第8次調査2区のビット状遺構から出土した遺物である。230は弥生土器の壺で、口縁部は外に折れ、端部はやや内湾気味となる。231は弥生土器の壺で、外面に断面台形状の凸帯を2条貼り付ける。凸帯間にはハラミガキを密に施す。

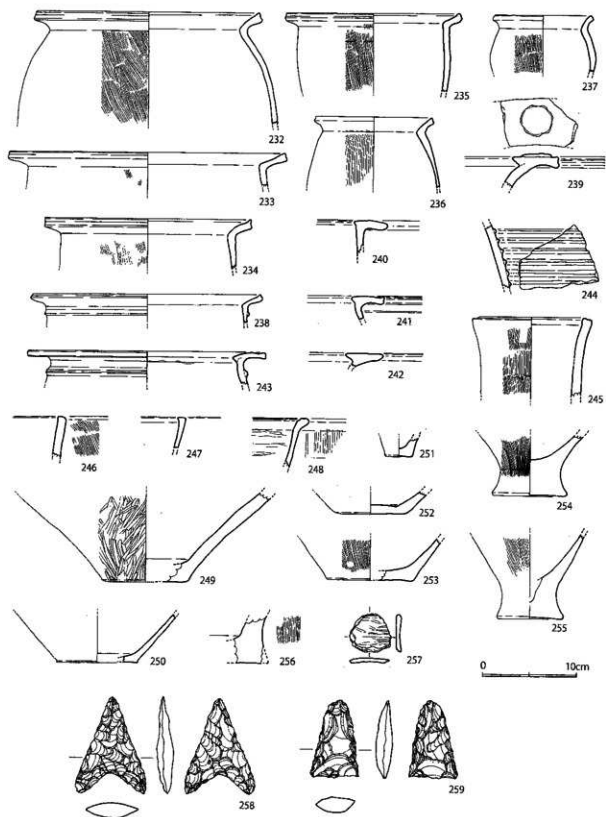
第3-80～81図は第6・7次調査の出土遺物である。232～256は弥生土器である。232～238は壺である。外反する口縁の端部は肥厚し、234は上端を上方へ摘み上げる。238は頸部下に断面三角形の凸帯を貼り付ける。239～243は口縁部の両端を拡張して広い上端面を作る、鋤先状口縁となるもので、239・242は壺、240・241・243は壺であろう。239は口縁上端に円形の浮文を施す。243は頸部下に断面M字状の凸帯を巡らせる。244は内傾する胴部の外面に多条の凸帯を巡らせる壺で、凸帯の断面形状は三角形を呈する。245は器台、246～248は鉢である。247は口縁の内端部が内側に迫り出す。248は口縁部が外反し端部は丸く肥厚する。外面には粗いタテハケ、内面には横位のケズリを施す。249～256は底部で、249～252は壺、253～256は壺である。257は赤彩を施す弥生土器の破片の周囲を加工した円盤である。258・259は打製石鏃で、258は凹基式、259は平基式で五角形状を呈する。石材は258が姫島産黒曜石、259はサヌカイトである。260は扁平打製石斧である。261は板状を呈する鉄製品であるが、詳細は不明。262・263は銅製の煙管雁首である。264・265は銭貨で、264は寛永通寶の「寶」字の貝部分が「ハ」字状となる新寛永銭、265は判読できない。

第3-82図は第8次調査2区の出土遺物である。266・267は弥生土器で、266は鋤先状口縁の壺、267は壺の底部である。268は備前焼の壺で、口縁部を折り返して玉縁状に作る。269は瓦質土器の鍋で、口縁はわずかに外反し端部は肥厚する。270は磁器の皿である。271～275は打製石鏃である。271は先端及び基部を欠くが先端はやや丸みを帯びる。旧石器確認グリッド1からの出土で、縄文時代早期頃のものである。272・273は凹基無茎式石鏃で、全体に細かい調整刻線を施す。274は先端及び基部を欠失する。275は先端を欠失するが、全体周縁の調整刻線が粗く未製品であろう。これらの石材はいずれも姫島産黒曜石である。276は縦長の剥片で打点部を欠失する。石材は腰岳産黒曜石である。277は寛永通寶で、「寶」字の下部がハ字状となる新寛永銭である。278は鉄釘で、先端が折れ曲がる。279は銅製の煙管雁首で、火皿と首部の接合部に補強帯を持つ。

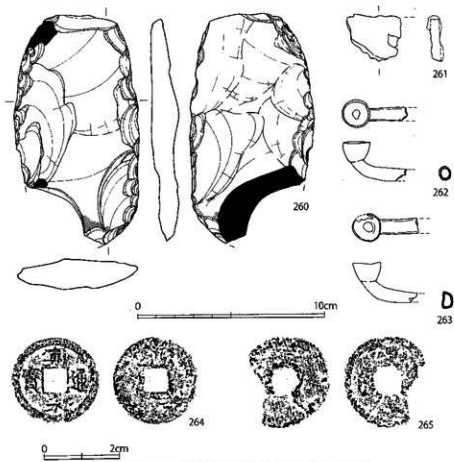
第3-83～85図は第9次調査の出土遺物である。280～284は弥生土器で、280は壺、281は壺であろう。282～284は底部で、282・283は壺、284は壺である。285は須恵器の提瓶で、肩部に円形浮文状の退化した紐掛け部を持つ。同部外面には同心円状のカキ目を施す。286～301は石器ないし石製品である。286は流紋岩の石核で、1面に原礫面が残る。287は縦長剥片の周縁には使用痕である微細な剥離痕を持つ。288・289は流紋岩、290はサヌカイトの剥片である。これらは旧石器時代の遺物である。291～293は打製石鏃で、291・292は凹基無茎式石鏃、293未成品で、全体に調整刻線が粗い。石材は291がチャート、292は姫島産黒曜石、293はサヌカイトである。294～297は扁平打製石斧である。297は上下両端を欠失するが、全体に調整が粗く未製品の可能性もある。298・299は磨石で、298は上下両面、299は側縁に使用痕が残る。300は叩石で、下端部側縁に敲打痕が残る。301は砥石である。302は鉄製の刀子である。



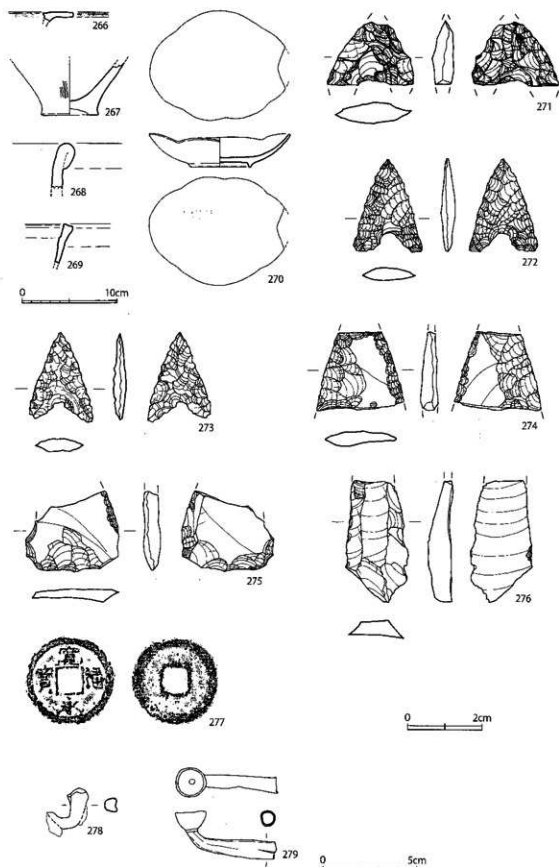
第3-79図 柱穴等出土遺物実測図(1/4)



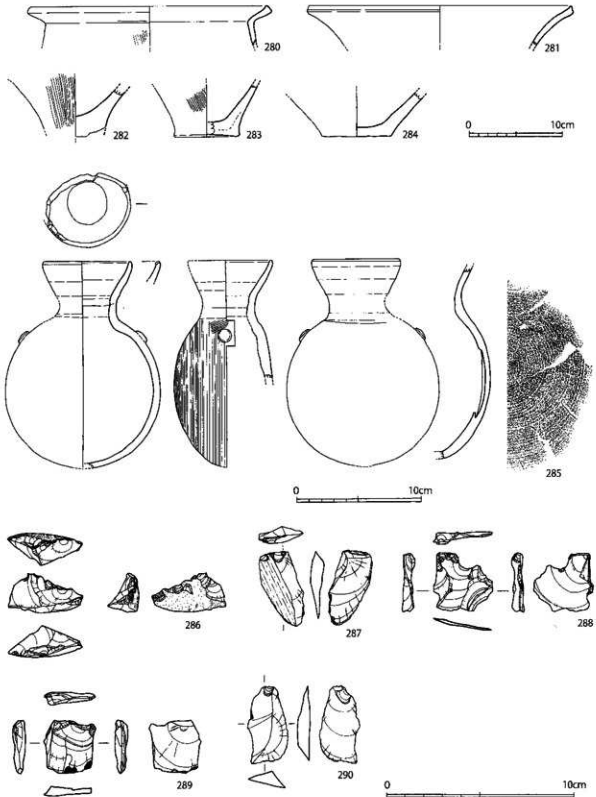
第3-80図 6・7次調査出土遺物実測図① (1/4・1/1)



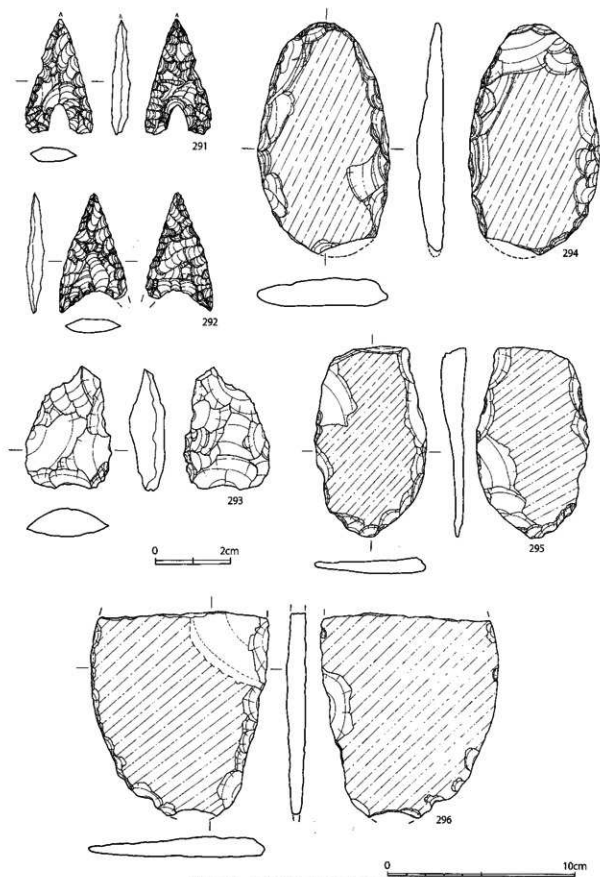
第3-81図 6・7次調査出土遺物実測図② (1/2・1/1)



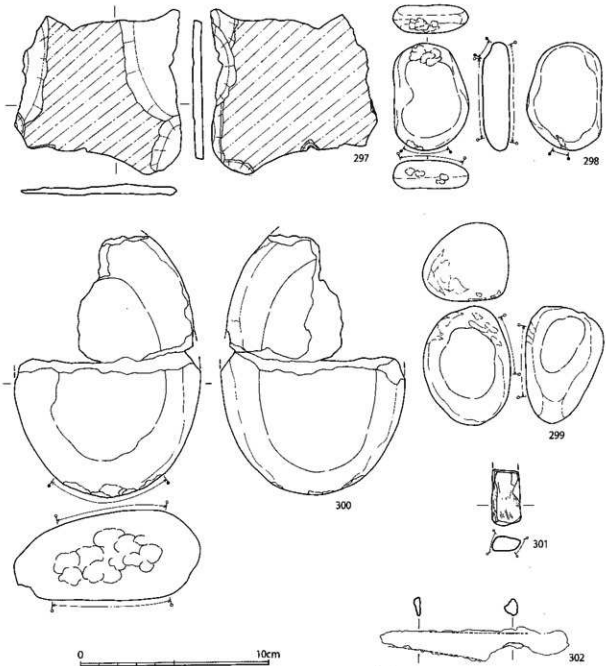
第3-82図 8-2次調査出土遺物実測図 (1/4・1/1・1/2)



第3-83図 9次調査出土遺物実測図① (1/4・1/3・1/2)



第3-84図 9次調査出土遺物実測図② (1/2)



第3-85図 9次調査出土遺物実測図③ (1/2)



### 第3節 第8次調査1区の成果

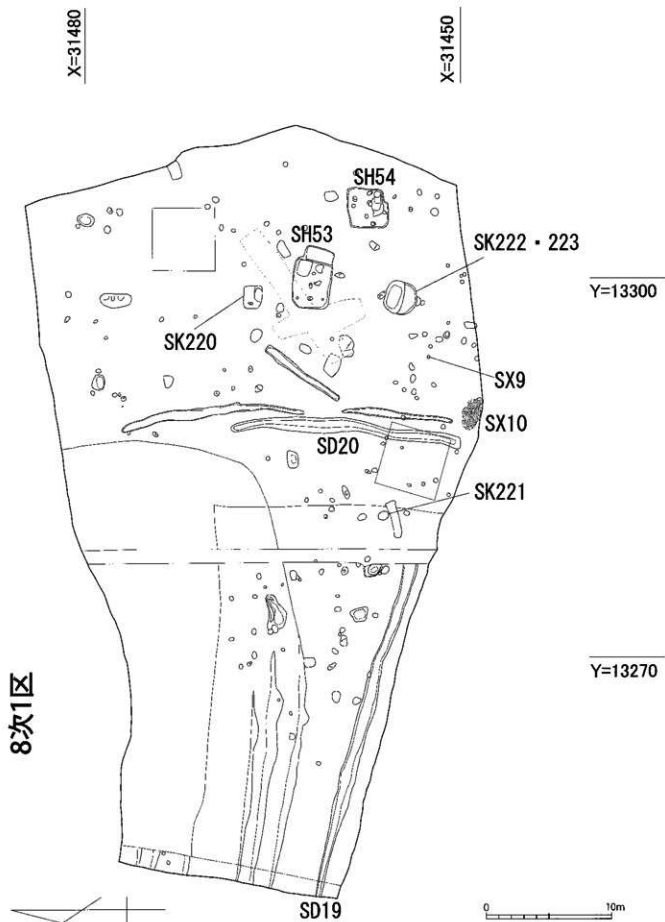
#### 1 調査区の基本層序

第8次調査1区は四日市遺跡がある台地の北縁部、北側に台形状に迫り出す緩斜面上にあり、第16次調査の約20m北西に位置する。調査地の南東部が最高所で標高356m前後を測り、ここから北になだらかに下降する緩斜面となっている。調査地の北端尾根上は標高352m前後で、調査地南端部とは4m程度の比高差がある。また西側はこの南北の尾根筋の斜面で傾斜がきつくなっている。このエリアではかつての畑地や植林地を造成した際の段状の痕跡や、時期不明の小規模な土坑やピットを確認した程度で、弥生時代の遺跡としては南北尾根上の緩斜面に展開する。表土除去後、調査区のはほぼ中央に南北方向のトレンチを設定し、基本土層の確認を行った。

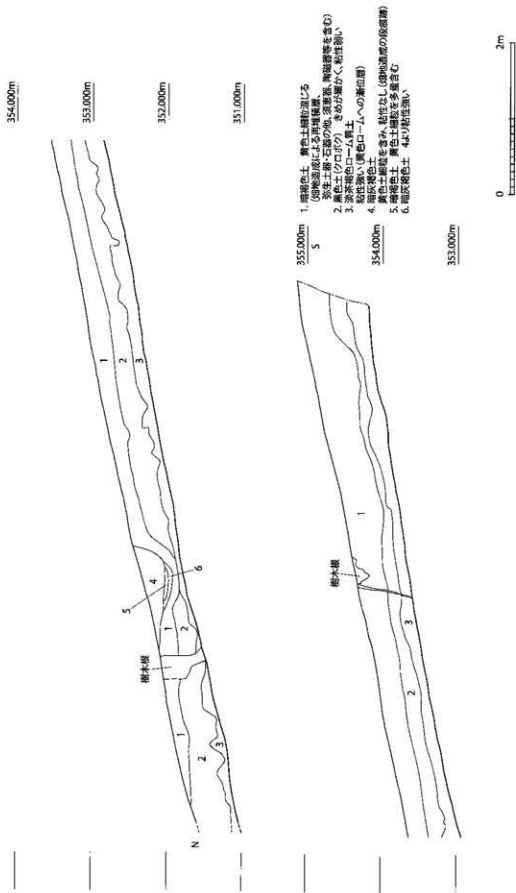
調査地の基本層序を第3-87図に示す。第1層は黄色ローム細粒を含む暗褐色土で、弥生土器の他に須恵器や陶磁器類を含む。戦後の畑地造成時に台地上から土砂を落とし込んだ二次堆積層と考えられる。第2層は黒褐色土のいわゆるクロボク層である。第3層は淡茶褐色を呈するローム質土で、黄色ローム層への漸位層である。この第3層は第2層のクロボク層が残る部分で認められ、表上下ですぐロームが現れる南北尾根上では黄色ローム(第4層)となる。遺構は主に第3層・第4層のローム質土上面で検出した。

#### 2 旧石器時代の調査

第8次調査1区においても、遺構検出面の調査完了後に旧石器時代の遺構・遺物を確認する目的で、5m×5mの調査グリッドを2箇所設定(第3-88図)し、人力で0.5mの掘り下げを行った。その結果、遺構は確認されず、遺物もまったく出土しなかった。



第3-86図 8-1次調査区平面図 (1/300)



第3-87図 四日市遺跡8-1次調査区土層断面

## 3 弥生時代の調査

弥生時代の遺構としては、竪穴建物2棟の他、数基の土坑やピット状遺構がある。また、SX9では2点の完形の石廬丁が上下に重ねたような状態で出土した。以下、主要な遺構や遺物の出土した遺構を中心に報告する。

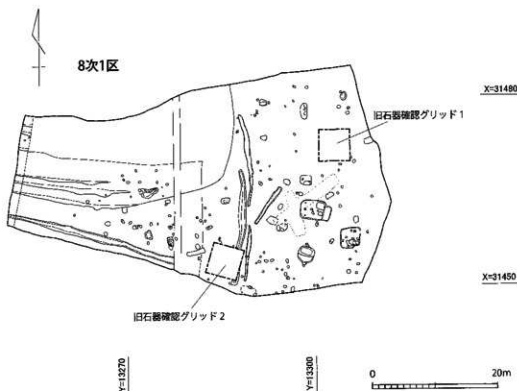
## (1) 竪穴建物

竪穴建物としてはS H53・S H54の2棟を検出した。

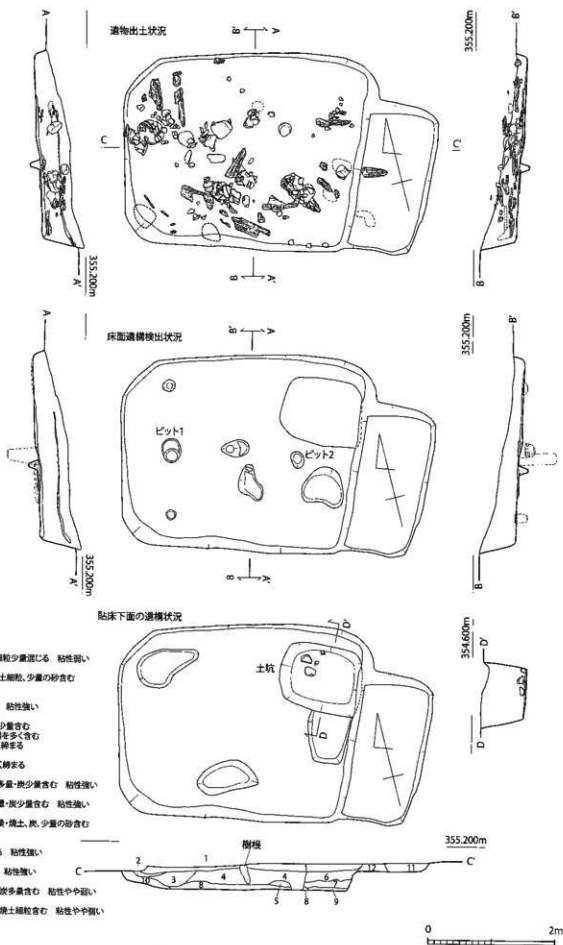
## S H53 (第3-89図)

第8次調査1区の東半部中央付近で検出した竪穴建物である。平面形状は隅丸長方形を呈し、東側には幅1.15m、深さ0.20m程度の長方形の張り出しを持つ。遺構の規模は東西4.96m、南北3.10m、深さ0.55mを測る。上部はかなり削平を受けており、南壁側は一定の深さを持つが、北半部は0.15m程度の深さしかない。内部からは多量の遺物とともに、炭化した部材が出土しており、焼失建物の可能性が高い。遺物は炭化材はほぼ満遍なく出土しているが、炭化材は南半部にやや多く認められる。また、張り出し部からの出土は少ない。床面には貼床を施しており、貼床上面からは4基のピット、3基の土坑を検出した。主柱穴は東西方向にあるピット1とピット2で、この2本の柱で上屋を支える構造をとる。北東端部側の土坑は長辺1.25m、短辺1.05mと規模が大きく、屋内に設けられた貯蔵穴等である可能性がある。また、貼床層を除去した段階で再度遺構検出を行ったところ、新たに3基の土坑を検出した。土坑は方形や不定形のものでいずれも浅い。

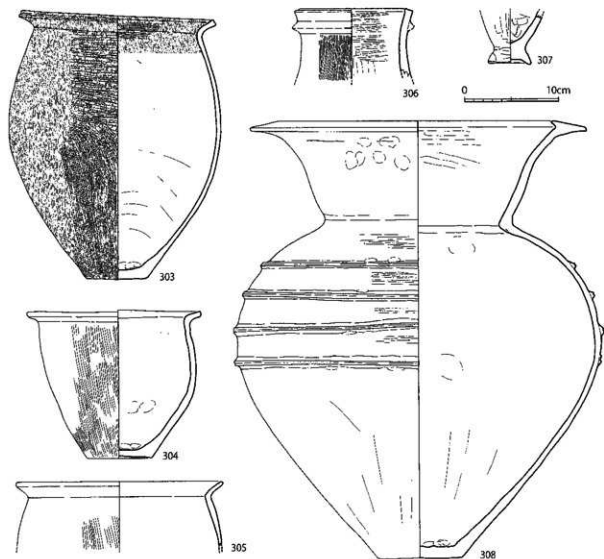
出土遺物は第3-90～92図に示した。303～309は弥生土器である。303～305は甕で、303は外面及び内面の肩部から口縁部にかけて赤色顔料を塗彩する。304は小型の甕である。306は甕で、口縁下に断面三角形の凸帯を1条巡らせる。307は小型品の底部である。308・309は鋤先状口縁の広口甕である。308は胴部には断面M字状の凸帯を4条巡らせる。309は貼床下の土坑から出土したもので、同部外面に断面M字状の凸帯を3条貼り付け、



第3-88図 8-1次旧石器確認グリッド位置 (1/600)



第3-89図 SH53実測図 (1/60)



第3-90図 S H53出土遺物実測図① (1/4)

凸帯間には横位の粗いヘラミガキを施す。310・311は円礫を素材とする石皿である。311は上端面が使用面で、磨痕と、敲打痕が顕著に残る。311は上下両面を使用し、両面とも平滑になっている。

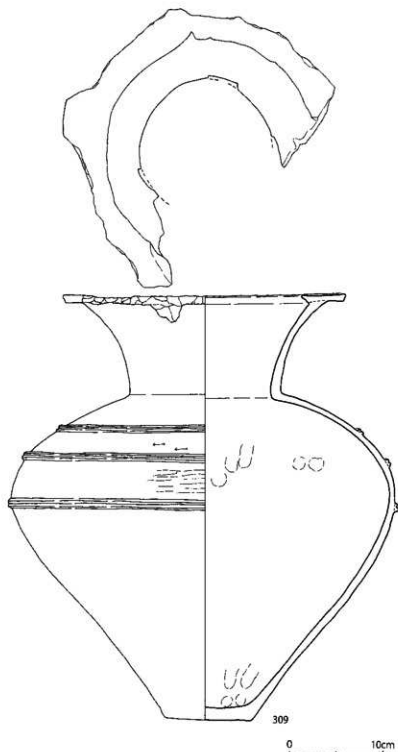
これらの出土遺物から、S H53は弥生時代中期後半に比定する。

#### S H54 (第3-93図)

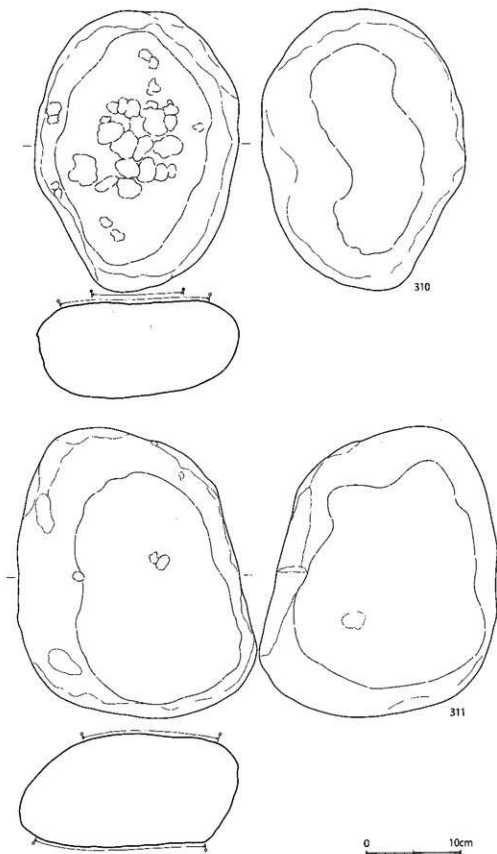
S H53の約24m南東で検出した竪穴建物である。全体的に後世の削平を受けており、検出した時点でほぼ床面が出ている状態で遺存状態は悪い。平面形状は隅丸方形形状であるが、南東隅部は少し折れて歪な形状をとる。東西3.17m、南北3.30m、深さ0.22mを測る。床面では8基のピットと土坑1基を検出しており、このうちのピット1とピット2が主柱穴となる、2本柱の構造と推定される。南壁際の土坑テラス部と、北壁側のピットの1基には焼土の分布が認められた。

出土遺物は第3-94図に示した。312～315は弥生土器である。312・313は甕で、312は口縁部が外反し、端部を上方に積み上げる。313は端部を丸く肥厚する。314は内傾する胴部の外面に断面M字状の凸帯を貼り付けるもので、壺である。315も壺で、胴部中央に断面台形状の凸帯を貼り付ける。

以上の出土遺物から、S H54は弥生時代中期後半に位置づける。

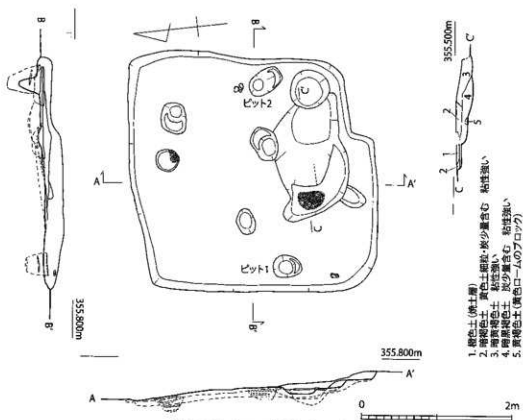


第3-91図 SH53出土遺物実測図② (1/4)



第3-92図 SH53出土遺物実測図③ (1/4)





第3-93図 SH54実測図 (1/50)

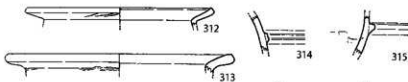
(2) 土坑

SK220 (第3-95図)

調査地の東半部中央付近、SH53の24m北側で検出した土坑である。平面形状は隅丸形状を呈し、長辺1.82m、短辺1.50m、深

さ0.81mを測る。黒褐色ないしは暗褐色を呈する埴土は4層確認でき、2・3層には黄色ロームの粒を含む。床面ではピット1基と、南東隅部で深い土坑1基を検出した。この土坑の規模は長辺1.03m、幅0.56m、深さ0.50mを測る。遺構の性格は明確ではないが、土坑の形状及び規模、内部の壁際に土坑を伴うことから、大きく削平された竈穴建物の名残である可能性も考えられる。

出土遺物は第3-96図に示した。いずれも弥生土器の底部片で、316は壺、317は甕である。弥生時代に属する遺構ではあるが、その詳細な時期までは明らかにできない。



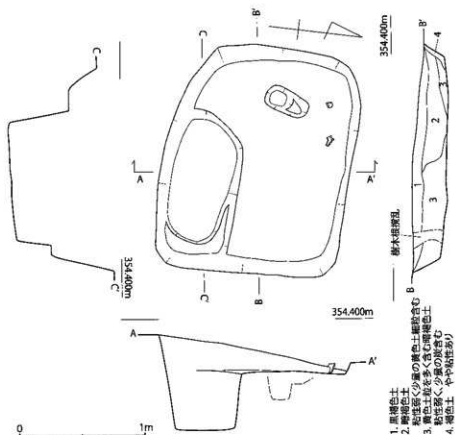
第3-94図 SH54出土遺物実測図 (1/4)

SK221 (第3-98図)

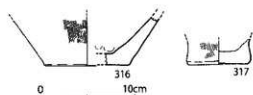
調査区の中央付近で検出した土坑である。平面形状は楕円形を呈し、長辺0.84m、短辺0.67m、深さ0.76mを測る。埴土は3層に分層でき、中央には黒褐色土が柱痕状に確認できる。遺物は土坑の中央部でややまとまって出土しているが、底面付近出土のものや上半部～検出面付近等、出土レベルにはばらつきがある。

出土遺物は第3-99図に示した。318～321はいずれも弥生土器である。318～320は甕で、318は口縁が外反し、端部を上方に積み上げる。319は外反口縁で、端部は丸く肥厚する。内面には赤色顔料を塗彩する。320は胴部下半の破片で、底部を欠失する。321は壺の底部である。

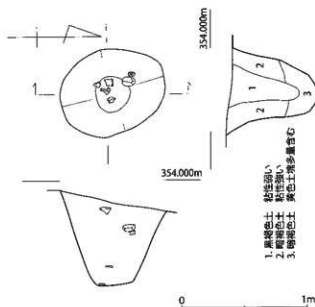
以上の遺物から、SK221は弥生時代中期後半に比定する。



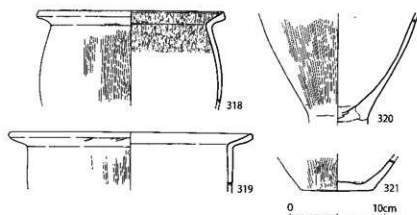
第3-95図 S K 220実測図 (1/30)



第3-96図 S K 220出土遺物実測図 (1/40)



第3-97図 S K 221実測図 (1/30)



第3-98図 S K 221出土遺物実測図 (1/4)

### S K 222 (第3-100図)

調査地の東半部南端付近、S H 53の約4.5m南で検出した土坑である。平面形状は略円形で、当初は1基の土坑として捉えていたが、土層断面の観察から2基の土坑が重複していることが判明した。従って、古い土坑を切って構築された土坑をS K 222A、切られた方の古い土坑をS K 222Bとして区分する。また、小児用甕棺をおさめたS K 223との前後関係も明らかになり、S K 222BがS K 223を切っていることも明らかになった。すなわち、遺構の構築順序としては、S K 223→S K 222B→S K 222Aということになる。遺構の規模は、S K 222Aは長辺2.58m、短辺1.48m、深さ1.26mを測る。S K 222Bは長辺2.55m、短辺1.08m以上、深さ0.44mを測る。S K 222Aの埋土は黒褐色土を主体とし、中層～底面にかけて黄色ロームブロックが混じる。S K 222Bの埋土は3層で、いずれも硬く締まる。S K 222Aの下位から上器がややまとまって出土した。

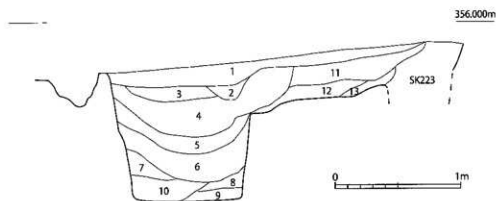
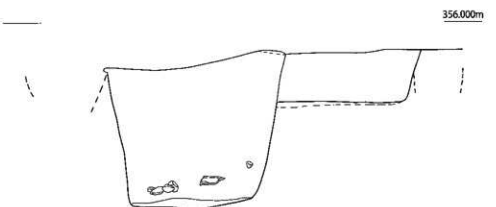
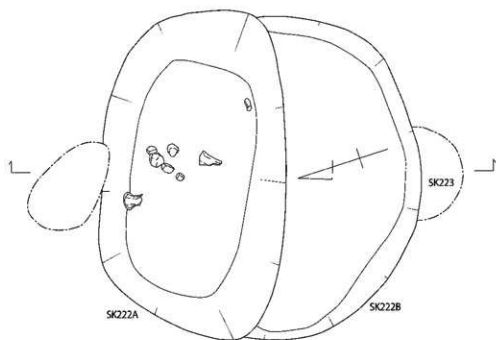
出土遺物は第3-101図に示した。322～324はいずれも弥生土器である。322は内傾する胴部片で、外面に断面M字状の凸帯を貼り付け、全体にヘラミガキを密に施す。323は甕の底部である。324は器台で、外面は縦位のハケ目、内面は指頭圧痕が顕著に残る。322は最上層の出土であり、323・324はS K 222Aからの出土である。

以上の出土遺物から、S K 222Aは弥生時代中期に比定する。S K 222BはS K 222Aより古い遺構であるが、明確な出土遺物はない。しかし、弥生時代中期後半のS K 223よりは新しいことは確実である。S K 222A・S K 222B・S K 223とも、あまり時間をおかず構築されたものと考えたい。

### S K 223 (第3-102図)

調査地の東半部南端付近で検出した、S K 222に切られる土坑である。埋土は地山の黄色ローム質土に似た黄褐色土で、全体に締まりがなく脆い。そのため平面プランの把握は困難を極めたが、土質の違いから把握することができた。平面形状は隅丸長方形を呈し、南辺の一部はピット状遺構の掘り込みを受ける。長辺1.53m、短辺1.14m以上、深さ0.99mを測る。内部には小児用甕棺を1点、底部を上にして倒置した状態で出土した。このことから、甕棺をおさめた土坑墓と判断される。

出土遺物は第3-103図に示した。325は甕棺として運搬されていたもので、弥生土器の甕である。口縁部は鬚先状を呈し、胴部は膨らまずに底部に至る。口縁直下及び胴部中央に断面M字状の凸体をそれぞれ貼り付ける。外面及び口縁部内端面には赤色顔料を塗彩する。底面は欠失する。図示できるものはこの1点だけであり、S K 223は弥生時代中期後半に位置づける。

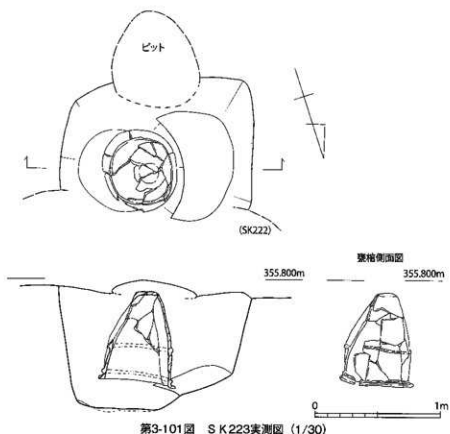


- SK222A土層
1. 黒褐色土 黄色土微細粒含む
  2. 淡黒褐色土 黄色土粒子多量含む
  3. 淡黒褐色土 黄色土粒子多量含む
  4. 淡黒褐色土 0.5~1cm大の黄色土ブロック少量含む
  5. 黒褐色土 0.5~3cm大の黄色土ブロック少量含む

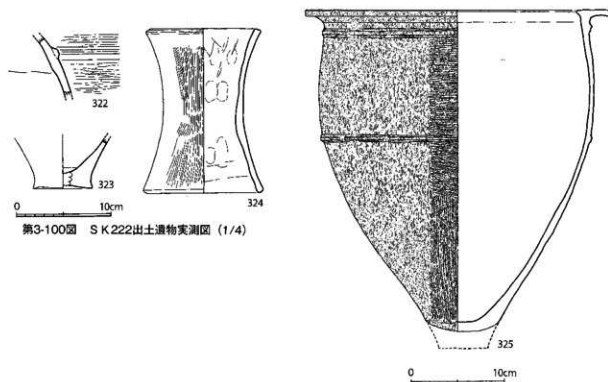
6. 黒褐色土 0.5~3cm大の黄色土ブロック多量含む
7. 暗黄褐色土
8. 黒褐色土 0.5~1cm大の黄色土ブロック少量含む
9. 黒褐色土 黄色土粒子含む
10. 黒褐色土 0.5~2cm大の黄色土ブロック少量含む

- SK222B土層
11. 暗褐色土 腐葉りあり
  12. 黒褐色土 腐葉りあり
  13. 淡黒褐色土 腐葉りあり

第3-99図 SK222実測図 (1/30)



第3-101図 S K 223実測図 (1/30)



第3-100図 S K 222出土遺物実測図 (1/4)

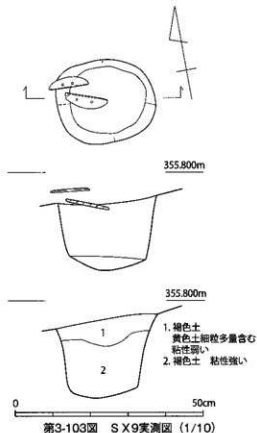
第3-102図 S K 223出土遺物実測図 (1/4)

## SX9 (第3-104図)

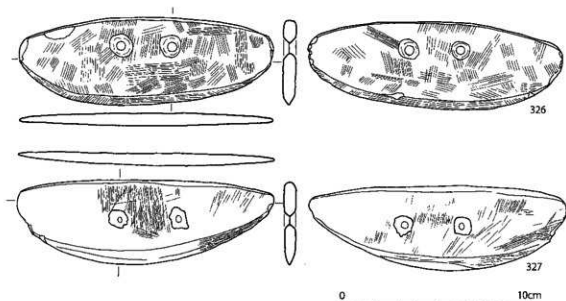
調査区南端部付近で検出した遺構である。ピット状遺構とその上端部付近で完形の石廬丁2点が出土している。最初に第3-105図326の石廬丁が出土したため、出土状況を記録しその取り上げを行った。その後、降雨後の調査時にはほぼ同一場所にもう1点石廬丁が埋まっていることが分かり、周辺を精査したところ、第3-105図327の完形の石廬丁とともに、ピット状遺構のプランが検出できた。最初の石廬丁を不用意に取り上げたため図上での確認しかできないが、本来はこの2点の石廬丁は重ねた状態で埋置していたものである可能性が高い。遺構の性格としては石廬丁のデポと考えられる。石廬丁の周囲で検出したピット状遺構は、隅丸方形の平面形状を呈し、長辺0.27m、短辺0.22m、深さ0.18mを測る。埋土は褐色土で、上層は粘性に乏しいのに対し、下層は粘性が強い。なお、石廬丁とピット状遺構の関係については必ずしも明確ではない。

出土遺物は第3-105図に示した。326・327はともに磨製石廬丁である。いずれも完形品で、石材は326は緑色を呈する片岩、327はアズキ色を呈する輝緑凝灰岩である。いずれも中央に2箇所の穿孔を持つ。

以上の遺物から、弥生時代の遺構であるが、土器の出土がなく細分時期までは明らかにできない。



第3-103図 SX9実測図 (1/10)



第3-104図 SX9出土遺物実測図 (1/2)

4 近世以降の遺構

(1) 溝

SD19 (第3-105図)

調査区の南西部で検出した、東西方向の溝である。溝の両端部は東はトレンチで失われ、西は調査区外に続くため全体規模は明らかにできないが、長さ27.38m以上、幅は最大で1.32m、深さ0.50m程度を測る。溝の中央付近、図中のB-B'ライン、C-C'ラインあたりでは、溝の北端ラインが著しく低く、畑地造成に伴い段状に削り込んだものが溝状に残ったものと判断される。

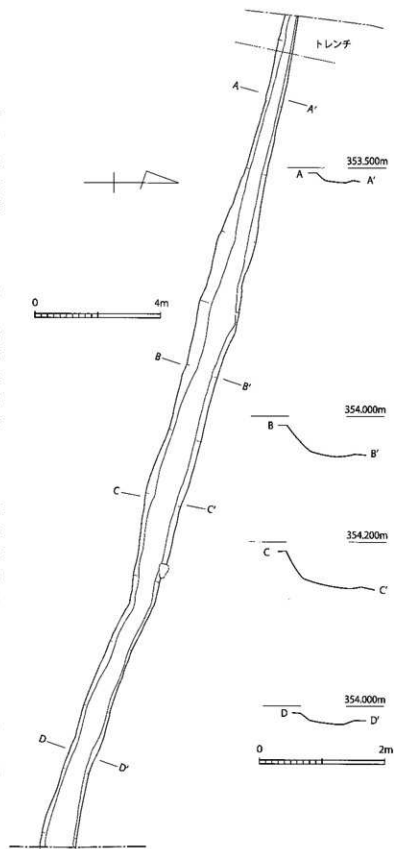
出土遺物は第3-106図に示した。328は弥生土器の鉢で、口縁部はやや内湾し、端部には面を持つ。図示できる遺物は以上であるが、遺構の性格から畑地に伴う溝と考えられ、この弥生土器が年代を示すものではない。

SD20 (第3-107図)

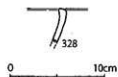
調査区の中央やや西寄り、畑地造成による段状の落ち込みに沿うように検出した、南北方向に延びる溝状遺構である。長さ18.37m、幅は最大で1.20m、深さ0.19mを測る。溝の東肩部は掘り込みが明瞭であるが、西側ラインはほぼフラットである。このことから溝というより、畑地造成に伴う段状の落ち込みで、端部を深く掘り込んだことから溝状に残ったものと考えられる。

出土遺物は第3-108図に示した。329は磁器の鉢である。頸部に屈曲し、口縁部は内湾しながら立ち上がる。330は陶器の鉢で、329と同様に頸部に屈曲するが、口縁部は直線的に外に開く。

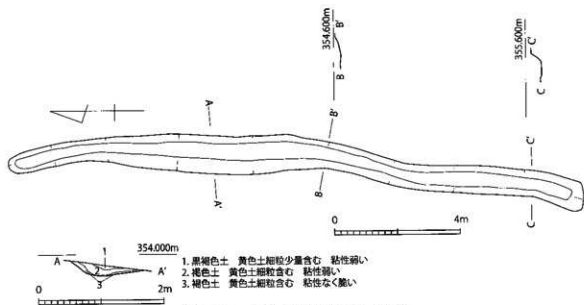
これらの出土遺物から、近世以降の遺構と判断される。



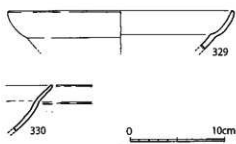
第3-105図 SD19実測図 (1/120・1/60)



第3-106図 SD19出土遺物実測図 (1/4)



第3-107図 S D20実測図 (1/120・1/60)



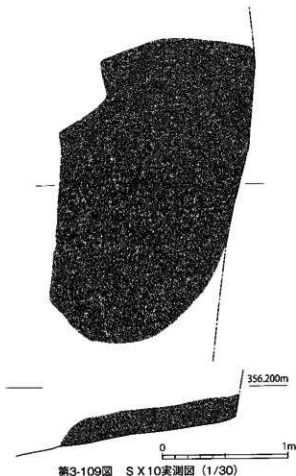
第3-108図 S D20出土遺物実測図 (1/4)

## (2) その他の遺構

## SX10 (第3-109図)

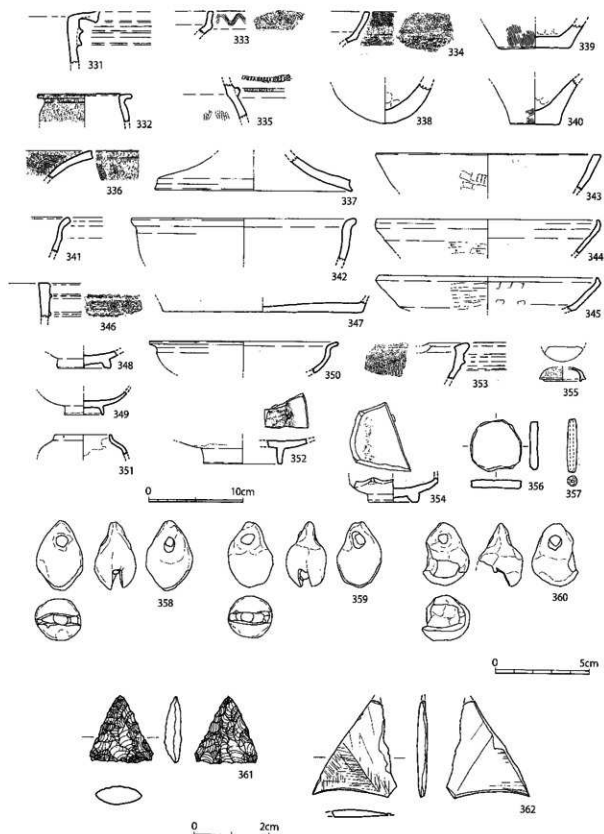
調査区中央の南端部で検出した遺物集中箇所である。堆積範囲は東西2.46m、南北1.50m以上、厚さ0.19mを測る。遺物は弥生土器の他、近世以降の陶磁器や土鈴等がまぎらまぎら出土している。弥生土器は小さく破砕された状態のものが多く、また破片を含めて土鈴が比較的多く認められた。こうした状態から、8-1次調査区より高所平坦部での農地造成の際に出土した不要な土器片等を、下の斜面に捨てたことで形成された二次堆積であると考えられる。

出土遺物は第3-110・111図に示した。331～340は弥生土器である。331は甕で、口縁は外反し、端部は三角形に肥厚する。口縁下の外面には幅広の断面M字状の凸帯を貼り付ける。332は小型の甕で、外面及び口縁部内端面に赤色顔料を塗彩する。333・334は複合口縁となる甕で、333は外面に櫛歯状工具による波状文を施す。335は甕の肩部で、断面台形状の刻み日凸帯を貼り付ける。336・337は高坏で、336は内外面ともに赤色顔料を塗彩する。338～340は底部で、338は後期の壺形土器、339・340は甕である。341・342は土師器の鉢で、口縁

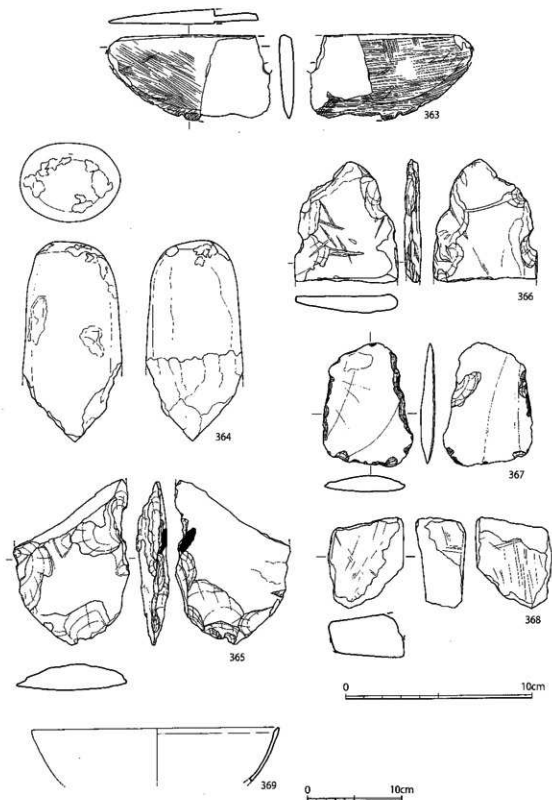


第3-109図 SX10実測図 (1/30)





第3-110図 S X 10出土遺物実測図① (1/4・1/2・1/1)



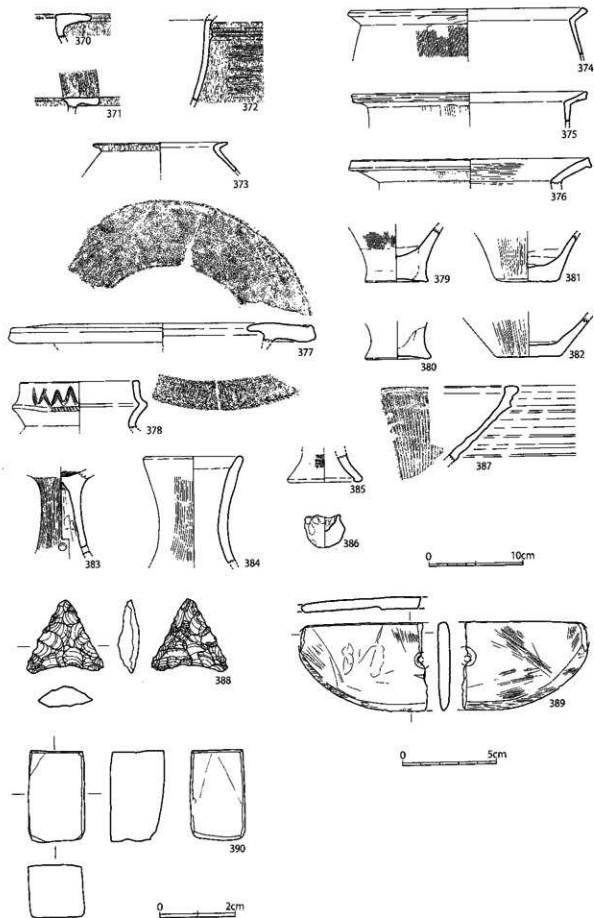
第3-111図 S X10出土遺物実測図② (1/2・1/4)

は外反し端部は丸い。343～345は鉢形の土器で、焼成は343・344が瓦質、345は土師質である。346は瓦質土器の火鉢で、外面の凸帯間に菊花状のスタンプ文を施す。347は瓦質土器の鉢の底部である。348～355は陶磁器類である。348・349は陶器碗の底部、350・352は鉢、351は壺、353は摺鉢である、354は陶器の香炉で、見込みに墨書が認められるが記載内容は判読できない。355は磁器の合子蓋である。356は弥生土器の破片の周縁を研磨した加工円盤、357は土師質焼成の管状土錘である。358～360は土鈴で、358・359は内部に土玉を持つ。361は正三角形形状を呈する打製石鏃で、黒色を呈する阿蘇系の黒曜石を素材とする。362は磨製石鏃である、363は磨製石廬丁で、輝緑凝灰岩を素材とする。364は磨製石斧の基部で、先端部は欠失する。365～367は扁平打製石斧で、367は節理面で割れた扁平石材の周縁だけを剥離する。368は砥石である。369は鉄製の鍋であるが、その年代は明らかにできない。

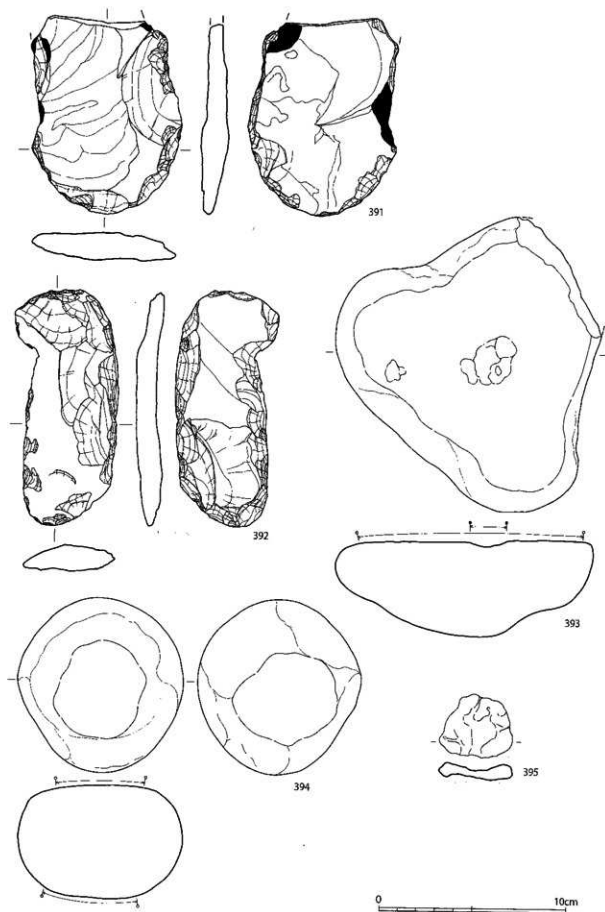
以上のように、SX10からは弥生土器を始め、中世、近世、近代以降のものも含んでいる。調査時の所見では土器が比較的細かく破砕されていることから、農地造成地に出土した不要な土器等を、台地上から下の斜面に廃棄したものと考えられる。出土した弥生土器には333・334・338等、弥生時代後期のものも含んでいる。第8次調査1区は弥生時代中期の遺構が展開し、弥生時代後期の遺構は認められないが、地形的に上位にある第16次調査では弥生時代後期の遺構・遺物も一定量確認されている。こうした点も上記の解釈の裏付けとなろう。遺構の形成時期は明確ではないが、近代以降に位置付ける。

## 5 調査区出土遺物

第3-112・113図は第8次調査1区の出土遺物である。370～385は弥生土器である。370～372は赤色顔料を塗彩する甕で、口縁部は大きく拡張し、372は頸部に断面M字状の凸帯を施す。373は壺で、外面頸部に赤色顔料を塗彩する。374～376は甕で、口縁は外反し端部は肥厚する。377は筒先状口縁となる甕で、口縁上端部に木葉状の線刻を施す。378は複合口縁甕で、外面に櫛歯状工具による波状文を施す。379～382は底部で、379～381は壺、382は壺であろう。383は高坏、384は器台、385は脚付鉢である。386はミニチュア土器で、外面には整形の指頭圧痕が顕著に残る。387は陶器の摺鉢である。388は打製石鏃で、基部はわずかに凹む。石材はチャートである。389は磨製石廬丁で、両面から穿孔する紐掛けの穴を持つ。390は砥石である。391・392は扁平打製石斧である。393は石皿で、上端面の一部に使用による凹みが認められる。394は磨石で、上下両面が使用により平滑になっている。395は扁平な鉄製品であるが、その用途は不明である。



第3-112図 8-1次調査区出土遺物実測図① (1/4・1/2・1/1)



第3-113図 8-1次調査区出土遺物実測図② (1/2)

## 第4節 第9次調査4区の調査

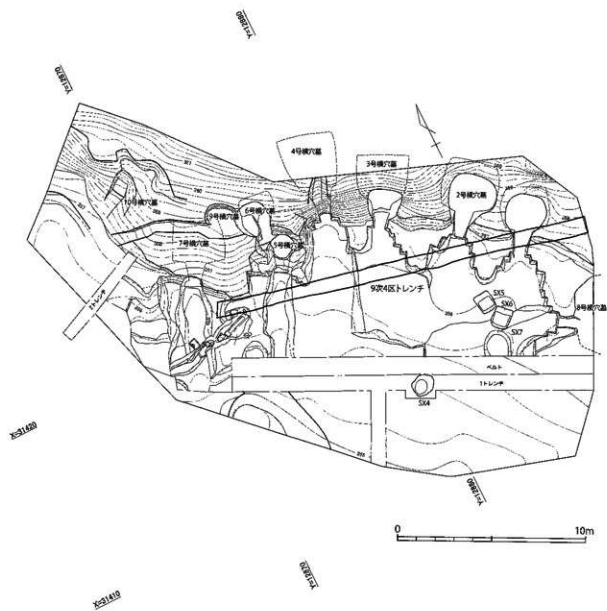
第9次調査4区は、横穴墓域においてその基数を把握する目的で設定したトレンチである(第3-114図)。調査では墓道となる岩盤を掘り抜いた溝状遺構のプランを確認したところまでを人力で掘り下げ、それ以下の掘り下げは平成23年度の第10次調査で行った。なお、この横穴墓域の本調査成果については、既に『四日市遺跡2』において報告済みである。第9次調査4区で出土した遺物も、本来はこれら横穴墓に帰属するものであり、本調査と合わせて報告すべきものであったが、遺漏していたため改めて本節で報告する。

第3-115図396～404は須恵器である。396・397は坏蓋、398は坏身である。399～401は高坏で、399の坏部は頸部で屈曲し、口縁部は短く外反する。401は脚部にヘラ記号を施す。402は瓶形で、外面にカキ目を施す。403は提瓶、404は壺であろう。405～408は土師器で、いずれも高坏である。408は瓦質土器で、口縁部内面に突起が付くことから煤炉類であろう。409は組合せ式五輪塔の空風輪で、石材は凝灰岩である。以上の遺物は、第10次調査における第5号・7号横穴墓の前庭部に該当する場所からの出土である。

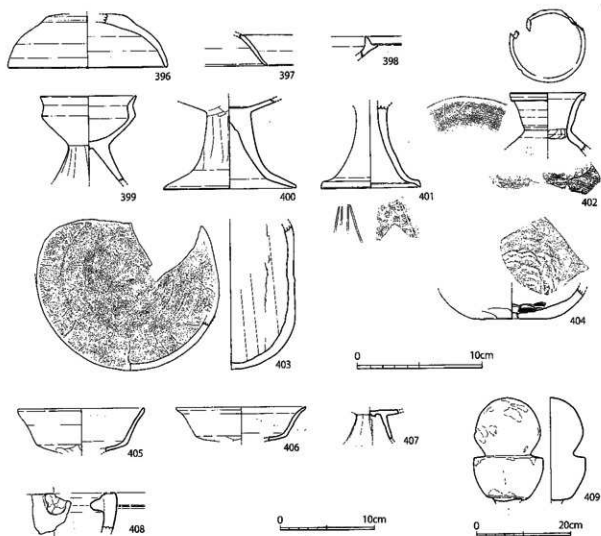
第3-116図410～第3-117図428は須恵器である。410～415は須恵器坏蓋で、411は口縁部の一部及び天井部に意図的な打欠きが認められる。416～420は坏身である。421～423は高坏で、421は脚部の裾に数箇所、故意の打欠きが認められる。424～426は甕で、424は頸部外面の沈線区面に櫛波状文を施す。427・428は提瓶で、いずれも口縁部に意図的に小さな打欠きを加える。口縁部外面には427は「ハ」字状、428は直線状のヘラ記号が認められる。429・430は土師器の高坏で、429は坏部、430は脚部である。以上の遺物は第10次調査における第3号・第4号横穴の前庭部に該当する場所からの出土である。

第3-118図431～441は須恵器である。431～435は坏蓋で、431は天井部にヘラ記号を施す。436・437は坏身である。438は天井部に摘みが付く有蓋高坏の蓋で、天井部内面に当て具痕が残る。439は高坏である。440は小型の蓋で、短頸壺の蓋であろう。441は甕で、外面に横位のカキ目を施す。442は土師器の坏である。443・444は陶器で、443は口縁部が片口状となる鉢、444は甕ないし壺の底部で、底面には回転糸切り痕が残る。445は石製の紡錘車で、断面台形状を呈し、中央に穿孔を施す。石材は蛇紋岩である。以上の遺物は、第10次調査における第1号・第2号横穴の前庭部に該当する場所からの出土である。

第3-119図は出土地点を特定できないものである。446は須恵器の甕で頸部以下を欠く。447は須恵器の高坏で、坏部を欠く。脚部には工具ナデの痕跡が明瞭に残る。448・449は須恵器の提瓶で、同一個体と思われる肩部と底部付近の破片である。448は肩部に紐掛け突起が付くが、痕跡器官化し円形浮文状となっている。

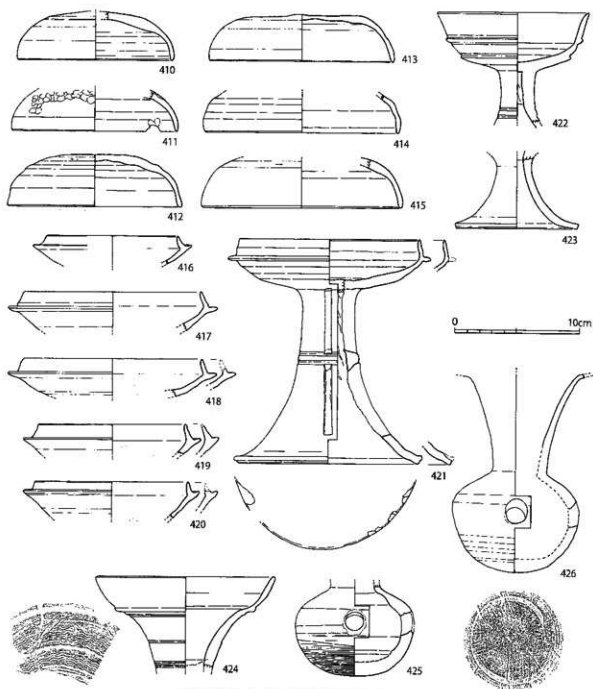


第3-114図 9-4区調査位置図 (1/200)

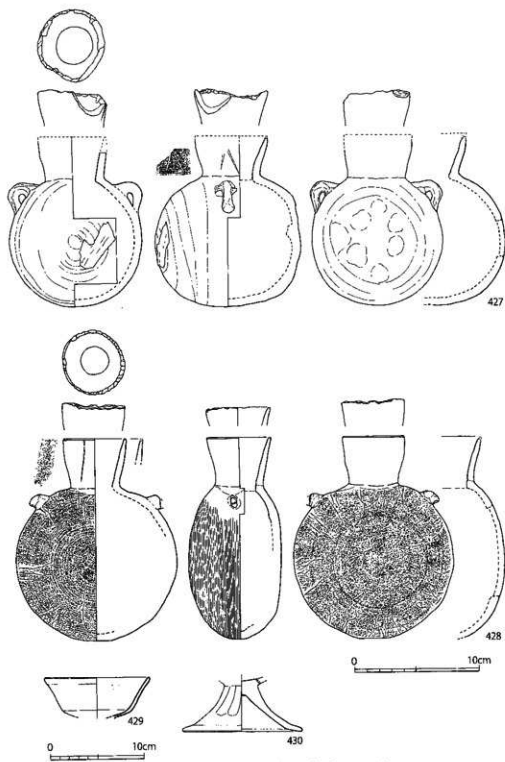


第3-115図 9-4区出土遺物実測図① (1/3・1/4・1/8)

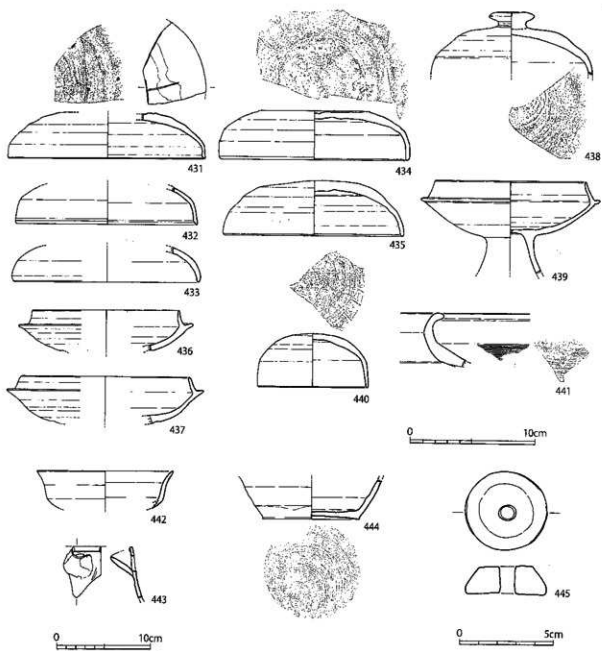




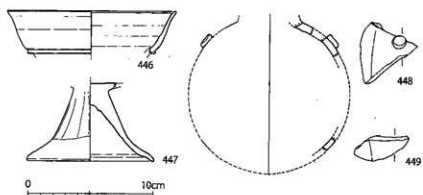
第3-116図 9-4区出土遺物実測図② (1/3)



第3-117図 9-4区出土遺物実測図③ (1/3・1/4)



第3-118図 9-4区出土遺物実測図④ (1/3・1/4・1/2)

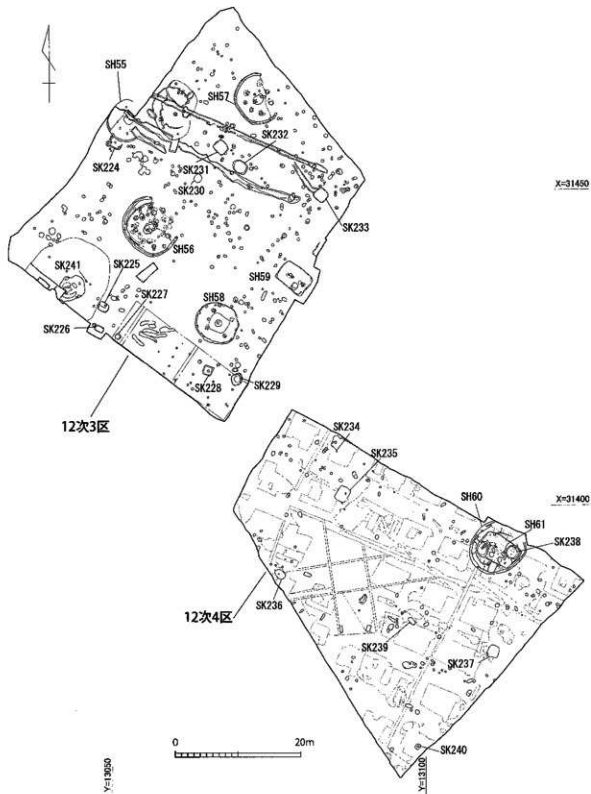


第3-119図 9-4区出土遺物実測図⑤ (1/3)

## 第4章 第12次調査

## 1 はじめに

第12次調査区は台地中央部に位置する。発掘調査は、平成25年5月13日～平成26年1月21日にかけて実施した。調査区のうち区域1と区域2は既に報告済（『四日市遺跡』2 2019）のため、今回は第6～9次調査区の東側に位置する区域3と区域4について報告する。



第4-1図 第12次調査区区域3・区域4遺構配置図 (1/600)

## 2 旧石器時代

## (1) 基本層序

本遺跡の基本層序は、Ⅰ層：表土層、Ⅱ層：黒色土、Ⅲ層：アカホヤ層、Ⅳ層：暗黒褐色土、Ⅴ層：暗黄褐色土、Ⅵ層：黄褐色土となっている。Ⅱ層は遺跡が展開する台地全体にみられるが、耕作等による削平が著しい一部の箇所においては全く残存しない。Ⅱ層の上層には、弥生時代以降の遺物が散発的に包含されている。下層は縄文時代前期～晩期に相当するものと思われるが、本遺跡ではこの時期のまとまった遺物が出土する包含層は確認されておらず、土器や石器が極めて微量出土している。弥生・古墳時代の遺構は、Ⅱ層上層から掘り込まれているものと考えられる。Ⅲ層は台地上の地点により堆積状況が大きく異なる。台地上の平坦面では、総じて希薄で堆積も薄い。そのためⅢ層が単純層として層を形跡することはなく、Ⅱ層中にブロック状に散在する感じである。これに対し斜面部では比較的厚い堆積が確認できる箇所があり、ごく希に層状を早する場合もある。Ⅳ層は縄文時代早期に相当する層で、Ⅱ層にちがいの色調を呈するが、Ⅱ層に比べやや茶色味を帯び土がしまる。Ⅳ層の下は漸移層的なⅤ層を経てⅥ層となる。

旧石器時代に相当するⅥ層は上部が耕作等で削平されている箇所もみられるが、台地全体で確認できる。地点により異なるが、Ⅵ層上面から0.5～1.0m下がると厚さ0.1～0.2mの暗褐色を呈する黒色帯がみられる。本遺跡において、旧石器時代遺物はⅥ層上層から出土することが多い。しかし、包含層が確認できるのは台地上に限られた箇所、小規模な包含層が点在する状況である。

## (2) 出土遺物

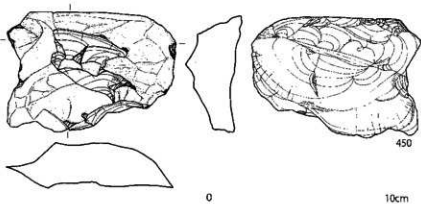
第12次調査区区域3で、包含層が確認された。包含層は、第12次調査区区域3の最も高い箇所、北下りの斜面を上がりきった平坦面にあたる。この付近は削平が著しいため、既にⅡ層～Ⅴ層が失われており、Ⅰ層(表土層)下がⅥ層となっている。さらに、Ⅵ層上層についても削平が及んでいるため、本来の包含層の多くが失われていると思われる。

遺物(第4-2、4-3図)のうち、450のみがⅥ層上層から出土した。しかし、周辺に調査区を設定し精査したにもかかわらず、他に出土遺物はなかった。よって、出土した遺物はわずかに残存した包含層遺物であったと推測され、周辺の表土層や弥生時代遺構から出土する旧石器時代遺物も極めて少量であることから、当初の包含層は小規模であったと思われる。

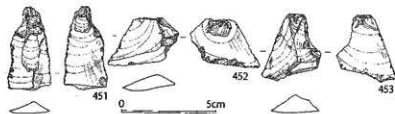
450は西北九州産黒曜石の石核である。片面に自然面を残すもので、長さ8.8cm、幅6.4cm、重量148.2gである。

451～453は西北九州産黒曜石の剥片である。いずれも450が出土した地点に近接する場所から出土したもので、451、452は第12次調査区区域3の遺構検出時に出土した。

451は縦長の剥片、452は不定形気味の剥片である。453は表採品で、不定形気味の剥片である。これらの一部には、二次的な剥離が認められる。



第4-2図 旧石器時代出土遺物① (1/2)

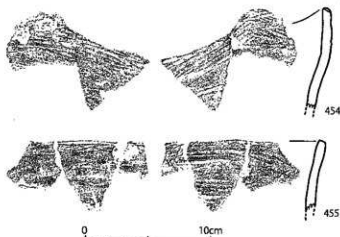


第4-3図 旧石器時代出土遺物② (1/2)

## 3 縄文時代

## (1) 土器

土器(第44図)は、第12次調査区区域3のⅡ層(黒色土)の上層から出土したものである。土器が出土した黒色土は、地形の起伏に伴う凹地に堆積したもので、土層堆積状況を確認するために調査区を設定した際に図示した土器が出土した。その後、凹地全体の掘り下げを試みたが、他の遺物は全く出土しなかった。454は波頂部をもつ口縁部で、体部から口縁部にむかい開き気味で、内外面とも横方向の条痕調整である。455は波頂部がみられないが、調整等が454と酷似するため同一個体の可能性がある。これらは、縄文時代後期初～前葉に比定されるものである。



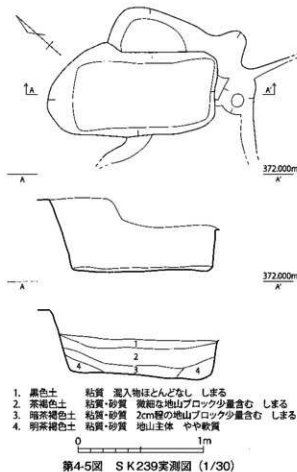
第4-4図 縄文時代出土遺物 (1/3)

## (2) 陥穴

陥穴と思われる遺構からは、遺物の出土が皆無いため、厳密な時期を確定するのは難しい。ただ、遺構埋土のしまりが顕著で、弥生時代以降の遺構埋土と異なる点を重視し、ここでは縄文時代の遺構として報告する。

## S K 239

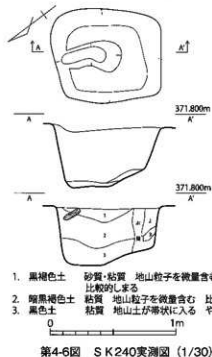
S K 239(第45図)は長方形を呈し、その規模は長さ1.3m、幅0.6～0.75mである。深さは最深部で検出面から0.6mで、壁は直立気味である。床面は平坦で、床面上には杭を打ち込んだ痕跡はみられない。埋土は下層ほど地山土を含むが、各層ともよくしまる。



第4-5図 S K 239実測図 (1/30)

## S K 240

S K 240(第46図)は、一辺0.7mの方形を呈し、深さは0.3～0.5mである。床面に浅い不定形の掘込みがみられる。しまった埋土を呈する。



第4-6図 S K 240実測図 (1/30)

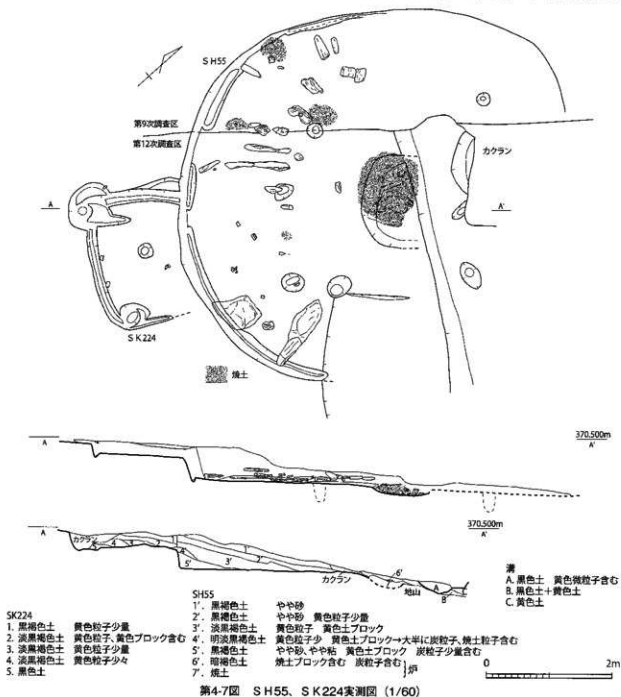
4 弥生時代

(1) 竪穴建物

SH55

SH55 (第4-7図) は平面形が円形を呈するもので、南から北に下がる傾斜地に位置する。貯蔵穴のSK224と重複しており、SK224を切る。

規模は、径約6.0mで、深さは現況で最大0.5mである。主柱穴は4本で、中央部に焼土が厚く堆積する楕円形あるいは円形と思われる土坑がある。この土坑は溝に切られるため全形は不明だが、東西の長さが約1.5m、深さ0.2mである。土坑内の焼土は全体にみられるのではないが、底面から中程にかけ厚く堆積していることから、本土坑が炉であった可能性が高い。また、南～西側の壁際には、幅0.1～0.2mの溝が断続的に巡る。南～西側は斜面の上側にあたることから、壁がより高くなるため、壁崩落防止の補強が必要となり、溝はその関連施設か。



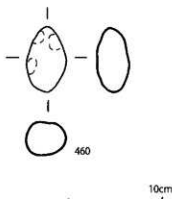


第4-8図 S H55出土遺物① (1/4)

堅穴建物内には、小規模な焼土と炭化材が数カ所確認された。炭化材は壁際から中央に向かい放射状にみられる。これらは床面近くや少し浮いた状況であることから、堅穴建物廃棄時の片付けに伴うものと考えられる。遺物は小破片のものが少数、床面から浮いた状態で出土している。

出土遺物（第4-8、4-9図）には土器と土製品がある。456～458は甕の口縁部である。456、457はくの字状に強く折れるもので、端部が上方につまみ上げられる。458は鋸先状口縁を呈するもので、外面頸部下に断面M字形の低い突帯が付される。外面及び口縁部上面には赤色顔料が塗布されている。459は比較的薄底の底部である。

460は長さ34cmの土製投擲である。両端がやや尖り気味である。本堅穴建物の時期は、弥生時代中期後半に位置づけられる。



第4-9図 S H55出土遺物② (1/2)

#### S H56

S H56（第4-10図）は、平面形が円形を呈するものである。南から北に下がる傾斜地に位置するため、斜面の下方にあたる北半分の壁や床面については残存状態が悪い。

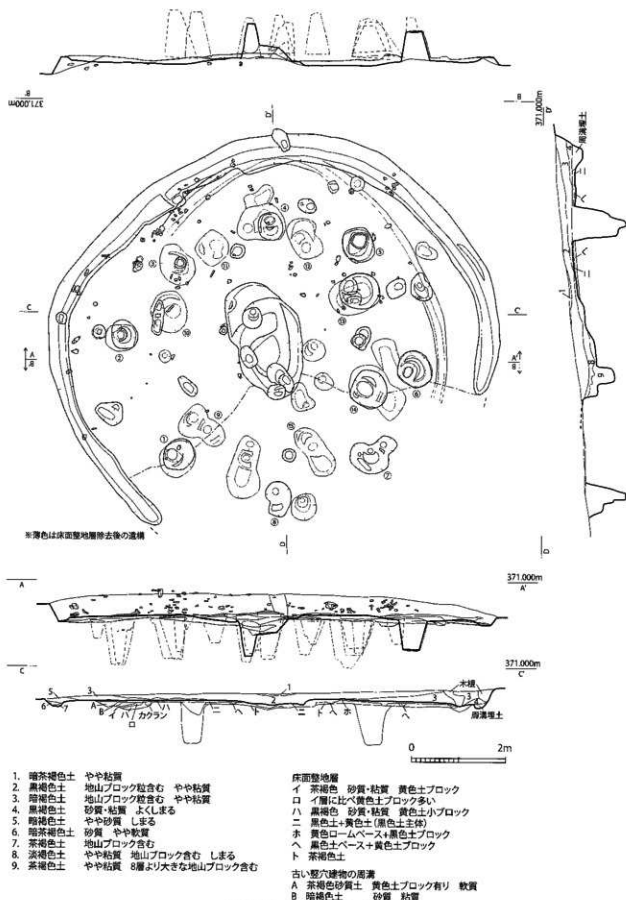
規模は径約7.0mで、深さは残存状態が最も良好な箇所約0.3mである。主柱穴は8本（①～⑧）で、壁から約1.2m内側に円形に配されている。主柱穴間の長さは、主柱穴①・②間と主柱穴⑤・⑥間が心々で2.8mであるのに対し、他の間は2.0～2.2mである。したがって、主柱穴①・③間あるいは主柱穴⑤・⑦間のどちらかの方向に入口施設が存在するものと想定される。中央には南北に長軸を有する楕円形の土坑がある。その規模は長さ1.6m、幅1.1m、深さ0.3mである。土坑の南北の端には柱穴が1本ずつみられる。土坑内からは炭が微量出土したが、焼土はまったくみられないことから、炉に係わるものであるかは不明である。この中央土坑の主軸は、先の主柱穴①・②間、主柱穴⑤・⑥間と平行する。中央土坑両端の柱穴も併せ、家屋構造復元的好資料となる。また、壁際には幅0.2～0.4m、深さ0.05mのやや幅広い溝を巡らせる。本来は壁に沿い全周していたものと推測される。遺構内からは土器や石器が出土したが、ほとんどが小破片で、床面から浮いた状態で出土している。

実測・写真撮影後、堅穴南半分に残る床面整地層を除去した。その結果、主柱穴の堀方や建物拡張を確認した。

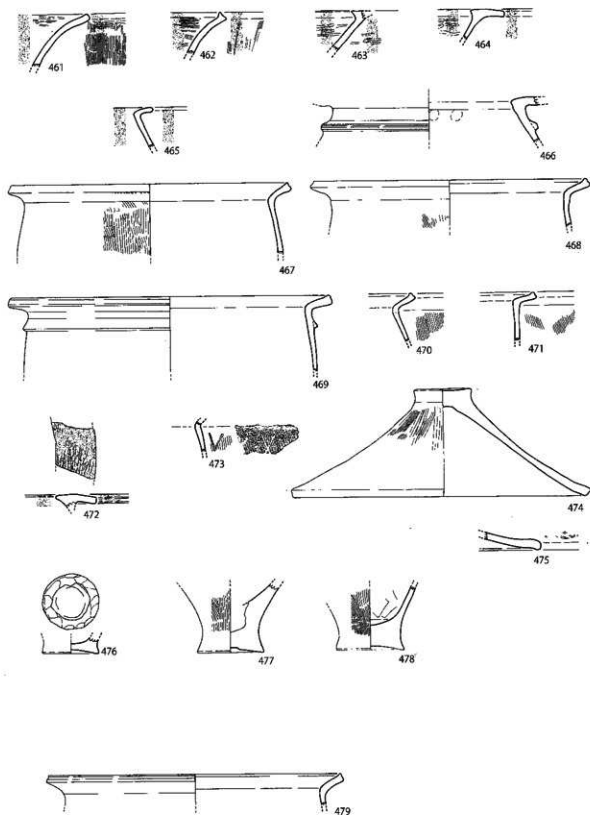
主柱穴の堀方等について、主柱穴①、②は床面上の抜き跡よりもやや大きめである。主柱穴②については、床面から0.3mの深さで径0.2mの柱痕を確認した。抜き取りの際、折り取るかたちとなり柱の根元が残ったものと思われる。主柱穴③は床面上では径0.2m、深さ0.5mの柱穴が確認されたのみである。しかし堀方は径0.6m、深さ0.6mである。この柱穴については、堅穴建物廃棄時に周囲を掘り込むことなく引き抜かれたか、腐朽のため折り取られたと考えられる。他の主柱穴が抜き取り跡を伴うとは大きく異なる。主柱穴④は柱の掘え方が2箇所みられることから、1回建て替えを行っていることが分かる。主柱穴⑤、⑥は床面上で確認した抜き跡と同形である。これらは、抜き跡が堀方よりも大きいもので、当初の堀方が残存しないものと考えられる。主柱穴⑤については底面に径約0.4mの平たい礎盤石がみられる。主柱穴⑦、⑧の周辺は、床面整地層が完全に削平されている。⑦、⑧については、検出したのが当初の堀方であるのか、抜き跡に相当するのかわからないまま掘り下げを行った。主柱穴⑦には、柱の掘え方が2箇所みられることから、柱の建て替えを1回行っていると思われる。

床面整地層除去後に判明した古い堅穴は、平面形が円形を呈するものと思われる。南側から西側にかけて幅0.2





第4-10図 SH56実測図 (1/80)



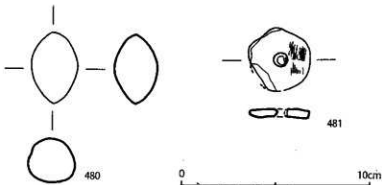
第4-11図 SH56出土遺物① (1/4)

～0.3m、深さ0.05mの弧状を呈する周溝が残存するのを確認した。残存しない箇所もあるが、この周溝から古い竪穴建物の規模は径約5.5mと推定される。周溝は南から南西にかけての部分で拡張後の竪穴建物の周溝と重複していることから、新しい竪穴建物は古い竪穴建物の西側、北側、東側を拡張したことが分かる。支柱穴は7本(⑨～⑰)と思われ、壁から約0.8mの位置に円形に配されているようである。支柱穴間の長さは、心々で支柱穴⑨・⑩間が2.3～2.6mとやや広く、他は1.6～2.2mである。支柱穴間⑨・⑩の方向に入口施設があったものと推測される。中央の土坑については特に確認されていないので、新しい竪穴の中央土坑の位置と重なっているものと推測される。新しい竪穴の中央土坑の主軸は、支柱穴間で最も長さの長かった支柱穴⑨・⑩間と軸が平行する。

出土遺物(第4-11～4-14図)には、土器、石器、土製品がある。これらのうち、468は床面整地層中から、他は埋土中から出土したものである。

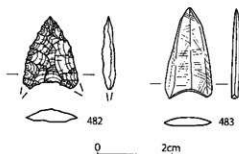
461～466は壺と思われるもので、461～465は内外面に赤色顔料が塗布されている。461～464は頸部から大きく外反し口縁部にいたるもので、463、464は鋤先状の口縁である。465、466は体部上半が内傾し、口縁部が短く逆L字状に折れる。466は断面M字状の突帯が付され、体部が膨らむ。467～473は甕である。このうち467～471は口縁部が外方に強くくの字状に折れる。469は頸部下に断面三角形の突帯が付く。472は鋤先状口縁を呈するもので、内外面に赤色顔料が塗布された精良品である。473は体部上部から頸部にかけての破片で、外面に「×」状のヘラ描きがみられる。474、475は蓋である。476～478は甕の底部である。476の底部は薄く、破断面は意識的に打ち欠きが行われている。477は著しい厚底である。479は床面整地層中から出土した甕で、口縁部が外方にくの字状に折れる。

480は土製の投弾である。形状はラグビーボール状を呈し、両端がやや尖り気味である。481は土器片を加工した紡錘車である。打ち欠きにより土器片を円形に成形し、中央部に径約0.5cmの円形の穴を穿つ。



第4-12図 SH 56出土遺物② (1/2)

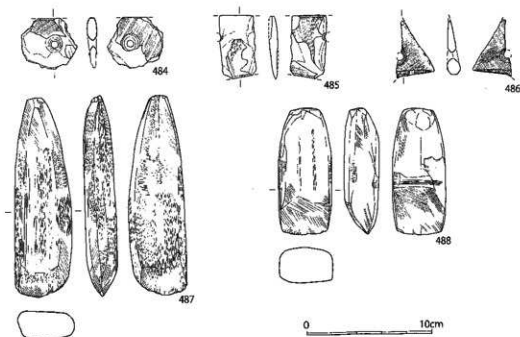
482はチャート製打製石鏃である。483は泥岩製の磨製石鏃である。基部に弧状を呈する浅い抉りがみられ、全体としては長二等辺三角形形状である。先端部ちかくで側縁が角度を変えるこ



第4-13図 SH 56出土遺物③ (1/1)

とから正確には五角形状を呈する。484、485は石包丁の破片である。484は中央部付近の背部の破片で、両面に製作時の研削痕がみられる。穿孔が1か所確認され、両面から穿った状況が確認できる。485は中央部からやや端に穿った部分の破片である。背部から刃部に向かい厚みを減じている。穿孔の痕跡がわずかに残る。486は石戈の破片で、両面とも丁寧に研磨されている。本品は援の基部にあたる胡の部分で、穿孔が認められるが、刃に平行するように先端部に向かいみられることのある横は表現されていない。穿孔は両面から穿っているのが分かる。487、488は両者とも完形の磨製石斧である。487は両刃であるが、使用のため片側の刃部が顕著に減っている。本品は刃部が柄と平行になるように装着されたもので、長期的使用により刃部の片減りが生じたと思われる。488は片刃である。片側の体部には、刃と平行する浅い溝状のわずかな凹みが認められる。

本竪穴建物の時期は、出土遺物から弥生時代中期後半に位置づけることができる。



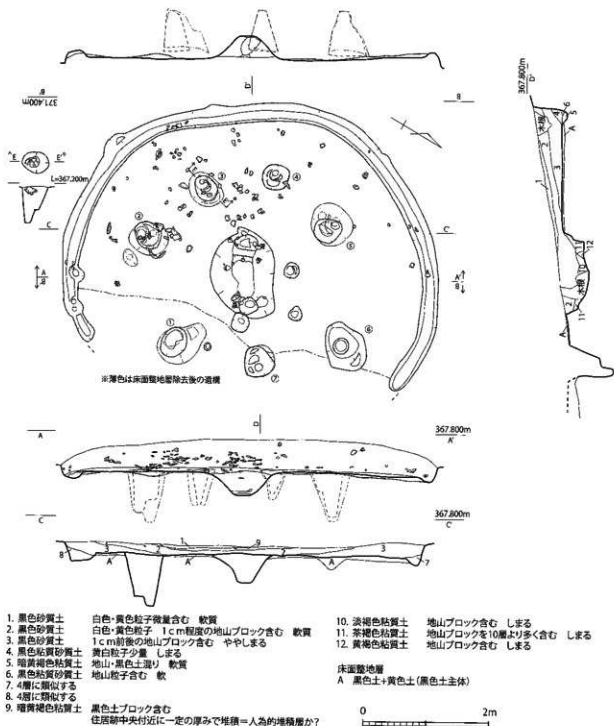
第4-14図 SH56出土遺物③(1/3)

## SH57

S H57 (第4-15図) は平面形が円形を呈する竪穴であるが、南から北に下がる傾斜地にあるため、斜面の下方にあたる北側から東側は壁や床面が残存しない。

規模は径5.5～6.0mで、深さは残存状態が最も良好な箇所で約0.5mである。北から南東側を除き壁際に周溝が残存しており、その規模は幅0.2～0.3m、深さ0.05～0.2mである。主柱穴は7本(①～⑦)で、壁から1.0～1.2mの位置に円形に配されている。主柱穴間の長さは、心々で主柱穴①・②間が1.7m、主柱穴⑤・⑥間が1.8mで、他の主柱穴間の長さが1.2～1.4mであるのと比べ長いことが分かる。主柱穴①・②間あるいは主柱穴⑤・⑥間のどちらかの方向に入口施設があったものと思われる。竪穴の中央には、南西-北東に主軸をもつ楕円形の土坑がある。その規模は、長さ1.5m、幅1.0m、深さ0.3mで、長軸上の両端に柱穴がみられる。これらの柱穴は土坑底面で検出され、竪穴建物廃棄の際に抜かれた後、土坑内に埋土が堆積したことが分かる。土坑内からは焼土や炭は全く検出されていないことから、積極的に本土坑が炉であると言えない。土坑の長軸は、主柱穴①・②間及び主柱穴⑤・⑥間のラインと平行である。このような主柱穴と中央土坑の関係及び方向は、本竪穴建物の南側に位置するSH56と同様で、竪穴建物構築における強い共通性を読み取ることができる。遺構内の遺物は、一部を除き床面から浮いた状態で、小破片が多い。

実測・写真撮影後、竪穴内の南半に残る床面整地層を取り除いた。床面整地層は厚さ0.05mで、黒色土に黄色土が混入するものである。その結果、主柱穴の掘方が確認された。主柱穴①は、床面上で検出した抜き跡の倍近い大きさの掘方を確認した。主柱穴②は、抜き跡の南端下部に径約0.2mの柱跡が確認された。掘方は一回り大きく、柱痕が確認された反対側に一段深い柱の掘え方がみられることから、主柱穴の建て替えが1度行われていることが分かる。主柱穴③は、柱穴を抜いた後の抜き取り穴の上部に壁の大形破片(第4-16図495)と礫を入れている。柱穴抜き取りの際に何らかの祭祀行為が行われた可能性がある。掘方は抜き跡よりも一回り大きい。主柱穴④は掘方と抜き跡の大きさがほぼ同じである。主柱穴⑤は抜き跡の下部に径約0.2m柱跡が残る。柱を抜く際に、上部だけ掘り込み、柱を引き抜いたか折り取ったものと思われる。掘方は大きく、検出された柱痕とは別に掘え方が確認されるので、柱の建て替えがあったことが想定される。主柱穴⑥、⑦の周辺は床面整地層が大きく削平されている。⑥と⑦については、掘方と抜き跡の関係についての確認が不十分のまま掘り下げを行った



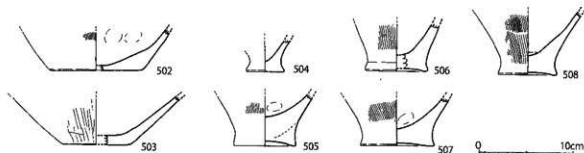
第4-15図 SH57実測図 (1/80)

め、床面整地層下に残されたものが堀方、抜き跡のどちらに相当するのか不明である。

出土遺物(第4-16～4-19図)には、土器、石器、土製品がある。489～497は壺である。いずれも口縁部が外方にくの字状に折れ、体部がわずかに膨らみ気味に底部にいたる。体部最大径よりも口径が大きい。口縁端部を上方に構み上げ気味のものもある。調整は、外面が縦方向のハケ目が施され、内面はナデにより平滑に仕上げられている。498は器台で、底部を欠く。499、500は壺あるいは高坏の口縁部で、両者とも鋤先状口縁を呈する。501は高坏の脚部か。外面に赤色顔料の塗布がみられる。502～508は底部である。このうち502、503は壺で、外

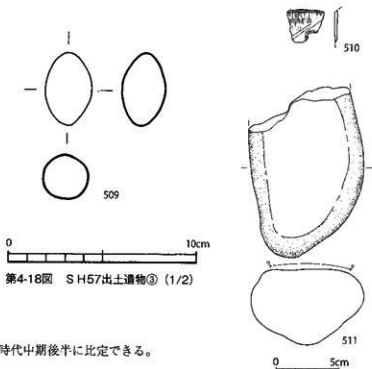


第4-16図 S H57出土遺物① (1/4)



第4-17図 SH57出土遺物② (1/4)

面にハケ目がみられる。504～508は甕で、いずれも底面が外方に張り出す。これらの底部は、505がやや厚底を呈するが、他は比較的厚みをもたない。出土土器の組成をみると、大部分が窠である。周辺の竪穴でも窠に比べ甕が多い傾向が読み取れるが、本竪穴建物の場合は、それが特に顕著である。509は土製の投擲である。形状はラグビーボール状を呈し、両端がやや尖り気味である。510は石包丁の表面が剥離したもので、背部と思われる。背側も含め表面には製作時の研磨痕が残る。511は磨石である。楕円形気味の川原石を利用したもので、欠損している。片面に顕著な磨り跡がみられる。



第4-18図 SH57出土遺物③ (1/2)

第4-19図 SH57出土遺物④ (1/3)

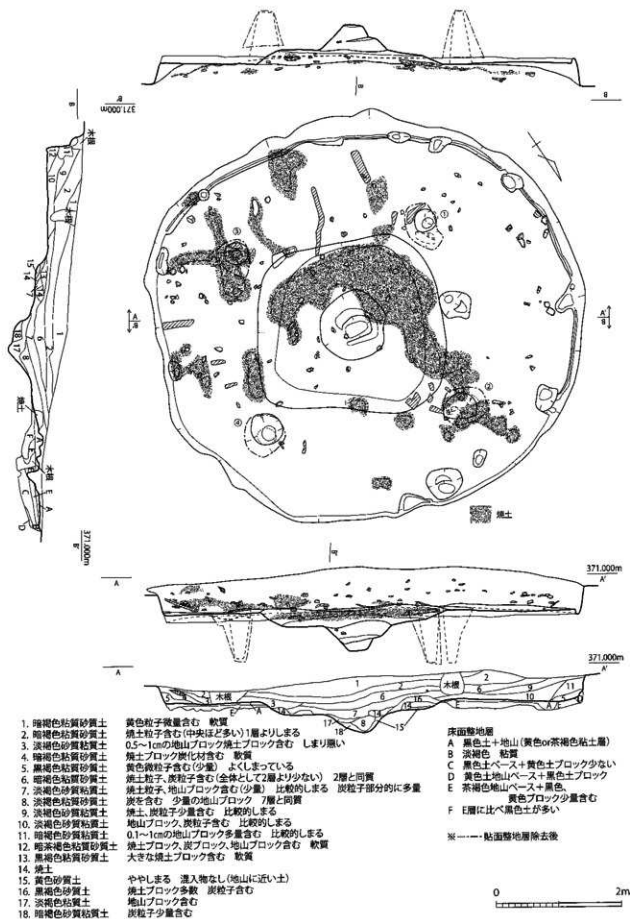
本竪穴建物の時期は、出土遺物から弥生時代中期後半に比定できる。

### SH58

SH58 (第4-20図) は、SH59の南側約10mに位置する平面形が円形の竪穴建物跡である。

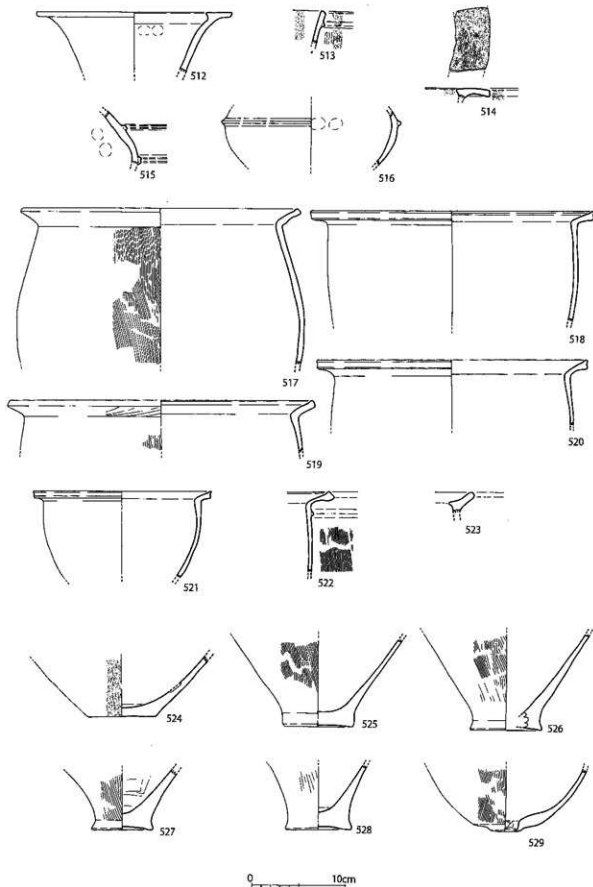
規模は径6.5～7.0mで、深さは現況で0.2～0.6mである。主柱穴は4本で、柱穴間の長さは約3.0mである。主柱穴①と主柱穴②の中間にある柱穴と北側の壁際にある柱穴状のものは、本竪穴に伴わないものである。4本の主柱穴に囲まれた竪穴中央の位置には、略方形の土坑がみられる。土坑の落ちは緩やかで、中央には円形の土坑があることから、全体として二段掘り状を呈する。土坑の規模は、一辺2.5～3.0mで、中央の円形土坑は径約1.0m、深さは一段目が約0.2m、最深部が約0.6mである。土坑内の床面には焼土の形成が確認できず、炉の機能を有していたかは不明である。また、南半分の壁際には幅0.1mの細い溝が走り、この間に細い柱穴状のものがみられる。この溝と柱穴状のものが壁の崩落防止施設に係わるものであるならば、斜面の上側である南側は地形的に壁がより高くなるため、補強が必要であったと推測される。壁際の溝が斜面の上側のみを確認することについては、SH55でも同様な状況がみられる。床面は黒色土や黄色土などにより平坦に整地されているが、竪穴建物内の南側部分の床面については整地層が薄く、一部黄褐色の地山がそのまま床面になっている部分もある。

実測・写真撮影終了後、主として床面の中央付近から北半にみられる厚さ約0.01mの床面整地層を除去した。



第4-20図 SH58実測図 (1/60)





第4-21図 四日市遺跡S H58出土遺物① (1/4)

その結果、4本の主柱穴において柱穴掘え付け時の掘方を検出した。いずれも床面で確認した抜き跡よりも一回り大きいものである。このうち、主柱穴①では柱の屈折が確認された。この主柱穴のみ何らかの理由で建て替えが行われたようである。

遺構内出土遺物は小破片のものが主で、一部を除きほとんどが床面から浮いた状況である。また、焼土や炭化材が顕著にみられるが、これらは主として南側の壁際から中央付近にかけてみられる。いずれも中央部に向かいレンズ状に堆積している。これらの状況から堅穴建物廃絶時は、床面を片づけた後、主柱穴を抜き、壁際付近に一部堆積土がみられるなか、皿状を呈する堅穴内で廃材等を焼却した状況が想定できる。

出土遺物(第4-21、4-22図)には、土器、石器、土製品がある。512～516は壺である。512は鋤先状口縁を呈するもので、頸部が長く伸びる。513は長頸壺で、外面の口縁下に断面三角形の突帯が1条付される。内外面に赤色顔料が塗布される。514は赤色顔料が塗布された鋤先状口縁である。515、516は体部である。515は体部最大径部分と肩部に断面M字状の突帯が付される。516は体部最大径部分に断面三角形の突帯がみられる。517～523は甕である。このうち517～521は口縁部が外方にくの字状に折れるもので、口縁端部が上方に揃まみあげられる跳ね上がり口縁を呈する。体部はいずれもあまり張らないが、517のみやや張り、体部最大径が口縁部最大径よりも大きい。522は口縁部が強く外方に折れ、外面の頸部下に断面三角形の突帯が付く。523は肥後地域の土器である黒髪式である。524～529は底部である。524は甕で、外面に赤色顔料の塗布がみられる。525～527は甕で、顕著な厚底のものはない。529は底部に穿孔がみられる。530は土製の玉である。球状を呈し、中心に穿孔が施される。531は千枚岩製の磨製石鏝である。一部を欠くが、現状で4cmを測る大型品である。

本堅穴建物の時期は、出土遺物から弥生時代中期後半に比定できる。

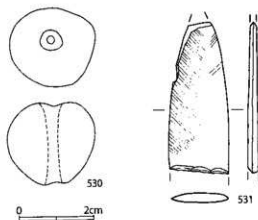
### S H 59

S H 59(第4-23図)は、平面形が長方形を呈する。南から北に下る斜面に位置しており、堅穴建物の長軸は東西方向で、長軸が等高線に平行するように構築されている。

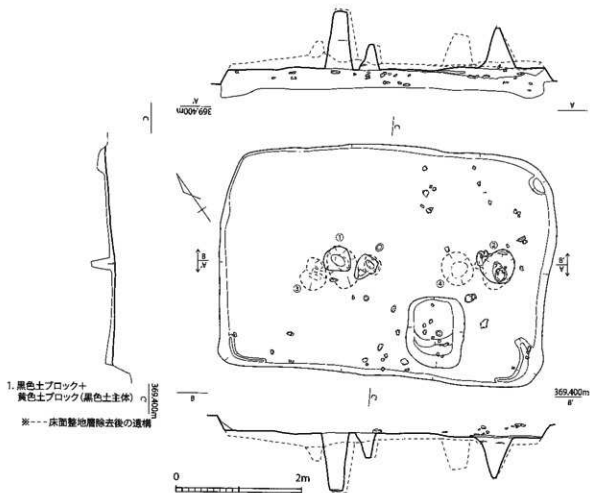
規模は5.0×3.5mで、深さは現況で0.25～0.05mである。主柱穴は2本(①、②)で、東西方向の長軸上に配される。しかし、その柱穴位置は2本とも東に寄った配置になっている。すなわち、主柱穴①と西壁との距離が約1.8m、主柱穴②と東壁の距離が約0.6mと、平面形に対し主柱穴の位置がアンバランスな状態である。堅穴内の施設として南壁近くに略方形の土坑がみられる。1.1×0.9mで、深さは0.1～0.2mである。このような土坑は、方形あるいは長方形形穴の場合、南側あるいは東側の壁際の中央に設けられることが多い。2本の主柱穴が東側に寄ったのに合わせるかのように、壁際の土坑も東側に寄っている。このほか、東南と西南コーナー部のみに、細い溝がみられる。床面は、黒色土と黄色土の混入土で整地され平坦に仕上げられている。なお、坪についてはその痕跡が全くない。本堅穴建物から出土の土器片や石器は、比較的少数である。ほとんどのものが床面から浮いた状況で、遺物を残さぬよう内部を徹底的に片付けた状況がうかがえる。

実測・写真撮影後、厚さ約0.1mの床面整地層を取り除いた。その結果、主柱穴①、②とも床面で確認された柱穴抜き跡よりも大きい平面形の柱穴掘方を検出した。主柱穴①は抜き跡の約2倍、主柱穴②は抜き跡よりも一回り大きいものであったが、深さは両者とも抜き跡と掘方がほぼ同じである。

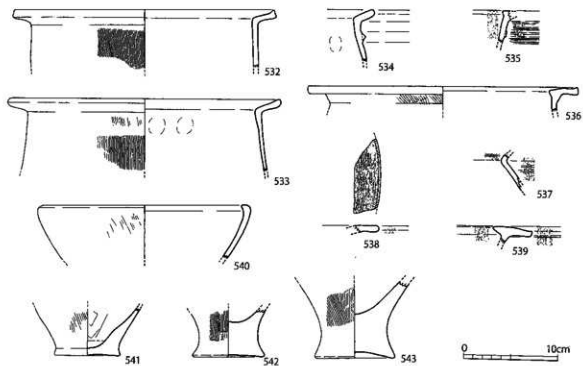
以上のほかに、新たに柱穴を2本(③、④)検出した。これらは床面上では全く検出されていないことから、床面の整地を行う前の主柱穴と考えられる。すなわち、同一堅穴内における建て替えが行われていたことが判明



第4-22図 S H 58出土遺物②(1/1)



第4-23図 SH59実測図 (1/60)



第4-24図 SH59出土遺物① (1/4)

した。主柱穴③、④は、古い竪穴の主柱穴と考えられ、両者とも東西方向の長軸上に概ね配置される点は建て替え後の竪穴と同じである。大きく異なるのは、主柱穴③が西壁から約1.3m、主柱穴④が東壁から約1.3mと竪穴建物の平面形に対しバランスの良い中央の位置に配置されることである。

壁際の土坑については床面整地層下では検出されておらず、建て替え前の竪穴建物のどの位置にあったかは不明である。しかし、多くの場合竪穴建物主軸の南側あるいは東側にあることから、ここでは南側の壁際中央にあったと思われる。ただし、その深さが浅いため床面整地層下まで及ばなかったと推定される。また、炉については建て替え後の竪穴建物同様不明である。

以上から、本竪穴建物は規模・平面形はそのままであるが、主柱穴の位置を何らかの理由により主軸上において東側に移動させ、その後床面の整地作業を行うという建て替えが1回行われたことが判明した。なお、建て替え前の竪穴建物に伴う良好な遺物は出土していない。

出土遺物（第4-24～4-26図）には土器、土器片加工品、石器がある。

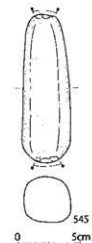
土器のうち、532～534は口縁部がくの字状に強く折れる甕で、体部は肩が張らず直線的のびる。532は口縁端部が角張るものである。端部には強いヨコナデが施されており、端部がやや凹み上方にもつまみあげられる。体部外面には縦方向のハケ調整が行われている。533も532と同様な器形を呈するが、体部がやや膨らむ。口縁端部は丸味をもち、体部外面には縦方向のハケ目がみられる。534は外面口縁部下に断面三角形の突帯が付される。535は口縁部が逆L字状に折れる甕と思われるが、口縁部を欠失する。外面口縁部下には断面M字の低い突帯が付される。内外面に赤色顔料が塗布される精製品である。536は口縁部断面が鋤先状を呈する甕と思われる。537は壺あるいは鉢と思われるもので、頸部がくの字状に外方に折れる。外面と内面頸部に赤色顔料が塗布されている。538は鋤先状口縁を呈すると推定されるもので、内外面に赤色顔料が塗布されている。器種的には壺、甕、高坏のいずれかであろうが、口縁端部のみの破片のため特定することができない。539も鋤先状口縁を呈するもので、壺と思われる。口縁部は端部に向かい薄くなり、下方にやや下がりが気味である。内外面に赤色顔料が塗布されている。540は鉢である。口縁部はやや肥厚し内湾する。口縁端部はやや尖り気味である。541～543は甕の底部である。541は底部が外方に向けやや張り、薄い底部となっている。これに対し、542、543は底部が外方に向け大きく張り出す形状をなし、541に比べて圧倒的な厚底を呈する。544は円形の土器片加工品である。径1.7～1.9cmの円形を呈する小型品である。土器片を打ち欠きにより円形に成形した後、縁部を丁寧に磨いている。

545は敲石である。円柱状の長さ約12cmの川原石を利用したものである。片方に向かいやや太くなるもので、両端部に敲打の痕跡が明瞭に残るが、側縁部には敲打等の痕跡はみられない。

本竪穴建物の時期は、出土遺物から弥生時代中期後半に位置づけられる。



第4-25図  
S H59  
出土遺物②  
(1/3)



第4-26図  
S H59出土遺物③  
(1/3)

#### S H60

平面形が円形を呈する S H60 と平面形が長方形の S H61 が重複する（第4-27図）もので、S H60 が埋没後 S H61 が構築される。立地する場所は北に下る傾斜地のため、北側の壁や床面が一部残存していない。

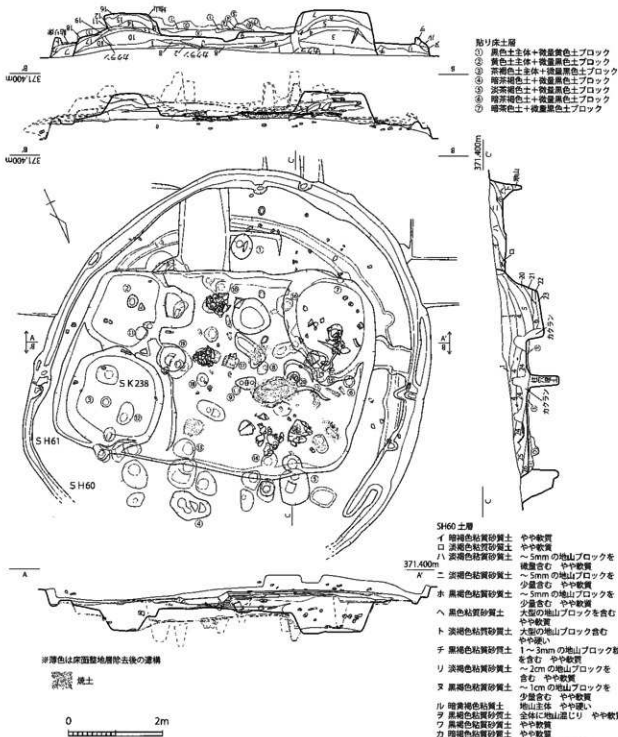
S H60 は平面形がやや楕円形気味の円形を呈する。径は南西-北東が約9.0m、南東-北西が約8.0m、深さは良好に残存する部分で約0.4mである。壁に沿い幅0.2～0.4m、深さ0.2mの周溝がみられる。竪穴内の中央に S H61 が重複するため、主柱穴配置などは分かりづらい。そのため、S H60、S H61 の実測・写真撮影後に両者の床面整地層を除去した。その結果、S H60 が拡張されていること、及び拡張前と拡張後の主柱穴の位置が判明した。当初段階において確認された円形竪穴は拡張後のもので、S H61 の床面整地層下などから主柱穴と推定され

SH61 土層

1. 黒色粘質砂質土 地山ブロック粒子を微量含む やや軟質
2. 暗褐色粘質砂質土 地山ブロックを少量含む 軟質
3. 暗褐色粘質砂質土 3mm前後の地山ブロックを多量に含む やや軟質
4. 褐色粘質砂質土 3mm前後の地山ブロックを多量に含む 炭化物を含む やや軟質
5. 黒褐色粘質砂質土 0.3~1cmの地山ブロックを含む 炭化物を含む やや軟質
6. 暗褐色粘質砂質土 0.5~5cmの地山ブロックを含む 4・5層より大きい炭化物を含む やや軟質
7. 淡褐色粘質砂質土 5mm前後の地山ブロックを含む 軟質
8. 暗褐色粘質砂質土 ~1cmの地山ブロックを含む 炭化物を含む やや軟質
9. 6層にほぼ同じだが6層に比べ地山ブロックが少ない やや軟質
10. 暗褐色粘質砂質土 ~2cmの地山ブロックを含む 炭化物少量含む やや軟質
11. 黒褐色粘質砂質土 1.2mmの地山ブロックを含む やや軟質
12. 黒褐色粘質砂質土 ~2cmの地山ブロックを含む やや軟質
13. 暗褐色粘質砂質土 ~1cmの地山ブロックを含む やや軟質

※3~13は地山ブロックの混入が顕著

14. 黄褐色粘質土 地山ブロックが確認した感じ やや硬質
15. 暗黄褐色粘質砂質土 ~10cmの地山ブロックを含む やや軟質
16. 黄褐色粘質砂質土 地山土主体の混入 やや軟質
17. 黒褐色粘質砂質土 ~5cmの地山ブロック少量含む やや軟質
18. 淡褐色粘質土 やや軟質
19. 淡褐色粘質砂質土 地山混じり やや軟質 = 陥り床か
20. 暗褐色粘質砂質土 地山ブロックを少量含む 軟質
21. 20層とほぼ同じだが地山ブロックをやや多く含む
22. 20層とほぼ同じだが地山ブロックをやや多く含む
23. 暗黄褐色粘質砂質土 地山ブロック主体 やや軟質
24. 暗褐色粘質砂質土 地山ブロックを少量含む 炭化物多い 軟質
25. 24層とほぼ同じが地山ブロックをやや多く混入を含む
26. 暗褐色粘質砂質土 やや軟質



陥り床土層

- ① 黒色土主体+微量黄褐色土ブロック
- ② 黄色土主体+微量黒色土ブロック
- ③ 茶褐色土主体+微量黒色土ブロック
- ④ 暗茶褐色土+微量黒色土ブロック
- ⑤ 淡茶褐色土+微量黒色土ブロック
- ⑥ 暗茶褐色土+微量黒色土ブロック
- ⑦ 暗茶褐色土+微量黒色土ブロック

SH60 土層

- イ 暗褐色粘質砂質土 やや軟質
- ロ 淡褐色粘質砂質土 やや軟質
- ハ 淡褐色粘質砂質土 ~5mmの地山ブロックを微量含む やや軟質
- ニ 淡褐色粘質砂質土 ~5mmの地山ブロックを少量含む やや軟質
- ホ 黒褐色粘質砂質土 ~5mmの地山ブロックを少量含む やや軟質
- ヘ 黒色粘質砂質土 大型の地山ブロックを含む やや軟質
- ト 淡褐色粘質砂質土 大型の地山ブロックを含む やや硬い
- チ 暗褐色粘質砂質土 ~5mmの地山ブロックを含む やや軟質
- リ 淡褐色粘質砂質土 ~2cmの地山ブロックを含む やや軟質
- ヌ 黒褐色粘質砂質土 ~1cmの地山ブロックを少量含む やや軟質
- ル 暗黄褐色粘質土 地山主体 やや硬い
- レ 黒褐色粘質砂質土 全体に地山混じり やや軟質
- ヲ 黒褐色粘質砂質土 やや軟質
- カ 暗褐色粘質砂質土 やや軟質

第4-27図 SH60、SH61実測図 (1/80)

るものを7本(①~⑦)確認した。支柱穴は壁から1.3~1.4mの位置に円形に配されている。また、このような円形竪穴建物の中央には、長軸上の両端に柱穴を有する楕円形土坑がみられることが多い。本遺構の場合、SH61の構築により、土坑の痕跡は全く確認できないが、土坑に伴うと思われる2本の柱穴(⑧、⑨)を検出した。柱穴は東西に並ぶことから、中央の円形土坑も東西に主軸を持つものであったと考えられる。出土遺物は、中央部にSH61が構築されたこともあり少数で、床面からやや浮いた状況のものが多い。

床面整地層除去後確認した拡張前の竪穴建物についても平面形がH形を呈する。拡張後の床面整地層下から周溝が確認された。周溝は南から西側にかけてのみ残存し、幅0.2~0.3mである。このことから、竪穴建物の規模は径約7mと推測される。支柱穴は7本(⑩~⑬)で、いずれもSH61の床面整地層下において検出した。また、中央土坑に伴うと思われる柱穴2本(⑭、⑮)も確認した。拡張後の竪穴建物と同じように東西方向に並ぶ。

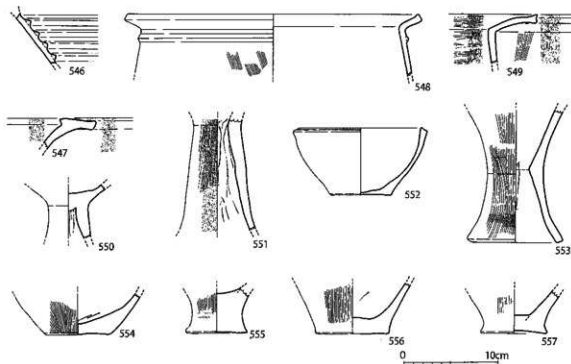
以上から、本竪穴建物は平面形をほぼそのままにして、外方に一回り大きく拡張したことが分かった。支柱穴の数は同数であるが、平面形を拡張したため、支柱穴も外方に移動して立てられている。中央土坑はSH61により削平され残存していないが、中央土坑に伴う柱穴が確認され、同一の主軸方向を有することが確認できた。

出土遺物(第4-28~4-30図)には土器、土製品、石器があり、いずれも拡張後の竪穴に伴う。

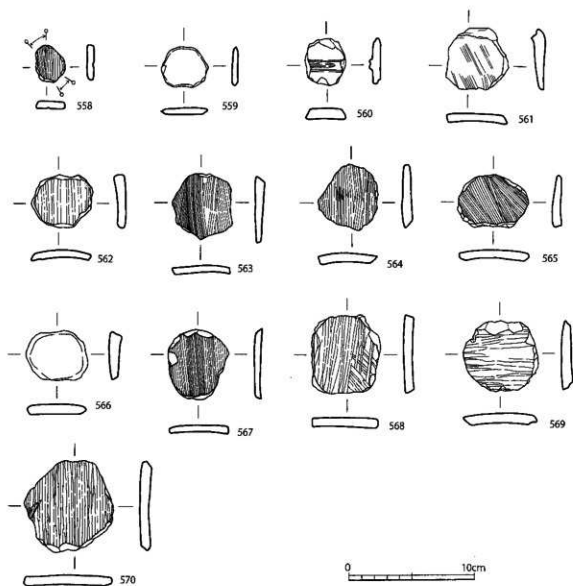
土器のうち、546、547は壺である。546は肩部に断面三角形の突帯が現状で4条付される。547は鑑先口縁を早し、内外面に赤色顔料の塗布がみられる。548、549は甕である。548は口縁部が外方に折れ、頸部下に断面三角形の低い突帯が付される。549は口縁部が逆L字状に強く折れるもので、内外面に赤色顔料が塗布される。550、551は高坏である。550は坏部から脚部にかけてのもので、両者の接合部には円盤充填の痕跡がみられる。551は比較的長い脚部で、外面には赤色顔料が塗布される。552は鉢で、体部が内湾気味に立ち上がる。553は器台で、口縁部を欠く。554~557は底部で、554が壺、555~557が甕である。

558~570は土器片加工品である。土器片を打ち欠きにより略円形に成形したものである。558の側縁の一部が磨られているが、他は打ち欠きのままである。571は磨石である。572は両刃の磨製石斧、573は扁平片刃の小型磨製石斧である。

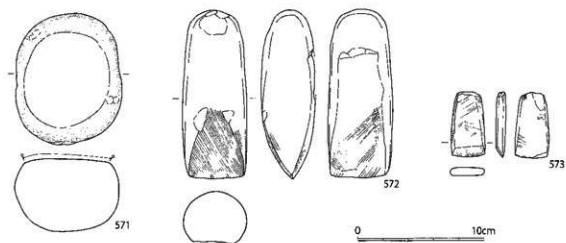
本竪穴建物の時期は、出土遺物から弥生時代中期後半に位置づけられる。



第4-28図 SH60出土遺物①(1/4)



第4-29図 SH60出土遺物② (1/3)



第4-30図 SH60出土遺物③ (1/3)

## SH61

SH61(第4-27図)は平面形が長方形を呈する。新しい攪乱遺構がいくつか重複するなか、円形堅穴建物のSH60が埋没後、その中央に構築されていることが確認された。また、本堅穴建物の埋没後、貯蔵穴であるSK238が掘り込まれる。

堅穴建物は南東-北西に長軸を有する長方形で、その規模は長辺約6m、短辺約4m、深さは現状で0.2~0.4mである。主柱穴は2本(⑩、⑪)で、長軸上の中央に配置されている。主柱穴⑩は抜き取り穴がみられ、廃棄時に柱が抜かれたことが分かる。これに対し主柱穴⑪は径0.2~0.3mの柱痕跡と思われるもので、廃棄にあたり柱をそのまま引き抜く、あるいは折り取るかがなされ、抜き取り穴が掘られていない。主柱穴⑩の東側に、主柱穴⑪と接するように炉と考えられる土坑がある。土坑の平面形は1.0×0.5mの楕円形で、断面皿状を呈する。深さは0.1mで、底面から焼土が堆積している。本堅穴で注目されるのは、南西側の両コーナーにある貯蔵穴である(東北コーナー付近にあるSK238は本堅穴に伴うものではなく、本堅穴の埋没後に掘り込まれたものである)。南東コーナーの貯蔵穴(貯蔵穴1)は略方形を呈するもので、一部をSK238により切られる。規模は1.6×1.4mで、深さは床面から0.4mである。床面は平坦で、散発的な遺物が床面から浮いた状態で出土した。南西コーナーの貯蔵穴(貯蔵穴2)は、平面形が不整形である。規模は径1.8~2.2m、深さは床面から0.5mである。貯蔵穴の埋土は堅穴の埋土と一連のもので、少なくとも貯蔵穴の大半は堅穴廃棄時に一連の作業として埋められている。貯蔵穴2内では、この層に伴い床面から浮いた状態で比較的多くの遺物が出土した。これに対し、貯蔵穴1では、貯蔵穴2の大半を埋めた土と一連の層が貯蔵穴1がほぼ埋まった上の上のっている。すなわち、まだ床面が埋まりきらず、貯蔵穴2もほとんど埋められてない段階に、貯蔵穴1はすでにほぼ埋没していたことが分かる。本堅穴建物廃棄時の埋め戻し作業が、堅穴の南方向から着手されたと理解することができよう。このほか、貯蔵穴1、2の間に、径約0.8mの円形を呈する浅い土坑がみられる。

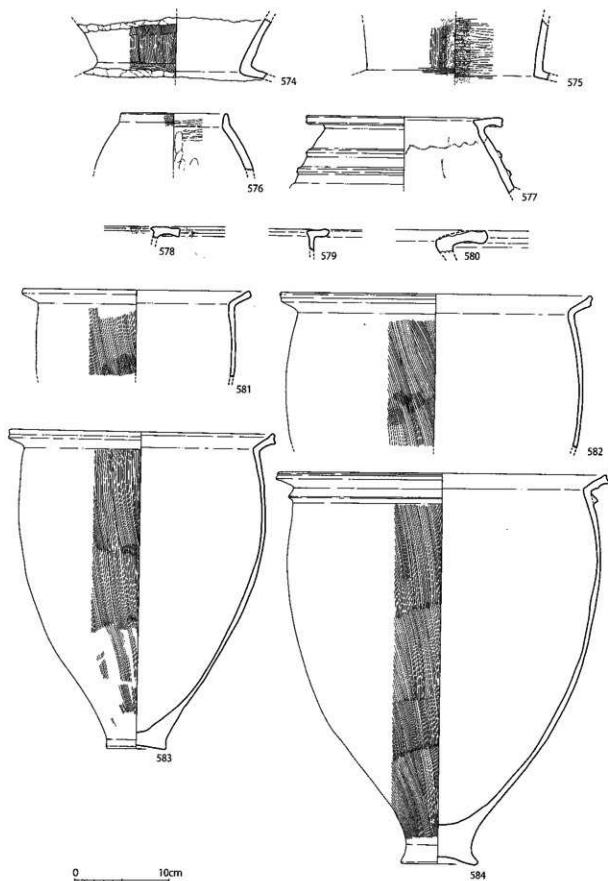
堅穴建物内の遺物のうち、貯蔵穴1と貯蔵穴2の間、主柱穴⑩と主柱穴⑪の間、主柱穴⑩北東側の3箇所から、ほぼ完形に復元された壺が各々出土した(第4-31図583、584、第4-32図585)。これらは、床面直上ないしは数~0.1mほど浮く状態である。また、注目すべきものとして、炭化した堅果類の実が多数出土した。これらは、炉に掛積した焼土直上と周辺床面付近からまとめて出土している。先ほどの壺とともに、堅穴建物廃棄時に意図的に残されたものと思われる。このほか堅穴建物内の東北コーナーから中央部にかけて、炭化材や焼土を含む層がレンズ状に堆積する。炭化材・焼土を含む一連の層は堅穴内の南東側半分や貯蔵穴1、2には及んでないことから、これらを埋めた後、堅穴北部分において廃材等を燃やしたものと思われる。

出土遺物(第4-31~4-34図)には、土器、土製品、石器がある。574~577は壺である。574、575は頸部から口縁部に向けて立ち上がる部分である。574は外傾気味に立ち上がる。口縁部と頸部下を意図的に打ち欠き、整えている。575は直立気味に立ち上がるもので、内外面に赤色顔料の塗布が認められる。576は内傾する体部から口縁部が短く立ち上がる。577は内傾する体部から逆L字状の鑷先口縁にいたる。外面には断面M字状の低い突帯が、一定の間隔をもって付される。578は壺あるいは高杯の口縁部で、鑷先状を呈する。内外面に赤色顔料が塗布されている。579~585は壺である。579、580は逆L字状に強く折れる口縁部で、581~583は口縁部が外方にくの字状に折れ、体部に突帯が付されない。体部は肩が張らない。582、583の口縁部は頸部が上方に狭まみ上げられる。583の底部は比較的薄い。584、585は581~583と同様な器形を呈するが、頸部直下に断面三角形の突帯を付す。585の底部はやや薄底であるが、584は厚底でやや上げ底である。586、587は器台の下半部。588、589は高杯である。588は外面に、589は外面から内面にかけて各々赤色顔料の塗布がみられる。590~600は底部である。このうち591、600の外面には赤色顔料が塗布されている。601~609は土器片加工品である。土器片を打ち欠きにより略円形に成形している。このうち、605のほぼ全周と、606の一部の側縁は磨られている。

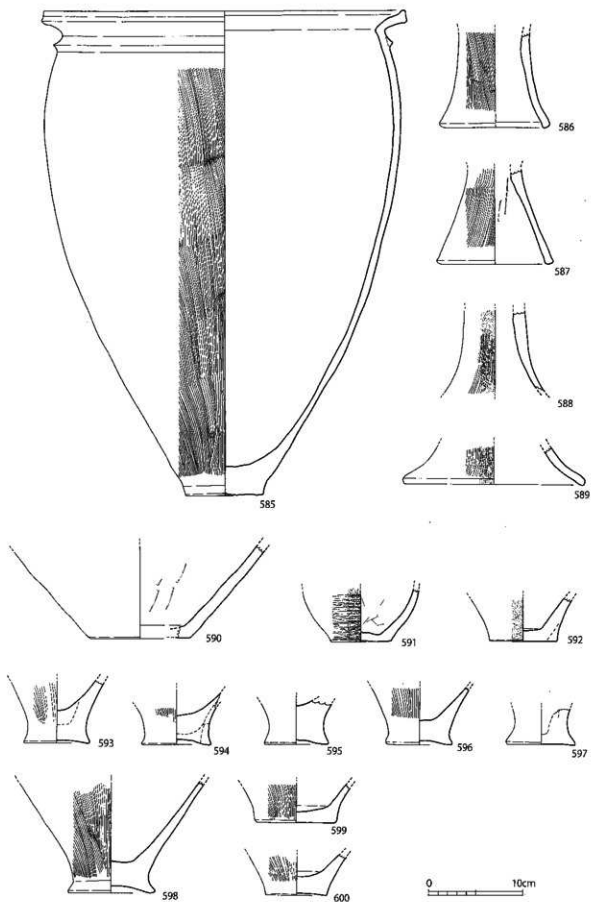
610~615は石器である。610は敲石で、側縁の両端部に敲打痕がみられる。611は磨石で、両面に磨った痕跡がある。612は顕著な磨った痕跡は観察できず、台石として利用されたと思われる。613、614は砥石である。

本堅穴建物の時期は、出土遺物から弥生時代中期後半に比定できる。

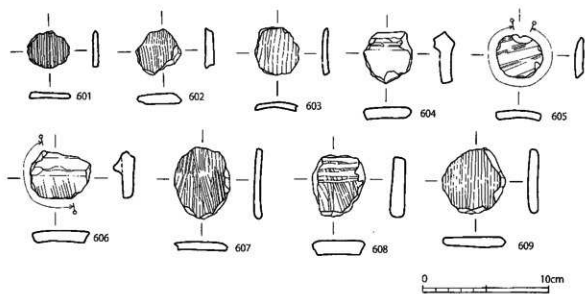




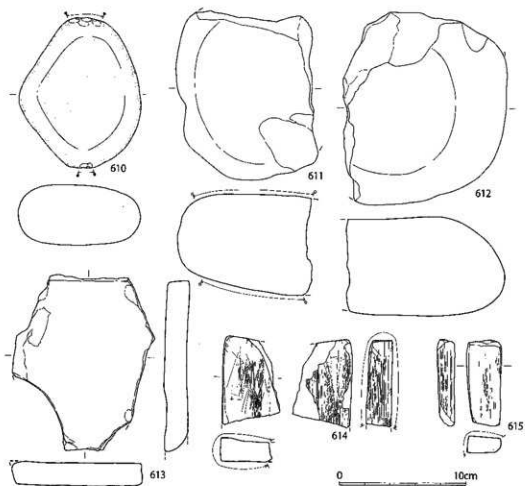
第4-31圖 SH61出土遺物① (1/4)



第4-32図 SH61出土遺物② (1/4)



第4-33図 SH61出土遺物③ (1/3)



第4-34図 SH61 (610~614) 出土遺物④・SK238 (615) 出土遺物 (1/3, 1/6)

## (2) 土坑

## SK224

SK224 (第47図) はSH55の南側に位置するもので、貯蔵穴と思われる。SH55と重複関係にあり、SH55に切られる。立地の場所が南から北に向け傾斜することから、北側にいくにつれ遺構の残存状況が悪い。

平面形態は、SH55に切られるため全形は不明であるが、方形ないしは長方形を呈すると思われる。規模は南辺が約2.2m、西辺が残存部分で約1.5mである。深さは現状で0.25～0.3mを測る。床面は平坦で、壁に沿って幅0.15～0.2m、深さ0.05mの溝が巡る。中央にみられる柱穴は本遺構に伴うかは不明である。なお、コーナー部分にみられる柱穴状の遺構は木根である。遺構内からの遺物は極めて散発的で、床面から浮いた状況である。

出土遺物 (第435図) のうち、616は壺の体部に付される突帯で、断面がM字状を呈する。617は甕の口縁部で、体部から口縁が外方に強く折れる。口縁端部は上方につまみ上げ気味である。618は甕の底部で、薄底を呈するものである。本貯蔵穴は、弥生時代中期後半に比定できる。

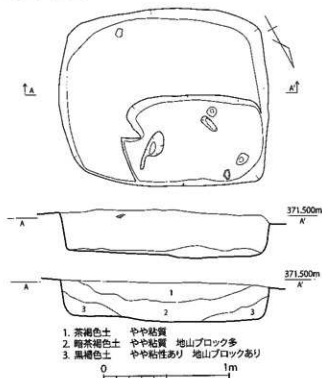


第4-35図 SK224出土遺物 (1/4)

## SK225

SK225 (第4-36図) は、SH56の南側約10mに位置する貯蔵穴である。この付近は斜面の頂部にあたり、比較的平坦である。

平面形態はやや長方形気味の方形である。規模は1.2～1.4×1.6～1.7mで、深さは現況で約0.3mである。壁は直立気味で、床面は基本的に平坦であるが、北半部分は床面から約0.1m下がる。遺構内からは、遺構規模に比し小石器片が比較的多数出土したが、器形が分かるものは少なく、ほとんどが床面から浮いた状況である。その中で、完形の磨製石斧が一段下がった床面直上から出土している。これは意図的に床面に安置したものであると思われる。遺構埋土は、黒褐色土などがレンズ状堆

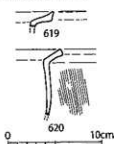
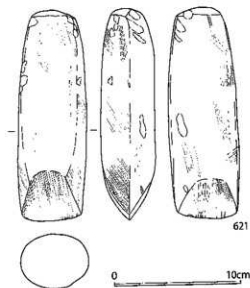


第4-36図 SK225実測図 (1/30)

積しているが、下層ほど地山ブロックの混入が目立つ。

出土遺物 (第4-37、4-38図) のうち、619、620は甕である。いずれも口縁部が外方にくの字状に折れる。620はL1縁端部を上方につまみ上げる。621は完形の磨製石斧である。長さ16.8cm、重さ720gの大型品である。

弥生時代中期後半に比定できる。

第4-37図 SK225  
出土遺物①  
(1/4)

第4-38図 SK225出土遺物② (1/3)

S K 226

S K 226 (第4-39図) は、S K 225の南側約3mに位置する貯蔵穴である。立地する場所は、斜面を登り着いた比較的平坦な部分である。

平面形態は、東西方向に長軸をもつ長方形である。長さ1.2～1.4m、幅0.9mで、深さは検出面から0.25～0.3mを測る。床面は緩やかな凹凸がみられる。壁は直立気味に立ち上がる。他に比べると規模が小さいが、貯蔵穴と考える。

遺構埋土は黒色土をベースにしており、一部をのぞき地山土である黄色土の小粒子が混入する。これらの層はレンズ状に堆積する。

遺構内からの出土遺物は極めて少量で、散発的である。出土と器は小破片のみで、図示できる遺物はなかった。

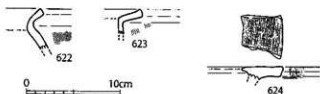
S K 227

S K 227 (第4-40図) も斜面を登り着いた比較的平坦な場所に立地する貯蔵穴と思われる。本遺構の数m西側にはS K 225やS K 226があり、近接する範囲に小規模な貯蔵穴が集中する。

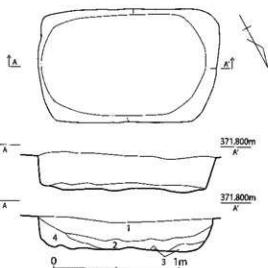
S K 227の平面形は円形である。その規模は径約0.9m、深さは現況で約0.5mである。壁はほぼ直立気味で、床面は平坦である。平面形が円形を呈する貯蔵穴は本遺跡では少数である。遺構内からは、礫や小土器片などが出土した。これらはいずれも埋土中から出土したもので、貯蔵穴崩壊後に流入したものと思われる。

出土遺物 (第4-41、4-42図) には土器と土製品がある。622、623は壺である。622は口縁部が体部からくの字状に外方に折れるもので、口径よりも体部最大径が大きい。623は口縁部が逆L字状に強く折れる。口縁部は上方に摘み上げ気味である。口径が体部最大径よりも大きい。624は、壺あるいは高杯の口縁部で、鋤先口縁を呈する。内外面に赤色顔料が塗布される。625は打ち欠きにより円形に成形された土器片加工品である。

本貯蔵穴は、弥生時代中期後半に位置づけられる。

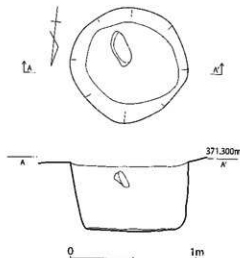


第4-41図 S K 227出土遺物① (1/4)

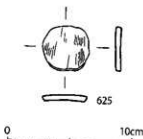


- |          |           |                          |
|----------|-----------|--------------------------|
| 1. 黒褐色土  | やや砂質      | 黄色土粒子少量含む                |
| 2. 淡黒褐色土 | やや砂質      | 黄色土粒子多く含む<br>一部黄色土ブロック含む |
| 3. 黒褐色土  | やや粘質      | 黄色土粒子少量含む                |
| 4. 黒色土   | やや砂質・やや粘質 |                          |

第4-39図 S K 226実測図 (1/30)



第4-40図 S K 227実測図 (1/30)

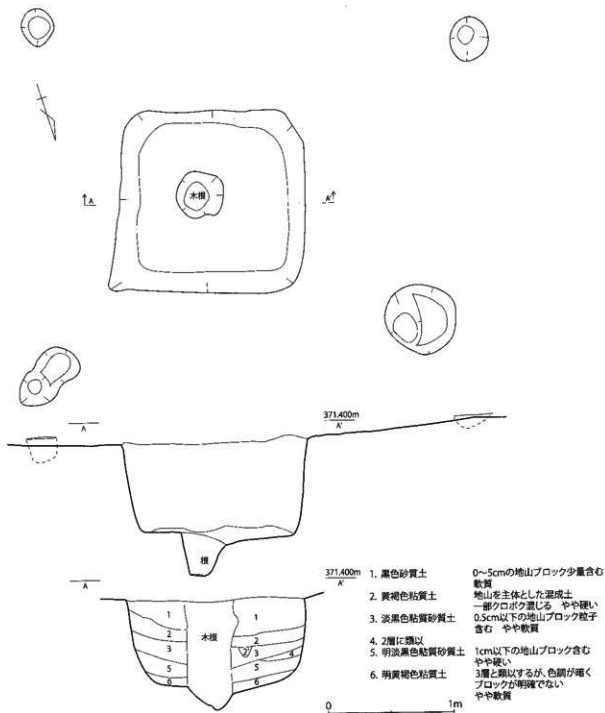


第4-42図 S K 227  
出土遺物② (1/3)

## S K 228

S K 228 (第4-43図)は、S H 58の南側約4mに位置する貯蔵穴である。立地の場所は、斜面の頂部で比較的平坦な地形を呈する。

遺構の平面形は方形で、その規模は一辺1.4～1.5mである。深さは検出面から0.7～0.8mで、床面はわずかに高低差があるが、ほぼ平坦である。床面の中央に柱穴状のものがみられるが、木根である。掘土は、地山土ブロックの混入が顕著な層と混入が少ない層が互層になっている。レンズ状堆積ではなく水平堆積であることから、人為的に埋められた可能性を有する。本遺構の最大の特徴は、方形遺構の各コーナーから0.6～1.4m外方に柱穴がみられる点である。柱穴は削平により、現状では残存状態が悪いが、貯蔵穴上に雨避けの覆屋が設置されていたと考えられる。出土遺物は少量で、図示できるものはなかった。



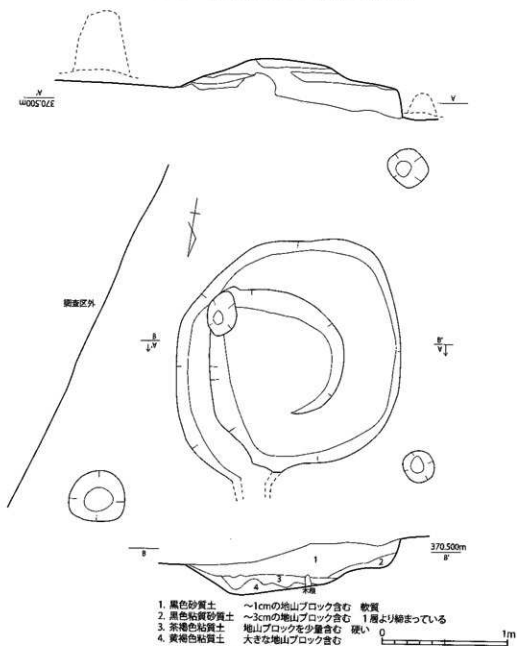
第4-43図 S K 228実測図 (1/30)

S K229

S K229 (第4-44図)は、S K228の東側約4mに位置する貯蔵穴である。斜面の頂部にあたるため、所在する場所は比較的平坦な地形となっている。

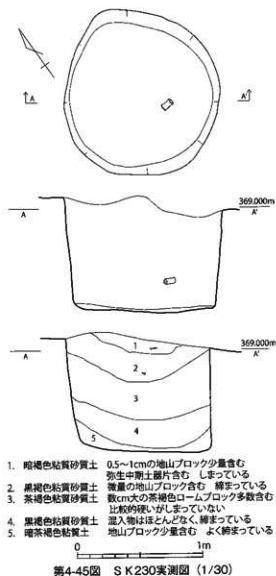
遺構の平面形は略円形を呈し、その規模は径約1.8m、深さは検出面から0.2～0.3mである。床面は平坦ではなく、軽い段がみられる。埋土は黒褐色土ベースで、大小の地山ブロックの混入が顕著である。出土遺物は極めて少量で、図示できるものはない。

遺構の0.3～0.6m外方には柱穴が配される。調査区外に及ぶものもあり3本しか確認されていないが、本来は4本あったと思われる。貯蔵穴上に雨避けの覆屋が設置されていたものであろう。



S K230

S K230 (第4-45図)は、S H56の北方約6mに位置する。立地の場所は、南から北に向かい傾斜する斜面に

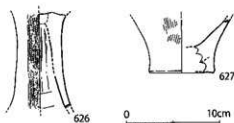


あたり、貯蔵穴と思われる。

遺構の平面形は円形である。本遺跡では、平面形が円形を呈するものは、方形のものより少数である。規模は、径1.2~1.3mと比較的小規模である。深さは、検出面から0.7~0.9mである。床面は平坦で、壁は直立気味である。埋土は緩やかなレンズ状堆積である。少量の地山ブロックを含む層も認められ、全体としてはやや堅く締まる。また、貯蔵穴の周囲には柱穴がみられないことから、上部に屋根をかける施設はなかったと思われる。出土遺物は少量で、いずれも床面から浮いた状態で出土した。

出土遺物（第446図）には高坏と甕がみられる。626は高坏の脚部上部で円柱状を呈する。坏部との接合面には円盤充填の痕跡が認められる。外面には赤色顔料が塗布され、縦方向のヘラ磨きが施される。内面にはシボリ痕がみられる。627は甕の底部である。やや厚皮を呈するもので、外面には縦方向のハケ目が残る。

本貯蔵穴は、弥生時代中期後半に比定できる。



#### S K 231

S K 231（第447図）は、S H 56とS H 57の両竪穴建物間に位置する貯蔵穴である。さらに、約5m南西にはS K 230が、また約2.5m南東にはS K 232が各々みられる。なお、本貯蔵穴の所在する場所は南から北に向かって下る緩傾斜地となっている。

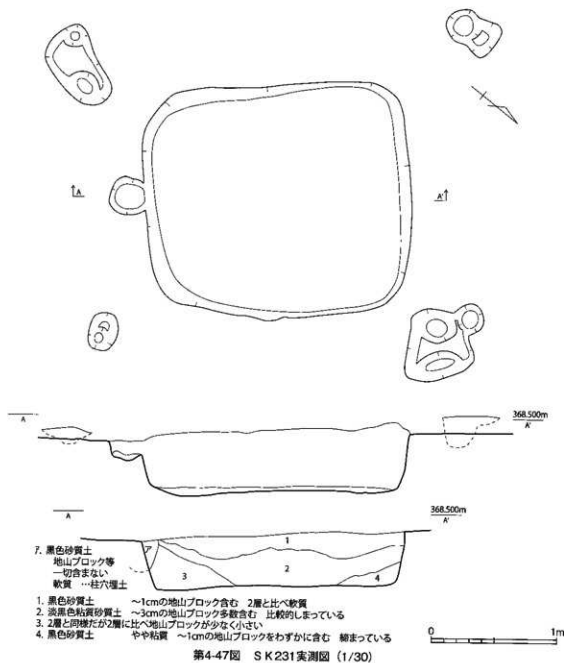
本貯蔵穴の平面形はコーナー部が丸味をおびた長方形を呈する。規模は、長辺2.0~2.1m、短辺1.7~1.8mである。深さは検出面から0.4~0.5mで、床面はほぼ平坦であるが中央部が緩やかに高くなる。なお、貯蔵穴の一部重複するかたちでみられる柱穴は、本遺構が埋没後に掘り込まれたものである。

埋土は黒色系の土をベースにしたもので、地山ブロックの含まれる量や、土のしまり具合により分層可能である。遺構埋没後レンズ状に堆積したことが分かる。

貯蔵穴の各コーナーから0.2~0.6m外方に柱穴がみられる。柱穴は削平により、現状では残存状態が悪いものもある。貯蔵穴上に雨避けの覆屋が設置されていたと考えられる。

出土遺物は少量で、図示できるものはなかった。

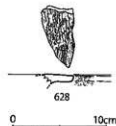




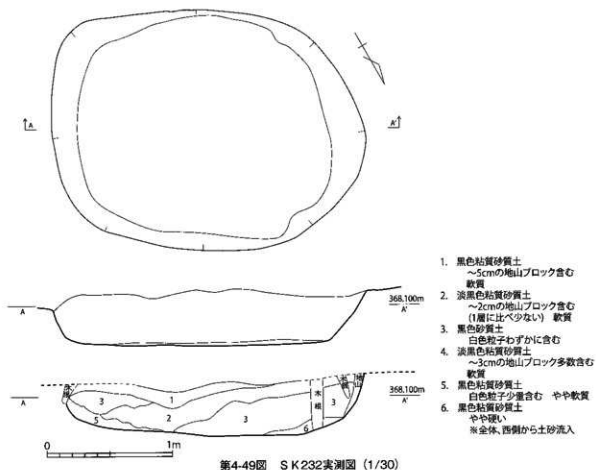
SK232

SK232 (第4-49図) は、SK231の南東約2.5mに位置する貯蔵穴である。遺構の平面形は長方形基調であるが、北西側の辺は弧状を呈する。規模は長軸で約2.5m、短軸1.6~1.8mである。深さは検出面から0.3~0.4mで、床面は比較的平坦である。壁は床面から緩やかに立ち上がる。強土は西側からの流れ込みが顕著な様子が見られ、各層には地山ブロックの混入がみられる。遺構内からの出土遺物は細片が少量のみで、いずれも床面から浮いた流れ込みの状態である。本貯蔵穴の周囲には柱穴がいくつかみられるが、位置的にみて本遺構との関係性が薄いと判断した。

出土遺物 (第4-48図) のうち628は鋸先状を呈する口縁部の破片で、赤色顔料の塗布がみられる。時期的には、弥生時代中期後半と位置づけられよう。



第4-48図  
SK232出土遺物  
(1/4)

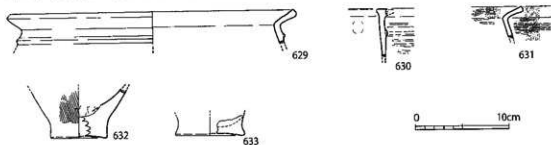


## SK233

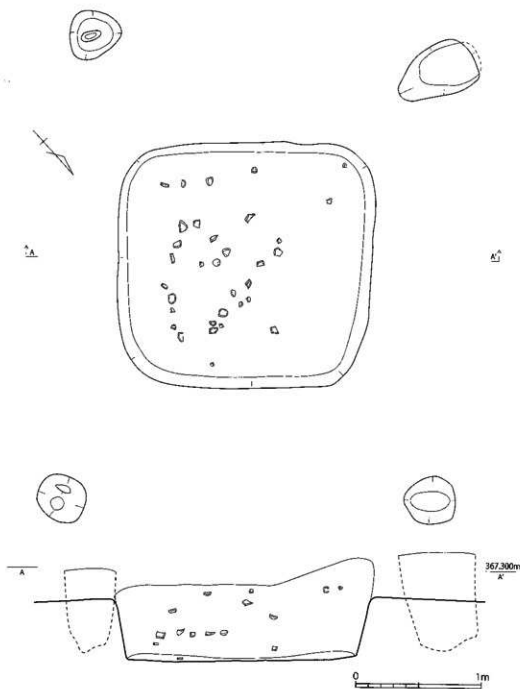
SK233 (第451図) は、SH59の北約10mに位置する貯蔵穴である。西方にはSK231、SK232などの貯蔵穴がみられる。これらは、北下がりの斜面の同一等高線上付近に並ぶ。

遺構の平面形は方形で、その規模は一辺約2mである。深さは検出面から0.5～0.8mで、壁は直立気味に立つ。床面は平坦で、遺構内には柱穴等の施設はみられない。方形の各コーナーから0.6～1.0m外方に柱穴が4本配置されている。方形遺構の上方に炭椀が構築されていたと思われる。遺構内からは土器の小破片などが出土したが、ほとんどが床面から浮いた状態であった。

出土遺物 (第450図) のうち629～631は甕の口縁部である。629は口縁部がくの字状に外方に折れ、頸部下に断面三角形の低い突起が付される。口縁端部は上方につまみ上げられる。630は口縁部が逆L字状に折れる形態で、端部を欠くが軸先状を呈するものと思われる。頸部下には断面M字状の低い突起が貼り付けられる。631は内外面に赤色顔料が塗布されるもので、口縁部がくの字状に折れるが、頸部下に突起はみられない。632、633は底部である。本貯蔵穴の時期は、出土遺物から弥生時代中期後半に比定できる。



第4-50図 SK233出土遺物 (1/4)

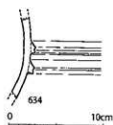


第4-51図 SK233実測図 (1/30)

SK234

SK234 (第4-53図) は、SH58の南東約23mに位置する貯蔵穴で、位置する場所は比較的平坦である。攪乱遺構により削平されているため全形は不明だが、楕円形ないしは円形を呈すると思われる。規模は推定で径約1.5～1.8mであろう。深さは、検出面から0.2～0.3mである。床面は平坦で、壁は直立気味に立つ。埋土は地山ブロックを含むもので、レンズ状に堆積する。遺構内からは小土器片が少量出土したが、いずれも床面から浮くものである。

本遺構の周辺は攪乱遺構が多いため、不明な部分もあるが、貯蔵穴に覆屋をかけるための柱穴はなかったものと思われる。



第4-52図 SK234  
出土遺物 (1/4)

出土遺物(第452図)のうち、634は壺の体部最大径の部分で、断面M字の突帯が2条付される。弥生時代中期後半の所産。

## S K 235

S K 235(第456図)は、S K 234の南約6mに位置する貯蔵穴である。本遺構に直接及ばないが、周囲は攪乱遺構が多数みられる。

平面形は隅丸の長方形を呈する。その規模は、長辺2.1~2.3m、短辺1.8mで、深さは検出面から0.4~0.5mである。床面はわずかに起伏が見られるが、ほぼ平坦である。壁は直立気味に立つ。床面に小ピットがみられるが、木根の可能性が高く、本遺構に伴うものではない。

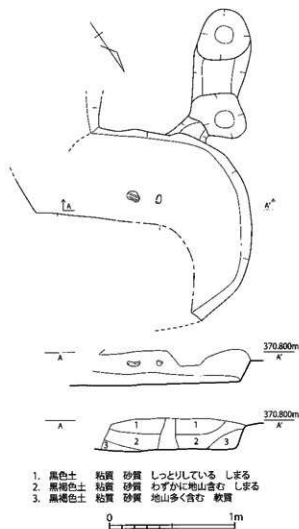
埋土は黒色土を基調とするもので、一部をのぞき地山ブロックが含まれる。地山ブロックは数mmから数cmのもので、層全体としてはやや軟質な部分が多い。これらの層は、レンズ状に堆積することが分かる。遺構内最上層から完形の石包丁が1本出土したが、全体として遺物量は少ない。いずれも小破片で、その多くが床面から浮いた状態であった。

貯蔵穴本体外方の柱穴については、周囲に攪乱遺構が多いため不明な部分もあるが、存在しないようである。よって、本貯蔵穴は覆屋をもたなかったことが分かる。

出土遺物(第454、455図)には土器と石器がある。

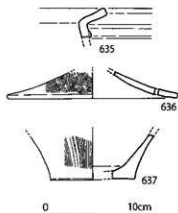
635~637は土器である。このうち635は甕の口縁部破片である。頸部から強く外方に折れ、頸部下に断面三角形の低い突帯が付される。636は蓋と思われる。外面には縦あるいは斜め方向のハケ目がみられる。端部に近い位置に焼成前の穿孔がみられる。穿孔は、外面から内面に向け施される。637は甕あるいは壺の底部である。外面に縦方向のハケ目がみられ、比較的薄底を呈する。

638~640は石包丁である。638は輝緑凝灰岩製のほぼ完形品で、両端

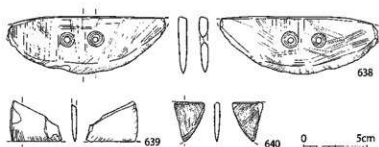


1. 黒色土 粘質 砂質 しっかりとしている しまる
2. 黒褐色土 粘質 砂質 わずかに地山含む しまる
3. 黒褐色土 粘質 砂質 地山多く含む 軟質

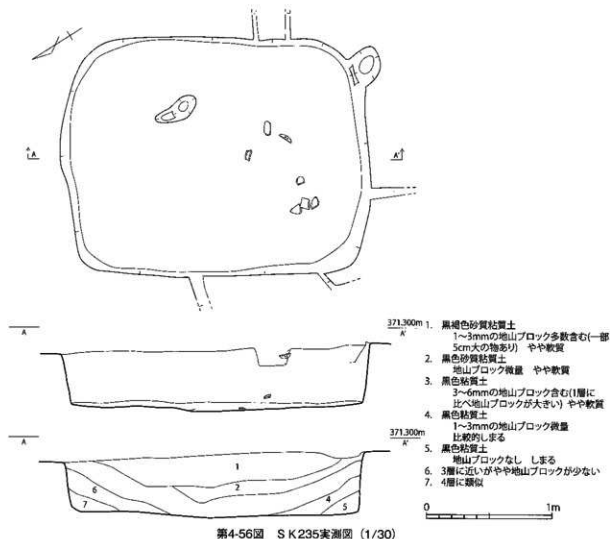
第4-53図 S K 234実測図 (1/30)



第4-54図 S K 235出土遺物① (1/4)



第4-55図 S K 235出土遺物② (1/3)



第4-56図 S K 235実測図 (1/30)

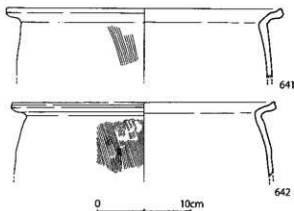
部をわずかに欠くが、現状で長さ126cm、最大幅4.5cmである。刃部は外湾し、背部は直線的である。穿孔が2箇所にみられ、表裏面には製作時のものと思われる痕跡が残る。639、640は破片資料で、いずれも泥板岩製である。639は刃部を含む破片である。小破片のため定かではないが、現状において刃部は直線状を呈する。640は端部の資料である。刃部は外湾し、背部は直線的である。

本貯蔵穴は、出土遺物から弥生時代中期後半に比定できよう。

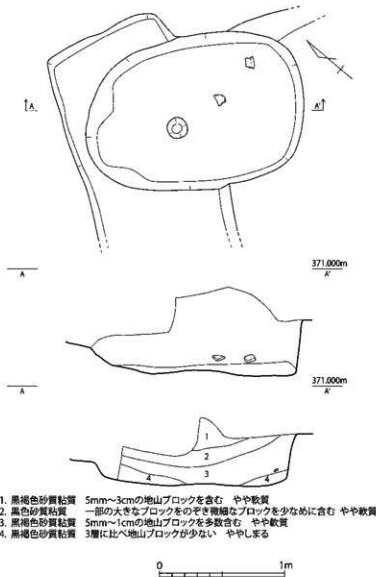
#### S K 236

S K 236 (第4-58図) は、S K 235の南西約15mに位置する貯蔵穴である。立地の場所は台地の縁で、数m南は台地斜面の急傾斜となる。本遺構の周囲には同時期の遺構はみられず、ほぼ孤立した状況である。

攪乱により削平されている部分も多いが、かろうじて全形は分かる。平面形は楕円形を呈し、その規模は長径約1.8m、短径約1.2mである。深さは、最深部で検出面から0.4mを測る。床面は緩やかに波打つが、壁は直立気味に立ち上がる。床面上には小ビットがみられるが、



第4-57図 S K 236出土遺物 (1/4)



第4-58図 K236実測図 (1/30)

1. 黒褐色砂質粘質 5mm~3cmの地山ブロックを含む やや軟質
2. 黒色砂質粘質 一部の大きなブロックをのぞき細かいブロックを少なめに含む やや軟質
3. 黒褐色砂質粘質 5mm~1cmの地山ブロックを多数含む やや軟質
4. 黒褐色砂質粘質 3層に比べ地山ブロックが少ない ややしまる

## S K237

S K237 (第460図) は、S H60の南約11mに位置する貯蔵穴である。本遺構の所在する場所は比較的平坦で、やや北に向かうと北下がりの斜面がはじまる。

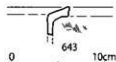
本遺構は新しい溝状遺構などと重複しているが、比較的残存状況は良好である。平面形は方形基調を呈するが、やや歪む。また、各コーナー部が丸味を帯びる。規模は南北が1.7~1.9m、東西が1.6~1.8mである。深さは検出面から0.6mで、床面はほぼ平坦である。壁は立ち上がり部がやや緩やかであるが、一部をのぞき直立気味である。

埋土の状況を見てみると、上層には新しい遺構の切り込みが確認できるが、概ねレンズ状に堆積した様子が観察できる。埋土は上層が黒褐色土で、中下層が暗褐色を呈する。下層は土がやや締まるが、上中層は比較的軟質である。各層とも地山ブロックを含む。遺構内からの出土遺物は少量で、床面から浮いた状況で土器片が出土した。

本遺構に伴う柱穴等については確認できない。

出土遺物 (第459図) のうち、643は壺である。肩部が張らない体部から、口縁部が強く外方に折れる。口縁端部は上方につまみ上げ気味である。

本貯蔵穴の時期は、出土遺物から弥生時代中期後半に比定できよう。

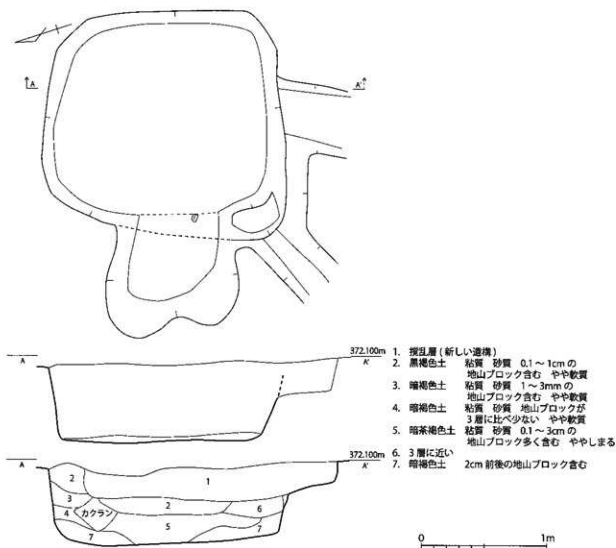
第4-59図 S K237  
出土遺物 (1/4)

本遺構に伴うかは不明である。埋土は黒褐色土を基調にして、大小の地山ブロックが含まれる。これらは一部をのぞき軟質で、レンズ状に堆積する。遺構内からの出土遺物は少量で、土器の小破片などが床面から浮いた状況でみられた。

貯蔵穴本体外方の柱穴については、周囲に攪乱遺構が多いため不明な部分もあるが、存在しない可能性が高い。よって、本貯蔵穴は上層構造を伴わないものであることが分かる。

出土遺物 (第457図) のうち、図示可能なものはいずれも壺である。641は肩が張らない直線的な体部から、口縁部がくの字状に外方に折れる。口縁端部周辺は強いヨコナエが施されるため、やや下方に折れる状況を早する。調整は体部外面に縦方向のハケ目がみられる。642は641に比べ肩部がやや張るもので、口縁部が頸部から外方にくの字状に折れる。口縁端部は上方につまみ上げられている。体部外面に縦方向のハケ目がみられる。

本貯蔵穴は、出土遺物から弥生時代中期後半に位置づけられる。



第4-60図 SK237実測図 (1/30)

### S K238

S K238 (第4-61図) は、S H60・61と重複する位置にある貯蔵穴である (第4-27図)。円形堅穴建物であるS H60の廃絶後、その中央に長方形を呈する堅穴建物であるS H61が掘り込まれるが、S K238はS H61が埋没した後に、同位置に構築されたものである。

本遺構とS H61との重複関係は、攪乱遺構なども多数重複するため、遺構検出時には明確に確認することができなかった。当初、S H60とS H61の前後関係の把握に気をとられていたが、S H61を掘り下げる過程で行った平面観察からS K238が切り込んでいることを確認した。しかし、S H61内の2基の堅穴内貯蔵穴が南東隅と北西隅に位置することから、S H61の概ね北東隅にあたる場所にあるS K238についてもS H61の堅穴内貯蔵穴ではという疑問が生じた。そのため、再度平面や層位の検証を行った。その結果、S K238がS H61の堅穴内貯蔵穴である2基と異なり堅穴コーナー部からやや離れていること、S K238がS H61内貯蔵穴の貯蔵穴1を切っていることなどが改めて把握できたため、当初に想定したS K238がS H61を切り込むということを再確認した。

本遺構の所在する場所は、緩やかな北下がりの斜面である。同様な貯蔵穴は、最も近いところでは本遺構の南側十数mにS K237が位置するのみである。

平面形は方形基調であるが、かなり丸味をおび、円形にちかい形状を呈する。規模は一辺約2.0mで、検出面からの深さは約0.2～0.4mである。床面はほぼ平坦で、遺構内に柱穴などの施設はない。底面は方形にちかい形状を呈する。底面から壁の立ち上がり部はやや緩やかで、斜めに立ち上がる。

埋土は黒褐色土を基調とするもので、各層に数cm以下の地山ブロックが多少含まれる。そして、これらの層はレンズ状に堆積する。

遺構内の遺物は、遺構規模に比して比較的少量である。ほとんどが小破片の土器で、いずれも床面から浮いた状態での出土で、床面直上からの出土はなかった。廃絶時に徹底的に片付けられ、埋められた様子が分かる。

貯蔵穴本体外方の柱穴については、SH 60・61などに伴う多数の柱穴が存在するため分かり難いが、存在しない可能性が高い。よって、本貯蔵穴は上屋構造を伴わないものであると考えられる。

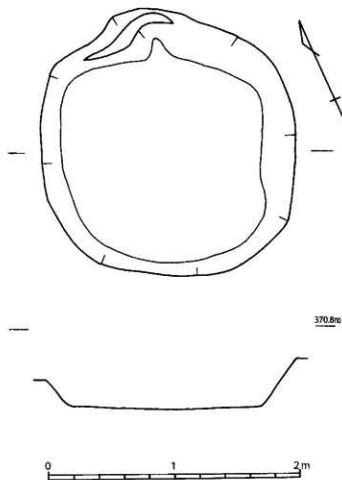
出土遺物（第434、462、463図）には土器と石製品がある。

土器は小破片が多いため、図示可能なものが少ない。そのなかで、644は壺の体部と思われる。体部最大径部分で、断面M字状の突帯が2条付されている。突帯の高さは1cm弱である。

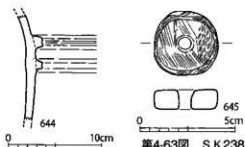
645は泥岩製の紡錘車である。平面形は略円形を呈する。径が3.3～3.4cmで、厚さ1.0cmである。平面形の大きさに比し、厚みがある感じを受ける。中央に径0.7cmの穿孔が施される。各面には製作痕が顕著に残る。

615は長さ6.8cm、幅2.7cmの砥石である。上面と側面の二面に顕著な使用の痕跡が確認できる。

本貯蔵穴の時期は、出土遺物から弥生時代中期後半に比定できよう。



第4-61図 S K 238実測図 (1/30)



第4-62図 S K 238  
出土遺物① (1/4)

第4-63図 S K 238  
出土遺物② (1/2)



S K 241

S K 241 (第4-64図)は、台地平坦面の凹地状を呈する部分にある。

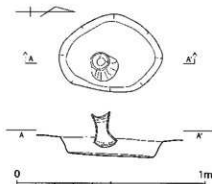
自然地形の起伏に伴う凹地と思われ、黒色土が厚く堆積する。黒色土を掘り下げる過程で、完形の器台が直立した状態で出土したため、遺構の確認を行った。しかし、黒色土中での遺構プランの確認は困難を極め、アカホヤ層ちかくになり遺構を明確に検出することができた。本遺構の北東約9mには堅穴建物であるS H 56が、また南東約4～5mには貯蔵穴であるS K 225とS K 226が各々位置するのみで、比較的単独で存在する状況が読み取れる。

遺構の平面形態は楕円形を呈する。その規模は、長径0.55m、短径0.4mである。深さは検出面から0.1mであるが、本来は黒色土の上層から掘り込まれていたと思われることから、当初はもっと深かったであろう。底面は平坦で、壁はやや斜めに立ち上がる。

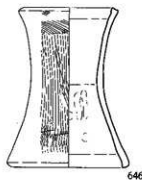
土坑内からは完形の器台が1個体出土したのみである。器台は床面からわずかに5cmほど浮くが、直立した状態で出土しており、土坑内に意識的に埋納・安置したものと推定される。他の遺物については、小土器片がわずかに出土したのみである。本遺構の性格は、状況的にみて、祭祀行為等に係わる土器埋納遺構である可能性も考えられる。

出土遺物(第4-65図)の646は完形の器台で、器高16.9cm、口径9.9cm、底径11.7cmである。器形は筒状を呈し、中程がすぼまるもので、口径よりも底径が大きい。底部、口縁部とも端部が角張り気味で、両箇所とも内外面にヨコナデが施される。外面には粗いハケ目が、また内面はナデアオサエなどの調整がみられる。

弥生時代中期後半に位置づけられよう。



第4-64図 S K 241実測図 (1/30)



第4-65図 S K 241出土遺物 (1/4)

## 第5章 第14次調査

### 1. はじめに

第14次調査は平成27年5月から平成27年11月にかけて実施した。本調査区は四日市台地中央やや東寄りに位置し、第4章の12次調査区に隣接している。調査区は南が高く、北側にかけて下る緩斜面上にあり、その比高差は10m程である。弥生時代を中心とする遺構は、北側及び南側の平坦部分に展開し、その間の斜面地にはあまり展開しない。

調査は、5月18日に重機による表土剥ぎを行い開始した。1日あたり約20人の作業員を使い、まず北側平坦部から遺構検出を始め、遺構掘り下げ、実測、遺物取り上げ、写真撮影等を実施しながら、順次南側斜面部の調査へと進めていった。その結果、縄文時代の陥穴遺構7基、弥生時代の竪穴建物10基、貯蔵穴13基、小児用甕棺2基を確認した。

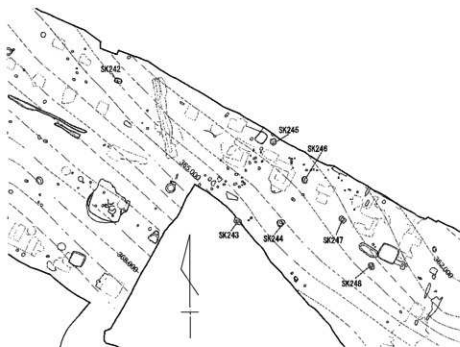
当調査区は、昭和時代の梨畑造営と杉の植林による擾乱を強く受けており、その除去に手間取る場面もあった。若干工期は伸びたものの、10月下旬には、ドローンによる空中撮影を実施し、11月上旬には重機による埋め戻しを行い、第14次調査区の現場調査は終了した。調査面積は9,480㎡である。

### 2. 縄文時代

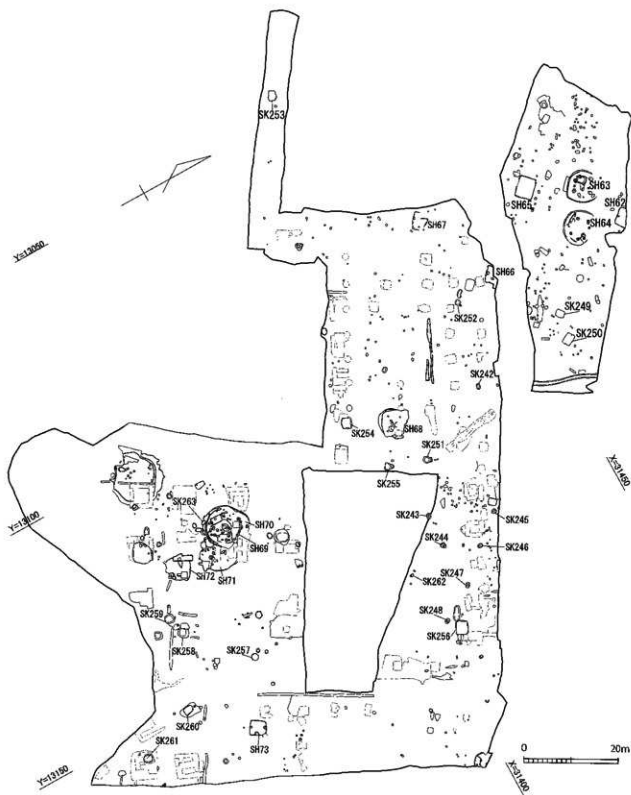
本調査区では、北側平坦部では表土直下の黒色土の堆積が確認できたが、南側の斜面上面では黒色土の堆積は認められず、本来その下にあるはずのアカホヤ層、暗黒褐色土層、暗黄褐色土層、黄褐色土層が露出している状況であった。そのため良好な縄文時代包含層の分布は確認できず、縄文時代の遺構・遺物は極めて少量であり、黒色土の堆積が残る南側平坦部で、わずかに陥穴が検出されたのみである。遺物についても弥生時代以降の遺構から少量出土したにとどまった。

#### 1 陥穴

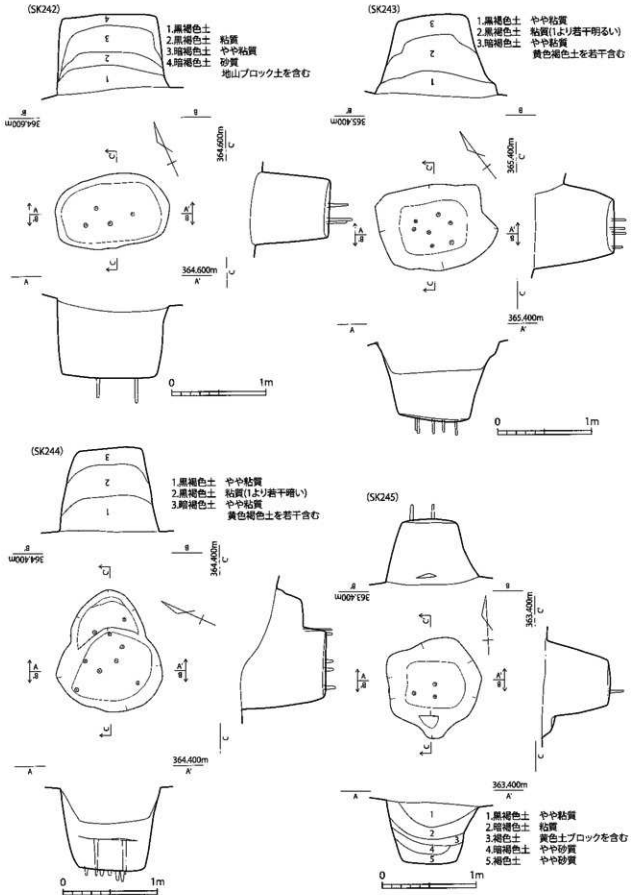
陥穴は本調査区の斜面地から北側平坦地にかけての境付近で、標高を同じくするように並べて作られていた。その間隔は約10mで3列確認された。遺物の出土はなく、厳密な時期確定はむずかしいところであるが、遺構埋土の締め具合が、他の時代のものとは明らかに異なっていたため、今回は縄文時代の遺構として報告する。



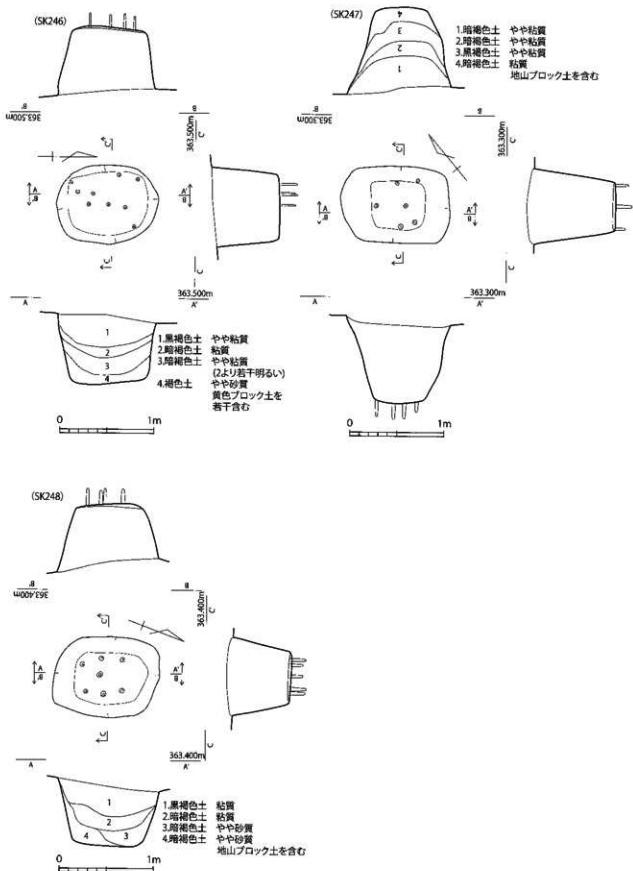
第5-1図 陥穴位置図



第5-2図 第14次調査区 (1/800)



第5-3図 SK242、SK243、SK244、SK245実測図 (1/40)



第5-4図 SK246、SK247、SK248実測図 (1/40)

## (1) SK242

SK242は高位の列の西端で確認した陥穴である。その上面は東西1.2m、南北0.8mの長楕円の平面形をもち、土坑の深さは0.68m～0.84mを測る。いずれの壁面もほぼ垂直に立ち上がる。底面からは、深さ0.2m～0.28mの深さの小穴を4基確認した。遺物は出土していない。

## (2) SK243

SK243はSK242の東約25mの位置にあり、低位の陥穴列の西端で確認した陥穴である。その上面は東西1.28m、南北0.88mの方形の平面形をもち、土坑の深さは0.58m～0.84mを測る。東西壁面は底から上にかけて若干開き気味で、南北壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面からは、深さ0.1m～0.21mの7基の小穴が確認できた。土坑からは遺物は出土していない。

## (3) SK244

SK244はSK243の北約15mの位置にあり、高位の陥穴列の東端で確認した陥穴である。その上面は東西1.16m、南北1.26mの円形の平面形をもち、その形状は2段の深さで作られている。それぞれの深さは0.28m～0.4mと0.68m～0.84mを測り、底面から上面にかけては、いずれの壁面もほぼ垂直に立ち上がる。上段底面から2基、下段底面から5基の小穴を検出している。その深さは上段が約0.45m、下段のものが0.06mから0.1mで、上下段とも穴の底が揃うように作られている。遺物は出土していない。

## (4) SK245

SK245はSK243の南東約10mの位置にあり、低位の陥穴列の中央で確認した陥穴である。その上面は東西1.04m、南北1.08mの方形の平面形をもち、その形状は南側に浅いテラス上の段がついている。それぞれの深さは0.1mほどと0.68m～0.72mを測り、いずれの壁も底面から上面にかけて若干開き気味で立ち上がる。下段底でのみ小穴が検出された。小穴の深さは0.16m～0.2mである。土坑から遺物は出土していない。

## (5) SK246

SK246は中位の列で確認した陥穴で、SK244とSK245の中間に位置する。その上面は東西1.12m、南北0.84mの楕円の平面形をもち、土坑の深さは0.68m～0.8mを測る。いずれの壁面もほぼ垂直に立ち上がる。底面からは、深さ0.1mから0.16mの小穴を9基確認した。遺物は出土していない。

## (6) SK247

SK247はSK245の南東約10mの位置にあり、低位の陥穴列の中央で確認した陥穴である。その上面は東西1.25m、南北0.84mの方形の平面形をもち、土坑の深さは0.75m～1.00mを測る。東西壁面は底から上にかけて若干開き気味で、南北壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面からは、深さ0.06mから0.20mの6基の小穴が確認できた。土坑からは遺物は出土していない。

## (7) SK248

SK248はSK247の南東約10mの位置にあり、低位の陥穴列の東端で確認した陥穴である。その上面は東西0.84m、南北1.12mの方形の平面形をもち、土坑の深さは0.58m～0.72mを測る。いずれの壁面も底から上にかけて若干開き気味に立ち上がる。底面からは、深さ0.16mから0.22mの7基の小穴が確認できた。土坑からは遺物は出土していない。

3. 弥生時代

四日市遺跡は台地上の東半で、おもに弥生時代の集落が確認されているが、当調査区でも遺構のほとんどは弥生時代のものであった。しかし、その遺構密度は東側の第1次、第13次、第16次調査と比べると疎らなものであった。遺構の内訳は、竪穴建物10基、貯蔵穴13基、小児用甕棺2基である。

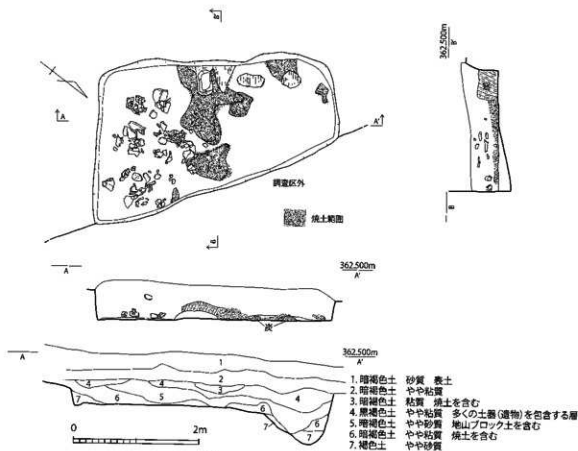
1 竪穴建物

(1) SH62

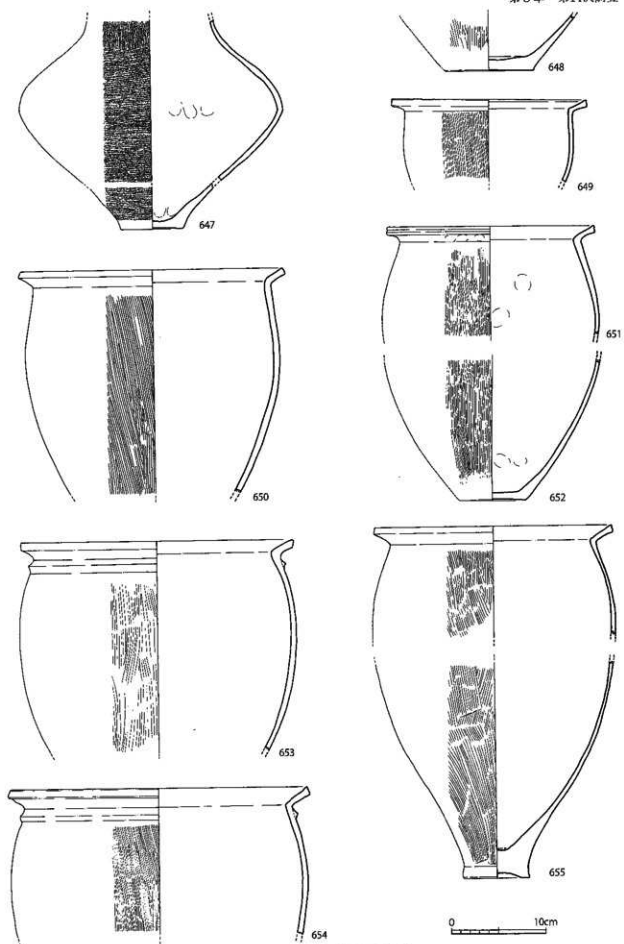
SH62は、当調査区の北端で確認され、北半は調査区外に広がる。規模は東西3.3m、南北2.8m以上で、検出面からの深さ0.50mで、方形の平面をもつ。主柱穴は2本で、主軸はN-43°-Eである。また、南壁中央付近に長軸70cm、短軸40cm、深さ30cmの土坑が掘られる。この土坑は底面が被熱し硬化している。さらに多量の焼土及び炭化物が床面に広がっていた。床面には貼床は施されていない。

遺物は、竪穴の西半部に集中して出土している。647は竈で胴部上位に最大径がある。外面は丁寧な研ぎと丹塗りが施されている。649から660は甕である。649・650は胴部があまり張りを持たず、「く」の字状の口縁部へと続く。651、655、656は胴部に最大径があり、外面はヨコナデと荒いハケ、内面はヨコナデを施す。653、654、657は同じく胴部が張るタイプであるが、「く」の字状口縁下に1条の三角突帯を張る。甕の底部は、若干厚く、内面に指頭圧痕をもつ。661から663は高坏で、口縁部端部は若干垂れ気味で、663は鋤先状口縁である。口径は20.9cmと25.2cmである。664は石包丁の破片で両面に製作時の研磨がみられる。665は磨石である。

出土遺物より、本竪穴建物は弥生時代中期後半に比定できる。

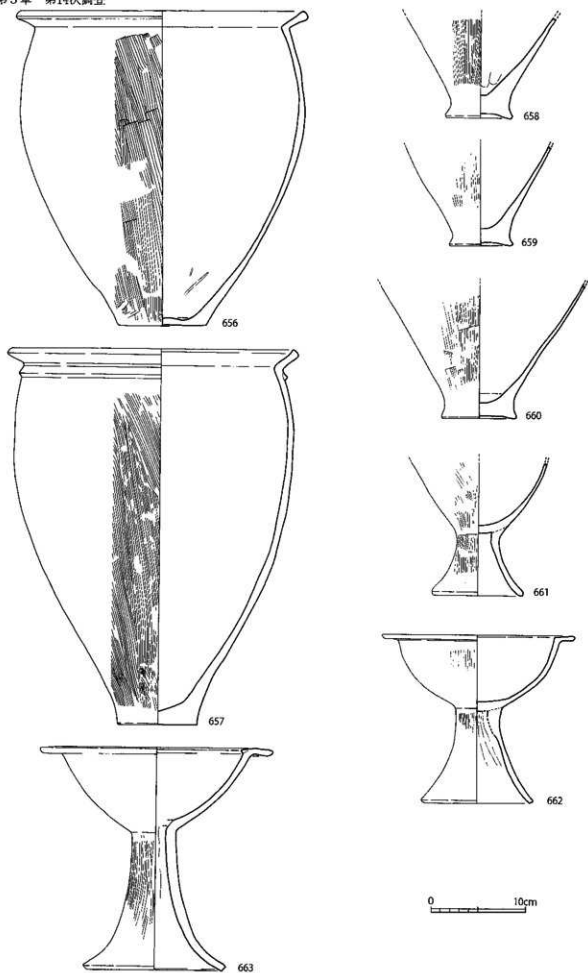


第5-5図 SH62実測図 (1/60)

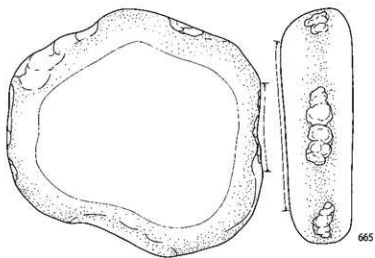
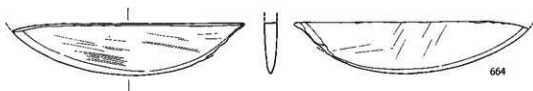


第5-6圖 S H62出土遺物実測図(1)

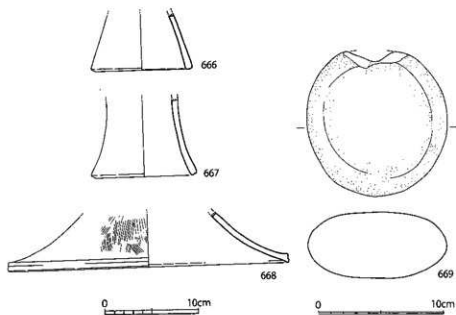




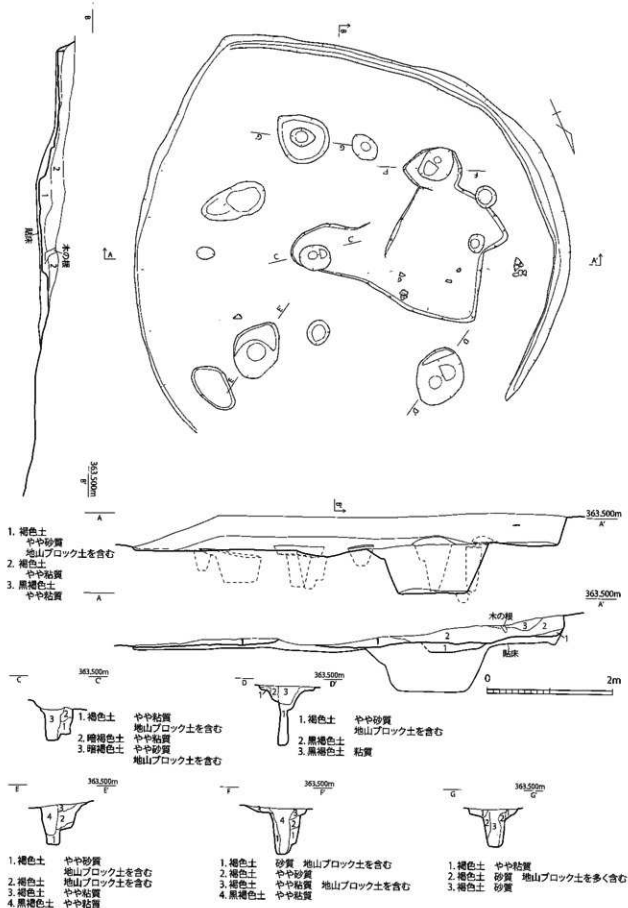
第5-7図 SH62出土遺物実測図(2)



第5-8図 SH62出土遺物実測図(3)



第5-9図 SH63出土遺物実測図



第5-10図 SH63実測図 (1/60)

## (2) SH63

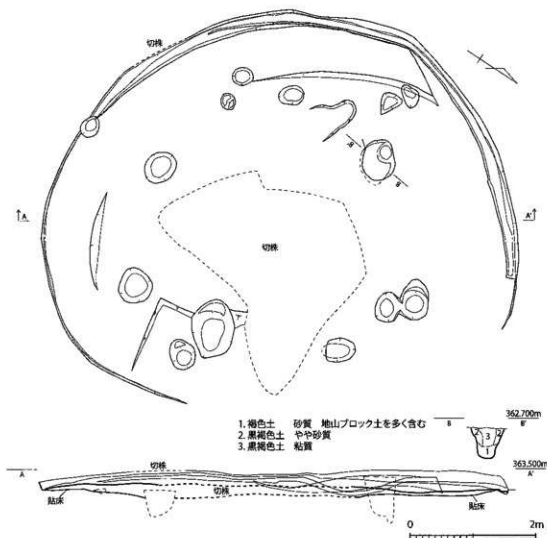
SH63は、SH62の南西約10mに位置している。規模は東西7.3m、南北7.2mで、検出面からの深さ0.47mで、円形の平面をもつ。周囲には幅0.15m、深さ0.1mの規模の溝が巡る。4本の主柱穴が方形に確認され、柱間は南北が3.3m・3.5m、東西が2.3m・2.9mである。その内側の壁穴中央部付近で5本目の柱穴を検出した。柱穴の深さは0.55mから0.90mである。西側柱間に長軸2.2m、短軸1.5m、深さ80cmの方形土坑が掘られている。柱穴の主軸はN-20°-Eである。床面は貼床を施していた。若下の遺物は出土したので、第59図に示した。

出土遺物（第59図）には土器と石器がある。686、688は器台で、口径は10.6cmと11.9cmである。689は器台の脚部で、復元口径は約30cmとなっている。690は安山岩製に磨石である。

出土遺物より、本貯蔵穴は弥生時代中期後半に比定できる。

## (3) SH64

SH64は、SH63の南東に隣接してある壁穴建物である。平面形は円形を呈し、その規模は東西7.6m、南北6.2m以上で、検出面からの深さ0.10mと浅い。北側に向かって傾斜しているため、おもに南半部の周囲には幅0.25m、深さ0.1mの規模の溝がある。主柱穴は4本確認され、柱間は南北が3.3m・3.5m、東西が2.4m・2.8mである。柱穴の深さは0.35mから0.72mである。壁穴建物中央部は杉の植樹による攪乱を受けており、中央土坑等の遺構は不明である。柱穴の主軸はN-35°-Eである。若干の遺物は出土したが、図示するほどの遺物はない。



第5-11図 SH64実測図 (1/60)

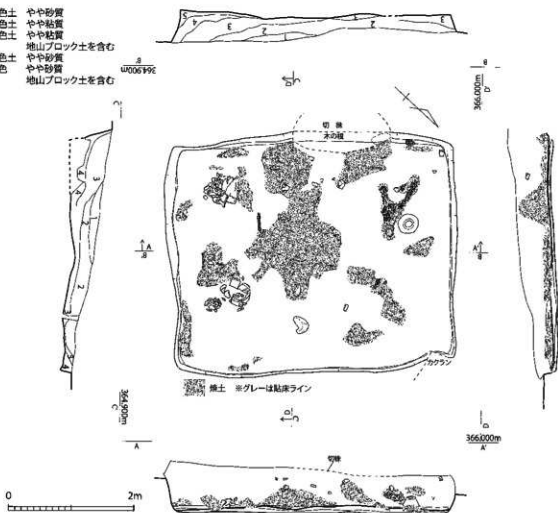
(4) SH65

SH65は、SH63の南西約10mに位置している。規模は東西4.6m、南北3.8mの小型竪穴建物で、検出面からの深さ0.50mで、長方形の平面をもつ。支柱穴は3本確認され、柱間は南北が3.3m・3.5m、東西が2.3m・2.9mである。柱穴の深さは0.55mから0.90mである。主軸はN-42°-Wである。また、南壁中央付近に長軸70cm、短軸40cm、深さ30cmの土坑が掘られる。この土坑は底面が被熱し硬化している。さらに多量の焼土及び炭化物が埋土中に含まれていた。また、東壁側にはベッド状遺構が確認されている。床面には貼床が施されていた。床面直上から大型筒形器台及び甕が出土した。

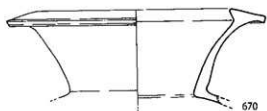
出土遺物（第5-13図）には土器と石器がある。670は鋤先状口縁をもつ壺で、その復元口径は28cm。671は胴の貼らない甕で、口縁端部をつまみ上げる。復元口径27.6cm。672は大型筒形器台であるが脚部は出土していない。口径16.0cm、頭部底径32.8cm、残存高は16.5cm。外面はヨコナア後、縦方向のミガキを施し、赤色顔料が塗布されている。内面は指圧後工具によるヨコナアを施す。脚部の接合痕を残す。673は10cm程の磁石。674は姫島産黒曜石の石鏃で、五角形基部の形状を呈し、基部には弧状を呈する浅い切りがみられる。縄文時代晩期にも同様の形態がみられる。

出土遺物より、本竪穴建物は弥生時代中期後半に比定できる。

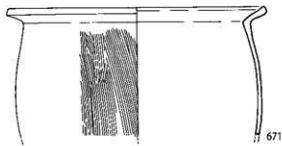
- 1. 黒褐色土 やや砂質
  - 2. 暗褐色土 やや粘質
  - 3. 黒褐色土 やや粘質
  - 4. 暗褐色土 やや砂質
  - 5. 暗褐色土 やや砂質
- 地山ブロック土を含む  
 地山ブロック土を含む



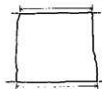
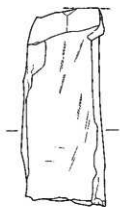
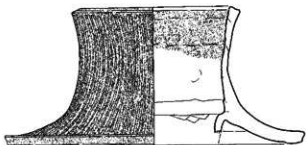
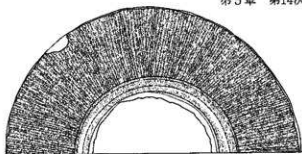
第5-12図 SH65実測図 (1/60)



670

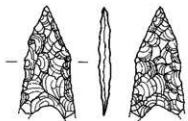


671



673

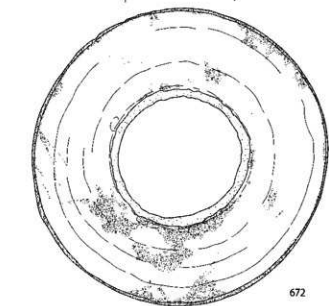
0 5cm



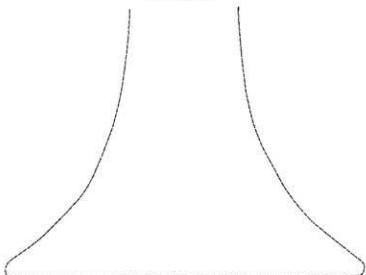
674

0 2cm

0 20cm



672



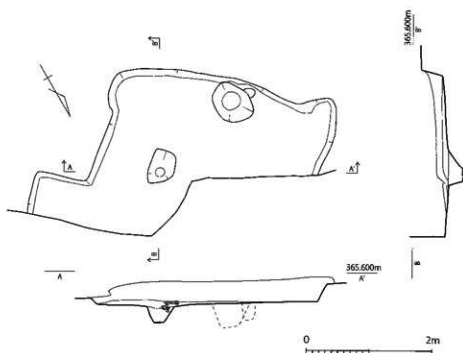
第5-13図 SH65出土遺物実測図

(5) SH66

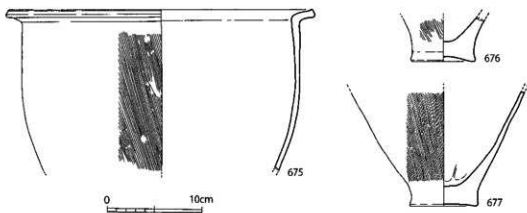
SH66は、SH64の南約20mにあり、南に向かって上る傾斜下の平地にある竪穴建物である。平面形は方形を呈し、その規模は東西3.8m、南北2.6m以上で、検出面からの深さは0.40mである。東壁には幅0.7mの張り出し部を持つ。主柱穴は1本確認され、その深さは0.30mである。主軸はN-40°-Eである。また、南壁中央付近に長軸70cm、短軸52cm、深さ37cmの土坑が掘られる。遺物は主に柱穴付近で出土している。床面から貼床は確認できなかった。主な出土遺物は第5-15図に示した。

675は胴の張らない甕で、「く」の字状口縁端部を若干つまみ上げる。復元口径32cm。外面は横方向にナデの後、縦方向のハケ目を施す。676・677は甕の底部。底径は6.5cm、7.0cmを測る。外面には縦方向のハケ目、内面には指圧痕が施されている。

本遺構は弥生時代中期後半に比定できる。



第5-14図 SH66実測図 (1/60)



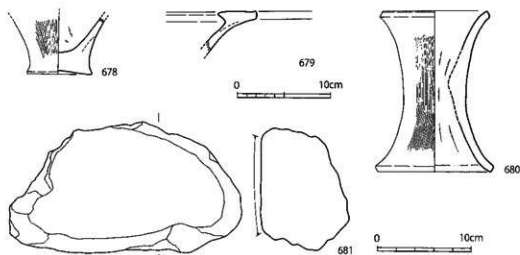
第5-15図 SH66出土遺物実測図

## (6) SH67

SH67は、SH66の南西20mにある竪穴建物である。南に向かって上る傾斜地にある小型の竪穴建物である。平面形は方形を呈し、その規模は東西3.7m、南北3.2m以上で、検出面からの深さは0.38mである。東壁には幅0.7mの張り出し部を持つ。主柱穴は1本確認され、その深さは0.68mである。主軸はN-22°-Eである。また、南壁中央付近に長軸40cm、短軸35cm、深さ35cmの土坑が掘られる。遺物は主に竪穴建物の中央部付近で出土している。床面から貼床は確認できなかった。

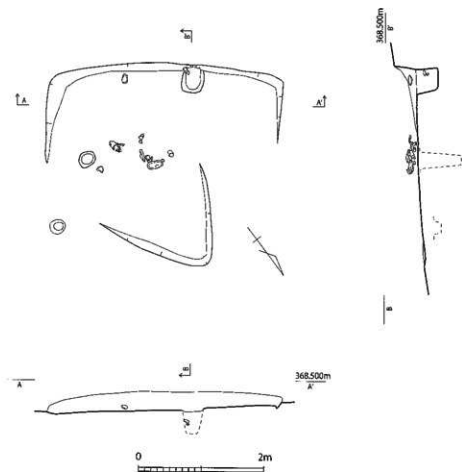
出土遺物（第5-16図）には土器と石器がある。678は甕の底部で底径6.8cm。外面は横方向にナデの後、縦方向のハケ目を施す。679は高坏、680は器台である。681の台石は竪穴建物中央部から出土している。

出土遺物より、本竪穴建物は弥生時代中期後半に比定できる。



第5-16図 SH67出土遺物実測図





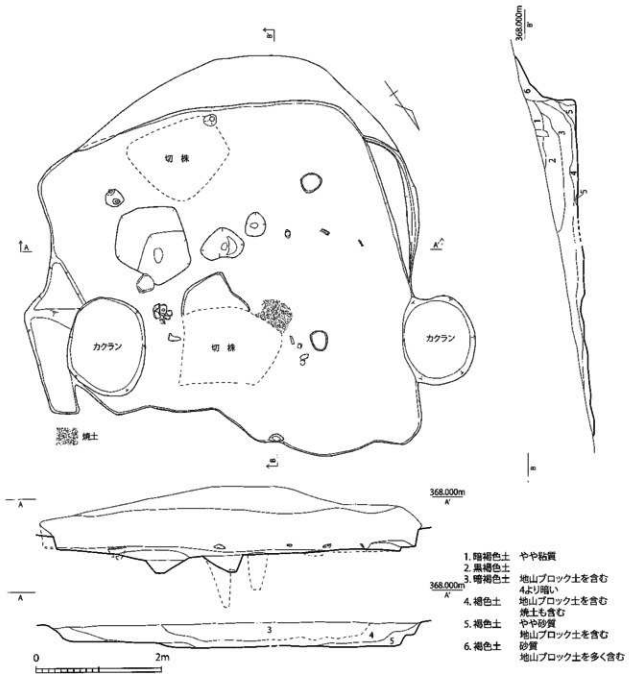
第5-17図 SH067実測図 (1/60)

(7) SH68

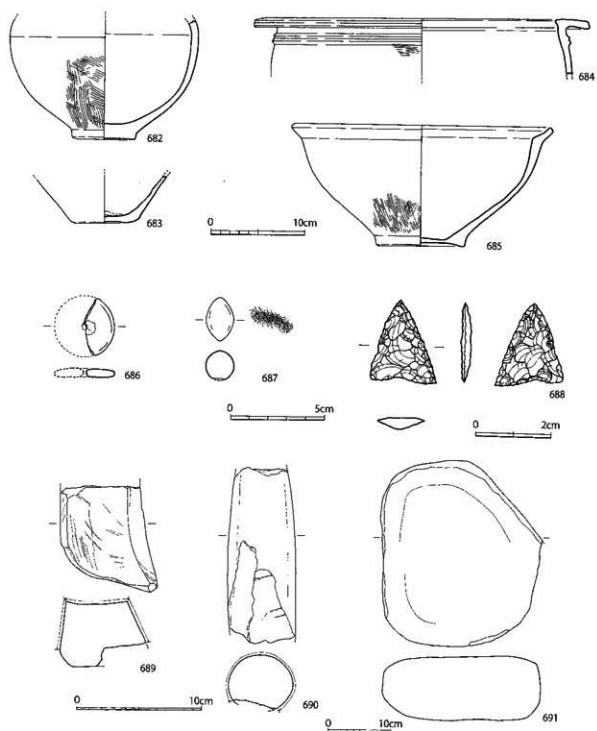
SH68は、本調査区の中央部に位置し、そこは北に向かって下る斜面地にあたるため、南側は検出面から70cmの深さで床面となるが、北側は壁の立ち上がりはない。平面形は隅丸の正方形を呈し、その規模は東西5.2m、南北5.6m以上である。主柱穴は中央部付近に深さ0.65cmのものが1本と深さ0.2mから0.35mのものが3本確認されている。しかし、北東部の1本は後世の攪乱を受けているため検出できなかった。柱間は南北が2.5m、東西が3.1mである。柱穴の主軸はN-16°-Eである。竪穴建物中央部は杉の植樹による攪乱を受けていたが、1.2m規模の浅い土坑とその周辺から焼土を検出した。土坑東側から682の壺と685の鉢形土器が出土している。床面から貼床は確認できなかった。

出土遺物（第5-19図）には土器と石器と土製品がある。682は煮で胴部上半を欠損している。684は垂れ気味の錫先状口縁で断面四角の突帯を貼る。685の鉢は復元口径37cm、高さ12.8cmを測る。686の紡錘車の径は6.5cm。687は土製の投弾である。形状はラグビーボール状を呈し、両端がやや尖り気味である。688はサヌカイト製の二等辺三角形を呈する石鏃で基部には弧状を呈する浅い挟りが見られる。689は砂石製の砥石、690は安山岩製の磨製石斧、691の台石は土器集中部の南側で出土している。

出土遺物より、本遺構は弥生時代中期後半に比定できる。



第5-18図 SH68実測図 (1/60)



第5-19図 SH68出土遺物実測図

## (8) SH69・SH70・SH71

SH69・SH70・SH71は、本調査区で最高地にある南側の平坦部で確認された竪穴建物で、3基が重なるように検出されている。表面及び土層観察の結果、SH69→SH70、SH71→SH70の順に建てられている。

SH69は、竪穴の大半をSH70に切られているため、遺構は主柱穴が1本確認できたのみで、その規模・平面形ともに不明である。

SH70は、SH69の南で確認された円形の竪穴建物である。その規模は東西8.5m、南北8.2m以上で、検出面からの深さ0.60mを測る。壁の立ち上がり部には幅25cm、深さ10cm程度の塗溝が、ほぼすべての壁際に沿って掘られている。深さ65～80cmの主柱穴が3本確認され、その柱間は南北が2.8m、東西が3.6mである。竪穴建物中央部に長軸190cm、短軸120cm、深さ40cmの土坑が掘られる。また竪穴東部には長軸250cm、短軸150cm、深さ40cmの方形土坑が見られた。中央土坑の北側は5cmほど高く作られたベッド状となっている。

SH71はSH70の東にあり、その規模は東西5.6m、南北7.5mほどで、検出面からの深さは0.40mで、楕円形の平面をもつ。主柱穴は1本確認され、その深さは0.30mである。後世の擾乱が激しく、他の床面遺構は検出できなかった。

いずれの竪穴建物も床面で貼床を確認することはできなかった。

SH69から出土した遺物のうち、図示できたのは692と693の2点である。692は壺で、端部が外反し、口縁直下に三角突帯を貼り付ける。

SH70の遺物は694から699の6点。694は蓋で、直径11.3cm、高さ1.8cm。紐を通すための孔が左右2個ずつ計4個穿孔されている。外面は丁寧なナデ調整が施されている。695の甕は「く」の字状口縁端部を若干つまみ上げる。696・697は甕の底部で厚底を呈している。そのうち697は上げ底である。698は円形の土器片加工品である。土器片を打ち欠きにより円形に成形した後、縁部を丁寧に磨いている。表面に丹塗りがある。699は凝灰岩製の石包丁である。穿孔が1か所確認され、両面から穿った状況が確認できる。

SH71の出土遺物は700から703の4点である。700は「く」の字状口縁直下に三角突帯を貼り付けた甕で、その胴部は張らない。701から703の底部はあまり厚くはなく、外面はヨコナデ後、縦方向のハケ目を施す。内面には指圧痕がみられる。

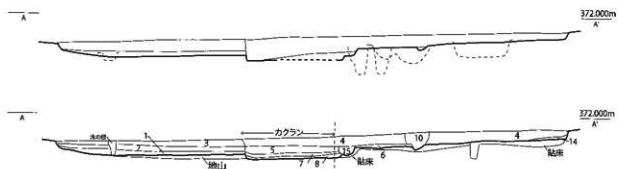
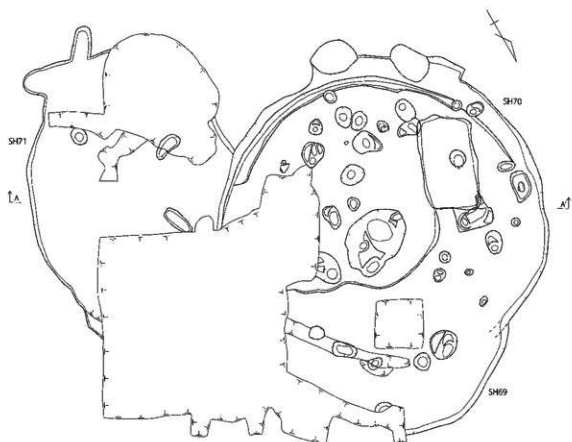
出土遺物より、SH69・SH70・SH71ともに弥生時代中期後半に比定できる。

## (9) SH72

SH72は、SH71の南に隣接してある竪穴建物である。平面形は隅丸方形を呈し、その規模は東西4.7m、南北5.0mで、検出面からの深さは0.30mを測る。主柱穴は2本確認され、柱間は3.3mである。柱穴の深さは0.3mと0.24mである。柱穴の主軸はN-16°-Eである。SH72は梨畑造成時の擾乱を受けており、柱穴以外では床面から2基の浅い土坑と北側床面から若干の炭化物の検出にとどまった。

704・705は胴の張らない甕で、「く」の字状口縁端部を若干つまみ上げる。それぞれの復元口径は23.1cmと24.7cmである。外面は横方向にナデの後、縦方向のハケ目を施す。706の甕は、垂れ気味の鋤先状口縁で断面四角の突帯を貼る。復元口径は32.6cm、外面はヨコナデ後、横方向のハケ目、赤色顔料が塗布されている。707・708の底部は比較的厚く、上げ底気味である。709は高坏の脚部で、外面に丹塗りを施す。710は石製の紡錘車で、幅5.05～5.2cm、厚さ1.1cmを測る。中央に径0.7cmの穿孔が1か所確認された。711はサヌカイト製の石剣で上半を欠損する。残存長は4.6cm。712はサヌカイト製の石鏃で、長さ3.5cmである。713は西九州産の黒色黒曜石製の剥片石器である。

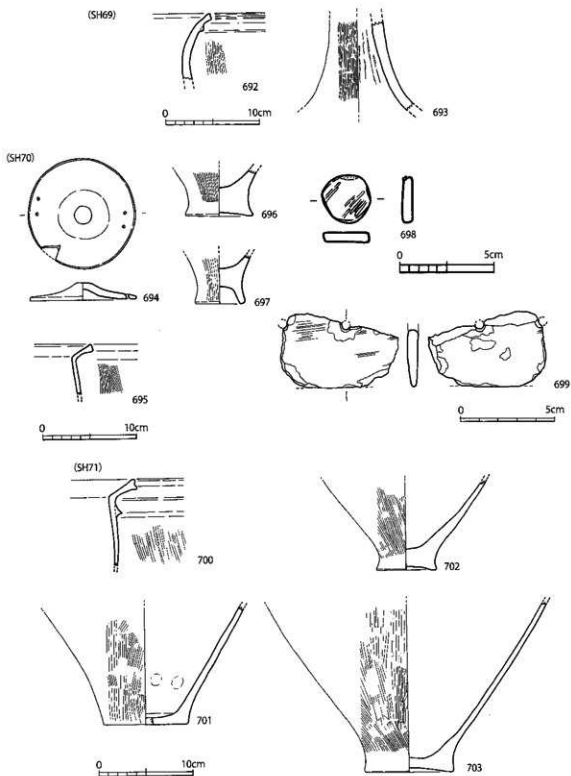
本遺構は弥生時代中期後半に比定できる。



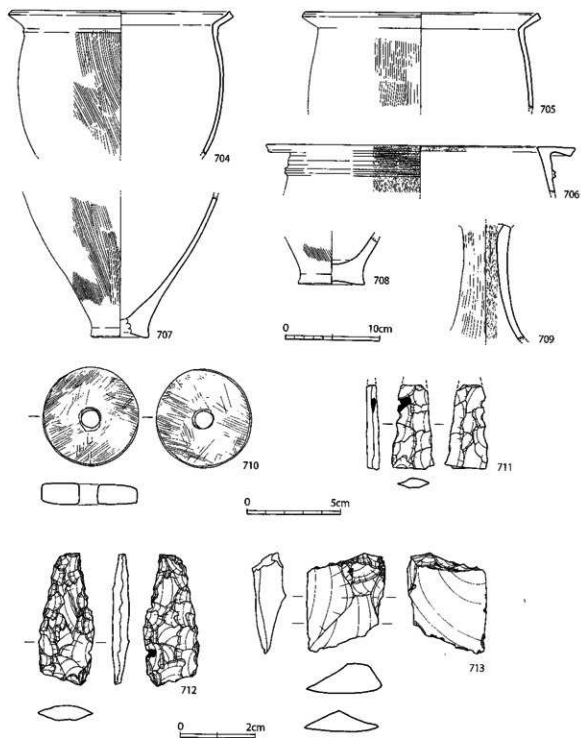
- |         |               |         |                   |
|---------|---------------|---------|-------------------|
| 1. 黒褐色土 | 粘質            | 6. 褐色土  | 地山ブロック土を多く含む(粘床か) |
| 2. 暗褐色土 | 粘質 地山ブロック土を含む | 7. 暗褐色土 | やや粘質              |
| 3. 暗褐色土 | やや粘質          | 8. 暗褐色土 | やや粘質 地山ブロック土を含む   |
| 4. 暗褐色土 | やや粘質          | 9. 暗褐色土 | やや粘質 地山ブロック土を含む   |
| 5. 暗褐色土 | やや砂質          | 10. 褐色土 | 砂質 地山土(黄色)を多く含む   |

0 5m

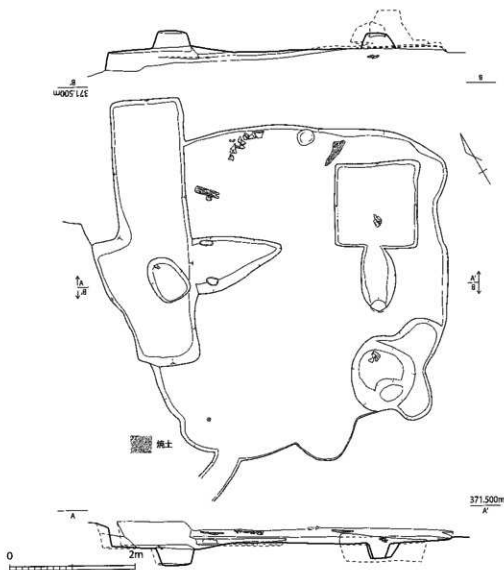
第5-20図 SH69, SH70, SH71実測図 (1/100)



第5-21図 SH69, 70, 71出土遺物実測図



第5-22図 SH72出土遺物実測図



第5-23図 SH72実測図 (1/60)

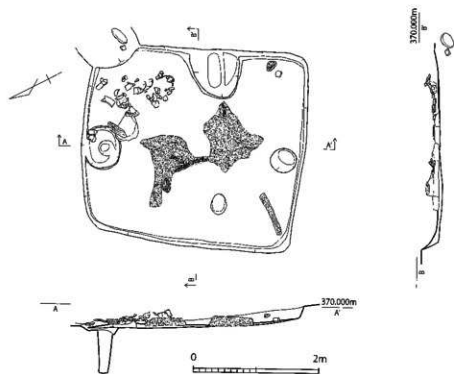
## (10) SH73

SH73は、当調査区の南東部の南から北に向けて下る斜面地にある小型の竪穴建物である。平面形は方形を呈し、その規模は東西3.1m、南北3.7mである。北側に向かって傾斜しているため検出面からの深さは南側で0.25m、北側では0.05mとなっている。主軸はN-18°-Eである。主柱穴は2本確認され、柱間は2.9m、柱穴の深さは0.67mと深い。東壁中央部に浅い土坑が確認できた。竪穴建物中央部には焼土が広がり、床面全体から10点ほどの炭化物が検出された。そして北東隅付近の床面から土器が集中して出土した。

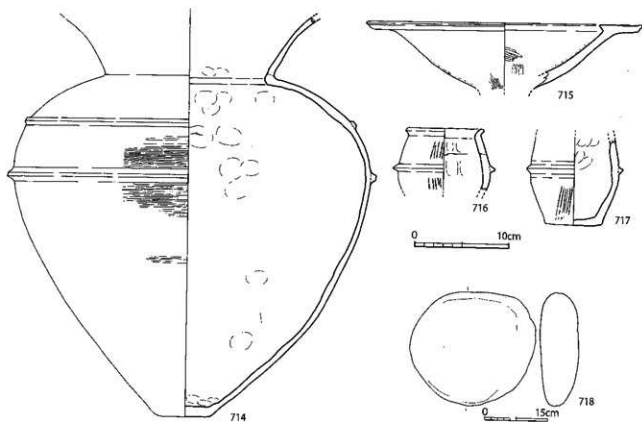
出土遺物(第5-25図)には土器と石器がある。714は壺の胴部で、復元最大径は37.2cm、平底の底部径は18.1cmである。最大径部位及びその上部に2条のM字状突起帯が巡る。頸部から口縁にかけてはやや外湾しながら立ち上がる。外面調整はヨコナデの後、横方向のミガキを施している。715は高坏で、口縁部は鋤先を呈し、その体部は浅い。復元口径は20.7cmを測る。716・717は小型壺であり、厚さは器全体に均等である。その形態は、口縁部が小さく外反し、胴部は直線的に開き、器高の半分位置に最大径があり、底部に向けてしほみ、底は平底を呈す。口縁部径は、底部径より若干広い。胴部最大径の上部に三角突起帯を貼り付ける。718は約40cmほどの台石で、北東の土器集中部付近で出土している。

本竪穴建物は弥生時代中期後半に比定できる。





第5-24図 SH73実測図 (1/60)



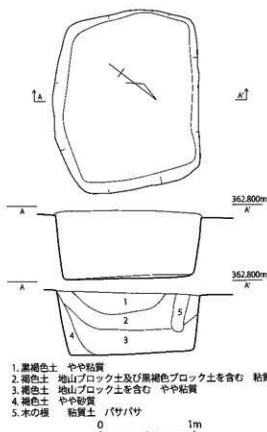
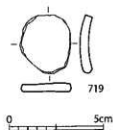
第5-25図 SH73出土遺物実測図

## 2 貯蔵穴

## (1) SK249

SK249は、SH64の南東20mの位置にある貯蔵穴である。東西方向に主軸をもち、平面形は長方形を呈している。長さ1.83m、幅1.56m、深さ0.7mで、床面は平坦である。本遺構に伴う柱穴や土坑は、床面及び遺構周辺から検出できなかった。遺構内からの遺物は極めて散発的で、床面から浮いた状況である。図示できるものは下に示した。

719は円形の土器片加工品である土器片を打ち欠きにより円形に成形した後、縁部を丁寧に磨いている。大きさは5.4cm～6.2cmである。



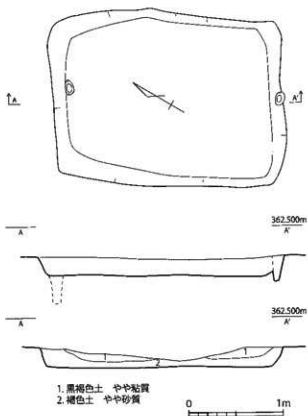
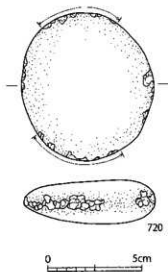
1. 黒褐色土 やや粘質
2. 褐色土 地山ブロック土及び黒褐色ブロック土を含む 粘質
3. 褐色土 地山ブロック土を含む やや粘質
4. 褐色土 やや砂質
5. 木の根 粘質土 バサバサ

第5-26図 SK249実測図 (1/40)・出土遺物実測図

## (2) SK250

SK250は、SK249の東5mに位置する貯蔵穴である。南北方向に主軸をもち、平面形は長方形を呈している。長さ2.44m、幅1.88m、深さ0.2mで、床面は平坦である。長軸の両端に深さ30cmほどの柱穴を伴う。出土遺物は少数で、図示できる土器はなかった。

720は砂岩製の敲石で、円形状の川原石を利用したものである。その大きさは7.1～7.8cmである。



1. 黒褐色土 やや粘質
2. 褐色土 やや砂質

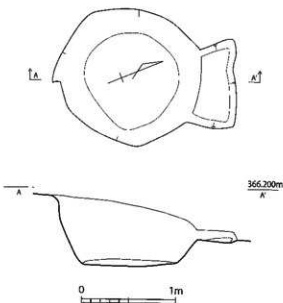
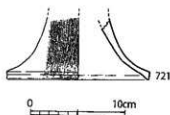
第5-27図 SK250実測図 (1/40)・出土遺物実測図

(3) SK251

SK251は、当該調査区では最西部にある貯蔵穴である。平面形は円形で、北側に方形の段をもつ。長さ2.0m、幅1.42m、深さ0.7mで、床面は平坦である。本遺構に伴う柱穴や土坑は検出できなかった。遺構内からの遺物は極めて散発的で、床面から浮いた状況である。

721は高坏の脚部で、脚端部で大きく開く形状である。復元底部径は14.8cm。外面はヨコナデ後、縦方向のミガキ、丹塗りを施している。

本貯蔵穴は、弥生時代中期後半に比定できる。



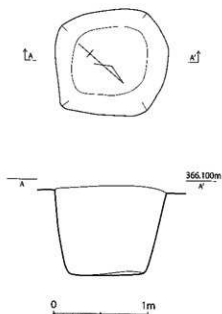
第5-28図 SK251実測図 (1/40)・出土遺物実測図

(4) SK252

SK252は、SH66の南約10mの位置にある方形の貯蔵穴である。長さ1.2m、幅1.1m、深さ1.0mで、床面は平坦である。本遺構に伴う柱穴や土坑は検出できなかった。土器片は床面から浮いた状態で出土した。

725は壺の底部で、726は輝緑凝灰岩製の石包丁の破片である。両面に製作時の研磨痕がみられる。穿孔が1か所確認され、両面から穿った状況が確認できる。

本遺構は、弥生時代中期後半に比定できる。



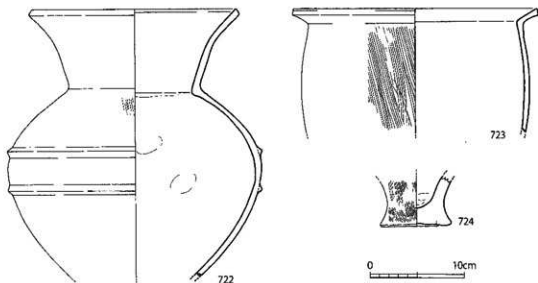
第5-29図 SK252実測図 (1/40)

(5) SK253

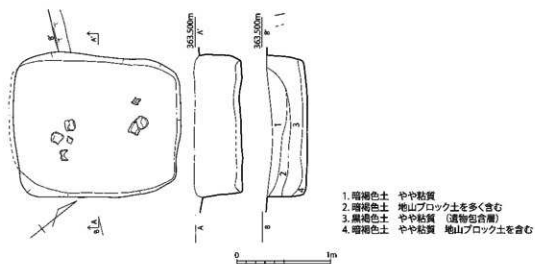
SK253は、調査区中央部を東西に走る里道の脇にあり、縄文時代の陥穴遺構SK243に隣接する貯蔵穴である。東西方向に主軸をもち、平面形は長方形を呈している。長さ1.8m、幅1.5m、深さ0.45mで、床面は平坦である。本遺構に伴う柱穴や土坑は、床面及び遺構周辺から検出できなかった。土器片は床面から浮いた状態で出土した。

722は壺で、復元口径は21.8cm。最大径部位及びその下部に2条の三角突帯が巡る。頸部から口縁にかけてはやや外湾しながら立ち上がる。723は「く」の字状口縁の甕で、胴は張らずに底部にいたる。724は上げ底気味の甕の底部である。

本貯蔵穴は、弥生時代中期後半に比定できる。



第5-30図 S K 252出土遺物実測図



第5-31図 S K 253実測図 (1/40)・出土遺物図

(6) S K 254

S K 254は、S H 68の南約10mにある貯蔵穴である。東西方向に主軸をもち、平面形は正方形を呈している。長さ2.3m、幅2.2m、深さ1.1mで、床面は平地である。本遺構に伴う柱穴や土坑は、床面及び遺構周辺から検出できなかった。土器片は床面から浮いた状態で出土した。

727は「く」の字状口縁の甕で、胴は張らずに底部にいたる。728は鋤先状口縁で、上面にミガキの暗文がみられる。表面は丹塗りが施される。729は輝緑凝灰岩製の石包丁である。両面に製作時の研磨痕がみられる。

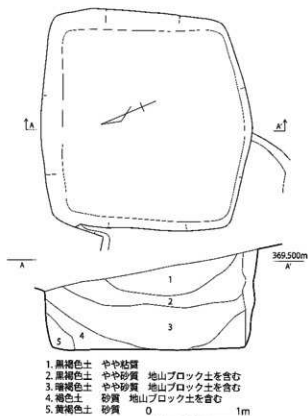
本遺構は、弥生時代中期後半に比定できる。

(7) S K 255

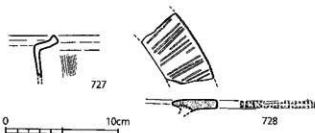
S K 255は、S H 68の東約10mにある貯蔵穴である。南北方向に主軸をもち、長さ1.8m、幅1.5m、深さ1.2mで、床面は平地である。南側に1段テラスを持つ。本遺構に伴う柱穴や土坑は検出できなかった。土器片は床面から浮いた状態で出土した。

730は「く」の字状口縁の甕で、胴は張らずに底部にいたる。731、732は甕の底部で、733は鉢の脚部である。

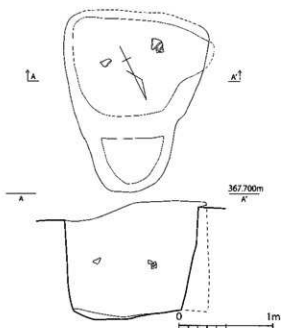
本貯蔵穴は、弥生時代中期後半に比定できる。



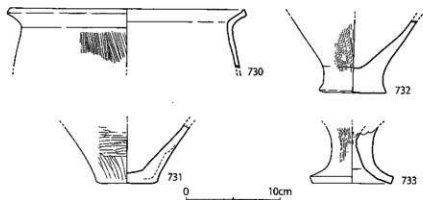
- 1. 黒褐色土 やや粘質
- 2. 黒褐色土 やや砂質 地山ブロック土を含む
- 3. 暗褐色土 やや砂質 地山ブロック土を含む
- 4. 褐色土 砂質 地山ブロック土を含む
- 5. 黄褐色土 砂質



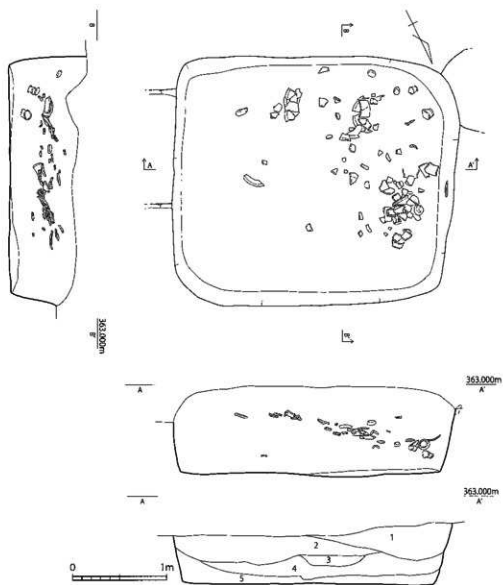
第5-32図 S K 254実測図 (1/40)・出土遺物実測図



第5-33図 S K 255実測図 (1/40)

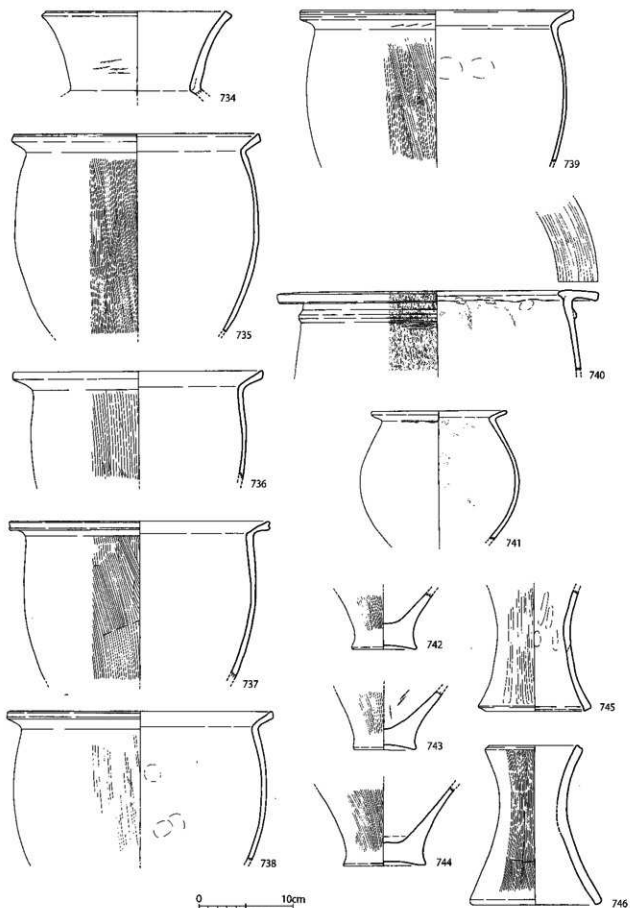


第5-34図 S K 255出土遺物実測図



- |         |                    |         |              |
|---------|--------------------|---------|--------------|
| 1. 暗褐色土 | やや粘質 (遺物包含層 焼土を含む) | 4. 暗褐色土 | 地山ブロック土を若干含む |
| 2. 暗褐色土 | 地山ブロック土を含む         | 5. 褐色土  | 地山ブロック土を含む   |
| 3. 暗褐色土 | 地山ブロック土を多く含む       |         | やや粘質         |

第5-35図 S K 256実測図 (1/40)



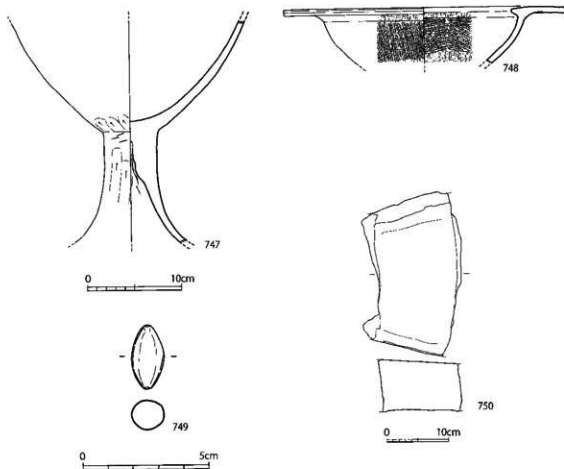
第5-36図 SK256出土遺物実測図 (1)

## (8) S K256

S K256は、調査区中央部を東西に走る里道付近にあり、縄文時代の陥穴遺構 S K248の北東にある貯蔵穴である。東西方向に主軸をもち、平面形は長方形を呈している。長さ3.0m、幅2.6m、深さ0.68mで、床面は平坦である。本遺構に伴う柱穴や土坑は、床面及び遺構周辺から検出できなかった。遺物は整穴が埋まっていく段階で、集中的に廃棄されたもので、床面から浮いた状態で出土している。

734は壺で、復元口径は20.2cm。頸部から口縁にかけてはやや外湾しながら立ち上がる。735～740は「く」の字状口縁甕で、いずれも外面は横方向にナデの後、縦方向のハケ目を施す。735・739は胴部が若干張り、口縁端部をつまみ上げる。736～738は胴が張らず底部に続くタイプである。740は垂れ気味の動先状口縁で断面M字の突帯を貼る。復元口径は34.0cm、丹塗りを施す。741の針は「く」の字状口縁で、胴が張るタイプである。742～744は上げ底気味の甕の底部である。745・746は器台で、内面に絨り、外面には横方向にナデの後、縦方向のハケ目調整を施す。747・748は高坏である。747は身が深いタイプで、外面ヘラ削り後にナデを施している。748は内外面ともミガキを施した後、丹塗りをを行っている。復元口径は29.8cm。749は5cmほどの大きさの土製の投弾である。形状はラグビーボール状を呈し、両端がやや尖り気味である。750は破損した台石である。

出土遺物より、本貯蔵穴は弥生時代中期後半に比定できる。



第5-37図 S K256出土遺物実測図(2)

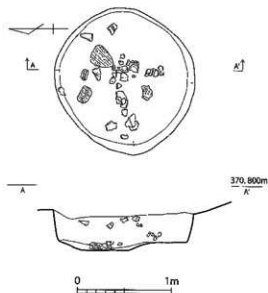


(9) S K257

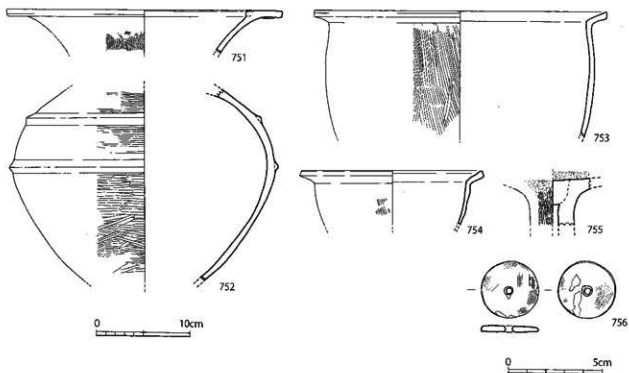
S K257は、当調査区で最高地にある南側の平坦部で確認された貯蔵穴である。平面は円形を呈している。南北1.6m、東西1.5m、深さ0.44mで、床面は平坦である。本遺構に伴う柱穴や土坑は、床面及び遺構周辺で確認できていない。床面で炭化物が確認され、土器等の遺物も床面近くで出土している。

751・752は壺である。751は鋤先状口縁を呈し、復元口径は29.1cmを測る。752は復元最大径は28.8cm、最大径部位及びその上部に2条の三角突帯が巡る。外面調整はヨコナデの後、横方向のミガキを施している。753は「く」の字状口縁壺で、胴部は張らない。754は鉢形土器、口径は19.2cmである。755は高坏の脚部で、外面に丹塗りを施す。756は径6.1cmの石製の紡錘車である。中央部に径約0.3cmの円形の孔を穿つ。

本貯蔵穴は、弥生時代中期後半に比定できる。



第5-38図 S K257実測図 (1/40)



第5-39図 S K257出土遺物実測図

(10) S K 258

S K 258もS K 257同様、調査区南側の平坦部で確認された貯蔵穴である。平面は隅丸方形を呈している。南北2.4m、東西2.0m、深さ1.24mで、床面は平坦である。本遺構に伴う柱穴や土坑は検出できなかった。遺物は床面付近で若干出土したが、細片であったため図示できるものはなかった。第5-41図は廃棄後の貯蔵穴が埋まる段階に流入した遺物を掲載した。

757は蓋で、口縁部は立ち上がり気味である。758・759は底部で、そのうち759は上げ底気味のものである。760は舞鶴炭灰岩製の石包丁である。両面に製作時の研磨痕がみられる。穿孔が1か所確認され、両面から穿った状況が確認できる。761は姫島産黒曜石製の石鏃で、基部には弧状を呈する浅い挟りがみられ、全体としては五角形状である。

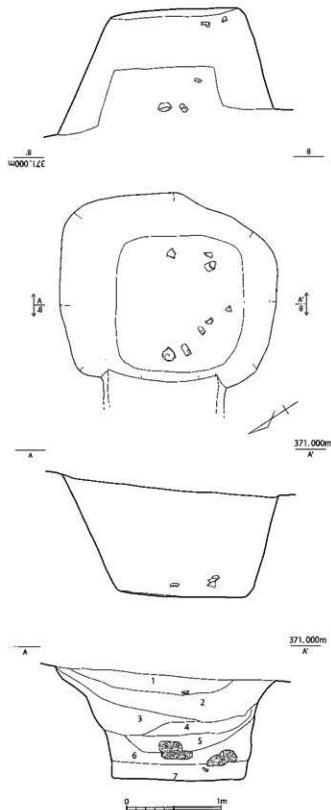
本貯蔵穴は、弥生時代中期後半に比定できる。

(11) S K 259

S K 259はS K 258の西約5mの位置で確認された貯蔵穴である。平面は隅丸方形を呈している。その規模は南北2.0m、東西1.6m、深さ0.75mで、床面は平坦である。本遺構に伴う柱穴や土坑は検出できなかった。第5-42図で示した遺物は、床面付近で出土したものである。

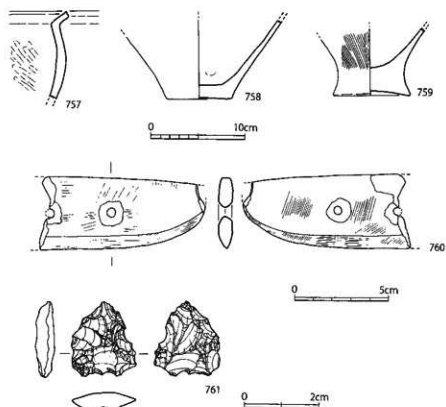
762は蓋で、ヨコナデの後、横方向のミガキを施している。口径13.6cm、高さ5.4cmを測る。763は外面にミガキを施した壺の底部。764は厚手の甕の底部である。

出土遺物より、本貯蔵穴は弥生時代中期後半に比定できる。

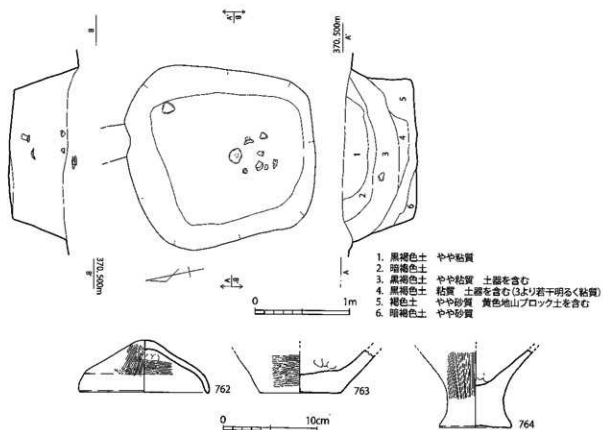


- |         |      |         |                   |
|---------|------|---------|-------------------|
| 1. 黒褐色土 | やや粘質 | 5. 暗褐色土 | 地山礫を多く含む          |
| 2. 暗褐色土 | やや砂質 | 6. 黄褐色土 | 20-30cm大の礫を含む(地山) |
| 3. 黄褐色土 | 砂質   | 7. 黄褐色土 | 砂質                |
| 4. 暗褐色土 | やや砂質 |         | 地山礫(小)を含む         |
|         |      |         | 土器を含む             |

第5-40図 S K 258実測図 (1/40)



第5-41図 S K258出土遺物実測図



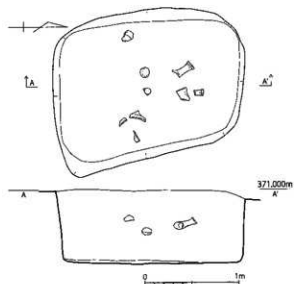
第5-42図 S K259実測図 (1/40)・出土遺物実測図

## (12) SK260

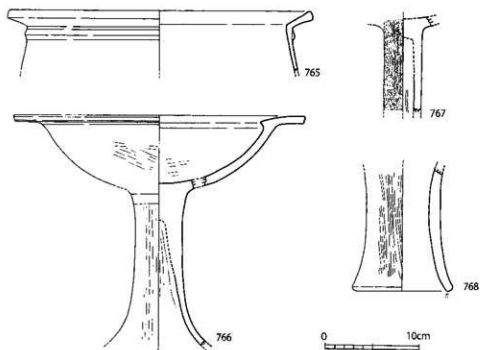
SK260は、調査区南側平坦部にあり、SH73の南西約10mで確認された貯蔵穴である。南北2.2m、東西1.6m、深さ0.80mで、平面形は隅丸方形を呈している。その床面は平坦である。本遺構に伴う柱穴や土坑は、床面及び遺構周辺で確認できていない。出土遺物は、ほとんどが床面から浮いた状態で出土した。

755は、「く」の字状口縁で、頸部に三角突帯を巡らす。756、748は鋤先状口縁を呈した高坏で、口径は31.0cm。776は高坏の脚部で、外面には丹塗りを施す。768は器台である。

本遺構は、弥生時代中期後半に比定できる。



第5-43図 SK260実測図 (1/40)



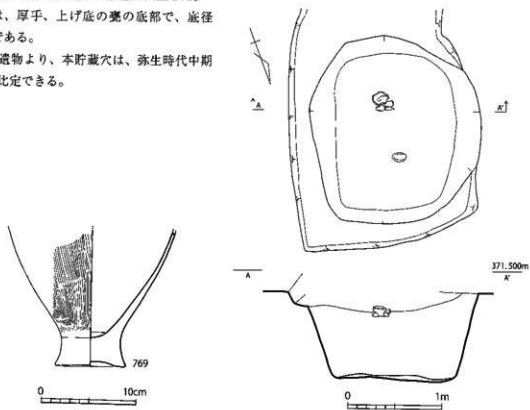
第5-44図 SK260出土遺物実測図

(13) S K 261

S K 261は、調査区南東隅で検出した貯蔵穴である。その規模は南北20m、東西18m、深さ0.90mで。平面形は隅丸方形を呈し、床面は平垣である。本遺構に伴う柱穴や土坑は、床面及び遺構周辺で確認できていない。出土遺物は、床面から浮いた状態で出土した。

769は、厚平、上げ底の甕の底部で、底径7.4cmである。

出土遺物より、本貯蔵穴は、弥生時代中期後半に比定できる。



第5-45図 S K 261実測図 (1/40)・出土遺物実測図

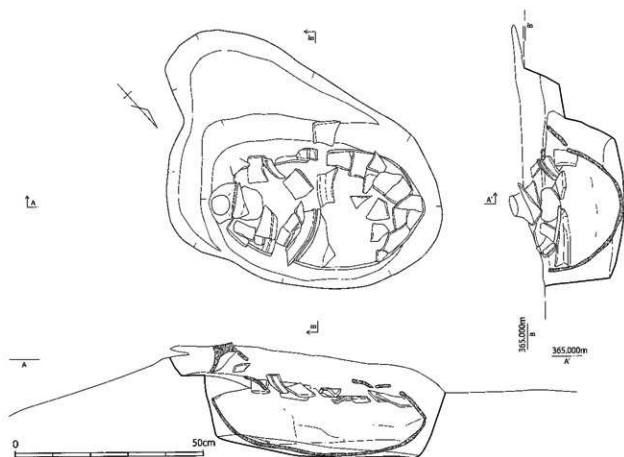
3 小見用甕棺

(1) S K 262

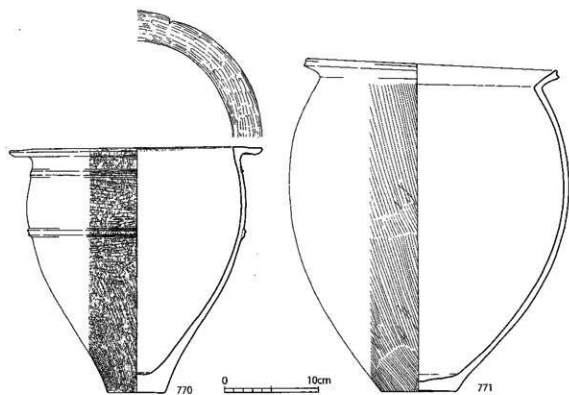
S K 262は、調査区北側の平坦部で検出した甕棺である。土坑の規模は長軸0.73m、短軸0.4m、深さ0.32mである。甕を合わせた形で検出したが、上面は後世の削平を受けていた。

770は、垂れ気味の鋤先状口縁の甕である。その口径は26.6cm、器高26.0cmを測る。頸部と胴部に2条のM字状突帯を巡らす。外面調整はヨコナデの後、横方向のミガキを施す。口縁上面にも同様の調整を行う。771は「く」の字状口縁で胴部は張る。底部は薄い平底である。口径は26.4cm、器高は35.2cmである。外面はヨコナデの後、縦方向のハケ目を施す。

出土遺物より、S K 262は弥生時代中期後半に比定される。



第5-46図 S K 262実測図 (1/10)



第5-47図 S K 262出土遺物実測図

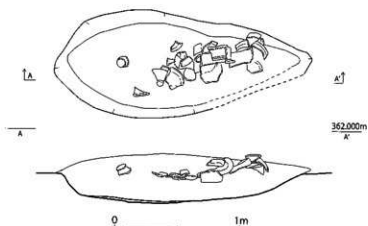
(2) S K 263

S K 263は、調査区南側の平坦部、S H70に隣接して位置する遺構である。後世の削平が激しく、原型をとどめていないが、大きな破片の宛が2点確認できたことから窠棺として報告する。土坑の規模は長軸1.90m、短軸0.9m、深さ0.24mである。

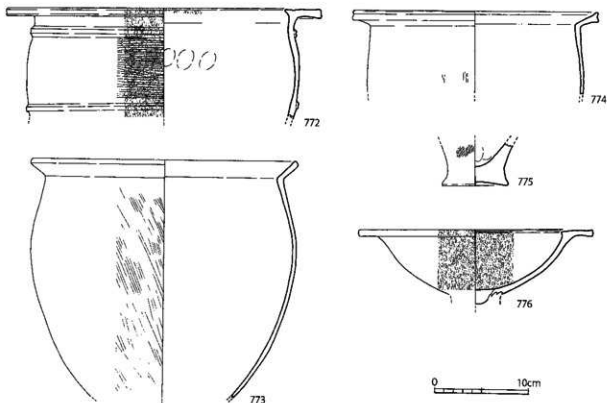
主な出土遺物は、772・773で、それ以外は小片を復元実測したものである。772は、垂れ気味の鋤先状口縁の甕である。その復元口径は33.4cm、頸部と胴部に2条のM字状突帯を巡らす。外面調整

はヨコナデの後、横方向のミガキを施す。口縁上面には工具痕がみられる。773は胴部が若干張る「く」の字状口縁甕である。復元口径は28.0cm、外面はヨコナデの後、縦方向のハケ目を施す。

S K 263は弥生時代中期後半に比定される。



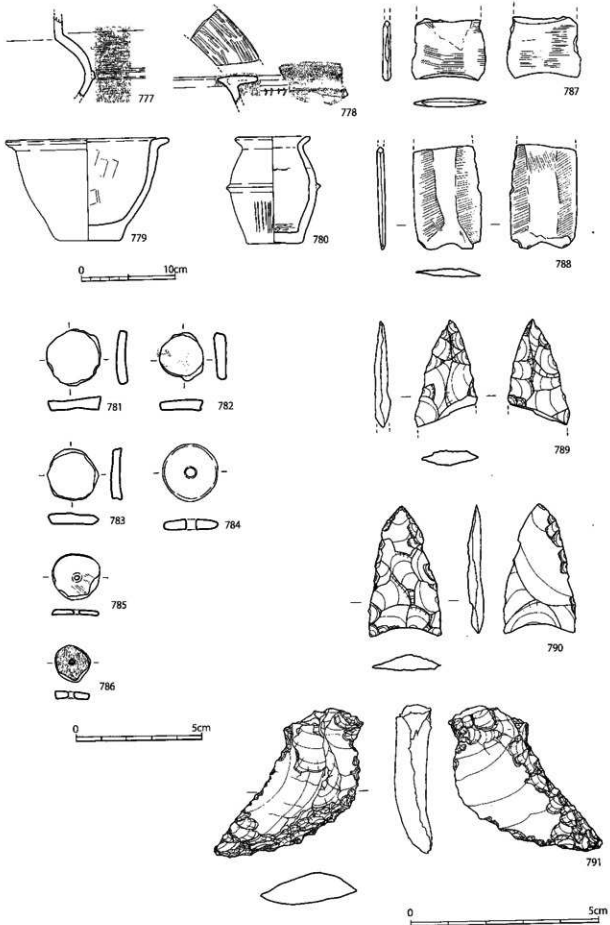
第5-48回 S K 263実測図 (1/30)



第5-49回 S K 263出土遺物実測図

4 その他の遺物

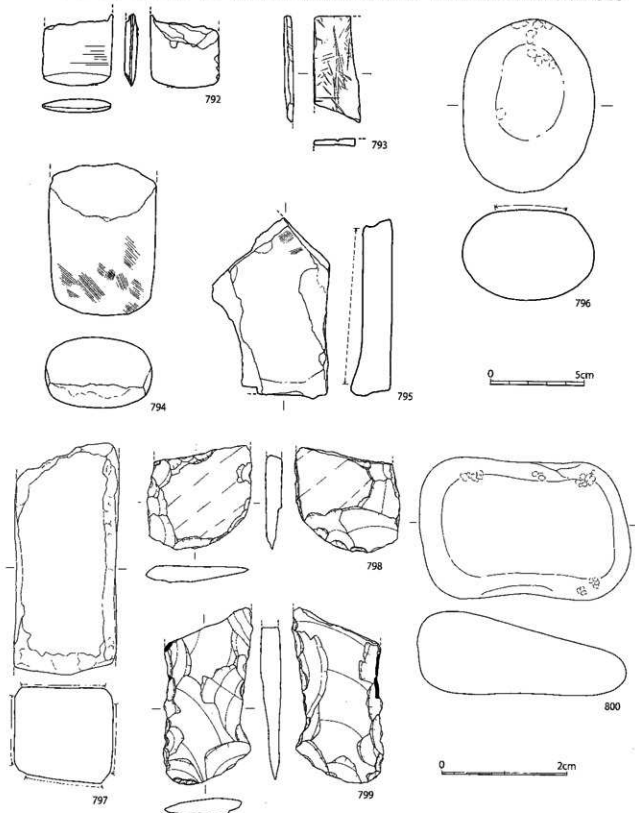
ここでは表採や機乱、その他の遺構から出土した遺物を紹介する。777は胴部にM字突帯を貼り付け、丹塗り施した磁形土器である。778は鋤先状口縁を持つ甕で、表面にミガキを施す。779は鉢で、平底で口縁部をつまみ出す。



第5-50図 表採及びその他の遺構出土遺物実測図(1)



780はSH73で出土した小型壺と同様のものである。781～783は円形の土器片加工品である。縁部を丁寧に磨っている。784～786は紡錘車で、785・786は土器片を加工した紡錘車である。打ち欠きにより土器片を円形に成形し、中央部に径約0.3cmの円形の穴を穿つ。786の外面には丹塗りがみられる。787・788は磨製石鏃。789・790は二等辺三角形を呈した石鏃で、扱りは浅い。791は西九州産黒曜石製の石匙。792は片刃の磨製石斧、793は太形蛤刃石斧である。794・795・797は砥石、796は敲石である。798・799は打製石斧、800は台石である。



第5-51図 表採及びその他の遺構出土遺物実測図(2)

## 第6章 第15次調査

### 1. はじめに

第15次調査は平成28年5月から平成28年10月にかけて実施した工業団地造成に伴う発掘調査である。本調査区は台地中央やや東寄りに位置し、第5章の第14次調査区の東にあたる箇所である。第14次調査区同様、本調査区も南が高く、北側にかけて下る緩斜面上にあり、その比高差は10m程である。弥生時代を中心とする遺構は、おもに北側及び南側の平坦部分に展開している。中間の斜面地は畑として利用するための段造成が行われているため、ほとんど遺構は残存していない。

5月17日から本調査区の調査を開始した。調査開始後、4日間は重機を用いて表土層の除去を行った。その後、作業員を投入し、遺構検出を行い、表土直下の黒色土層中で弥生時代の遺構を検出した。北側平坦部では黒色土の堆積が確認できたが、南側の斜面上面では黒色土の堆積は認められず、本来その下にあるはずのアカホヤ層、暗黒褐色土層、暗黄褐色土層、黄褐色土層が露出している状況であった。第14次調査同様北側平坦部から調査を始め、順次南側の斜面上へと進めていった。その結果、弥生時代の竪穴建物9基、貯蔵穴21基、小児用甕棺3基、掘立柱建物1軒を確認した。

若干工期は伸びたものの、9月下旬には、ドローンによる空中撮影を実施し、10月上旬には重機による埋め戻しを行い、第15次調査区の現場調査は終了した。調査面積は7,603㎡である。

本調査区では、旧石器時代及び縄文時代の遺構及び包含層を確認していないため、当該時期の遺物については、出土した弥生時代の遺構のなかで掲載した。

### 2. 弥生時代

四日市遺跡は台地上の東平で、おもに弥生時代の集落が確認されているが、当調査区でも遺構は弥生時代のものであった。しかし、その遺構密度は第14次調査区同様、東側の第1次、第13次、第16次調査と比べると疎らなものであった。

遺構の内訳は、竪穴建物9基、貯蔵穴20基、小児用甕棺3基、掘立柱建物1軒である。

#### 1 竪穴建物

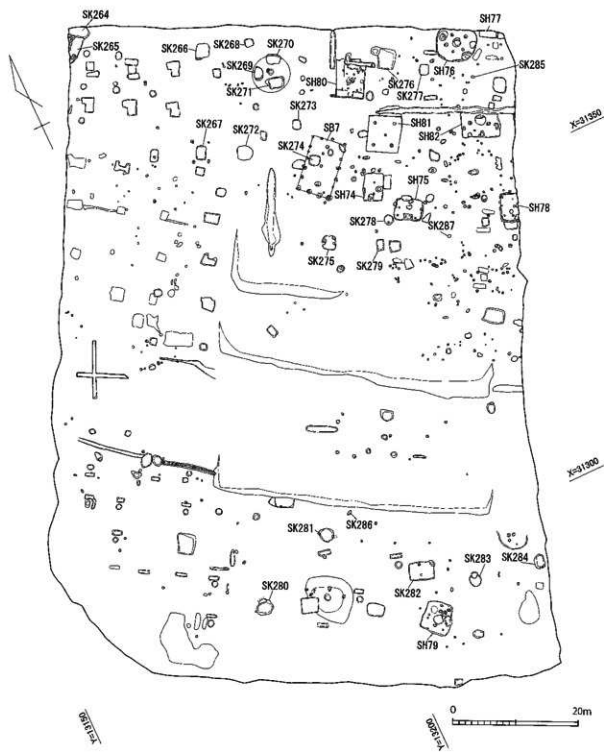
##### (1) SH74

SH74は、本調査区の北側平坦部から南側斜面地にかかった箇所を確認された竪穴建物である。その規模は東西3.3m、南北4.4mである。本竪穴建物は斜面に立地していることから、床面を水平に保つため南側は深さ0.60m、北側は0.15mとなっている。平面プランは方形で、その主軸はN-35°-Eである。また、主柱穴は2本確認した。その深さはそれぞれ62cmと70cmである。南壁中央及び東壁中央で土坑を確認した。南壁土坑の規模は長軸100cm、短軸70cm、深さ55cmで二段掘りされている。東壁土坑は長軸115cm、短軸85cm、深さ15cmである。

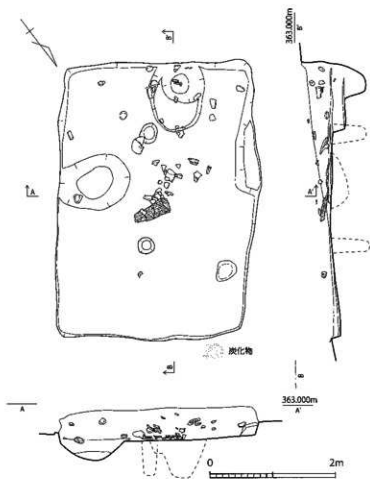
遺物は、竪穴中央部から南側土坑にかけて多く出土した。また、土器片とともに木の炭化物及び若干の焼土が検出されている。

801は蓋で丁寧なナデ調整が施されている。口径は27.5cm、高さ9.6cmを測る。802～804・807は「く」の字状の口縁をもつ甕である。802は口縁端部をつまみ上げ、804・807は頸部に三角突帯を貼り付ける。805・806は甕の底部で、若干上げ底を呈す。808は砂岩製の砥石、809は安山岩製の砥石である。

本竪穴建物の時期は、出土遺物から弥生時代中期後半に位置づけられる。



第6-1図 第15次調査区 (1/600)

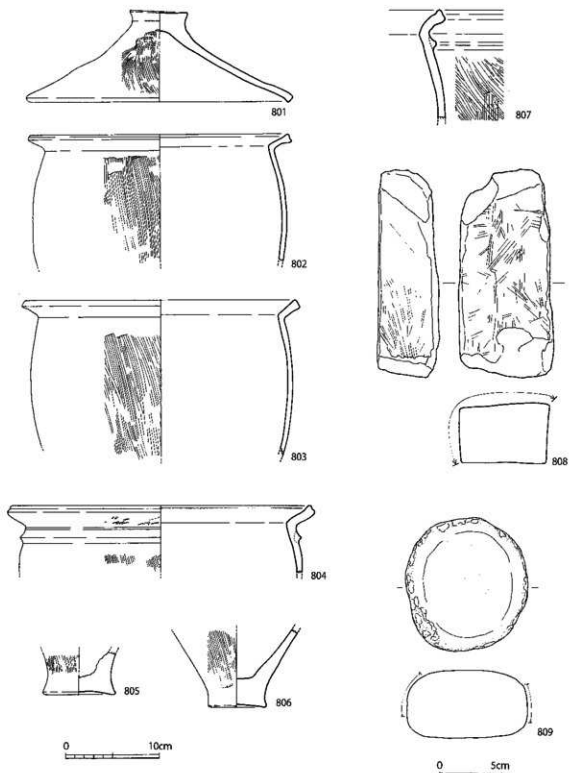


第6-2図 SH74実測図 (1/60)

## (2) SH75

SH75は、SH74の東南約5mの位置にある。SH74同様斜面地にかかった箇所でも確認された竪穴建物である。その規模は東西4.8m、南北3.9mである。SH74同様に斜面に立地していることから、床面を水平に保つため南側の深さは0.60m、北側は0.15mとなっている。平面プランは隅丸方形で、その主軸はN-50°-Wである。竪穴の南東隅と北西隅で壁の立ち上がりに沿うように幅15cm、深さ10cmの壁溝を検出した。斜面地にあるため、何らかの壁崩落防止のための補強として構築されたことも考えられる。また、主柱穴は2本確認した。その深さはそれぞれ25cmと50cmである。竪穴中央部には内部に焼土を包含した浅い土坑がある。土坑の規模は長軸92cm、短軸70cm、深さ12cmである。さらに南北壁中央で土坑を確認した。南壁土坑の規模は長軸160cm、短軸96cm、深さ50cmで二段掘りされている。北壁土坑は長軸180cm、短軸85cm、深さ20cmである。遺物は、竪穴内の全体から出土しており、焼土のある中央土坑脇からは829の台石が出土している。

810と811は、「く」の字状の口縁をもつ甕である。そのうち、811は強く折れる口縁端部を上方につまみ上げ、頸部に三角突帯を貼り付ける。812～816は壺の底部、817は壺の底部である。壺の底部は上げ底を呈している。818は小型丸底甕で、外面に横方向のミガキを施す。819は器台で、上部を欠く。820は高坏の身部、821は高坏の



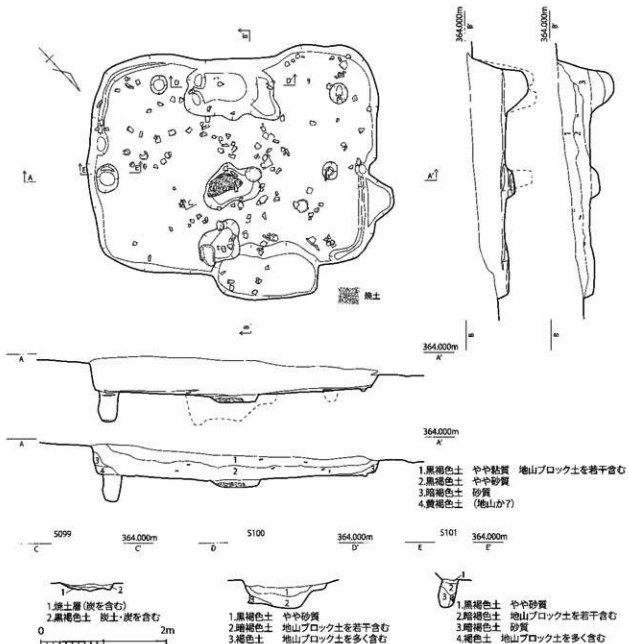
第6-3図 SH74出土遺物実測図

脚部である。両者ともに外面には赤色顔料が塗布されている。822は蓋である。823は大きさが4.3cmほどの泥岩製の影器である。824と826は砥石で、824は小型のものである。825は磨製石鏃。827・828は輝石安山岩製の扁平打製石斧。829・830は安山岩製の台石である。

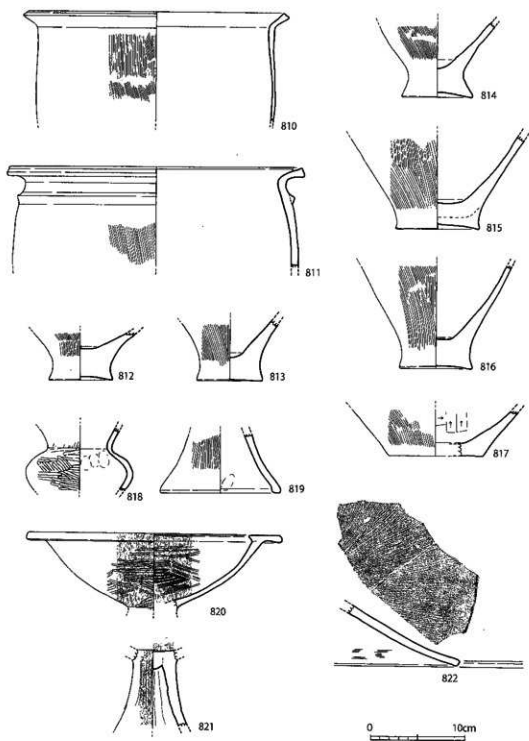
出土遺物より、本竪穴建物は弥生時代中期後半に比定できる。

### (3) SH76

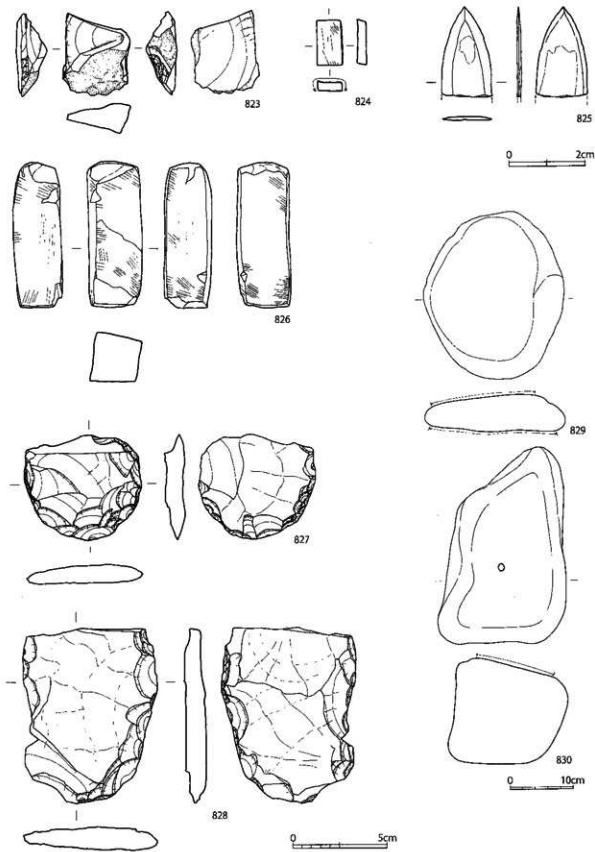
SH76は、本調査区北東部にある竪穴建物である。その規模は東西6.4m、南北5.2m以上で、北側は調査区外に広がる。検出面からの深さは0.40mで、円形の平面形をもつ。南側の周囲の壁に沿って幅0.25m、深さ0.10mの規模の壁溝が巡る。南側から北に向かって下る傾斜地の下に立地することから、この南側の壁溝は竪穴壁崩落を防ぐ機能があると考えられる。主柱穴は深さ0.4m～0.8mのものが5本確認され、柱間は1.8m～2.3mの間隔がある。5角形に巡る柱穴の内部に円形の土坑が掘られている。



第6-4図 SH75実測図 (1/60)



第6-5図 SH75出土遺物実測図(1)

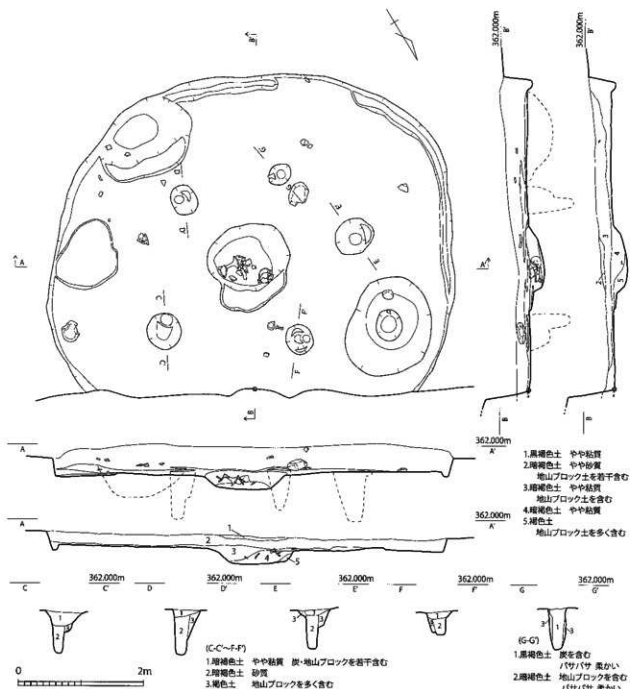


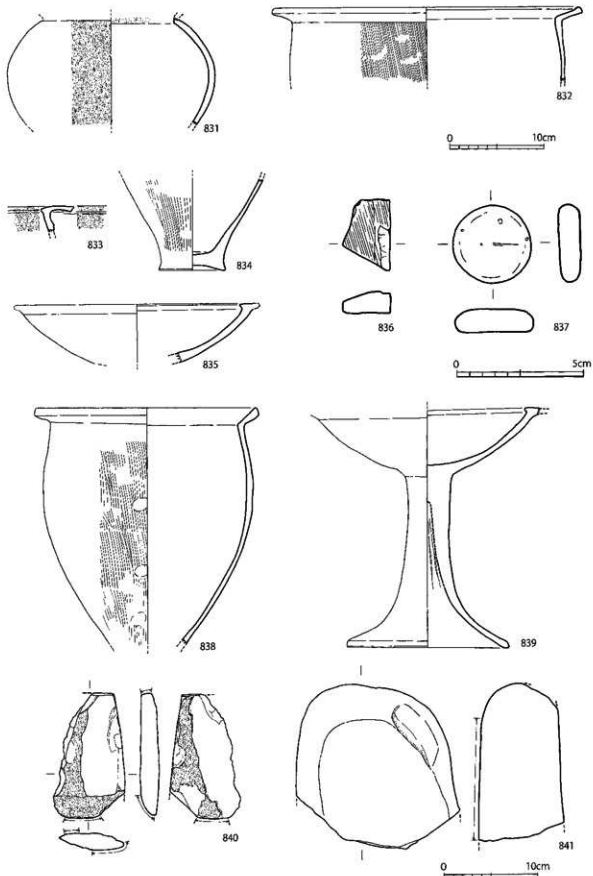
第6-6図 SH75出土遺物実測図(2)



土器、石器等の遺物は、中央土坑から主に出土している。838の甕と839の高坏は中央土坑出土である。831は口縁部が欠損した甕である。832は強く折れる「く」の字状の口縁をもち、胴が張らないタイプの甕で、口縁端部を上方につまみ上げる。833は鋤先状口縁の甕、内外面に赤色顔料を塗布する。834は比較的薄手の底部である。835は高坏の坏身部。836は携帯用の小型の甕石。837は直径3.0cmの円形の石製品。中央土坑出土の838は「く」の字状口縁の甕で、ナデ後に縦方向のハケ目を施す。839は脚部の長い高坏で、鋤先状口縁端部を欠いている。840は緑泥変岩製の磨製石斧、841は安山岩製の台石である。

出土遺物より、本塚穴遺物は弥生時代中期後半に比定できる。





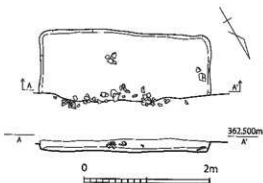
第6-8図 SH76出土遺物実測図

(4) SH77

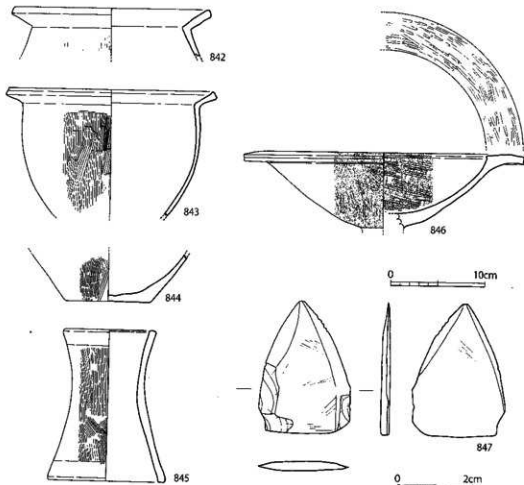
SH77は、本調査区北東部にあり、SH76の東隣で検出した竪穴建物である。東西2.6m、南北1.2m以上で、検出面からの深さは0.20mの規模をもつ。平面形は方形で、主軸はN-28°-Eである。SH76同様、北半部は調査区外となっているため、柱穴、土坑等の遺構は確認できなかった。

出土遺物(第6-10図)には土器と石器がある。842・843は「く」の字状口縁の甕である。842は胴が張るタイプ、843は口縁端部を上方向につまみ上げる。844の底部は比較的薄い。845は器台。846は鋤先状口縁を呈する高坏で、外面及び口縁部上面はミガキの後、赤色顔料が塗布されている。847は大きさ3.5cmの磨製石鏃である。

本竪穴建物の時期は、出土遺物より弥生時代中期後半に位置づけられる。



第6-9図 SH77実測図(1/60)



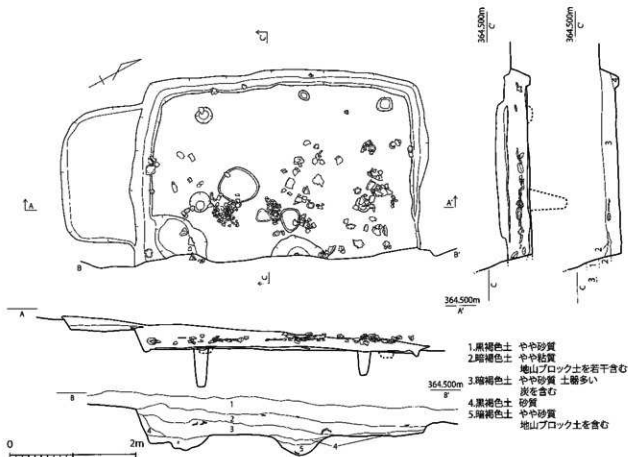
第6-10図 SH77出土遺物実測図

## (5) SH78

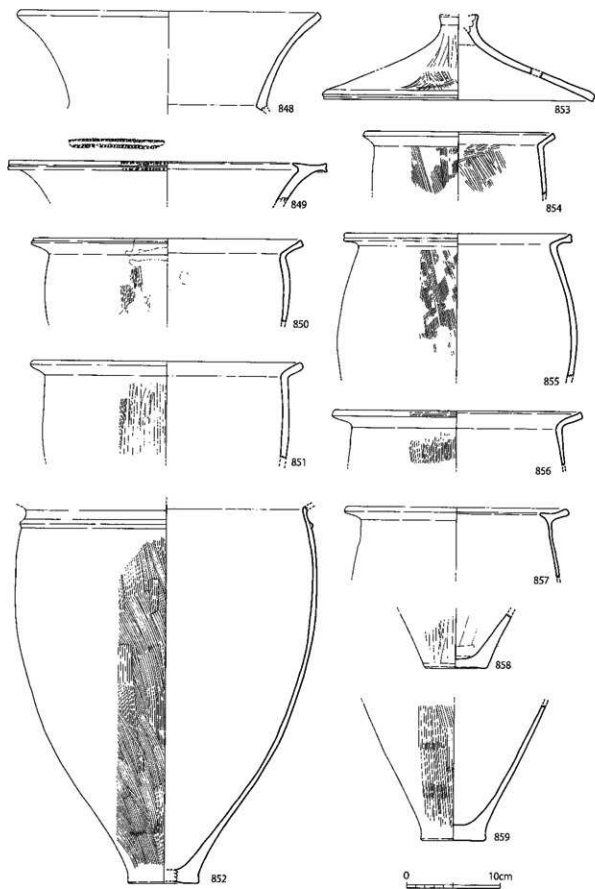
SH78は、本調査区東部にあり、東半は調査区外(第16次調査区)で、半分だけ掘出した竪穴建物である。規模は南北4.7m、東西3.0m以上で、平面形は方形を呈す。南壁には幅1.2m、長さ1.6mの張り出し部を持つ。主軸はN-68°-Wである。斜面に立地しているため、検出面からの深さは南側が0.25m、北側が0.10mである。主柱穴は2本確認され、その深さは0.45mと0.70mである。その他、西側の壁際から浅い柱穴を検出した。また、竪穴の壁の立ち上がりに沿うように幅20cm、深さ10cmの壁溝が確認できた。調査区際から土坑が2基見つかっている。南側のものが南壁中央土坑、もう一つが竪穴中央土坑と想定すると、本遺構は東西60m程の4本柱の長方形竪穴建物と考えられる。遺物は、竪穴内全体からまんべんなく出土している。

848は壺で、復元口径は32.8cm。頸部から口縁にかけてはやや外湾しながら立ち上がる。849は垂れ気味の勗先状を呈す壺の口縁部で口唇部に2段の刻目をもつ。853は蓋で、復元口径は28.6cm、器高7.1cmである。851・852は胴の張らない器形の甕、852・855は若干胴の張るタイプで、頸部に三角突帯を貼り付ける。底部は比較的薄手のものである。857は勗先状口縁の甕、861は大型の甕で、頸部に2条のM字突帯を巡らす。865～868は器台で外面は縦方向のハゲ目、内面は紋り調整がみられる。869～871は高坏である。869は口縁部を小さくつまみ出し、身が深いタイプのもの。870は垂れ気味の勗先状口縁を呈し、外面及び口縁部上面はミガキの後、赤色顔料が塗布されている。872はチャートの石核で、長さ7.4cm、幅8.2cm、厚さ7.0cm、重さ530gである。873は長指印の川原石を利用した敲石で両端部に敲痕を残す。874は安山岩製の台石である。

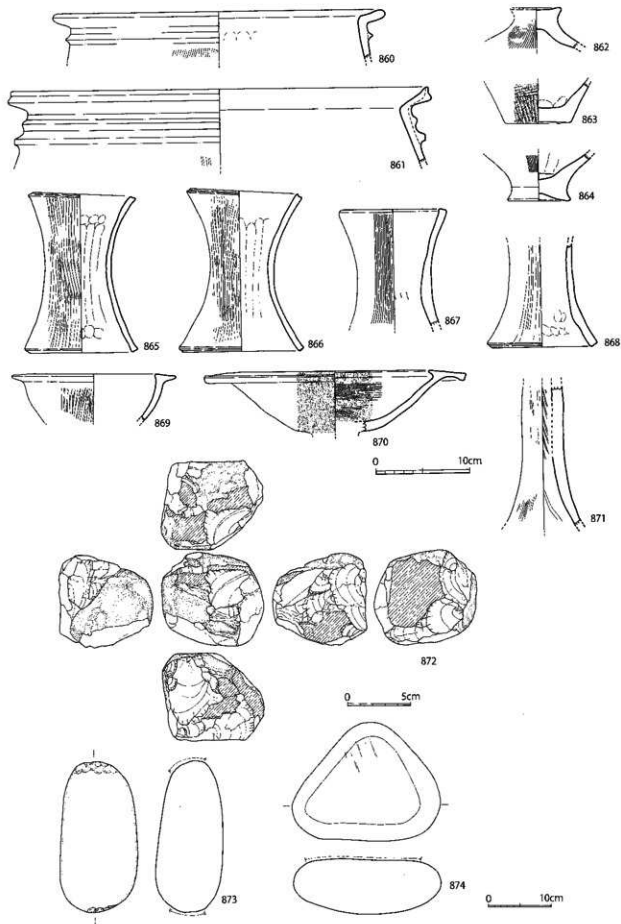
出土遺物より、本竪穴建物は弥生時代中期後半に比定できる。



第6-11図 SH78実測図 (1/60)



第6-12図 SH78出土遺物実測図(1)

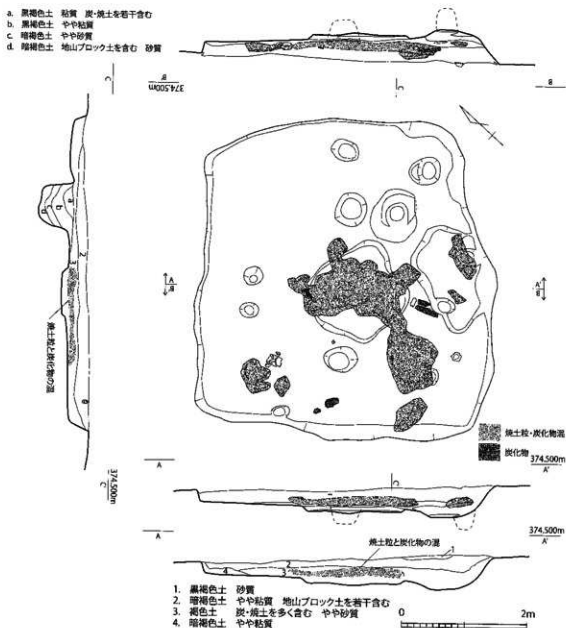


第6-13图 SH78出土遺物実測図(2)

## (6) SH79

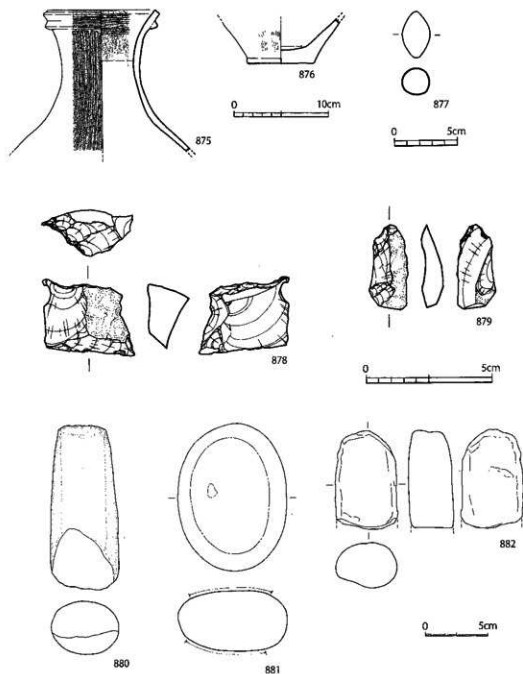
SH79は、第15次調査区では唯一、南部の最高所で確認された竪穴建物である。その規模は南北5.0m、東西4.8mで、平面形は隅丸正方形プランである。主軸はN-38°-Eである。主柱穴は2本確認され、その深さは0.30mほどである。柱間の竪穴中央部には、長軸1.6m、短軸1.5m、深さ0.15mの土坑がある。また、東側壁中央部で長軸1.7m、短軸1.3m、深さ0.25mの土坑を確認した。中央土坑及び東壁土坑周辺の床面直上から、炭化した木片とともに炭化物の混ざった焼土を検出した。これらは火災により廃棄されたものと考えられる。

SH79から出土した土器、土製品、石器を第6-15図に示した。875は壺で、端部が外反し、口縁直下に三角突帯を貼り付ける。内外面ともミガキを施した後、外面全体と口縁部内面に赤色顔料を塗布している。876は比較的薄手の壺の底部か。877は4cmほどの大きさで、ラグビーボールのような形状をした土製投擲である。878は西九州産黒曜石の剥片である。その重さは14.4g。879は熊本産黒曜石の剥片で、その重さは3.8gである。880・881



第6-14図 SH79実測図 (1/60)

は石斧で、そのうち880は刃部の欠損した太形蛤刃石斧である。882は磨石で、両面に使用痕が残る。  
出土遺物より、本堅穴建物は弥生時代中期後半に比定できる。

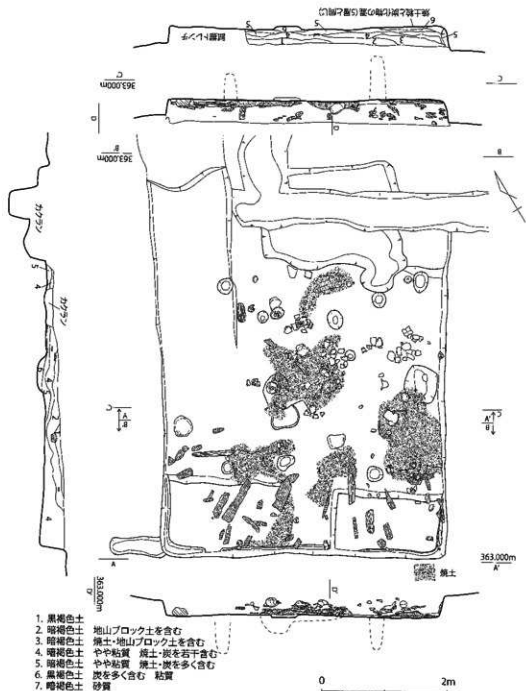


第6-15図 SH79出土遺物実測図

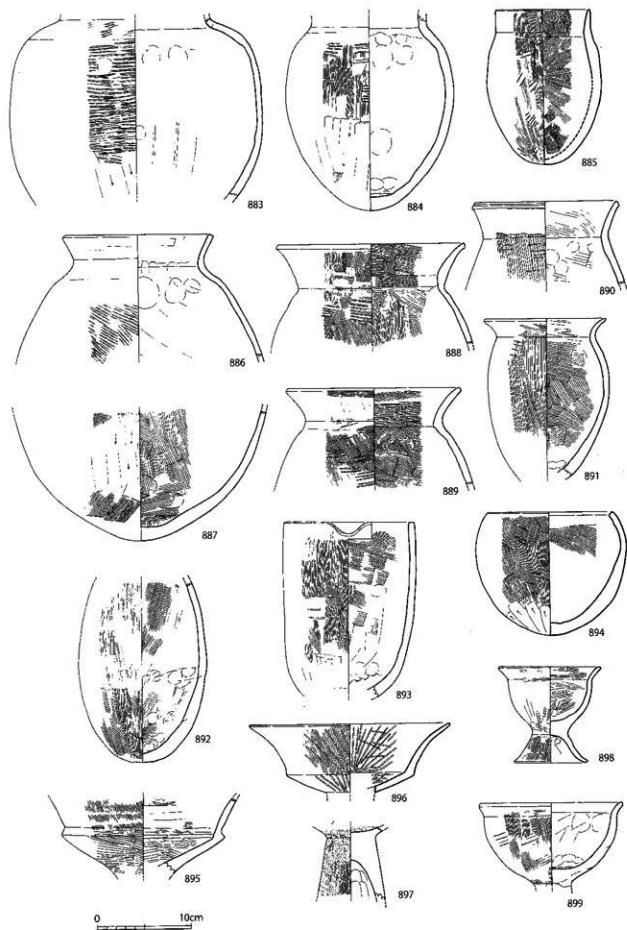


(7) SH80

SH80は、本調査区北側の平坦部に建てられた堅穴建物である。その規模は南北6.0m以上、東西4.6mで、南東及び南西隅に幅1.2m、長さ1.8mのベッド状遺構をもつ。平面形は長方形を基調としたプランで、側壁は張りが少なく直線的であり、隅部が鋭く折れている。長軸の方位は、 $N-35^{\circ}-E$ である。北側はトレンチ溝と畑の攪乱で確認は困難であるが、北東隅にもベッド状遺構があったことがうかがえる。主柱穴は4本確認され、その深さは0.45m～0.72mである。柱間は南北が2.9m、東西が2.4mである。主柱穴の内側の堅穴中央部には、長軸1.2m、短軸0.6m、深さ0.25mの土坑がある。また、東側壁中央部でも長軸0.6m、短軸0.3m、深さ0.2mの土坑を確認している。堅穴全体の床直上に炭化物を含んだ焼土が広がっており、それに張り付くように多数の炭化した木



第6-16図 SH80実測図 (1/60)

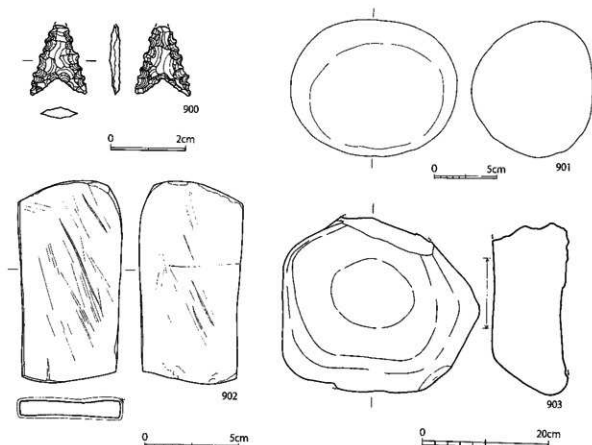


第6-17図 SH80出土遺物実測図(1)

片及び多量の土器が廃棄されていた。これらは火災により廃棄されたものと考えられる。

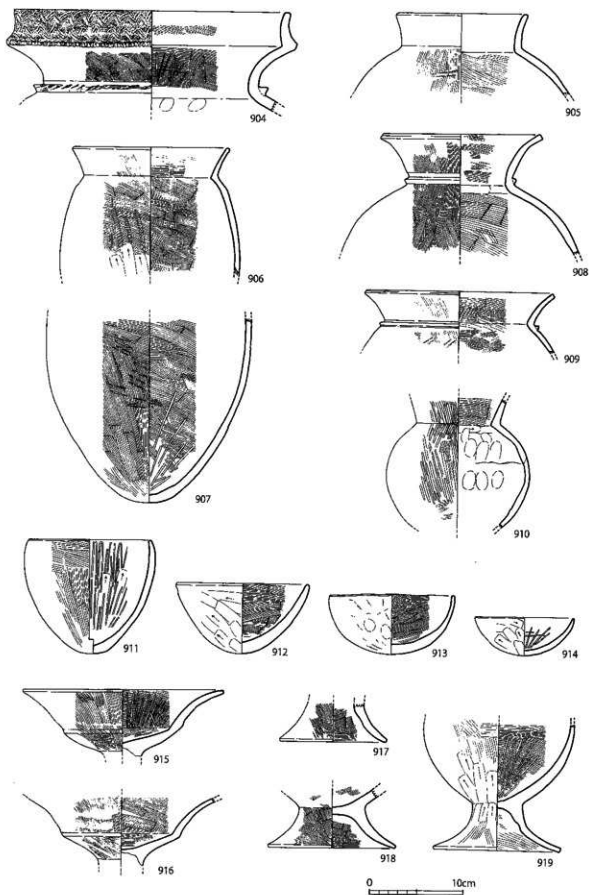
S H80から出土した土器及び石器を第6-17・6-18図に示した。883～885は壺形土器である。883は肩の張るタイプで、外面上半にタタキ目が残る。884は胴部が長楕円形で張り、底部が若干尖り底の直口壺で、外面上半にタタキ目がある。885は小型の壺である。886～892は甕である。886は胴部が張り、口縁部が狭く外反し、外面にタタキ目を有する。887・889・890・891は胴が張らない長胴タイプ。内面調整はハケ目、指圧がみられ、外面はハケ目、横方向のタタキ目を施す。889は丸底に近い尖り底で、内面は指圧、縦方向のハケ目がみられ、外面は下方への腕ケズリとハケ目を有する。892は長胴の丸底である。893・894は鉢で外面に腕ケズリとハケ目調整を施す。893は丸底から真っすぐ立ち上がる胴長で、1箇所注口を付ける。口径は13.8cm。894は狭く内湾する口縁を持つ。895・896は坏部下半が直線的で、口縁にかけて強く外反するもので、復元口径は21.2cmである。897は裾部で聞く高坏の脚である。898・899は台付鉢。898は口径10.5cm、器高10.1cm。900は姫島産黒曜石製の石鏃で、二等辺三角形を呈するもので、基部の挟りはやや浅めである。901・903は台石で、903は15kgほどの重さである。902は赤間石製の砥石である。

出土物より、本竪穴建物は弥生時代後期末に比定できる。

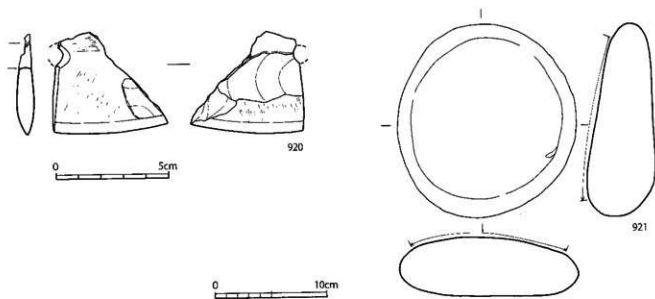


第6-18図 S H80出土遺物実測図(2)





第6-20図 SH81出土遺物実測図(1)



第6-21図 SH81出土遺物実測図(2)

石器等遺物も焼土のある東側から集中して出土している。

S H81から出土した土器及び石器を第6-20及び6-21図に示した。904・905は壺形土器である。904は2条の波状文を付す複合口縁壺で、頸部に断面三角形の突帯を貼り付け、刻目を入れる。外面はハケ目、内面には窠ミガキとハケ目を施す。905は直口壺で、胴が楕円形に張る。906～909は甕である。906は胴が張らない長胴タイプ。内面調整はハケ目、外面はハケ目、縦方向のタキ目と上方向の窠ケズリを施す。907は若干尖り底の底部。908・909は肩の張るタイプで、頸部に三角突帯を貼り付ける。908は外面ハケ目、909は外面に窠ケズリを施す。910は小型丸底壺で、残存高は13.8cmである。口縁部は真つすぐ開き、胴部は丸い。外面はミガキとハケ目が見られる。911～914は鉢である。911の内面は窠ケズリと縦方向のミガキを施す。912・914の外面には窠ケズリ、913の外面には指圧痕が残る。915・916は高坏で、坏部下半がやや内湾し、口縁にかけて強く外反するもので、915の復元口径は21.2cmである。917～919は台付き鉢で、919は外面に窠ケズリ、内面に縦方向のミガキを施す。920は粘板岩製の石包丁で、穿孔が2箇所にみられ、表裏面には製作時のものと思われる痕跡が残る。921は安山岩製の台石である。

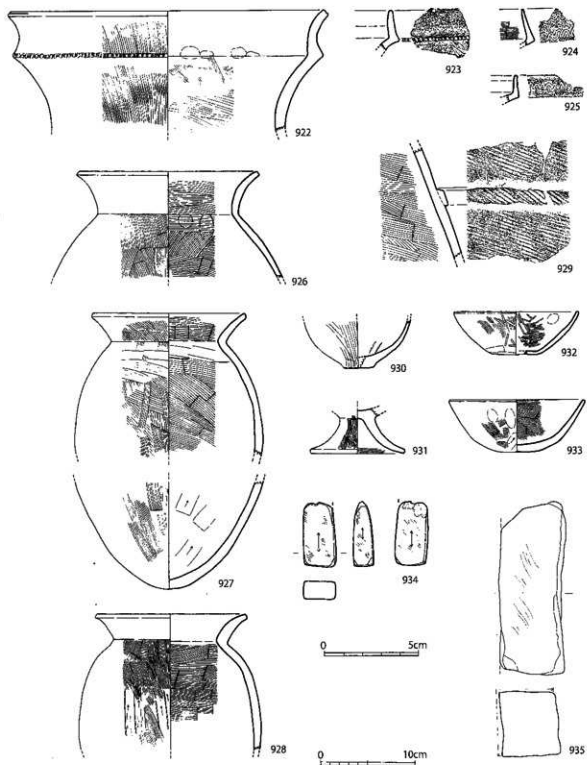
出土遺物より、本堅穴建物は弥生時代後期末に比定できる。

#### (9) S H82

S H82は、S H81の東約15mの位置にある堅穴建物で、北側を後世の溝で削平されていた。東西6.3m、南北4.1m以上の規模を持ち、斜面地に立つため、堅穴の深さは南が0.5m、北側が0.15mである。本堅穴建物も、中期のもの比べて、側壁は直線的に造られている。主柱穴は2本確認され、その深さは0.25mと0.45mで、柱間は2.8mである。主柱穴の内側の堅穴中央部には、長軸1.8m、短軸1.2m、深さ0.20mの土坑があり、その内部で焼土を検出した。また、南壁中央部でも長軸1.0m、短軸0.9m、深さ0.25mの土坑を確認した。土器等の遺物は床面全体からまんべんなく出土した。

922～925は複合口縁壺で、922・923は屈折部に刻目を入れる。外面は縦方向のハケ目、内面は指圧痕とハケ目調整がみられる。926～928は口縁が外反する甕で、926は肩が張り、927・928は肩があまり張らないタイプの甕である。927の底部は若干尖り底を呈する。内面調整はハケ目、外面はハケ目、窠ケズリを施す。929はベルト状の突帯を貼り付けた甕。930は狭い平底をもつ。931は台付き鉢、932・933は浅い鉢で、平底を呈す。934・935は天草砂岩製の砥石で、934は携帯用か。936・937は安山岩製の敲石で、側縁の端部に敲打痕がみられる。938





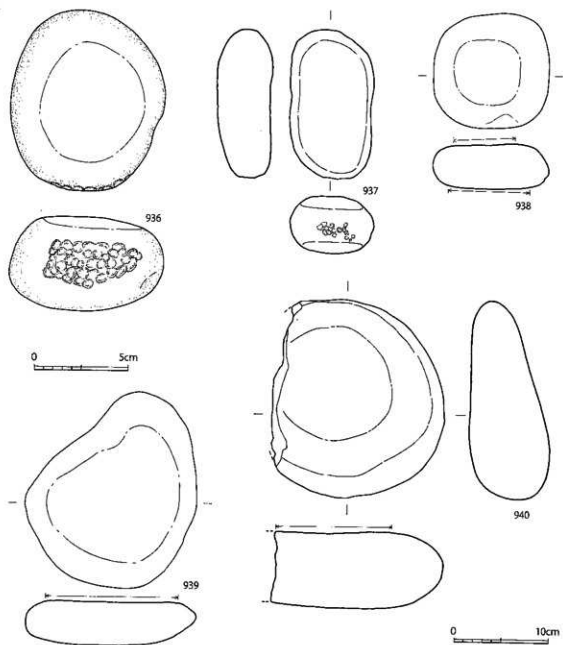
第6-23図 SH82出土物実測図(1)



第6章 第15次調査

～940は安山岩製の石皿である。

出土遺物より、本遺構は弥生時代後期終末に比定できる。

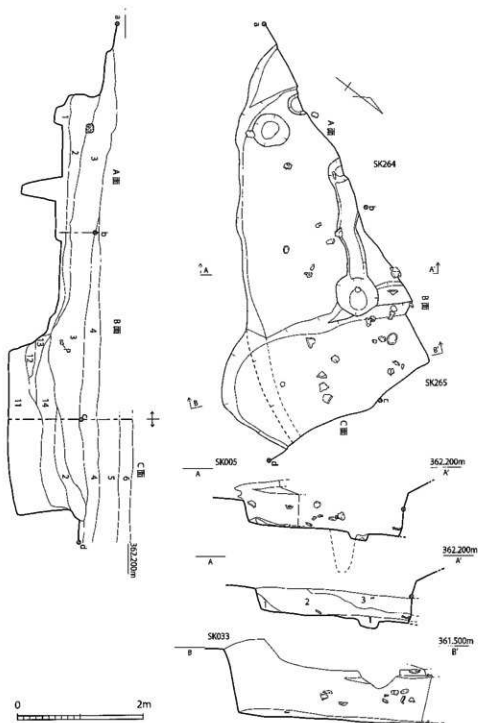


第6-24図 SH82出土遺物実測図(2)

## 2 貯蔵穴

## (1) SK264・SK265

SK264は、調査区の北西端に位置する貯蔵穴である。その規模は東西3.3m以上、南北1.9m、深さ1.0mを測る。その南に接して確認された貯蔵穴がSK265である。SK265は東西2.5m以上、南北3.6m以上、深さ0.43mの隅丸方形の平面形をもつ。床面より深さ0.4mの柱穴1本を確認した。これらは2基の貯蔵穴として調査したが、

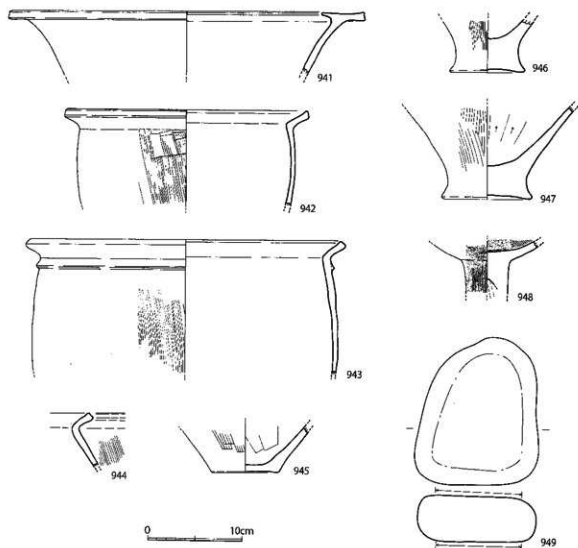


第6-25図 SK264、SK265実測図 (1/60)

壁面上層を検討した結果、最初にS K264が掘られ、それが埋まった段階でS K265が築かれたことがわかった。ただし、出土遺物からその時期差は、ほとんど認められない。なお、S K265は南北5.0m以上の規模を持つことより竪穴建物の可能性も考えられる。

941から949はS K264出土の遺物である。941は鋤先状口縁の甕で、復元口径30.7cm。942・943は「く」の字状口縁の甕で、口縁端部をつまみ上げている。943は頸部に三角突帯を巡らせる。945は比較的薄手の底部、946・947は厚手の甕の底部で若干上げ底である。948は高坏の脚部で、外面の割蓋は縦方向のハケ目の後、赤色顔料を塗布している。949は安山岩の台石で、15cm大の大きさである。941は土器を再利用した円形状土製品で、大きさは5.4cm～6.2cmである。

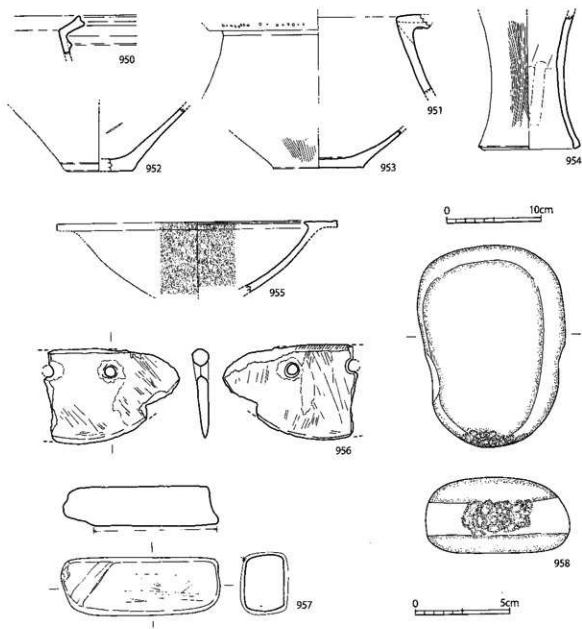
950から958はS K265の土器・石器である。950は「く」の字状口縁の甕。951は口縁端部を欠く甕で、口唇部



第6-26図 S K264出土遺物実測図

に刺突が施されている。復元頸部径20.8cm。952・953は薄手の底部で外面に縦方向のハケ目がみられる。954は器台で内面に紋り痕がある。955は鋤先状口縁の高坏で、内外面とも縦方向のハケ目の後にミガキを行い、その上に赤色顔料を塗布している。956は輝緑凝灰岩製の石包丁で、刃部は外湾し、両面からの穿孔が2箇所のみられ、表裏面には製作時のものと思われる痕跡が残る。957は砂岩製の砥石で8cm大の大きさである。958は敲石で、側縁の端部に敲打痕がみられる。両側に挟りか確認でき、石錘としても利用されていたものか。

これらの遺物より、S K 264とS K 265の構築時期は、どちらも弥生時代中期後半である。

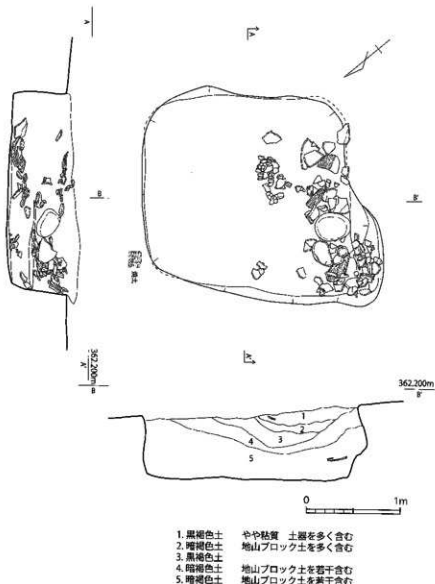


第6-27図 S K 265出土遺物実測図

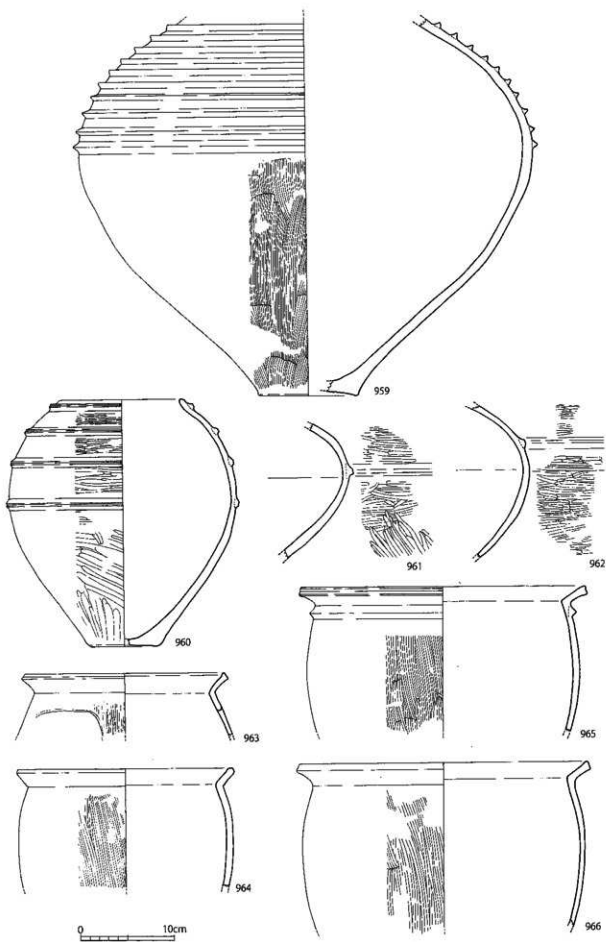
(2) S K 266

S K 266は、S K 264・S K 265の東20mに位置する貯蔵穴である。平面形は南北・東西ともに1.6m規模の方形で、南西角部に長さ0.8m、幅0.4mの作り出しの段を持つ。その深さは0.6mで、床面は平坦である。本貯蔵穴に伴う柱穴等は確認できなかった。

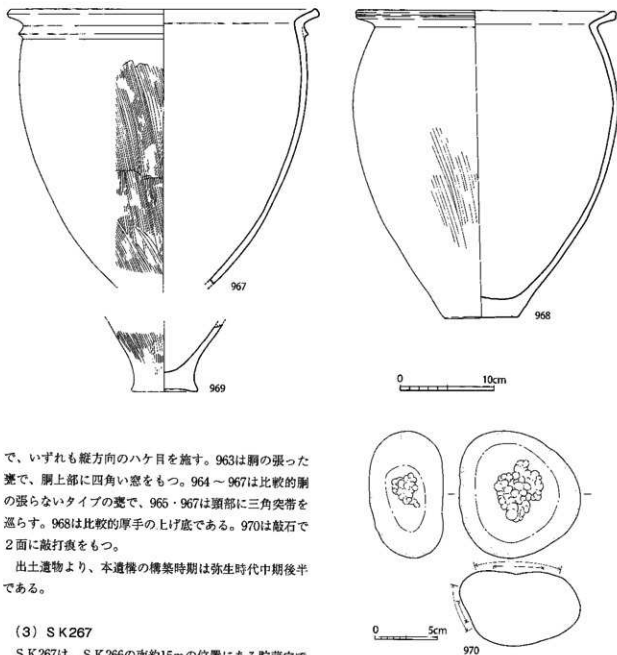
遺物は貯蔵穴廃絶後、すぐに南西方向から廃棄されたことがうかがえ、完形に復元できるほどの大きな破片が出土している。959は肩の張った広口壺で底部は比較的薄い。頸部以上を欠損する。肩から胴上部に10条の三角突帯を貼り付ける。復元胴部最大径40.8cm。外面は横方向のナアの後、縦方向のハケ目を施す。960は無頸壺でその胴は丸く底部で穿まる。肩から胴上半に4条のM字突帯を巡らす。胴上部は横方向のミガキ、下は縦方向のミガキを施す。961・962は胴の張った器形の壺で、M字突帯を貼り付ける。963～968は「く」の字状口縁の壺



第6-28図 S K 266実測図 (1/40)



第6-29図 SK266出土遺物実測図(1)



で、いずれも縦方向のハケ目を施す。963は胴の張った蓋で、胴上部に四角い窓をもつ。964～967は比較的胴の張らないタイプの甕で、965・967は頸部に三角突帯を巡らす。968は比較的厚手の上げ底である。970は敲石で2面に敲打痕をもつ。

出土遺物より、本遺構の構築時期は弥生時代中期後半である。

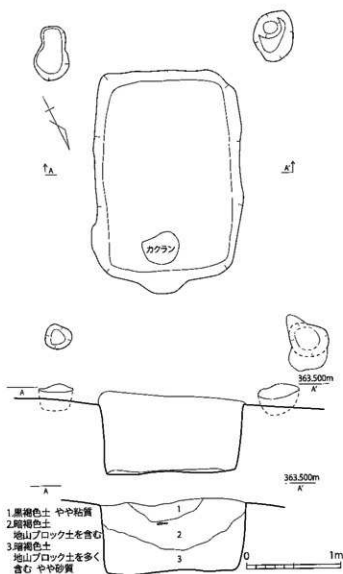
### (3) S K 267

S K 267は、S K 266の南約15mの位置にある貯蔵穴である。斜面下の比較的平坦な地形に立地する。その平面形は南北2.4m、東西1.6m規模の方形で、深さは検出面から0.85mで、床面は平坦である。床面北端に柱穴状のものがみられるが木根による攪乱である。掘土はレンズ状の自然堆積を示している。本遺構の最大の特徴は、方形遺構の各コーナーから0.7～1.1m外方に柱穴がみられる点である。柱穴の深さは約20cm程度で残存状態はよくないが、貯蔵穴上に覆屋が設置されていたと考えられる。

出土遺物は床面から浮いた箇所少量確認できたが、図示できるものはなかった。

土器は弥生時代のものであり、同様の周辺遺構の年代観より、本遺構は弥生時代中期後半のものであると推定できる。

第6-30図 S K 266出土遺物実測図(2)



第6-31図 S K 267実測図 (1/40)

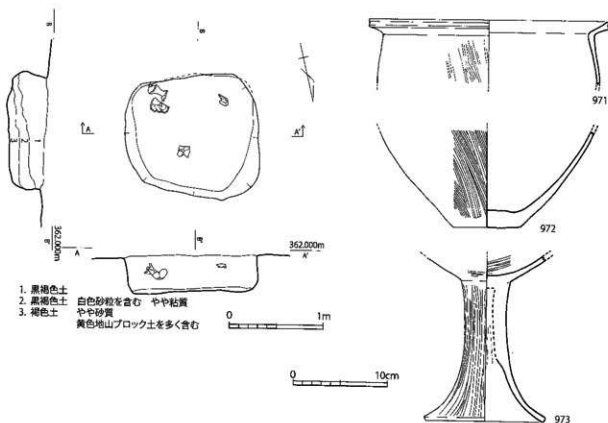
## (4) S K 268

S K 268は、S K 266の東8mの位置にある貯蔵穴である。この遺構は斜面下の平坦な地形に立地し、平面形は南北1.3m、東西1.5mの隅丸方形である。その深さは検出面から0.36mと浅く、床面は平坦である。埋土は北側から流れ込んだ自然堆積で、下層ほど黄褐色の地山ブロック土を多く含んでいる。本遺構に伴う柱穴等の施設は確認できなかった。

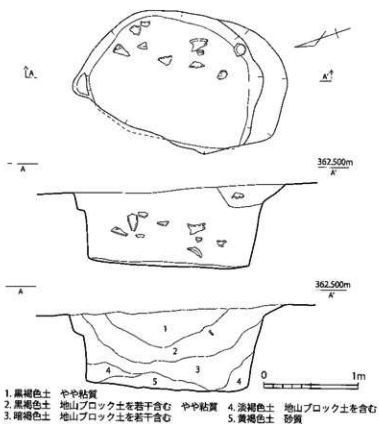
971は「く」の字状口縁の裏で、胴は張っていない。縦方向のハケ目を施す。972は比較的薄手で、壺の底部か。973は長く伸びた脚が朝顔状に開く高坏で、縦方向のハケ目が施され、内面にはシボリ痕がみられる。これらはいずれも埋土中から出土したもので、貯蔵穴廃棄後に流入したものである。

出土遺物より、本貯蔵穴は弥生時代中期後半に比定される。

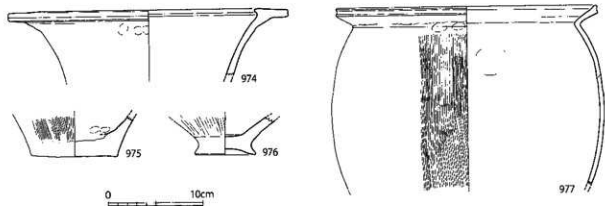




第6-32図 SK268実測図 (1/40)・SK268出土遺物実測図



第6-33図 SK269実測図 (1/40)



## (5) SK269

SK269は、SK268の南8mの位置にある貯蔵穴で、次に紹介するSK270に隣接して構築されている。その平面プランは南北2.1m、東西1.4mの隅丸方形で、深さは検出面から0.90mと深い。側壁はほぼ垂直に立ち、南側に浅い段をもつ。床面はほぼ平坦である。埋土は自然堆積のレンズ状を呈し、下層ほど黄褐色の地山ブロック土を多く含んでいる。本遺構に伴う柱穴等の施設は確認できなかった。

974は頸部がわずかに外湾して伸びる鋤先状口縁壺で、復元口径は29.2cmで、外面に指圧痕がみられる。975は平底の底部で、976は上げ底の底部。977は「く」の字の屈折が深い口縁の壺で、口縁端部はつまみ上げ、胴は丸い。復元口径は27.4cmである。978は球体に近い石製の投弾である。

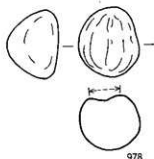
本貯蔵穴は弥生時代中期後半に比定できる。

## (6) SK270

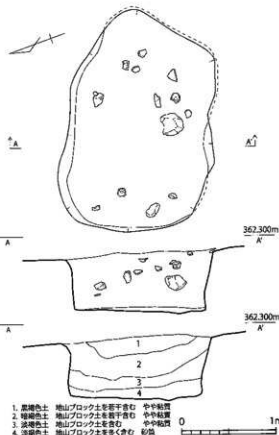
SK270は、SK269の北東約2mに位置し、平坦地に立地する貯蔵穴である。平面形は南北1.6m、東西2.4mの楕円の不整形で、深さは検出面から0.70mである。側壁は垂直に立つ。床面はほぼ平坦で、柱穴等の施設は確認できなかった。埋土の堆積はレンズ状で自然堆積を示しており、遺物は遺構廃絶後に中間まで埋まった段階で流入したものである。その出土遺物は第6-36図に示した。

979と980は、「く」の字状口縁の壺で、比較的胴が張る。979は口縁端部をつまみ出し、頸部に三角突帯を巡らす。981・982は上げ底で薄手の底部である。983は高坏の脚部で、内面には縦方向のハケ目を施し、外面は縦方向の寛ミガキの後、赤色顔料を塗布している。

出土遺物より、本貯蔵穴の構築時期は弥生時代中期後半に比定される。

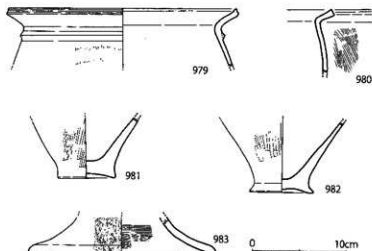


第6-34図 SK269出土遺物実測図



1. 黄褐色土 地山ブロック土を若干含む 中や粘質  
2. 緑褐色土 地山ブロック土を若干含む 中や粘質  
3. 淡褐色土 地山ブロック土を多く含む 中や粘質  
4. 淡褐色土 地山ブロック土を多く含む 砂質

第6-35図 SK270実測図 (1/40)



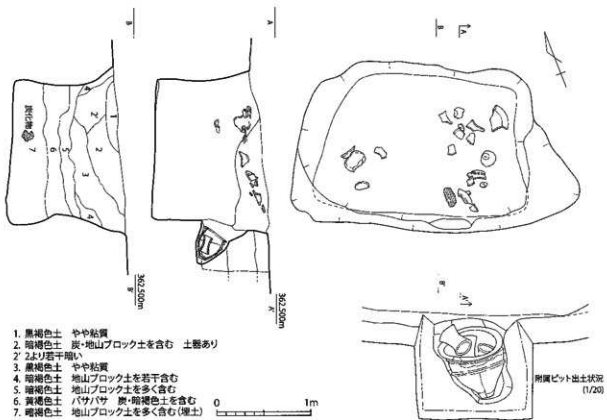
第6-36図 SK 270出土遺物実測図

## (7) SK 271

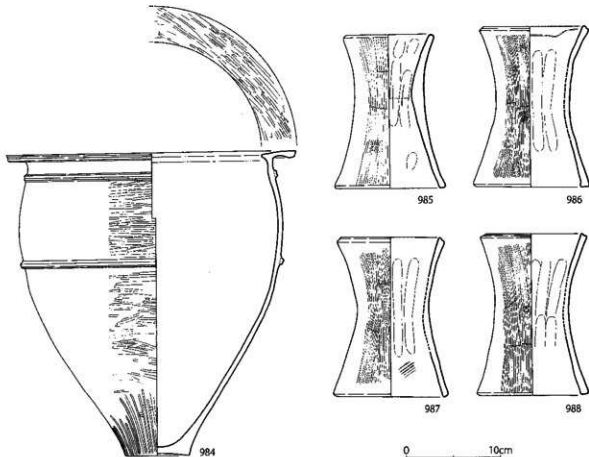
SK 271は、SK 269の南東約2mに位置し、平坦地に立地する貯蔵穴である。壁上部が崩れており、平面形は南北1.7m、東西3.05mの不整形を呈している。床面形状は長軸2.25m、短軸1.45mの長方形で、床面はほぼ平坦である。その深さは検出面から1.25mと深い。側壁はほぼ垂直に立ち、部分的に下がフラスコ状に開く。本遺構の最大の特徴は、南壁中位に赤色顔料を塗った須玖Ⅱ式土器甕を取めた横穴が掘られていたことである。横穴は口径30.8cm、器高32.0cmの甕が頭間なく収まる程度の大きさで、奥行きは0.5mほどである。甕の内部から4点の器台が出てきた。これらの遺物は第6-38図に示した。埋土の堆積を見てみると、埋納穴以下とそれ以上では状況が異なっている。埋納穴以下は、地山ブロック土の混入が顕著な層と混入が少ない層が互層になる水平堆積であることから、人為的に埋められた可能性を示している。それ以上の埋土はレンズ状の自然堆積となっている。第6-39図に示した遺物は、2層が埋まる段階で廃棄されたものである。

984は埋納穴から出土した甕である。水平な鋤先状口縁をもち、頸部及び胴部最大径下にM字突帯を貼り付ける。若干下げ底で、底部は薄い。胴外面及び口縁上面に篋ミガキを施し、赤色顔料を塗布する。985～988の器台は984の甕の内部から出土したものである。底径は11.6cm～12.2cm、器高は16.2cm～17.0cmを測る。外面は縦方向のハケ目、内部はしぼり痕がみられる。

989は頸部がゆるく外湾する鋤先状口縁瓮で、口縁端部は若干垂れる。頸部には6条のM字突帯を巡らせている。外面は丁寧なナデ仕上げを施している。口縁上面に2頭の鹿の線刻画が描かれており、その線は幅3mm、深さ2mmで表現されている。口縁部が全周していないので全容はつかめないが、2頭が右を向いた構図で描かれている。前に立つ鹿は、横5.3cm、縦5.2cmを測る。頭部は三角に描かれ、頭から後ろに約2cmの線が2本延びている。これは角2本を表現したものか。首は2本線で胴部へと続く、胴部は箱状を呈し、3本の水平線で描かれており、そこから前脚2本、後脚2本が下に延びる。胴の後ろには先がL字に下に垂れた尾が描かれている。2頭目の鹿は、横5.5cm、縦5.7cmを測る。頭部は2本の線で三角形にして表現し、頭部後方に長さ3cmの1本長い角が延び、そこから3本の角が下方向に短く枝分かれする。枝角の長さは6.5mmほどである。2本線で描かれた頸部は2本の前足へと続く。直線的な背中と丸みを帯びた腹部の中に斜線5本を刻むことで胴部を表現している。胴の後ろに2本線で後脚を、丸みを帯びた水平線で尾を表現している。2頭の鹿の間隔は5.5cmあり、その間には何も描かれていない。



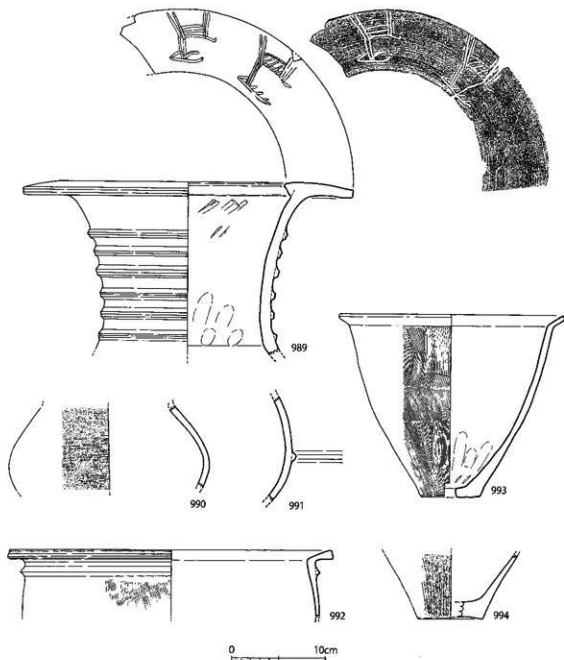
第6-37図 SK271実測図 (1/40・1/20)



第6-38図 SK271出土遺物実測図

990は下に広がる壺の胴部で、外面に赤色顔料を塗布する。991はM字突帯を貼り付けた壺の胴部、992は強く屈折する「く」の字状口縁の寛で、頸部に三角突帯を巡らす。993は甌で、底部からゆるやかに内湾しながら「く」の字の口縁部へと続く。器高は19.2cm。底部中央に孔が1個ある。

これらの出土遺物より、本遺構は弥生時代中期後半に構築されたものと考ええる。



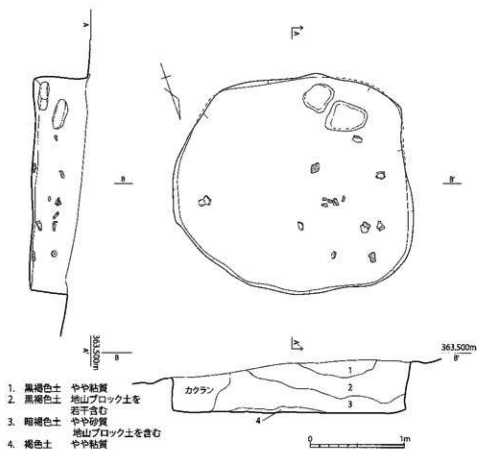
第6-39図 S K 271出土遺物実測図

## (8) S K 272

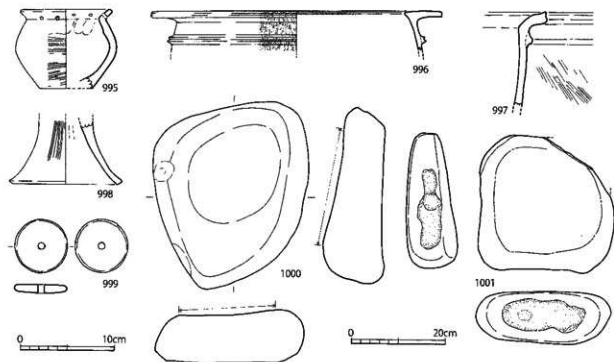
S K 272は、S K 267の東約6 mに位置し、斜面にかかった箇所立地する貯蔵穴である。規模は南北2.35m、東西2.6mで、平面形は不整形円形を呈している。側壁はほぼ垂直に立ち、検出面からの深さは0.6mである。床面はほぼ平坦である。埋土はレンズ状の自然堆積であり、大半の遺物が、遺構が埋まっていく段階で廃棄・流入したものである。

995は器高8.3cmの小型の無頸壺で、強く屈折した口縁に4点の穿孔を施す。996は垂れ気味の鋤先状口縁壺で、外面に赤色顔料を塗布する。997は甕で口縁端部をつまみ上げる。998の脚は、外面に縦方向のハケ目、内面に絞り痕を残す。999は土製の紡錘車で、径は5.6cm、中央に0.7cmの孔を持つ。1000・1001ともに安山岩の台石である。

出土遺物より、本遺構は弥生時代中期後半に比定できる。



第6-40図 S K 272実測図 (1/40)



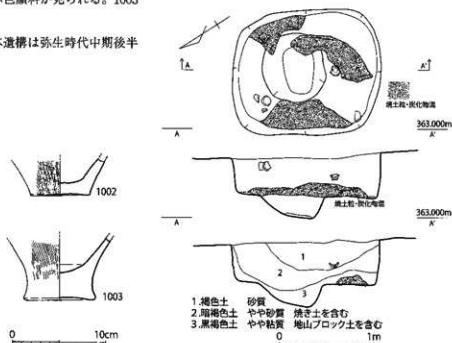
第6-41図 SK272出土遺物実測図

(9) SK273

SK273は、SK272の東約10mに位置し、斜面にかかった筒所に立地する貯蔵穴である。規模は南北1.60m、東西1.3mで、平面形は隅丸方形を呈している。側壁はほぼ垂直に立ち、深さは検出面から0.45mである。床面はほぼ平坦で、中央部に径50cm、深さ25cmの柱穴1点とその周りに炭化物を含んだ焼土塊を確認した。

焼土塊より上の埋土はレンズ状の自然堆積を示しており、土器等の遺物はその層に包含されていた。1002は比較的薄手の底部で外面に赤色顔料が見られる。1003は厚手の底部である。

出土遺物は少ないが、本遺構は弥生時代中期後半のものと考えられる。

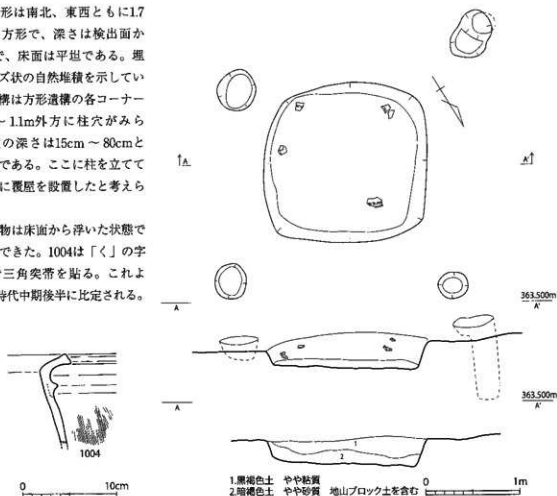


第6-42図 SK273実測図 (1/40)・出土遺物実測図

## (10) SK 274

SK274はSK273の南約8mの位置の斜面地に立地する貯蔵穴である。平面形は南北、東西ともに1.7m規模の方形で、深さは検出面から0.35mで、床面は平坦である。埋土はレンズ状の自然堆積を示している。本遺構は方形遺構の各コーナーから0.7～1.1m外方に柱穴がみられ、柱穴の深さは15cm～80cmとまちまちである。ここに柱を立てて貯蔵穴上に覆屋を設置したと考えられる。

出土遺物は床面から浮いた状態で少量確認できた。1004は「く」の字状口縁で三角突帯を貼る。これより、弥生時代中期後半に比定される。



第6-43図 SK 274実測図 (1/40)・出土遺物実測図

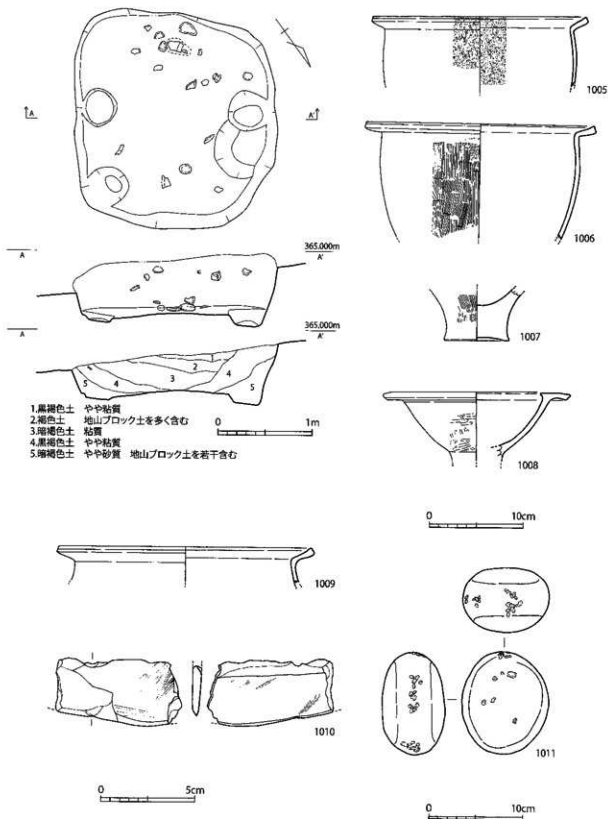
## (11) SK 275

SK 275は、SB7の南約10mに位置し、斜面にかかった箇所立地する貯蔵穴である。規模は南北2.30m、東西2.1mで、平面形は隅丸方形を呈している。側壁は緩やかに立ち上がり、深さは検出面から0.70mである。床面はほぼ平坦で、東西両側に40cm、深さ20～30cmの柱穴が1点ずつ検出した。

遺構内の埋土は自然堆積を示しており、土器等の遺物は廃絶後に遺構が埋まって行く段階で廃棄・流入したものと考えられる。1005・1006・1009は「く」の字状口縁の甕で、胴は張らず、口縁端部をつまみ上げている。復元口径はそれぞれ22.6cm、24.2cm、27.0cmである。1007は厚手、上げ底の甕の底部である。外面に縦方向のハケ目が見られる。1008は鋤先状口縁の高坏である。口縁端部は若干下がっている。坏身は脚から緩やかに内湾する。外面にミガキを施した後、赤色顔料を塗布する。復元口径は17.6cmである。1010の石包丁の刃部は外湾し、両面からの穿孔が1箇所にみられ、表裏面には製作時のものと思われる痕跡が残る。1011は敷石でもにも側縁部に敲打痕がみられる。

これらの出土遺物より、本貯蔵穴は弥生時代中期後半に比定される。





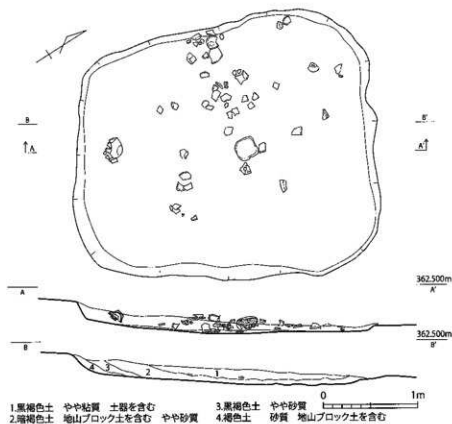
第6-44図 S K275実測図 (1/40)・出土遺物実測図

## (12) SK276

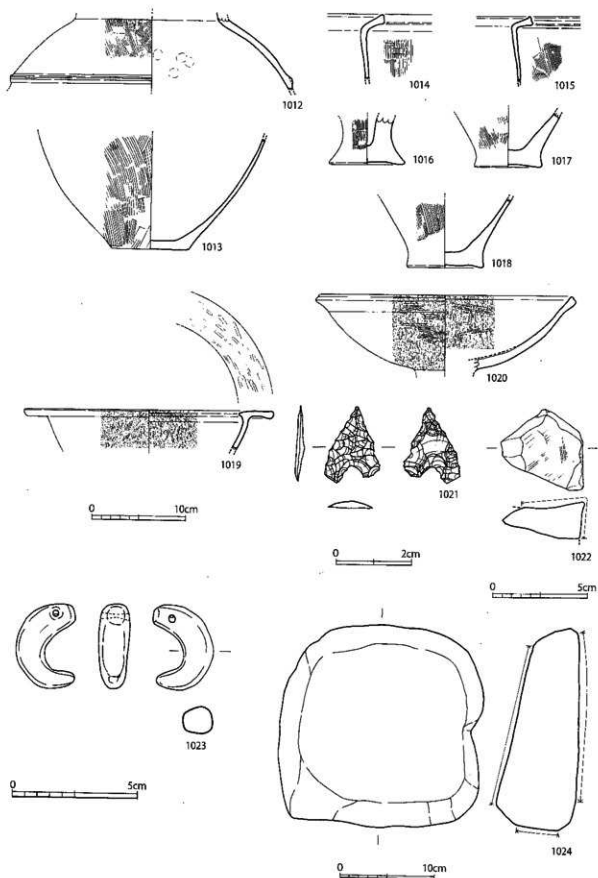
SK276は、本調査区の北中央部の緩やかな斜面地で確認された貯蔵穴である。その大きさは南北3.20m、東西2.9mで、平面形は北側が若干広がった隅丸方形を呈している。側壁は緩やかに立ち上がり、検出面からの深さは、斜面であるため、南側が0.30m、北側が0.15mであった。床面はほぼ平坦で、床面からは柱穴等の施設は検出できなかったが、遺物は床全体に広がって出土した。

遺構内の掘土はレンズ状を呈しており、土器・石器等の遺物は腐蝕後に遺構が埋まって行く段階で廃棄・流入したものと考えられる。1012は広口壺の肩部で、M字状突起を1条巡らす。1013は薄手の平底で、壺の底部か。1014・1015は「く」の字状口縁の甕で、胴は張らず、口縁端部をつまみ上げている。1016～1018は厚手、上げ底の甕の底部である。外面に縦方向のハケ目が見られる。1019・1020は高坏で、1019は鋤先状口縁を呈しており、内外面ともにミガキを施した後、赤色顔料を塗布している。1020の坏身は口縁部にかけて緩やかに内湾し、口縁は少し外につまむ。1021は黒曜石製の二等辺三角形を呈する石鏃、1022は砥石、1023は土製の勾玉で、赤色顔料が残る。高さ3.35cm、幅1.1cm、0.25cmの両面穿孔の孔をもつ。1024は安山岩製の台石である。

出土土器より、弥生時代中期後半に比定される。



第6-45図 SK276実測図 (1/40)



第6-46図 S K 276出土遺物実測図

## (13) SK277

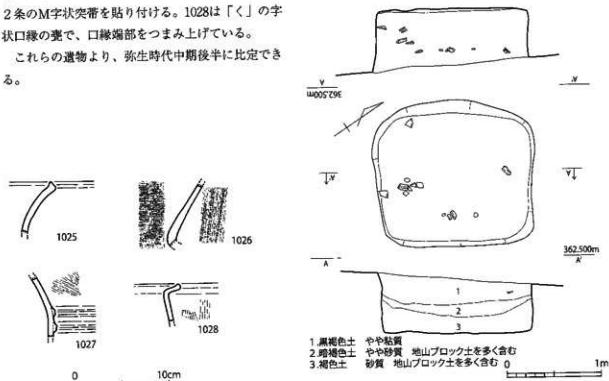
SK277は、SK276の南東5mの位置の緩やかな斜面地にある貯蔵穴で、その平面形は、隅丸方形を呈している。規模は南北1.70m、東西1.60m、深さ0.6mで、平坦な床面をもつ。本遺構は南西を除く、方形のコーナーから0.9～1.2m外方に柱穴がみられ、柱穴の深さは20cm～35cmである。このことから貯蔵穴上に覆屋を設置したと考えられる。

土器・石器等の遺物は廃絶後に遺構が進んで行く段階で廃棄・流入したもので小破片のみの出土であった。

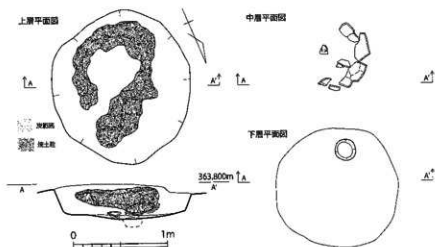
1025・1026は壺の口縁部で、1025は緩やかに外反し、1026は直行する。1026は内外面に甍ミガキの後、赤色顔料を塗布する。1027は壺の胴部で、最大径部の上に

2条のM字状突帯を貼り付ける。1028は「く」の字状口縁の甍で、口縁端部をつまみ上げている。

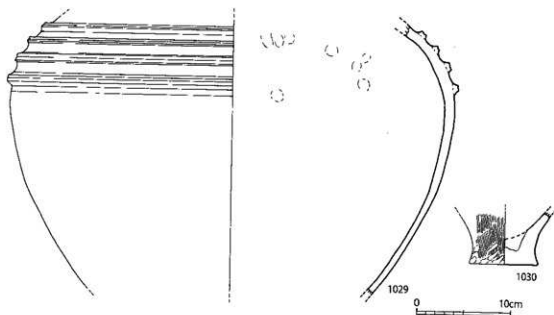
これらの遺物より、弥生時代中期後半に比定できる。



第6-47図 SK277実測図 (1/40)・出土遺物実測図



第6-48図 SK278実測図 (1/40)



第6-49図 S K 278出土遺物実測図

(14) S K 278

S K 278は、S H 74とS H 75の中間にある貯蔵穴で、南北1.6m、東西1.45m、床面までの深さは0.40mで、その平面形は円形である。平坦な床面をもつが、床南部に径20cm、深さ10cmの柱穴を有する。遺構内部からは、炭と焼土塊の下から第6-49図に示した土器が出土している。

1029は広口甕の胴部で、肩にM字状突帯を4条貼り付ける。復元胴部最大径は28.6cmである。1030は厚手の甕の底部で、縦方向のハケ目を施す。

出土遺物より、弥生時代中期後半に構築したものと考えられる。

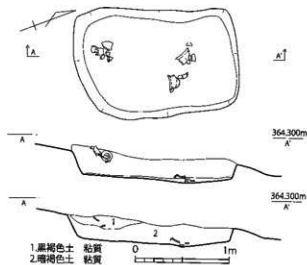
(15) S K 279

S K 279は、S K 278の南西約5mの位置にあり、その立地は南に高い斜面地にある貯蔵穴である。その規模は南北1.68m、東西1.20mで、隅丸方形の平面形を呈している。

検出面から床面までの深さは南側が0.42m、北側が0.3mである。壁面は緩やかに立ち、床面は平坦である。

遺物は床面直上及び若干浮いた状態で出土している。1031は「く」の字状口縁の甕で、胴部が若干張る。復元口径は23.6cm。1032は甕台で、外面に縦方向のハケ目が見られる。

本遺構の構築時期は、弥生時代中期後半に比定される。



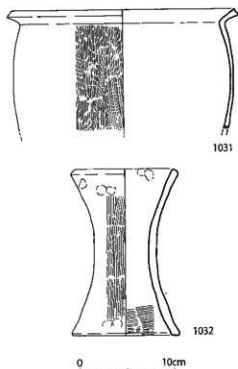
第6-50図 S K 279実測図 (1/40)

## (16) SK280

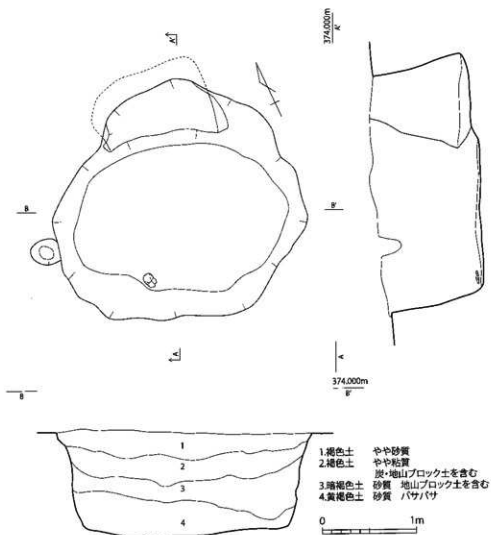
SK280は、斜面上部の当調査区では最高所にある貯蔵穴である。平面形は、東西方向に主軸のある楕円形を呈している。大きさは長軸2.70m、短軸2.30mである。側壁は緩やかに立ち上がり、床は平坦である。床での規模は2.20m×1.60m程度である。北側に幅1.30m、奥行き約1.0mの副室を設けている。その床は10cmほど高く作っている。副室の北側壁はオーバーハングしている。規模の割に出土遺物は少なく、図示可能なものだけを掲載した。

1033は「く」の字状口縁の甕で、口縁端部をつまみ上げている。1034は平底の甕の底部か。

これらより、SK280の構築時期は弥生時代中期後半と考えられる。



第6-51図 SK279出土遺物実測図



第6-52図 SK280実測図 (1/40)

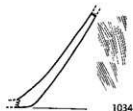
(17) S K 281

S K 281は、S K 280の約15m北東に位置する貯蔵穴で、その立地はほぼ平坦である。平面形は、南北にやや長い不整形円形を呈している。大きさは長軸2.50m、短軸2.10mで、深さ1.25mである。長軸方向の側壁は緩やかに立ち上がり、短軸方向は真っ直ぐ立ち上がる。床面はほぼ平坦に作られている。

床での規模は1.80m×1.90mである。内部からは長軸の両側に小規模の横穴を確認できた。南側の大きさは径40cm、奥行き45cmで、北側のものは径55cm×30cm、奥行き70cmほどの大きさである。この施設は壺と器台4点を埋納していたS K 271と同じ機能を有するものと考えるが、本横穴遺構からは遺物が出土しなかった。



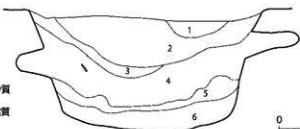
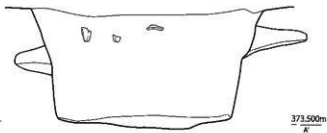
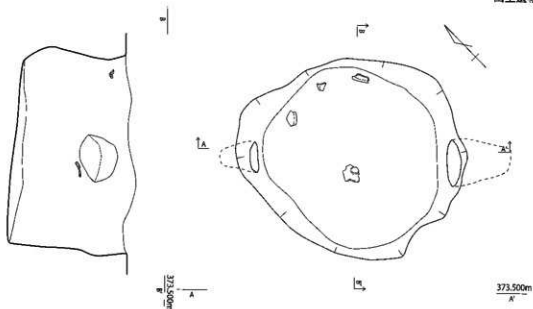
1033



1034

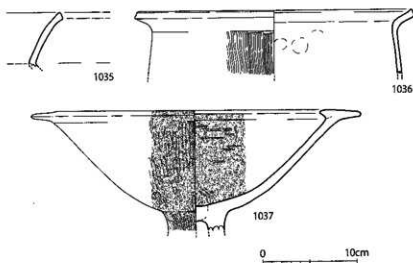


第6-53図 S K 280  
出土遺物実測図



- 1. 褐色土 黄色 地山土を多く含む 砂質
- 2. 褐色土 黄色 地山土を含む 砂質
- 3. 黒褐色土 地山ブロック土を若干含む やや砂質
- 4. 褐色土 地山ブロック土を含む やや砂質
- 5. 暗褐色土 地山ブロック土を若干含む やや粘質
- 6. 黒褐色土 粘質

第6-54図 S K 281実測図 (1/40)



第6-55図 S K 281出土遺物実測図

土層観察の結果、本遺構もS K 271同様に、埋納穴以下とそれ以上では堆積状況が異なっている。埋納穴以下は、地山ブロック土の混入が顕著な層と混入が少ない層が互層になる水平堆積（第6-54図3～6層）であることから、人為的に埋められた可能性を示している。それ以上の埋土はレンズ状の自然堆積となっている。第6-55図に示した遺物は、2層が埋まる段階で廃棄・流入したものである。

1035は頸部から口縁にかけてはやや外湾しながら立ち上がる壺である。1036は「く」の字状口縁の臺で、口縁端部をつまみ上げている。1037は鋤先状口縁の高坏で、端部は垂れる。内外面ともにミガキを施した後、赤色顔料を塗布している。

S K 281は弥生時代中期後半に比定できる。

#### (18) S K 282

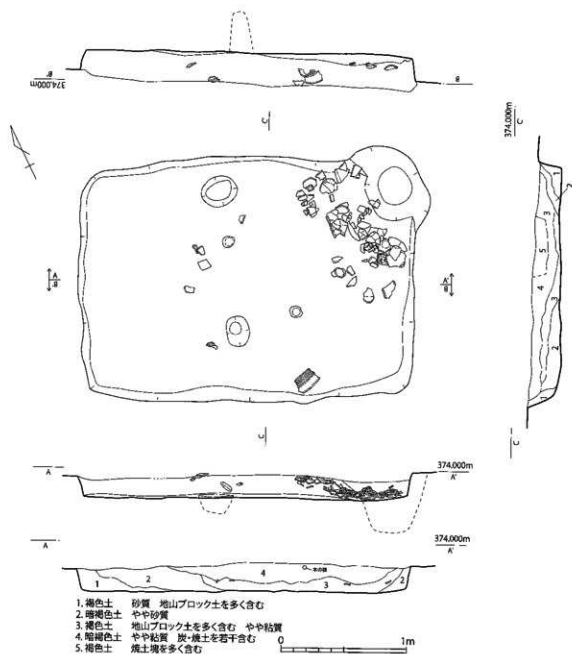
S K 282は、S K 281と同じ調査区南の最高部の平坦面に立地し、S K 281の南東約15mにある貯蔵穴である。平面形は、東西に長軸をもつ方形を呈している。大きさは長軸2.70m、短軸2.00mである。検出面からの深さが30cmである。東角に長軸0.70m、短軸0.5m、深さ0.55cmの埋土坑を確認した。また床面中央部の南寄り深さ80cmほどの柱穴を1本検出した。

遺物は床面直上で出土している。なかでも東埋土坑付近で多く見つかった。1038・1039は壺である。1038は端部にかけて水平な鋤先状口縁を呈し、外湾する頸部に、肩の張った胴部が続く。底は平底である。頸部には8条の、また胴部上半には4条のM字状突帯を巡らす。復元した器高67.8cm、口径23.6cm、胴部最大径52.0cm、底部径は10.2cmである。丁寧なナデと指圧痕が見られる。口縁上部に矢じりの線刻が彫られている。口縁部が全周していないので全容はつかめないが、8つの矢じりの線刻が確認できる。矢じりはおおむね4.2cmの長さで、幅は1.1～1.8cm。その輪郭は直線的で鋭い線刻で、口縁の外から内に向かって線が描かれている。線は幅3mm、深さ2mmである。

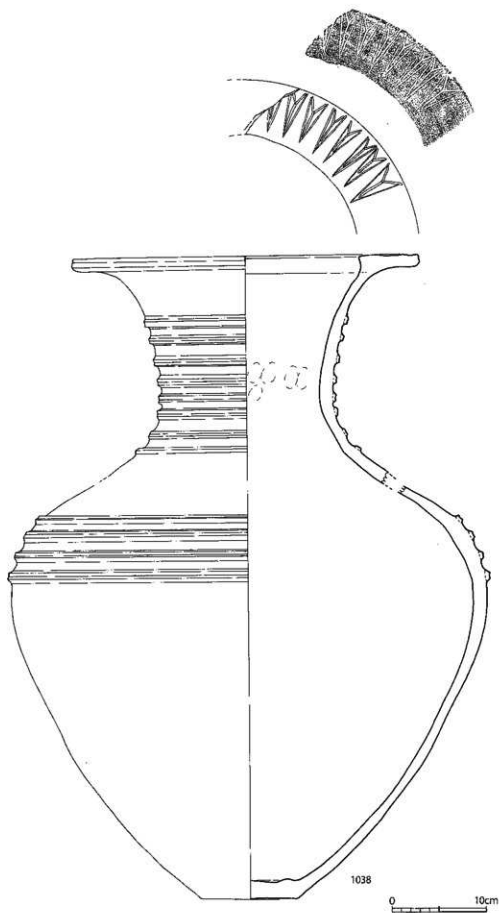


1039は頸部より上を欠く蓋で、肩部から胴部最大径の位置に3条のM字状突帯を貼り付ける。外面には横方向の笥ミガキ調整が見られる。1040は「く」の字状口縁の裏で、胴は張らない。1041・1042は比較的薄手の上げ底の底部である。1043は鋤先状口縁裏で端部は垂れる。外面にミガキを施した後、赤色顔料を塗布している。1044・1045は脚部で、それぞれ外面にミガキ、ハケ目等が見られる。1046は輝緑凝灰岩製の定形の石包丁で、刃部は外湾し、両面からの穿孔が2箇所のみられる。表裏面には製作時のものと思われる痕跡が残る。

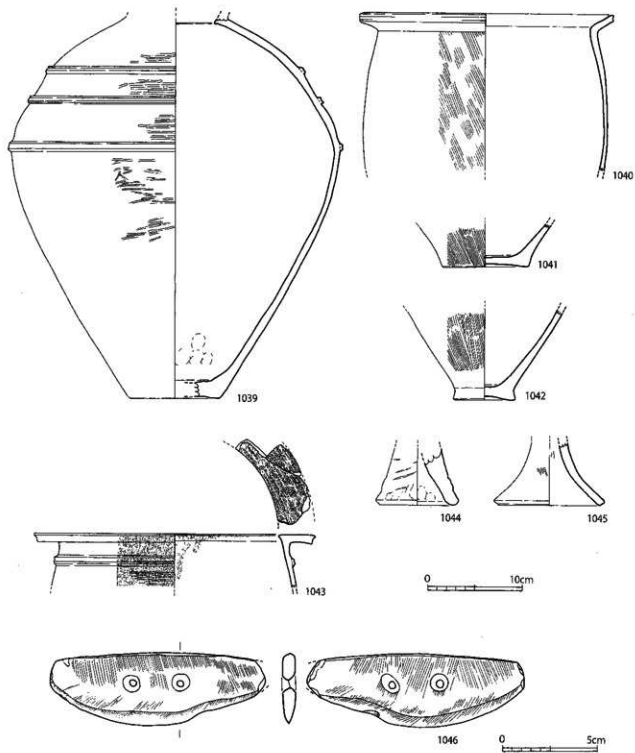
出土遺物より、本貯蔵穴の構築時期は弥生時代中期後半に比定される。



第6-56回 SK 282実測図 (1/40)



第6-57図 SK 282出土物実測図(1)



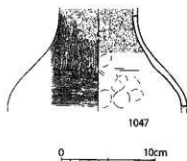
第6-58図 S K 282出土遺物実測図(2)

## (19) S K 283

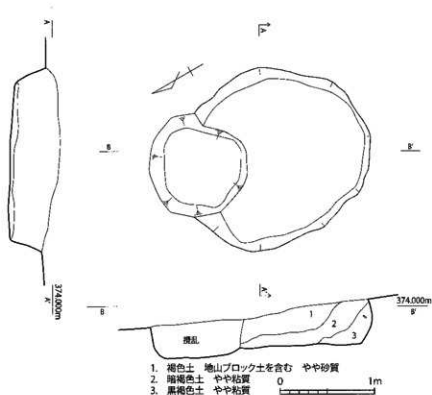
S K 283は、S K 282の南東6mに位置している貯蔵穴である。北側を木の根による攪乱を受けているが、平面形は楕円形で、長軸2.00m、短軸1.75mである。検出面からの深さは50cmで、床面は平坦である。遺構内の埴土はレンズ状の自然堆積で、第60図の3層から若干の遺物が出土した。

1047は長頸壺の胴部か。外面には頸部に縦方向のミガキ、胴部に横方向のミガキを施し、赤色顔料を塗布している。

S K 283は弥生時代中期後半に比定される。



第6-59図 S K 283出土遺物実測図



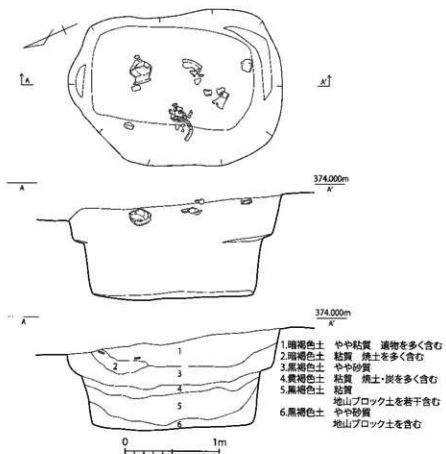
第6-60図 S K 283実測図 (1/40)

## (20) S K 284

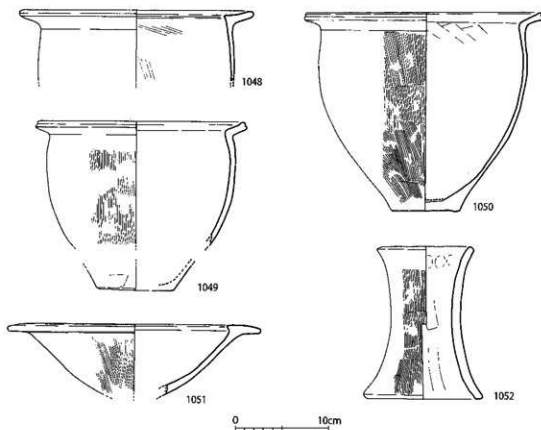
S K 284は、S K 283の東約10mにある貯蔵穴で、南北方向に主軸をもち、平面形は長方形を呈している。長さ2.30m、幅1.60m、深さ1.1mで、床面は平坦である。本遺構は2段掘りで、南と北に小さなテラスを設けている。遺物は遺構が埋まりきる最終段階で廃棄されたものである。

1048～1050は「く」の字状口縁の甕である。1048は強く屈折する口縁をもつ。1049・1050は頸部をつまみ上げた口縁部で、比較的薄手の平底をもつ。1051は鋤先状口縁の高坪で、端部は若干下げる。1052は器台で、内面には筥ヶズリ、指圧痕による調整を施し、外面には縦方向のハケ目が残る。

これらの出土遺物より、S K 284は弥生時代中期後半に構築されたものである。



第6-61図 S K 284実測図 (1/40)



第6-62図 S K 284出土遺物実測図

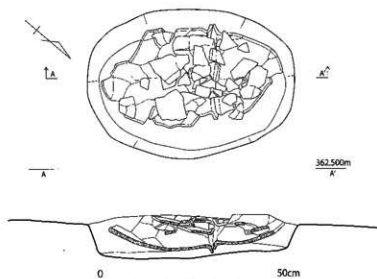
## 3 小児用甕棺

## (1) S K 285

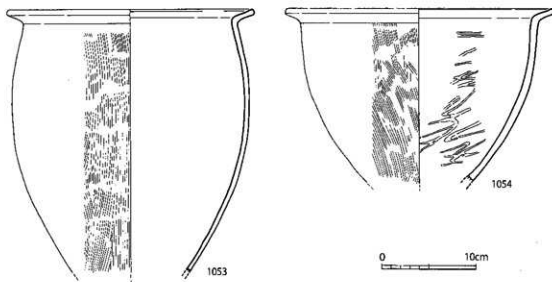
S K 285は、調査区北側の平坦部で検出した甕棺墓で、S H 76の南約4mの位置で確認した。土坑の規模は長軸0.58m、短軸0.39m、深さ0.12mである。甕を合わせた形で検出したが、上面は後世の削平を受けていた。

1053は、強く外反する口縁をもち、胴の張った甕である。口縁端部を若干つまみ上げている。復元口径は26.4cmを測る。外面調整はヨコナアの後、縦方向のハケ目を施す。1054は「く」の字状口縁で、胴部は張っていない。復元口径は28.8cmである。

S K 285の構築時期は弥生時代中期後半と考えられる。



第6-63図 S K 285実測図 (1/10)



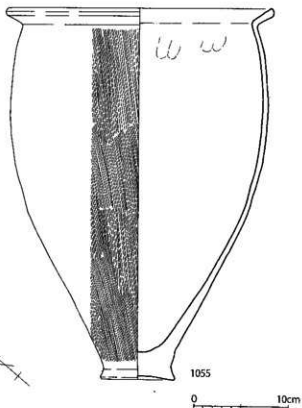
第6-64図 S K 285出土遺物実測図

(2) S K 286

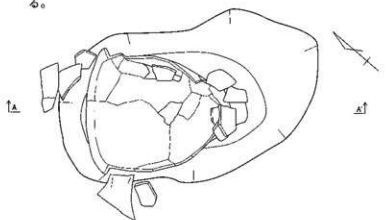
S K 286は、調査区南の最高所に立地し、S K 281の東5 mに位置する甕棺墓である。土坑の規模は長軸0.78 m、短軸0.45m、深さ0.18mである。上面は後世の削平を受けており、甕1点だけしか確認できなかった。遺物は第6-65図に示した。

1055は、強く外反する「く」の字状口縁をもち、胴の張った長胴の甕で、厚手の上げ底である。外面調整はヨコナアの後、縦方向のハケ目を施す。頸部内面には指圧痕が残る。復元口径は27.8cm、器高39.1cm、底部径7.6cmを測る。

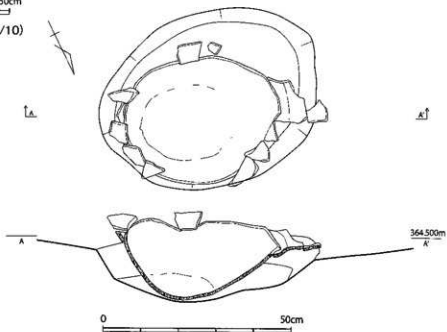
これらより、S K 286は弥生時代中期後半に比定される。



第6-65図 S K 286出土遺物実測図



第6-66図 S K 286実測図 (1/10)



第6-67図 S K 287実測図 (1/10)

## (3) SK287

SK287は、SH75とSH78の間にある甕棺墓である。土坑の規模は長軸0.61m、短軸0.48m、深さ0.21mである。外反する口縁をもつ甕と胴長で丸底の甕の胴部を合わせた形で検出したが、上面は後世の削平を受けており、下半面が残存しているだけであった遺物は第6-68図に示した。

1056は、外反する口縁にやや張った胴部をもつ甕で、頸部に断面三角の突帯を貼り付け、そこに刻目を入れている。復元口径は26.2cm。外面には平行タタキがみられる。1057は楕円形に張った胴をもち、底はやや尖った丸底である。胴部に突帯を巡らす。内外面ともにハケ目調整を行う。

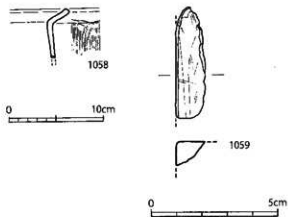
出土遺物より、SK287は弥生時代後期終末に比定される。

## 4 掘建柱建物

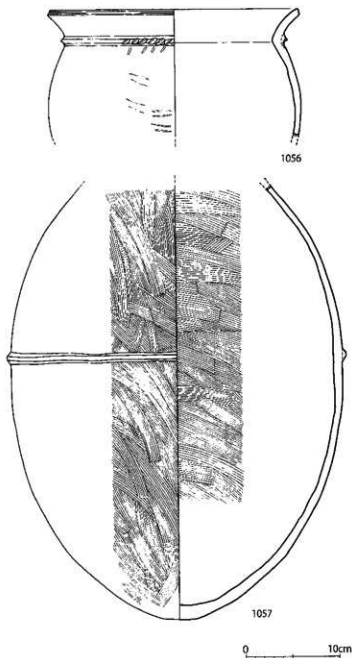
## (1) SB7

SB7は調査区の北側で確認された掘建柱建物で、南から北に向かって下る斜面上に立地する。その規模は5間×3間で、床面積は45.7㎡である。主軸はN-38°-Eである。内部に棟持ち柱を2本もつ。柱からは土器の細片しか出土していないが、唯一実測可能であった土器が1058の甕である。「く」の字状口縁の端部を跳ね上げるもので、外面に縦方向のハケ目をもつ。ほかに1059の砥石も出土している。

出土遺物より、SB7の構築時期は弥生時代中期後半に比定される。

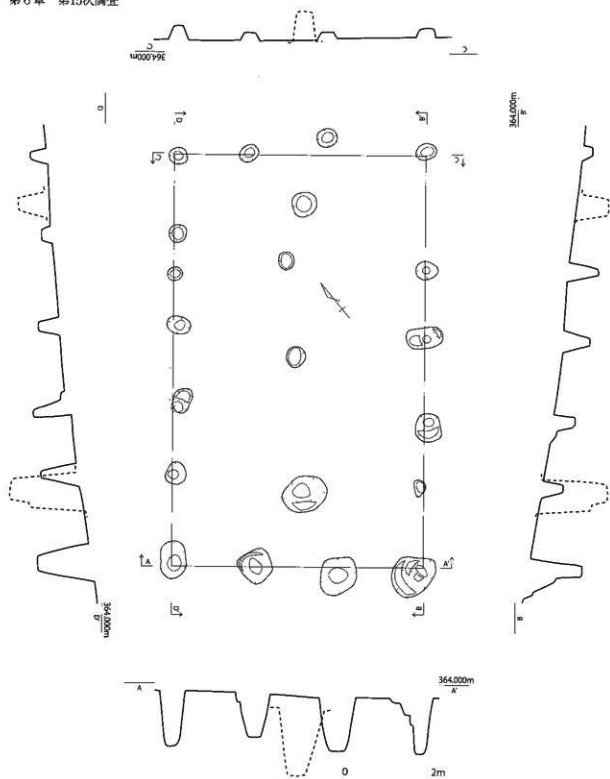


第6-69図 SB7出土遺物実測図



第6-68図 SK287出土遺物実測図

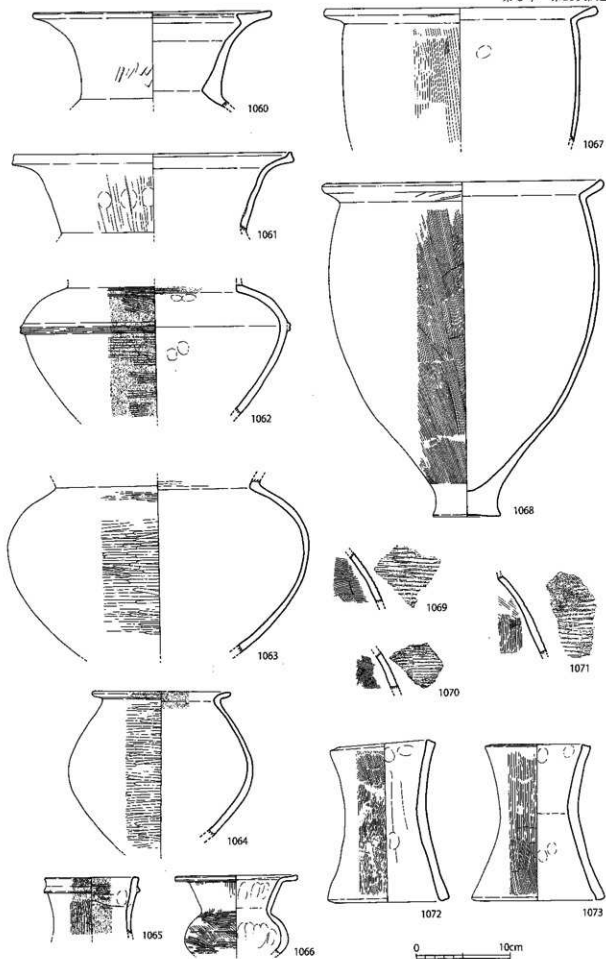




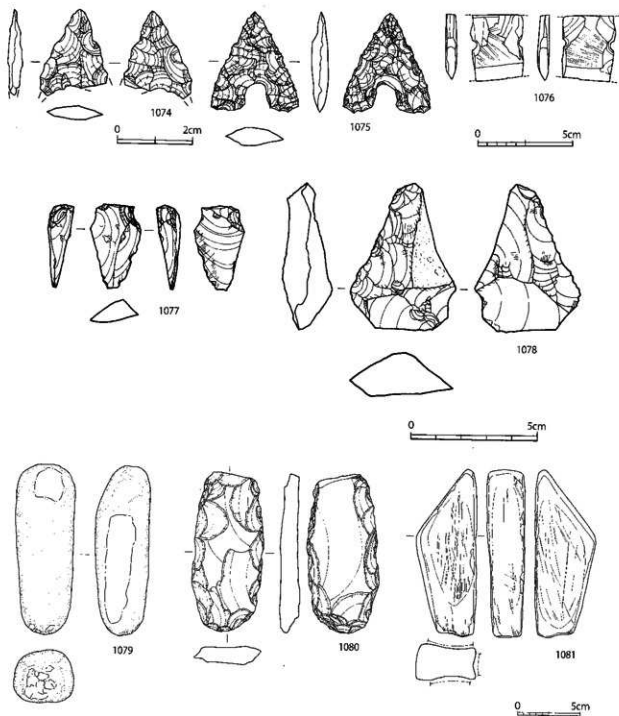
第6-70図 S B 7実測図 (1/80)

### 5 その他の遺構出土遺物

ここでは、本調査区の他の遺構及び表採や攪乱から出土した遺物を紹介する。1060～1063は竈である。1060は鋸先状口縁をもち、1062は肩が張り胴部にM字突帯を貼り付ける。1064は小型甕、1065は長頸壺、1066は小型壺、1067、1068は弥生時代中期の甕、1069～1071は外面にタタキを施す。1072・1073は器台。1074は姫島産黒曜石の石鏃、1075は黒曜石製の挟りの深い石鏃、1076は粘板岩製の石包丁、1077・1078は西九州産黒曜石の剥片、1079は敲石、1080は扁平打製石斧、1081は砥石である。



第6-71図 表採及びその他の遺構出土遺物実測図(1)



第6-72図 表採及びその他の遺構出土遺物実測図(2)

## 四日市遺跡（第15次調査）における放射性炭素年代 （AMS測定）

（株）加速器分析研究所

### 1 測定対象試料

四日市遺跡（第15次調査）は、大分県玖珠郡玖珠町大字四日市に所在する。測定対象試料は、竪穴建物跡から出土した炭化物4点である（表1）。この遺跡は弥生時代中期から古墳時代初頭の集落跡で、試料が出土した竪穴建物跡はいずれも弥生時代中期とされる。

### 2 測定の意義

竪穴建物跡の廃絶時期を明らかにする。

### 3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/l（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

### 4 測定方法

加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、<sup>14</sup>Cの計数、<sup>13</sup>C濃度（<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C）、<sup>14</sup>C濃度（<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxII）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

### 5 算出方法

- (1)  $\delta^{14}\text{C}$  は、試料炭素の<sup>14</sup>C濃度（<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表1）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) <sup>14</sup>C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中<sup>14</sup>C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。<sup>14</sup>C年代は $\delta^{14}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。<sup>14</sup>C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、<sup>14</sup>C年代の誤差（±1σ）は、試料の<sup>14</sup>C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- (3) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の  $^{14}\text{C}$  濃度の割合である。pMC が小さい ( $^{14}\text{C}$  が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 ( $^{14}\text{C}$  の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も  $\delta^{13}\text{C}$  によって補正する必要があるため、補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の  $^{14}\text{C}$  濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の  $^{14}\text{C}$  濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 $^{14}\text{C}$  年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差 ( $1\sigma=68.2\%$ ) あるいは 2 標準偏差 ( $2\sigma=95.4\%$ ) で表示される。グラフの縦軸が  $^{14}\text{C}$  年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$  補正を行い、下 1 桁を丸めない  $^{14}\text{C}$  年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13 データベース (Reimer et al. 2013) を用い、OxCal v4.2 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表 2 に示した。暦年較正年代は、 $^{14}\text{C}$  年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

## 6 測定結果

測定結果を表 1、2 に示す。

試料の  $^{14}\text{C}$  年代は、No. 12 が  $2130 \pm 20\text{yrBP}$ 、No. 21 が  $1840 \pm 20\text{yrBP}$ 、No. 30 が  $1830 \pm 20\text{yrBP}$ 、No. 4 が  $2110 \pm 20\text{yrBP}$  である。暦年較正年代 ( $1\sigma$ ) は、No. 12、No. 4 が弥生時代中期頃、No. 21、No. 30 が弥生時代後期頃に相当する (藤尾 2009)。試料が出土した竪穴建物跡はすべて弥生時代中期とされるが、S-015 出土の 2 点はそれより新しい値を示した。

なお、試料 No. 21、No. 30 が含まれる 1~3 世紀頃の暦年較正に関しては、北半球で広く用いられる較正曲線 IntCal に対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘がある (尾脊 2009、坂本 2010 など)。その日本産樹木のデータを用いてこれらの試料の測定結果を暦年較正した場合、ここで報告する較正年代値よりも新しくなる可能性がある。

試料の炭素含有率はいずれも 60% を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表 1 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$  補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理 方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
I AAA-161309	No.12	遺構:S-002	炭化物AAA	-25.37 ± 0.28	2,130 ± 20	76.73 ± 0.23	
I AAA-161310	No.21	遺構:S-015	炭化物AAA	-26.41 ± 0.25	1,840 ± 20	79.51 ± 0.24	
I AAA-161311	No.30	遺構:S-015	炭化物AAA	-26.91 ± 0.26	1,830 ± 20	79.61 ± 0.22	
I AAA-161312	No.4	遺構:S-025	炭化物AAA	-11.82 ± 0.27	2,110 ± 20	76.94 ± 0.23	

[#8224]

表2 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 $^{14}\text{C}$ 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用(yrBP)	1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-161309	2,130 $\pm$ 20	76.67 $\pm$ 0.23	2,127 $\pm$ 24	199calBC - 149calBC (44.9%) 141calBC - 112calBC (23.3%)	346calBC - 321calBC (4.9%) 206calBC - 87calBC (85.7%) 79calBC - 56calBC (4.8%)
IAAA-161310	1,860 $\pm$ 20	79.28 $\pm$ 0.23	1,841 $\pm$ 24	133calAD - 214calAD (68.2%)	88calAD - 104calAD (3.1%) 122calAD - 240calAD (92.3%)
IAAA-161311	1,860 $\pm$ 20	79.30 $\pm$ 0.21	1,831 $\pm$ 22	139calAD - 216calAD (68.2%)	128calAD - 239calAD (95.4%)
IAAA-161312	1,890 $\pm$ 20	79.03 $\pm$ 0.23	2,105 $\pm$ 23	172calBC - 94calBC (68.2%)	191calBC - 54calBC (95.4%)

[参考値]

## 文献

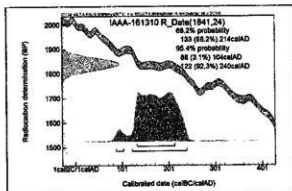
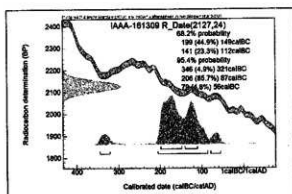
Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360

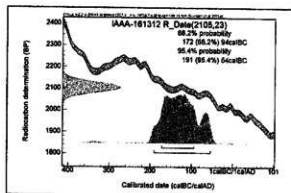
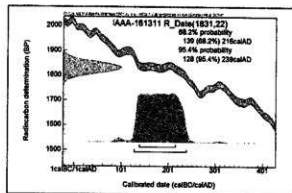
藤尾慎一郎 2009 弥生時代の実年代, 西本豊弘編, 新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代, 雄山閣, 9-54

尾崎大真 2009 日本産樹木年輪試料の炭素14年代からみた弥生時代の実年代, 設楽博己, 藤尾慎一郎, 松木武彦編 弥生時代の考古学1 弥生文化の輪郭, 同成社, 225-235

Reimer, P. J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887

坂本稔 2010 較正曲線と日本産樹木-弥生から古墳へ-, 第5回年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集, (株) 加速器分析研究所, 85-90

Stuiver, M. and Polach, H. A. 1977 Discussion: Reporting of  $^{14}\text{C}$  data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363



[図版] 暦年較正年代グラフ (参考)

なお、四日市遺跡（第15次調査）における放射性炭素年代のAMS測定にあたって、研究所に試料（炭化物）を提供する際に、「本試料は弥生時代中期の竪穴建物及び土坑から出土したものである。」旨の説明を加えたため、No.21とNo.30が新しい値を示しているとの結果に至っているが、両者とも弥生時代後期末の竪穴建物から出土したものであり、その結果は矛盾しないものである。

試料No.4とNo.12は弥生時代中期の土坑のもの、試料No.21及びNo.30はSH80出土のものである。

## 第7章 第13次調査

### 1. はじめに

第13次調査は平成26年5月から平成27年1月にかけて実施した玖珠工業団地造成に伴う発掘調査である。本調査区は台地の北東端に位置し、第8章の第3次調査区の北方にあたる箇所である。

4月に発掘調査にかかる支援委託業務の入札事務に取り掛かり、4月24日に入札を行い、支援業務を行う業者を決定した。そこから調査準備を行い、5月13日に重機を使用した表土剥ぎを開始した。5日後には表土除去は終了し、5月19日からは作業員を投入し、人力掘削を始めた。盆地での調査は、夏はかなりの高温となるため、寒冷紗やテントを張って日よけを行い、決して若くない作業員や調査員の健康に留意しながら実施していった。また、冬は霜が降り、雪が降る過酷な気象条件のなか、また鹿やイノシシ等様々な動物と遭遇するなかでも、ほとんど休みなく出勤していただいた作業員の方々に支えられて、無事に調査を終了することができた。

13次調査区は、現状では、ほぼ平坦な立地ではあるが、若干の高低があり、畑として利用する際の造成で、本来あるはずの表土直下の黒色土層が削平され、その下にあるアカホヤ層、暗黒褐色土層、暗黄褐色土層、黄褐色土層が直に露出している箇所も少なからずあった。最初に調査を開始した南東部では、表土下にいきなり黄褐色土層が現れる状況で、そこから北西に向かって調査を進めていくと暗黒褐色層や黒色土層が所々に見られるようになってきた。

その結果、弥生時代の堅穴建物、貯蔵穴、土坑、小児用甕棺、掘建柱建物と古墳時代の周溝墓を確認した。

若干工期は伸びたものの、12月中旬にはドローンによる空中撮影を実施し、1月中旬には重機による埋め戻しを行い、第13次調査区の現場調査は終了した。調査面積は8,494㎡である。

本調査区では、旧石器時代及び縄文時代の遺構及び包含層を確認していないため、当該時期の遺物については、出土した弥生時代の遺構のなかで掲載した。

### 2. 弥生時代

四日市遺跡は台地上の東半で、おもに弥生時代の集落が確認されているが、当調査区でも遺構は弥生時代のものが主であった。その遺構密度は第4章の第14次調査区、第5章の第15次調査区と比べて、かなり密な状況が見取れる。

遺構の内訳は、堅穴建物24基、貯蔵穴51基、土坑10基、小児用甕棺5基、掘建柱建物5軒である。

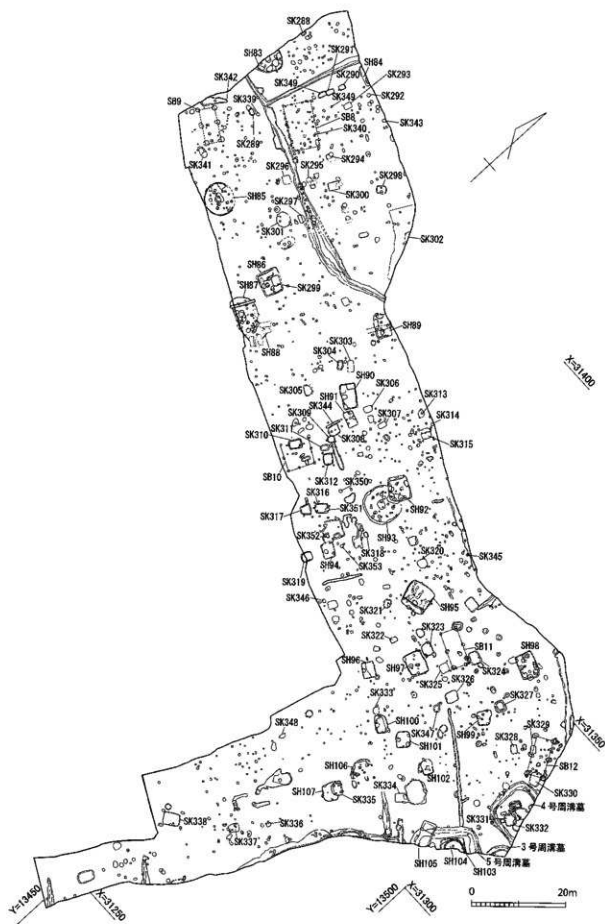
#### 1 堅穴建物

##### (1) SH83

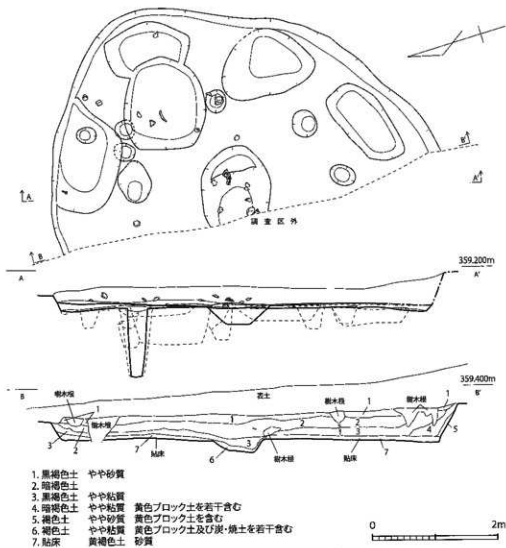
SH83は、本調査区の最西部の平坦部で確認した堅穴建物である。その規模は南北3.1m以上、東西6.2mであり、西半は調査区外となっている。平面プランは円形で、検出面からの深さは0.4m～0.5mである。また、主柱穴は2本確認した。その深さはそれぞれ70cmと100cmである。主柱穴の間からは長軸110cm、短軸84cm、深さ25cmの土坑を検出したが、焼土や炭化物の出土は確認できなかった。これを堅穴建物の中央部の土坑と考えれば、当建物は2本柱である可能性も否定できない。床面からは80cm×100cm程度の規模を持つ土坑が4基検出した。遺物は、堅穴中央部土坑及び床面土坑の中から出土している。

1082は鋤先状口縁の甕で、丁寧なナデ調整が施されて、内外面に赤色顔料を塗布する。1083・1084は「く」の字状の口縁をもつ甕である。1084は口縁端部をつまみ上げ、頸部に三角突帯を貼り付ける。1086は比較的厚底の甕の底部である。1087は高坏で、脚部上半と身部下半のみ残存する。横方向のミガキを施した後、外面に赤色顔料を塗布する。脚と身の繋ぎ部には円盤充填がみられる。1089～1095は、床面で検出した土坑1及び2から出土した遺物である。1089は壺の頸部で、肩部から上に7条の三角突帯を貼り付ける。甕は胴がはらないタイプで、1088は口縁端部をつまみ上げる。1092の底部は比較的薄手のものである。1093は器台で、裾は広がらない。

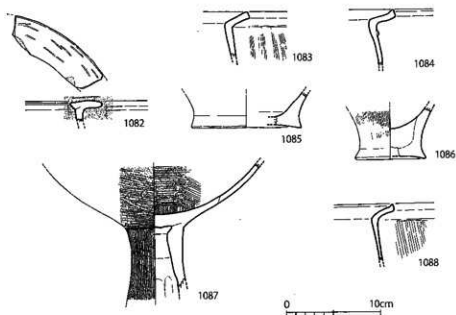




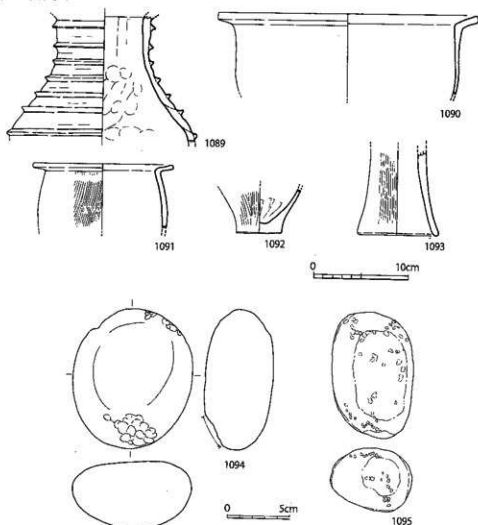
第7-1図 第13次調査区遺構配置図 (1/800)



第7-2図 SH83実測図 (1/60)



第7-3図 SH83出土遺物実測図①



第7-4図 SH83出土遺物実測図②

1094・1095は敲石である。1094は縁の両端に敲き痕があり、1095は平坦部にも敲き痕が残る。

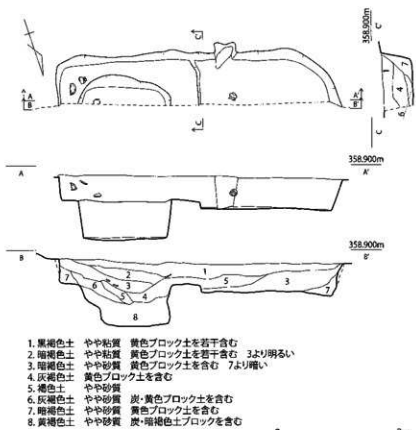
本堅穴建物の時期は、出土遺物から弥生時代中期後半に位置づけられる。

## (2) SH84

SH84は、調査区北西部隅で検出した堅穴建物で、北側の大部分は調査区外にある。その規模は東西4.6m、南北1.1m以上である。平面プランは方形で、その主軸はN-16°-Eである。床面は東半が西側より10cmほど高く作っていた。検出面から床面までの深さは、西半が50cmで、東側が40cmである。堅穴建物のごく一部しか調査していないため、主柱穴及び炉跡等は確認できなかった。ただ、東半の高まりから深さ60cmの土坑は確認できた。土坑の幅は約1.5mである。土層観察の結果、埋土の堆積はレンズ状の自然堆積であった。遺物は堅穴全体から出土しているが、廃絶後に自然に堅穴が埋まっていく段階のものであった。主な遺物は第7-6図に示した。

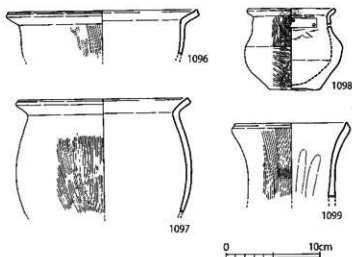
1096と1097は、「く」の字状の口縁甕で、いずれも口縁端部を上方につまみ上げる。1097は胴が丸く張るタイプの甕である。1098は頸部に穿孔を2か所もつ小型甕である。外面は横方向のミガキを施し、赤色顔料を塗布する。器高8.6cm、口径9.1cmである。1099は器台で、内面にしほり痕、外面は縦方向のハケ目調整を行う。

出土遺物より、本堅穴建物は弥生時代中期後半に比定できる。

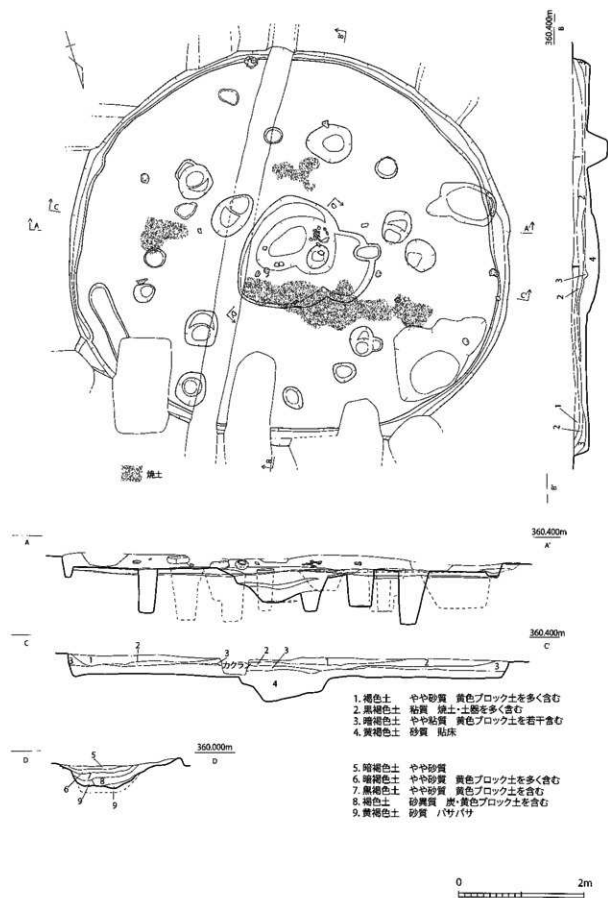


- 1. 黒褐色土 やや粘質 黄色ブロック土を若干含む
- 2. 暗褐色土 やや粘質 黄色ブロック土を若干含む 3より明るい
- 3. 暗褐色土 やや砂質 黄色ブロック土を含む 7より暗い
- 4. 灰褐色土 黄色ブロック土を含む
- 5. 褐色土 やや砂質
- 6. 灰褐色土 やや砂質 灰・黄色ブロック土を含む
- 7. 暗褐色土 やや砂質 黄色ブロック土を含む
- 8. 黄褐色土 やや砂質 灰・暗褐色土ブロックを含む

第7-5図 SH84実測図 (1/60)



第7-6図 SH84出土遺物実測図

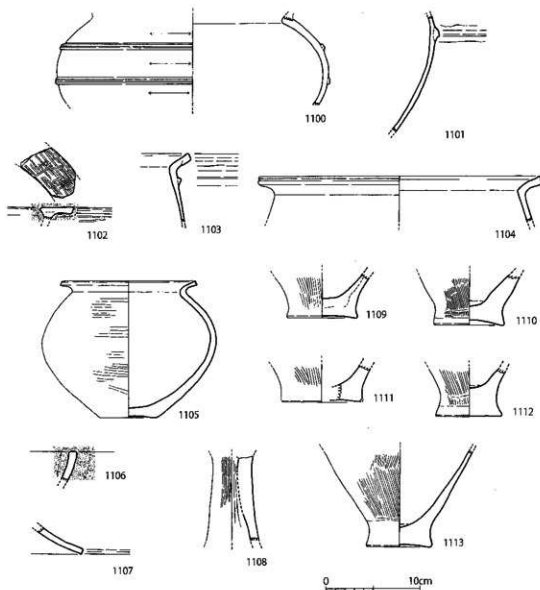


第7-7図 SH85実測図 (1/60)

## (3) SH85

SH85は、本調査区南西端で検出した堅穴建物である。堅穴北側を後世の攪乱で失っているが、その規模は南北6.0m、東西7.0mで、検出面からの深さは0.35mで、円形の平面形をもつことが確認された。側壁はほぼ直に立ち上がり、その内側に幅20cm、深さ10cmの壁溝が、ほぼ前周にわたり壁に沿って巡っている。床面中央部から長軸1.3m、短軸0.8mの槽円形土坑があった。深さは50cmで、その内部で土器に混じって、炭化物や若干の焼土を検出した。また土坑周囲には焼土塊が広がっていたことより、炉として機能していたことが伺える。その周りで支柱穴を6本確認した。その規模は径35cm～50cmで、深さは65cm～80cmであった。また、北側及び西側壁から深さ50cmほどの土坑を検出した。遺物は主に炉跡周辺から出土している。

1100～1102は、壺形土器で、胴部にM字状突帯を貼り付ける。また、1102は鋤先状口縁をもち、丁寧なミガキを施した後、赤色顔料を塗布している。1103・1104は甕の口縁で、「く」の字状の口縁端部を上方につまみ上げ1103は頸部に三角突帯を貼り付ける。1105は鉢形土器で、口縁は鋭く外反し、胴部は膨らむ。器高14.3cmを測る。1106の浅い鉢は丹塗りが見られる。1107・1108は高杯の脚部で割は開き、内面にしぼり痕が認められる。



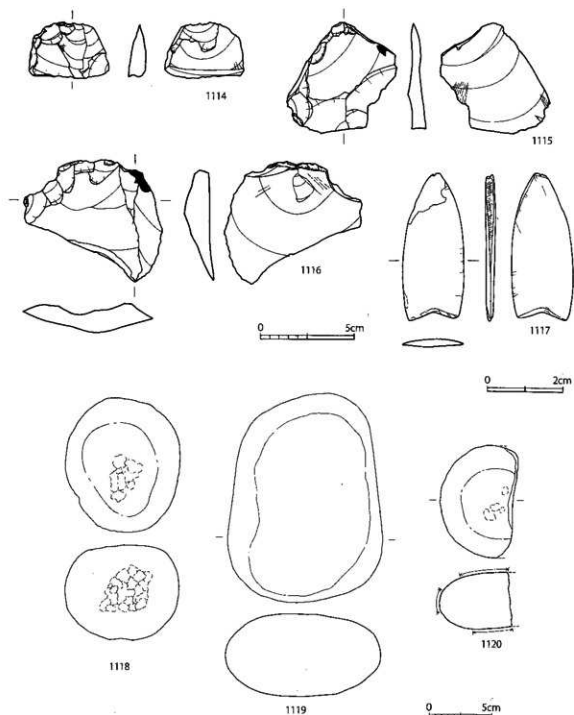
第7-8図 SH85出土遺物実測図①

1109～1113は若干上げ底である。1114～1116は剥片石器で、竪穴埋土中から出土した。1117は磨製石鏃で、主柱穴内からの出土である。1118・1120は敲石で、1118は炉跡付近で出土している。1119は安山岩製の台石で、竪穴の中央より南寄りから出土した。

出土遺物より、本竪穴建物は弥生時代中期後半に比定できる。

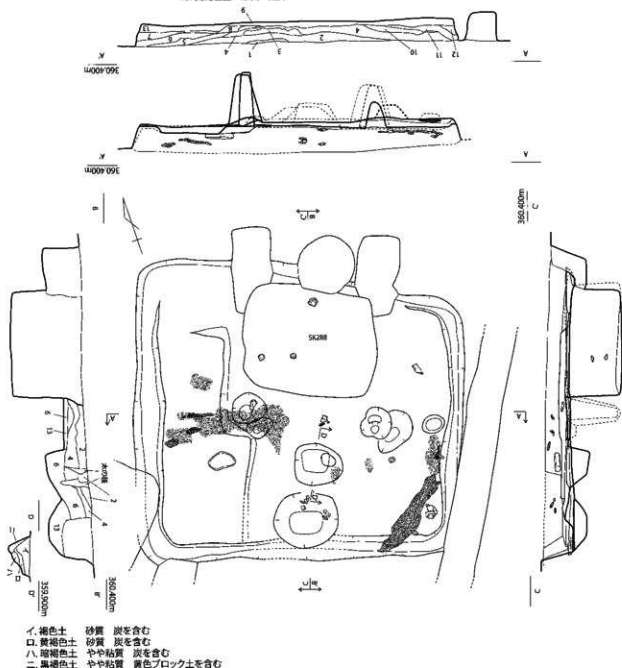
(4) SH86

SH86は、本調査区西よりにあり、SH85の東約20mに位置する竪穴建物である。平面形は方形で、その規模は東西5.2m、南北4.8mで、南東角を若干後世の削平を受けている。その主軸はN-20°-Eである。検出面から



第7-9図 SH85出土遺物実測図②

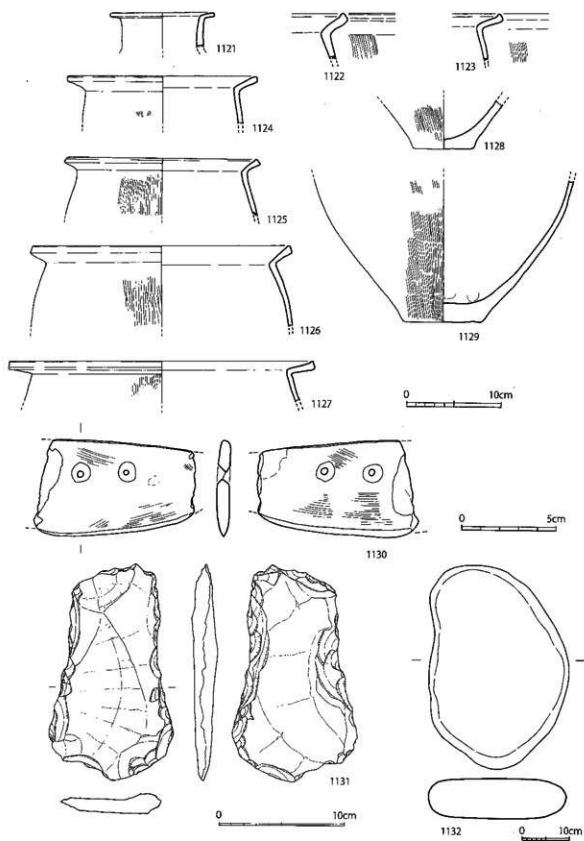
1. 黒褐色土 やや粘質 やや砂質 軟
2. 茶褐色土 やや粘質 1~5mmの黄色粒子多 やや硬
3. 黄色土 粘質 黒色の暗褐色ブロック含む やや硬
4. 黒褐色土 やや粘質 1~5mmの黄色粒子やや多い やや硬
5. 暗褐色土 やや粘質 1~5mmの黄色粒子(4層より多い) 炭化物含む やや硬
6. 5層に近いが、黄色粒子少ない 一部に焼土ブロックあり
7. 暗褐色土 粘質 1~5mmの黄色粒子をわずかに含む 硬
8. 黒色土 やや粘質 しまっている
9. 黒褐色土 やや粘質 1~1.5cmの黄色ブロックを多数含む やや硬
10. 5層に近い
11. 6層に近い
12. 7層に近い
13. 黄褐色土 砂質 粘床



- イ. 褐色土 砂質 炭を含む
- ロ. 黄褐色土 砂質 炭を含む
- ハ. 暗褐色土 やや粘質 炭を含む
- ニ. 黒褐色土 やや粘質 黄色ブロック土を含む

第7-10図 SH86実測図 (1/60)





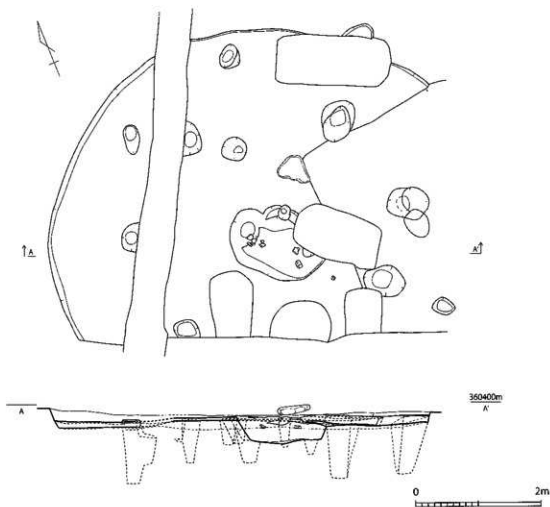
第7-11図 SH86出土遺物実測図

の深さは0.40mである。側壁は緩く立ち上がり、北側を除く3方向に壁際側溝をもつ。その規模は広いところで幅35cm、深さ10cmである。西壁側に幅1.0m～1.4mのベッド状遺構をもつ。その高さは15cm程度である。床面からは、主柱穴と中央土坑及び南壁中央土坑を確認した。主柱穴2本で、径50cm、深さ0.7m～1.3mであった。柱間は2.2mほどである。その中間南側に大きさ0.7m、深さ0.35mの円形の中央土坑があり、その南に同規模の壁際土坑がある。いずれも若干の遺物と焼土が出ている。建物南半の床面で炭化した木と焼土を検出しており、特に東壁にある焼土に混じって石包丁が確認された。床には貼床が施されている。

北中央に長軸2.0m、短軸1.6m、深さ0.7mの方型土坑があるが、これは堅穴検出時に確認し、調査時に別遺構と判断したもので、SK288として報告している。

出土遺物は第7-11図に掲載している。1121は壺で、頸部はほぼ直立し、口縁が鋭く外反する。1122～1127は刷が張らず直線的に伸びるタイプ。1122・1123・1125は強く折れる「く」の字状の口縁をもち、口縁端部を上方につまみ上げる1128・1129の底部は比較的薄手のもの。1130の石包丁は輝綠凝灰岩製。穿孔が2箇所のみられ、表裏面には製作時のものと思われる痕跡が残る。1131は凝灰質安山岩製の扁平打製石斧、1132は安山岩製の白石である。

出土遺物より、本貯蔵穴は弥生時代中期後半に比定できる。



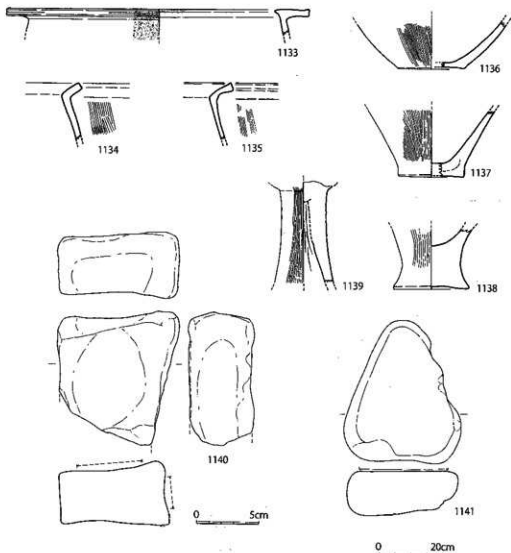
第7-12図 SH87実測図 (1/60)

(5) SH87

SH87は、SH86の南約10mの位置にある竪穴建物である。SH87は、竪穴の上面を後世の擾乱で失い、東はSH88に切られ、また南側3分の1は調査区外である。その規模は東西6.7m、南北4.8m以上で、検出面からの深さは0.40mで、円形の平面形をもつことが確認された。側壁は緩く立ち上がり、その内側約1.5mの位置に円形に並ぶように6本の支柱穴が確認された。その径は25cm～45cmで、深さは42cm～90cmであった。柱穴の中央部に長軸1.6m、短軸0.8mの楕円形の中央土坑を検出した。土坑の深さは0.5mで、中から若干の土器が出土した。

出土遺物（第7-13図）には土器と石器がある。1133は鋤先状口縁の甕で、端部は若干垂れる。外面に赤色顔料を塗布する。1134・1135は「く」の字状口縁の甕である。いずれも縦方向のハケ目調整を施し、胴が張らないタイプである。1136・1137は薄手の底部、1138は厚底である。1139は高坏の脚部で、坏身との接合に円盤充填が確認できる。1140は砥石、1141は安山岩製の台石である。

本竪穴建物の時期は、出土遺物より弥生時代中期後半に位置づけられる。



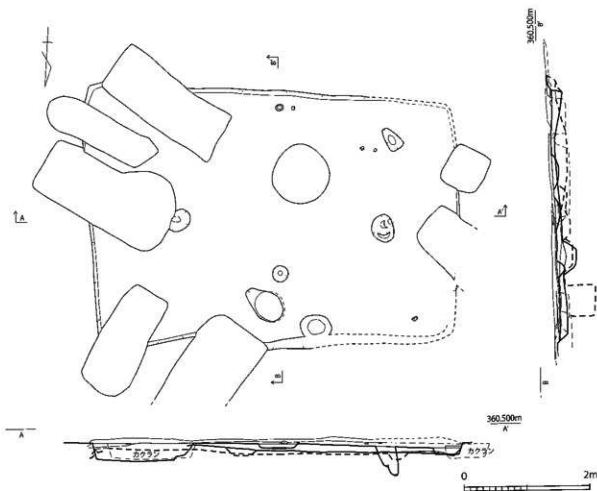
第7-13図 SH87出土遺物実測図

## (6) SH88

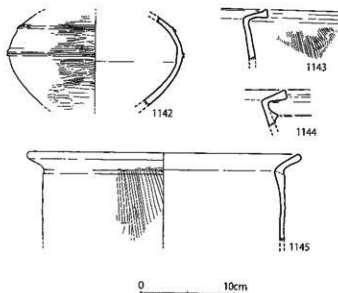
SH88は、本調査区西部にあり、円形堅穴建物であるSH87と切合い関係をもつ。構築時期はSH87→SH88である。東側を後世の擾乱で失っているが、その規模は東西5.9m、南北4.3mで、平面形は長方形を呈している。主軸はN-30°-Eである。検出面からの深さは0.05m～0.15mと非常に残りが悪い。主柱穴は1本だけ確認され、その深さは0.30mである。その他の堅穴内土坑は検出できなかった。

そのため、遺物の出土も少なかった。本堅穴遺構からの出土遺物は、1142が丁寧な作りをした短の胴部で、胴部最大径とその上位にM字突帯を2条貼り付ける。ミガキを施したのち、赤色顔料を塗布している。1143～1145は「く」字状口縁の甕で、胴部が張らない器形を有する。

出土遺物より、本堅穴建物は弥生時代中期後半に比定できる。



第7-14図 SH88実測図 (1/60)



第7-15図 SH88出土遺物実測図

(7) SH89

SH89は、SH88の北東30mの位置で検出した竪穴建物である。その規模は東西5.8m、南北3.5mで、平面形は隅丸正方形プランである。主軸はN-62°-Wである。検出面から床面までの深さは0.5mである。床面からは支柱穴が2本確認された。その深さは50cmと70cmで、柱間は2.0mである。柱を立てると上方が内側に傾くような柱穴である。柱間の竪穴中央部で焼土を含んだ40cmほどの大きさの浅い円形の土抗を検出した。また、南側壁及び西側壁で土抗を確認した。南のものは長軸2.4m、短軸0.9m、深さ0.6mの規模で、西側の土抗は長軸1.6m、短軸1.0m、深さ0.4mである。

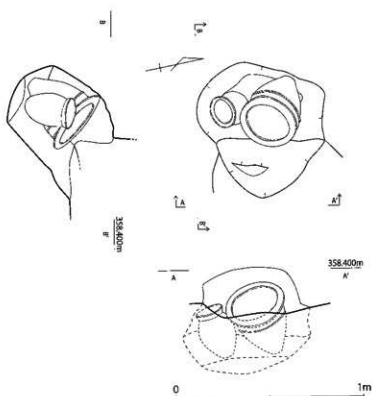
遺物は竪穴全体から多数出土している。それを第7-17図～7-19図に示した。1146～1154は甕である。1146・1147は鋤先状口縁を呈し、頸部は強く外反する。復元口径は30.0cm、24.4cmである。1153は端部が外反し、口縁直下に三角突帯を貼り付ける。内外面ともミガキを施した後、外面全体と口縁部内面に赤色顔料を塗布している。1148、1149は三角突帯を2条貼り付ける。1150はM字突帯を貼り付け、赤色顔料を塗布する。1151は比較的薄手の底部。1154は小型であるが、縦方向のハケ目、丹塗りを施す。

1155～1169は甕である。1155～1160は「く」の字状口縁の甕である。いずれも縦方向のハケ目調整を施す。1155は強く口縁部が外反する。1156は内外面にミガキを施す。1157は外面に篋ケズリがみられる。1155以外は少し胴が張るタイプである。1161～1163は口縁端部を若干つまみ上げる。1167～1169は胴が張らずに底部にいたるタイプ。1169は比較的薄く、1170・1171はヒゲ底、1172・1173は厚手の底部である。1174は器壁の厚い器台、両端部で反る。1177は裾が直行する器台。1175・1176・1178は高坏、いずれも丁寧な作りで、外面に赤色顔料を塗布する。1175は口縁端部が内湾し、脚は裾で広がるタイプ。1176は若干垂れ気味の鋤先状口縁で、脚は長く伸びる。1178は脚部で甕が開く。

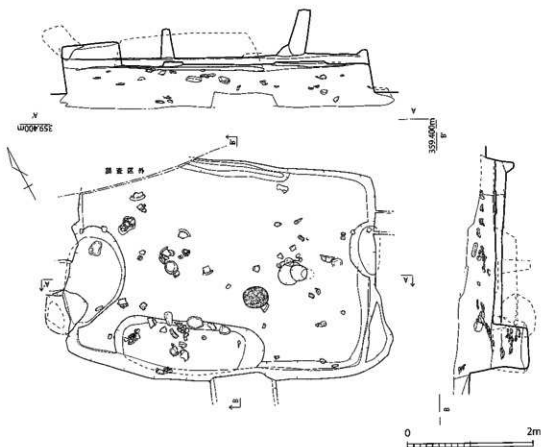
1164と1166の甕は、西側の埋納穴から出土した甕である。1164は外面と口縁上部に丁寧にミガキを施した後、赤色顔料を塗布している。口縁部に打ち欠きが見られる。器高は32.6cm、口径31.5cm、底部径6.3cmの完形で、鋤先状口縁の下に2条のM字突帯を貼り付ける。1166は、平底で長楕円の胴をもち口縁部は強く外反する。口径16.0cmに対し、胴部最大径は21.0cmと胴の張ったタイプの甕である。外面は横方向のミガキを施した後、丹塗りをやっている。

1179・1180の石包丁は輝緑凝灰岩製。穿孔が2箇所にみられ、表裏面には製作時のものと思われる痕跡を残す。1181は西九州産黒曜石の剥片、1182は敲石、1183は扁平打製石斧、1184・1185は安山岩製の白石である。

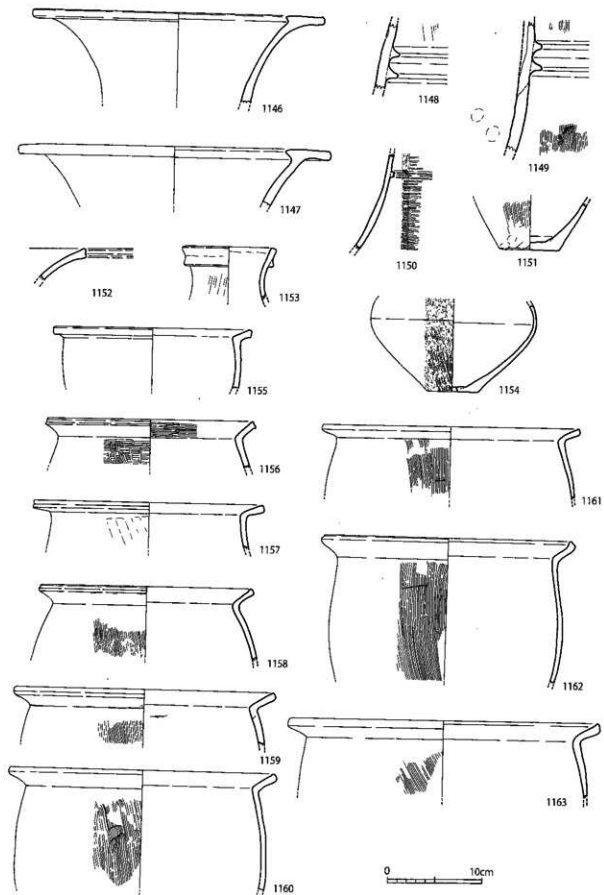
出土遺物より、本堅穴建物は弥生時代中期後半に比定できる。



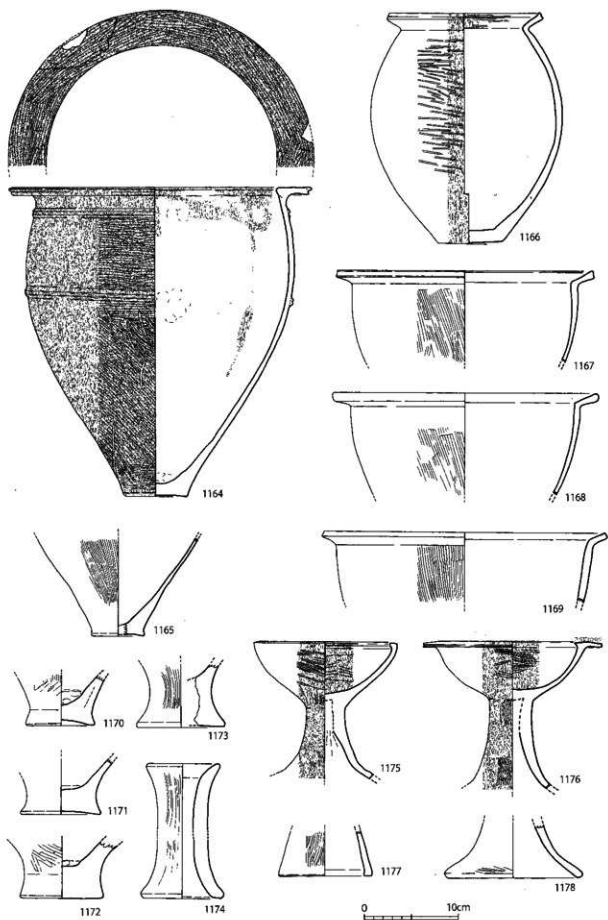
S H89西側埋納穴 (1/20)



第7-16図 S H89実測図 (1/60)

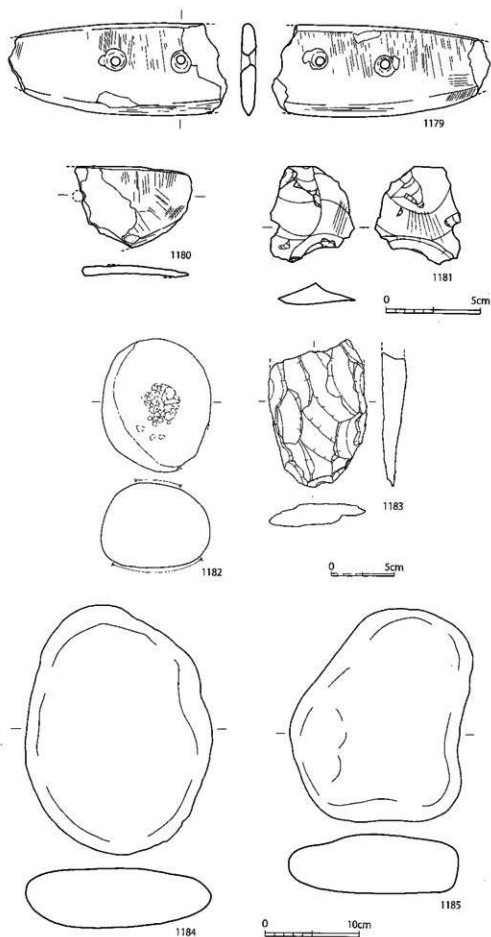


第7-17図 SH89出土遺物実測図①



第7-18図 SH89出土遺物実測図②

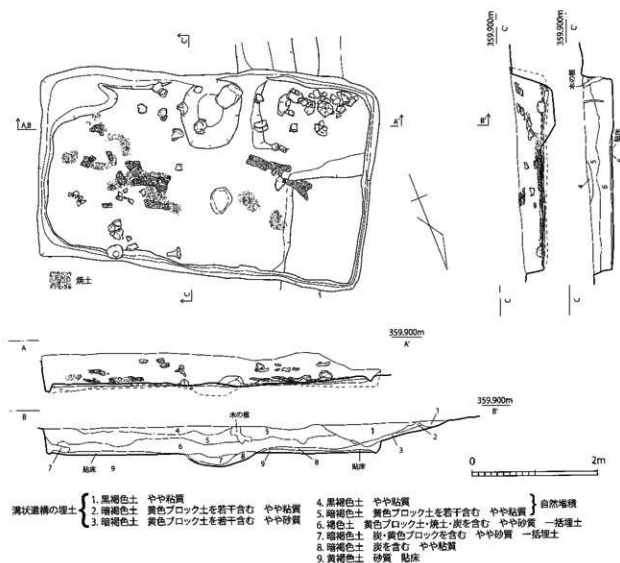




第7-19図 SH89出土遺物実測図③

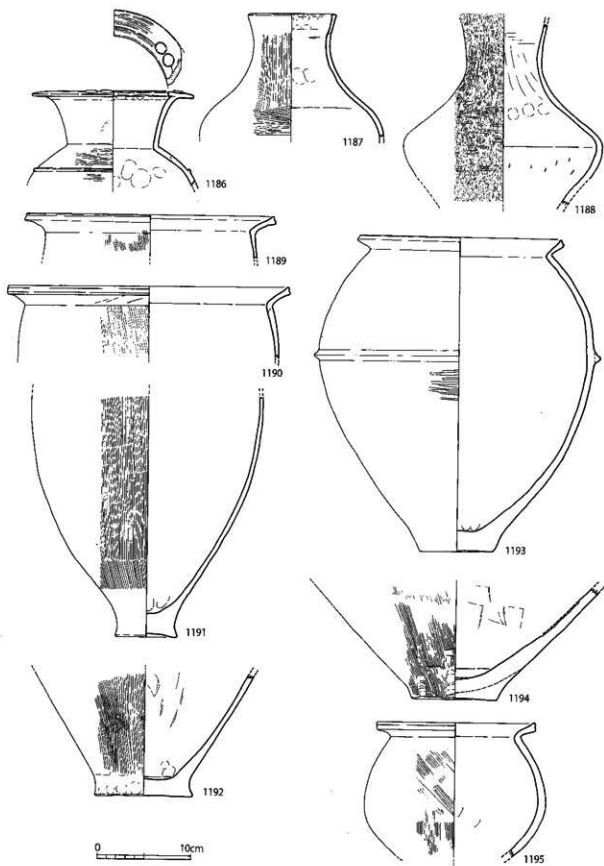
## (8) SH90

SH90は、本調査区の中央部にあり、SH89の南側約20mの平坦部に建てられた竪穴建物である。その規模は東西6.2m、南北3.3mで、平面は長方形プランである。主軸はN-60°-Wである。北東隅に幅1.8m、長さ1.1m、南東隅に幅1.2m、長さ1.8mのベッド状遺構をもつ。床面からは明確な主柱穴は確認されていないが、その規模から、竪穴建物として掲載する。北側壁中央部でも長軸1.5m、短軸1.0m、深さ0.3mの土坑を確認している。竪穴全体の床直上に炭化物を含んだ焼土が広がっており、それに張り付くように多数の炭化した木片及び多量の土器が廃棄されていた。これらは火災により廃棄されたものと考えられる。

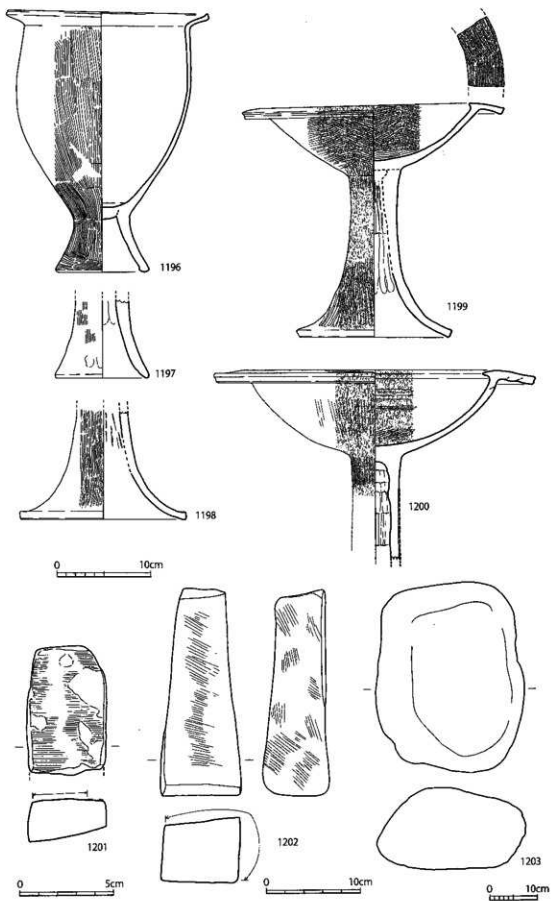


竪穴焼後、若干時間がたった後、焼土・炭等土を廃棄したもの(6層)その後(4-5層)と自然に堆積した。

第7-20図 SH90実測図 (1/60)



第7-21図 SH90出土遺物実測図①



第7-22図 SH90出土遺物実測図②

S H90から出土した土器及び石器を第7-21図及び第7-22図に示した。1186は広口壺で、鑷先状口縁の端部は垂れる。その上面に内形浮文を貼る。穿まった頸部は丸い胴へ続く。肩に1条の三角突帯を巡らす。その口径は17.4cm。1187・1188は長頸壺。1187は口縁下に突帯がないタイプ。外面にミガキ、内面に指圧痕を残す。1188は外面に赤色顔料を塗布する。1189～1192は胴が張らないタイプの「く」字状口縁の壺である。外面に縦方向のハケ目を施す。1189は口縁端部をつまみ上げる。1193は、比較的薄い平底に張った胴をもち、口縁部は短く強く外反する。胴部最大径の箇所に三角突帯を貼り付ける。外面に一部寛ミガキがある。1195の鉢は、胴部下半に最大径をもつ。1196は台付鉢である。鉢部は長胴で、口縁端部をつまみ上げる。器高22.7cm、口径21.2cm、脚部径10.0cmである。1197は器台、1198～1200は高坏である。いずれも口縁は鑷先状を呈し、浅い坏身から長く伸びる脚部をもつ。脚端部は朝顔状に開く。器面調整については、内面はしほり、外面は坏部は横方向の寛ミガキ、脚部は縦方向のミガキがみられる。1199・1200は赤色顔料を塗る。1201・1202は砂岩製の砥石、1203は台石で、36kgほどの重さである。

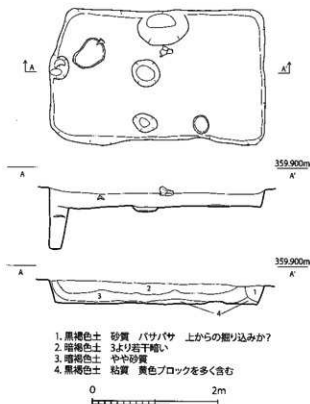
出土遺物より、本貯蔵穴は弥生時代中期後半に比定できる。

(9) S H91

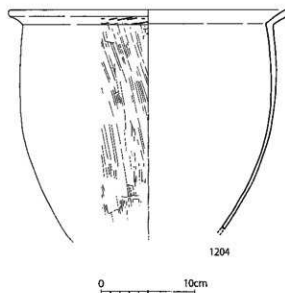
S H91は、S H90の東隣で検出した竪穴建物である。その規模は東西3.5m、南北2.3mで、平面は長方形プランである。検出面から床面までの深さは0.25mと浅い。主柱穴は西壁寄りで1本確認され、その深さは0.70mである。床面中央で浅い土坑を、また北側壁中央部で長軸0.8m、短軸0.5m、深さ0.3mの土坑を検出した。

遺物は、竪穴廃絶後に、埋土が堆積する過程で、廃棄または流入した物である。それを第7-24図に示した。1204は強く外反する口縁をもち、胴は張らない。外面にススが附着している。口径29.4cmを測る。

出土遺物より、本遺構は弥生時代中期後半に比定できる。



第7-23図 S H91実測図 (1/60)



第7-24図 SH91出土遺物実測図

## (10) SH92

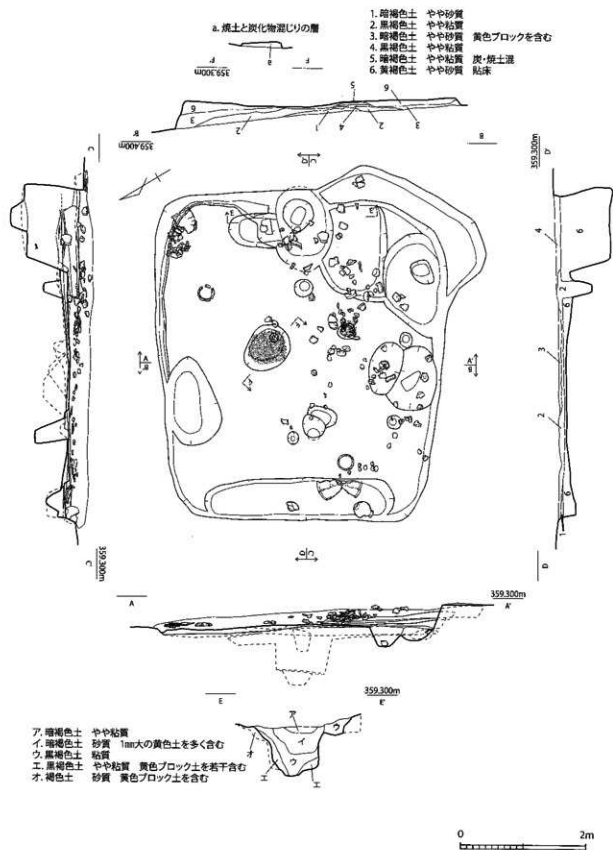
SH92は、SH91の東約20mの位置にある堅穴建物で、次のSH93と切り合い関係をもつ。東西5.2m、南北4.7mの規模を持ち、平面形は長方形である。南東隅に幅2.5m、長さ1.0mの造り出し部をもつ。検出面から床面までの深さは南側が40cm、北側が15cmである。罫壁は緩く立ち上がり、南壁に沿うように罫溝を検出した。その規模は最大で幅30cm、深さ10cmである。南が若干高い位置にあるため、南から流入した雨水の排水として機能していたものか。主柱穴は2本確認され、その深さは0.25mと0.60mで、柱間は2.1mである。主柱穴の内側の堅穴中央部には、大小2基の埴土に焼土を含んだ土抗があった。規模は大が長軸0.7m、短軸0.5m、深さ0.1mの楕円形のもの。小が0.3mの円形の土坑であった。東の造り出し部付近には深さ70cmの方形土抗を検出した。そのほか各側の壁に沿って小土抗を6基確認している。

土器等の遺物は床面全体からまんべんなく多数出土した。特に西角及び東角付近の床面からは、甕が置かれた状態で出土している。1205～1209は甕である。1205は丸い胴部にやや外湾する口縁をもつ。口径は17.0cm。1206は長頸壺、口縁下部に三角突帯を張る。外面にミガキ、赤色顔料がみられる。1208は胴部最大径下にM字突帯を2条貼り付ける。横方向のミガキを施す。1207・1209の底部は縦方向にハケ日が見られる。

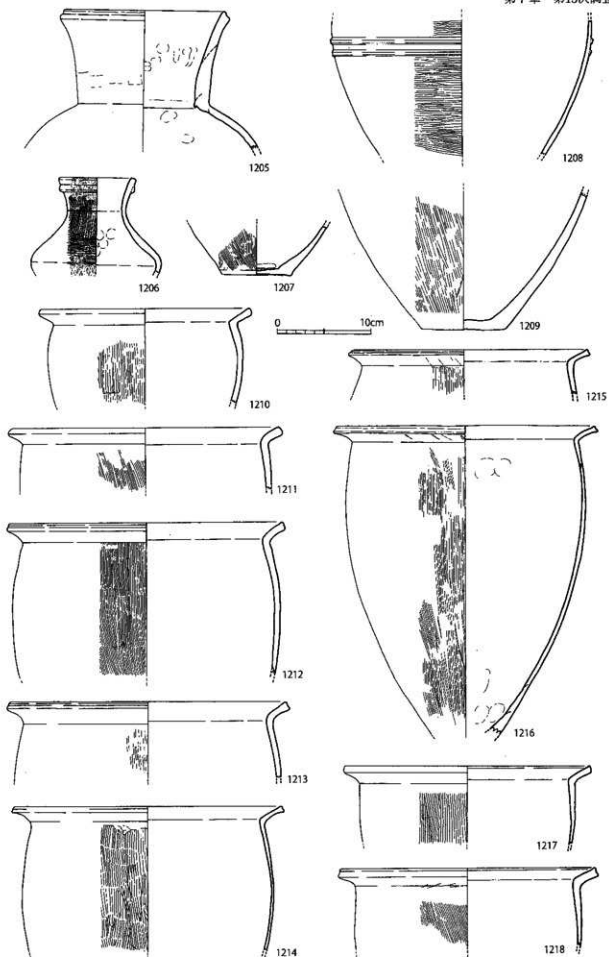
1210～1225は甕である。1210～1216は「く」字状の口縁をもつ甕で、胴部が張らないもの。外面に縦方向のハケ日を施す。1217～1221は同じく胴部は張らないが、口縁端部をつまみ上げるタイプのものである。さらに1222～1224は頸部に三角突帯を巡らす。1226・1227は平底、1228～1230は上げ底状を呈する。

1231は鉢で、口縁は短く外反し、丸い胴部は下半に最大径をもつ。1132は平底の鉢。器高は 口径は、1233はミニチュアの鉢で器高8.6cm。1234は脚付き鉢の脚部、1235～1237は高坏の脚部で、1236は円盤充填を施す。1238・1239は器台で、内面にしほり痕がみられる。1240・1241は鋤先状口縁の高坏で、口縁端部は若干干垂れ、脚部は長く伸びる。坏部は内外面に赤色顔料を塗布する。

1242は、土器加工品で丹塗りの土器を円形に加工したものである。1243は安山岩製の敷石である。出土遺物より、本遺構は弥生時代中期後半に比定できる。

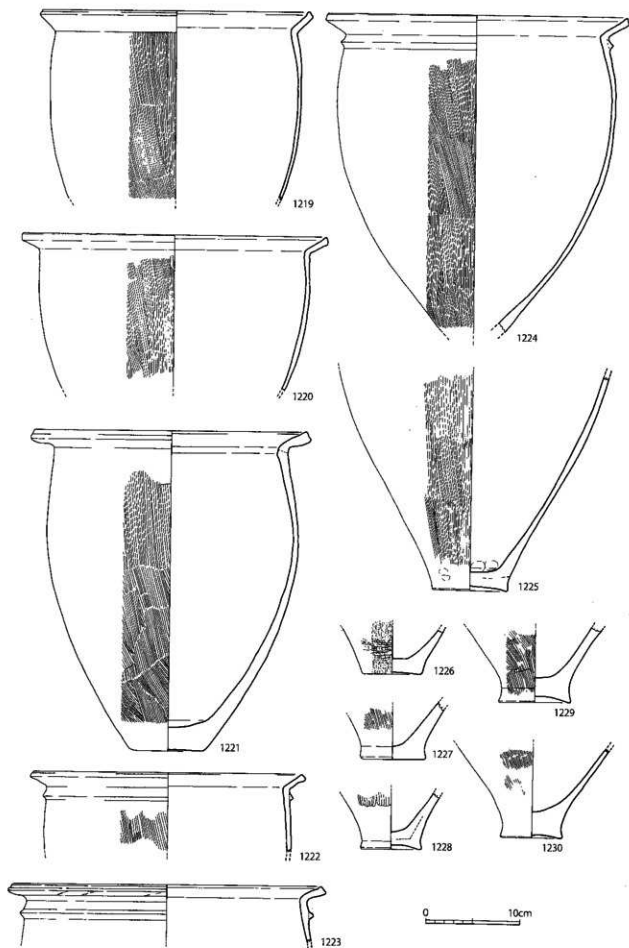


第7-25図 SH92実測図 (1/60)

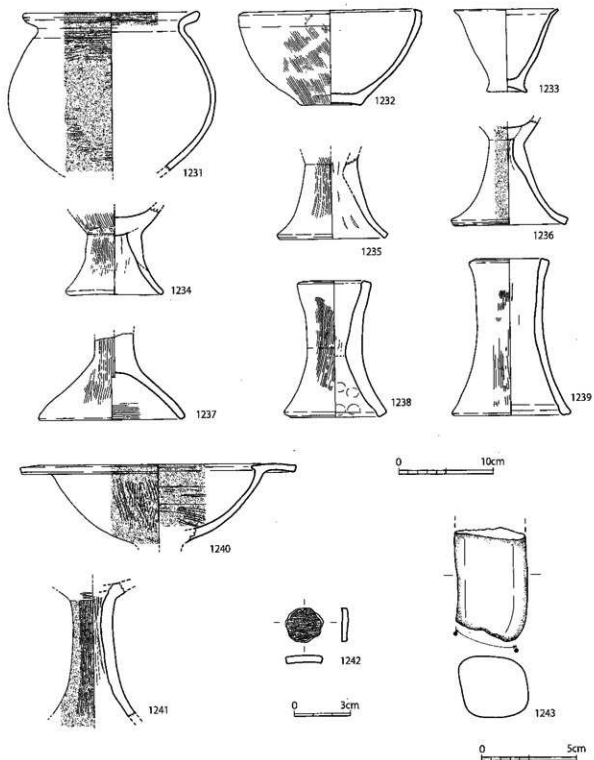


第7-26図 SH92出土遺物実測図①

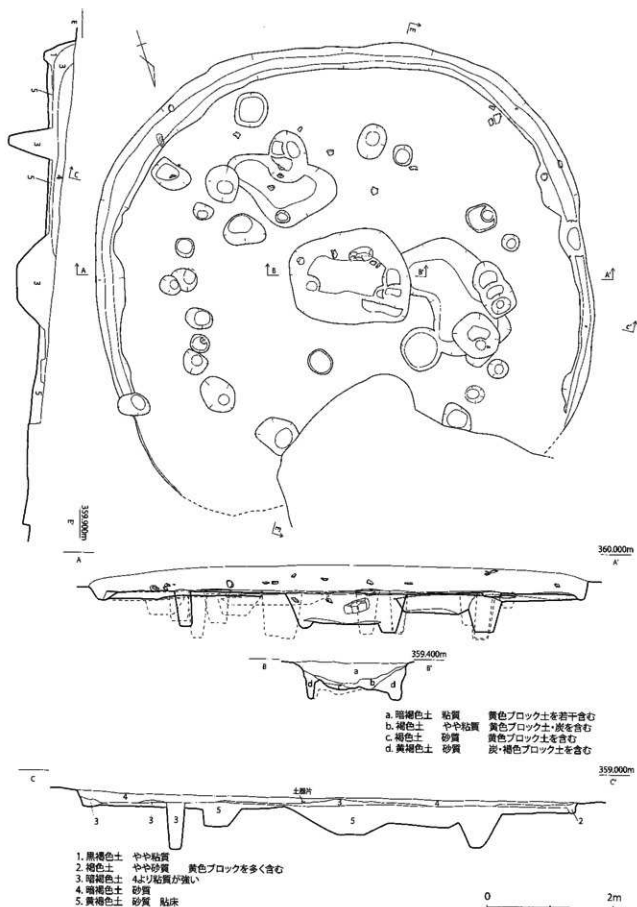




第7-27図 S H92出土遺物実測図②



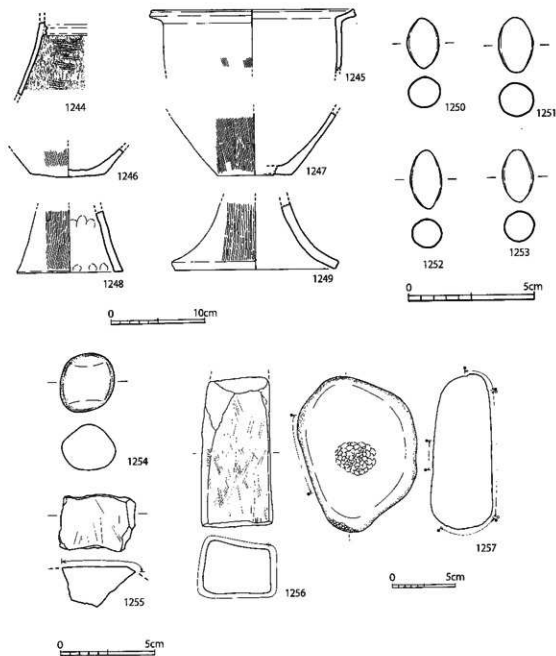
第7-28図 SH92出土遺物実測図③



第7-29図 SH93実測図 (1/60)

## (11) SH93

SH93は、SH92とは南東で接した形で検出した竪穴建物で、SH93→SH92である。その規模は東西8.0m、南北7.2m以上である。SH92同様に若干南に高い箇所立地していることから、床面を水平に保つため南側の深さは0.7m、北側は0.2cmとなっている。平面プランは円形である。竪穴の壁は緩やかに立ち、北側を除く3方位の壁に沿うように最大幅30cm、深さ10cmの壁溝を検出した。斜面地にあるため、何らかの壁崩落防止のための補強として構築されたことも考えられる。また、主柱穴は円形のプランに沿って、壁から約1.7mの位置に7本確認した。北側をSH92に切られており、実際は8本柱であった可能性が考えられる。柱穴の深さは30cm～50cmである。竪穴中央部には石皿が流れ込んだ深さ50cmの土坑を検出した。土坑の規模は長軸190cm、短軸150cmで、長軸の両端には浅い柱穴が見られた。床には貼床が施されていた。



第7-30図 SH93出土遺物実測図

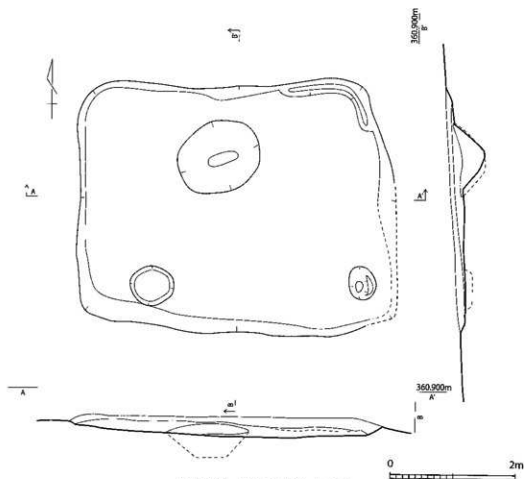
遺物は小片が多く、床面からは若干浮いた状態で検出した。1244は壺の胴部で、M字突帯を貼り付け、ミガキの後、赤色顔料を塗布する。1245は口縁部が強く外反した小型の甕、1246・1247の底部は薄い。1248は内部にしほり、外面にハケ目を施す器台である。1249は高坏の脚部。1250～1253は4cmほどの大きさで、ラグビーボールのような形状をした土製投擲である。1255・1256は礫石、1257は燧石である。

出土遺物より、本遺構は弥生時代中期後半に比定できる。

(12) SH94

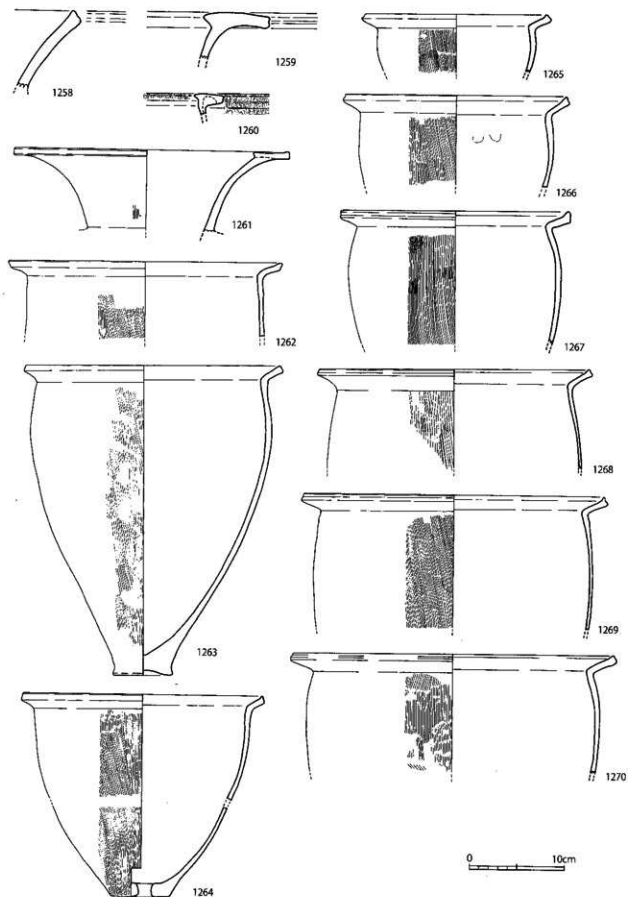
SH94は、本調査区中央部、SH93の南約15mにある竪穴建物である。その規模は東西3.5m、南北2.3mで、平面は長方形プランである。検出面から床面までの深さは0.25mと浅い。主柱穴は西壁寄りで1本確認され、その深さは0.70mである。床面中央で浅い土坑を、また北側壁中央部で長軸0.8m、短軸0.5m、深さ0.3mの土坑を検出した。

遺物は、竪穴廃絶後に、埋土が堆積する過程で、廃棄または流入した物であるが、図示するほどの遺物は出土していない。

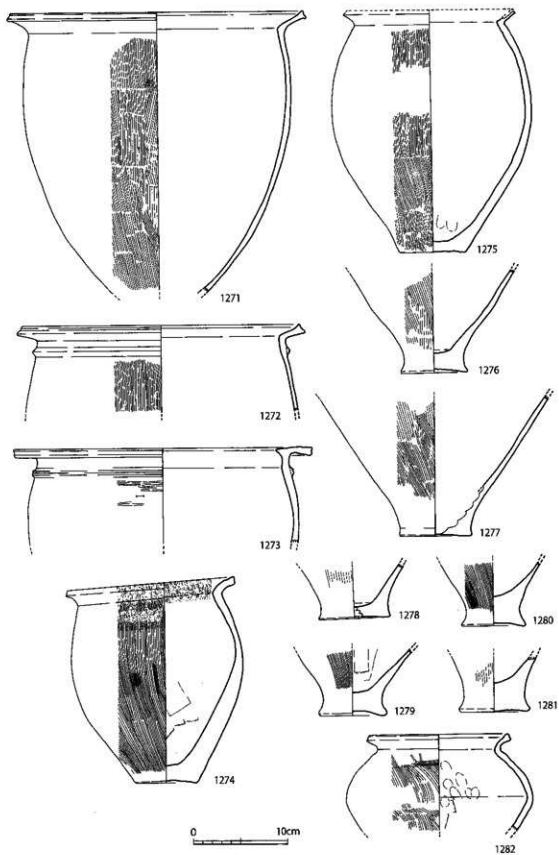


第7-31図 SH94実測図 (1/60)



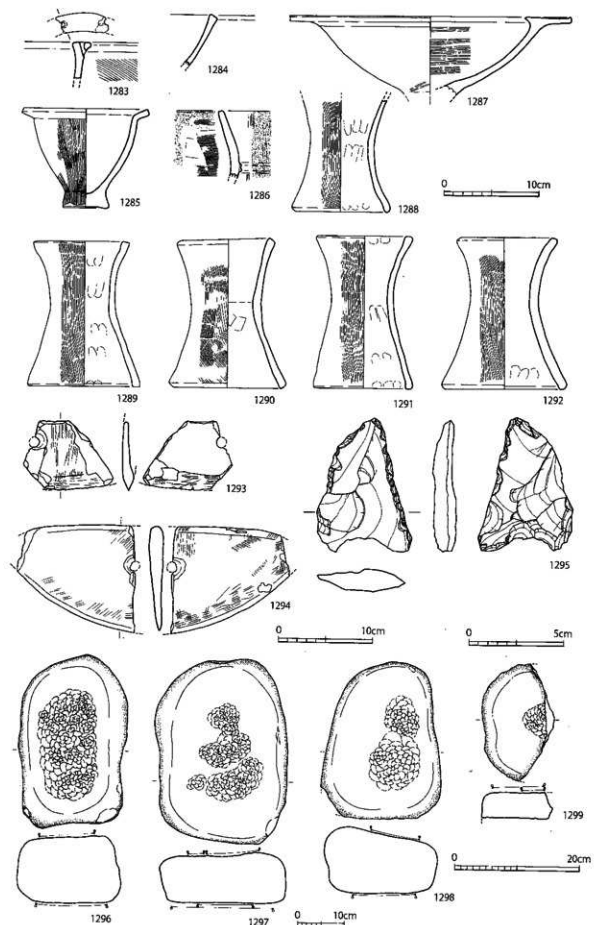


第7-33図 SH95出土遺物実測図①

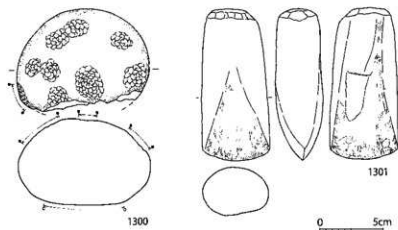


第7-34図 S H95出土遺物実測図②





第7-35図 S H95出土遺物実測図③



第7-36図 S H95出土遺物実測図④

## (13) S H95

S H95は、本調査区東よりで確認した竪穴建物で、S H93の東約20mの位置にある。その規模は東西6.6m、南北6.6mの方形の平面形をもつ。主軸はN-10°-Eである。検出面からの深さは南側が0.5m、北側が0.4mである。南側に幅1.3mのベッド状遺構を敷設する。その高さは15cmほどである。ベッドの北側の床面には北側壁を除く3方に幅20cm、深さ0.10mの規模の壁溝を作る。南側から北に向かって若干下る地点に立地することから、南側を中心に作られた壁溝は竪穴壁崩落を防ぐ機能があると考えられる。主柱穴は深さ0.8mのものが2本確認され、その柱間は2.1mの間隔がある。竪穴全体の床直上に炭化物を含んだ焼土が広がっており、それに張り付くように多数の炭化した木片及び多量の土器が廃棄されていた。これらは火災により廃棄されたものと考えられる。床には貼床が施されていた。

1262・1263は口縁部が強く外反し、胴部が張らずに直線的に底部へと続く。1264は底部に穿孔がみられる。瓶か。1265～1271は「く」字状の口縁で、胴は張らないが、口縁部をつまみ上げるタイプのものである。さらに1272は頸部に三角突帯を巡らすものである。1273は鋤先状口縁で、口縁下にM字突帯を貼り付ける。1274・1275は平底で胴部が丸く張る甕で、1274は外面にハケ目と丹塗りが確認できた。1280・1281は厚底。1282は鉢で、口縁は短く外反し、丸い胴部は下半に最大径をもつ。1283は口縁を肥厚させ、上面から穿孔を施している。1285は小型の鉢。1287は鋤先状を呈した口縁の高坏、内外面に寛ケズリを施す。1288～1292は器台。1293・1294は石包丁で1293は輝緑凝灰岩製である。1295は館島産黒曜石の打製石鏃で、扱りは浅い。1296～1300は敲石。1301は磨製の胎刃石斧である。

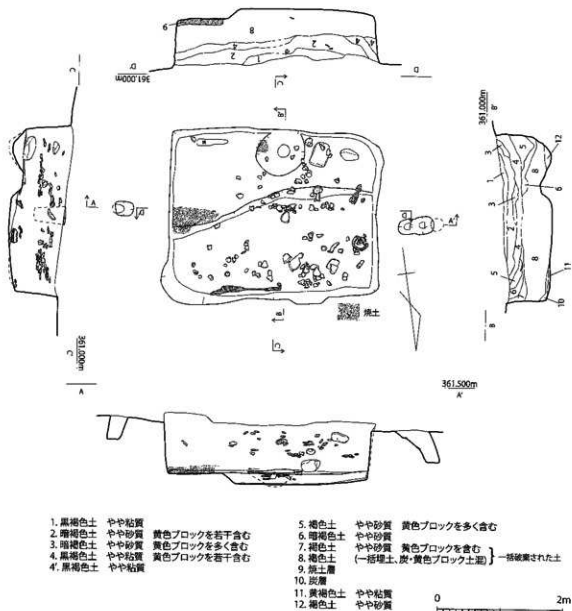
出土遺物より、本貯蔵穴は弥生時代中期後半に比定できる。

## (14) S H96

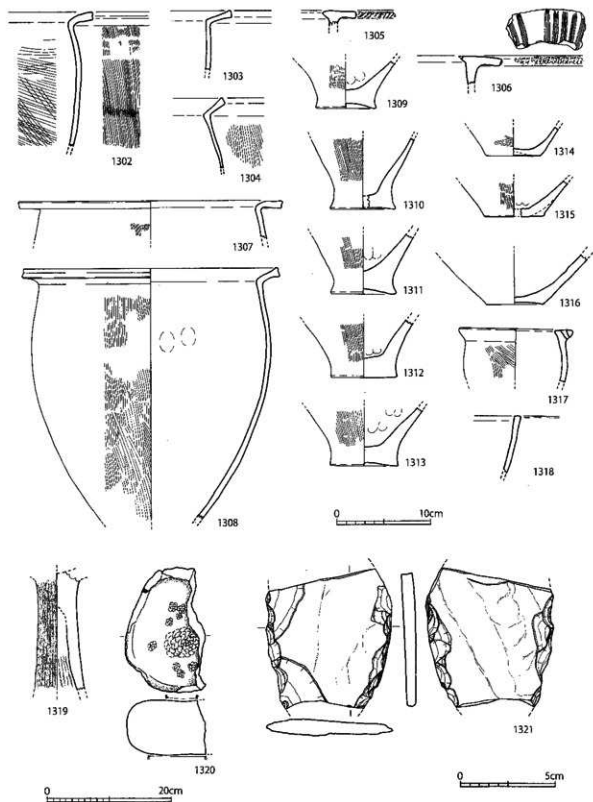
S H96は、本調査区東部にあり、S H95の南約20mに位置する竪穴建物である。東西3.4m、南北2.5mの規模で、検出面からの深さは1.05mと深い。平面形は方形で、主軸はN-17°-Eである。床は南半が約20cm高く作っており、その床面から80cmほどの円形の土坑を検出した。床に柱穴はなく、竪穴の長軸の外で2本の柱穴を確認した。竪穴からの距離はおおよそ80cmである。柱穴の深さは、40～60cmである。柱を立てると内側に傾く造りとなっている。床直上に炭化物を含んだ焼土が広がっており、それに張り付くように多数の炭化した木片及び多量の土器が廃棄されていた。これらは火災により廃棄されたものと考えられる。これらを覆うように人為的に竪穴の半分の深さが埋まっている。多くの遺物が、この後の自然堆積層から検出されている。

出土遺物（第7-38図）には土器と石器がある。1302～1308は甕である。1302・1303は胴の張らないタイプの甕。1304は胴が張るタイプで1307・1308はその中間で、若干張るタイプ。1305・1306は鋤先状口縁の口唇部に刻目を施す。1309～1313の底部は厚底、上げ底で、1314～1316は比較的薄手の底部である。1317の小型の鉢は、口縁を肥厚させ、そこに穿孔を開ける。1319は高坏の脚部。1320は敲石。1321は凝灰質安山岩製の扁平打製石斧である。

本竈穴建物の時期は、出土遺物より弥生時代中期後半に位置づけられる。



第7-37図 SH96実測図 (1/60)

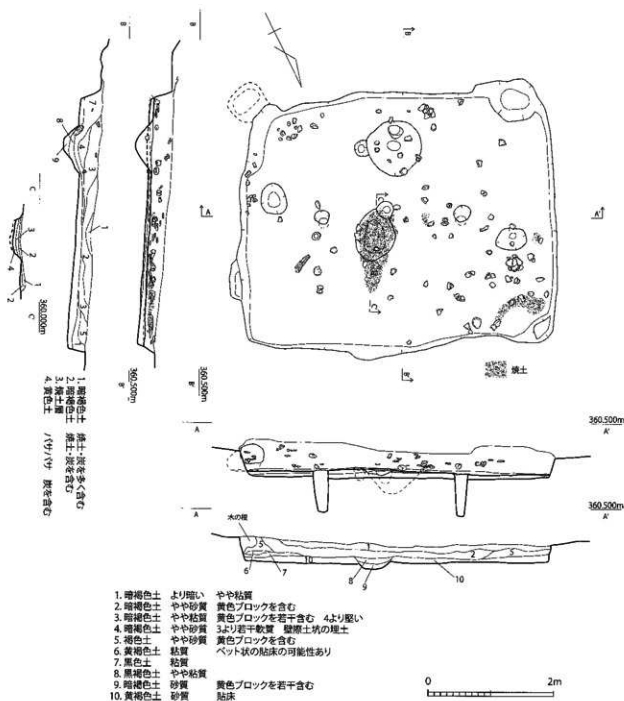


第7-38図 S H96出土遺物実測図

(15) SH97

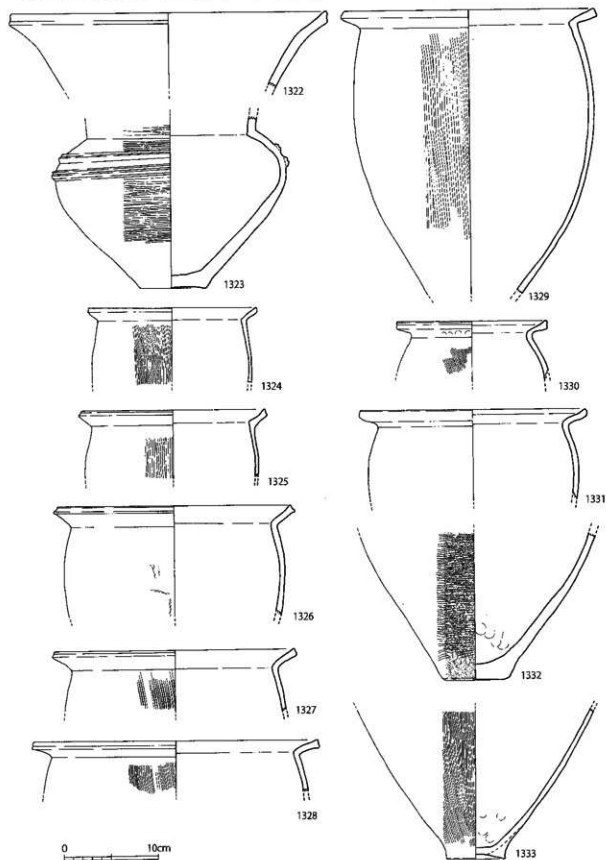
SH97は、SH95とSH96の中間の位置で確認された竪穴建物である。その規模は東西5.1m、南北4.2mで、平面形は方形を呈す。主軸はN-20°-Eである。壁はほぼ垂直に立ち、検出面から床面までの深さは0.4mである。径35cmほどの小さな支柱穴は2本確認され、その深さは0.66mと0.80mでかなり深い。柱間は2.2mである。柱の中間から焼土を含んだ深さ25cmほどの土抗を確認した。また、南壁中央付近で深さ50cmほどの土坑を1基検出している。床面には10cmの厚さの貼床を確認した。

遺物は床面から若干浮いた状態で出土しており、本遺構が埋まる段階で、廃棄・流入したものと考える。1322・1323は竈で、1322の復元口径は32.8cmで、頸部から口縁にかけてはやや外湾しながら立ち上がる。1323は



第7-39図 SH97実測図 (1/60)

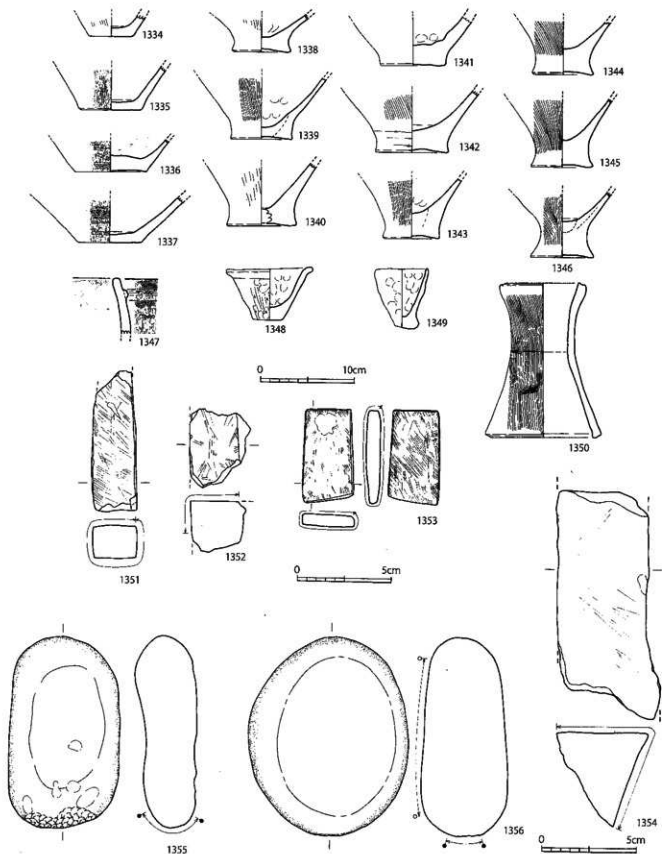
肩の張った胴部から直線的に立ち上がる口縁をもつ。胴上部から肩にかけて2条のM字突帯を貼り付ける。1324～1331は壺である。1324・1325は胴の張らない器形の壺、1326～1329は若干胴の張るタイプである。1330・



第7-40図 S H97出土遺物実測図①

1331は口縁端部をつまみ上げる。

1332～1346は壺や甕の底部である。1332～1337の底部は比較的薄手のものである。それ以外は上げ底、厚底



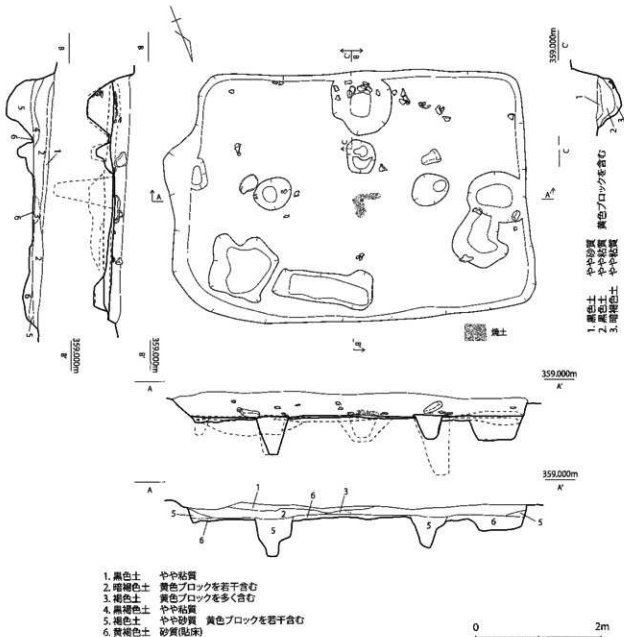
第7-41図 SH97出土遺物実測図②

を呈している。1339・1343・1346は粘土を足して厚くしている。1347は内湾する口縁部に突帯を貼り付けて、丹塗りを施す。1348・1349はミニチュア土器。1350は磐台。1351～1354砥石で、比較的小型のものが多く。1355は敲石。1356は磨石である。

出土遺物より、本竪穴建物は弥生時代中期後半に比定できる。

### (16) SH98

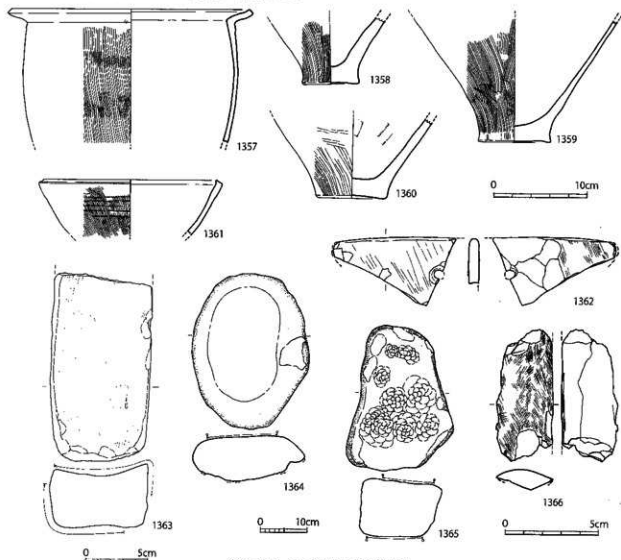
SH98は、本調査区北東部にある竪穴建物である。SH97の北約20mの位置にある。その規模は東西5.6m、南北4.0mで、平面形は隅丸長方形プランである。主軸はN-18°-Eである。床は緩やかに立ち上がり、検出面から床面までの深さは0.4mである。床面からは主柱穴が2本確認された。柱穴の深さは0.4mと0.7mである。柱間の長さは2.7mである。竪穴中央部では焼土を検出したが、それに伴う土抗は確認できなかった。その他、南壁及び西壁中央付近で約40cmほどの深さの土抗を確認した。



第7-42図 SH98実測図 (1/60)



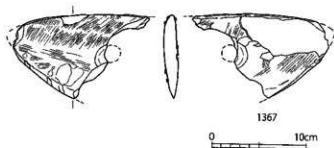
遺物はこれらの土坑付近の床面から出土している。出土した土器、土製品、石器を第7-43図に示した。1357は鋭く外反する口縁をもつ甕で、胴は張らない。外面に縦方向のハケ目を施す。1358～1360は比較的薄手の底部。1361は浅い鉢形土器で緩やかに内湾しながら立ち外面にケズリがみられる。1362は行包丁。1363は砥石。1364・1365は安山岩製の台石、1366は欠損した石剣である。



第7-43図 S H98出土遺物実測図

(17) S H99

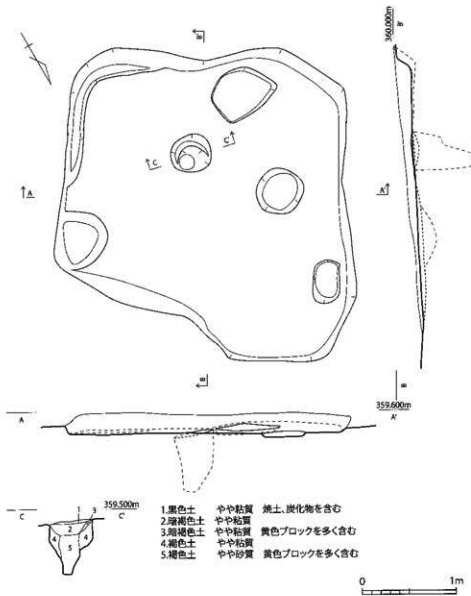
S H99は、本調査区北東側にあり、S H98の南約15mで確認できた堅穴建物である。その規模は南北3.4m、東西3.0mと小型で、平面は不整形プランである。南が若干高い地点に立地するため、南壁は20cmの高さがあるが、北側は壁が立ち上がらない。南東角の壁溝が一部残っていた。床の中央部で深さ60cmの柱穴を検出したことから、小規模ではあるが堅穴建物として記載する。



第7-44図 S H99出土遺物実測図

遺構の残存状態が良くないため、出土遺物も少量で、土器は細片のみで図示できなかった。

1367は輝緑凝灰岩製の石包丁で両面に製作時の摩擦痕を残す。

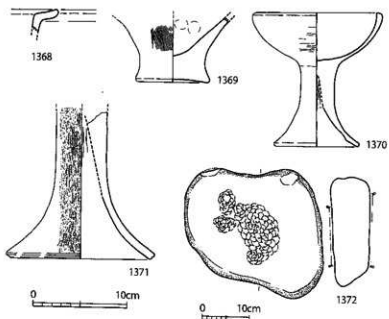


第7-45図 SH99実測図 (1/40)

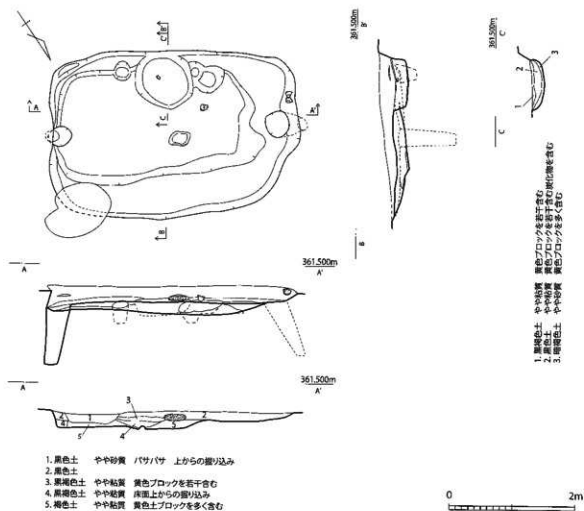
## (18) SH100

SH100は、本調査区東側に建てられた堅穴建物で、SH97南約15mの位置にある。小規模の堅穴で、東西4.4m、南北2.5mで、平面は隅丸長方形プランである。北側の壁は緩やかに立ち、検出面から床面までの深さは約45cmである。北側と西側にベッド状遺構をもち、その高さは約20cmである。ベッドの幅は80cm程である。主軸の両端からは2本の主柱穴が確認できた。径は35cm、深さは1.0m～1.1mである。他の堅穴同様、柱が内側に傾いて建つようになる。その他の設備としては南壁中央部で0.9mの円形土坑を検出した。

遺物は床面中央で石皿が出土している。SH100から出土した土器及び石器を第7-46図に示した。1368は強く外反する口縁部をもつ。1369は厚底の底部で、丸い胴部へと続く。1370・1371は高坏である。そのうち1370は丸く内湾した口縁部をもち、脚部は伸びて、裾部で開く。1372は中央部で出土した石皿である。



第7-46図 SH100出土遺物実測図



1. 黒色土 やや砂質 バサバサ 上からの盛り込み
2. 黒色土 やや粘質 黄色ブロックを若干含む
3. 黒褐色土 やや粘質 黄土上からの盛り込み
4. 黒褐色土 やや粘質 黄土上からの盛り込み
5. 褐色土 やや粘質 黄色土ブロックを多く含む

1. 黒褐色土 やや粘質 黄色土ブロックを若干含む  
 2. 黒褐色土 やや粘質 黄色土ブロックを若干含む  
 3. 黒褐色土 やや粘質 黄色土ブロックを若干含む

第7-47図 SH100実測図 (1/60)

## (19) SH101

SH101は、本調査区の北東部にあり、SH100の東約5mの位置にある小規模の竪穴建物である。東西3.4m、南北3.1mの規模を持ち、平面形は隅丸方形である。南が高い場所に立つため、竪穴の深さは南が0.4m、北側が0.1mである。

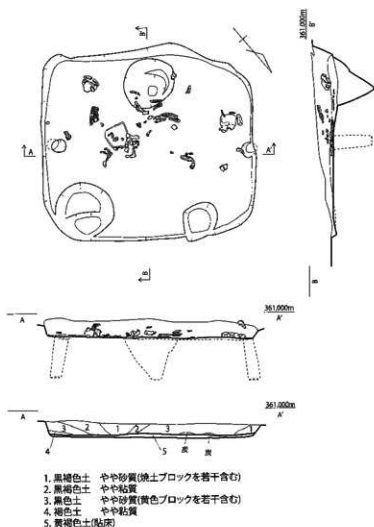
主柱穴は東西隅で2本確認され、その深さは0.6mと0.7mで、柱間は2.9mである。南壁中央部には、径80cm、深さ60cmほどの円形土坑が見つかった。土器等の遺物は床面全体からまんべんなく出土した。

1373は小型の甕で、器高の割に器壁は厚い。平底で、口径と胴部最大径がほぼ同じサイズである。1375は動先状口縁の高坏である。1376は石鏃。

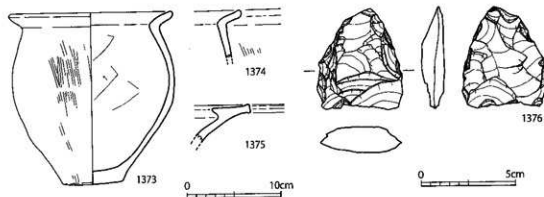
出土遺物より、本遺構は弥生時代中期後半に比定できる。

## (20) SH102

SH102も本調査区北東部にある小型の竪穴建物で、SH101の東約10mの位置にある。その規模は東西3.2m、南北2.7mで、検出面からの深さは0.25mで、不整形の平面形をもつ。西を除く3方では、周囲の壁に沿って幅0.25m、深さ0.10



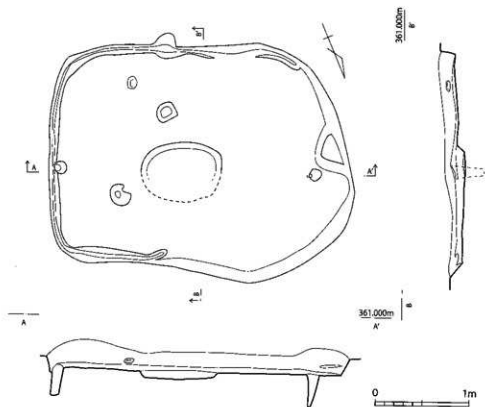
第7-48図 SH101実測図 (1/60)



第7-49図 SH101出土遺物実測図

mの規模の壁溝が巡る。主柱穴は東西隅で2本確認されている。その25cmと35cmである。2本の柱間は2.7mの間隔である。堅穴中央部に長軸80cm、短軸60cmの楕円形の土坑が掘られているが、ここからは焼土、炭化物等は出土していない。

遺物は土器の細片が数点出土しているが、図示するものはなかった。本堅穴建物の構築時期は周囲の堅穴と同時期と推定される。



第7-50図 SH102実測図 (1/40)

(21) SH103・SH104

SH103及びSH104は、本調査区最東部にある5号周溝の内側で検出した堅穴建物である。両者は折り重なって構築されており、平面で確認されたのは方形のSH103で、その床面に円形の椀際溝を検出し、それをSH104とした。よってSH104は幅30cm、深さ15cmの円形の周溝のみを指す。重複関係は、円形のSH104が廃絶した後、その場にSH103が構築されたものと考えられる。

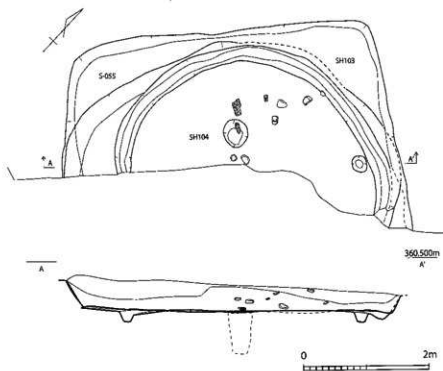
方形のSH103の規模は東西3.5m以上、南北5.4mで、東半は調査区外に広がる。検出面からの深さは0.50mである。主柱穴は中央部で1本確認し、その深さは60cmである。

遺物は、主柱穴周辺で、炭化物や土器が出土しており、それらはSH103の遺物として取り上げている。

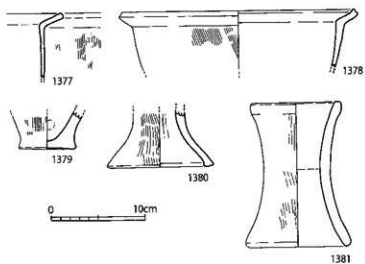
1382は口縁が鋸先状を呈する甕で、1383・1384は「く」の字状口縁の甕で、若干削が張るタイプである。1384は口縁端部を上方につまみ上げる。1385は器台。1386は敲石。

また、周溝内から出土した遺物は、SH104としている。1377・1378は強く折れる「く」の字状の口縁を持ち、削が張らないタイプの甕である。1378は口縁端部を上方につまみ上げる。1379は比較的薄手の底部である。1380・1381は器台で、1380の器壁は薄い。

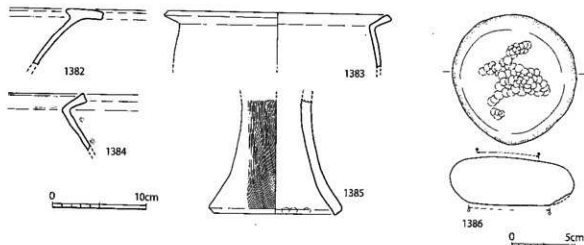
出土遺物より、SH103・SH104ともに弥生時代中期後半に比定できる。



第7-51図 SH103・SH104実測図 (1/60)



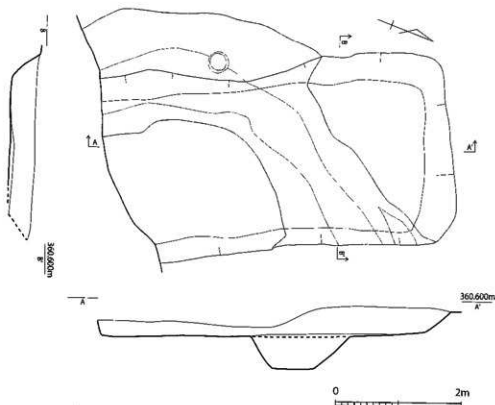
第7-52図 SH103出土遺物実測図



第7-53図 SH104出土遺物実測図

(22) SH105

SH105は、SH103及びSH104同様に、5号周溝の周辺で検出した竪穴建物であり、SH105→5号周溝の切り合い関係をもつ。規模は東西6.0m以上、南北3.3mで、平面形は方形を呈す。調査区東端は調査区外となっている。主軸はN-20°-Eである。検出面からの深さは0.25mである。大半を溝に切られているため、土抗や柱穴等の施設は確認できていない。遺物も弥生土器の細片のみの出土であり、正確な構築時期は不明である。



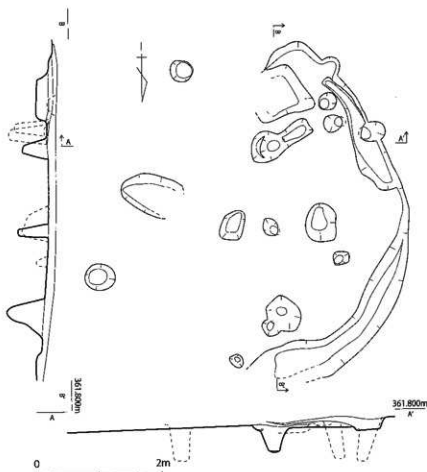
第7-54図 SH105実測図 (1/60)

## (23) SH106

SH106は、本調査区東部にある円形の竪穴建物で、SH101の南約10mの位置にある。上面をかなり削平されており、壁は西半が確認されたのみである。これに付随すると想われる土坑及び柱穴の範囲は、南北7.4m、東西6.9mである。西壁に沿って深さ20cmの壁溝が開られていた。深さ50cm～70cmの柱穴は数基検出したが、主柱穴と断定できるものはない。

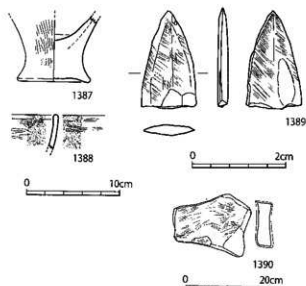
SH106から出土した土器、土製品、石器を第7-56図に示した。1387は厚手の底部、内部に凹盤充填がみられる。1388の鉢形土器は内外面にミガキと赤色顔料がみられる。1389は緑泥片岩製の磨製石鏝。1390は砥石である。

出土遺物より、本竪穴建物は弥生時代中期後半に比定できる。



第7-55図 SH106実測図 (1/60)

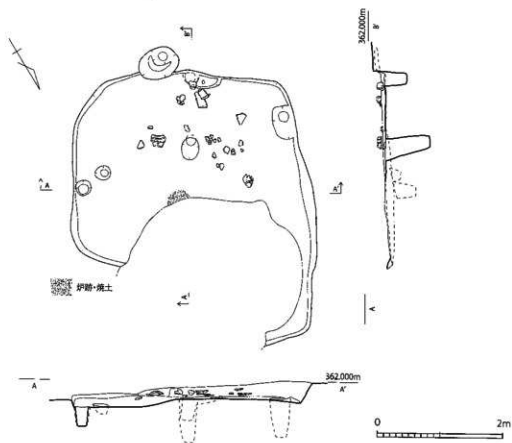




第7-56図 SH106出土遺物実測図

(24) SH107

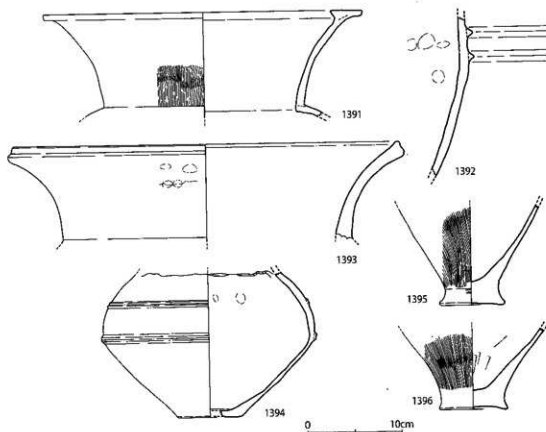
SH107は、本調査区では最南で確認された竪穴建物で、SH106の南5mに位置する。北半をSK335に切られている。その規模は南北4.5m、東西4.0mで、平面は隅丸方形プランである。検出面からの深さは25～35cmである。主柱穴は1本確認され、その深さは0.7mである。柱穴の北80cmの場所で、焼土を伴った浅い土坑が見つかっている。この位置を竪穴の中心と考えると、本竪穴は2本柱の構造をもつことになる。遺物はおもに竪穴南側の床面に近い場所で出土している。



第7-57図 SH107実測図 (1/60)

1391は鋤先状口縁をもつ広口壺で、口縁下部は緩く外反し、肩の張る胴部へと続く。1393の壺の口縁部も外反するタイプのもの。1394の壺は、平底から胴部にかけては直線的に開き、胴から肩にかけては丸く窄まる。胴部最大径付近に2条のM字突帯を貼り付ける。1392も壺の胴部で、2条の三角突帯を貼る。1395・1396の底部は比較的厚い。

出土遺物より、本壺穴は弥生時代中期後半に比定できる。



第7-58図 SH107出土遺物実測図

## 2 貯蔵穴

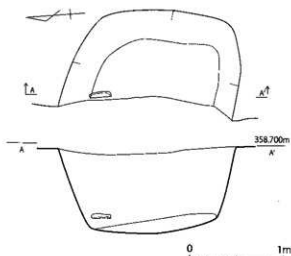
貯蔵穴は、本調査区全体に広がっており、43基確認できた。

### (1) S K 288

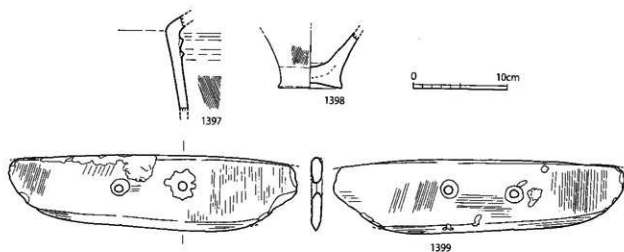
S K 288は、調査区の西端に位置する貯蔵穴である。その規模は南北1.5m、東西0.9m以上、深さ65cmを測る。西半は調査区外にある。隅丸方形の平面形をもち、壁は緩やかに立ち上がる。遺物は遺構が埋まる段階に流入した物である。

1397は2条の三角突帯を貼り付ける甕で、外面に縦方向のハケ目調整がみられる。1398は上げ底の底部で、内部は円盤を充填している。1399は輝緑凝灰岩製の石包丁で、2か所に両面からの穿孔が認められる。両面に製作時のものと思われる痕跡が残る。

これらの遺物より、S K 288の構築時期は、どちらも弥生時代中期後半である。



第7-59図 S K 288実測図 (1/40)



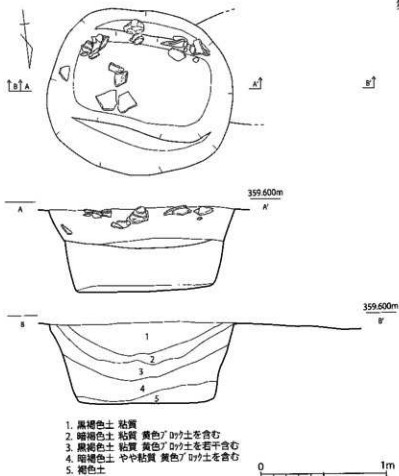
第7-60図 S K 288出土遺物実測図

## (2) S K 289

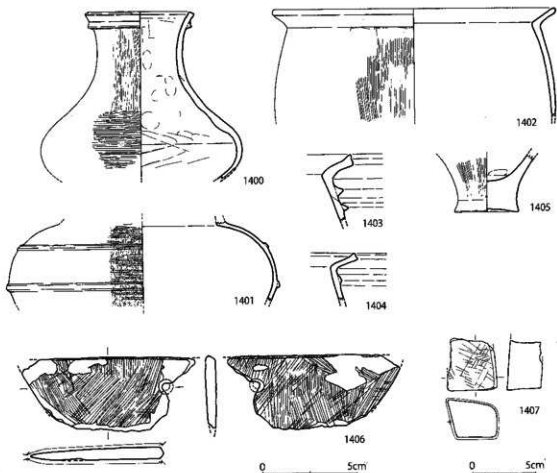
S K 289も調査区最西部で検出された貯蔵穴で、S K 288の南約30mの位置にある。東西2.4m、南北1.9mで隅丸方形の平面形をもつ。検出面からの深さは約70cmである。壁は緩やかに立ち上がり、床面の大きさは2.1m×1.2mである。柱穴等の施設は確認されていない。

遺物は貯蔵穴廃絶後、自然堆積で上方まで埋まった段階で、廃棄または流入したものである。1400は長頸壺で、口縁部にかけて緩やかに外反する器形で、口縁直下に三角突帯を貼り付ける。胴部は強く張る。頸部外面は縦方向に、胴部は横方向にミガキを施す。1401は肩の張った壺の胴部で、最大径部とその上方にそれぞれ1条のM字突帯を巡らし、外面に赤色顔料を塗布する。1402は「く」の字状口縁の比較的胴の張った甕で、外面にハケ目調整を施す。1403・1404の甕は口縁下に三角突帯を貼り付ける。1405の底部は、若干上げ底で厚い。1406は石包丁で、2か所に両面からの穿孔が認められる。1407は砥石である。

これらの遺物より、S K 289の構築時期は弥生時代中層後半である。



第7-61図 SK289実測図 (1/30)

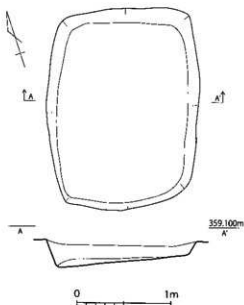


第7-62図 SK289出土遺物実測図

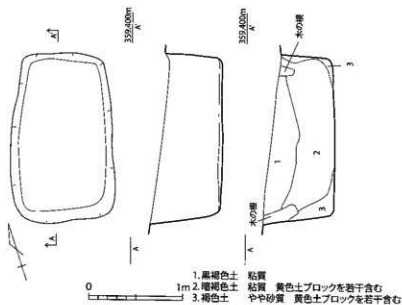
(3) S K 290

S K 290は、本調査区の北西部で確認した貯蔵穴で、S K 288の東約15mの位置にある貯蔵穴である。その平面形は南北1.6m、東西1.2m規模の方形で、深さは検出面から20cmと浅い。床面は平坦で、本遺構に伴う柱穴等の施設は確認できなかった。

出土遺物は床面から浮いた箇所少量の弥生土器は確認できたが、図示できるものはなかった。したがってS K 290の構築時期は明確にはできない。



第7-63図 S K 290実測図 (1/40)

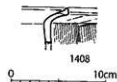


第7-64図 S K 291実測図 (1/40)

(4) S K 291

S K 291は、S K 290の南3mの位置で確認した貯蔵穴である。平面形は南北1.6m、東西0.9mの方形である。その深さは検出面から70cmで、床面は平坦である。本遺構に伴う施設は確認できなかった。

埋土はレンズ状の自然堆積を示しており、遺物はその上層から数点出土した。1408は強く外反する「く」の字状口縁の甕で、胴は張っていない。縦方向のハケ目を施す。出土遺物より、S K 291は弥生時代中期後半に比定される。



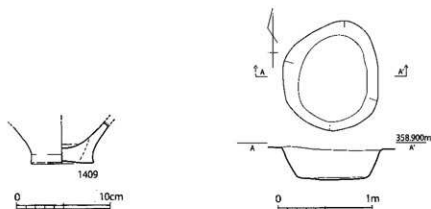
第7-65図 S K 289  
出土遺物実測図

## (5) S K 292

S K 292は、S K 291の北東8mの位置にある土坑で、その平面プランは長軸70cm、短軸60cmの円形を呈している。深さは検出面から0.2mと浅く、壁は緩やかに立ちあがる。そこから出土した土器を第766図に示した。

1409は上げ底気味の底部で、内部には円盤状の粘土を充填している。底部径は6.2cmである。

出土遺物より、S K 292の構築時期は弥生時代中期後半である。



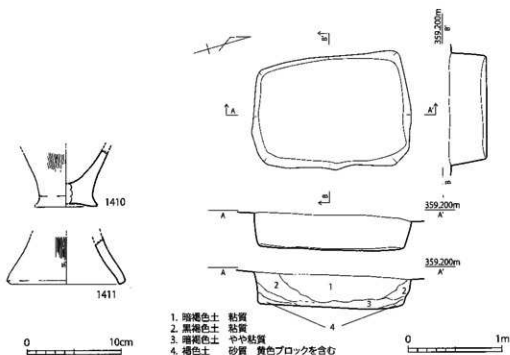
第7-66図 S K 292実測図 (1/40)・出土遺物実測図

## (6) S K 293

S K 293は、S K 290の東約6mに位置し、平坦地に立地する貯蔵穴である。平面形は南北1.5m、東西1.0mの方形で、深さは検出面から0.30mである。側壁はほぼ垂直に立つ。床面はほぼ平坦で、柱穴等の施設は確認できなかった。埋土の堆積はレンズ状で自然堆積を示しており、遺物は遺構廃絶後に中間まで埋まった段階で流入したものである。その出土遺物は第767図に示した。

1410は厚手の底部で、上げ底気味である。1411は器台。どちらも縦方向のハケ目がみられる。

出土遺物より、本貯蔵穴の構築時期は弥生時代中期後半に比定される。



第7-67図 S K 293実測図 (1/40)・出土遺物実測図

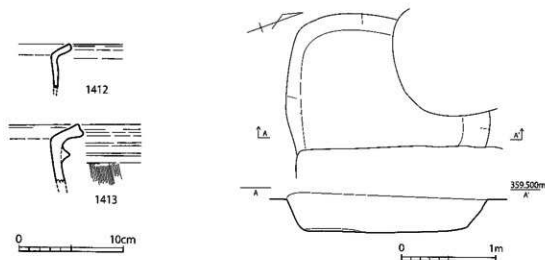
(7) S K 294

S K 294は、S B 7近くにあり、S K 293の南東約20mに位置する貯蔵穴であるが、後世の擾乱で、半分以上を失っている。平面形は隅丸方形と思われ、南北1.25m、東西0.7mを残すのみである。床面はほぼ平坦で、その深さは検出面から20cmである。

遺物は、土器が数点出土しており、これらを第7-68図に示した。

1412は胴の張らない「く」の字状口縁の甕である。1413は器壁が厚く、やや胴の張った甕で、口縁端部をつまみ上げ、口縁直下に三角突帯を貼り付ける。外面はハケ目調整を施す。

これらの遺物より、S K 294の構築時期は弥生時代中期後半である。



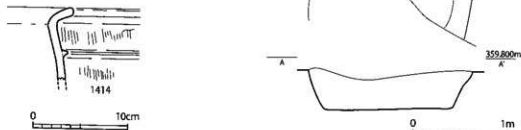
第7-68図 S K 294実測図 (1/40)・出土遺物実測図

(8) S K 295

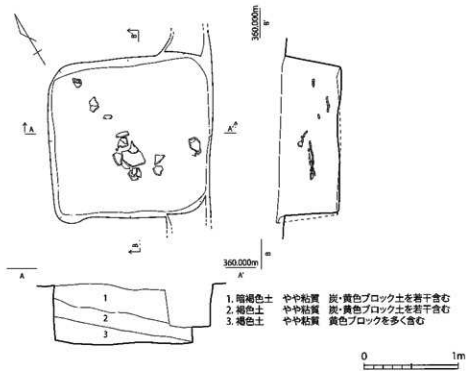
S K 295は、S K 294の南西約9mに位置する貯蔵穴である。S K 294同様、後世の擾乱により、その半分以上を失っている。規模は南北1.1m、東西1.2mで、平面形は隅丸方形と考える。その深さは検出面から25cmである。遺物は床面から若干浮いた状態で出土している。

1414は甕で、口縁部を短くつまみ出す「く」の字状の口縁の甕で、屈折部下5cmほどの場所に三角突帯を巡らす。

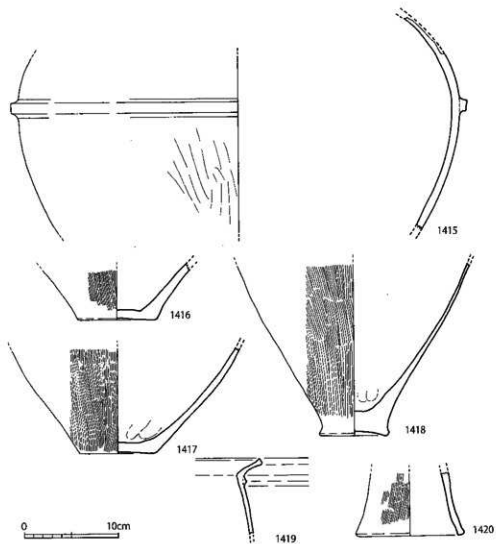
出土遺物より、S K 295は弥生時代中期前半に比定される。



第7-69図 S K 295実測図 (1/40)・出土遺物実測図



第7-70図 SK 296実測図 (1/40)



第7-71図 SK 296出土遺物実測図

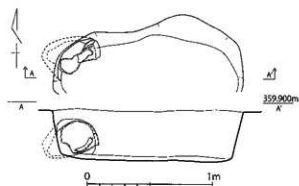


(9) S K 296

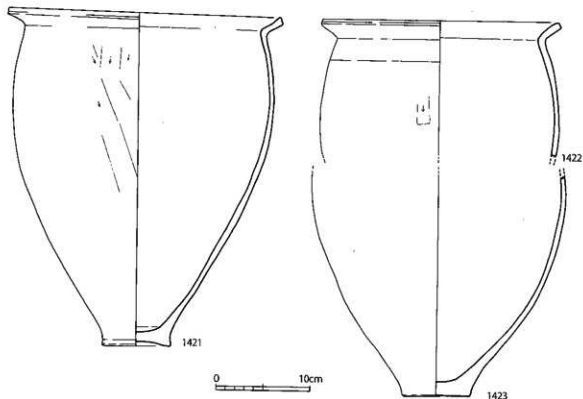
S K 296は、本調査区の西部にある貯蔵穴で、S K 295の南西約7mに位置している。その規模は南北25m、東西26mで、平面形は隅丸正方形を呈している。側壁はほぼ垂直に立ち、深さは検出面から0.6mである。床面はほぼ平坦である。本遺構に伴う柱穴等の施設は確認できなかった。遺物は中位くらいの深さで検出しており、埋土が埋まっていく途中で、廃棄されたものである。

1415は丸く張った壺の胴部で胴中位にM字突帯を巡らす。1416・1417は薄手の底部で、やや上げ底を呈する。1417は内面に指圧痕、外面にハケ目調整を施す。壺の底部か。1419の甕は口縁下に三角突帯を貼り付ける。口縁端部は跳ね上げる。1420は器台である。

これらの遺物より、S K 296の構築時期は弥生時代中期後半である。



第7-72図 S K 297実測図 (1/30)



第7-73図 S K 297出土遺物実測図

## (10) SK297

SK297はSK296の東約10mの位置にある貯蔵穴である。SK295同様、後世の攪乱により、その半分以上を失っている。その規模は南北0.6m、東西1.3mで不整形を呈している。深さは検出面から0.45mで、床面は平坦である。北西隅で横方向の掘り込みが確認できた、その内部には、第7-73図に示した壺が埋め込まれていた。

出土遺物は土坑の西壁を30cmほど割りぬいた場所で、重なった状態で出土した。復元した結果、壺3点が確認できた。それらを第7-73図に示した。1421は器高35.4cm、口径28.9cm。底部径7.3cm。外面にススが付着していた。壺の上半が残っていた1422は復元口径25.0cmと1421より小ぶりである。1423は胴部か底部にかけての部分が残存していた1423は底部径が7.2cmで、1421とほぼ同サイズの壺である。

出土遺物より、SK297は弥生時代中期後半に比定される。

## (11) SK298

SK298は、本調査区の北西部にある貯蔵穴である。規模は南北2.2m、東西1.8mで、平面形は隅丸方形を呈している。側壁はほぼ垂直に立ち上がり、深さは検出面から0.4mである。床面はほぼ平坦で、中央東側で深さ40cmの柱穴を検出した。また、西壁中央部からは径60cmの土坑を確認した。遺物は柱穴横で1424の壺が口縁部を下にして置かれていた。その他土坑の北側に遺物が集中していた。

1424は強く屈折する口縁の端部をつまみ上げた壺で、胴部は張っていない。1425は薄い平底の底部で、外面にハケ日蒔を施す。

出土遺物より、本貯蔵穴の構築時期は弥生時代中期後半に比定される。

## (12) SK299

SK299は、SH86を検出した際に、それを切って構築された貯蔵穴とした確認したものである。したがって、その重複関係はSH86→SK299である。その大きさは南北1.8m、東西2.1mで、平面形は隅丸方形を呈している。側壁は垂直に立ち上がり、検出面からの深さは、0.85mと深い貯蔵穴である。床面はほぼ平坦で、床面からは柱穴等の施設は検出できなかった。

遺構内の掘土はレンズ状を呈しており、土器・石器等の遺物は廃絶後に遺構が埋まっていく段階で廃棄・流入したものと考えられる。1426は壺の肩部で、M字状突帯を2条巡らす。1427～1430は「く」の字状口縁の壺で、胴はそれほど張らない。1429は口縁下に三角突帯を貼る。1430は口縁端部をつまみ上げる。口径は25.6cmを測る。1431・1432の底部は上げ底気味である。1433の高坏は鋤先状口縁を呈しており、内外面ともにミガキを施した後、赤色顔料を塗布している。

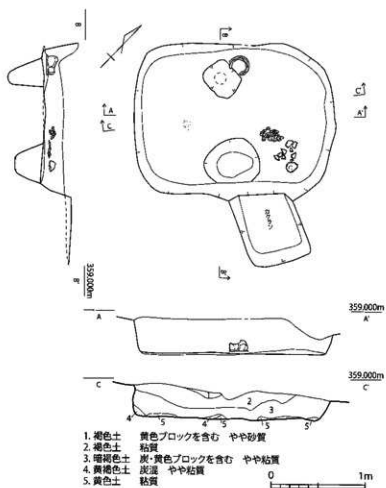
これらの遺物より、SK299の構築時期は弥生時代中期後半である。

## (13) SK300

SK300は、SK294・SK295の東にある貯蔵穴で、その平面形は、方形を呈している。規模は南北1.8m、東西幅2.4m、深さ1.1mで、平坦な床面をもつ。側壁はオーバーハング気味で、底部の方が若干広めに作られていた。土器・石器等の遺物は廃絶後に遺構が埋まっていく段階で廃棄・流入したもので大きな破片の遺物は少なかった。

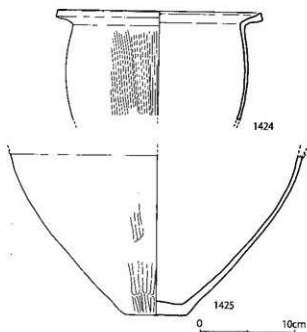
1435は鋤先状口縁を呈した壺か高坏である。復元口径は20.2cmである。1436・1437は胴の張ったタイプの壺で、比較的厚い器壁をもつもので、口縁直下に三角突帯を貼る。1437は端部をつまみ上げる。1439は姫島産黒曜石の石鏃で、基部の挟りはやや深い。

これらの遺物より、SK300の構築時期は弥生時代中期後半である。

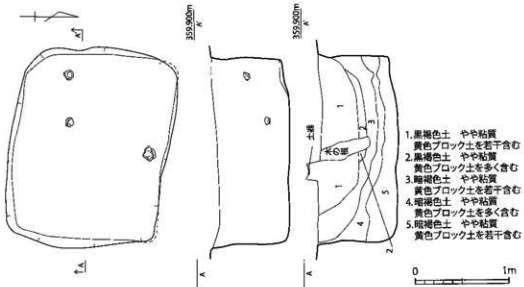


1. 褐色土 黄色ブロックを含む やや砂質
2. 褐色土 粘質
3. 暗褐色土 灰・黄色ブロックを含む やや粘質
4. 黄褐色土 灰混 やや粘質
5. 黄土 粘質

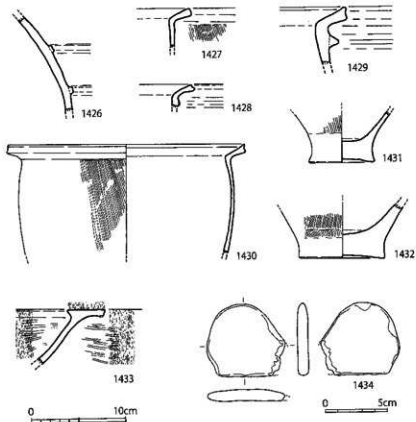
第7-74図 S K298実測図 (1/40)



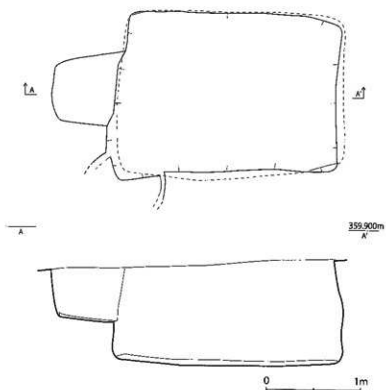
第7-75図 S K298出土遺物実測図



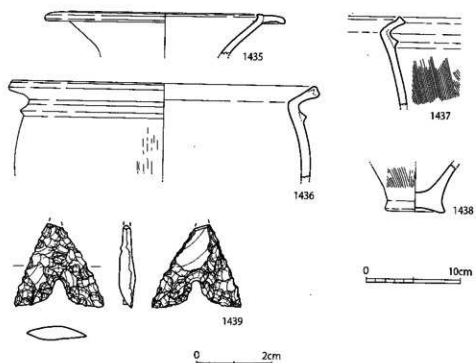
第7-76図 S K 299実測図 (1/40)



第7-77図 S K 299出土遺物実測図



第7-78図 S K 300実測図 (1/40)



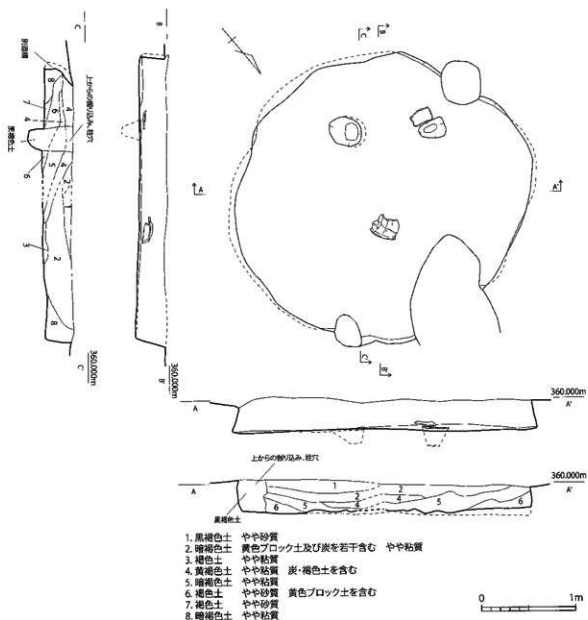
第7-79図 S K 300出土遺物実測図

## (14) SK301

SK301は、SK297の南西5mの位置にある貯蔵穴で、その平面形は、円形を呈している。規模は南北31m、東西30m、深さ0.35mで、平坦な床面をもつ。側壁は垂直に立つ箇所もあれば、若干フラスコ状に裾が開く箇所もある。床面から径30cm、深さ25cmほどの支柱穴を1本確認した。遺物は床面直上で1440の甕が出土しているが、他は廃絶後に遺構が埋まって行く段階で流入した小破片のみの出土であった。

1440は縦く短く外反する口縁を持つ甕で、少し胴は張り底部へと続く。その復元口径は26.4cmで、胴部最大径よりも大きい。口唇部に刻目を施す。

出土物より、本貯蔵穴の構築時期は弥生時代中期前半に比定される。



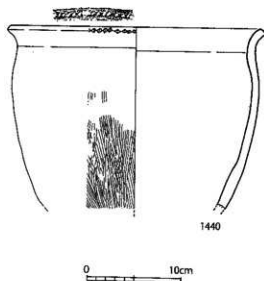
第7-80図 SK301実測図 (1/40)

(15) SK302

SK302は、本調査区の西寄りの最北端で確認した貯蔵穴で、SK298の東約12mの位置にある。その規模は南北2.1m、東西1.2m以上で、北半は調査区外である。隅丸方形の平面形を呈している。検出面から床面までの深さは65cmである。側壁は垂直にたち、床面は平坦である。土層観察では本遺構が一旦埋まった後に、北半が掘り返されている状況が見て取れたが、遺物にそれほどの時期差がなかったことから、一つの遺構として報告する。出土遺物は床面から浮いた状況で出土した。

1441～1443は、いずれも「く」の字状口縁の甕で、胴部はそれほど張らない。復元口径は23.6cm。1444は器台で、外面に縦方向のハケ目、内面はしほり痕がみられる。

これらの遺物より、SK302の構築時期は弥生時代中期後半である。



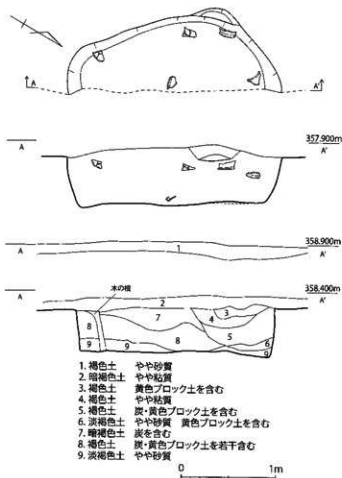
第7-81図 SK301出土遺物実測図

(16) SK303

SK303は、本調査区中央部西寄りで確認した貯蔵穴である。平面形は、東西方向に主軸のある方形を呈している。大きさは長軸2.5m、短軸1.25mである。側壁は垂直に立ち上がり、床は平坦である。検出面から床までの深さは1.1mである。遺構内の埋土は自然堆積を示しており、土器等の遺物は遺構が埋まっていく段階で流入したものである。

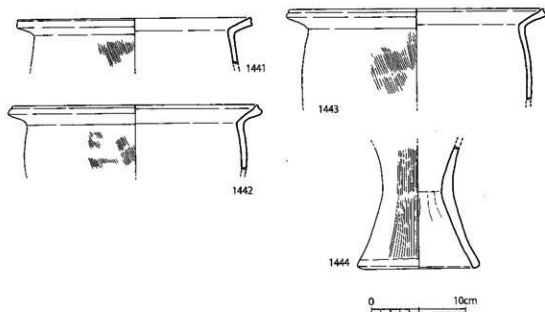
1445は壺の胴部で、その上半に三角突帯を2条巡らす。復元胴部最大径は21.0cmである。外面にミガキ、丹塗りを施す。1446・1447は強く外反する「く」の字状口縁の甕で、口縁端部をつまみ上げている。胴部は張らずに直線的に伸びる。1446は内外面に赤色顔料を塗布する。1448は比較的薄手の底部。1449は浅く内湾する鉢、1450は鋤先状口縁の高坏か。

出土遺物より、本貯蔵穴の構築時期は弥生時代中期後半に比定される。

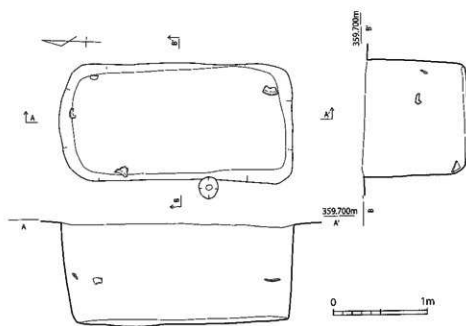


第7-82図 SK302実測図 (1/40)

1. 褐色土 やや砂質
2. 暗褐色土 やや粘質
3. 褐色土 黄色ブロック土を含む
4. 褐色土 やや粘質
5. 褐色土 灰・黄色ブロック土を含む
6. 淡褐色土 やや砂質 黄色ブロック土を含む
7. 暗褐色土 灰を含む
8. 褐色土 灰・黄色ブロック土を若干含む
9. 淡褐色土 やや砂質

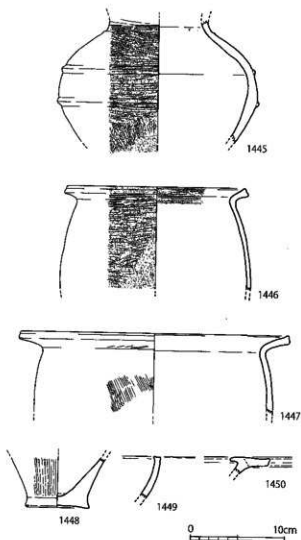


第7-83図 S K302出土遺物実測図



第7-84図 S K303実測図 (1/40)



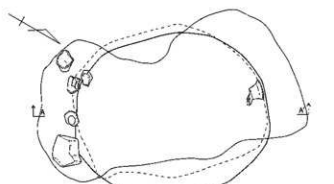


第7-85図 S K 303出土遺物実測図

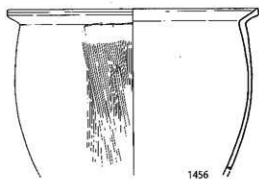
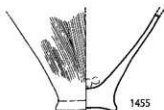
(17) S K 304

S K 304は、S K 303の西隣で検出した貯蔵穴である。平面形は、南北にやや長い楕円形を呈している。大きさは長軸1.55m、短軸1.25mで、深さ0.95mである。側壁はほぼ垂直に立ち上がり、短軸方向は真っ直ぐ立ち上がる。床面は中央部をほぼ平坦に作っているが、南北端に副室を設けている。その規模は、北側が奥行き80cm、高さ80cmで、南側が奥行き65cm、高さ1mほどである。南側からは土器が数点出土した。1451は長頸壺で、緩く外反する口縁部直下に三角突帯をつける。外面に赤色顔料を塗布する。1453・1454は比較的厚手の上げ底気味の底部である。1456は「く」の字状口縁の甕で、口縁端部をつまみ上げている。1457は台石である。

これらの遺物より、S K 304の構築時期は弥生時代中期後半である。



- 1. 暗褐色土 粘質
- 2. 黒褐色土 やや粘質 黄色ブロックを含む
- 3. 暗褐色土 やや粘質 黄色ブロックを含む
- 4. 暗褐色土 やや砂質 黄色ブロックを若干含む
- 5. 黒褐色土 やや砂質
- 6. 黒褐色土 やや砂質 黄色ブロックを多く含む



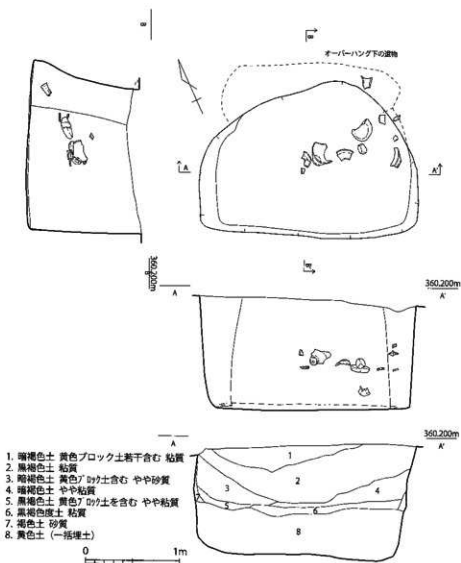
第7-86図 SK304実測図 (1/30)・出土遺物実測図

(18) S K 305

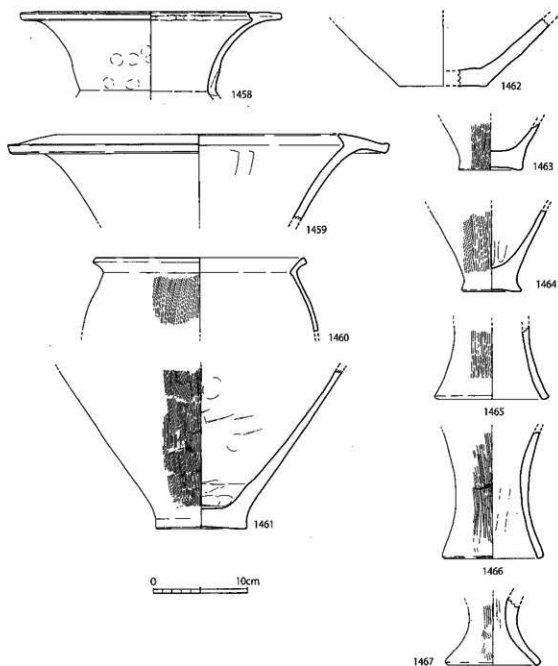
S K 305は、本調査区の中央部にあり、S K 304の南約10mに位置する貯蔵穴である。平面形は、南側は方形で、北半は不整形をしている。大きさは東西23m、南北1.7mである。検出面からの深さは1.2mある。南側の側壁は、ほぼ垂直に立つが、北側はフラスコ状に裾が開く。

本貯蔵穴は深さ50cmまでは一気に人為的に埋められ、その後は自然に畑土が堆積していった状況である。出土した遺物の大半は、自然に埋まっていく段階に廃棄されたものである。1458・1459は鋤先状口縁を呈する壺で、1458は端部にかけて水平で、1459は端部が垂れるタイプである。復元口径は40.6cm。1460は、胴の張る「く」の字状口縁甕である。外面に縦方向のハケ目を施す。1461・1462は平底、1463・1464は比較的反手の上げ底の底部である。1465・1466は器台。1467は高環か台付き鉢の脚部である。

出土遺物より、本貯蔵穴の構築時期は弥生時代中期後半に比定される。



第7-87図 S K 305実測図 (1/40)

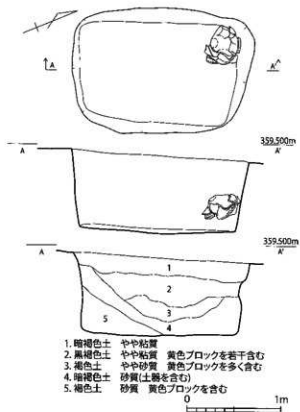


第7-88図 S K 305出土遺物実測図

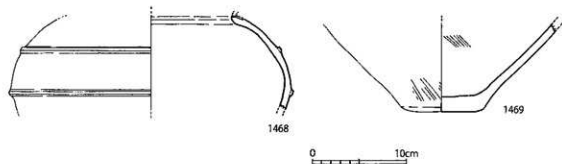
(19) S K306

S K306は、S H90の東にある貯蔵穴である。南北に主軸をもち、平面形は長方形で、長軸1.9m、短軸1.3mである。検出面からの深さは80cmで、床面は平坦である。側壁はほぼ垂直に立っている。遺構内の埋土はレンズ状の自然堆積で、第7-89図の4層から遺物が出土している。

1468・1469は壺で、丸みを帯びた底部から広く開いた胴部へと続き、2条の三角突帯を張った胴は丸い。これらの遺物より、S K306の構築時期は弥生時代中期後半である。



第7-89図 S K306実測図 (1/40)



第7-90図 S K306出土遺物実測図

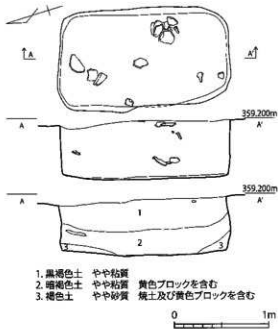
(20) S K 307

S K 307は、S K 306の東約5mにある貯蔵穴で、S K 306同様に南北方向に主軸をもち、平面形は長方形を呈している。長さ1.8m、幅1.1m、深さ0.65mの大きさである。御壁は垂直に立ち、床面は平坦である。

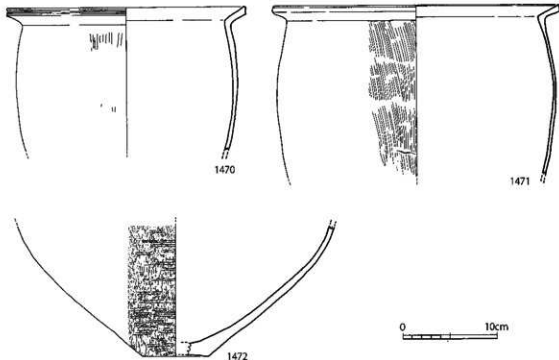
遺構の埋土はレンズ状の自然堆積となっており、遺物は上層からの出土である。

1470・1471は比較的胴の張らないタイプの「く」字状口縁の甕である。1471は強く屈折する口縁をもつ。いずれも外面に縦方向のハケ目を施す。その復元口径は29.8cmである。1472は比較的薄手の甕の平底か。外面に横方向のミガキを施したのち、赤色顔料を塗布している。

これらの遺物より、S K 307の構築時期は弥生時代中期後半である。



第7-91図 S K 307実測図 (1/40)

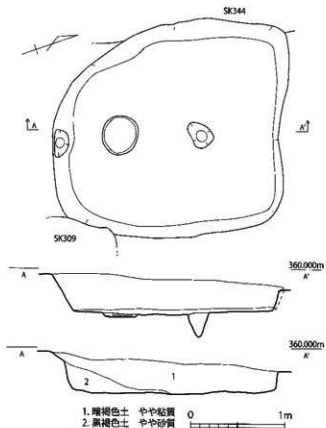


第7-92図 S K 307出土遺物実測図

(21) S K 308

S K 308は、S H 91の南5 mに位置し、平坦地に立地する貯蔵穴である。平面形は西角が崩れた方形である。その規模は南北2.4m、東西2.4mである。遺構の深さは検出面から0.45mである。側壁は北側は垂直に立ち、南側は緩やかに立つ。床面はほぼ平坦で、そこから1本の柱穴を確認した。その深さは25cmである。

遺物は床面から浮いた状態で、若干出土したが、図示するまでのものはなかった。

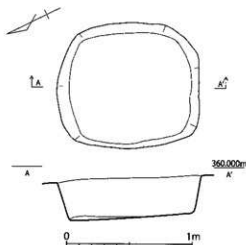


第7-93図 S K 308実測図 (1/40)

(22) S K 309

S K 309は、S K 308の東隣で接する貯蔵穴で、構築時期はS K 309→S K 308である。南北に主軸をおく隅丸方形を呈している。その規模は南北1.4 m、東西1.1mである。検出面から床面までの深さは0.35mである。床面はほぼ平坦であり、柱穴等の施設は確認できなかった。

遺物は若干出土したが、図示するまでのものはなかった。



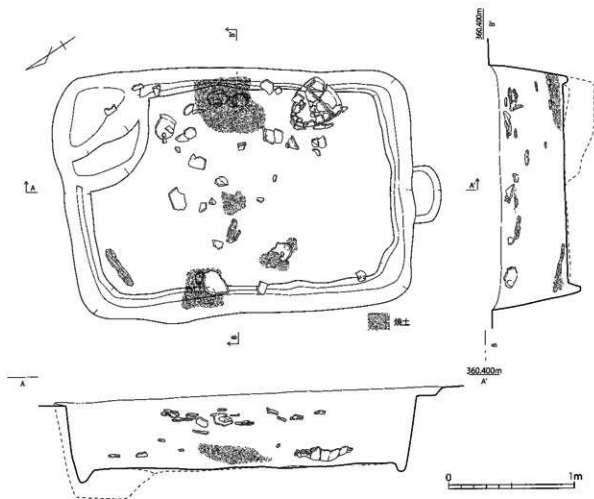
第7-94図 S K 309実測図 (1/30)

## (23) S K 310

S K 310は、S B 10と重なって検出した貯蔵穴である。規模は南北2.70m、東西2.0mで、平面形は長方形を呈している。検出面からの深さは0.7mで、床面はほぼ平坦である。側壁はほぼ垂直に立ち、その側壁に沿って、幅20cm、深さ15cmの周溝が確認された。北東角には深さ30cmほどの土坑が掘られる。

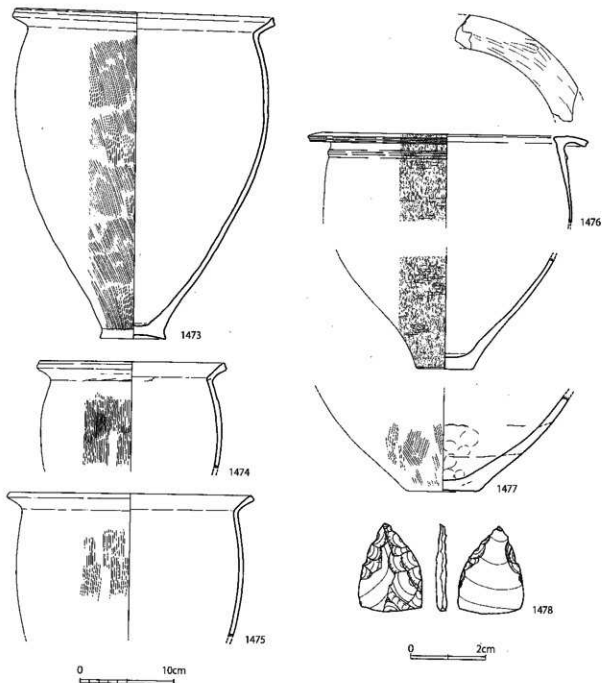
1473～1475は「く」の字状口縁の甕で、胴は張らないものである。そのうち1473は口径27.4cm、器高34.2cmで上げ底を呈する。1474は外面にハケ目調整を施す。頸部屈折部に工具痕を残す。1476は鋤先状口縁の甕である。口縁端部は垂れる。外面にミガキを施した後、赤色顔料を塗布している。1477はその底部で、薄手の平底を呈し、器面調整は1476同様にミガキ、丹塗りがみられる。1478は黒曜石の剥片である。

これらの遺物より、S K 310の構築時期は弥生時代中期後半である。



第7-95図 S K 310実測図 (1/30)





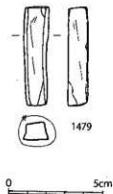
第7-96図 SK310出土物実測図

(24) SK311

SK311は、SK309の南約2mの位置にある貯蔵穴である。規模は南北1.5m、東西0.9mで、平面形は隅丸方形を呈している。側壁は緩やかに立ちあがり、床面までの深さは0.15mである。床面はほぼ平坦である。

土器は細片のみの出土で、図示できるものはなかった。1479は天草石の砥石である。小ぶりな物で携帯して使用した物か。

弥生土器が出土しており、周辺の貯蔵穴同様、弥生時代中期後半のものと考えられる。



第7-97図 SK311  
出土物実測図

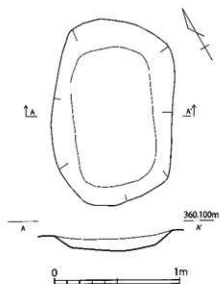
## (25) S K 312

S K 312はS K 311の東隣で検出した貯蔵穴である。平面形は隅丸方形で、個の規模は南北2.0m、東西2.5m、深さ0.4mである。側壁は垂直に立ち上がり、その壁に沿って、幅15cm、深さ10cmの削溝が巡っている。床面は平坦である。

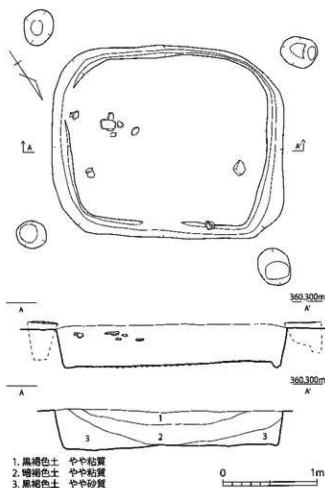
本遺構は方形遺構の各コーナーから0.4～0.5m外方に柱穴がみられ、柱穴の深さは40cm～55cm、柱間は南北2.3m、東西2.9mである。ここに柱を立てて貯蔵穴上に覆屋を設置したと考えられる。

出土遺物は床面から浮いた状態で少量確認できた。1480は口縁端部を緩くつまみ上げる「く」の字口縁の寛で、胴部は張らず直線的に伸びる。復元口径は28.1cmを測る。1481はM字突帯を貼り付けた壺の胴部で、外面にミガキを施した後、赤色顔料を塗布している。1482は壺の厚手の底部。1483は姫島産黒曜石製の石鎌で、二等辺三角形を呈し、基部に深い抉りをもつ。

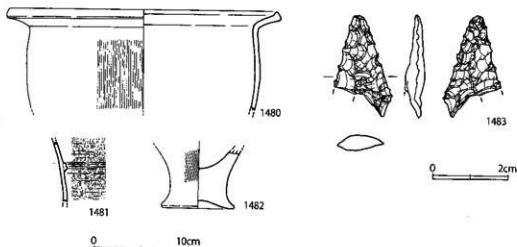
出土遺物より、S K 312は弥生時代中期後半に比定される。



第7-98図 S K 311実測図 (1/30)



第7-99図 S K 312実測図 (1/40)



第7-100図 SK312出土遺物実測図

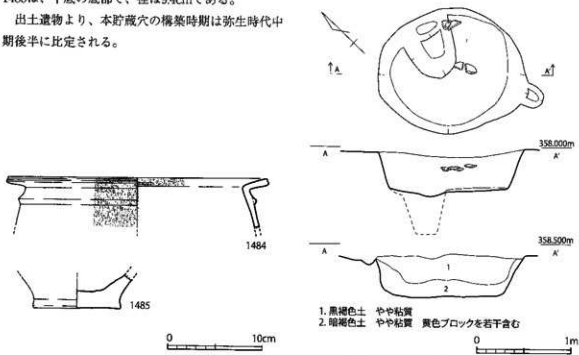
(26) SK313

SK313は、本調査区中央部北端で見つかった貯蔵穴である。平面プランは楕円形で、その規模は南北1.5m、東西1.35mで、平面形は隅丸方形を呈している。側壁は緩やかに立ち上がり、土坑の深さは検出面から0.4mである。床面はほぼ平坦で、北側で深さ45cmの柱穴1点を検出した。

遺構内の埋土は自然地積を示しており、土器等の遺物は廃絶後に遺構が埋まって行く段階で流入したものと考えられる。1484は強く屈折する「く」の字状口縁の甕で、口縁下部に三角突帯を1条巡らす。丁寧なナデを施した後、赤色顔料を塗布する。復元口径は27.8cm。

1485は、平底の底部で、径は9.4cmである。

出土遺物より、本貯蔵穴の構築時期は弥生時代中期後半に比定される。



第7-101図 SK313実測図 (1/40)・出土遺物実測図

- 1. 黒褐色土 やや粘質
- 2. 暗褐色土 やや粘質 黄色ブロックを若干含む

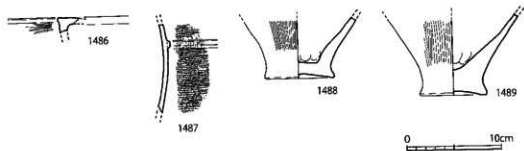
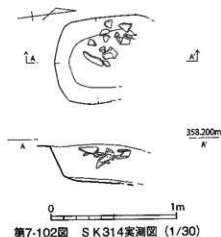
## (27) SK314

SK314は、SK313の東約2mで確認された貯蔵穴である。その大きさは南北0.9m以上、東西0.7mで、平面形は楕円形を呈している。側壁は緩やかに立ち上がり、検出面から床面までの深さは0.35mである。

土器・石器等の遺物は廃絶後に遺構が埋まっていく段階で廃棄・流入したものと考えられる。

出土遺物は廃絶後に遺構が埋まっていく段階で廃棄・流入したものである。1486は鋤先状口縁を呈した甕か。内面にミガキ調整を施す。1487はM字突帯を貼り付けた壺の胴部で、外面にミガキを施した後、赤色顔料を塗布している。底部は上げ底を呈し、内部に指圧痕、外面に縦方向のハケ目が見られる。

これらの遺物より、SK314の構築時期は弥生時代中期後半である。

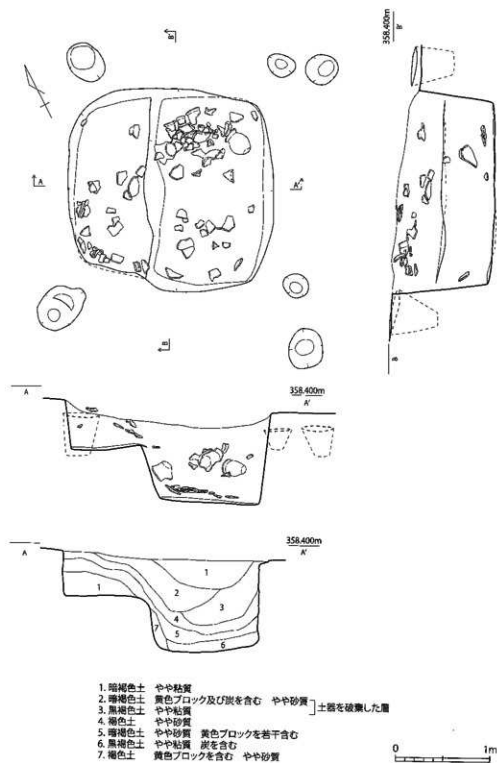


## (28) SK315

SK315は、本調査区中央の北端にある貯蔵穴で、その平面形は、隅丸方形を呈している。規模は南北2.1m、東西2.25mである。床は北半が検出面から0.55mの深さで、南半はそこからさらに0.55m下がった位置にある。平坦な床面をもつ。本遺構は方形遺構の各コーナーから0.55～0.9m外方に柱穴がみられ、柱穴の深さは30cm～55cm、柱間は南北2.1m、東西2.25mである。ここに柱を立てて貯蔵穴上に覆屋を設置したと考えられる。

土器・石器等の遺物は廃絶後に遺構が若干埋まった段階で多量に廃棄・流入したものであった。1490・1491は壺の胴部である。1490は胴の中位に最大径をもつ器形で、外面に横方向のミガキを施した後、赤色顔料を塗布し仕上げている。1491は2条の三角突帯を貼り付けた壺の胴部である。1492は厚底の甕の底部。1494は器高22.4cm、口径18.1cmの甕で、胴部が張り、平底を呈する。1493・1498は「く」の字状口縁の甕で、口縁端部をつまみ上げている。1498は器高29.3cm、復元口径は24.8cmを測る。1499は口縁直下に2条の三角突帯を巡らす。器高58.1cm、口径は45.6cm、底部径10.4cmと大型の甕である。1495は高坏で、鋤先状口縁を呈し、内外面ともにミガキを施した後、赤色顔料を塗布している。1496は器台で内面に指圧痕、外面に縦方向のハケ目をもつ。

これらの遺物より、SK315の構築時期は弥生時代中期後半である。



第7-104図 S K315実測図 (1/40)



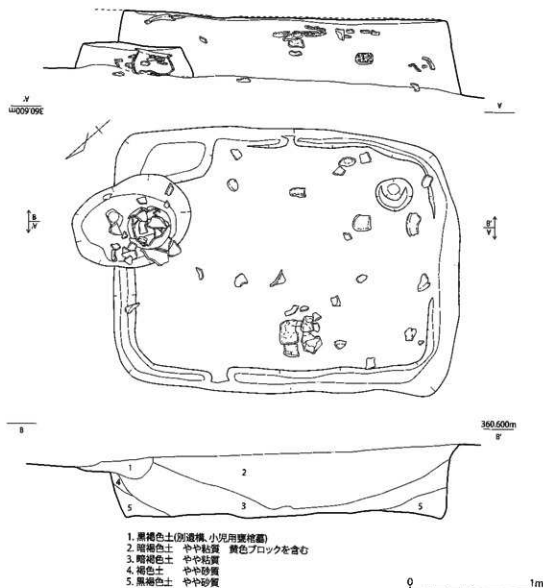
第7-105図 SK315出土実物実測図

(29) S K 316

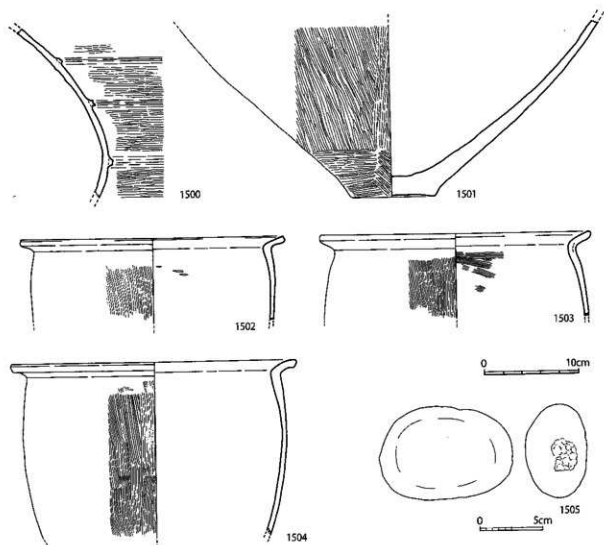
S K 316は、本調査区中央部の南側で確認した貯蔵穴である。その大きさは南北2.75m、東西2.1m、床面までの深さは0.50mで、平面形は隅丸方形を呈している。平坦な床面をもち、側壁はほぼ垂直に立ち、その側壁に沿って、幅25cm、深さ10cmの周溝が確認された。北東角には浅い落ち込みがあり、南西隅付近では浅い柱穴を検出している。貯蔵穴の規模及び周溝、北東角の落ち込みがあること等はS K 310と似た構造である。北辺の上部は小児用甕棺S K 351に切られている。

土器・石器等の遺物は廃絶後に遺構が若干埋まった段階で多量に廃棄・流入したものである。1500・1501は壺で、外面にミガキ調整を施す。1500には肩から胴部にかけてM字状突帯を3条貼り付ける。1502～1504の壺は「く」の字状口縁を呈するもので、胴は張らない。1502・1503は口縁端部を若干つまみ上げる。1505は敲石で側面に敲き痕を残す。

出土遺物より、本貯蔵穴の構築時期は弥生時代中期後半に比定される。



第7-106図 S K 316実測図 (1/30)



第7-107図 S K316出土遺物実測図

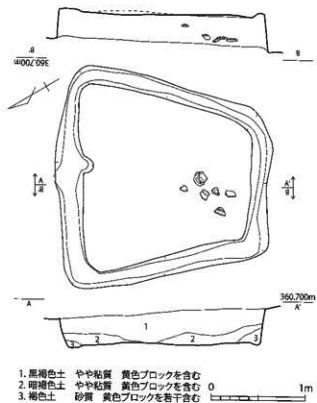
## (30) S K317

S K317は、S K316の南西約3mの位置で確認された貯蔵穴である。その規模は南北2.25m、東西2.3mである。平面形は台形を呈している。検出面から床面までの深さは0.4mである。壁面は垂直に立ち、床面は平坦である。側壁に沿って、全周に溝が巡っている。幅は最大で30cm、深さ10cmである。土器・石器等の遺物は腐絶後に遺構が埋まって行く段階で廃棄・流入したものと考えられる。

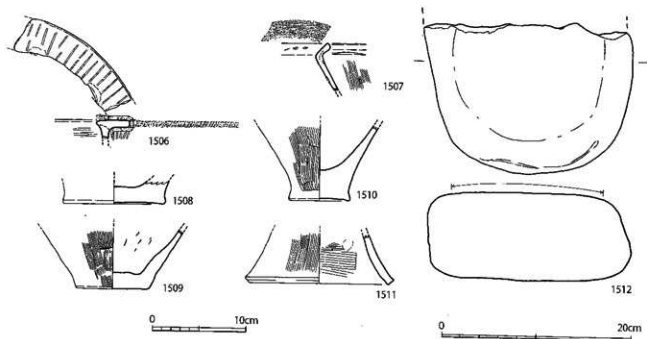
鋤先状口縁を呈する甕の口縁部で、両面にミガキが見られる。口縁上面にも丁寧なミガキを施す。1507は口縁が短く外反する甕で、口縁内部に刺突が見られる。1508・1509は平底、1510は厚底の底部。1511は裾の開く器台で、内面に横方向のハケ目調整を行う。1512は磨石である。

これらの遺物より、S K317の構築時期は弥生時代中期後半である。





第7-108図 SK 317実測図 (1/40)



第7-109図 SK 317出土遺物実測図

## (31) SK318

SK318は、SH93の南約5mに位置する貯蔵穴である。平面形は、東西方向に主軸のある隅丸方形を呈している。大きさは長軸1.1m、短軸0.85mである。側壁は緩やかに立ち上がり、床は平坦である。柱穴等の施設は確認できなかった。

遺物は、床面から若干浮いた状況で出土した。遺構の規模の割に出土遺物は多い。

1513は壺の胴部で2条の三角突帯を貼る。1514～1520は「く」の字状口縁の甕で、外面にハケ目がある。そのうち、1516は若干胴が張るタイプ、1517は内外面に赤色顔料を塗布している。1514・1520は口縁端部をつまみ上げている。

出土遺物より、本貯蔵穴の構築時期は弥生時代中期後半に比定される。

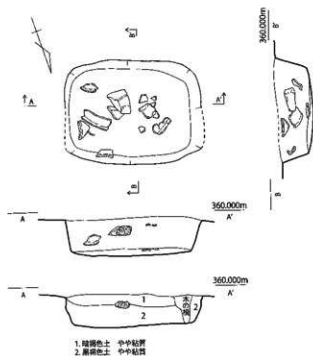
## (32) SK319

SK319は、調査区中央部の南端にあり、SK317の約10m南東に位置する貯蔵穴で、その立地はほぼ平坦である。平面形は、南北にやや長い隅丸方形を呈している。大きさは長軸2.4m、短軸2.0mで、深さ0.4mである。側壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面はほぼ平坦に作られている。床には3方で壁に沿った溝が掘られていた。遺物は遺構全体から出土しているが、その大半が埋まっていく段階での廃棄または流入である。

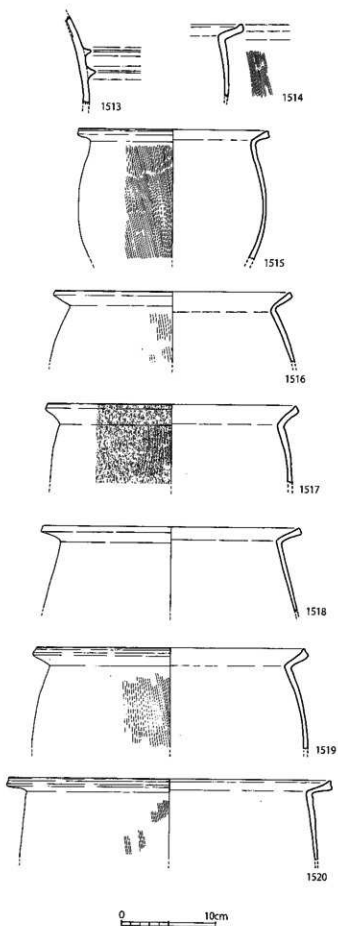
埋土はレンズ状の自然堆積となっている。第7-112図に示した遺物は、おもに4層が埋まる段階で廃棄・流入したものである。

1521は直立した頸部から口縁部を強く屈折させた器形の壺である。1522は「く」字状口縁の甕で胴は張らない。1523は球形の胴部をもつ壺で、M字突帯を2条巡らす。1524は平底、1525・1526は上げ底の底部である。1527は凝灰質安山岩製の扁平打製石斧である。

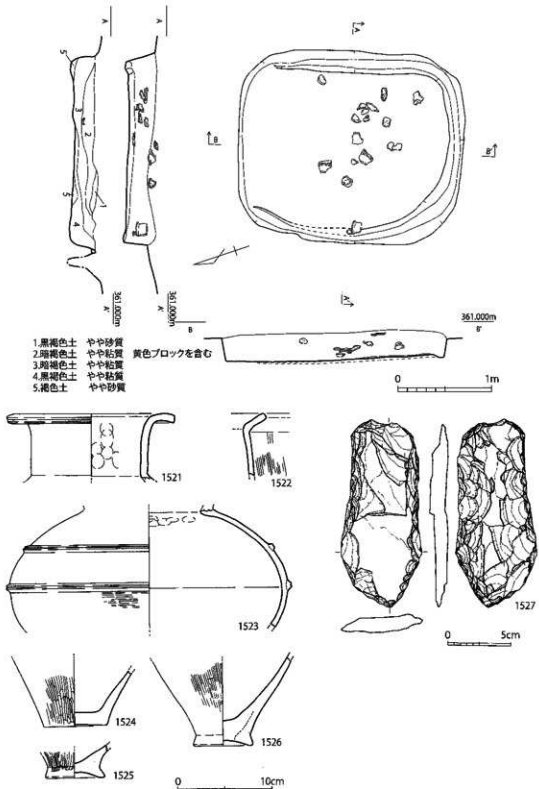
これらの遺物より、SK319の構築時期は弥生時代中期後半である。



第7-110図 SK318実測図 (1/30)



第7-111図 SK318出土遺物実測図

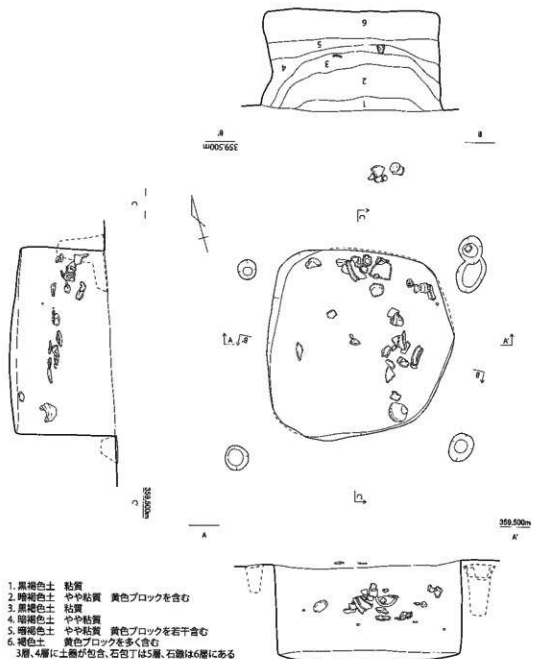


第7-112図 S K 319実測図 (1/40)・出土遺物実測図

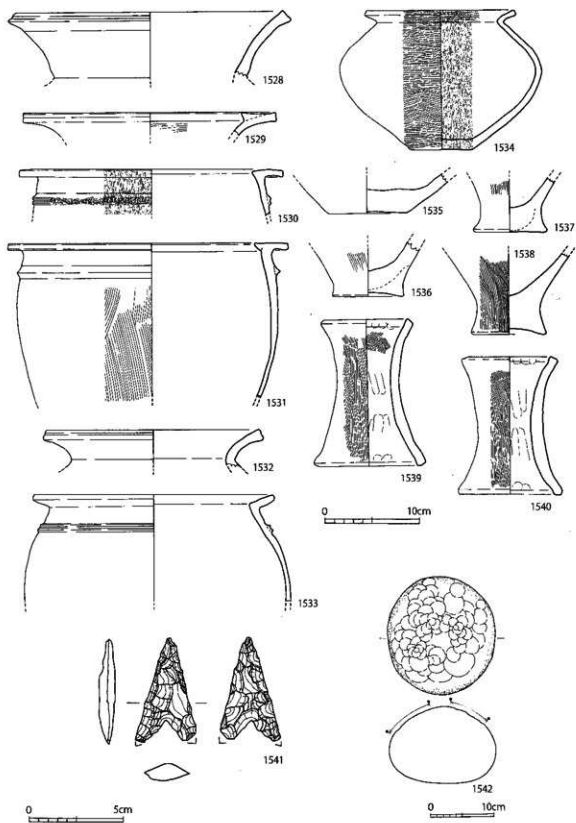
(33) S K 320

S K 320は、本調査区中央部の東寄りで見出した貯蔵穴である。平面形は、不整形円形で東西に長軸をもつ方形を呈している。大きさは2.0mほどである。検出面から床面までの深さは1.0mである。側壁は垂直に立ち、一部フラスコ状に裾が広がる。

本遺構は方形遺構の各コーナーから0.35～0.55m外方に柱穴がみられ、柱穴の深さは20cm～50cm、柱間は南北2.0m、東西2.4mである。ここに柱を立てて貯蔵穴上に覆屋を設置したと考えられる。



第7-113図 S K 320実測図 (1/40)

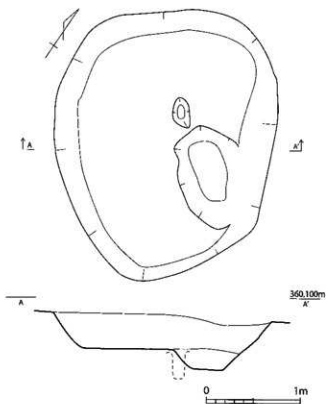


第7-114図 S K 320出土遺物実測図

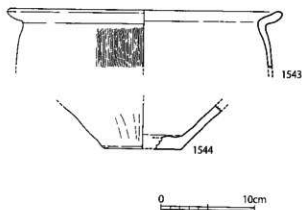
本貯蔵穴は、深さ40cmまでは一気に人為的には埋められ、その後は自然に埋土が堆積していった状況が見取れ、本遺構で出土した遺物の大半は、埋まっていく段階での廃棄または流入である。

遺物は、廃絶後に遺構が埋まっていく段階で多量に廃棄・流入したものである。1528・1529は壺の口縁部である。1528は口縁部が外に向かって開き、1529は端部にかけて水平な鋤先状口縁を呈している。1530・1531の甕も鋤先状口縁を呈するもので、端部にかけてほぼ水平なものである。どちらも胴部上方に突帯を1条巡らす。1530の突帯はM字、1531は三角である。1532・1533は肩の張った胴部に続く「く」字状口縁で、1533はM字状突帯を1条巡らす。1534の鉢は強く屈折するL口縁部をもち、胴は張り、底部は小さな平底である。器面は丁寧な調整が施され、外面にミガキを施した後、赤色顔料を塗布している。1535・1536は平底、1537・1538は厚底である。1539・1540は器台で、両端が開く。1541は姫島産黒曜石製の石鏃で、二等辺三角形を呈し、基部に挟りをもつ。1542は安山岩製の敲石である。

出土遺物より、本貯蔵穴の構築時期は弥生時代中期後半に比定される。



第7-115図 SK321実測図 (1/40)



第7-116図 SK321出土遺物実測図

## (34) S K 321

S K 321は、S H 95の南4mに位置する貯蔵穴である。平面形は楕円形で、長軸1.9m、短軸1.5mである。検出面からの深さは25cmで、床面はほぼ平坦である。床面から柱穴1本と土坑を検出した。遺構内の埋土はレンズ状の自然堆積で、床面から浮いた状態で若干の遺物が出土した。

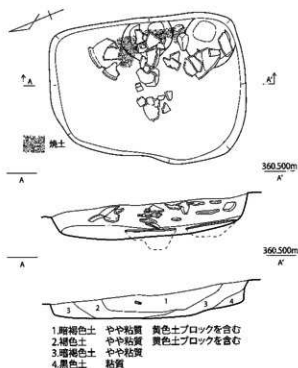
1543強く屈折する「く」字状L線の外面にハケ目を施す。1544の底部は薄い平底である。外面にケズリがみられる。

これらの遺物より、S K 321の構築時期は弥生時代中期後半である。

## (35) S K 322

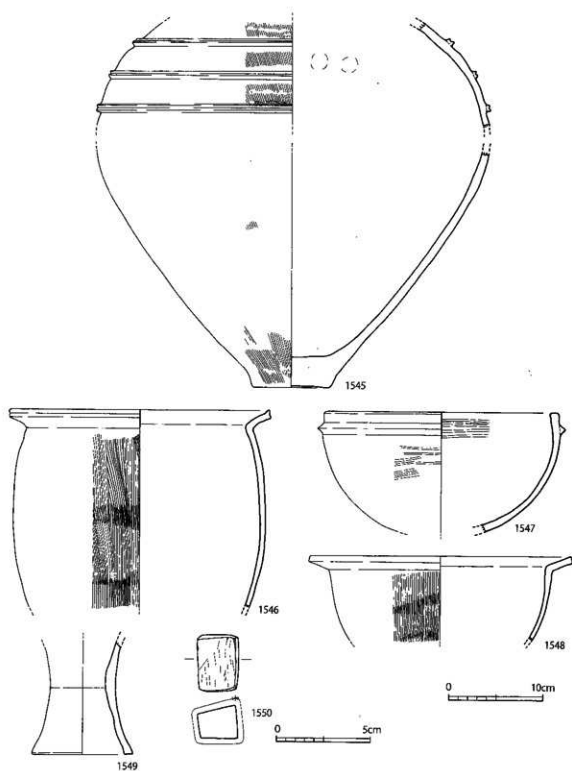
S K 322は、S K 321の南東約7mにある貯蔵穴で、南北方向に主軸をもち、平面形は不整形を呈している。長さ1.6m、幅1.20m、深さ0.3mで、床面はほぼ平坦である。東側から浅い柱穴が2基確認した。その柱穴付近から焼土に混じって土器石器等が出土した。

遺構内の埋土はレンズ状の自然堆積で、第7-117図の4層から遺物が出土した。1545は肩の張った広口壺で底部は比較的厚い。頸部以上を欠損する。肩から胴上部に3条のM字突帯を貼り付ける。復元胴部最大径41.3cm。



第7-117図 S K 322実測図 (1/30)





第7-118図 S K 322出土遺物実測図

外面は横方向のナデの後、縦方向のハケ目を施す。1546は「く」の字状口縁の比較的網の張らないタイプの甕で、口縁端部を少しつまみ上げる。外面は縦方向のハケ目を施す。1547は鉢で、口縁下に三角突帯を巡らす。その体部は丸い。1548は強く外反する口縁をもつ鉢で、外面にハケ目を施す。1549は器台、1550は小型の砥石である。

これらの遺物より、S K 322の構築時期は弥生時代中期後半である。

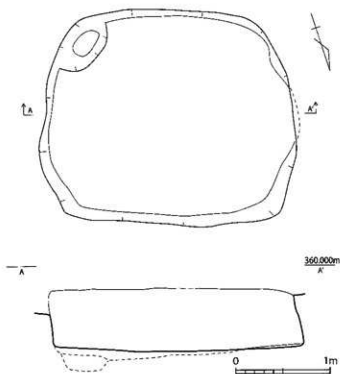
### (36) S K 323

S K 323は、調査区東側にあり、北にS B 11、南にS H 97がある。平面プランは隅丸方形の貯蔵穴である。東西に主軸をもち、東西2.65m、南北2.4mで、検出面から床面までの深さは0.5mである。壁はほぼ垂直に立ち、床は平坦である。北西角で深さ20cmの柱穴を確認した。

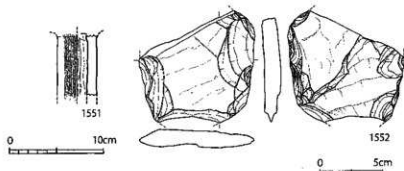
土坑の規模の割に、遺物の出土は多くなかった。

1551は高坏の脚部、内面にしほり痕、外面に縦方向のミガキと赤色顔料が確認できる。1552は凝灰質安山岩製の扁平打製石斧である。

出土遺物は少ないが、これらより、S K 323の構築時期は弥生時代中期後半と考えられる。



第7-119図 S K 323実測図 (1/40)



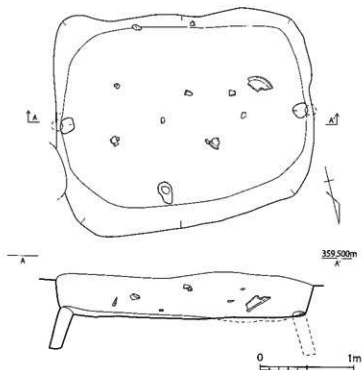
第7-120図 S K 323出土遺物実測図

(37) S K 324

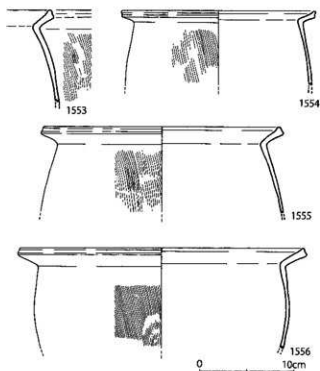
S K 324は、S B 11の北東に位置する貯蔵穴である。平面形は隅丸方形で、規模は東西2.7m、南北2.4mで、検出面から床面までの深さは0.6mである。側壁は、東西は垂直に近く立ち上がるが、南北壁は緩やかに立ち上がる。床面の東西端から深さ50cmの主柱穴が2本検出されたが、柱を建てると、どちらも内側に傾斜するような角度である。遺物は床から浮いた状態で出土している。

遺物は貯蔵穴廃絶後、廃棄・流入したことが伺える。1553～1556はいずれも「く」の字状口縁の甕で、口縁端部をつまみ上げ、縦方向のハケ目を施す。1543・1545は比較的胴の張った甕である

これらの遺物より、S K 324の構築時期は弥生時代中期後半である。



第7-121図 S K 324実測図 (1/40)

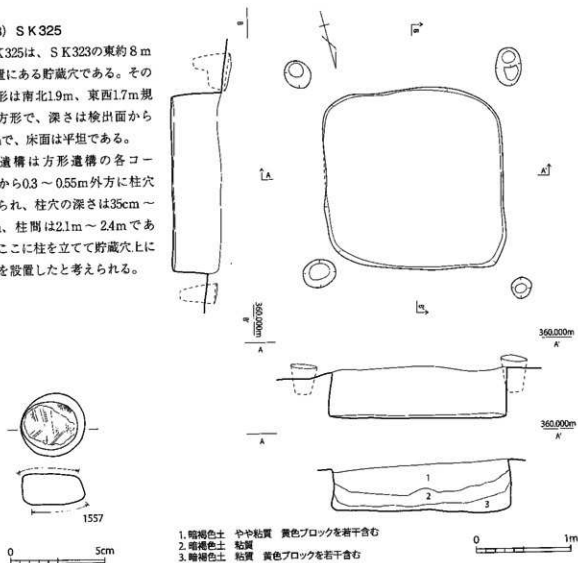


第7-122図 S K 324出土遺物実測図

## (38) S K 325

S K 325は、S K 323の東約8mの位置にある貯蔵穴である。その平面形は南北1.9m、東西1.7m規模の方形で、深さは検出面から0.55mで、床面は平坦である。

本遺構は方形遺構の各コーナーから0.3～0.55m外方に柱穴がみられ、柱穴の深さは35cm～50cm、柱間は2.1m～2.4mである。ここに柱を立てて貯蔵穴上に覆屋を設置したと考えられる。



第7-123図 S K 325実測図 (1/40)・出土遺物実測図

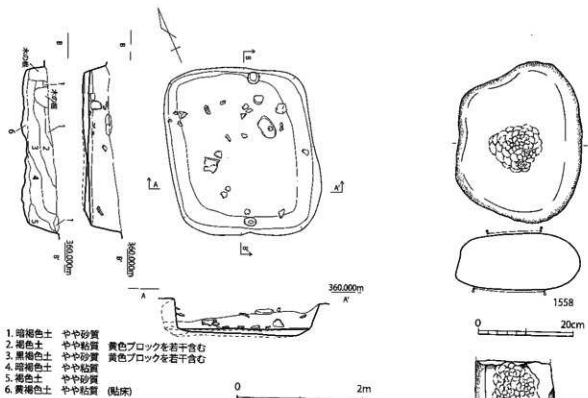
遺構内の埋土はレンズ状の自然堆積で、床面から浮いた状態で若干の遺物が出土したが、土器で図示できるものはなかった。1557は石製品である。

出土遺物が少なく、構築時期は断定できないが、周辺で確認された同規模・同形態の貯蔵穴の時期を考慮すれば、S K 325は弥生時代中期後半に比定される。

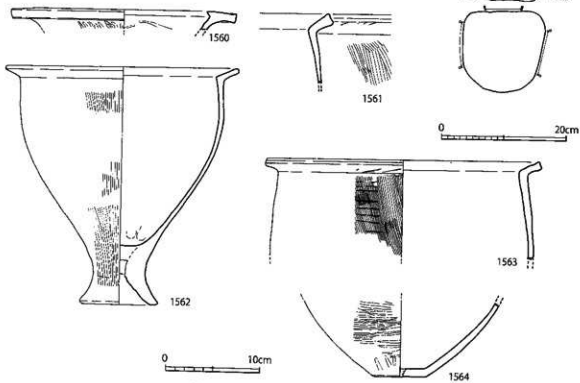
## (39) S K 326

S K 326は、S K 325の東約5mの位置にある貯蔵穴である。南北に主軸をもち、その規模は南北2.7m、東西2.3mで、平面プランは隅丸方形である。その深さは検出面から0.50mで、床面はほぼ平坦に作られている。床面の南北中央部から各1基ずつ浅い穴を検出した。主柱穴か。

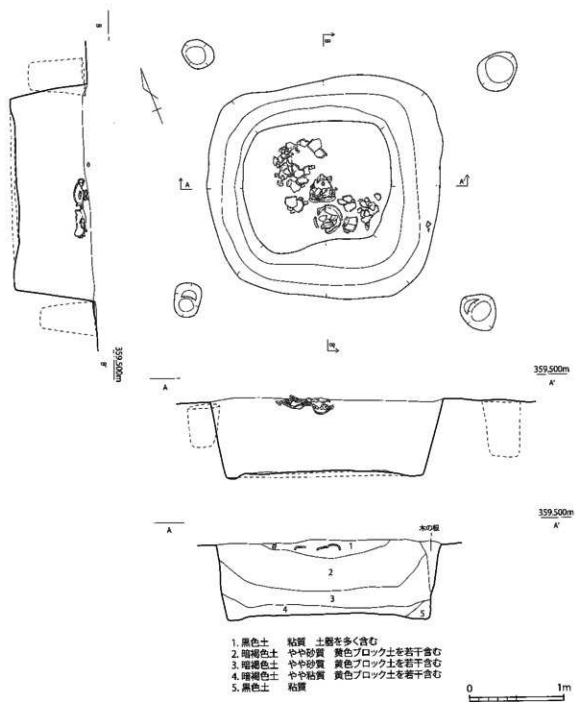
遺物は、遺構全面で床面から若干浮いた状態で検出していること、埋土の堆積が、レンズ状の自然堆積を呈していることから、廃絶後に遺構が埋まる段階で廃棄または流入したものとする。1558・1559は敲石である。1560は鋤先状口縁の甕で、復元口径は17.8cmを測る。内外面にミガキが確認できる。1561・1563は「く」の字状口縁の甕で、胴部は比較的張っていない。縦方向のハケ目を施す。1562は「く」字状口縁をもつ台付き鉢で、台との接合箇所には円盤充填が確認できる。器高25.0cm、口径24.4cmである。1564は比較的薄手で、甕の底部か。出土遺物より、S K 326は弥生時代中期後半に比定される。



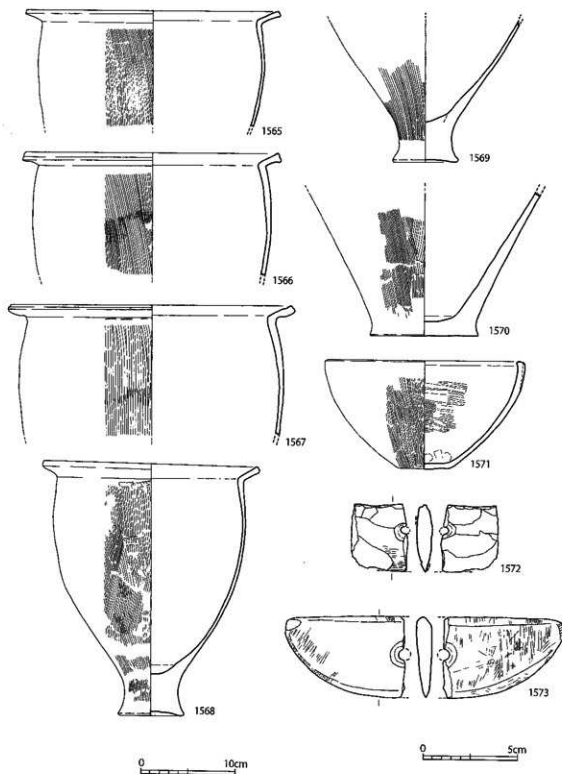
第7-124図 S K 326実測図 (1/60)



第7-125図 S K 326出土遺物実測図



第7-126図 SK327実測図 (1/40)



第7-127図 S K 327出土遺物実測図

## (40) SK327

SK327は、SH99の北にある貯蔵穴で、その平面プランは南北2.5m、東西2.6mの隅丸方形で、床面までの深さは検出面から0.85mと深い。側壁はほぼ垂直に立ち、床面はほぼ平坦である。壁に沿って、幅25cm、深さ15cmの側溝が掘られている。

方形遺構の各コーナーから0.5～0.8m外方に柱穴がみられ、柱穴の深さは40cm～65cm、柱間は2.5m～3.1mである。ここに柱を立てて貯蔵穴上に覆屋を設置したと考えられる。

埋土は自然堆積のレンズ状を呈している。遺物はその上層から多量に出土しており、この貯蔵穴がほとんど埋まった段階で一括廃棄されたものと考えられる。

1565～1568は「く」の字の屈折が比較的深い口縁をもつ甕である。口径は、1565が26.6cm、1566が27.0cm、1567が29.6cmである。1568は厚底で上げ底の底部をもつ。外面は縦方向のハケ目調整を施す。器高26.5cm、口径22.6cmである。1569の底部も厚い。1570の底部は平底で、比較的薄手である。1571は鉢形土器で、薄い平底から緩く内湾しながら口縁部へと続く。器高11.4cm、口径21.0cmである。1572・1573は石包丁の欠損品で、いずれも輝緑凝灰岩製で、1か所に両面からの穿孔が認められる。1573の表裏面には製作時のものと思われる痕跡が残る。

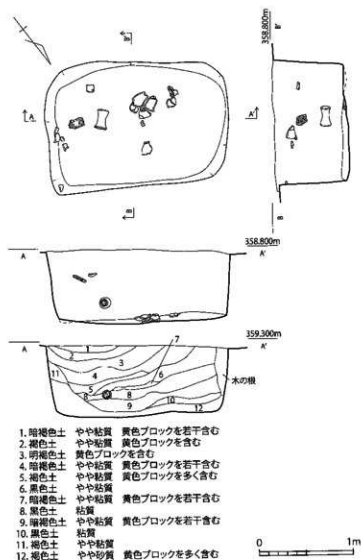
これらの遺物より、SK327の構築時期は弥生時代中期後半である。

## (41) SK328

SK328は、本調査区東部にあるSB12付近で確認された貯蔵穴である。南北1.4m、東西2.0mの大きさで、平面形は隅丸方形である。床面までの深さは、検出面から0.72mである。側壁は垂直に立ち、床面はほぼ平坦である。床面からは柱穴等の施設は確認できなかった。

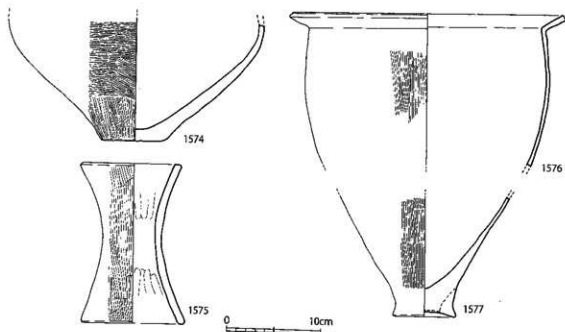
1576・1577は床面直上から出土し、他の遺物は遺構が埋まっていく段階で流入したものである。1574は壺の下半で、平底から胴部にかけて大きく開く。外面の丁寧なミガキを施す。1575は甕台で内面にしぼり、外面は縦方向のハケ目を施す。1576・1577は、「く」の字状口縁の甕で、比較的胴は張らずに底部でしまる。体部は厚手の上げ底を呈す。復元口径は28.4cm、底部径は6.4cmである。

出土遺物より、本貯蔵穴の構築時期は弥生時代中期後半に比定される。



第7-128図 SK328実測図 (1/40)





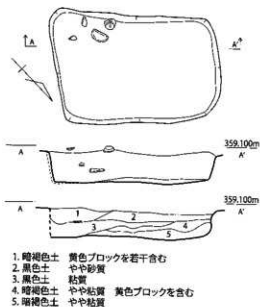
第7-129図 S K 328出土遺物実測図

(42) S K 329

S K 329は、S K 328の北東約3mに位置する貯蔵穴である。平面形は長方形で、その規模は南北1.7m、東西1.45mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、検出面から床面までの深さは0.5mである。床面はほぼ平坦である。床面からは柱穴等の施設は検出できなかった。

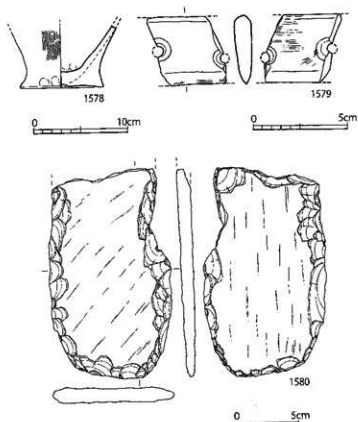
遺物は、床面から浮いた状態で出土している。1578は平底で、外面には指圧痕とハケ目がみられる。1579は輝緑凝灰岩製の石包丁で、両面からの穿孔が2箇所のみられる。片面に製作時のものと思われる痕跡が残る。1580は凝灰質安山岩製の扁平打製石斧である。

これらの遺物より、S K 329の構築時期は弥生時代中期後半である。



1. 暗褐色土 黄色ブロックを若干含む
2. 黒色土 やや砂質
3. 黒色土 粘質
4. 暗褐色土 やや粘質 黄色ブロックを含む
5. 暗褐色土 やや粘質

第7-130図 S K 329実測図 (1/30)



第7-131図 SK329出土遺物実測図

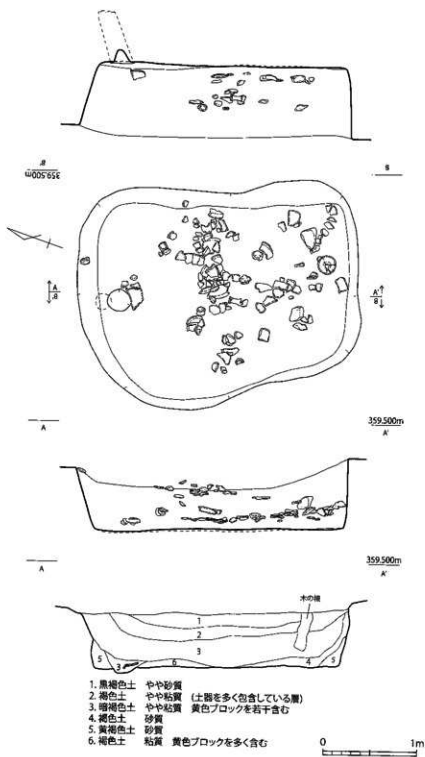
## (43) S K 330

S K 330は、調査区の東部にあるSB12と4号周溝墓の間で検出した貯蔵穴である。その規模は、3.0m、東西2.35mで、平面形は不整形を呈している。床面はほぼ平坦である。その深さは検出面から0.75mと深い。側壁はほぼ垂直に立ち、床面はほぼ平坦である。北中央部の床面から斜めに掘られた柱穴を1本検出している。深さはおよそ60cmである。

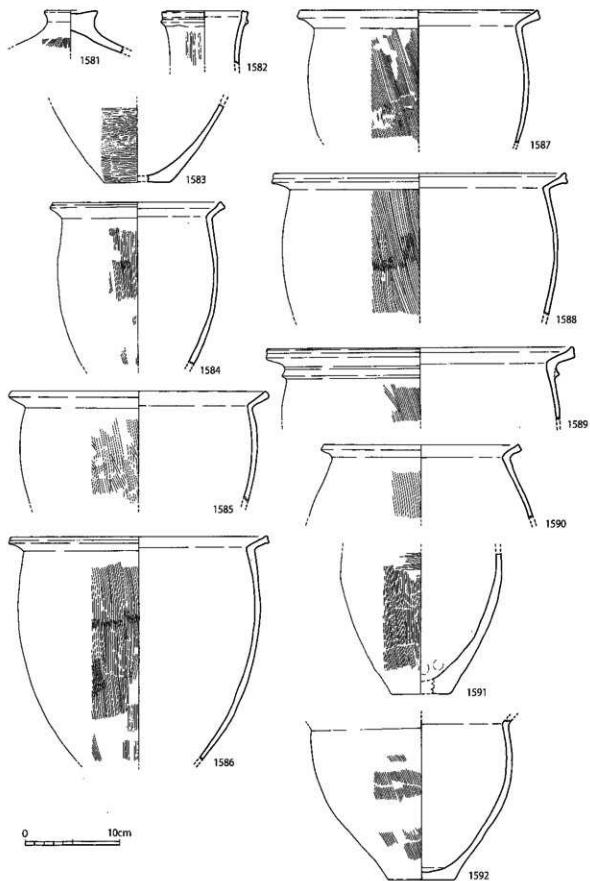
遺物は多量に出土しているが、そのほとんどが床から若干浮いた状態で出土しており、遺構が埋まっていく段階で廃棄・流入したものと考える。

1581はつまみの径が5.4cmの壺で、ハケ目調整を行う。1582は長頸壺で、緩く外反する口縁直下に三角突帯を貼り付ける。復元口径は8.0cmである。1583は比較的薄い平底で、外面に横方向のミガキがある。1584～1592は壺である。1584・1587・1588は口縁端部をつまみ上げる壺で、胴は張らずに下に伸びる。1589は口縁の屈折部に三角突帯を貼り付ける。1590は胴が張るタイプ。1593・1594は平底で、薄手のもの。1596～1598は厚手の上げ底である。そのうち1598は特に厚い。1599は器台、1600・1601は高坏の坏身である。1600は深い坏部で、坏身の底から口縁部にかけて緩やかに内湾する。1601は平坦な鋤先状口縁を呈する。復元口径は18.0cmである。1603は高坏の脚部で、外面に縦方向のハケ目と丹塗り、内面に紋り裏を残す。1604は敲石、1605は凝灰岩製の扁平打製石斧である。1606は磨石であるが、一部敲き痕を残す。

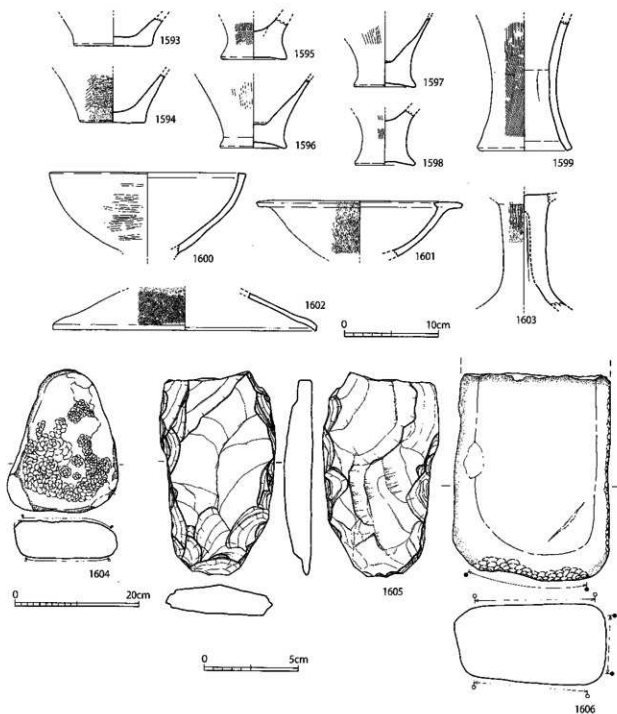
出土遺物より、S K 330は弥生時代中期後半に比定される。



第7-132図 SK330実測図 (1/40)



第7-133図 S K 330出土遺物実測図①



第7-134図 S K 330出土遺物実測図②

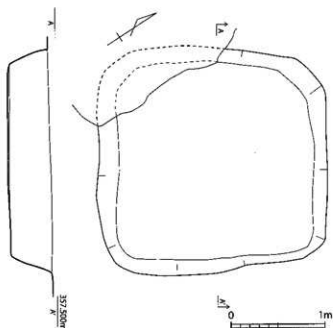
(44) S K 331

S K 331は、4号周溝墓内で見つかった貯蔵穴である。規模は南北2.1m、東西2.1mで、平面形は隅丸方形を呈している。側壁はほぼ垂直に立ち、深さは検出面から0.65mである。床面はほぼ平坦である。

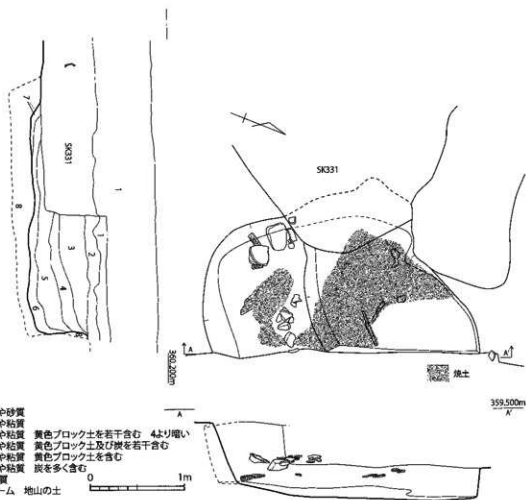
遺物は若干出土したが、図示するほどのものはなかった。

(45) S K 332

S K 332はS K 331同様、4号周溝墓内で検出した貯蔵穴である。その規模は東西2.4m、南北2.0m以上である。北半は調査区外となっている。平面形は隅丸方形である。床は南半が一段高くなっており、検出面から床面までの深さは0.75mで、北半は0.85mの深さであった。柱穴等の施設は確認できなかった。



第7-135図 SK331実測図 (1/40)

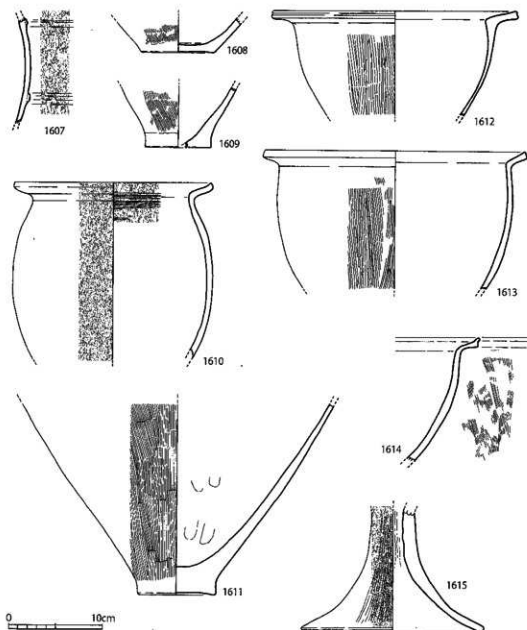


- |         |                      |
|---------|----------------------|
| 1. 暗褐色土 | やや砂質                 |
| 2. 暗褐色土 | やや粘質                 |
| 3. 暗褐色土 | やや粘質 黄色ブロック土を若干含む    |
| 4. 褐色土  | やや粘質 黄色ブロック土及び炭を若干含む |
| 5. 淡褐色土 | やや粘質 黄色ブロック土を含む      |
| 6. 淡褐色土 | やや粘質 炭を多く含む          |
| 7. 黄褐色土 | 砂質                   |
| 8. 黄色土  | ローム 地山の土             |

第7-136図 SK332実測図 (1/40)

埋土はレンズ状の自然堆積を示している。出土遺物は床面から浮いた状態で確認した。1607は壺の胴部で、2条のM字突帯を張り、赤色顔料を塗布している。1608・1609は比較的薄手の平底である。1610の壺は強く屈折する口縁をもち、胴部は楕円形を呈している。頸部内面に横方向のミガキ、外面には赤色顔料を塗布する。1611の底部は、若干上げ底を呈し、内面には指圧痕、外面には縦方向のハケ目がみられる。1612はやや鋤先状を呈した口縁をもった鉢で、復元口径は26.2cmである。1614の口縁は端部をつまみ上げる。1615は高坏の脚で、外面には赤色顔料が塗られている。

出土遺物より、S K 332は弥生時代中期後半に比定される。



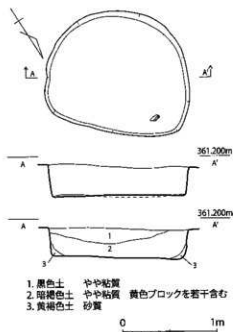
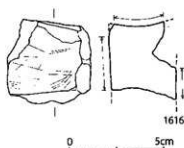
第7-137図 S K 332出土遺物実測図

## (46) S K 333

S K 333は、S H 100の西隣で確認した貯蔵穴である。平面形は円形であり、側壁は垂直に立つ。規模は長軸1.5m、短軸1.3mでの大きさである。検出面から床面までの深さは0.4mで、床面はほぼ平坦である。床面からは、柱穴等は確認できなかった。

出土遺物は床面から浮いた位置で少量確認できたが、土器で図示できるものはなかった。1616は砂岩製の砥石である。

遺物が少ないが、土器の細片は弥生時代のものである。



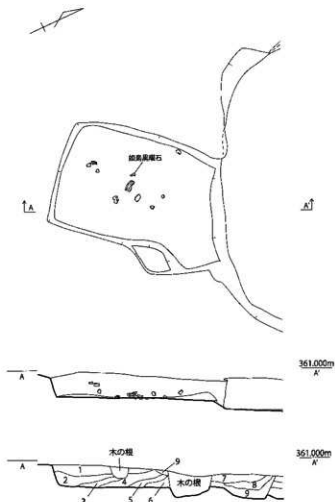
第7-138図 S K 333実測図 (1/40)・出土物実測図

## (47) S K 334

S K 334は、本調査区の東部、5号周溝の西10mの位置で確認された貯蔵穴である。南北方向に主軸をもち、その大きさは南北2.4m、東西1.2mで、平面形は長方形を呈している。側壁はほぼ垂直に立ち上がり、検出面からの深さは0.25mである。床面はほぼ平坦で、床面からは浅い柱穴が確認できた。

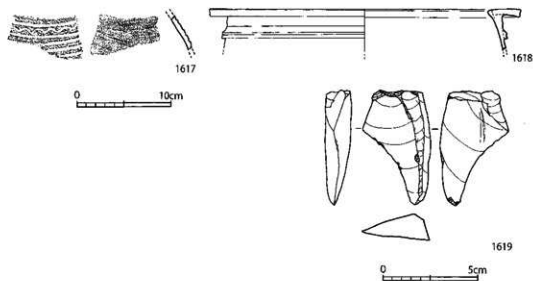
遺物は床面から浮いた状態で出土している。1617は、縄文時代後期の跡である。1618は縄先状口縁の甕で、M字突帯を巡らす。復元口径は32.8cm。1619は蛭島産黒曜石の剥片である。

これらの遺物より、S K 334の構築時期は弥生時代中期後半である。



第7-139図 S K 334実測図 (1/60)





第7-140図 S K 334出土遺物実測図

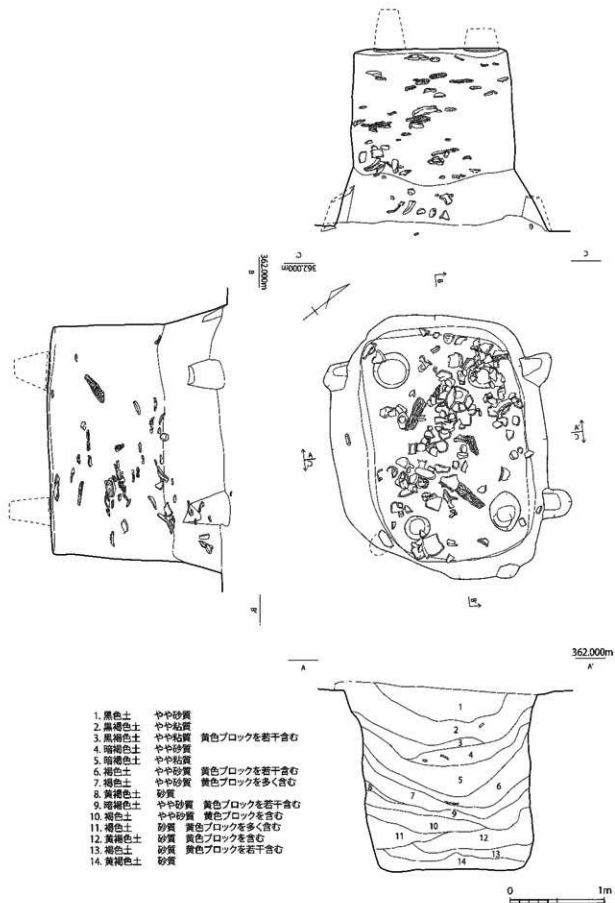
(48) S K 335

S K 335は、S H 107の内部で確認した貯蔵穴である。その平面形は、隅丸方形を呈している。規模は南北2.9m、東西幅2.3mでその深さは1.8mもあった。床面は平坦で、四隅近くに径35cm～50cmの柱穴4本を検出した。その深さは20cm～45cmである。床面から1.5mの高さに、主軸に直行するように掘り込みが4箇所に見られた。木材等何らかの部材を渡していた可能性が考えられる。

床から60cm程は地山の黄色土のアロックを多く含んだ層と含まない層が交互に堆積しており、人為的に埋めたとと思われる。その中から炭化した木質や土器が出土している。それより上の層はレンズ状の自然堆積を示しており、そこからも多量の土器・石器等が出土している。

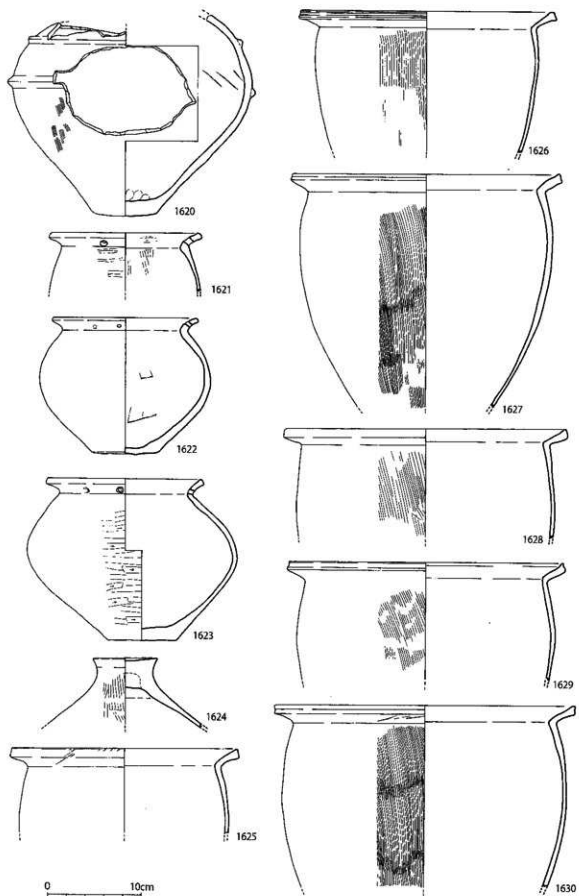
1620は肩の張った壺で、頸部以上を欠く。胴部と肩部に計2条の三角突帯を貼り付ける。底部は、やや丸みを帯びた平底である。胴中央部には打ち欠いたとみられる筒所が確認された。1621～1623は口縁部が強く屈曲する鉢で、胴は張る器形である。器高は14.3cm～17.0cm、口径は15.2cm～16.2cmである。いずれも口縁部に穿孔を施しており、1621は1か所、1622・1623は2か所確認できた。外面調整は横方向のミガキを施す。1624は壺で、つまみの内部には粘土の充填がみられた。1625～1638は「く」の字状口縁の甕で、その口径は20.4cm～31.6cmほどである。そのうち1625～1632は比較的胴が張らないタイプの甕で、外面には縦方向のハケ目を施す。また1629・1631は口縁端部をつまみ上げる。1632は器高37.5cm、口径30.4cmを測る。1633～1635は口縁部下に三角突帯を貼り付けるもので、胴部は比較的丸い。そのうち1635は口縁端部をつまみ上げる。1636～1638は胴部が丸く張る器形の甕で、1638は器高30.8cm、口径25.8cmを測る。1639～1644は底部で、1639は薄い平底から胴部にかけて大きく開き、外面に横方向のミガキを施すことから、壺の底部と考える。1642は外面に篋ケズリ痕があり、1644は内面に指圧痕、外面にハケ目がみられる。1645は小形の鉢で、内外面にケズリ、ハケ目を施す。1646は台付き鉢で、台の接合部に円盤充填がみられる。1647は鋤先状を呈した高坏の坏身で、端部は若干垂れる。復元口径は21.0cmである。1648～1650は器台で、内面にしぼり、ケズリ、指圧痕がみられる。1651は高坏の脚で、外面に縦方向のミガキを施した後、赤色顔料を塗布する。1652は磨製石斧で大部分が欠損している。1653・1654は砂岩製の砥石。1655～1657は砥石。

これらの遺物より、S K 335の構築時期は弥生時代中期後半である。

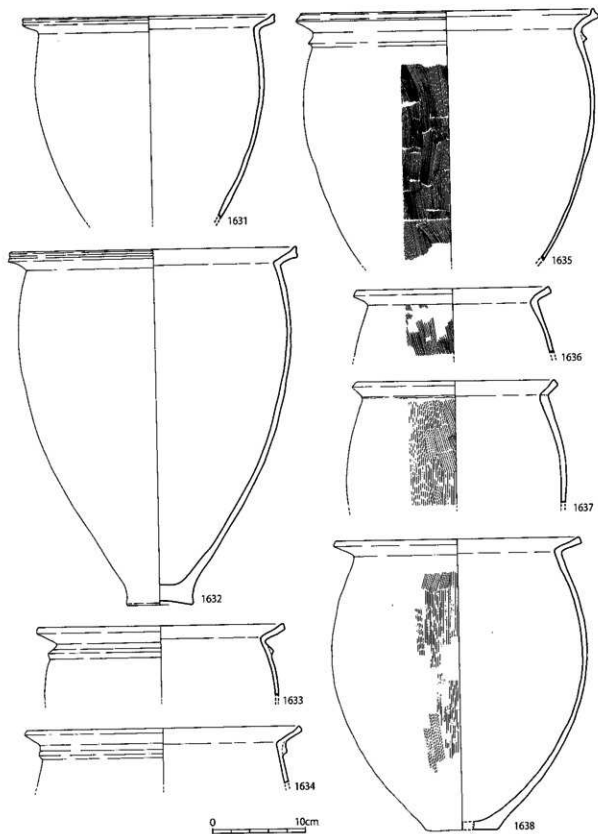


- |          |      |             |
|----------|------|-------------|
| 1. 黒色土   | やや砂質 |             |
| 2. 黒褐色土  | やや粘質 |             |
| 3. 黒褐色土  | やや粘質 | 黄色ブロックを若干含む |
| 4. 暗褐色土  | やや砂質 |             |
| 5. 暗褐色土  | やや粘質 |             |
| 6. 褐色土   | やや砂質 | 黄色ブロックを若干含む |
| 7. 褐色土   | やや砂質 | 黄色ブロックを多く含む |
| 8. 黄褐色土  | 砂質   |             |
| 9. 暗褐色土  | やや砂質 | 黄色ブロックを若干含む |
| 10. 褐色土  | やや砂質 | 黄色ブロックを含む   |
| 11. 褐色土  | 砂質   | 黄色ブロックを多く含む |
| 12. 黄褐色土 | 砂質   | 黄色ブロックを含む   |
| 13. 褐色土  | 砂質   | 黄色ブロックを若干含む |
| 14. 黄褐色土 | 砂質   |             |

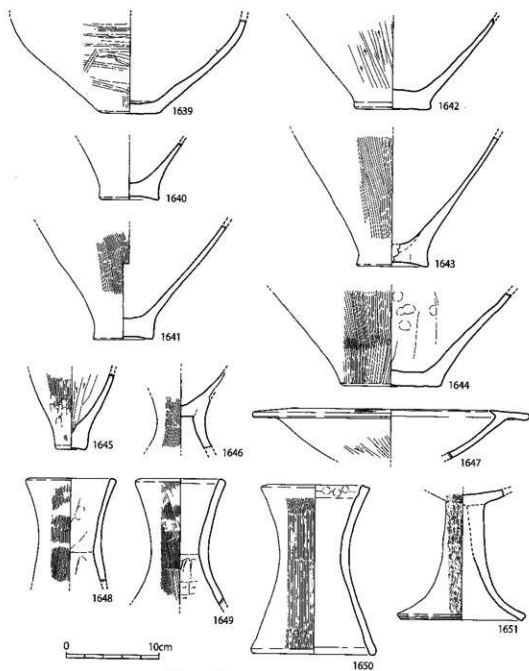
第7-141図 S K335実測図 (1/40)



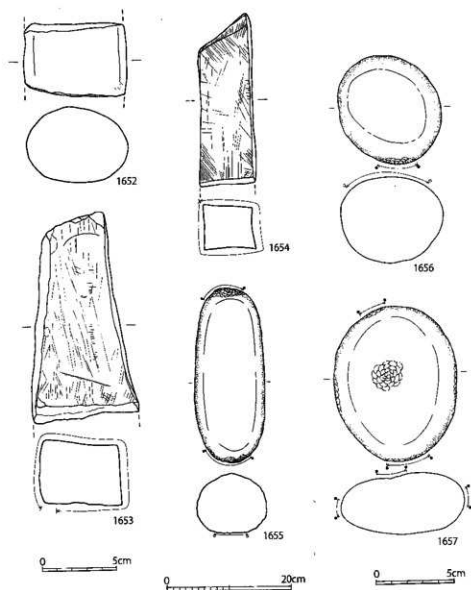
第7-142図 S K 335出土遺物実測図①



第7-143図 S K 335出土遺物実測図②



第7-144図 S K335出土遺物実測図③



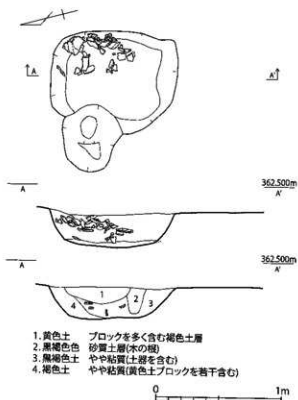
第7-145図 S K 335出土遺物実測図④

(49) S K336

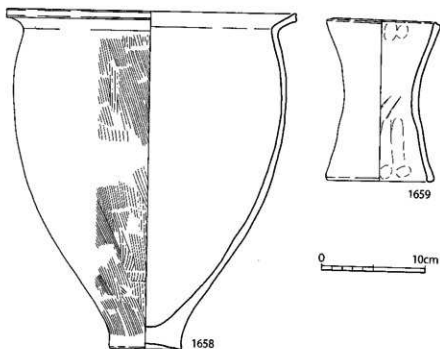
S K336は、本調査区の南部で確認された貯蔵穴で、南北1.0m、東西0.8m、床面までの深さは0.35mで、その平面形は隅丸方形である。平坦な床面をもち、柱穴等の施設は確認できなかった。遺物は遺構が埋まっていく段階に、北東側から廃棄されたものか。

1658は「く」の字状口縁の甕で、比較的胴部が張るタイプである。器高32.4cm、口径は27.8cmである。外面には縦方向のハケ目を施す。1659は器台で、内面にしほり、ケズリ、指圧痕がみられる。器高15.4cm、口径は9.8cmである。

出土遺物より、本貯蔵穴の構築時期は弥生時代中期後半に比定される。



第7-146図 S K336実測図 (1/30)

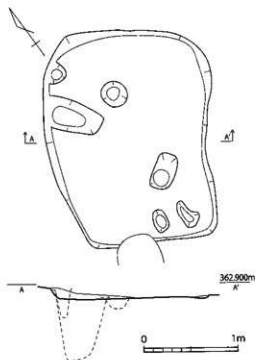


第7-147図 S K336出土遺物実測図

## (50) S K337

S K337は、S K336の南西約8mの位置にある。その規模は南北2.7m、東西1.4mで、不整形の平面形を呈している。検出面から床面までの深さは0.1mと浅い。床面は平坦で、深さ70cmの柱穴を1本検出している。

遺物は床から浮いた状態で数点出土したが、図示できる遺物はなかった。



第7-148図 S K337実測図 (1/40)

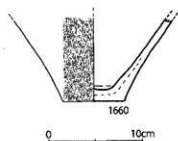
## (51) S K338

S K338は、調査区最南で検出した貯蔵穴で、S K337の南西約10mの位置にある。その規模は南北1.8m、東西1.4mで、隅丸方形の平面形を呈している。検出面から床面までの深さは南側が0.3m、北側が0.2mである。壁面は緩やかに立ち、床面は平坦である。

方形遺構の各コーナーから0.25～0.45m外方に柱穴がみられ、柱穴の深さは20cm～35cm、柱間は1.8m～2.2mである。ここに柱を立てて貯蔵穴上に覆屋を設置したと考えられる。

遺物は床面から浮いた状態で、数点出土した。図示できたのは1点のみである。1660は、平底の底部で、外面には丹塗りがみられた。

出土遺物より、本貯蔵穴の構築時期は弥生時代中期後半に比定される。



第7-149図 S K338出土遺物実測図

## 3 土坑

## (1) S K339

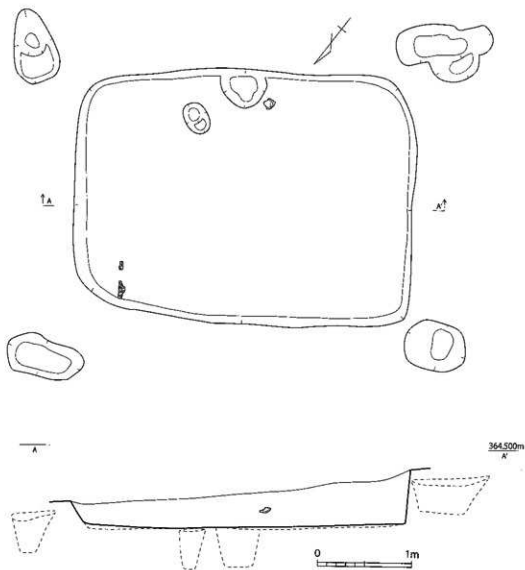
S K339は、調査区の西端でS K289に隣接して検出した土坑である。平面形は、東西に長い楕円形を呈しており、大きさは長軸0.75m、短軸0.6mで、深さ0.2mである。側壁は緩やかに立ち上がり、床面はほぼ平坦に作られている。

第7-151図に示した遺物は、床面に置かれた状態で見つかった。貯蔵穴の上部が削平されていたため、1661も胴部上半を欠いている。

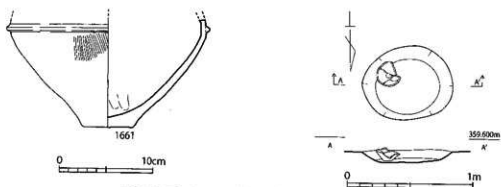
1661は壺で、張った胴部に、突帯を1条巡らす。底部は平底である。内面に指圧痕、外面には突帯下にハケ目を施す。

遺物より、S K339の構築時期は弥生時代中期後半である。





第7-150図 S K 338実測図 (1/40)



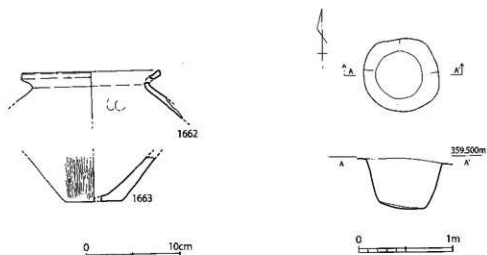
第7-151図 S K 339実測図 (1/30)・出土遺物実測図

## (2) SK340

SK340は、調査区北西部にある土坑である。平面形は円形で、大きさは0.3mである。検出面からの深さは25cmである。側壁はゆるやかに立ちあがる。遺物は床から浮いた状態で出土した。

1662は強く屈折する口縁をもち、肩は張る鉢形土器ある。口縁部に穿孔を施している。1663は比較的薄い平底で、外面に縦方向のミガキを施す。

出土遺物より、本貯蔵穴の構築時期は弥生時代中期後半に比定される。

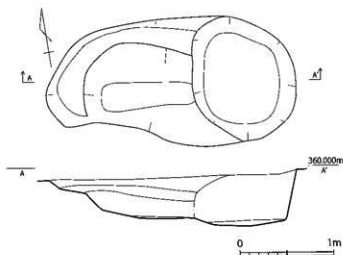


第7-152図 SK340実測図 (1/40)・出土遺物実測図

## (3) SK341

SK341は、調査区の南西部で確認した土坑で、西にSB9がある。平面形は東西方向に主軸をもつ楕円形で、長軸2.7m、短軸1.5mである。検出面からの深さは50cmで、床面は西から東に下っている。

遺構内の埋土はレンズ状の自然堆積で、床面から浮いた状態で、若干の遺物が出土したが、図示するほどのものはなかった。



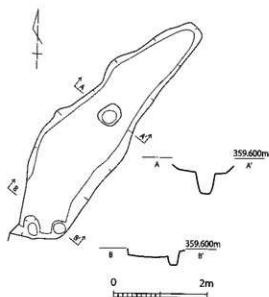
第7-153図 SK341実測図 (1/40)

(4) S K 342

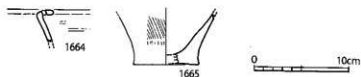
S K 342は、調査区最西で確認した土坑で、平面形は長楕円を呈している。長さ4.7m、幅1.8m、深さ0.2mで、床面は平坦である。床面からは浅い柱穴を2本検出した。

1664は口縁が強く外反する鉢また甕で、口縁部穿孔を1か所開いている。外面には横方向のミガキを施す。1665は平底の底部、外面に縦方向のハケ目を有する。

出土遺物より、本貯蔵穴の構築時期は弥生時代中期後半に比定される。



第7-154図 S K 342実測図 (1/80)



第7-155図 S K 342出土遺物実測図

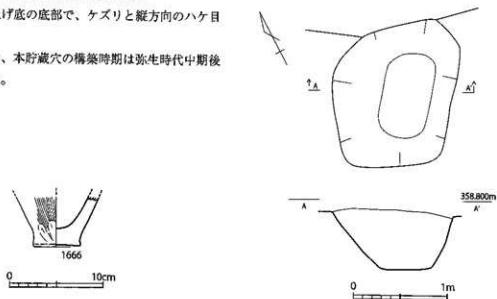
(5) S K 343

S K 343は、S K 292の東約8mの位置にある土坑である。平面形は南北0.5m、東西0.4mの楕円の不整形で、深さは検出面から0.3mである。側壁は緩やかに立ち、床面はほぼ平坦である。

標土の堆積はレンズ状で自然堆積を示しており、遺物は遺構廃絶後に中間まで埋まった段階で流入したものである。その出土遺物は第7-156図に示した。

1666は若干上げ底の底部で、ケズリと縦方向のハケ目を施す。

出土遺物より、本貯蔵穴の構築時期は弥生時代中期後半に比定される。



第7-156図 S K 343実測図 (1/40)・出土遺物実測図

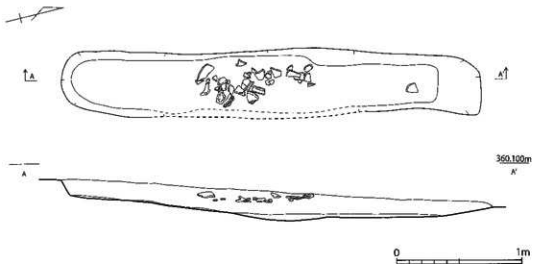
## (6) SK344

SK344は、調査区の中央付近で検出した土杭で、SK308に隣接している。南北に長い土杭で、南北3.4m、東西0.6mの大きさである。床面は南が若干高い。その深さは検出面から0.35mと浅い。

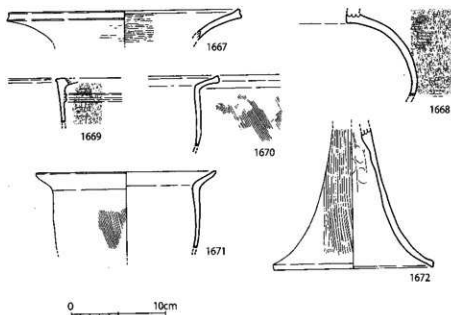
第7-157図に示した遺物は、土杭が少し埋まった段階で廃棄されたものである。

1667は外反して大きく開いた口縁を持つ壺である。1668は胴が球状に張った壺で、外面に赤色顔料を塗布する。1669は外面に丹塗りを施した鶴先状口縁を呈した壺で、M字突帯を1条巡らす。1670・1671は胴の張らない壺で、口縁部は強く外反する。1672は長く伸びる高杯の脚部で、内面にしほり、指圧痕で調整し、外面は縦方向のハケ目を施す。

これらの遺物より、SK344の構築時期は弥生時代中期後半である。



第7-157図 SK344実測図 (1/30)



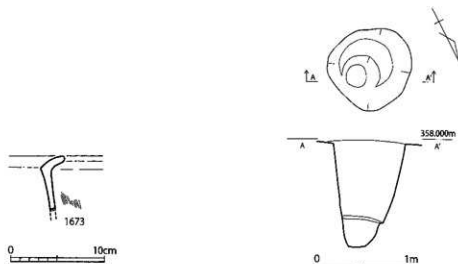
第7-158図 SK344出土遺物実測図

(7) S K345

S K345は、調査区中央の北端に位置する土坑である。土坑は径40cmの円形を呈しており、その深さは55cmである。埋土はレンズ状の自然堆積であり、遺物は遺構が埋まっていく段階で流入したものである。

1673は「く」の字状口縁の甕で、外面に縦方向のハケ目を施す。

出土遺物より、S K345は弥生時代中期後半に比定される。



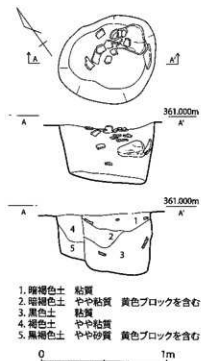
第7-159図 S K345実測図 (1/40)・出土遺物実測図

(8) S K346

S K346は、調査区中央部南端で検出された土坑である。規模は長軸0.8m、短軸0.75mで、平面形は円形を呈している。側壁はほぼ垂直に立ち、深さは検出面から0.45mである。

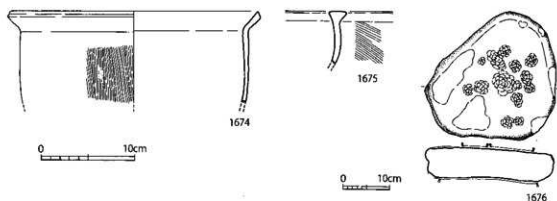
遺物は、浮いた状態で出土した。1674は口縁部が緩く外反する「く」字状口縁の甕である。その復元口径は26.2cmを測る。1675は内湾して口縁部にいたる。その口縁部は肥厚する。1676は安山岩製の台石で、平坦面に敲き痕を残す。

これらの遺物より、S K346の構築時期は弥生時代中期である。



1. 暗褐色土 粘質
2. 暗褐色土 やや粘質 黄色ブロックを含む
3. 黒色土 粘質
4. 褐色土 やや粘質
5. 黒褐色土 やや砂質 黄色ブロックを含む

第7-160図 S K346実測図 (1/30)



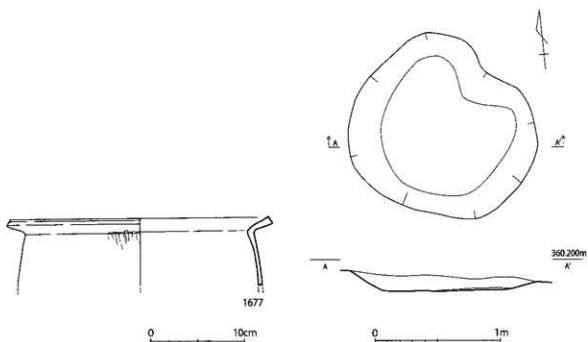
第7-161図 S K346出土遺物実測図

## (9) S K347

S K347は調査区の東にあり、S K326の南東約6mの位置にある土坑である。平面形は南北、東西ともに1.7m規模の不整形で、深さは検出面から0.2mで、床面は平坦である。埋土はレンズ状の自然堆積を示している。

出土遺物は床面から浮いた状態で少量確認できた。1677は「く」の字状口縁の寛で、対面に工具痕がある。復元口径は27.6cmを測る。

出土遺物より、S K347は弥生時代中期後半に比定される。



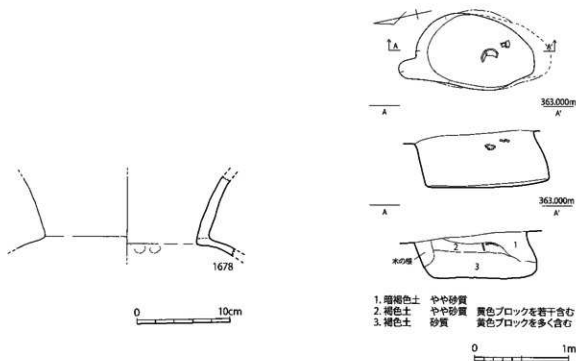
第7-162図 S K347実測図 (1/30)・出土遺物実測図

(10) S K348

S K348は、調査区南で確認した土坑で、SH17の西約20mの位置にある。その規模は南北1.3m、東西0.6mで、平面形は楕円形を呈している。側壁は北側が垂直に立ち、南壁はフラスコ状に裾が開く。検出面からの深さは0.45mである。床面はほぼ平坦である。

土器等の遺物は廃絶後に遺構が埋まって行く段階で流入したものと考えられる。1678は広口壺で、張った肩をもち、口縁部にかけて緩く外反する。

出土遺物より、本貯蔵穴の構築時期は弥生時代中期後半に比定される。



第7-163図 S K348実測図 (1/40)・出土遺物実測図

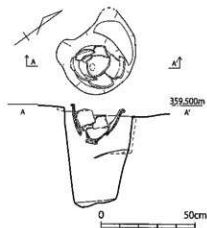
4 小児用甕棺

(1) S K349

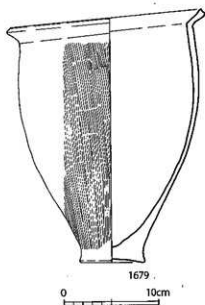
S K349は、調査区西側の平坦部で検出した甕棺墓で、S B8の北約6mの位置で確認した。土坑は円形で、径45cmの規模である。上面は後世の削平を受けていた。

1679の甕は、「く」の字状口縁を呈し、胴部は張らずに底部へと続く。底部はやや上げ底。外面委縦方向のハケ目を施す。器高は25.6cm、復元口径は28.8cmである。

これらの遺物より、S K349の構築時期は弥生時代中期後半である。



第7-164図 S K349実測図 (1/20)



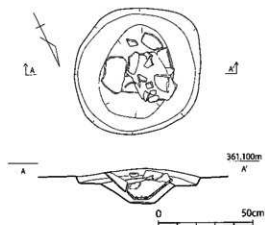
第7-165図 S K 349出土遺物実測図

## (2) S K 350

S K 350は、調査区中央部の南側で確認した妻棺墓である。土坑の規模は長軸0.60m、短軸0.55m、深さ0.15mの円形である。上面の大半を後世に削平されており、甕の底部が置かれた状態で出土した。その内部で数点の遺物が確認できた。遺物は第7-167図に示した。

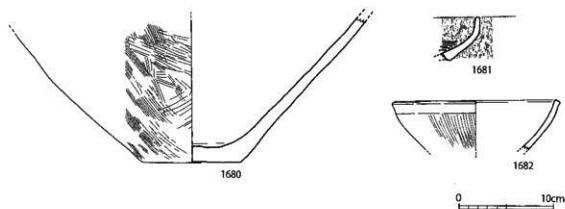
1680は平底の底部で、胴部にかけて大きく開く。その外面には斜め方向にハケ目を施す。1681・1682は浅い鉢である。1681は胴部は直線的に伸び、口縁部で内湾する。内外面に赤色顔料を塗布する。1682は緩やかに内湾する鉢で、復元口径は17.0cmである。

これらの遺物より、S K 350の構築時期は弥生時代中期後半である。



第7-166図 S K 350実測図 (1/20)





第7-167図 S K 350出土遺物実測図

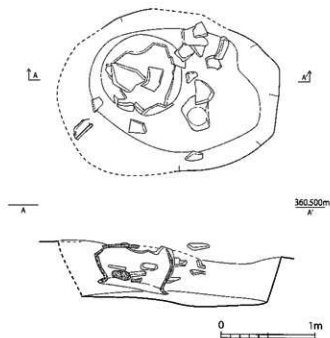
(3) S K 351

S K 351は、S K 350の南約6mの位置にあり、S K 316と接して確認された壔棺墓である。S K 316との重複関係はS K 316→S K 351である。土坑の規模は長軸0.95m、短軸0.7m、深さ0.25mである。壔が口縁部を下にして、伏せた状態で検出した。その内部には土器片や石があった。

1683は、短く外反する口縁部と丸い胴部を持った平底の壔である。器高16.0cm、口径27.6cmである。外面にハケ目調整がみられる。

1685は15cm×20cm大の扁平な石で、蓋として使用していたか。

出土遺物より、本貯蔵穴の構築時期は弥生時代中期後半に比定される。



第7-168図 S K 351実測図 (1/40)

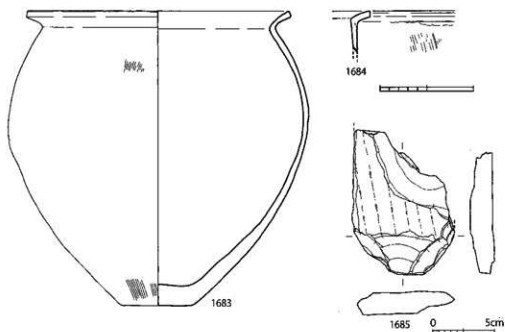
(4) S K 352

S K 352は、調査区南側で検出した壔棺墓

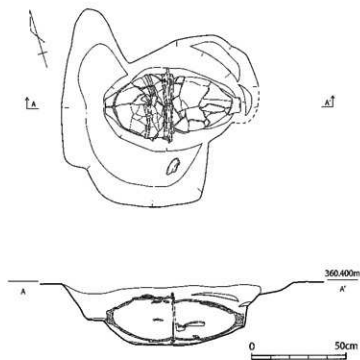
で、S K 351の東約8mの位置で確認した。土坑の規模は長軸1.1m、短軸0.6m、深さ0.35mである。壔を合わせた形で検出した。

1686は西側の壔で、その口縁の形状は鬲先状を呈しており、胴上部と胴中央部にM字突帯を巡らす。口縁上面にはミガキが施されている。また、胴部にもハケ目、横方向のミガキを施した後、赤色顔料を塗布している。器高34.1cm、口径32.8cmを測る。1687は東の壔で、胴部外面にミガキを施している。

これらの遺物より、S K 352の構築時期は弥生時代中期後半である。



第7-169図 SK351出土遺物実測図



第7-170図 SK352実測図 (1/20)

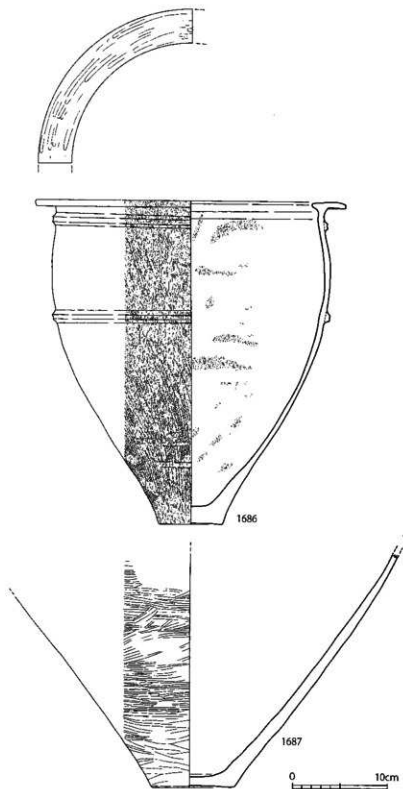
## (5) SK353

SK353は、SK351の東6mに位置する妻柩墓である。土坑は径0.7mの円形で、深さ0.4mである。上面を後世の削平を受けており、壺形土器が1点確認できた。遺物は第7-173図に示した。

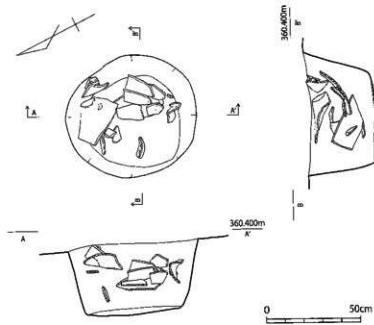
1688は胴下部が膨らむ無形の壺である。口縁直下に1条、胴部最大径の箇所には2条の三角突帯を貼り付ける。

復元口径は14.3cm、胴部最大径は38.0cmである。内面にケズリと指圧痕、外面には縦方向のハケ目を施す。それ以外に甕の口縁部、底部、鉢が出土している。

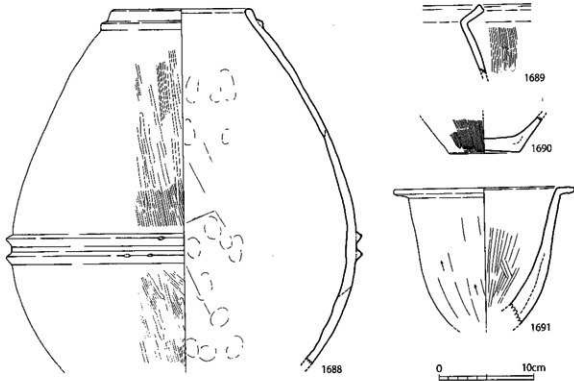
出土遺物より、本貯蔵穴の構築時期は弥生時代中期後半に比定される。



第7-171図 SK352出土遺物実測図



第7-172図 S K 353実測図 (1/20)



第7-173図 S K 353出土遺物実測図

## 5 掘建柱建物

掘立柱建物は、調査区西側で2軒、調査区中央部で1軒、調査区東側で2軒の計5棟を本調査区で確認している。

### (1) SB8

SB8は調査区の西側で確認された掘建柱建物で、平坦地に立地する。その規模は5間×3間で、床面積は526㎡(8.48m×6.20m)である。主軸はN-67°-Wで、内部に棟持ち柱を2本持つ。

柱穴からは弥生土器の細片しか出土しておらず、遺構の構築時期を明確にはできなかった。

### (2) SB9

SB9は調査区の西側で確認された掘建柱建物で、SB8の南東約25mの位置にある。その規模は1間×2間であるが、それぞれの柱間が3.50m～3.86mと広く、その床面積は25.7㎡(7.15m×3.60m)である。SB8とほぼ平行して建っており、主軸はN-31°-Eである。

柱穴からは土器の細片しか出土していないが、実測可能であった土器を、第7-176図に示した。1692は比較的薄手の底部である。1693は外面にハケ目調整を施す器台である。

### (3) SB10

SB10は調査区の中央部で確認した掘建柱建物で、SK310と重なるように検出したものである。切り合い関係はSB10→SK310である。その規模は2間×2間で、床面積は33.4㎡(5.90m×5.62m)である。主軸はN-30°-Eである。

柱穴からは土器の細片しか出土しておらず、遺構の構築時期を明確にはできなかった。

### (4) SB11

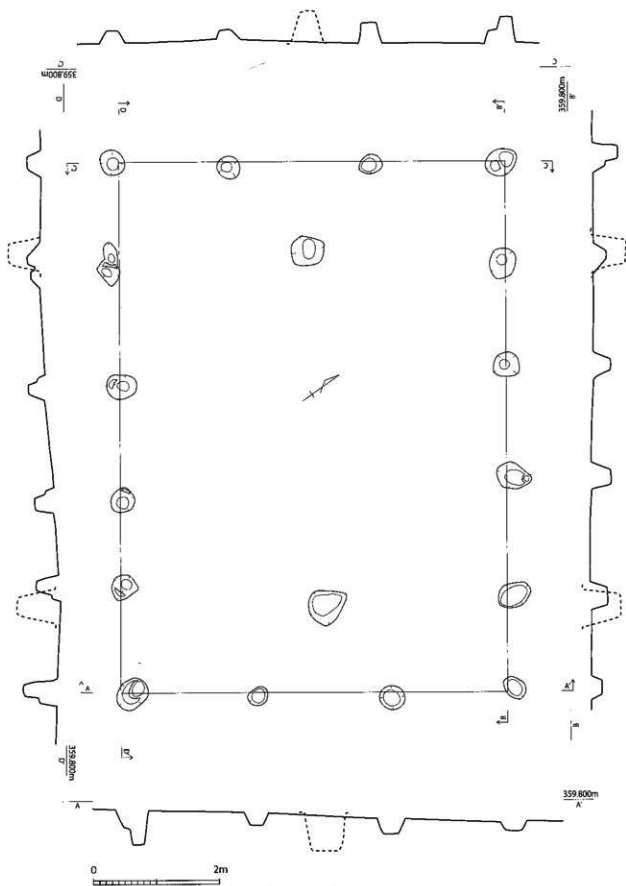
SB11は調査区の東側で確認された掘建柱建物で、SH97の北に位置する。建物の規模は1間×2間で、SB9と同様に、55cm～90cm大の柱穴をもち、それぞれの柱間が3.60m～4.00mと広く、その床面積は27.7㎡(7.70m×3.60m)である。その主軸はN-23°-Eである。

柱穴から出土した遺物を、第7-179図に示した。1694・1695は比較的薄い、平底である。

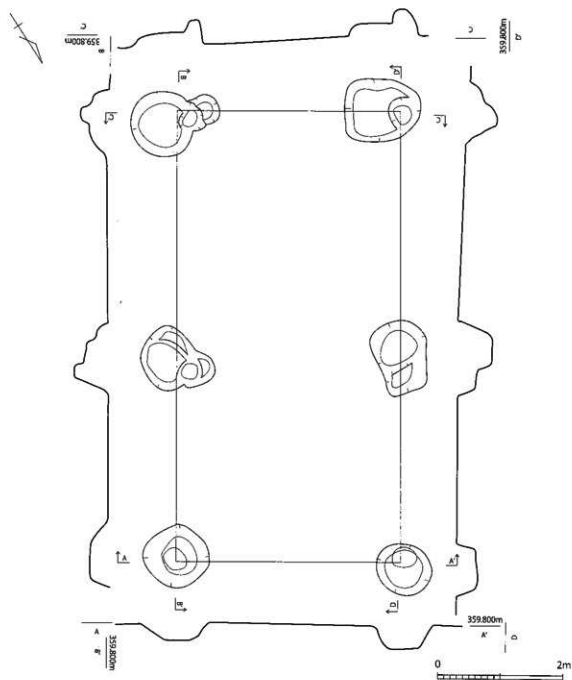
### (5) SB12

SB12は調査区の東端で確認された掘建柱建物である。その規模はSB11同様1間×2間で、床面積は32.6㎡(8.15m×4.00m)である。主軸はN-56°-Eである。それぞれの柱間は広く、4.00m～4.20mである。柱穴からは、第7-181図に示した土器、石器が出土した。

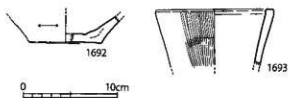
1696は丸い胴部をもつ壺形土器である。緩く外反する口縁部は鋤先状を呈しており、端部まで水平である。肩部に1条のM字突帯を貼り付ける。器面調整は、外面に横方向のミガキを施した後、赤色顔料を塗布している。1697の壺も鋤先状口縁をもつ。1698の底部は薄く、外面には横方向のミガキが確認できる。1699は「く」字状口縁の壺で、胴は張らない。縦方向のハケ目を施す。1700は安山岩製の敲石で、側面に敲き痕を残す。1701・1702の壺は、口縁部が強く屈折するもので、胴部は直線的に伸びる。



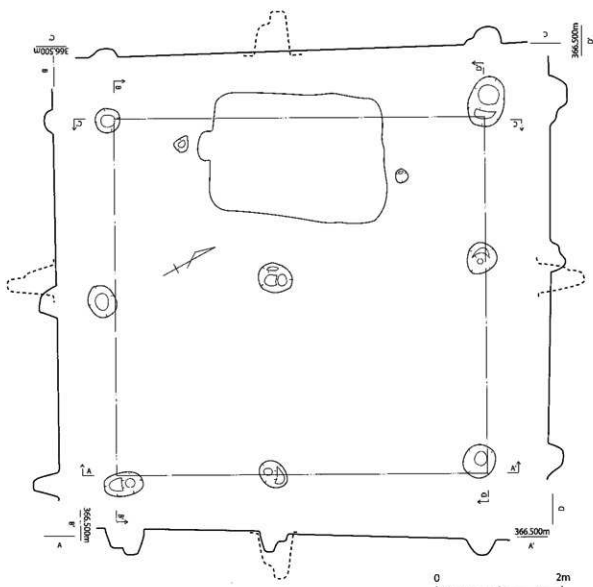
第7-174図 SB8実測図 (1/60)



第7-175図 SB9実測図 (1/60)



第7-176図 SB9出土遺物実測図

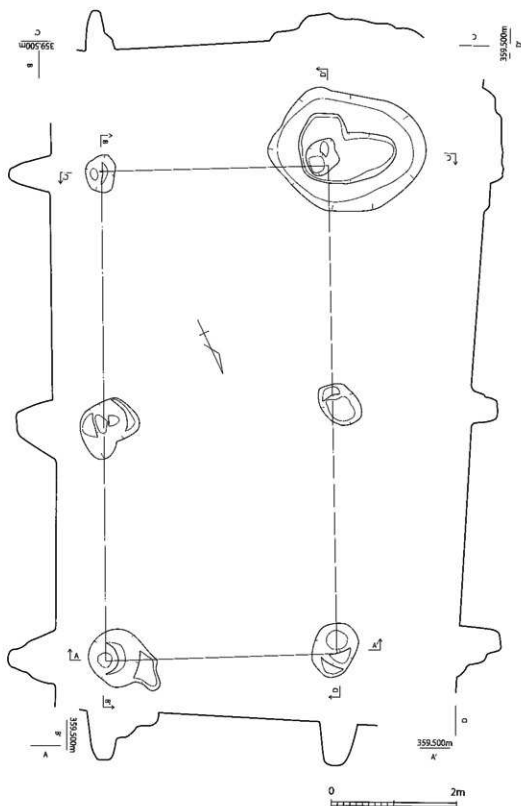


第7-177図 SB10実測図 (1/60)

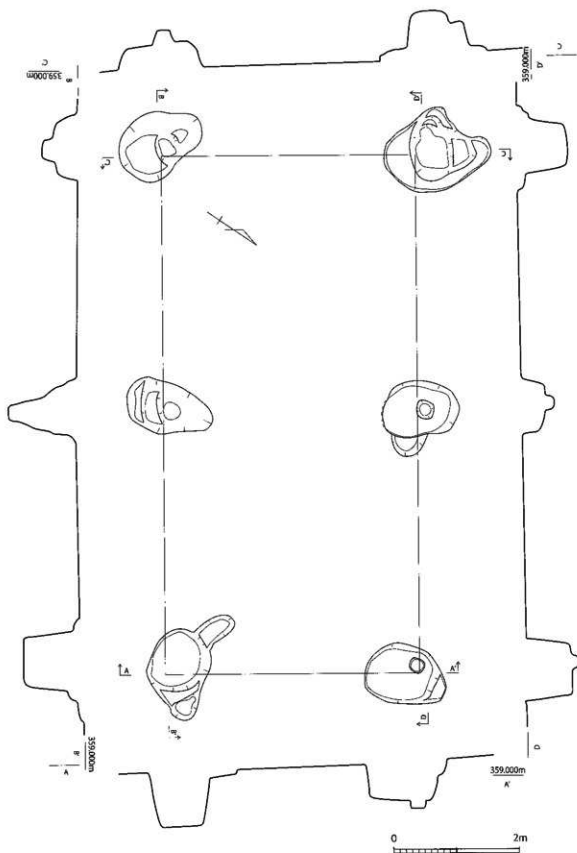


第7-178図 SB11出土遺物実測図

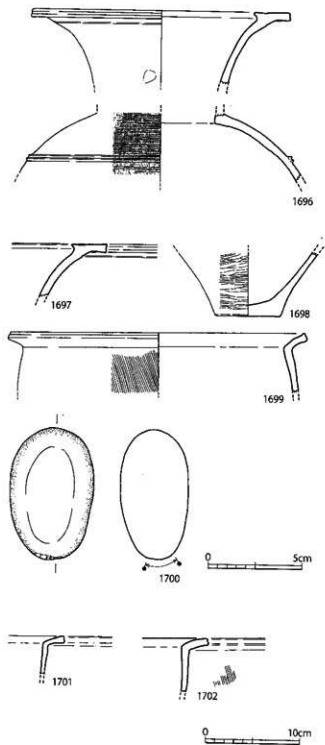




第7-179図 SB11実測図 (1/60)



第7-180図 SB12実測図 (1/60)



第7-181図 SB12出土遺物実測図

## 3. 古墳時代

## 1 周溝墓

本調査区の北東端で3基の周溝墓を検出した。そのうち2基は10m大の方形の周溝をもち、1基は10m程の円形周溝をもつものである。

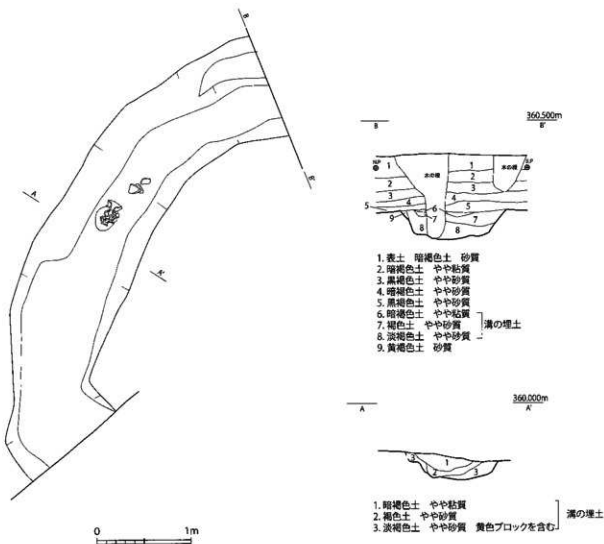
## (1) 3号周溝墓

調査区の北東端、台地上の北西際で検出された円墳である。周溝は北西部が残っているのみで、東側から南側の4分の3は調査区外で確認できなかった。

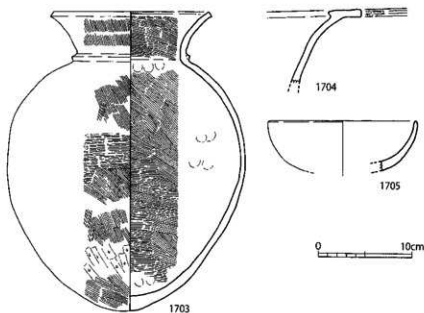
周溝は幅0.8m～1.1mで、深さは0.25m～0.35mである。確認できた周溝は5mほどであるが、残存する周溝の形状から推定すると、周溝は径10m程度の規模をもつと考えられる。周溝から出土した遺物を第7-183図に示した。

1703は鋭く開く口縁に丸く張った胴をもち、九底を呈す。口縁下部に三角突帯を巡らす。外面調整は胴中央部に横方向の平行タタキ、下部に縦方向のケズリが見られる。内面は指圧痕、ハケ目調整を行っている。器高31.4cm、口径16.5cmである。1704は弥生時代中期の鑷先状口縁の甕である。1705は浅い鉢で、復元口径は16.5cmである。

1703より、3号周溝墓の構築時期は古墳時代前期と考える。



第7-182図 3号周溝墓実測図 (1/40)



第7-183図 3号周溝墓出土遺物実測図

## (2) 4号周溝墓

調査区の北東端、すなわち台地の北東際で確認した方墳である。周溝は南半が残っているが、北半は調査区外に広がっている。その規模は東西130m、南北7.0m以上である。周溝の幅は1.2m～1.6mで、深さは0.40m～0.82mである。

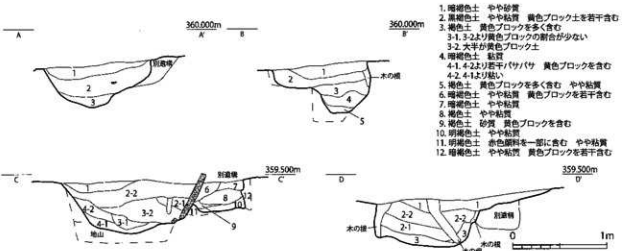
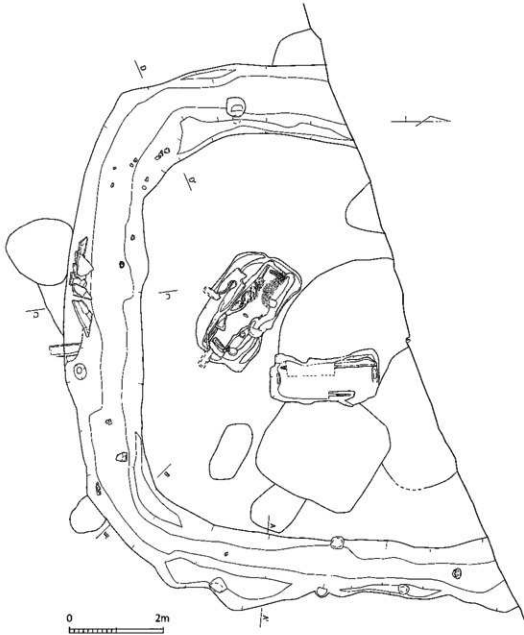
主体部は主軸を南北方向に持つ2基が見つかった。周溝と並行している東側を第1号主体部、西側を第2号主体部と呼ぶ。第1号主体部の墓坑は南北2.5m、東西1.2mの規模をもつが、今回の調査では、床面のみを検出したに過ぎない。床はほぼ平坦に作られており、西側と小口に棺材の抜き取り痕が認められ、1点棺材が残されていたことから箱式石棺であろう。床の規模は長軸1.90m、短軸0.53mで、北側小口の方が少し広いことから、頭位は北と考える。また床には目張りのための白色粘土とベンガラが残されていた。

2号主体部も1号同様、側石の一部が残されていたことから箱式石棺と考えられる。長軸2.48m、短軸1.12～1.45mの一段目の掘り方があるが、蓋石は取り去られていた。床の規模は長軸1.85m、短軸0.36～0.5mである。床は北東側が若干高くなっており、また小口も北側が少し広いことから、頭位は北東方向と考える。床面からは、ベンガラと白色粘土が検出されたが、遺物は出土していない。

また、周溝の外壁に沿って、蓋の板石が6枚立てかけられており、これらが主体部の蓋として使われていたものと思われる。板石の裏にはベンガラが付着していた。

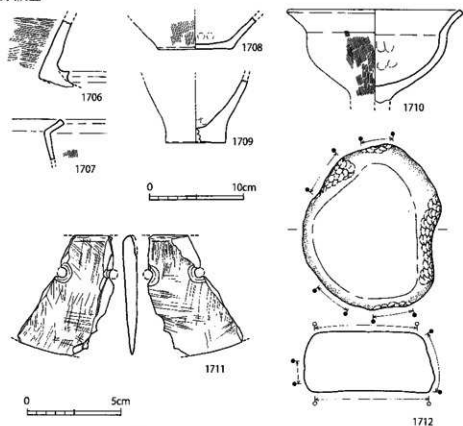
周溝から出土した遺物は、第7-186図に示した。1706は壺の口縁部で、肩折部に三角突帯を1条巡らす。1707は「く」字状口縁の甕である。1708は薄い平底、1710は高杯の杯身で、内湾する胴部から口縁端部は外に開く。復元口径は18.0cmである。1711は石包丁で、穿孔を2箇所持ち、両面に製作時の調整痕を残す。1712は敲石で側面の両側に敲き痕を有する。

これらの遺物は、周囲に広がる弥生時代の遺物の流れ込みで、方墳の時期を明確に示す遺物は出土していない。

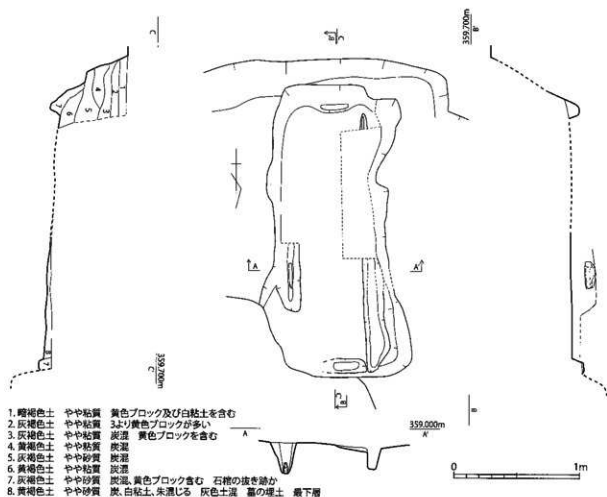


第7-184図 4号周溝墓実測図 (1/80・1/40)

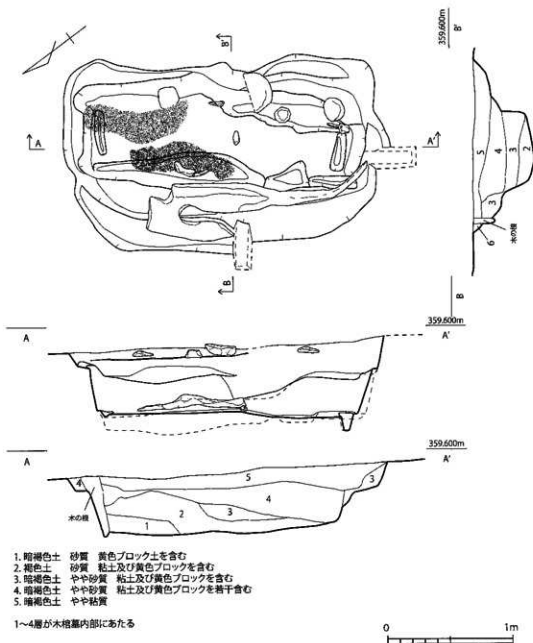
第7章 第13次調査



第7-185図 4号円溝墓出土遺物実測図



第7-186図 4号円溝墓第1号主体部実測図 (1/30)



第7-187図 4号周溝墓主体面実測図 (1/30)

## (3) 5号周溝墓

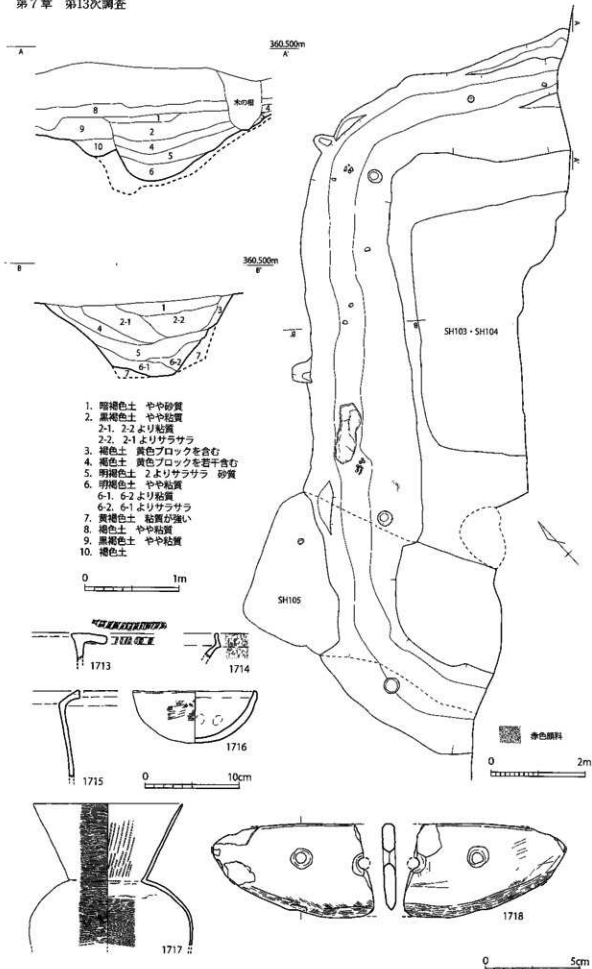
調査区北東部の3号周溝墓の南で検出された方墳である。周溝は東側が調査区外となっており、3分の1しか調査できていない。その規模は南北16.0m、東西5.0m以上である。周溝は幅1.1m~1.4mで、深さは0.55m~1.05mである。周溝内から石棺の板石(1.20m×0.7m)が1枚確認されている。その裏面にはペンガラが残されていた。

周溝内部からは弥生時代中期の竪穴建物を確認されたのみで、古墳の主体部は、調査区外にあるものと思われる。

周溝から出土した遺物を第7-187図に示した。1713は鐘先状口縁の甕で、端部に刻目をもつ、1714は複合口縁甕、外面に赤色顔料を塗布する。1715は「く」字状口縁の甕である。1716は浅鉢で、口径13.1cm、器高5.4cmである。1717は小型丸底甕で、口径15.8cmである。外面に横方向のミガキ、内面に並行タタキ痕を有する。1718は輝緑凝灰岩製の石包丁で、2箇所両面からの穿孔を開ける。

5号周溝墓の構築年代は、1717より古墳時代前期末~中期と考える。





第7-188図 5号周溝墓実測図 (1/80・1/40)・出土遺物実測図

## 第8章 第2次から第5次調査

## 第1節 はじめに

## 1 調査経過

今報告にかかわる第2次から第5次調査の調査経過については次に示すとおりである。ただし、一部については、第1次や第13次に発掘を行った遺構も含んでいる。

## ○第2次調査（平成15年度）

- 平成15年12月15日（月） プレハブ設置、調査区表土剥ぎ開始  
 12月17日（水） 遺構検出作業開始  
 12月25日（水） 住居跡2基、土坑、溝状遺構など検出  
 平成16年1月15日（木） 住居跡掘り下げ開始  
 1月20日（火） 円形周溝遺構確認  
 2月18日（水） S K360から土製勾玉出土  
 2月27日（金） 全体平面図作成  
 3月8日（月） 全体掃除、空中写真撮影  
 3月12日（金） 調査終了

## ○第3次調査（平成16年度）

- 平成16年6月1日（火） 重機による表土剥ぎ、遺構検出作業  
 6月3日（木） 遺構検出精査作業、堅穴遺構複数検出  
 6月4日（金） 土坑掘り下げ開始  
 6月15日（木） 遺構配置図作成  
 6月23日（水） 一部重機で表土除去作業  
 6月28日（月） 堅穴建物掘り下げ開始、大型掘立柱建物検出  
 7月28日（水） 福岡市山崎純男文化財部長（当時）現地指導  
 8月5日（木） 文化庁坂井調査官（当時）現地視察  
 8月26日（木） 調査区全域清掃  
 8月27日（金） 空中写真撮影  
 8月31日（火） 全体図作成、補足調査  
 9月1日（木） 調査終了

## ○第4次調査（平成17年度）

- 平成17年9月1日（木） 重機による表土剥ぎ  
 9月8日（木） 作業員による精査作業開始、大型掘立柱建物、周溝墓など検出  
 9月20日（火） 遺構掘り下げ作業開始  
 9月27日（火） 周溝墓主体部掘り下げ、鏡出土  
 10月18日（火） 九州大学舟橋京子氏による古墳主体部の人骨調査（～19日）  
 10月24日（月） 全体掃除  
 10月25日（火） 空中写真撮影  
 10月31日（月） 調査終了

## 第8章 第2次から第5次調査

### ○第5次調査（平成18年度）

- 平成18年11月16日（木） 重機による表土剥ぎ  
11月20日（月） 作業員による遺構検出作業  
11月30日（木） 遺構掘り下げ開始  
12月5日（火） 全体図作成  
平成19年1月9日（火） 旧石器包含層掘り下げ  
1月22日（月） 調査終了

## 2 調査概要

平成15年度から平成18年度にかけて行われた第2次調査から第5次調査の成果について概要を記す。

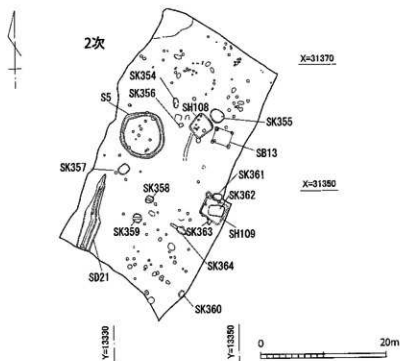
まず、第2次調査は第1次調査区の西側に接する位置で行われており、台地平坦面のほぼ中央付近にあたる。それに対して、第3次調査区から第5次調査区は、第1次調査区の南側に延びる、徐々に標高の高くなる尾根先端部に向けた箇所にあたる。そのため、第1次調査区と第5次調査区では、標高差が約15mある。第3次調査区は全体が緩斜面をなしている。その部分も含めて、弥生時代中期を中心とする遺構は満遍なく展開するが、最も標高の高い第5次調査区から北に下ってきて、おおむね平坦になった第3次調査区の北部域には大型の掘立柱建物が見られる。一度ほぼ同じプランで建て直しをしており（もう一つ小型で主軸のずれた掘立柱建物も重なる）、この場所が台地全体の中で特殊な空間であったことをうかがわせる。

また、中世では図示できる遺物はほとんど無かったが、第5次調査区では土器片も出土しており、地下式土坑と考えられる遺構もあるなど、何らかの活動が行われたことが想定できる。丘陵端部を切り落とした痕跡（切岸）も確認できた。台地西端では中世の城郭や寺院が確認され（『四日市遺跡2』2018 大分県立埋蔵文化財センター）、第1次調査区では地下式土坑が2基確認されている（『四日市遺跡1』2017 大分県教育庁埋蔵文化財センター）など、中世の土地利用を考える上で示唆的である。

## 第2節 第2次調査区

## 1 概要

平成28年度に報告を行った〔四日市遺跡1〕2017 大分県教育庁埋蔵文化財センター) 第1次調査区の西側に隣接する約800㎡が第2次調査区となる。台地平坦面のほぼ中央付近にあたる。傾斜はほぼ無い。遺構は弥生時代中期と古墳時代前期の竪穴建物2棟、掘立柱建物1棟、土坑1基、円形周溝遺構1基と、近世の溝1条である。なお、北西角部の竪穴建物については第16次調査区の報告(令和2年度刊行予定)で扱う。



第8-0図 2次調査区全体図 (1/600)

2 弥生時代

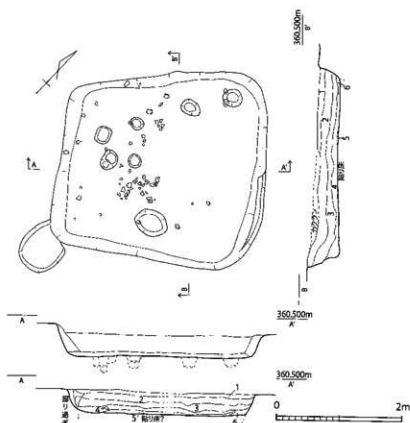
(1) 竪穴建物

SH108

短軸2.5～3.1m、長軸3.35mのやや台形を呈する土坑である。深さは0.35mである。床面には7か所のピットがあるが、いずれも0.15mほどと浅く、建物の柱穴にはならない。堆積状況は、ほぼ水平堆積で、人為的に埋め戻された状態である。

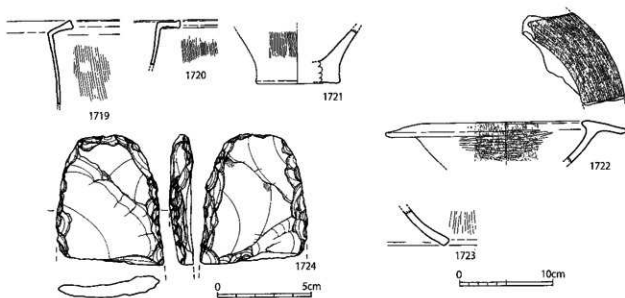
図示できる出土遺物は6点である。1719と1720は口縁端部が小さく上方に積み上げられる甕である。1721は平底を呈する甕。1722と1723は高坏で、1722は外側に垂れ下がる蓋先状をなす口縁部で内外面ともよく磨かれている。1723は脚部で、外面はよく磨かれている。1724は泥岩製の扁平打製石斧で、半分欠けている。

出土土器からこの竪穴の時期は弥生時代中期後半である。



1. 黒褐色 硬くしまりあり 粘りなし 1mm程度の黄褐色粒子(ブロック)をまばらに含む  
白色粒子を若干含む
2. 暗茶褐色 硬くしまりあり 粘りなし 1mm程度の黄褐色粒子(ブロック)を含む(1より少ない)
3. 淡茶色 硬くしまりあり やや粘りあり 2mm程度の黄褐色粒子(ブロック)を若干含む
4. 黒褐色 やや硬くしまりあり やや粘りあり 2mm程度の黄褐色粒子(ブロック)をまばらに含む
5. 暗茶褐色 硬くしまりあり やや粘りあり(3,4より強い) 1mm程度の黄褐色粒子(ブロック)を若干含む
6. 黒褐色 硬くしまりあり 粘りは5より強い 若干黄褐色ブロック含む

第8-1図 SH108実測図 (1/60)



第8-2図 SH108出土遺物 (1/4)

## (2) 掘立柱建物

## SB13

1間×1間の掘立柱建物である。東西方向に心々で2.7m、南北2.2mで、柱で囲まれた面積は5.94㎡となる。柱穴は、直径0.4～0.55mで、深さは0.3～0.75mである。柱穴からは遺物は出土していないが、堀土の状況から弥生時代のものである。

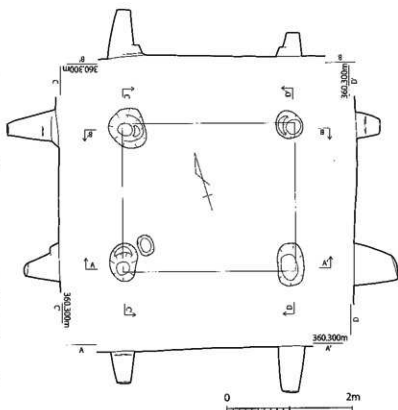
## (3) 土坑

## SK354

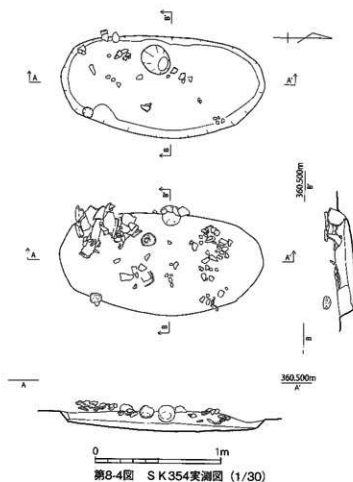
長軸1.6m、短軸0.8m、深さ0.15mの楕円形を呈する土坑である。遺構検出が難しかったため、周辺を掘り下げているので、遺物はやや浮いた状態になっている。

図示できる遺物は5点ある。1725は口縁端部を上方に積み上げる甕、1726は同じく口縁端部を小さく積み上げ、口縁部下に一条の突帯を巡らせる。1727は甕の底部で、端部はやや踏ん張る形で、若干の上げ底となる。1728は甕の胴部破片で、断面三角形の突帯が2条ある。1729は鉢で、内湾しながら開く体部を持つ。

出土遺物から、この土坑の時期は弥生時代中期後半である。



第8-3図 SB13実測図 (1/60)



S K 355

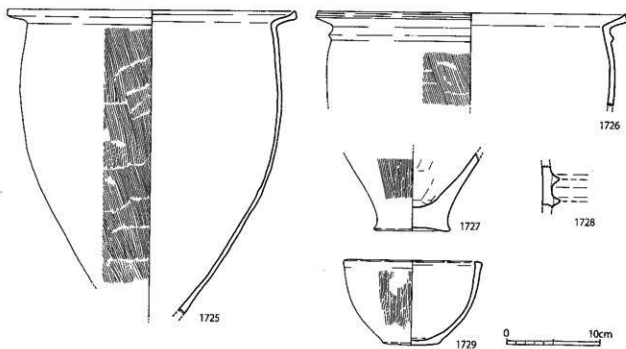
長径2.3m、短径2.0mの楕円形で、深さは1.05mの土坑である。床面には遺構は認められない。堆積状況はほぼ水平に黄褐色土で埋め戻し、最上層でクロボク土（黒褐色土）が堆積（自然堆積？）している。

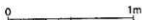
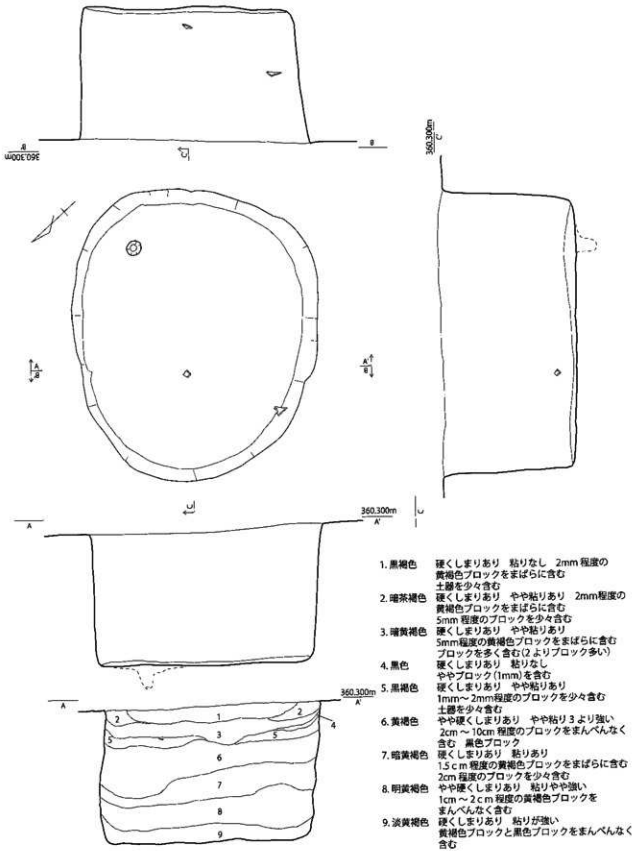
図示できる出土遺物は2点である。1730は「く」字に折れる甕の口縁部。1731は平底の甕の底部。弥生時代中期後半のものである。

S K 356

長軸0.7m、短軸0.55mの不整形の土坑である。深さは0.07mほどであるが、遺物は床から0.2mほどで検出されており、本来の土坑はもっと深かった。地山と埋土の峻別が難しく、周辺の掘り下げを行った結果である。

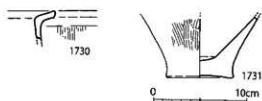
遺物は完形に復元される甕2点である。1732は「く」字に折れる口縁端部を積み上げるもので、底部は外側に踏ん張る平底である。1733は「く」字に折れる口縁端部をわずかにつまみ上げ、同部最大径を中位に持ち、底部はそのまま平底になるものである。弥生時代中期後半のものである。



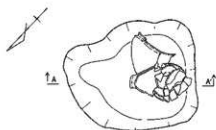


第8-6図 SK355実測図 (1/30)

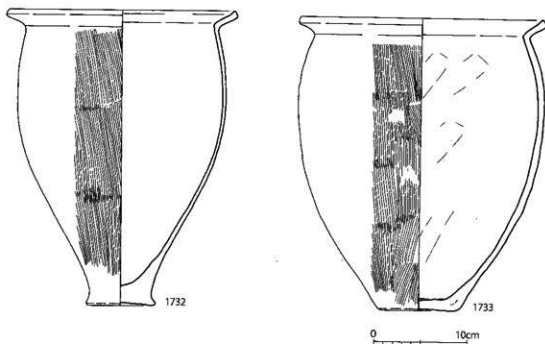




第8-7図 S K355出土遺物 (1/4)



第8-8図 S K356実測図 (1/20)



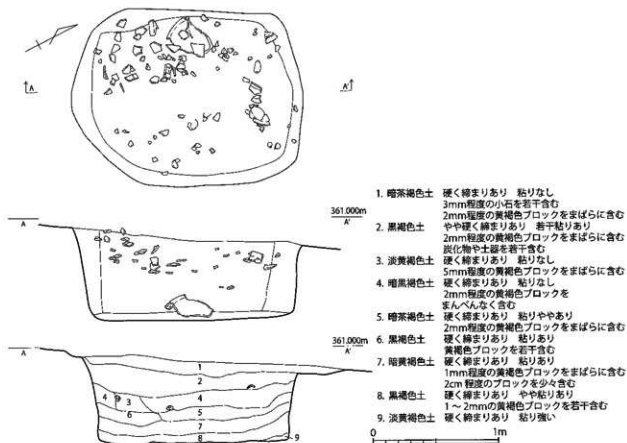
第8-9図 S K356出土遺物 (1/4)

S K357

長軸1.84m、短軸1.38mの不整五角形状を呈する土坑である。深さは0.69mである。堆積状況は、黒褐色土と黄褐色土が互層になっており、人為的に埋め戻されたと考えられる。遺物は覆土中からまんべんなく出土している。

図示できる出土遺物は10点である。1734は胴部径が0.3mほどに復元できる壺である。断面三角形の突帯が2条廻る。内外面ともナア調整である。1735は鋤先状口縁を持つ壺である。1736から1739は口縁端部を小さく上方に積み上げる甕である。1739は完形に復元できる。底部は厚くならない平底である。1740は端部が踏ん張る形で外に張り出す甕底部である。1741は鋤先状口縁を持つ高坏である。坏部はやや浅い碗状を呈する。1742は泥岩製の打製石斧、1743は砂岩製の磨製石斧である。

以上から、この土坑の時期は弥生時代中期後半である。



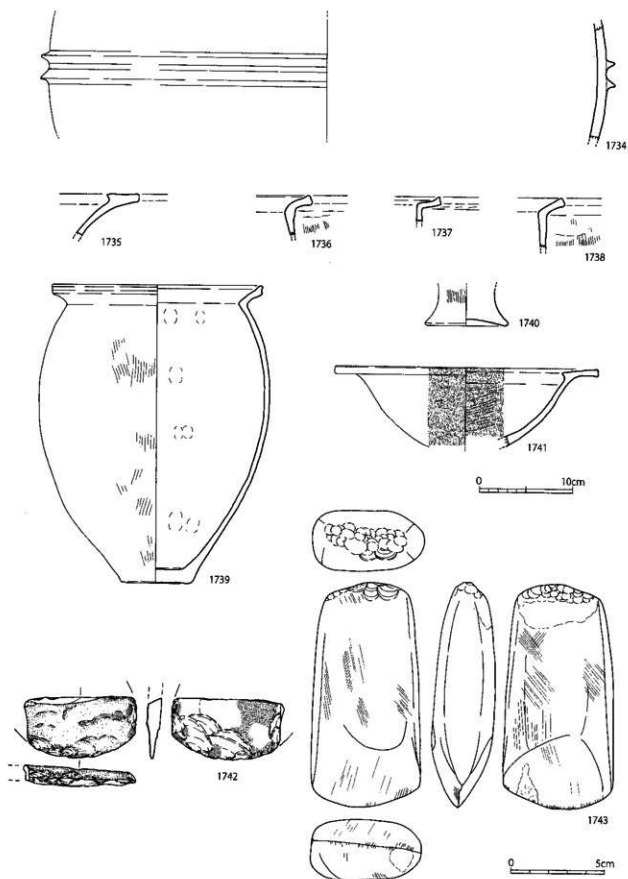
第8-10図 SK 357実測図 (1/30)

## S K 358

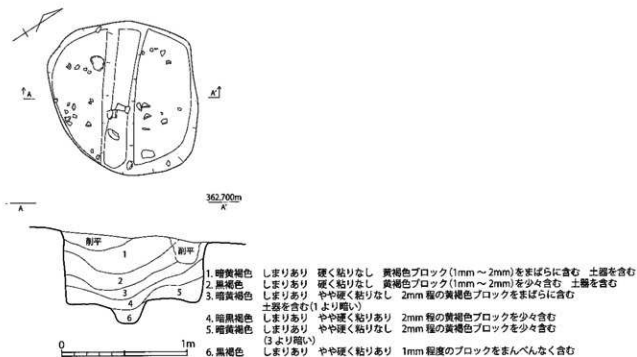
長軸1.24m、短軸1.12mの不整形円形を呈する土坑で、深さは0.58mである。床面には幅0.27mで深さ0.15mの溝が直線的に入れられている。堆積状況は、黒褐色土と黄褐色土が互層になっており、人為的に埋め戻されたと考えられる。

図示できる出土遺物は6点である。1744は鋤先状口縁の壺、1745と1746は鋤先状をなす口縁部の甕で、1746には口縁下に断面M字状の突帯を廻らせる。いずれも外面にベンガラが塗布されている。1747は口縁端部を小さく摘み上げる甕、1748は鋤先状をなす高坏の口縁部。1749は体部が内湾して立ち上がる丸底の鉢。

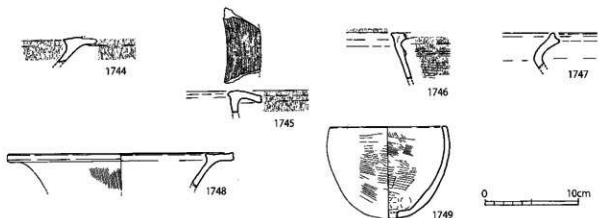
以上より、この土坑の時期は弥生時代中期後半である。



第8-11図 SK 357出土遺物 (1/4, 1/2)



第8-12図 S K 358実測図 (1/30)



第8-13図 S K 358出土遺物 (1/4)

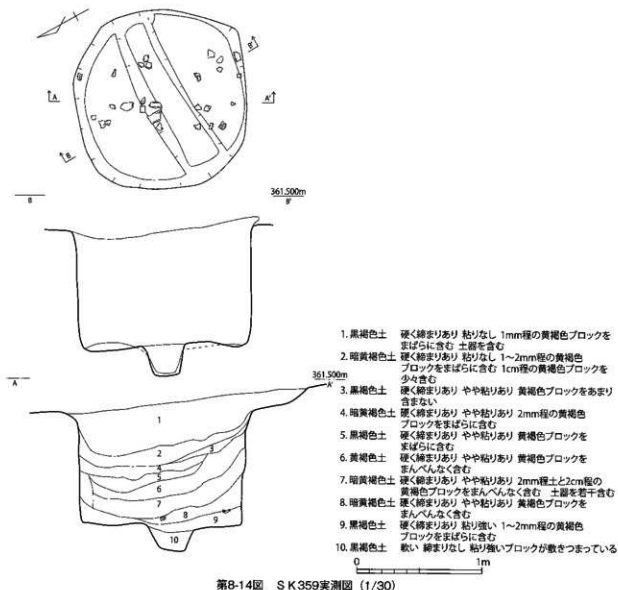
S K 359

直径1.36~1.4mの円形を呈する土坑で、深さは0.82mである。床面には幅0.36mで深さ0.24mの溝が直線的に入られている。堆積状況は、黒褐色土と黄褐色土が互層になっており、人為的に埋め戻されたと考えられる。

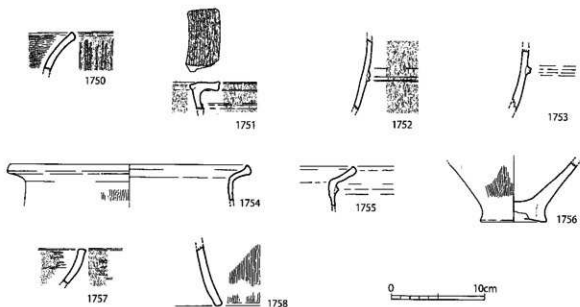
図示できる出土遺物は9点である。1750は両面が磨かれた壺の口縁部で、外面にベンガラが塗布されている。1751は鋸先状をなす甕の口縁部で、口縁下に断面M字状の突帯が廻る。1752と1753は胴部に断面M字状の突帯が廻る甕。1754と1755は口縁端部を小さく上方に積み上げる甕。1756は端部で外方に踏ん張る甕の底部。

1757は内外面とも磨かれた鉢で、ベンガラが塗布されている。1758は鼓形をなす器の脚部である。

以上から、この土坑の時期は弥生時代中期後半である。



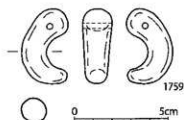
第8-14図 S K359実測図 (1/30)



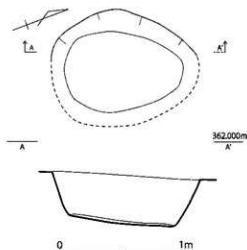
第8-15図 S K359出土遺物 (1/4)

## S K 360

第1次調査区との境で確認された土坑である。南北は1.2m、東西は東側が削平されており不明である。深さは0.37mある。遺物は1759の土製の勾玉である。長さは3.9cmである。



第8-16図 S K 360出土遺物 (1/2)



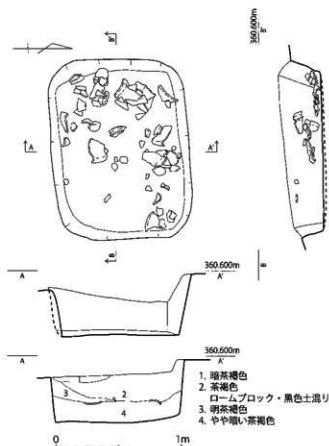
第8-17図 S K 360実測図 (1/30)

## S K 361

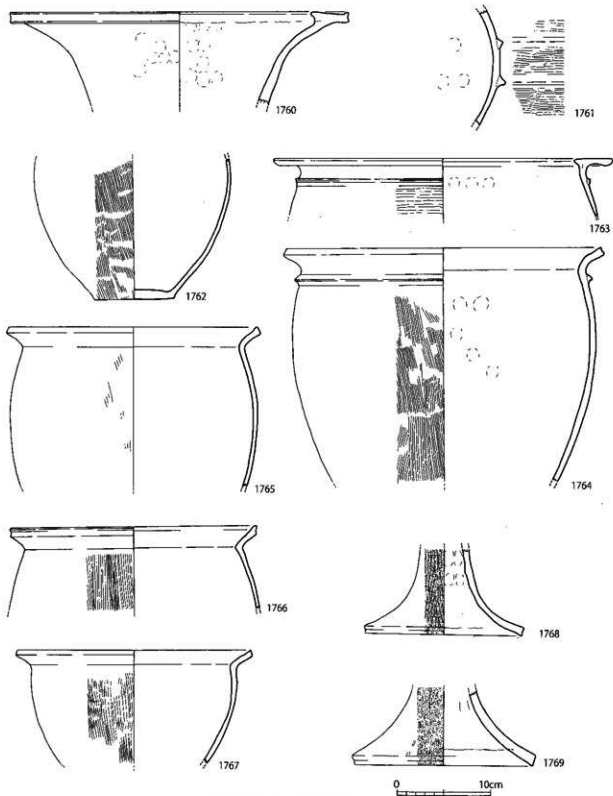
東西1.42m、南北1.1m、深さ0.48mの長方形の土坑である。S H109を切っている。堆積状況はほぼ水平堆積であり、人為的に埋め戻されたと考えられる。遺物は床面近くで出土している。

図示できる出土遺物は10点である。1760は大きく開く鋤先状口縁を持つ壺、1761は壺の胴部で、2条の断面三角形の突帯が廻る。1762は平底の蓋の底部。外面は刷毛調整、1763は口縁部が水平となる鋤先状口縁の蓋で、口縁下に一条のM字突帯が廻る。1764から1766はいずれも口縁端部を上方に小さく積み上げる甕であるが、1764は口縁下に一条の突帯を廻らせる。1767は脚が付くと思われる鉢、1768と1769は高坏の脚で、いずれも脚端部は下方に小さく突出する。

以上より、この建物の時期は弥生時代中期後半とすることができる。



第8-18図 S K 361実測図 (1/30)



第8-19回 SK361出土遺物 (1/4)

## S K 362

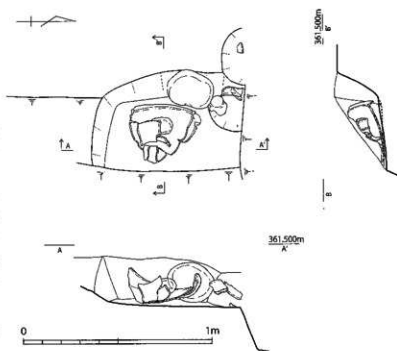
S H109に上部を削られている。南北は1.7m、東西2.5mの長方形で、深さは0.35mである。  
 図示できる出土遺物はない。

## S K 363

北側をS K 396に削られ、東側は削平を受けているため残りが僅かであるが、コーナー部が残している。遺物が床面に置かれたような状態で出土している。建物なのか土坑なのかの判断はできないが、ここでは一応土坑として扱っている。

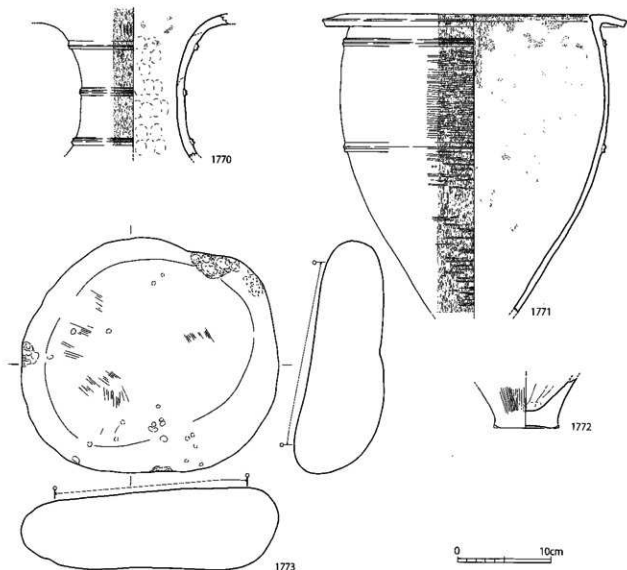
遺物は一か所からまとまって出土した4点である。1770は長く伸びる頸部に3条の断面M字状の突帯を巡らせる壺である。1771は鋤先状をなす口縁部に、口縁部下と胴部中位に断面M字状の突帯を巡らせる甕である。外側から口縁部にかけてはベンガラが塗布されている。外面は横方向にミガキが施されている。1772は底部の端がやや踏ん張る形の平底の甕である。1773は長径27.4cmの台石で、中央部分が磨れてやや窪んでいる。

以上から、弥生時代中期後半のものである。



第8-20図 S K 363実測図 (1/20)





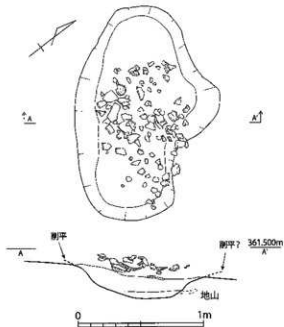
第8-21図 SK363出土遺物 (1/4)

S K364

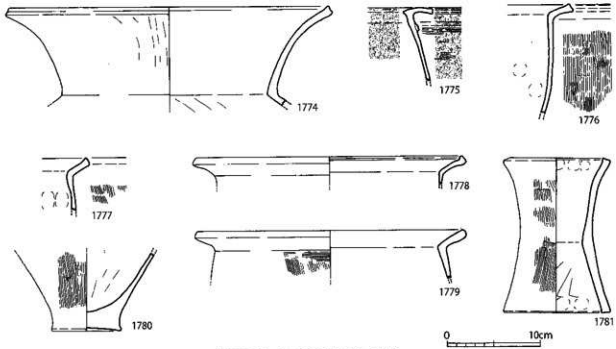
長軸1.7m、短軸0.7mのやや角を持つ長楕円形の土坑で、北東の辺の中央部でやや外側に張り出す。深さは0.2mほどである。遺物は床から0.2mほど浮いた状態で出土している。

図示できる遺物は8点である。1774は口縁部が大きく開く広口壺である。口縁端部は小さく摘みあげられる。1775は鑷先状口縁を持つ甕で、口縁下に断面M字状の突帯を一条廻らせる。外面はミガキが施され、ベンガラが塗布されている。1776から1778は口縁端部が小さく上方に摘み上げられる甕、1779は口縁部を「く」字形に折れ開く甕、1780は端部がやや外側に踏ん張る平底の甕底部である。1781は鼓形の器台で、口縁部と脚部の径がほぼ等しい。

以上より、この土坑の時期は弥生時代中期後半である。



第8-22図 S K 364実測図 (1/30)



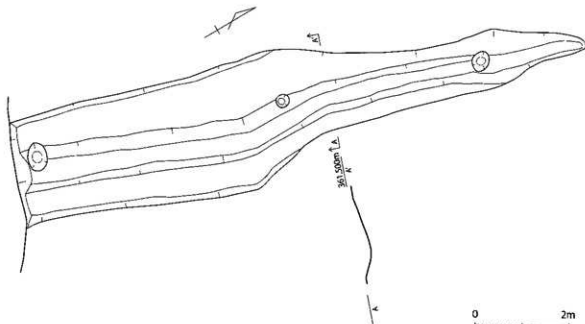
第8-23図 S K 364出土遺物 (1/4)

(4) 溝

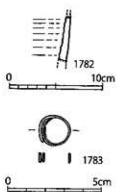
SD21

調査区の南西で確認された溝である。後の調査(第16次)で、さらに南側に延びていることが確認されている。最大幅2.6m、深さは0.2mである。

図示できる出土遺物は2点で、1782は内外面とも施釉された陶器の瓶、1783は銅製のリングである。この溝のの時期は近世である。



第8-24図 SD21実測図 (1/80)



第8-25図 SD21出土遺物

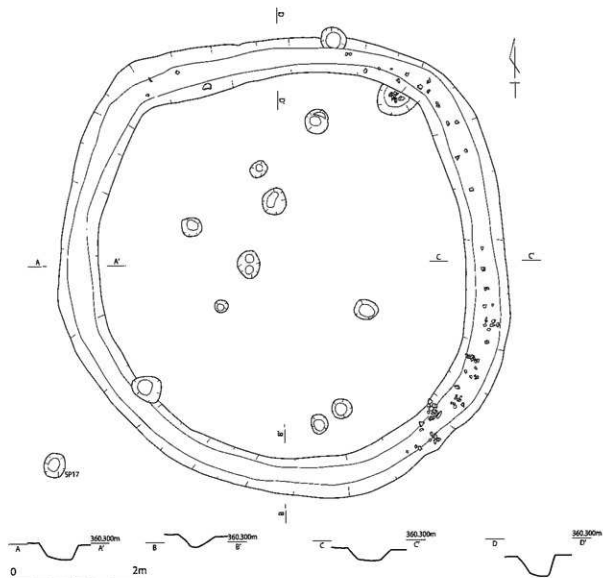
(5) 円形周溝遺構

S5

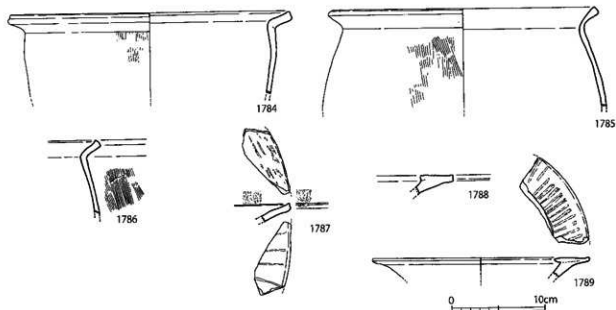
幅0.5～0.7m、深さ約0.2～0.35mの溝が東西6.9m、南北7.2m(いずれも溝の外側で計測)のやや楕円形に巡る遺構である。北西部はやや角を形成している。溝で囲まれた内部はピットが複数あるが、特に並ぶようなことはないのいで、伴うものであると判断はできない。遺物は、細片が溝中から出土している。

図示できる出土遺物は6点である。1784と1786は口縁端部をわずかに上方に積み上げる甕、1785は甕で、口縁端部が厚くなる。1787は壺で、上面に暗文が施される。1788は鋤先状をなす高環の口縁部。1789は鋤先状口縁をなす高環である。上面には暗文が施される。

時期は弥生時代中期後半である。



第8-26図 S5実測図 (1/60)



第8-27図 S5出土遺物 (1/4)

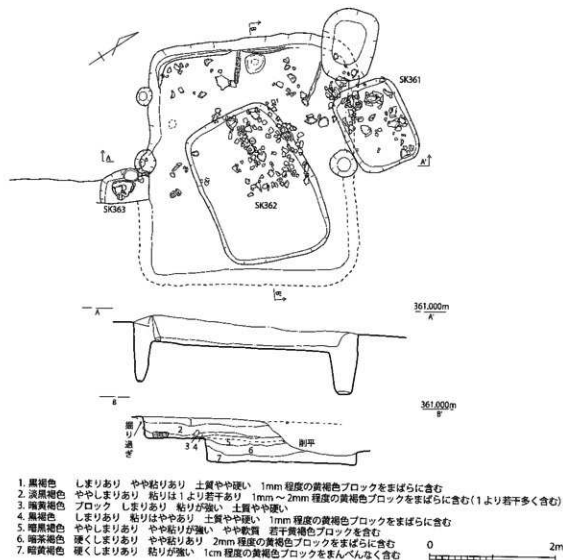
3 古墳時代

(1) 竪穴建物

SH109

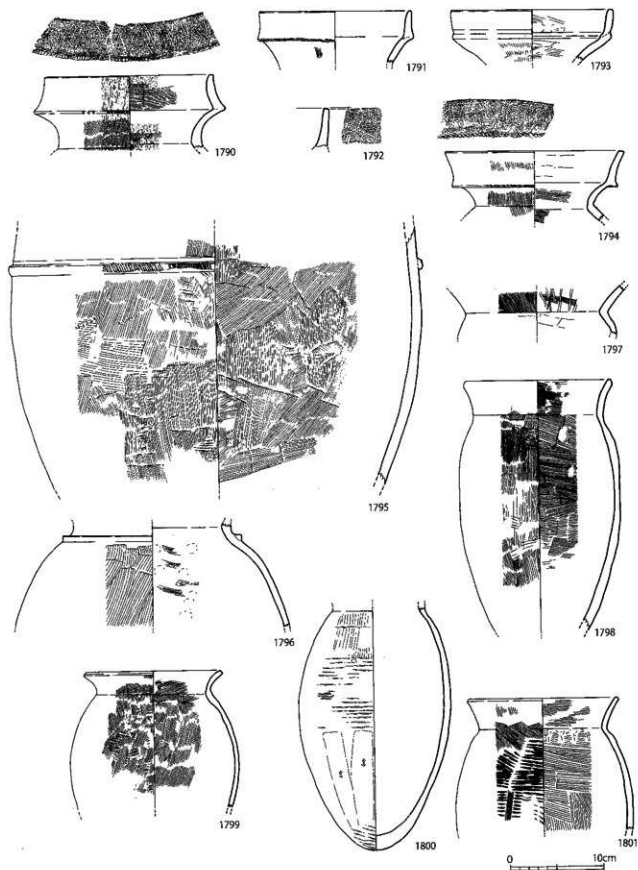
S K 362を切って作られた土坑で、東側半分は削平を受けて壁の立ち上がりが無くなっており、S K 361からは切られている。推定で南北3.5m、東西3.9mの大きさで、残存する深さは0.4mである。堆積状況は、ほぼ土層が水平に堆積しており、人為的に埋め戻されたと考えられる。

図示できる出土遺物は46点である。1790から1794は二重口縁の甑で、1790から1792は豊後に通有の安国寺土器に系譜を持つもの、1793は口縁部上半が大きく開く。1790と1792は波状文を描く。1795から1797は壺の胴部。1795は胴部に扁平刻目突帯を廻らせる。1796は頸部に一条の断面三角形の突帯を廻らせる。1797は丸底をなす底部である。1798から1812は甕。球形胴に近いものと長胴のものがある。長胴のものには胴部外面にタタキが見られる。底部は丸底となる。1813から1816は脚付きの鉢で、口縁部は外反しながら開く。1817から1823は鉢で、1817は体部で屈曲し、口縁部が立ち上がる。他は体部が内湾して口縁となる。1824は丸底をなす小型壺、1825は

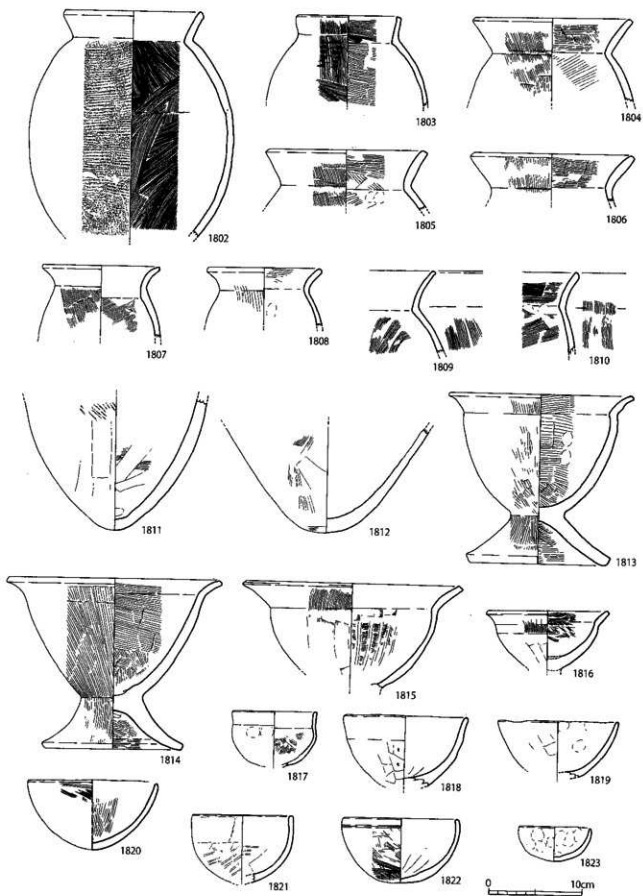


1. 黒褐色 しまりあり やや粘りあり 土質やや硬い 1mm程度の黄褐色ブロックをまばらに含む
2. 淡黒褐色 ややしまりあり 粘りは1より若干あり 1mm～2mm程度の黄褐色ブロックをまばらに含む(1より若干多く含む)
3. 暗黄褐色 ブロック しまりあり 粘りが強い 土質やや硬い
4. 黒褐色 しまりあり 粘りはややあり 土質やや硬い 1mm程度の黄褐色ブロックをまばらに含む
5. 暗黒褐色 ややしまりあり やや粘りが強い やや軟弱 若干黄褐色ブロックを含む
6. 暗茶褐色 硬くしまりあり やや粘りあり 2mm程度の黄褐色ブロックをまばらに含む
7. 暗黄褐色 硬くしまりあり 粘りが強い 1cm程度の黄褐色ブロックをまんべんなく含む

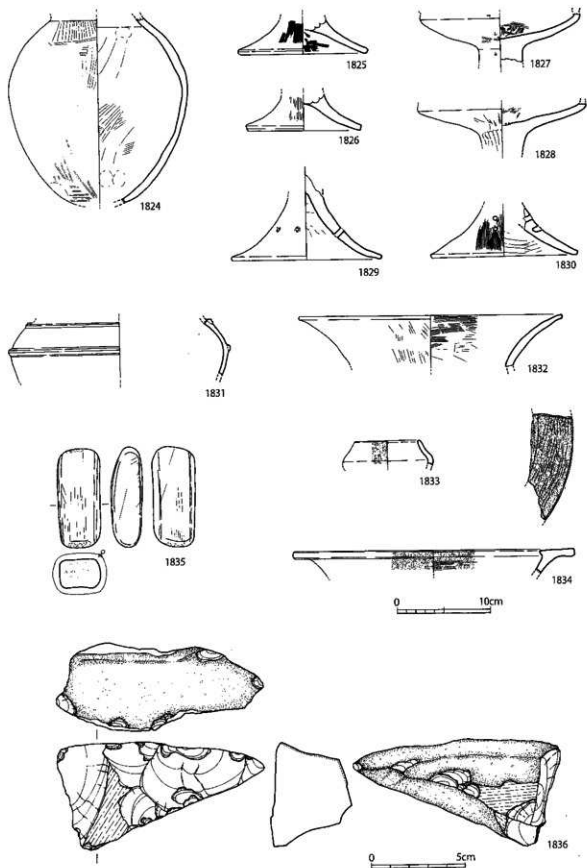
第8-28図 SH109実測図 (1/60)



第8-29図 SH109出土遺物① (1/4)

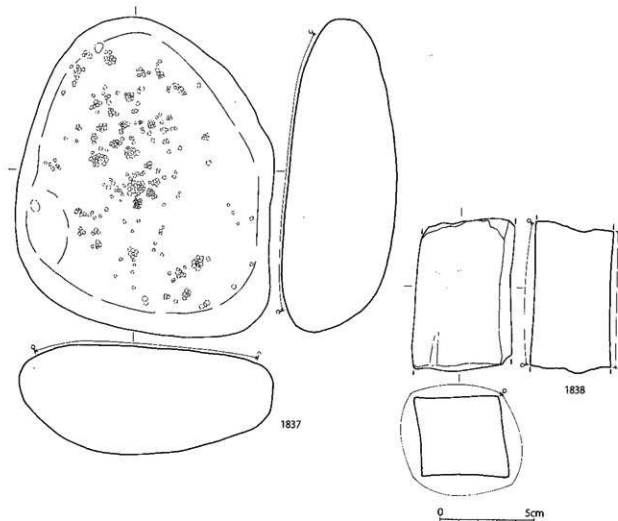


第8-30図 SH109出土遺物② (1/4)



第8-31図 SH109出土遺物③ (1/4, 1/2)





第8-32図 SH109出土遺物㊦ (1/2)

脚部、1827から1830は高坏で、1829と1830は脚部に穿孔がある。1831から1834は弥生時代中期の遺物の流れ込みである。1831は扁平な体部を持ち、断面M字状突帯を廻らせる甕、1833は口縁部が袋状をなす長頸壺か、1832は広口壺の口縁部、1834は鬺先状をなす口縁部を持つ高坏である。

以上から、この竪穴建物の時期は古墳時代前期前半である。

#### 4 まとめ

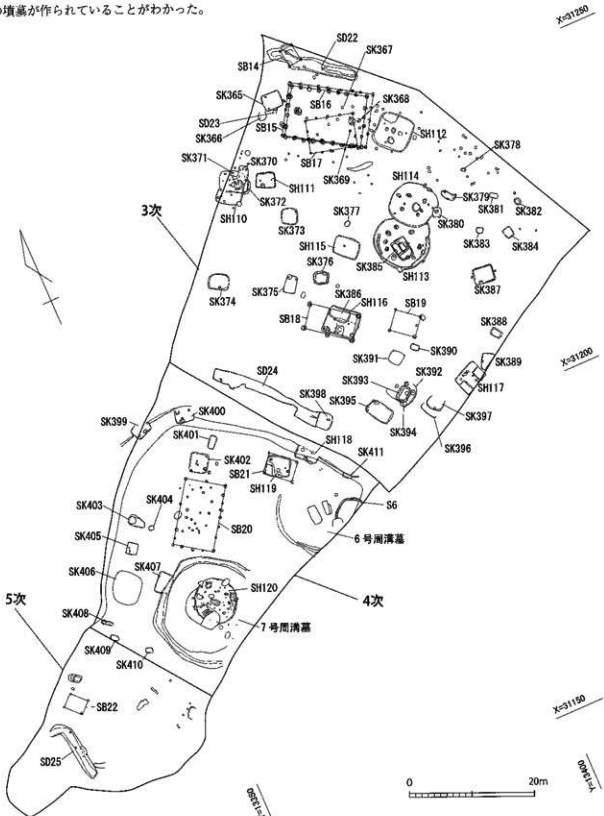
第2次調査区では、弥生時代中期と古墳時代前期の竪穴建物2棟、掘立柱建物1棟、土坑1基、円形周溝遺構1基と、近世の溝1条が確認された。遺構の分布状況や遺構の時期などは、第1次調査区と同様である。

## 第3節 第3次から5次調査区

## 1 概要

四日市の台地の東端にあるやや小高い独立した丘陵と、そこから下るなだらかな傾斜地が第3次から第5次調査区になる。ここでは、連続した調査区のため、一括して扱う。

この区域では、弥生時代中期の大型掘立柱建物が複数確認され、さらに台地縁辺部には連続して古墳時代前期の墳墓が作られていることがわかった。



第8-33図 3次・4次・5次調査区 (1/600)

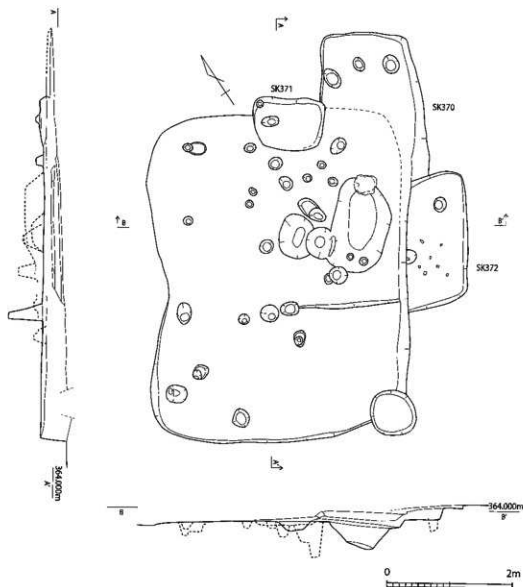
2 弥生時代

(1) 竪穴建物

SH110

東西4.0m、南北5.2mの長方形を呈する竪穴建物である。壁の立ち上がりは残りの良い南側で約0.4mである。床面は南東部が0.1mほど高いので、ベッド状遺構があったと考えられるが、明確ではない。床面には土坑や柱穴があるが、この建物に伴うものを特定できない。

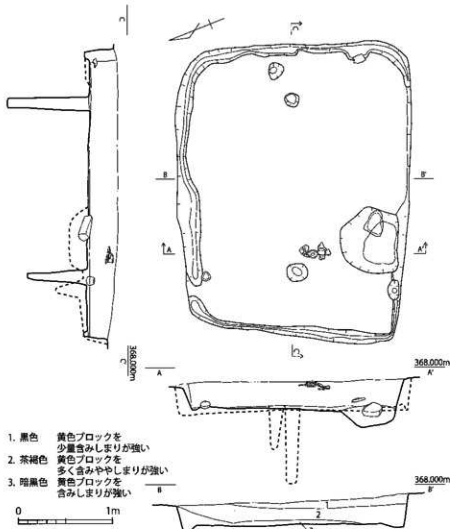
図示できる出土遺物は1点で、1839は口縁端部を小さく組みあげる臺である。時期は弥生時代中期後半である。



第8-34図 SH110実測図 (1/60)



第8-35図 SH110出土遺物 (1/4)



1. 黒色 黄色ブロックを少量含みしまりが強い
2. 茶褐色 黄色ブロックを多く含みやしまりが強い
3. 暗黒色 黄色ブロックを含ましまりが強い

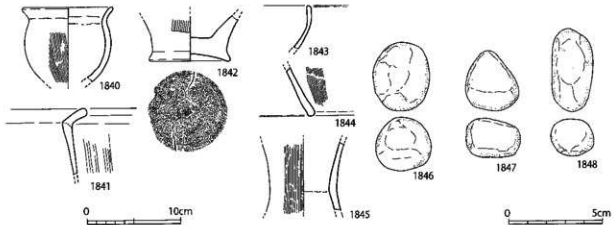
第8-36図 SH111実測図 (1/40)

SH111

東西3.06m、南北2.46m、深さ0.28mの長方形を呈する小型の竪穴建物である。壁溝がほぼ一周し、南側の壁の西寄りには長軸0.68m、短軸0.6m、深さ0.15mの上坑がある。主柱穴は、長軸上に2か所離れて穿たれている。柱穴の深さは0.7mと0.9mとやや深い。

図示できる出土遺物は9点である。1840は口縁部が緩やかに外反する小型の鉢。1841は口縁部が「く」字に折れる甕、1842はやや上げ底状を呈する甕の底部、1843は内湾しながら開く高坏、または鉢、1844、1845は器台である。1846から1848は石製の投彈である。

この竪穴建物の時期は弥生時代後期前半である。



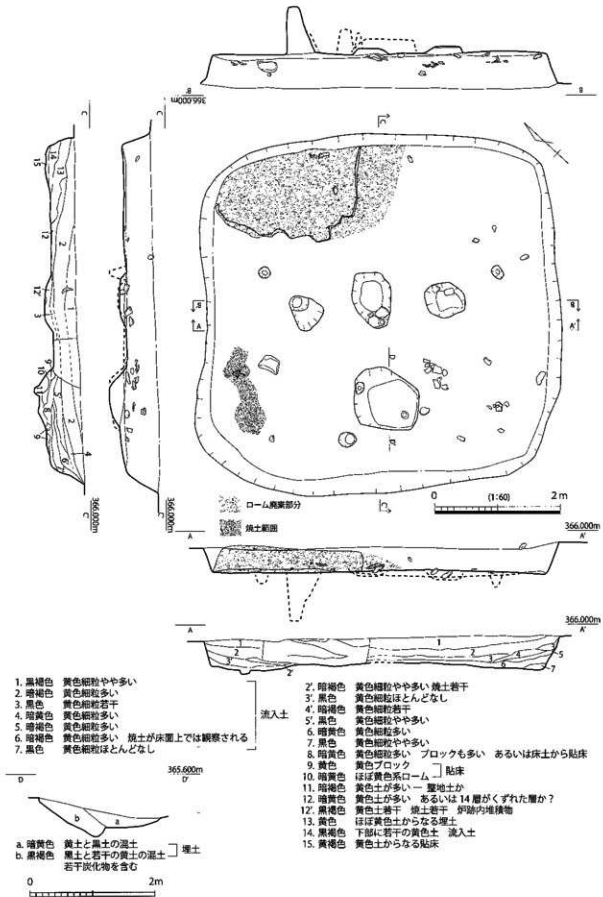
第8-37図 SH111出土遺物 (1/4, 1/2)

SH112

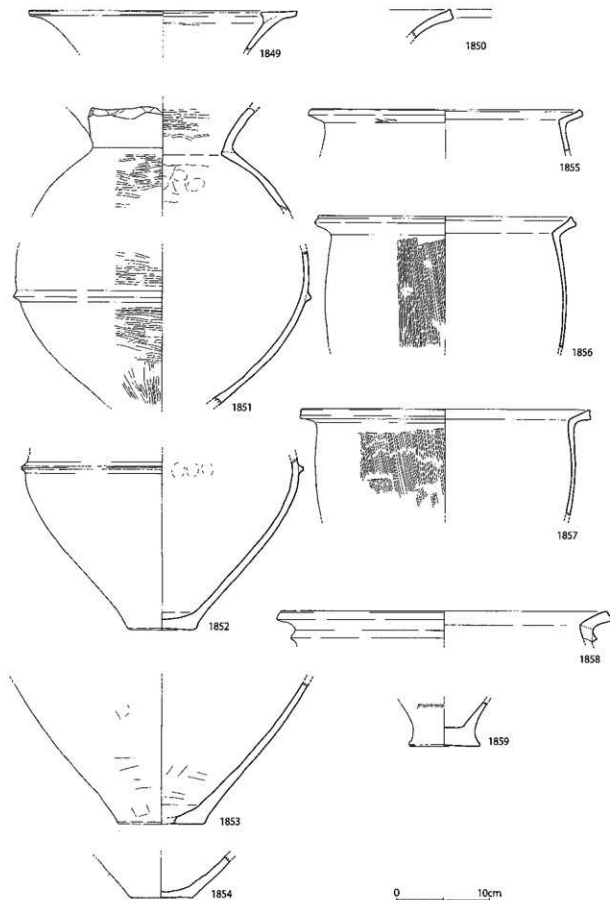
一辺5.7mの正方形を呈する竪穴建物で、深さは0.4mである。床面のほぼ中央に炉があり、その両側には2本の支柱穴がある。また、炉の南西側には1.0m×0.8m、深さ0.25mの土坑がある。また、西の角の床面には焼土が堆積していた。さらに北側の角部には、建物廃絶後にわずかに自然堆積した後、ローム土が床面に達するまで廃棄されていた。廃棄は北側から行われており、北側にあるいずれかの遺構を掘削する際に出た廃土（ロームまで掘削が及ぶのは深い土坑である）を投棄したものであろう。

図示できる出土遺物は17点である。1849は鋤先状をなす口縁部の壺、1851は壺の頸部から胴部で、胴部には一条の突帯が廻る。1852は壺の胴部で、一条の断面台形の突帯が廻る。1853と1854は壺の胴部から底部である。1850は口縁端部をわずかに積み上げる広口壺の口縁部が。1855から1857は口縁端部を上方に積み上げる甕、1858は小さく折れる口縁部の直下に断面三角形の突帯が廻る甕。1859はやや外方向に踏ん張る甕の底部である。1860は旧石器時代の石核、1861は打製石斧、1862は磨製石斧、1863は安山岩製の石皿、1864は安山岩製の打製石斧である。

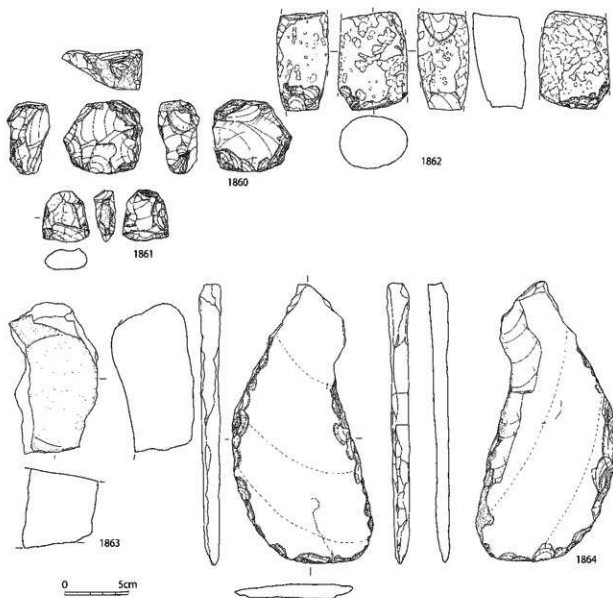
以上より、この竪穴建物の時期は弥生時代中期後半である。



第8-38図 SH112実測図 (1/60)



第8-39図 SH112出土遺物① (1/4)



第8-40図 SH112出土遺物② (1/3)

## SH113

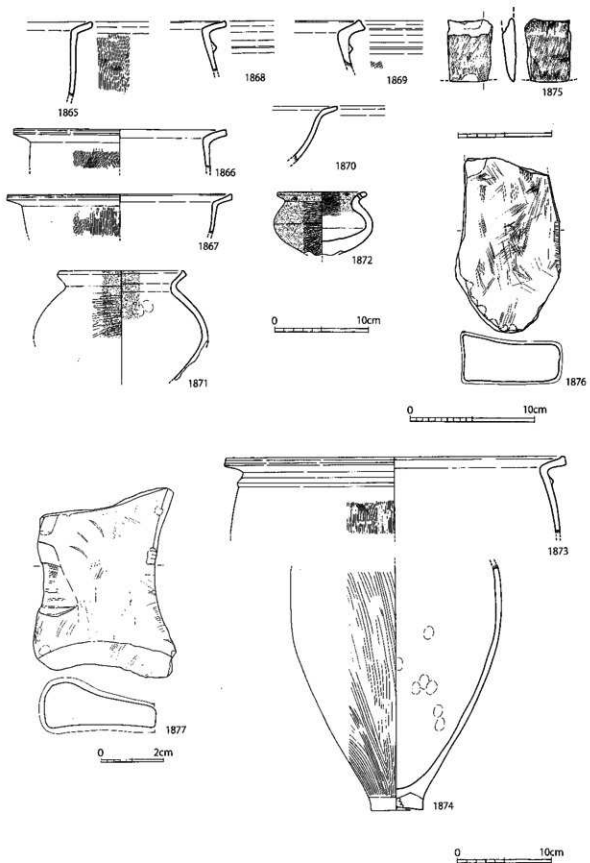
直径約9.0mの円形堅穴建物だが、やや東西方向に長い。深さは0.1mほどと残りは良くない。また、北側は掘方が深いSH114によって（切り合い関係ではSH114が古い）、中央付近はSH508によって壊されている。主柱穴は8本であるが、間隔は不揃いである。床面の南側半分の際際には壁溝が巡る。また、床面には焼土と炭化材が見られることから、この堅穴建物は火災にあったことがわかる。炉は試掘トレンチやSH508によって消滅した可能性が高い。床面の土坑についても確認できなかった。

図示できる出土遺物は13点である。1865から1869は甕で、1868と1869は口縁下位に突帯が廻る。1871と1872は壺で、1872は脚が付く。1875は石包丁、1876と1877は砥石である。

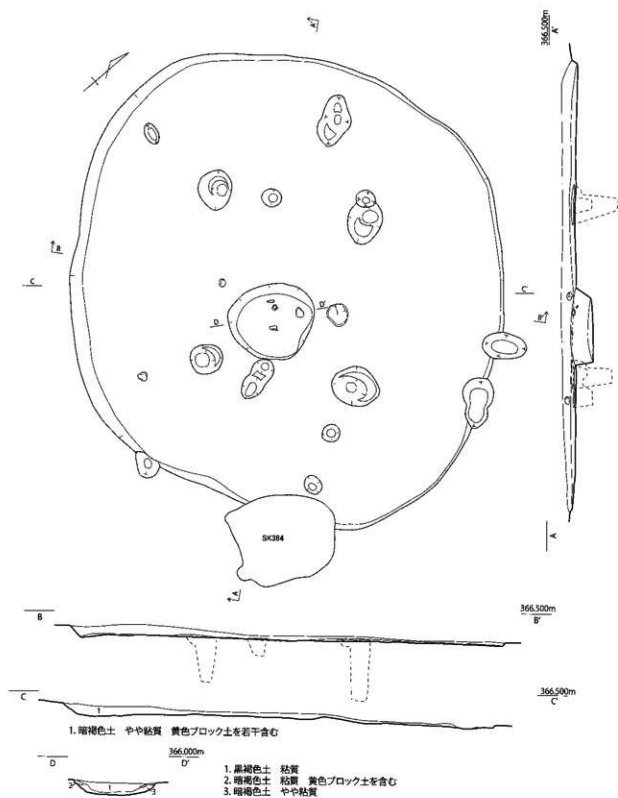
この堅穴建物の時期は、弥生時代中期後半である。



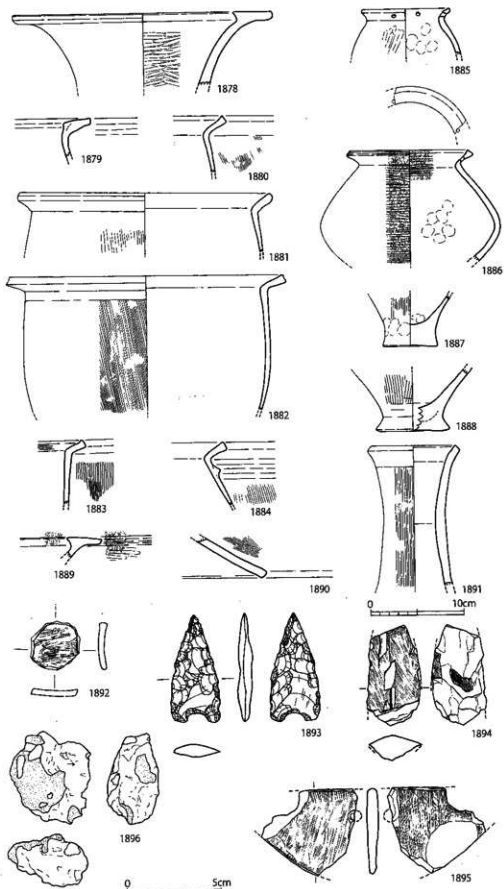




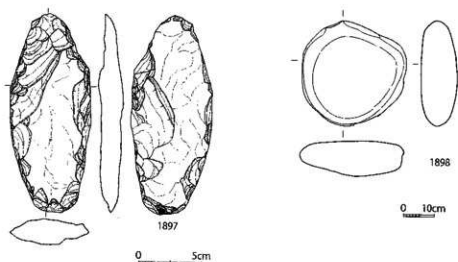
第8-42図 SH113出土遺物 (1/4, 1/3, 1/12.5)



第8-43図 SH114実測図 (1/60)



第8-44回 SH114出土遺物① (1/4, 1/2)



第8-45図 SH114出土遺物② (1/3, 1/12.5)

#### SH114

東西、南北とも7.0mの隅丸方形の竪穴建物である。深さは残りの良い西側で0.2mほどである。主柱穴は4本で、その中央やや南寄りに深さ0.3mの七坑がある。床面に焼土等が認められなかったため、炉については不明である。

図示できる出土遺物は19点である。1878、1879は口縁部が鋤先状をなす蓋、1880から1883は口縁部を小さくつまみ上げる甕、1884は口縁部下に突帯を廻らせる甕。1885と1886は口縁部が小さく開く蓋、1887と1888は平底の甕である。1889は高坏、1890は蓋、1891は登台である。1892は直径5cmの円形に加工された甕の破片で、外面にベンガラが塗布されている。1893は打製石鏃である。1894は石剣である。1895は石包丁、1896は鉄滓であるが、遺構表面での出土のため、この竪穴建物に本来伴うものではない。1897は打製石斧、1898は台石である。

以上から、この竪穴建物の時期は弥生時代中期後半である。

#### SH115

東西4.2m、南北3.0m、深さ1.1mの長方形を呈する竪穴建物である。炉や柱穴が確認できないが、中央に1本の柱穴があるため建物とした。床面には土坑などはない。堆積状況は自然堆積である。

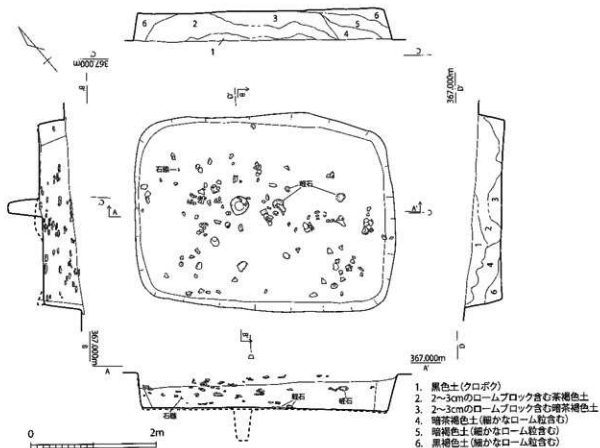
図示できる出土遺物は20点である。1899は蓋の肩部で、三条の断面M字形の突帯が廻る。1900は鋤先状をなす蓋の口縁部。1901から1907は口縁部を小さくつまみ上げる甕、1908と1909は「く」字に折れ開く口縁部の甕。1910から1916は甕の底部で、1910と1911は厚手。1917は漆黒色色を呈する黒曜石製の打製石鏃、1918は安山岩製の敲き石で、片側に敲打痕がある。

この竪穴建物の時期は弥生時代中期後半である。

#### SH116

東西5.2m、南北4.3mの長方形を呈する竪穴建物である。南側の長辺壁際中央に一辺1.2mほどのほぼ正方形の七坑がある。深さは0.2mほどである。縦斜面に位置するため、下側(北側)は壁の立ち上がりが高さが数cmしか残っていない。この建物に伴う柱穴はコーナー部にある3本(北西角部は深い土坑(SK386)によって壊されていると考えられるので、本来は4本)である。床面には部分的に焼土があり、さらに炭化木材が数本確認されたので、火災住居と考えられる。竪穴の堆積状況は自然堆積ではなく、黒褐色土やロームブロックの混ざる茶褐色土で埋められている。炉跡は確認できないが、SK386によって削られた可能性がある。

遺物は上層と下層に分けて取り上げている。上層は図示できる出土遺物が16点である。1919と1930は鋤先状口

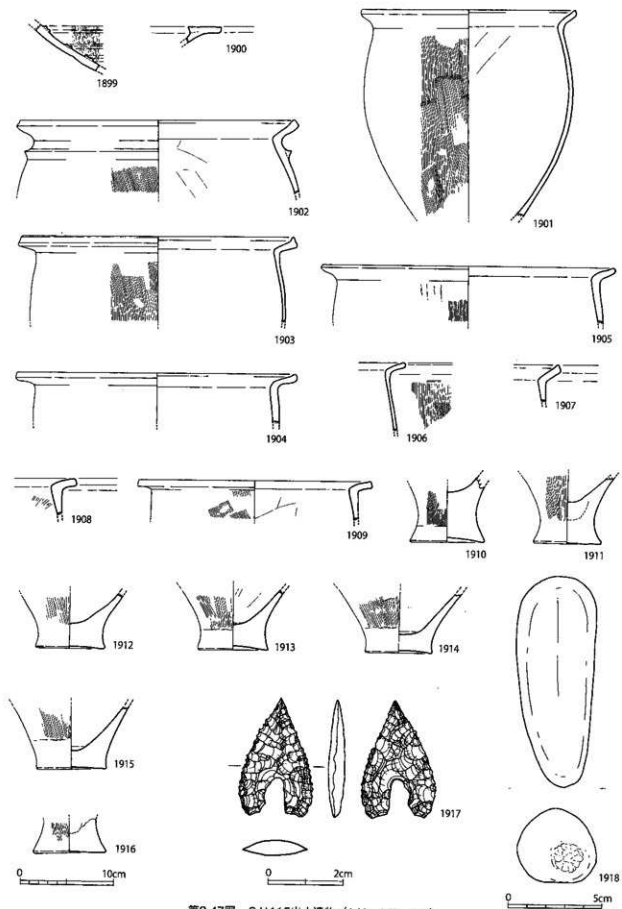


第8-46図 SH115実測図 (1/60)

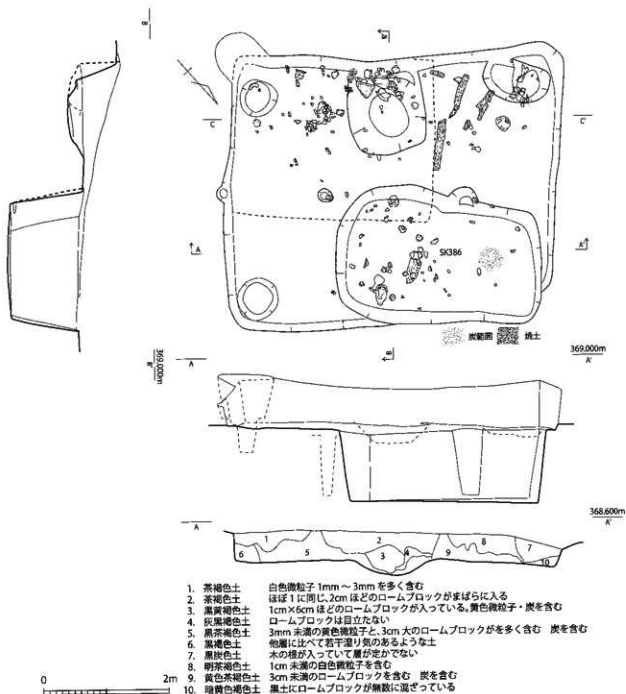
縁をなす竈、1921は小型竈で、外面はミガキがなされている。口縁端部はわずかに面をなし、沈線が廻る。1922はやや突出気味の平底を持つ竈底部。1923から1927は口縁端部を小さく上方に折り上げる甕、1924は口縁上面をやや窪ませる。1928は裾部で大きく外側に張り出す甕底部。1929は長頸壺の体部で、外面はミガキがある。S K 386出土資料と接合した。1930は大きく開く脚部。1932は高坏で、碗状の坏部に長脚が付く。内外面ともよくミガキが施されている。1931は鼓状をなす器台。1933は天草石の大型の砥石である。片面と側面に使用痕がある。1934は砂岩製の磨製石斧で、敲き石に転用している。

下層で図示できる出土遺物は9点である。1935と1936は口縁部が鋤先状になる甕、1937は壺の頸部、1938は甕の底部である。1939は裾部でやや外に張り出す甕底部。1940から1943は鼓形になる器台。

以上より、この竈穴建物の時期は弥生時代中期後半である。

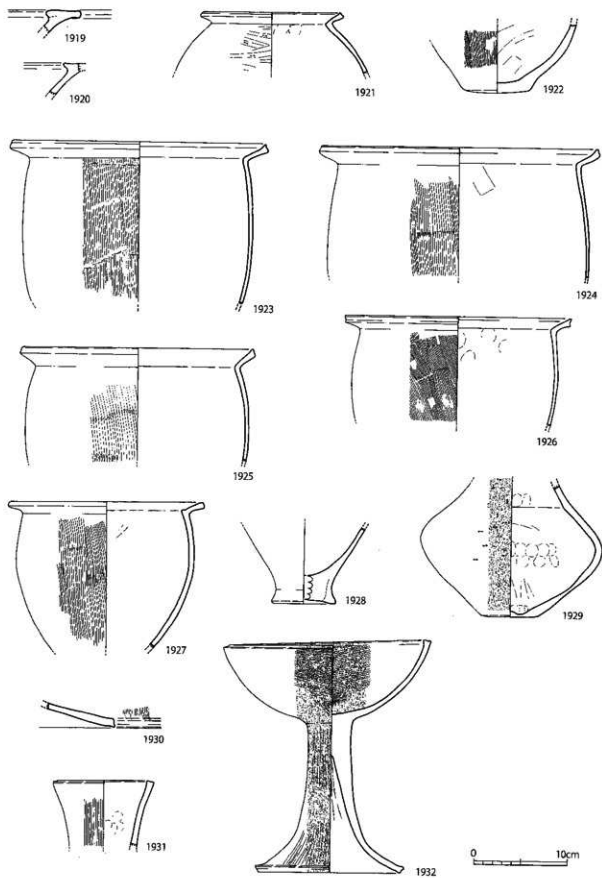


第8-47図 SH115出土遺物 (1/4, 1/1, 1/2)

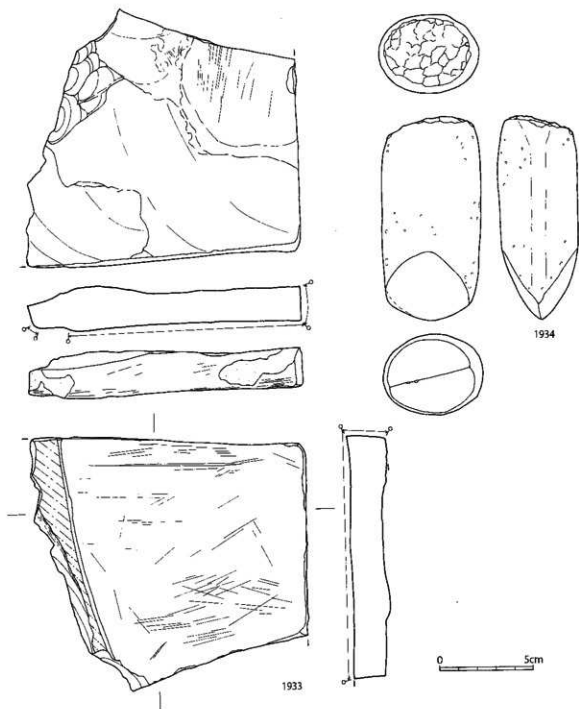


第8-48図 SH116実測図 (1/60)

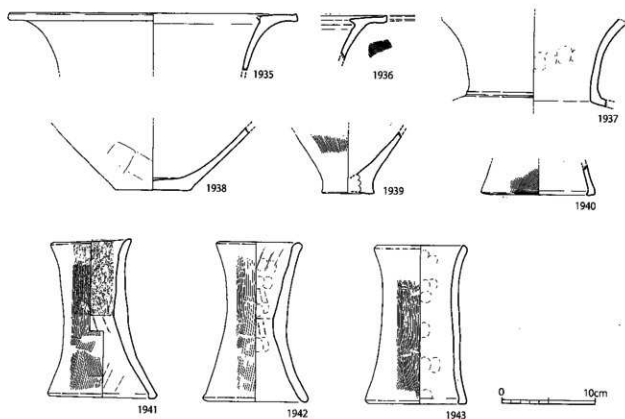




第8-49図 SH116出土遺物① (1/4)



第8-50図 SH116出土遺物② (1/2)



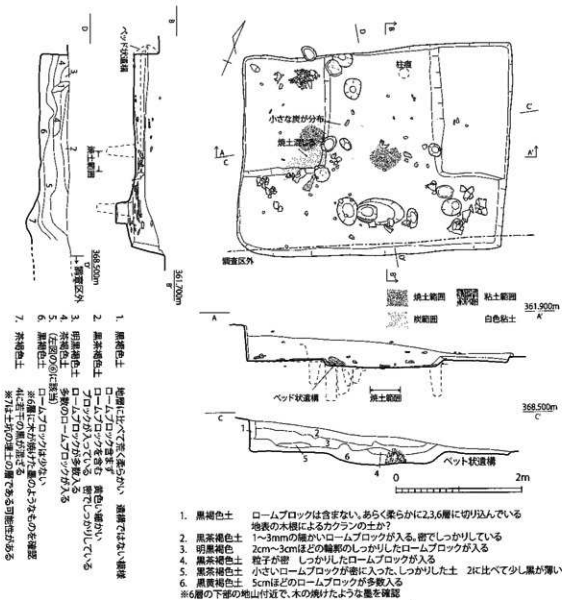
第8-51図 SH116出土遺物③ (1/4)

### SH117

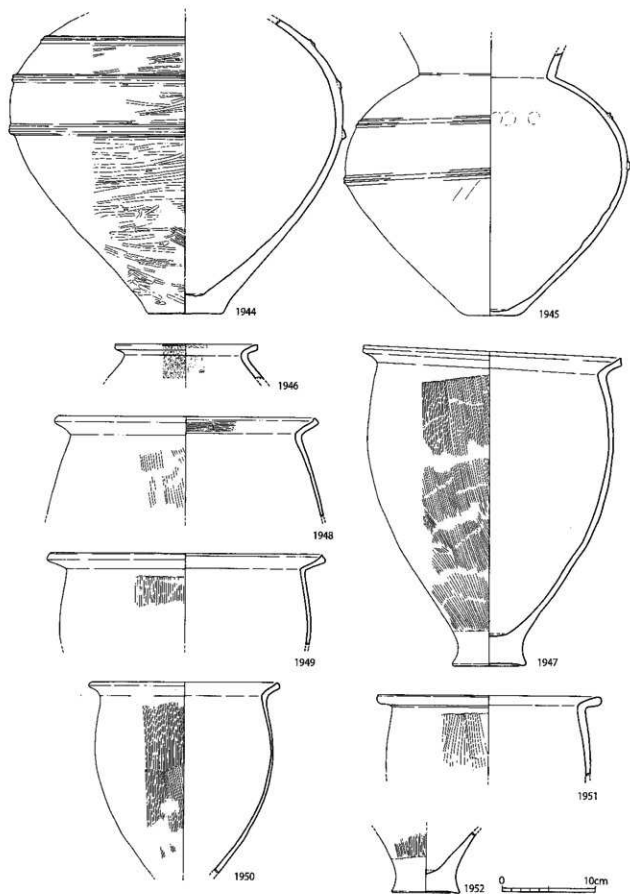
東西4.2m、南北3.2mの長方形を呈する竪穴建物である。北東角と北西角には15cmほど高くなった南北に長い長方形のベッド状遺構（西側長さ1.7m、幅1.3m、東側長さ2.0m、幅1.0m）がある。主柱穴は、そのベッド状遺構の内側に接するように掘られた2か所である。竪穴のほぼ中央部の直径約0.5m範囲は被熱を受けて焼土化しており、炉と考えられる。その西側の床面には小さな炭化物が広がっていた。また、西側のベッド状施設の南東角部にも焼土と炭化物が見られる。また、東側のベッド状遺構の表面や、竪穴の床面には部分的に白色粘土が置かれていた。炉の南側には長軸0.8m、短軸0.4m、深さ0.2mの土坑がある。

図示できる出土遺物は16点である。1944と1945は大型の壺で、1944は三条の断面M字状突帯が廻る。1945は同じ胴部に離れて二条の断面M字状突帯が廻る。1946は小型の壺で、外面にはベンガラが塗布される。1947から1953は甕である。1946は口縁端部を小さく摘み上げ、底部は裾部がやや外側に張り出す平底の甕である。1948と1949も口縁端部を上方に摘み上げる甕、1951は口縁端部が丸く収まる甕、1952は裾部で外側に張り出す平底の甕底部である。1953は大型の甕で、口縁端部を上方に摘み上げ、頸部下には二条の断面三角形の突帯が廻る。1955は器台、1954も器台か。1956と1957は台石である。いずれも安山岩製。1958は姫島産黒曜石製の打製石鏃である。1959は泥岩製の小型の石斧の未製品である。

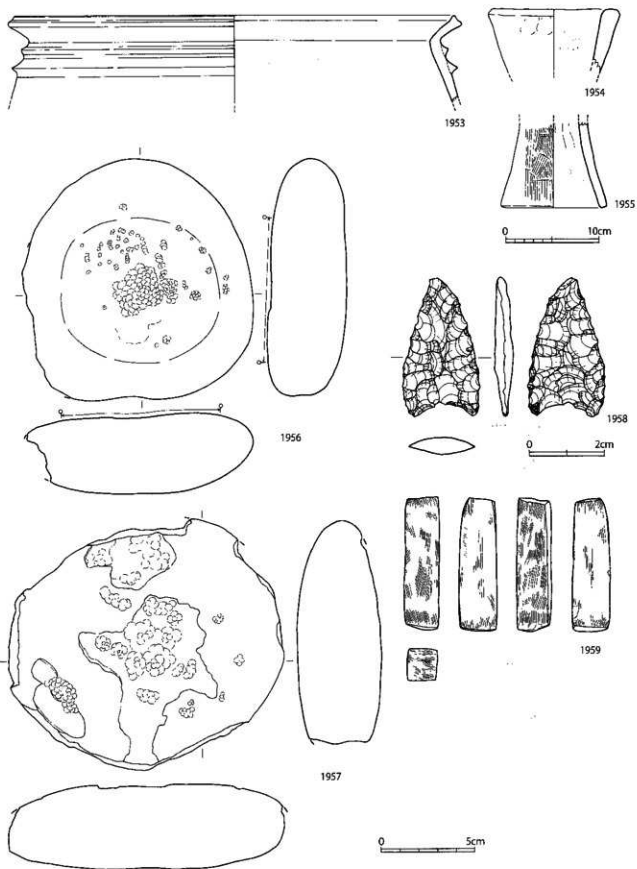
以上より、この竪穴建物の時期は、弥生時代中期後半である。



第8-52図 SH117実測図 (1/60)



第8-53図 SH117出土遺物① (1/4)



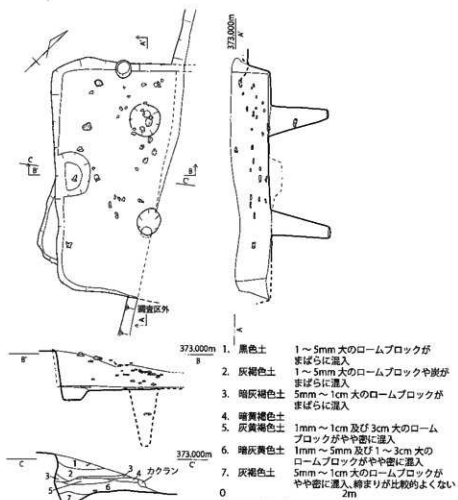
第8-54図 SH117出土遺物② (1/4, 1/1, 1/2)

SH118

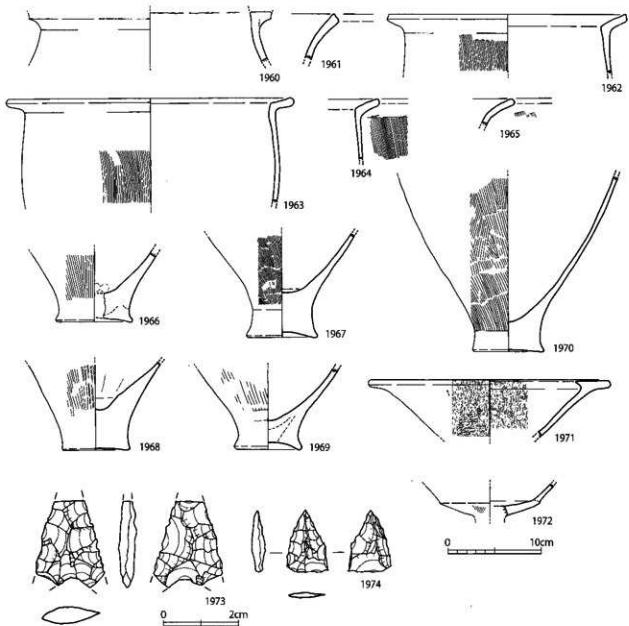
高台部分の北側の端に位置する。そのため北側半分程度が削られている。大きさは南北3.6m、東西は主柱穴の位置から考えて、3.0mほどとなるだろう。深さは0.56mである。主柱穴は東西に並ぶ2本で、深さは床面から1.0mほど深い。また、南側の壁中央付近には長さ0.7m、幅0.5m、深さ0.2mの長方形を呈する土坑がある。床面には炉を示すような痕跡はない。

図示できる出土遺物は16点である。1960の壺は口縁が部突帯状に肥厚するが、上面は剝離し形状は不明。1961は口縁部がやや立ち気味の小型の壺。1962から1965は口縁部が「く」字形に折れる甕の口縁部、1966から1970は平底の甕底部、1971は鋤先状をなす口縁部の高坏、1972は中位に屈曲部を持つ高坏である。1973と1974は打製石鏃。1973はサヌカイト製、1974は姫島産黒曜石製である。

出土遺物のうち1972については古墳時代前期のものであるが、これは6号周溝墓の周溝が重なる位置にあったため(実際にはほぼ周溝のものは削平されており、確認できなかった)、混入したものと考えられる。そのため、この竪穴建物の時期は弥生時代中期後半である。



第8-55図 SH118実測図 (1/60)



第8-56図 SH118出土遺物 (1/4, 1/1)

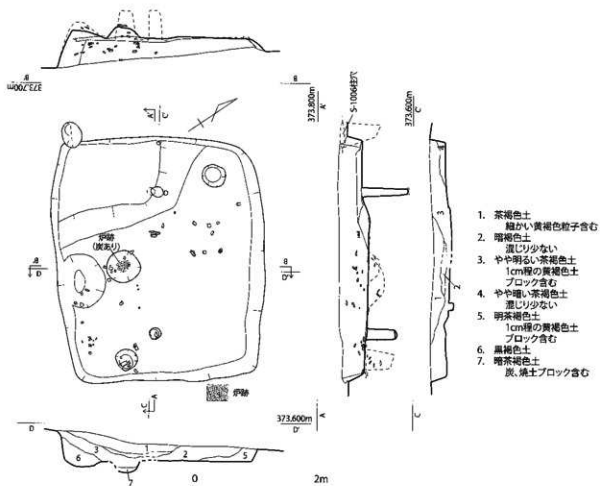
## SH119

南北3.3m、東西3.85m、深さ0.45mのやや長方形を呈する竪穴建物である。調査区内の最も高い丘陵上に位置している。床面には南西角部に1.5m×1.0m、高さ0.13mのベッド状遺構がある。また、中央やや南寄りに焼土と炭化物を伴った地床炉があり、その南側壁際には長軸8.5m、深さ0.1mの皿状の土坑がある。柱穴は3か所で確認されたが、この建物に伴うものではなかろう。堆積状況は自然堆積である。

図示できる出土遺物は7点である。1978は鏃先状をなす口縁を持つ壺、1976は口縁端部を小さく摘み上げる甕、1975と1977は鏃先状をなす口縁部に半球形状の坏部を持つ高坏、1979はやや厚手の鼓形を呈する甕台、1980は円形に加工された土器片加工品である。1981は石包丁の破片である。

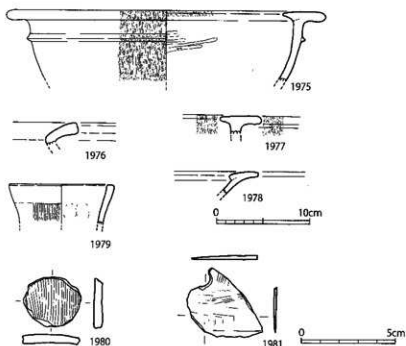
以上の資料から、この竪穴建物の時期は弥生時代中期後半である。





1. 茶褐色土  
細かい黄褐色粒子含む
2. 暗褐色土  
澁じり少ない
3. やや明るい茶褐色土  
1cm層の黄褐色土  
ブロック含む
4. やや暗い茶褐色土  
澁じり少ない
5. 明茶褐色土  
1cm層の黄褐色土  
ブロック含む
6. 黒褐色土
7. 暗茶褐色土  
灰、焼土ブロック含む

第8-57図 SH119実測図 (1/60)



第8-58図 SH119出土遺物 (1/4)

## SH120a、b

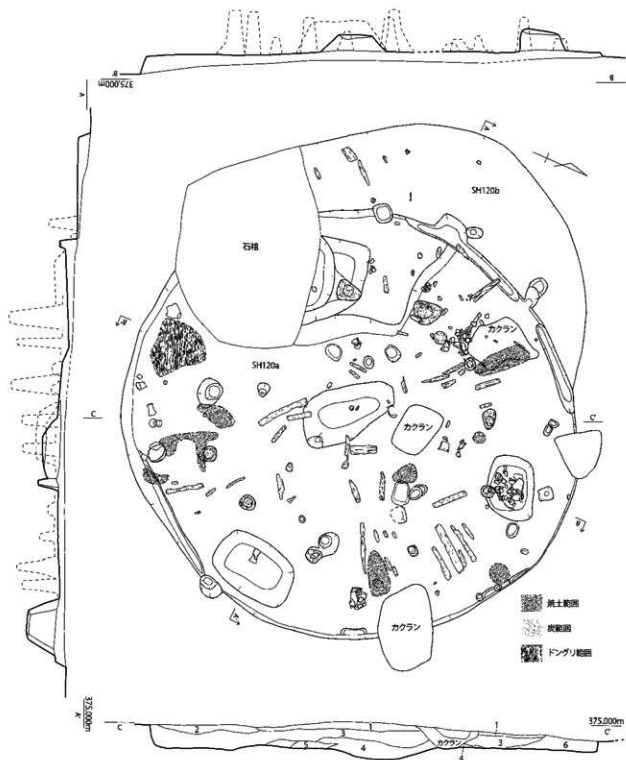
SH120aは標高の最も高い地点にある直径6.7～7.1m円形の竪穴建物である。古墳の主体部(箱式石棺)によって一部壊されている。深さは0.3mほどで、床面全体に炭化材と焼土が広がるので、焼失家屋である。主柱穴は現状で10か所確認できるが、箱式石棺に壊された部分にも1本あったと考えられるので、11本となるであろう。また、柱が床面から20cmほど炭化した状態で立っているものもあった(写真図版169)。

床面南部では、直径0.3mほどの範囲から炭化したドングリの実が大量に出土した。また、床面の西側は0.1m高くなったベッド状遺構がある。さらに壁際には壁溝が巡る部分がある。中央には炉と思われる浅い皿状の土坑(長径1.5m)があり、東側と北側には、それぞれ0.95m×1.3m、深さ0.3m、1.0m×0.7m、深さ0.4mの長方形を呈する土坑がある。

図示できる出土遺物は39点である。1982から1988は竈で、1982は胴部に二条の断面台形の突帯を廻らせる。1983は無頸竈で、口縁端部が小さく外方に張り出す。外面にはミガキが施される。1984から1988は平底の竈底部である。1989から2004は甕である。1989から1999は、口縁端部を小さく上方に積み上げる甕、2001から2003は平底をなす甕の底部。2004は口縁部が勳先状をなし、外面にベンガラを塗布する甕。頸部下に一条の断面M字状の突帯を廻らせる。2005は口縁端部を小さく積み上げ、あまり張らない体部を持つ平底の鉢。2006から2011は鼓状を呈する器台。2012は安山岩製の台石、2013は安山岩製の轆き石、2015は同じく磨り石、2014は片岩製の砥石、2016は泥岩製の石包丁、2017は旧石器時代の流紋岩製の剥片である。

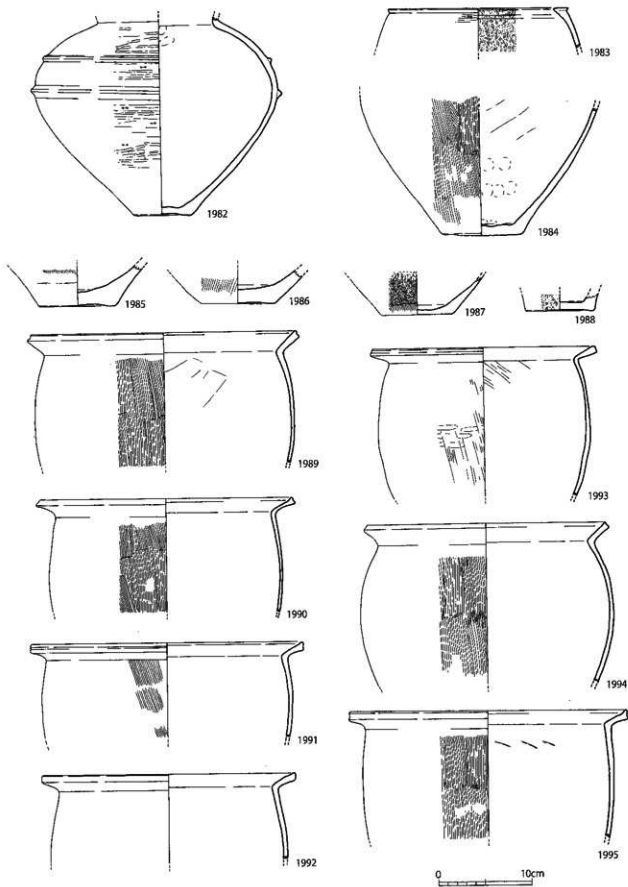
以上から、この竪穴建物の時期は弥生時代中期後半である。

また、SH120bはほぼ同位置でSH1007に大部分を切られている円形の竪穴建物である。出土遺物はなかった。

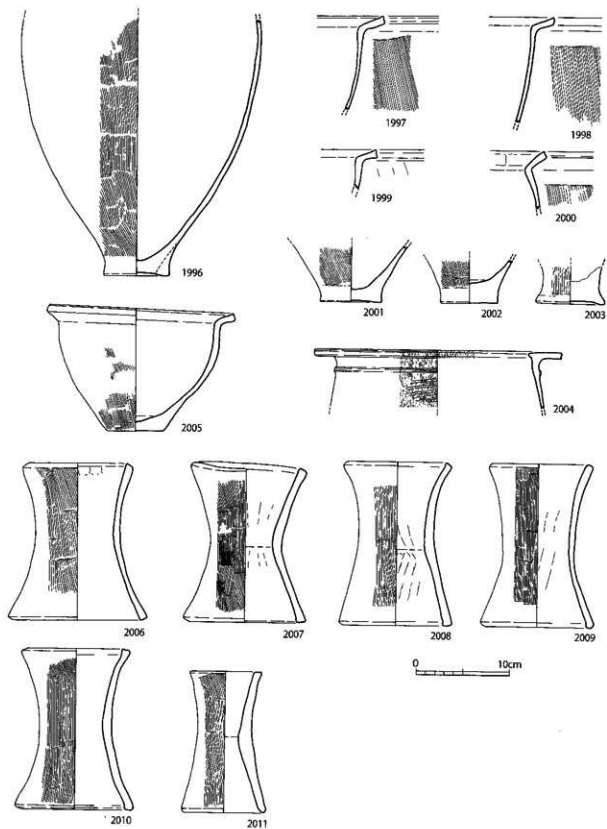


1. 黒褐色 細かい黄褐色土(ローム)含む
2. 灰茶褐色 細かいロームを含む
3. 明茶褐色 ロームブロック1~5cmのものを含む
4. 灰茶褐色 炭化物多く含む、1cm 次のロームブロックを含む
5. 灰茶褐色 炭化木を多く含む
6. 灰茶褐色 焼土ブロック含む 下半に炭化物を含む

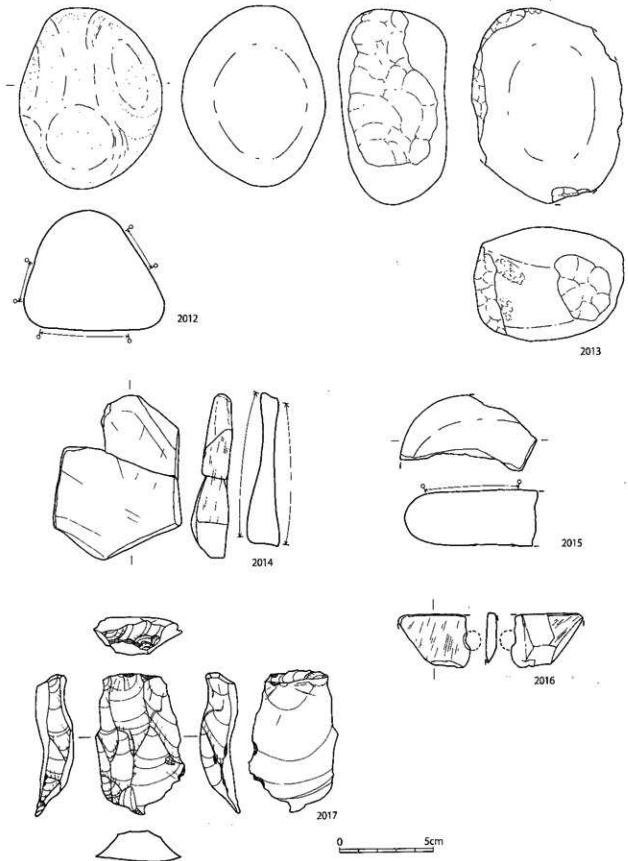
第8-59図 SH120a、b実測図 (1/60)



第8-60図 SH120 a、b 出土遺物① (1/4)



第8-61図 SH120 a、b 出土遺物② (1/4)



第8-62図 SH120 a、b出土遺物③ (1/2)

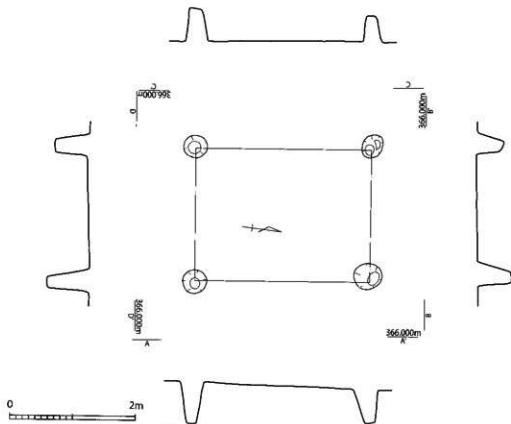
(2) 掘立柱建物

SB14

調査区の北端部で確認された掘立柱建物であるが、後の第16次調査（2020年度刊行予定報告書）で内部に土坑が確認されているので、本来は土坑で扱われるべき遺構である。1間×1間の4本柱である。

図示できる出土遺物は2点である。2018は口縁部が「く」字形に折れる甕、2019は裾部で踏ん張る寛底部である。

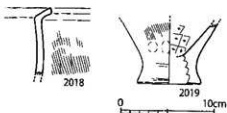
これらの遺物の時期は弥生時代中期後半である。



第8-63図 SB14実測図 (1/60)

SB15

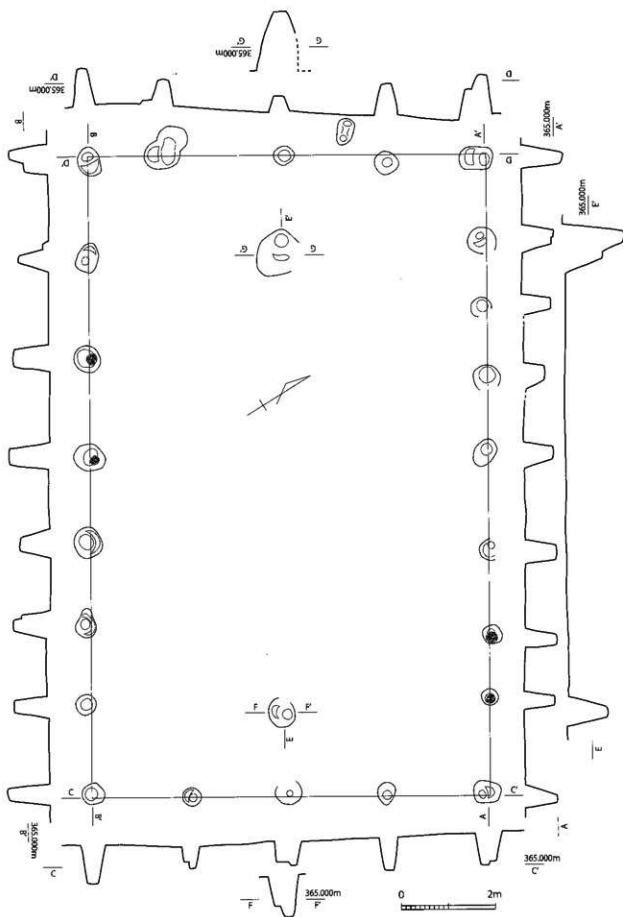
SB16、SB17と重なるように検出された掘立柱建物である。SB16から切られているが、SB17との関係はわからない。略東西方向の桁行の内、柱間では北側は8間、南側は7間となる。桁行の長さは13.5mである。梁間は東西とも4間、長さは8.6mである。柱で囲まれた内部の面積は約116.3㎡となる。桁行の南辺と梁行の東辺のそれぞれの柱穴間隔はほぼ等しいものの、他の二辺は不揃いとなる。建物内中央で妻側に近い位置にそれぞれ1本の横持ち柱がある。側柱の直径は大きいもので0.6m、小さいもので0.4mほどで、P形を呈しており、柱痕が残るものがあることから、柱を抜く行為は行われていなかったと考えられる。側柱の柱穴の深さは0.7から1.0mほどである。横持ち柱の深さは、西側が1.3m、東側が0.9mで、西側については柱を抜いた可能性が高い。主軸（桁行方向）はN57Eとなる。



第8-64図 SB15出土遺物 (1/4)

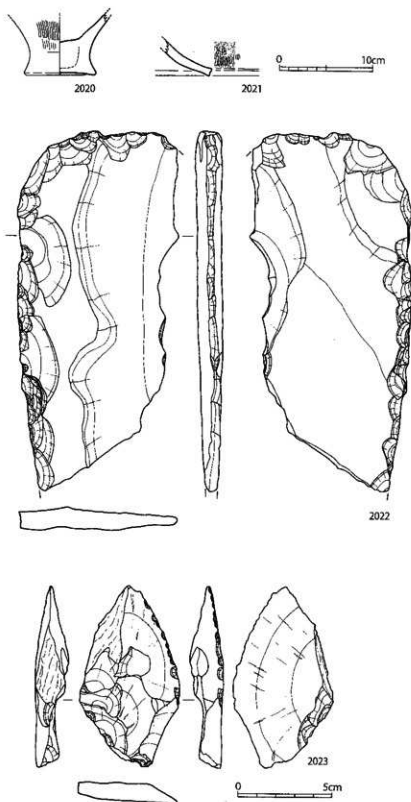
図示できる出土遺物は4点である。2020は裾部で踏ん張るやや厚手の寛底部、2021は高坏の脚か。2022は扁平打製石斧で途中で折れている。2023は旧石器のスクレイパーで、凝灰質泥岩製。

遺物、さらには柱並びの不揃いなど、周辺の遺構の状況から弥生時代中期のものだと判断した。



第B-65図 SB15実測図 (1/80)





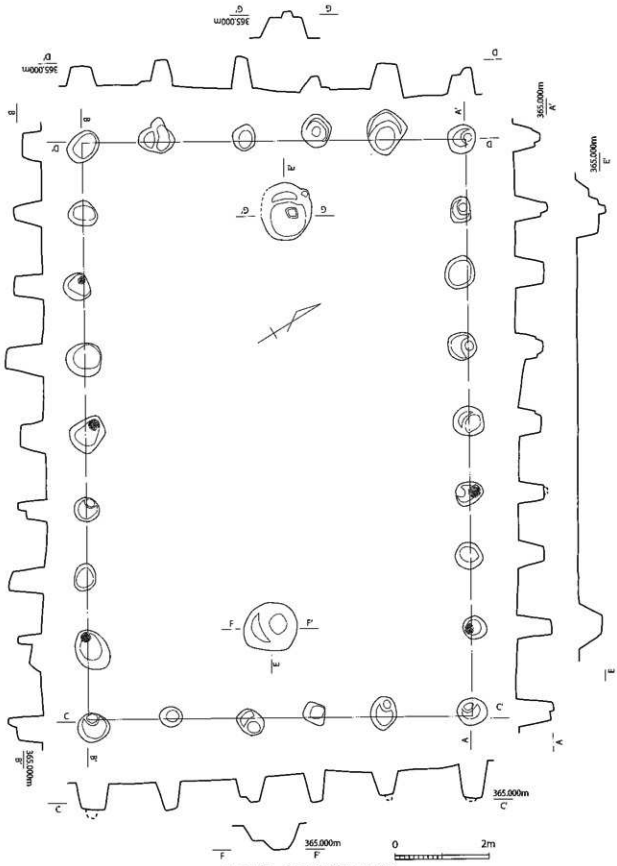
第8-66図 SB15出土遺物 (1/4, 1/2)

SB16

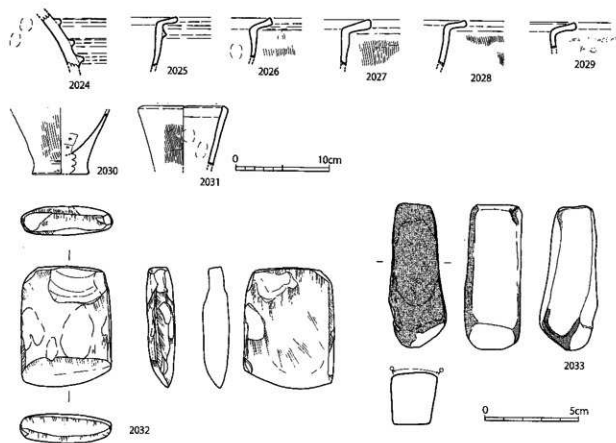
SB15を切って、ほぼ同一場所に建てられた掘立柱建物で、桁行8間で12.2m、梁行5間で8.0mで、柱で囲まれた内部の面積は約97.6㎡となる。側柱の直径は0.5から0.8mで、深さは0.3から0.8mである。いずれもほぼ円形を呈しており、柱痕が残るものがあることから、柱を抜く行為は行われていなかったと考えられる。また、建物内中央で裏側に近い位置にそれぞれ1本の棟持ち柱がある。直径は両側のもので1.1から1.2m、東側のもので1.0から1.1mで、深さはいずれも0.5mである。棟持ち柱はいずれも抜かれた可能性が高い。

図示できる出土遺物は8点である。2024は壺の肩部の破片で、断面台形状の突帯が三条廻る。2025から2029は口縁端部が小さく縮みあげられる甕。2025は口縁下に一条の突帯を廻らせる。2030は裾部がやや踏ん張る甕の底部。2031は鼓形になる器台。2032は泥岩製の小型片刃の磨製石斧である。2033は泥岩製の四角柱をした工具で、図のトーンを貼った部分は擦っている。

以上の土器や柱並びの不揃いなどところや、周辺の遺構の状況から弥生時代中期後半のものだと判断した。



第8-67図 SB16実測図 (1/80)



第8-68図 SB16出土遺物 (1/4, 1/2)

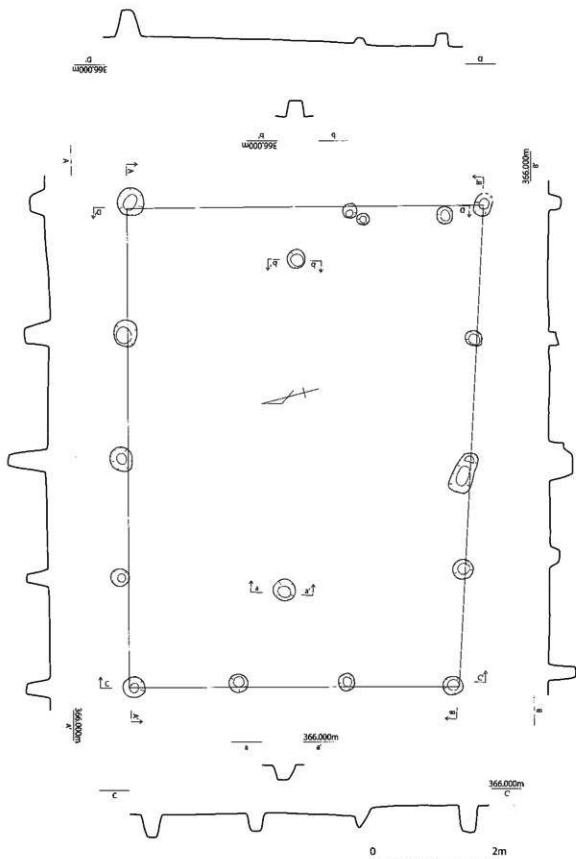
### SB17

SB15とSB16に重なるように作られた掘立柱建物である。ただし、主軸（桁行方向）は大きく異なり、N75Eとなる。建物は3間×4間であるが、梁行の東側の一辺では柱穴が一所確認できていない。検出できたものも浅かったため、上部が削平されたものであろう。桁行は7.5m、梁行は5.5m、柱に囲まれた面積は41.25㎡となる。また、建物内中央で妻側に近い位置にそれぞれ1本の棟持ち柱がある。

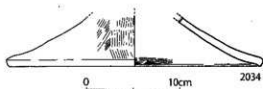
柱穴からの出土遺物は1点で、2034は蓋と考えられる。

唯一の遺物や柱並びの不揃いなところ、および周辺の遺構の状況から弥生時代中期のものと判断した。

SB15とSB16については、第1次調査において、西側の棟持ち柱のみを土坑として調査している。そのため、今回報告にあたってやや混乱が生じ、本報告中のSK369が、本来はSB16の棟持ち柱であるにもかかわらず、別遺構として取り扱ってしまった。そのため、SK369出土遺物は、本来はSB16の資料であるので注意願いたい。



第8-69図 SB17実測図 (1/60)

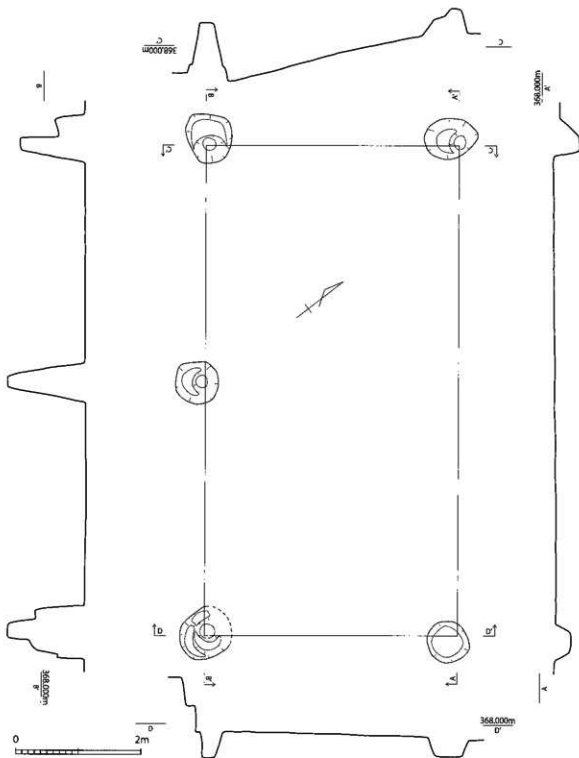


第8-70図 SB17出土遺物 (1/4)

SB18

S K150、S K386に柱穴を切られている孤立柱建物で、東西2間（北側は消滅）、南北1間に復元できる。柱穴で囲まれた大きさは、7.8m×4.0mの31.2㎡である。柱穴は、直径0.7～0.9mほどで、深さは、残りの良い下側（南側）で1.25mと深い。

柱穴からの遺物の出土はない。

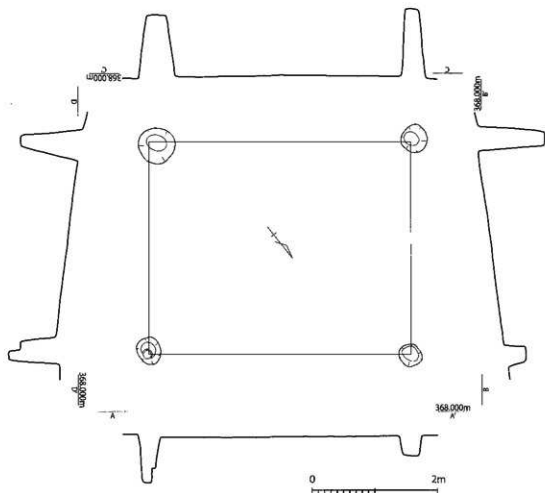


第8-71図 SB18実測図 (1/60)

## SB19

SB18に並ぶように建つ1間×1間の掘立柱建物である。東西は4.15m、南北は3.35mあり、柱穴で囲まれた面積は13.9㎡となる。

柱穴からの遺物の出土はない。



第8-72図 SB19実測図 (1/60)

## SB20

調査区で最も高い台地上で検出された掘立柱建物である。桁行は東側7間、西側4(+a)間、梁行は北側2間、南側4間と、不揃いである。屋内には2本の棟持ち柱があるが、特に大きいということはない。側柱の直径は0.1~0.46m、深さは0.1~0.65m、棟持ち柱は直径0.5m、深さは0.8mである。建物の大きさは、南北10.6m、東西6.5m、柱で囲まれた面積は68.9㎡である。

遺物の出土はないが、柱の不揃いさや棟持ち柱のあり方などから弥生時代の建物と判断した。



## SB21

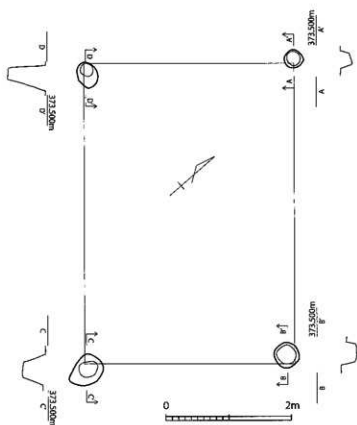
4次調査区の東端、すなわち丘陵縁辺で確認された掘立柱建物である。1間×1間で、長軸は4.6m、短軸は3.2mあり、面積は14.7㎡となる。SB20とほぼ直行しており、何らかの関係が想定できる。

出土遺物はないが、弥生時代のものであろう。

## SB22

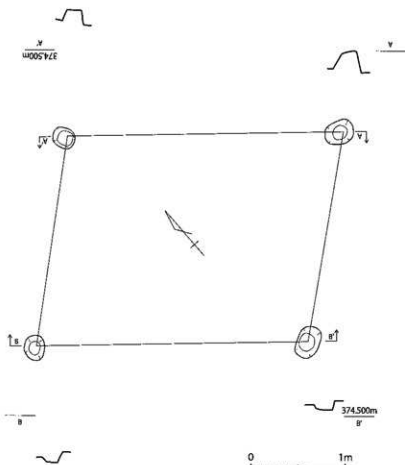
丘陵が南に向けてやや下りかかった地点で確認された掘立柱建物である。1間×1間で、長軸は2.95m、短軸は2.2mあり、面積は6.5㎡となる。

出土遺物はないため、時期は不明であるが、状況から弥生時代のものと考えられる。



第8-74図 SB21実測図 (1/60)





第8-75図 SB22実測図 (1/40)

### (3) 土坑

#### SK365

東西3.15m、南北2.7m、深さ1.05mの長方形を呈する大型の土坑である。床面からは柱穴や土坑などはまったく検出されなかった。堆積状況は自然地積である。

図示できる出土遺物は3点である。2035と2037は平底の甕。2036は口縁端部を小さく上方に積み上げる甕である。

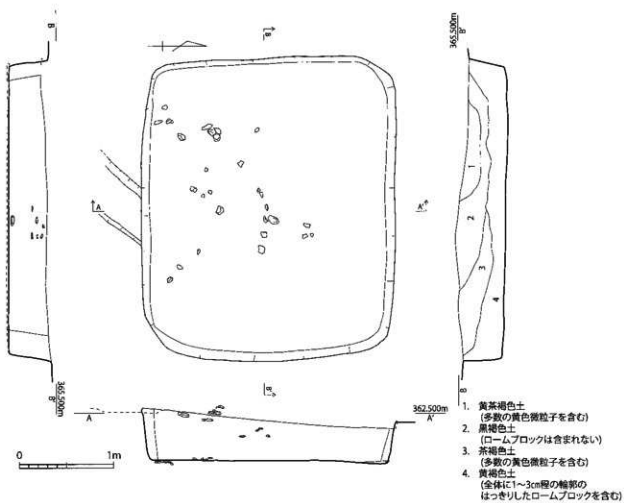
時期は弥生時代中期後半である。

#### SK366

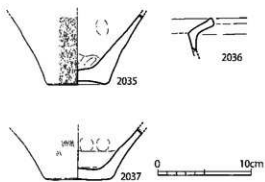
直径1.4mほどの不整形円形を呈する土坑である。上部が削平されており、残存する深さは0.08mほどである。

図示できる出土遺物は3点で、2038は大きく開く広口壺の頸部で内外面ともミガキが施されている。2039は口縁部が鋤先状を呈する甕で、口縁下に断面M字の突帯が廻る。2040は口縁端部を上方に積み上げる甕である。

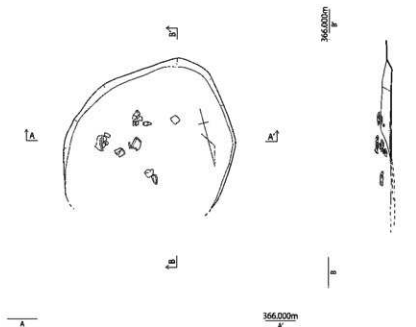
この土坑の時期は弥生時代中期後半である。



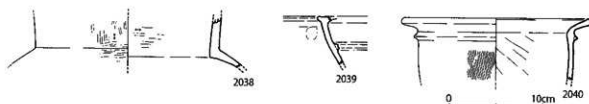
第8-76図 SK 365実測図 (1/40)



第8-77図 SK 365出土遺物 (1/4)



第8-78図 S K 366実測図 (1/40)



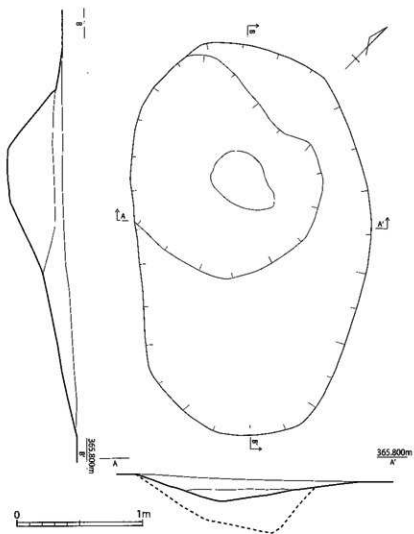
第8-79図 S K 366出土遺物 (1/4)

### S K 367

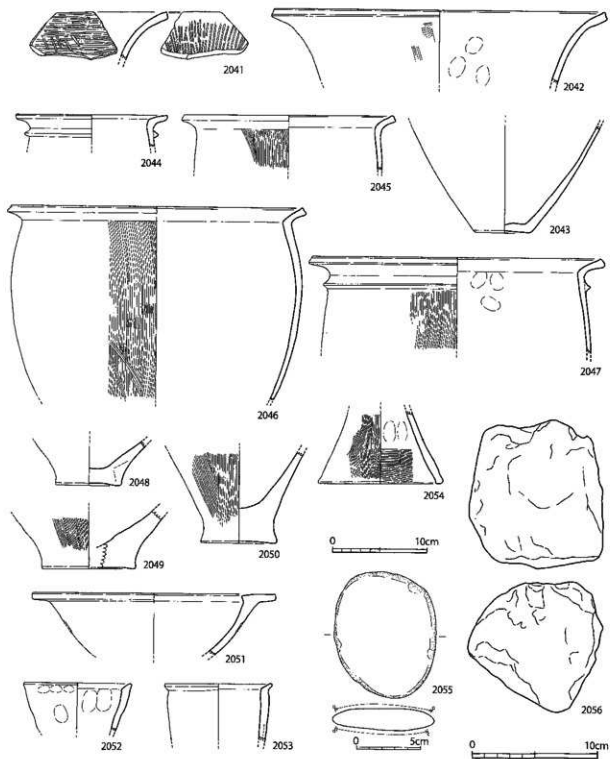
長径3.1m、短径1.9mの楕円形を呈する土坑で、北西に向かって徐々に深くなる。一番深いところで0.5mである。この土坑がある位置は、小型の掘立柱建物であるS B 54のすぐ北側である。掘立柱建物と何らかのつながりをもった土坑であると考えられる。

出土遺物は図示できるもので16点ある。2041は内外面ともよく磨かれた壺の口縁部。2042は広口壺、2043は壺の底部である。2044は口縁部下に突帯を廻らせる小型の甕、2045～2047は口縁端部を小さく積み上げる甕、2048から2050は平底をなす甕の底部。2051は口縁部が鋸先状をなす高坏、2052と2053は小型土器で、口縁端部を外方に小さく積み出す。2054はラッパ状に開く脚部、2055は泥岩製の磨り石、2056は用途不明の凝灰岩製の製品である。

この土坑の時期は、弥生時代中期後半である。



第8-80図 S K367実測図 (1/30)



第8-81図 S K367出土遺物 (1/4, 1/3)

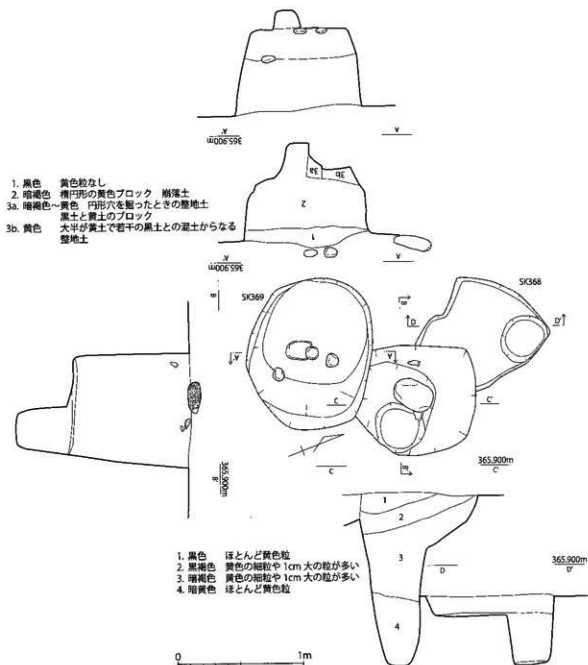
## S K 368

S B 15によって切られた土坑である。東西0.7m、南北0.8m（推定）のやや長方形になる。深さは0.16mで、北東角にピットがある。出土遺物はない。

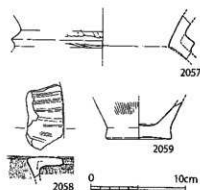
## S K 369

土坑としたが、本来はS B 16の様持ち柱である（450ページ参照）。長径1.2m、短径0.96mの楕円形を呈する。ほぼ中央に柱を据える穴があり、土層から判断して、柱を抜いたと考えられる。

図示できる出土遺物は3点で、2057は頸部に突帯が廻る壺、2058と2059は甕である。出土遺物から、この土坑の時期は弥生時代中期後半である。



第8-82図 S K 368, 369実測図 (1/30)



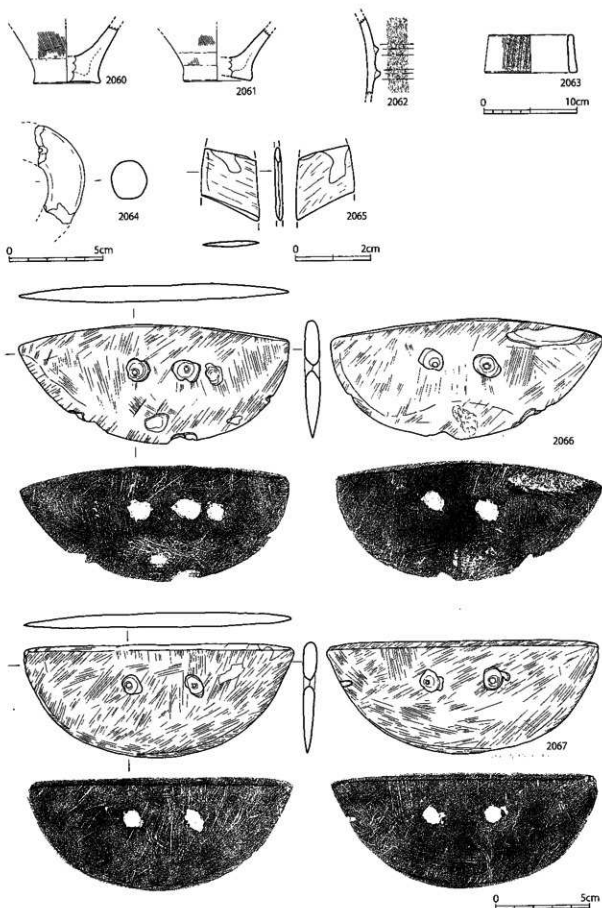
第8-83回 S K369出土遺物 (1/4)

S K370 (第8-34回参照)

S H30110とS K372に切られた土坑である。そのため全形は不明であるが、東西幅は1.6m、南北に2.2m以上となる。深さは0.15mである。

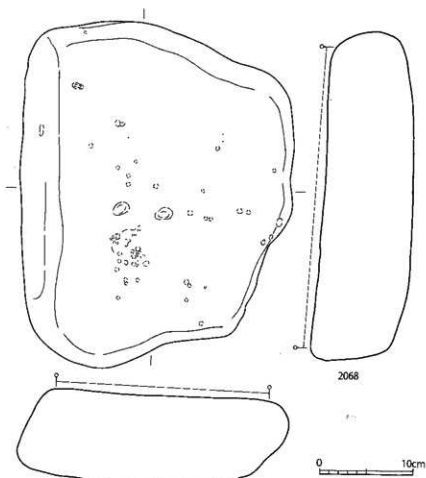
図示できる出土遺物は10点である。2060と2061は平底の壺底部である。2062は壺の胴部で、二条の断面三角形の突帯が廻る。2063は直径8.8～9.8cmに復元できるリング状の土製品。高さは4cm。外面は暗文が施され、ベンガラが塗布される。上下は接合面で剥がれた可能性も考えたが、リング状をなすと判断した。2064は土製の勾玉で、両端部が欠損している。2066と2067は立岩産輝緑凝灰岩製の石包丁である。2065は結晶片岩製の磨製石鏃である。2068は安山岩製の白石で、上面に磨り面がある。

以上から、この土坑の時期は弥生時代中期後半である。



第8-84図 SK370出土遺物① (1/4, 1/2, 1/1)





第8-85図 SK370出土遺物② (1/4)

SK371 (第8-34図参照)

S H110を切っている土坑で、東西1.15m、南北0.8m、深さ0.25mである。

出土遺物はない。

SK372

東西4.7-5.5m、南北3.5-4.0m、深さ0.3mのやや台形を呈する土坑である。床面には支柱穴や炉跡などはなく、土坑と判断した。

図示できる出土遺物はない。

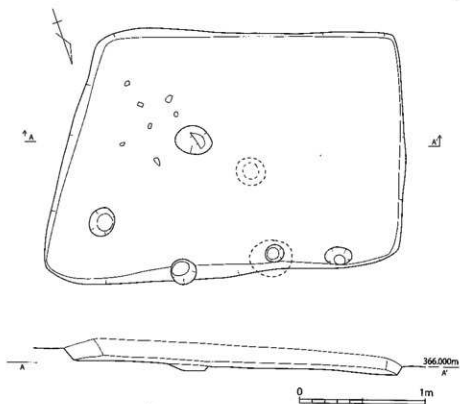
SK373

一辺が2.6mのほぼ正方形を呈する土坑である。深さは残りの良い南側で0.6mである。遺物は、床面にロームブロック混じりの茶褐色度が薄く堆積した後に投げ込まれた様に堆積している。埋土は自然堆積である。

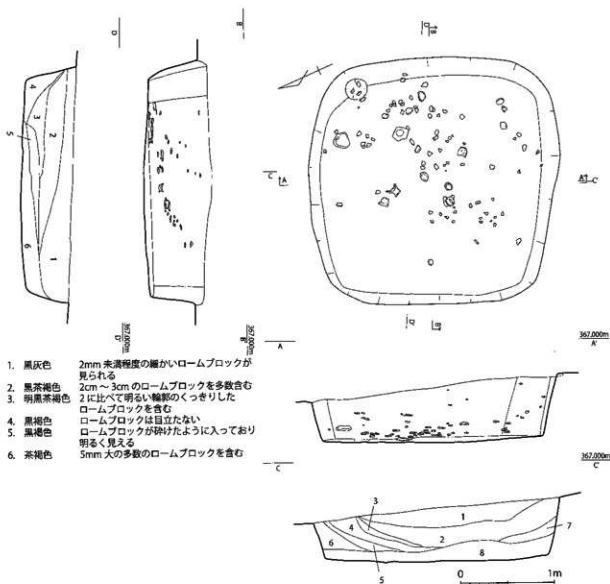
図示できる出土遺物は9点である。2069は壺の平底の底部。

2070は口縁端部を小さく摘み上げる甕。2071から2076は裾部でやや外側に踏ん張る甕の底部。2077は、口縁部が鋤先状になる甕。ペンガラが塗布されている。2078は磨り石で、両面とも使用痕がある。

以上から、この土坑の時期は弥生時代中期後半である。



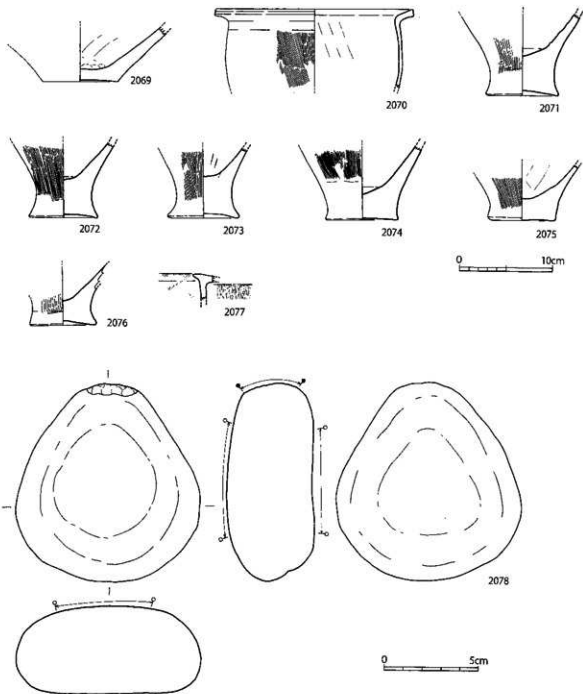
第8-86図 SK372実測図 (1/30)



1. 黒灰色 2mm 未満程度の細かいロームブロックが見られる
2. 黒茶褐色 2cm～3cmのロームブロックを多数含む
3. 明黒茶褐色 2に比べて明るい輪郭のくっきりしたロームブロックを含む
4. 黒褐色 ロームブロックが目立たない
5. 黒褐色 ロームブロックが砕けたように入り明るく見える
6. 茶褐色 5mm大の多数のロームブロックを含む

1. 黒灰色 2mm 未満の細かいロームブロックが多数 大きいロームブロックが砕けていて、そのせいで所々明るくなっている D-D'の1と同層とみられる
2. 黒茶褐色 2cm～3cmのロームブロックを多数含む、他層と比べてロームブロックが大きい 左図の2と同じ層とみられる
3. 明黒茶褐色 ロームブロックは少ない 左図の3と同層とみられる
4. 黒褐色 ロームブロックは目立たない 左図の5と同層とみられる
5. 茶褐色 薄い風が通じる ロームブロックの破片がまばらにあり、明るく見える
6. 黒褐色 ロームブロックは目立たない
7. 黒褐色 微粉のロームブロックが少々入る
8. 茶褐色 輪郭のくっきりした1mm大のロームブロックが多数入る (8層部分に手のひら大の土器の底部が出土)

第8-87図 SK373実測図 (1/40)



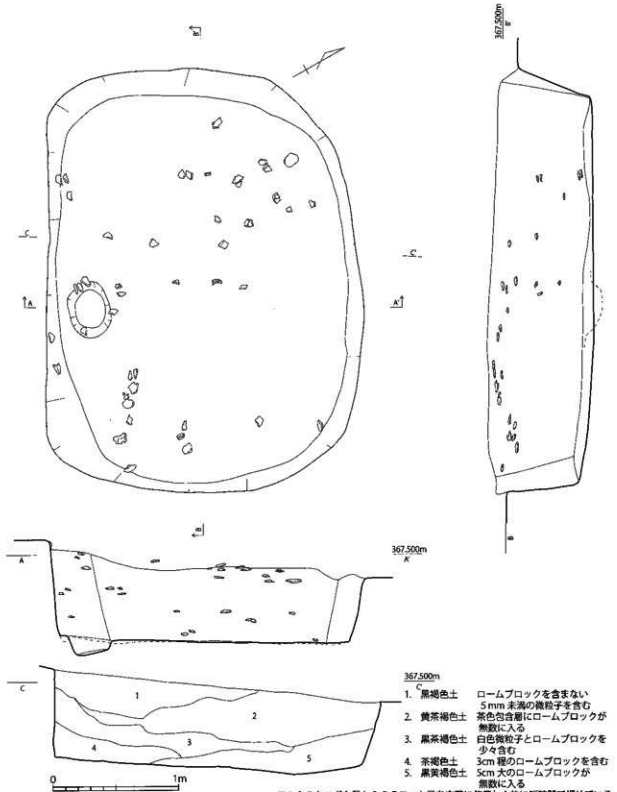
第8-88図 SK373出土遺物 (1/4, 1/2)

SK374

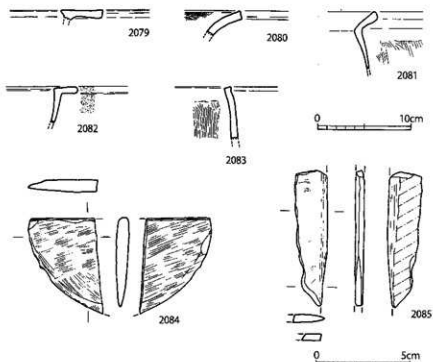
東西3.35m、南北2.5m、深さ0.8mのやや隅丸の長方形を尾する土坑である。床面には南側壁際ほぼ中央に0.32m×0.45mの楕円形をした、深さ0.15mのピットがあるのみで、他には遺構はない。堆積状況は、クロボク土とロームを互層にして、人為的に埋めている。遺物は堆積土からはほぼ満遍なく出土している。

図示できる出土遺物は7点である。2079は口縁部が鋤先状をなす壺か。2080は口縁部が大きく開く壺の口縁部か。2081は口縁端部を小さく上方に摘み上げる甕。2082は口縁部が逆「L」字状に屈曲する高坏か。2083は器台。2084は泥岩製の石包丁で、3分の2は欠損。両刃である。2085は泥岩製の石剣の破片である。

この土坑の時期は弥生時代中期後半である。



※1,3のクロボク層と2,5のローム層を交互に使用し人的に短時間で焼けている  
第8-89図 SK374実測図 (1/30)



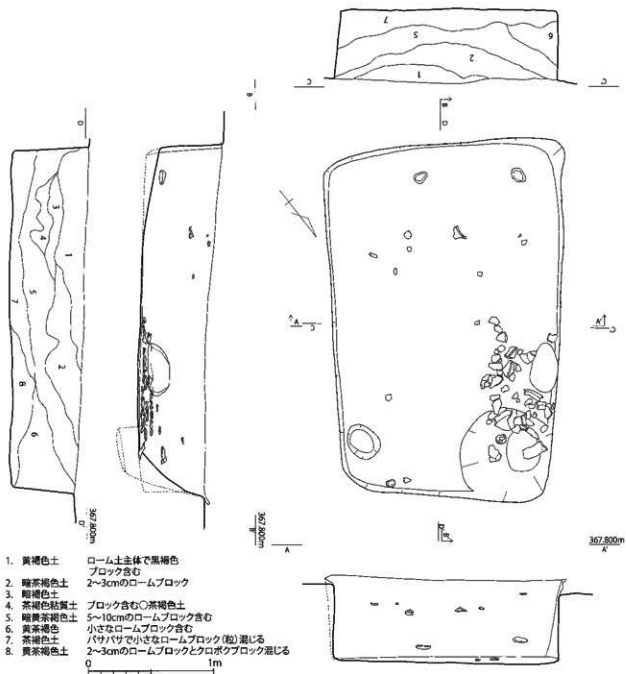
第8-90図 SK374出土遺物 (1/4, 1/2)

SK375

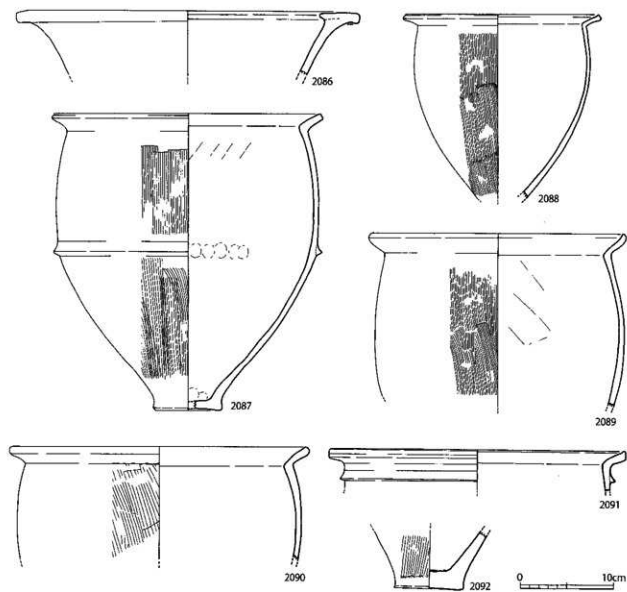
長軸(南北)2.75m、短軸1.6-1.9m、深さ0.6mの若干台形状を呈する土坑である。北角部の床面には直径0.75m、深さ0.2mのピットがある。また、他にも東側角部付近にもピットがあるが、この土坑に伴うものか判断できなかった。遺物は北側角部の床面直上からまとめて出土している。堆積状況は、ロームブロックを含む土で人為的に埋められている。

図示できる出土遺物は9点である。2086はL縁部が鎌先状になる甕。2087は胴部中位に断面三角形の突帯が廻る甕。2088から2091は口縁端部を小さく上方に摘み上げる甕で、2091は口縁部下に突帯が廻る。2093は安山岩製の台石で、中央部が窪む。2094は安山岩製の敲き石である。

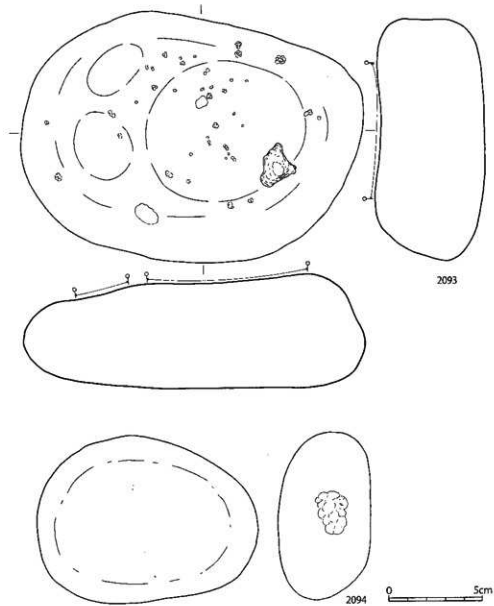
この土坑の時期は、弥生時代中期後半である。



第8-91図 S K 375実測図 (1/30)



第8-92図 S K 375出土遺物① (1/4)



第8-93図 S K375出土遺物② (1/2)

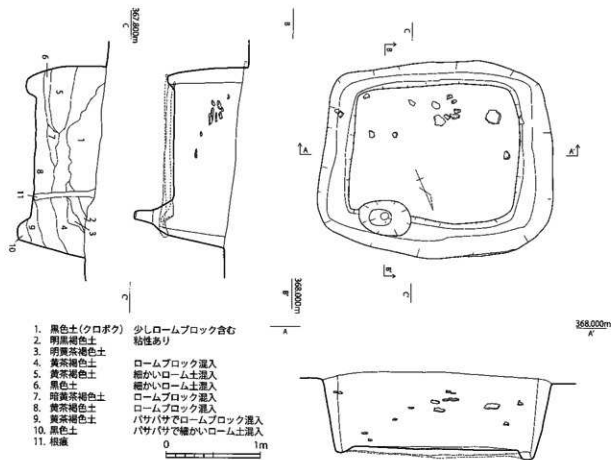
S K376

東西2.5m、南北2.1mのやや長方形を呈する土坑である。残存する深さは1.3mである。床面は幅0.2mで深さ0.15mほどの溝が全周する。堆積状況は、ロームブロックが混じったクロボク土を人為的に埋め、最後の中央部の窪みとなったところに黒褐色土が堆積する。遺物は主に最上層のクロボク層直下から多く出土している。

図示できる出土遺物は3点である。2095は平底の壺底部。2096は鋤先状口縁の甕で、口縁下に断面M字の突帯を廻らせる。2097は蓋の端部と考えられる。内外面ともヨコナデである。

この土坑の時期は弥生時代中期後半である。





第8-94図 S K 376実測図 (1/40)

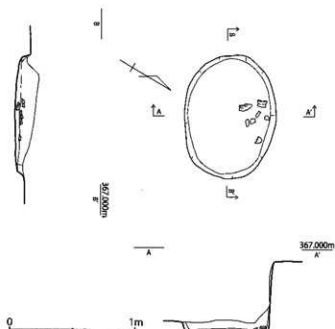


第8-95図 S K 376出土遺物 (1/4)

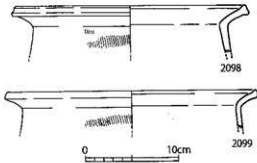
S K 377

第3次調査区のはほぼ中央で確認された土坑である。長径0.96m、短径0.75mの楕円形で、深さは0.55cmである。

同示できる出土遺物は2点で、2098と2099は口縁端部を小さく上方に摘み上げられる甕である。時期は弥生時代中期後半である。



第8-96図 S K 377実測図 (1/30)



第8-97図 SK 377出土遺物 (1/4)

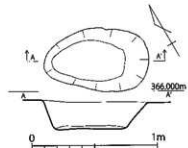
S K 379

長軸2.4m、短軸1.06mの略長方形を呈するが、やや湾曲するように曲がっている。残存する深さは0.25mである。柱穴は4か所あるが、いずれもこの土坑に伴うものではなかろう。遺物は床面からいづれも浮いて出土している。

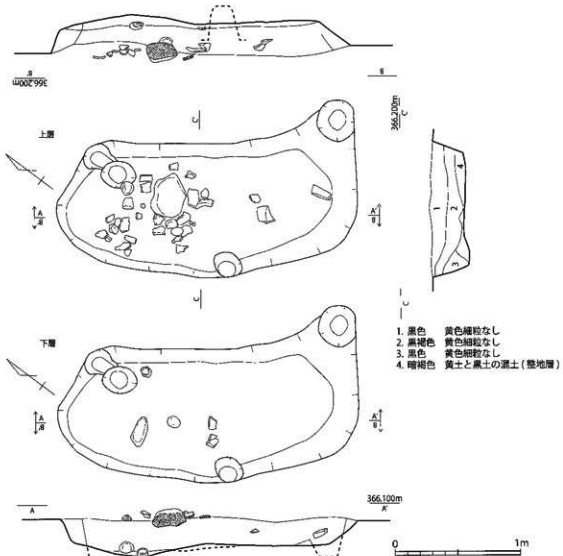
S K 378

長軸0.82m、短軸0.5mの楕円形を呈する土坑で、深さは0.22mである。床面に遺構はない。

出土遺物もなく、時期は不明である。



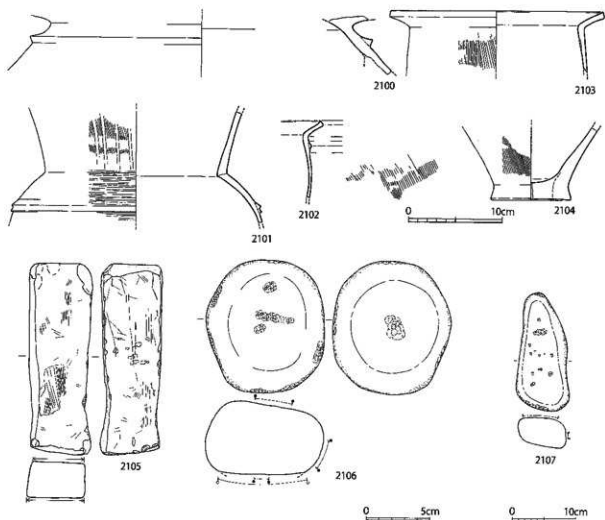
第8-98図 S K 378実測図 (1/30)



第8-99図 S K 379実測図 (1/30)

図示できる遺物は8点である。2100は壺の頸部で、鬚先状をなす口縁部になると思われる。2101は広口壺で、よく磨かれている。2103は「く」字形に折れる口縁部の甕、2102は口縁端部を小さく積み上げる甕、2104は底部が張り出し気味に踏ん張る甕底部である。2105は砥石、2106は角閃石安山岩製の敲石、2107は角閃石安山岩製の台石である。

以上から、この土坑の時期は弥生時代中期後半である。



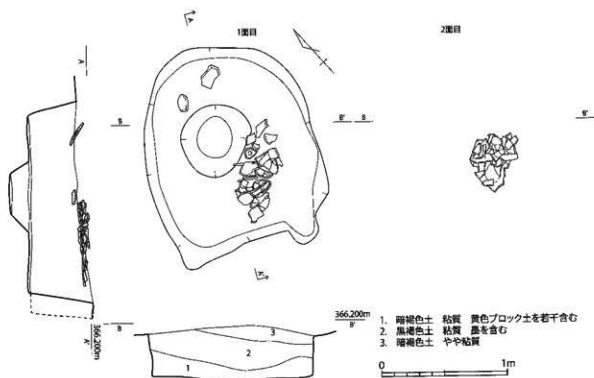
第8-100図 SK379出土遺物 (1/4, 1/3, 1/6)

### SK380

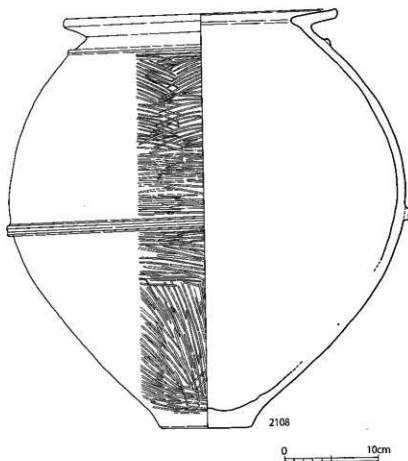
SH114を切って掘られた土坑である。南西の角は角張るが、他は丸い長楕円形を呈する土坑である。長軸は1.6m、短軸は1.4mで、深さは0.4mである。床面中央に直径0.6mで深さ0.2mの円形のピットがある。遺物は埋土上面にまとめて出土した。

図示できる出土遺物は3点で、2108は口縁部を強く折り曲げる壺で、胴部最大径の僅かに下位にM字形突帯が廻る。2109は口縁部が鬚先状をなす甕で、口縁部下と胴部に突帯を廻らせる。2110は甕で、やや突出気味の平底である。

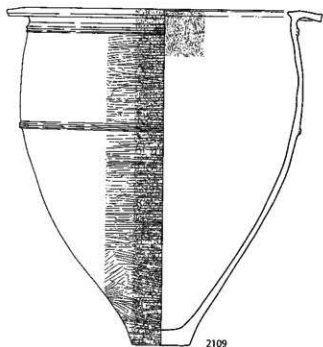
この土坑の時期は、弥生時代中期後半である。



第8-101図 SK380実測図 (1/30)



第8-102図 SK380出土遺物① (1/4)

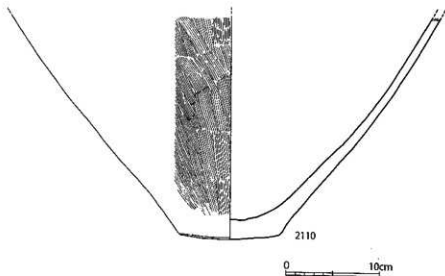


S K 381

長軸1.35m、短軸0.75mの略隅丸長方形を呈し、残存する深さは数センチと浅い土坑である。床面には遺構はない。

図示できる出土遺物は4点である。2111は広口壺の肩部か、2112は口縁端部を上方に小さく積み上げる甕の口縁部で、口縁下に断面三角形の突帯が通る。2113は口縁部が「く」字形に折れ開く口縁部の甕、2114は平底の甕底部である。

以上より、この土坑の時期は弥生時代中期後半である。



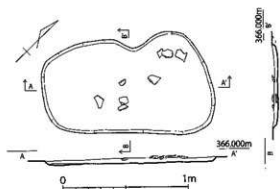
S K 382

南北1.15m、東西0.95mのやや膨らみを持つ長方形を呈し、深さは1.0mと深い土坑である。床面のプランは南北0.7m、東西0.52mの整った長方形である。床面中央やや東寄りには床面からの深さ0.55mのピットが穿たれている。このピット

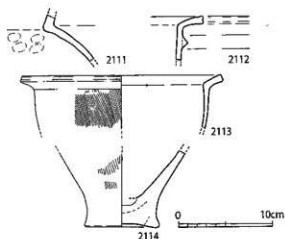
第8-103図 S K 380出土遺物② (1/4)

の存在や土坑の形状から、陥し穴と考えられる。床面のピットには杭を立てていたと考えられる。土層断面図を見ると、床から0.4mのところでは明らかな水平面があるが、そのラインまで人為的に埋め戻しを行い、その後は自然に堆積したと解釈できる。

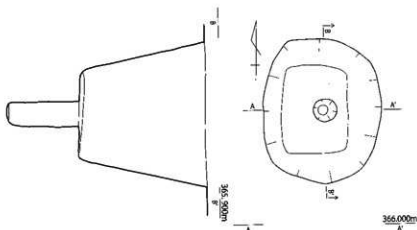
出土遺物がなく時期の決め手がないが、土坑や竪穴建物を人為的に埋め戻す行為はこの遺跡では弥生時代中期に盛んに行われていたことを考えれば、この土坑も同様の時期の可能性が高い。



第8-104図 S K381実測図 (1/30)



第8-105図 S K381出土遺物 (1/4)



1. 暗黒色 しまりが強く、キメが細かい
2. 黒褐色 1よりしまりが強い
3. 黒褐色 2よりしまりが強い
4. 暗黒色 しまりが強く、黄色ブロックを少量含む
5. 暗黒色 4より黄色粒子を含む
6. 茶褐色 黄色粒子を多く含む  
地山が崩れたものと思われる
7. 黒色 黄色粒子を含み、しまりは弱い
8. 茶褐色 黄色、黒色粒子を含み、しまりはやや強い
9. 黄褐色 黄土と黒土の混土であるが、しまりない(バラした質感)
10. 黄褐色 黄土と黒土の混土(埋土)



第8-106図 S K382実測図 (1/30)

### S K383

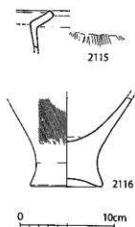
長軸1.1m、短軸0.9mの隅丸の略長方形を呈する土坑で、深さは0.15mである。床面遺構はない。

図示できる出土遺物は2点である。2115は口縁端部を小さく構み上げる臺、2116はやや厚手で上げ底気味の臺底部である。

これらの遺物の時期は弥生時代中期後半である。



第8-107図 S K 383実測図 (1/30)

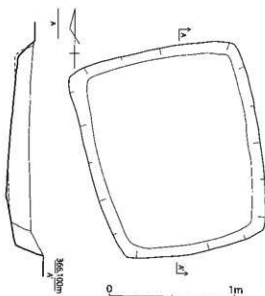


第8-108図 S K 383出土遺物 (1/4)

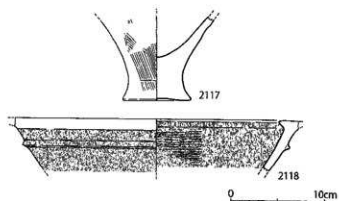
S K 384

南北1.64m、東西1.37m、深さ0.28mの長方形を呈する土坑である。床面には遺構がない。  
図示できる出土遺物は2点である。2117は底部端部が外側に踏ん張る甕の底部、2118は口縁部が鋤先状を呈する高坏の坏部で、口縁下に突帯が廻る。

以上の出土遺物より、この土坑の時期は弥生時代中期中ごろである。



第8-109図 S K 384実測図 (1/30)



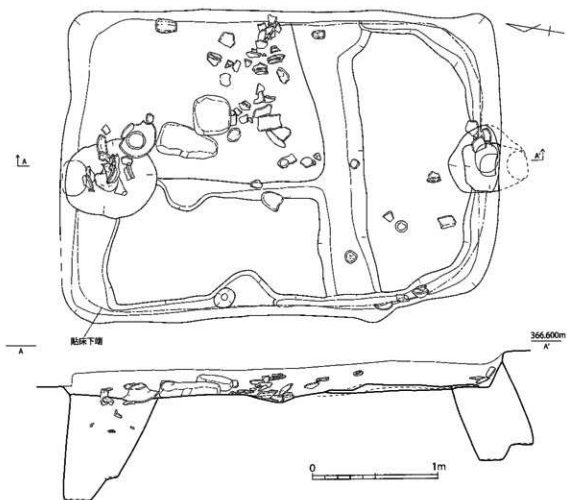
第8-110図 S K 384出土遺物 (1/4)

S K 385

長軸3.5m、短軸2.4m、深さ0.25mの長方形を呈する土坑である。東西の崖際中央に柱穴がある。柱穴は外側に向かって広がるように掘られている。床面は東西方向に溝状にくぼみ、南側3分の1と北西側半分がやや高くなっている。

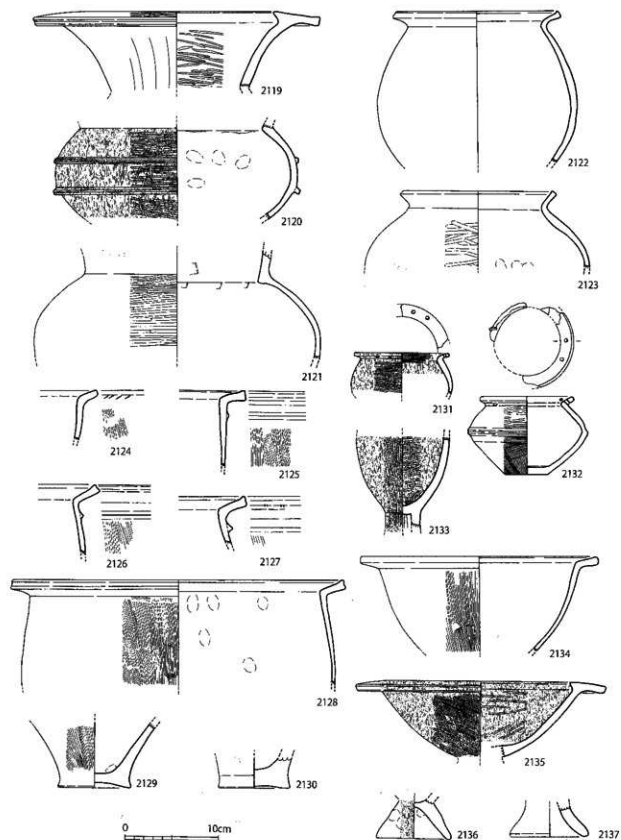
図示できる出土遺物は24点である。2119から2121は壺で、2119は鋤先状をなす口縁部、2122と2123は口縁部を小さく屈曲する甕。2124から2130までは甕。口縁部は小さく積み上げられる。2131と2132は口縁部に穿孔を持つ小型の甕、2133は脚付きの鉢、2134は脚付きの鉢か。2135は高坏、2136と2137は鉢の脚か。2138は石包丁、2139

は磨製石斧、2140は打製石斧、2141と2142は台石、2143は叩き石である。  
この土坑の時期は、弥生時代中期後半である。

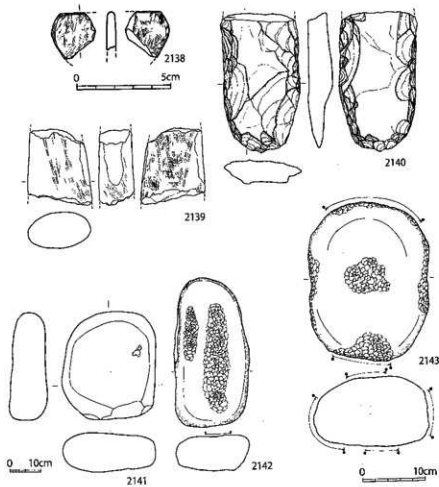


第8-111図 SK385実測図 (1/30)





第8-112図 SK385出土遺物① (1/4)



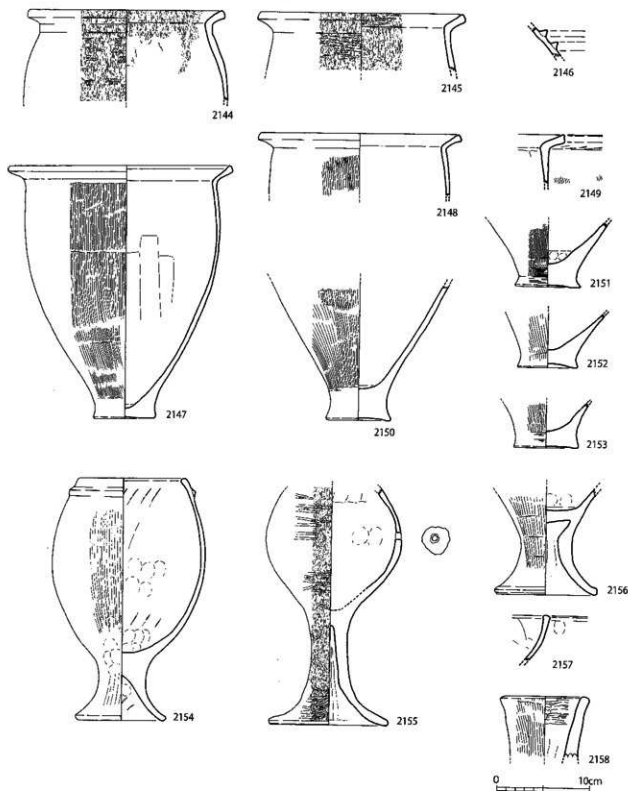
第8-113図 SK385出土遺物② (1/2, 1/12.5, 1/3)

## S K 386 (第8-48図参照)

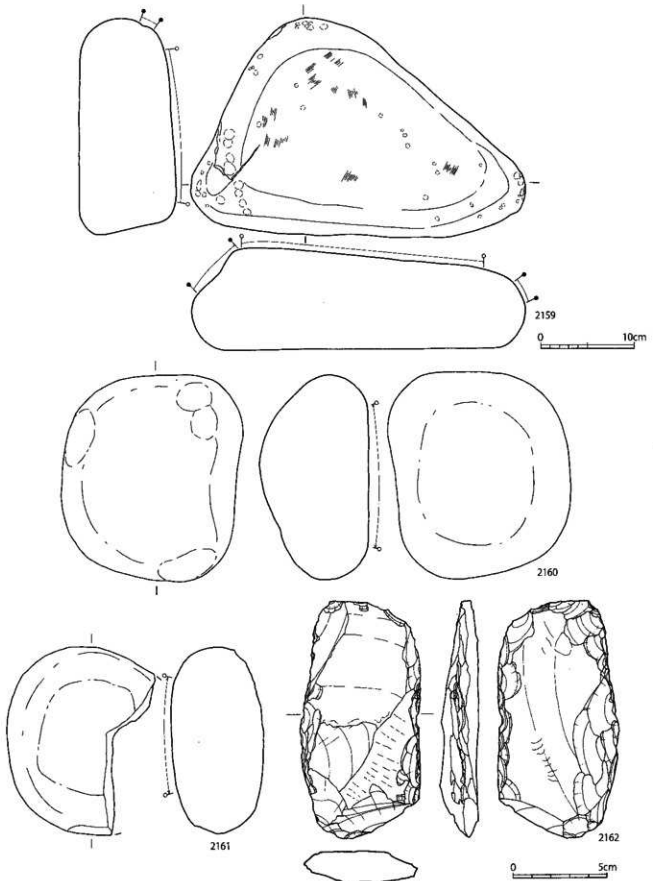
長軸3.3m、短軸2.1m、深さ1.8mの長方形を呈する深い土坑である。SH116の北側にやや重なるように掘られている(切っている)。土層図にはかかっていないが、大半は黄褐色ローム土で埋められていた。

図示できる出土遺物は19点である。2144と2145は口縁部が小さく開く壺で、外面にはミガキが施されている。2144は外面にベンガラが塗布されている。2146は壺の片断で、二条の突帯が廻る。2147から2150は口縁端部を小さく上方に積み上げる壺である。2151から2153は平底の壺底部。2154と2155は脚付きの鉢である。2154は低脚で、最大径を中位に持つ長胴、口縁部は内湾して終わる。口縁直下に断面三角形の突帯が一条廻る。2155は長脚で、2154に比べて胴部が短く、口縁部を欠くもの、おそらく内湾しながら終わると思われる。胴部中位に穿孔がある。内面はススによって黒化している。2156は2154と同様の脚付き鉢になるとと思われる。2157は高坏の坏部か。2158はやや器壁の厚手の器台。2159は安山岩製の台石で、上面には擦った痕跡が残る。2160と2161は安山岩製の磨り石。2162は凝灰質泥岩製の打製石斧である。

以上より、この土坑の時期は弥生時代中期後半である。



第8-114図 S K386出土遺物① (1/4)

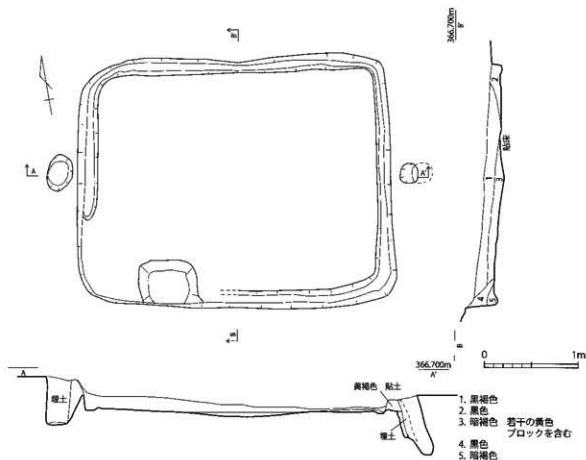


第8-115図 SK386出土遺物② (1/4, 1/2)

S K 387

東西3.3m、南北2.6m、深さ0.18mの長方形を呈する堅穴建物である。南西角部を除いて壁溝が廻る。また、南辺の西寄りには0.6×0.5m、深さ0.11mの土坑がある。床面には柱穴は1本もないが、東西の壁の外側、つまり地表面に1か所ずつ穴があいており、この建物の柱穴と判断した。東側の柱穴は内側（建物側）に傾斜している。このように、影穴外に柱穴を持つものは、4本柱のものはこの四口市遺跡でも類例があるが、2本柱のものはこれのみである。

出土遺物はない。



第8-116図 S K 387実測図 (1/40)

S K 388

南北1.85m、東西1.2m、深さ0.7mの長方形を呈する土坑である。

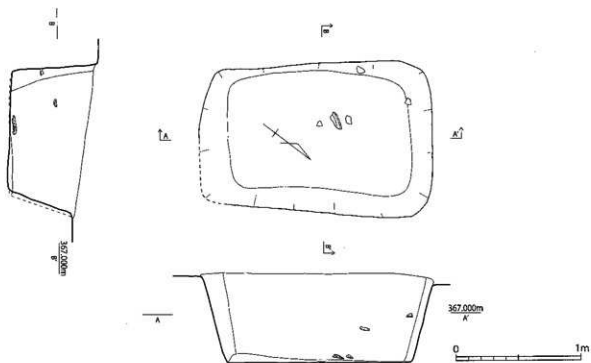
図示できる出土遺物は2点で、2163は口縁部がやや上方に反りながら「く」字に折れる甕、2164は鼓状になる器台。

遺物の時期は弥生時代中期後半である。

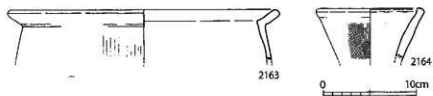
S K 389

約半分近くが調査区外に伸びる土坑で、南北2.5m、東西は2m + a、深さは0.5mである。北西の壁際にピットが二つあるが、この土坑に伴うものであるかどうかは判断できなかった。遺物はいずれも埋土中からの出土である。地積状況もほぼ自然堆積である。

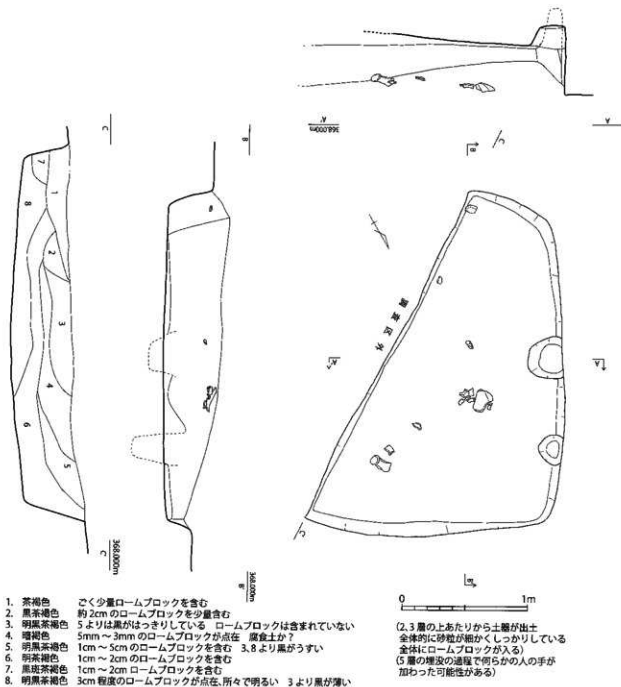
図示できる出土遺物は2点で、2165は「く」字に折れる口縁部の甕、2166はやや厚底で、端部で踏ん張る平底の甕。時期は弥生時代中期後半である。



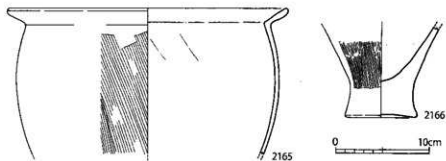
第8-117図 SK 388実測図 (1/30)



第8-118図 SK 388出土遺物 (1/4)



第8-119図 S K 389実測図 (1/30)



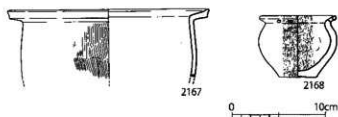
第8-120図 S K 389出土遺物 (1/4)

## S K 390

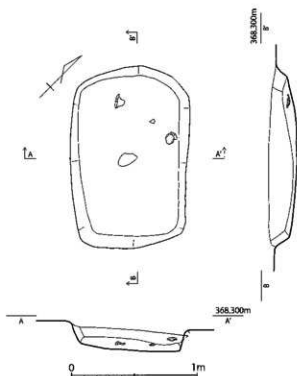
長軸1.45m、短軸0.95mで、深さ0.18mの長方形を呈する土坑である。

図示できる出土遺物は2点で、2167は口縁端部を上方に積み上げる変、2168は平底の小型甕で、頸部には2か所の穿孔がある。外面にはミガキが施され、ペンガラが塗布されている。

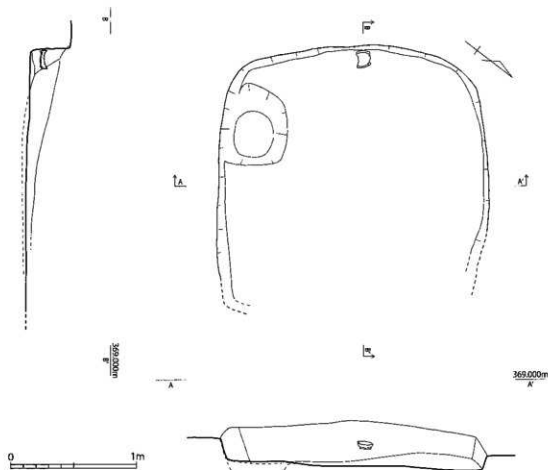
時期は弥生時代中期後半である



第8-122図 S K 390出土遺物 (1/4)



第8-121図 S K 390実測図 (1/30)



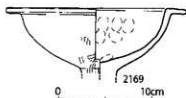
第8-123図 S K 391実測図 (1/30)



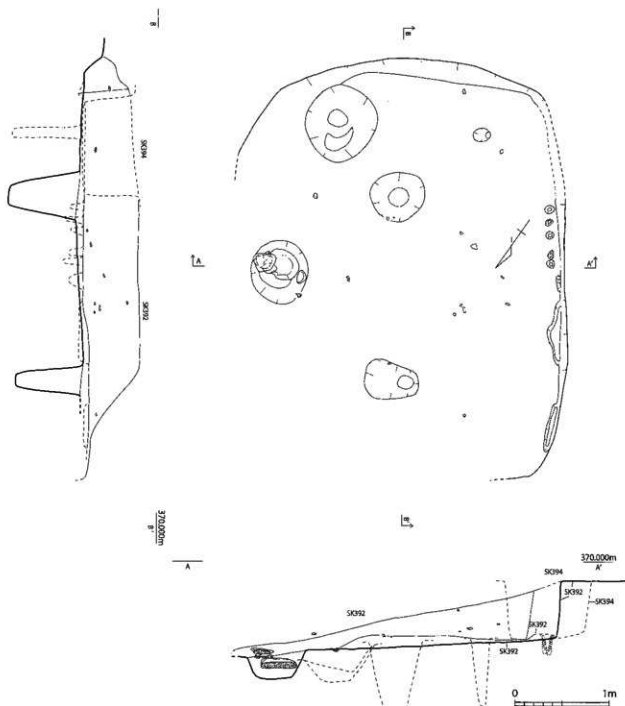
S K 391

やや緩斜面にあるため西側の壁がなくなっている。南北方向は2.15mで、最も残存している部分の深さは0.32mである。南側壁際の西より床面には0.65m×0.5mで、深さ0.15mのやや長方形を呈するピットがある。遺物は、西側壁際で浮いた状態で高環が出土している。

図示できる出土遺物は1点である。2169はL字状のL縁部を持つ高環で、体部は鉢状となる。時期は弥生時代中期前半である。



第8-124図 S K 391出土遺物 (1/4)



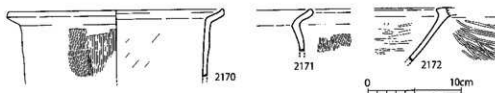
第8-125図 S K 392実測図 (1/40)

## S K 392

斜面部に作られたため、低い側が削平を受けた土坑で、長軸4.4m、短軸3.5m（推定）の大きさである。残存する深さは0.6mである。床面には4か所ピットがあるが、支柱穴となるのは、中央東西に並ぶ2本である。その北側には糠が出土した浅いピットがある。また、南西壁際には小さなピットが5つ並んでいる。また、一部に横溝と思われる溝がある。

図示できる出土遺物は3点で、2170と2171は口縁端部を小さく積み上げる甕、2172は鋤先状をなす口縁部の高坏で、内外面ともよく磨かれている。

この土坑の時期は弥生時代中期後半である。



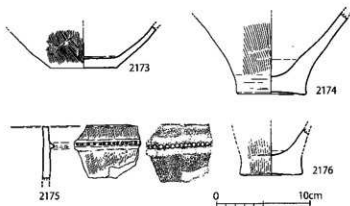
第8-126図 S K 392出土遺物 (1/4)

## S K 393

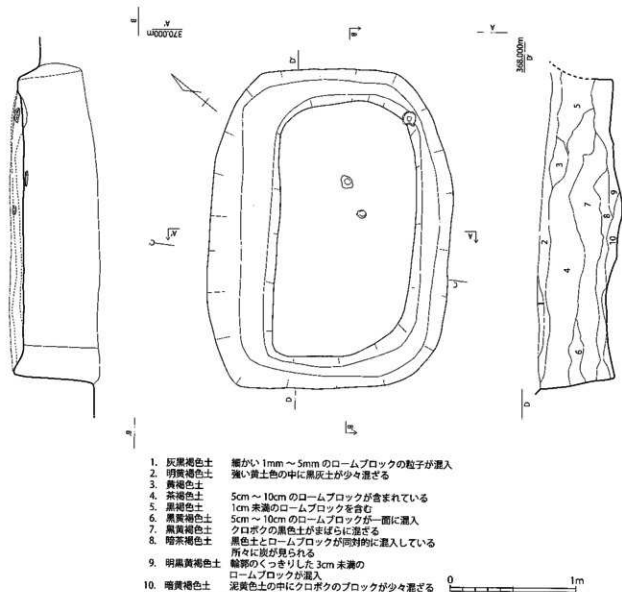
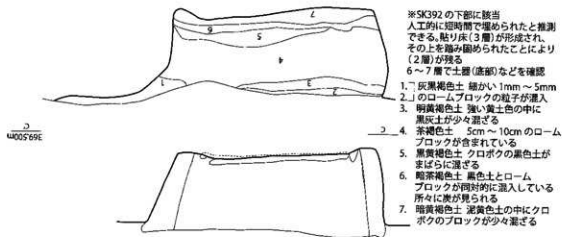
長軸2.5m、短軸1.9m、深さ0.6mの長方形を呈する土坑である。S K 392によって切られている。床面の壁際は幅0.2～0.3mほどで、深さ0.1mほどの溝が全周する。結果的に床面の平らな部分は長軸1.95m、短軸1.1m程となる。堆積状況は、クロボクとロームブロックの混ざり土で人為的に埋められている。土層の内、上部の2層と3層はS K 392の粘床となることから、S K 392構築に際して一挙に埋め戻された可能性が高い。

図示できる出土遺物は4点である。2173は壺の平底の底部。2175は直立する下城式の甕の口縁部で、口縁直下に刻目突帯文を廻らせる。2174と2176は平底の甕底部。

以上より、この土坑の時期は弥生時代中期後半である。



第8-127図 S K 393出土遺物 (1/4)



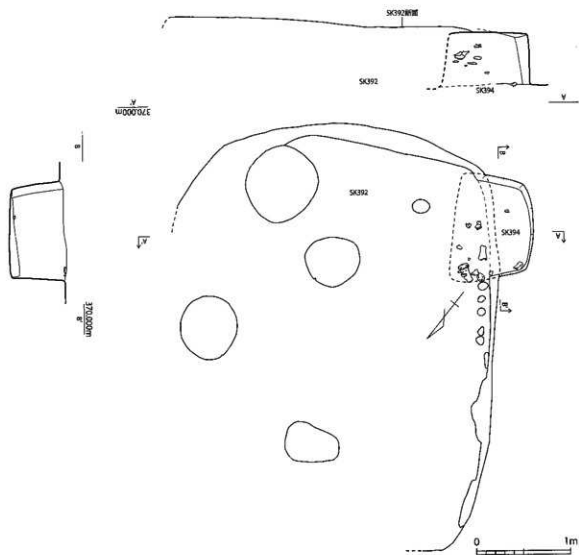
第8-128図 SK393実測図 (1/30)

S K394

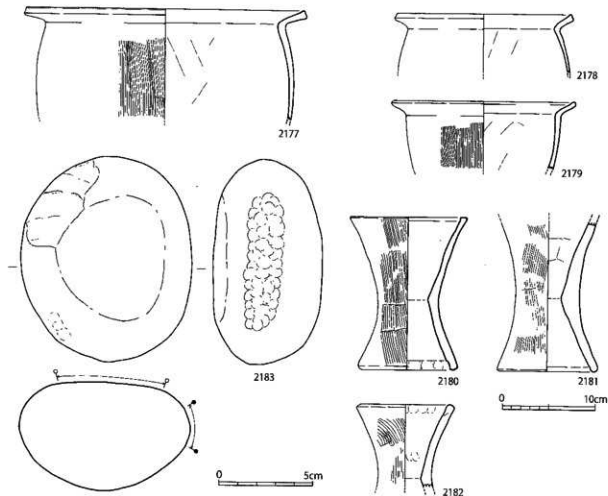
S K392の南コーナー付近を切って作られた土坑で、長軸1.1m、短軸0.8m（推定）、深さは0.55mである。遺物は中層より出土している。

図示できる出土遺物は7点である。2177から2179は口縁端部を小さく上方に摘み上げる甕。2180から2182は鼓形の器台。2183は安山岩製の磨り石。

時期は弥生時代中期後半である。



第8-129図 S K394実測図 (1/40)



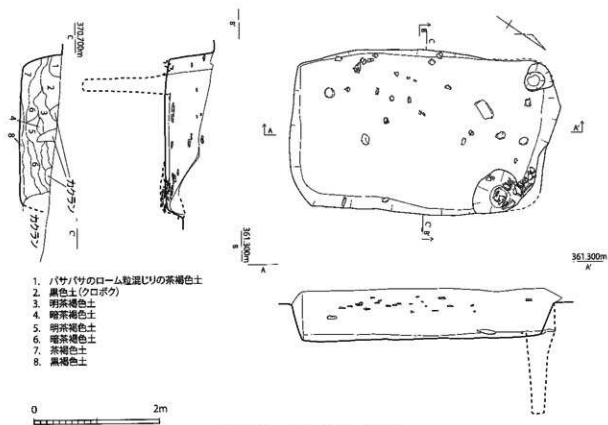
第8-130図 S K394出土遺物 (1/4, 1/2)

S K395

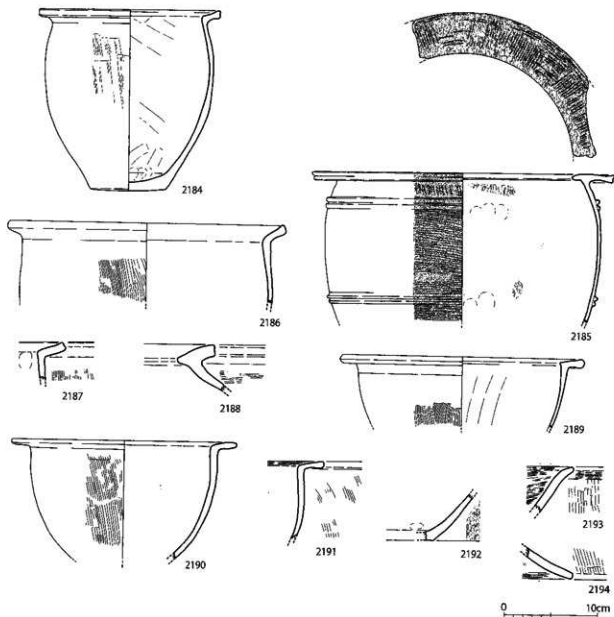
東西4.1m、南北2.6m、深さ0.7mの長方形を呈する大型の土坑である。炉や柱穴が確認できないため、土坑とした。西角には直径0.45m、深さ1.2mのピットがある。また、北西角部には浅い落ち込みがあり、土器片が流れ込んだ状態で出土した。

図示できる出土遺物は13点である。2184は平底の壺。2185から2188は甕。2185は口縁部が鋤先状をなし、口縁下に二条、胴部にも二条の突帯を廻らせる甕で、外面にベンガラが塗布されている。2186と2187は口縁部小さく柄みあげられる。2188は大型の甕口縁部。内傾する鋤先状口縁から大きく張る胴部を持つ。2193は外面に磨きかぬぎされる鉢か。2194は脚の裾部。2195は安山岩製の台石で、上面に磨り痕が残る。2196は結晶片岩製の磨製石斧である。

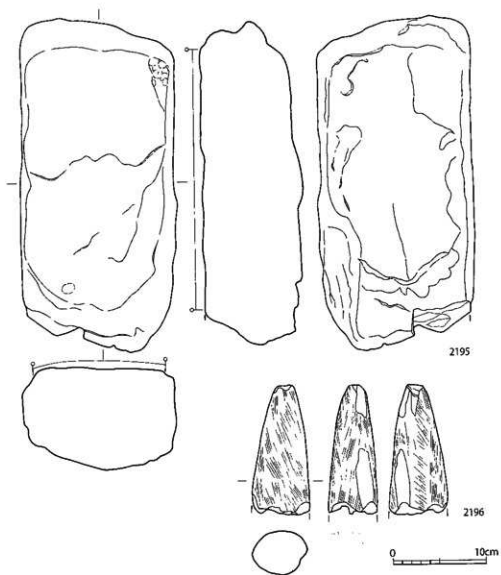
以上より、土坑の時期は弥生時代中期後半である。



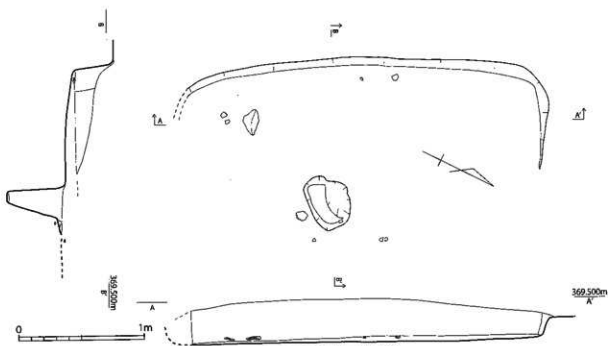
第8-131図 S K 395実測図 (1/60)



第8-132図 S K 395出土遺物① (1/4)



第8-133図 S K 395出土遺物② (1/2)



第8-134図 S K 396実測図 (1/30)

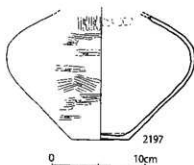


S K 396

斜面部に作られたため、低い側が削平を受けた土坑で、南北方向（コンタに平行）に3.0mの大きさである。残存する深さは0.35mである。床面には1か所ピットがあるが、この土坑に伴うものかどうかは判断できなかった。

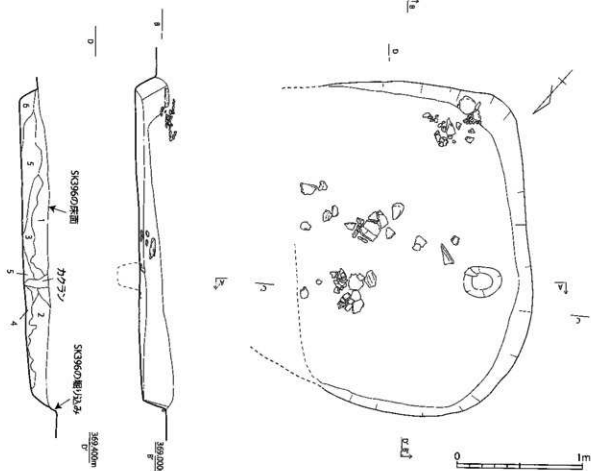
図示できる出土遺物は1点で、2197はおそらく長頸となる壺の胴部で、平底を呈す。体部外面はミガキが施されている。

時期は弥生時代中期後半である。

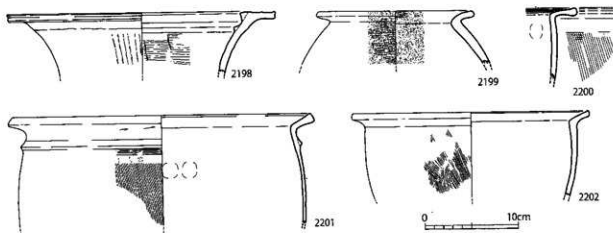


第8-135図 S K 396出土遺物 (1/4)

1. 明黄色粘質土 クロボク下の黄褐色土がほとんど
2. 暗茶褐色土
3. 黒色土
4. 黄褐色粘質土 ロームブロック含む
5. 暗茶褐色土 3~5cm大のロームブロック含む
6. 茶褐色土 バサバサのローム粒混じり
7. 茶褐色土
8. 黒色土
9. バサバサ 6層と同一か?



第8-136図 S K 397実測図 (1/30)



第8-137図 SK397出土遺物 (1/4)

## SK397

傾斜地にあるため、下側(東側)半分近くが削られて無くなっている。また、すぐ上の西側に作られたSK396によっても上部を削られている。残存するところで長軸2.6mで、深さは0.2mである。床面には西側壁際ほぼ中央に0.3m×0.25mの楕円形をした、深さ0.2mのピットがあるのみで、他には遺構はない。遺物は多くが床面近くから出土している。堆積状況はローム混じりの茶褐色土と黒色土を互層にした人為的な埋め戻しである。一番上面はSK396の床面になる。

図示できる出土遺物は5点で、2198は鋤先状口縁の壺、2199は短頸壺で、外面は磨かれている。2200から2202は口縁端部を小さく摘み上げる甕で、2201は口縁下には突帯が廻る。

以上より、この土坑の時期は弥生時代中期後半である。

## SK398

長軸2.7m、短軸2.45m、深さ0.5mのやや長方形を呈する土坑である。床面東寄りでは0.48m×0.22m、深さ0.24mの長方形のピットがある。遺物は北西壁際から出土している。

図示できる出土遺物は6点である。2203は壺の肩部で、断面M字状の突帯が廻る。2204は壺の口縁部。2205は口縁端部をわずかに摘み上げる甕、2206は小型の壺、2207と2208は小型の鉢である。

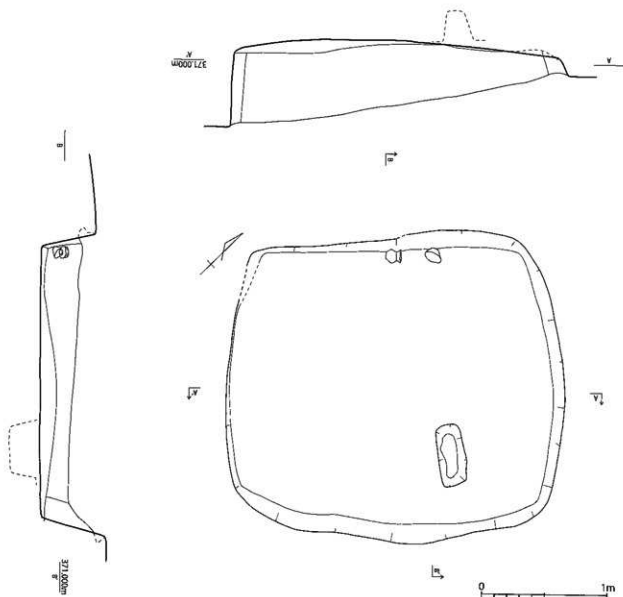
遺物の時期は、弥生時代中期後半である。

## SK399

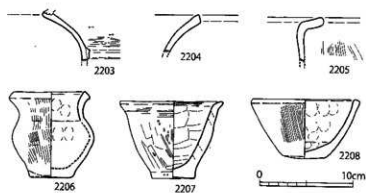
高台部分の北西側の端に位置する。一部は斜面によって削られている。東西3.0m、南北2.2m、深さ0.55mの方形を呈する堅穴建物である。南側壁際に焼土を伴う長径0.58m、短径0.4m、深さ0.08mの土坑があり、炉と判断した。床面にピットが2か所あるが、この建物に伴うものであるかどうかは判断できなかった。

図示できる出土遺物は9点である。2209は体部に二条の断面M字形の突帯を廻らせる壺、2210は外面にミガキを施す壺の肩部、2211は鋤先状をなす壺の口縁部、2212と2213は口縁端部を小さく摘み上げる甕、2214は脚付きの鉢で、鉢の体部中位やや下に一条の断面M字形の突帯が廻る。内面口縁部付近にススが付着する。2215は鋤先状をなす口縁部を持つ高坏で、浅い皿状の坏部である。2216は安山岩製のやや大型の磨り石である。2217は安山岩製の台石で、上下両面に磨った跡がある。

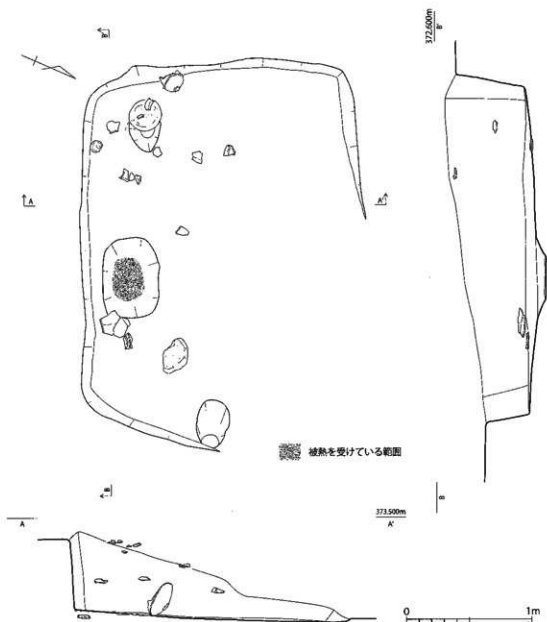
以上から、この堅穴建物の時期は弥生時代中期後半である。



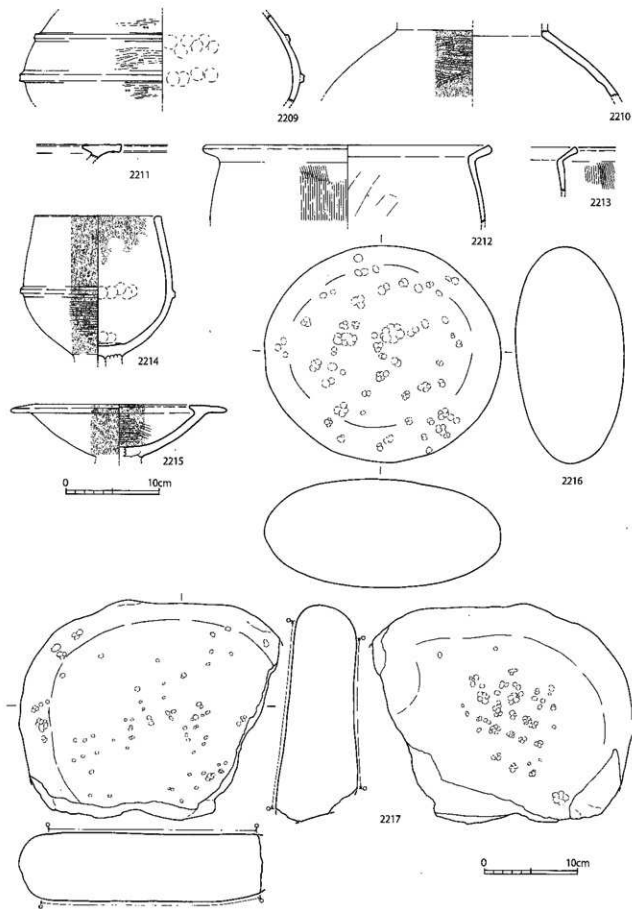
第8-138図 S K 398実測図 (1/30)



第8-139図 S K 398出土遺物 (1/4)



第6-140図 SK399実測図 (1/30)



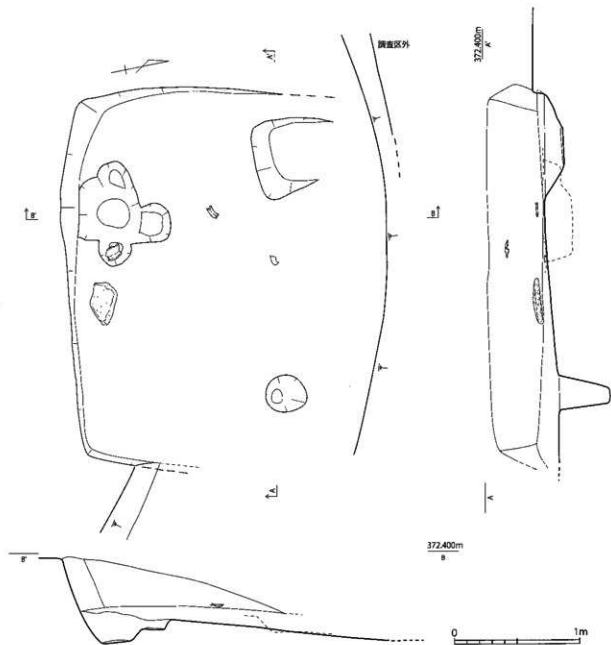
第8-141図 SK399出土遺物 (1/4)

## S K 400

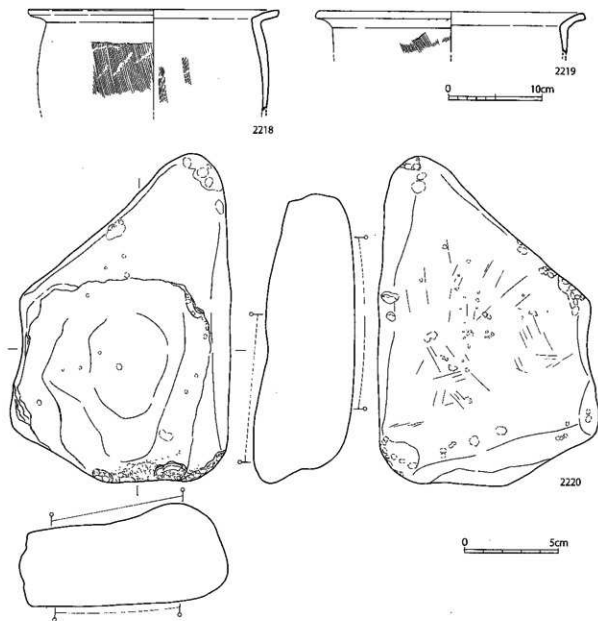
高台部分の北西側の端に位置する。そのため北側半分程度が削られている。大きさは東西2.96mで、残りの良い南側で深さは0.3mである。床面には土坑やピットがあるが、確実に伴うものであるかどうかは不明である。

図示できる出土遺物は3点である。2218と2219は壺の口縁部で、いずれも頸部は積み上げられていない。2220は安山岩製の台石で、上下両面に磨り跡が認められる。

この壑穴建物の時期は弥生時代中期後半である。



第8-142図 S K 400実測図 (1/30)



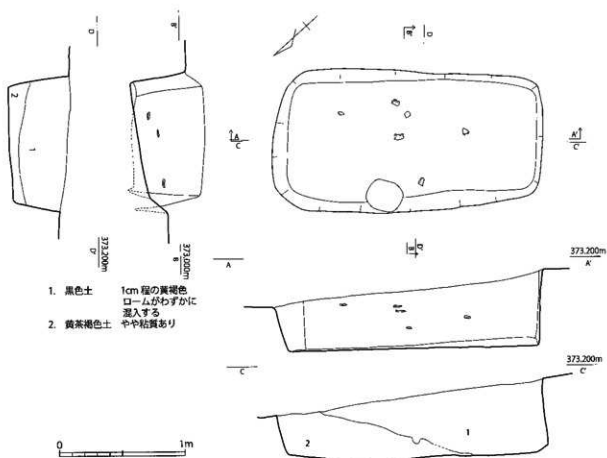
第8-143図 SK400出土遺物 (1/4, 1/2)

SK401

調査区で最も高い台地の北側で確認された、長軸2.14m、短軸1.1m、深さ0.6mの長方形を呈する土坑である。堆積状況は、北側から黄茶褐色土が流れ込み、その上部に黒色土が厚く堆積する。人為的に埋められた可能性が高い。

図示できる出土遺物は2点で、2221は大きく口縁部が開く広口壺で、外面には縦方向のミガキが施されている。2222は鋤先状をなす壺の口縁部で、ベンガラが塗布されている。

以上から、この土坑の時期は弥生時代中期後半である。



1. 黒色土 1cm程の黄褐色  
ロームがわずかに  
混入する
2. 黄茶褐色土 やや粘質あり

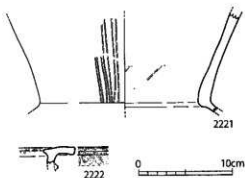
第8-144図 SK 401実測図 (1/30)

### SK 402

南北3.1m、東西2.9m、深さ0.7mのやや長方形を呈する土坑である。調査区内の最も高い丘陵上に位置している。床面には4か所ピットがあるが、確実にこの土坑に伴うものを抽出できない。遺物は南側から流れ込んだように出土している。堆積状況は、自然堆積である。

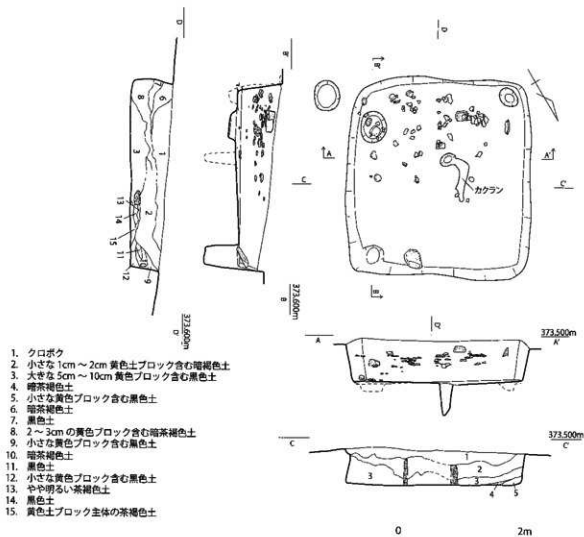
図示できる出土遺物は19点である。2223と2224は広口壺の口縁部、2225は広口壺の頸部である。2227は中型の壺で、口縁部が外反して開く。2225はわずかに上げ底状を呈する壺の底部。2228は口縁部が鋤先状をなす大型の甕で、胴部が大きく張る。2229から2232は口縁端部を上方に摘み上げる甕で、2231と2232は頸部に突帯が一条廻る。2233から2235は平底の甕底部。2236は口縁部が鋤先状をなす甕、2237は胴部に二条の突帯を廻らせる甕である。2238は土製の投弾、2239は泥岩製の打製石斧、2240は安山岩製の石、2241は安山岩製の敲き石である。

この土坑の時期は、弥生時代中期後半である。



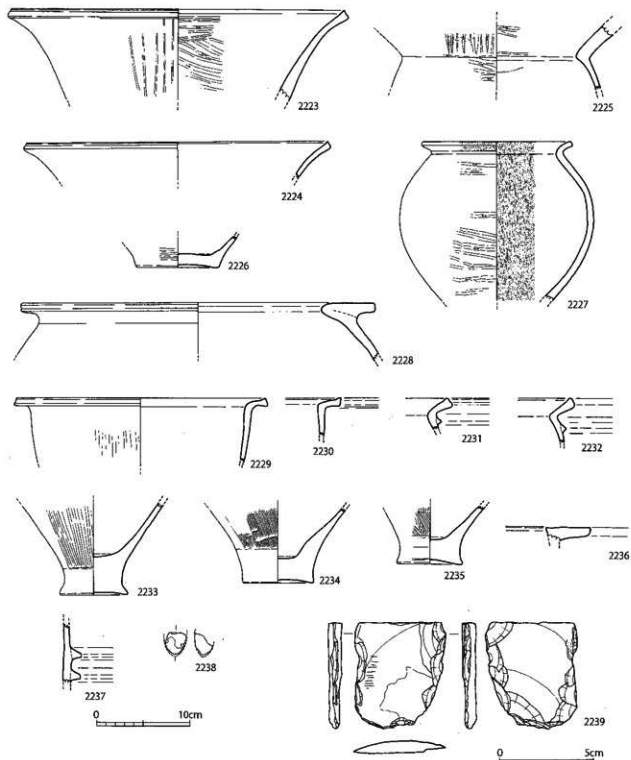
第8-145図 SK 401出土遺物 (1/4)



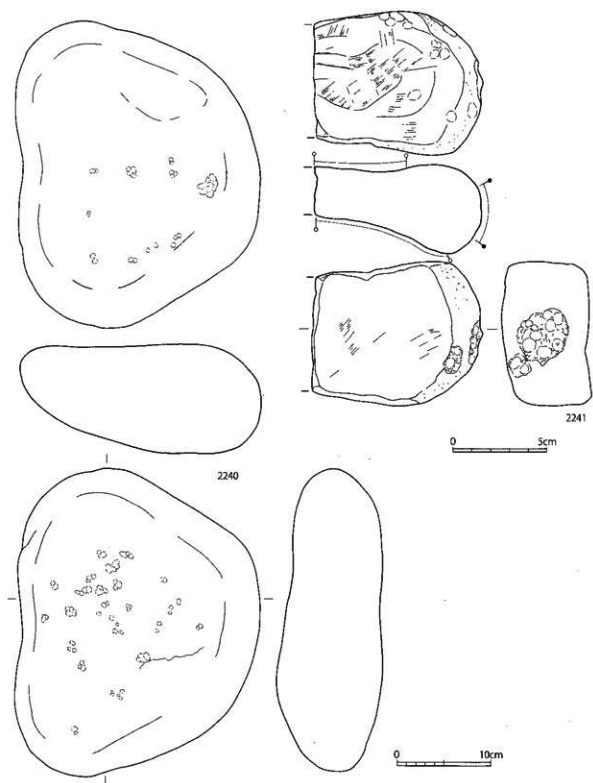


1. クロボク
2. 小さな1cm～2cm 黄色土ブロック含む暗褐色土
3. 大きな5cm～10cm 黄色ブロック含む黒色土
4. 暗茶褐色土
5. 小さな黄色ブロック含む黒色土
6. 暗茶褐色土
7. 黒色土
8. 2～3cm の黄色ブロック含む暗茶褐色土
9. 小さな黄色ブロック含む黒色土
10. 暗茶褐色土
11. 黒色土
12. 小さな黄色ブロック含む黒色土
13. やや明るい茶褐色土
14. 黒色土
15. 黄色土ブロック主体の茶褐色土

第8-146図 S K 402実測図 (1/60)



第8-147図 SK402出土遺物① (1/4, 1/2)



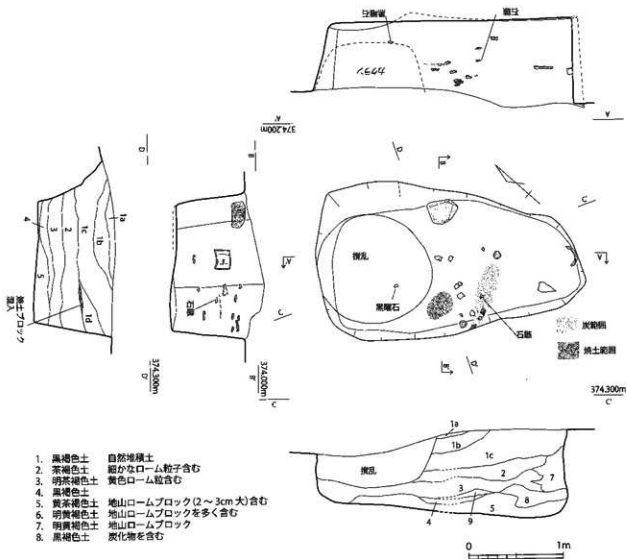
第8-148図 SK402出土遺物② (1/2, 1/4)

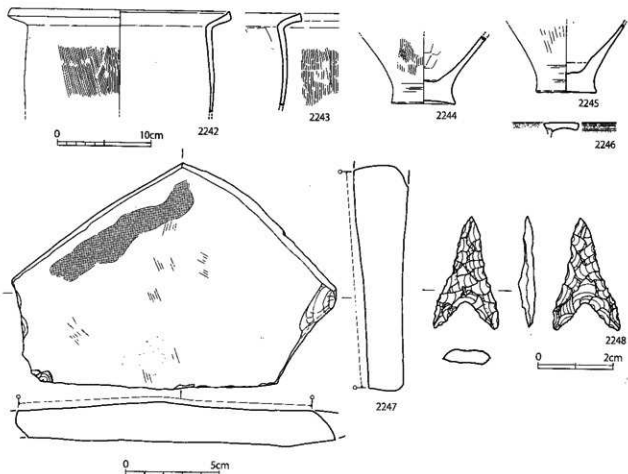
## S K 403

調査区で最も高い台地の北西斜面部で確認された、長軸2.8m、短軸1.0～1.6m、深さ0.92mで北側の幅が広くなっている長方形を呈する土坑である。中層からは炭化物や焼土が確認されたが、床面には何ら遺構はなかった。一部円形に攪乱が入っているが、堆積状況を見ると、ほぼ各層が水平に堆積しており、人為的に埋め戻しを行っていることがわかる。

図示できる出土遺物は7点である。2242と2243は口縁端部を上方に積み上げる甕、2244と2245は平底の甕底部、2246は鎌先状をなす甕の口縁部で、ベンガラが塗布される。2247は角閃石安山岩製の台石で、上面に擦った跡が残る。2248は姫島産黒曜石製の打製石鏃で、長さは3.0cmである。

以上から、この土坑の時期は弥生時代中期後半である。

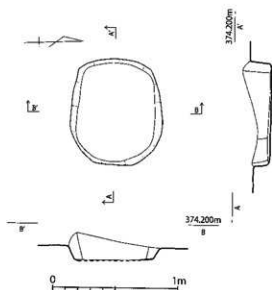




第8-150図 S K 403出土遺物 (1/4, 1/2, 1/1)

S K 404

長径0.8m、短径0.74mの隅丸長方形の土坑である。深さは残りの良いところで、0.22mである。



第8-151図 S K 404実測図 (1/30)

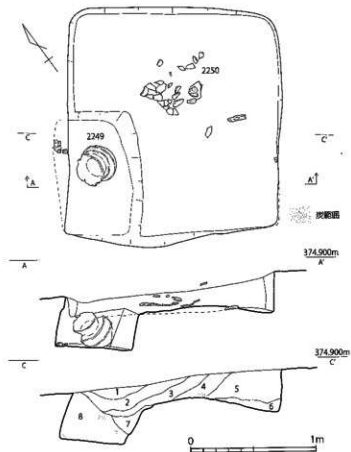
## S K 405

調査区で最も高い台地の北西部で確認された、長軸1.85m、短軸1.7m、深さ0.3mのやや長方形を呈する土坑である。西側のコーナー部床面からは1.0m×0.72mの長方形を呈する土坑が掘られている。深さは床面から0.28mで、やや外側に向かってオーバーハング気味になる。この土坑の床面には口縁部を少し打ち割られた広口壺が横倒しになった状態で出土した。また、本来の土坑床面からやや浮いた状態でもと器片がまとまって出土した。

堆積状況を見ると、床面から掘られた土坑が、炭化物を含む暗茶褐色土で最初に埋められ、その後レンズ状に堆積していったことがわかる。本来の土坑床面にも若干の炭化物の堆積が見られる。

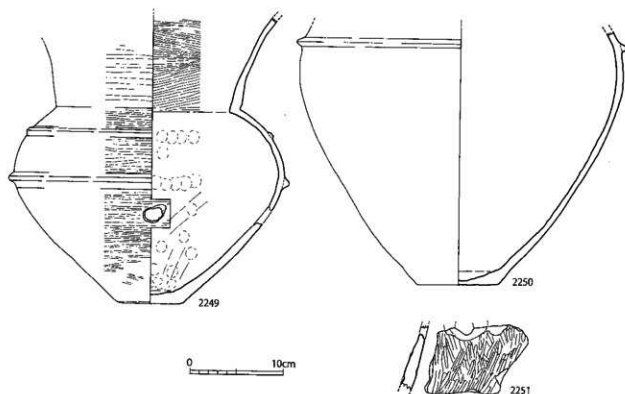
図示できる出土遺物は3点である。2249は口が大きく開く広口壺で、体部中位と頸部下にそれぞれ一条の断面台形の突帯が廻る。2250はやや胴部最大径を上部に持つ壺の体部で、中位やや上に一条の断面三角形に近い突帯が廻る。この土器はS K 403出土の破片と接合した。2251は壺の体部で、穿孔がある。

以上から、この土坑の時期は弥生時代中期後半である。



- |            |           |
|------------|-----------|
| 1. 明黄茶褐色土  | ロームブロック含む |
| 2. 黄茶褐色土   |           |
| 3. 暗茶褐色土   |           |
| 4. 茶褐色土    | 炭含む       |
| 5. 茶褐色土    | 黄色粒子多く含む  |
| 6. 明黄茶褐色土  | ロームブロック含む |
| 7. 明黄色茶褐色土 | 大きな炭含む    |
| 8. 暗茶褐色土   |           |

第8-152図 S K 405実測図 (1/30)



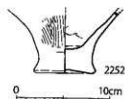
第8-153図 SK405出土遺物 (1/4)

SK407

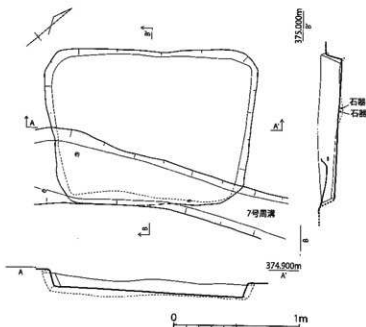
長軸1.4m～1.72m、短軸1.22m、深さ0.12mのやや台形を呈する土坑で、古墳の周溝によって一部壊されているが、周溝は床面にまでは及んでいない。

図示できる遺物は1点で、2252は裾部に外側に踏ん張る平底の莞。

1点しか出土遺物がないので、時期を決定するのが難しいが、弥生時代中期のものと考えてよいだろう。



第8-154図 SK407出土遺物 (1/4)

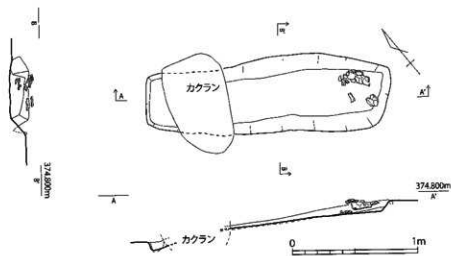


第8-155図 SK407実測図 (1/30)

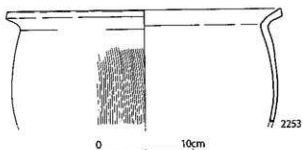
S K 408

長軸1.9m、短軸0.45～0.6mの長方形を呈する土坑で、深さは残りの良いところで0.1mほどである。床面は地形に沿って北西側が低くなっている。

図示できる出土遺物は1のみで、口縁端部を小さく上方に積み上げる甕2253で、同部はやや張る。この土器から、この土坑の時期は弥生時代中期後半と考えられる。



第8-156図 S K 408実測図 (1/30)



第8-157図 S K 408出土遺物 (1/4)

S K 409

S K1012とはほぼ並行して作られた隅丸長方形の土坑で、長軸1.42m、短軸0.82m、深さは0.18mである。中央のやや浮いた地点で炭化物が堆積していた。

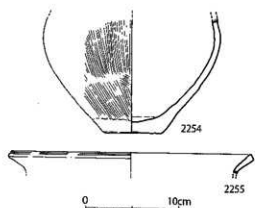
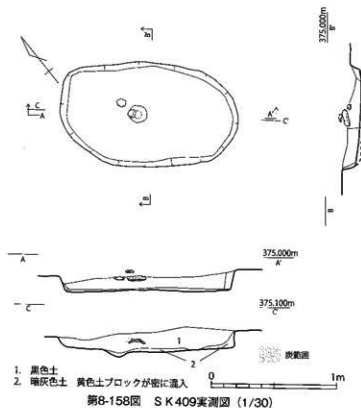
図示できる出土遺物は2点で、2254は平底で球形胴の甕。外面はハケ調整である。2255は口縁端部を小さく積み上げる甕。

この土坑の時期は、弥生時代中期後半である。

S K 410

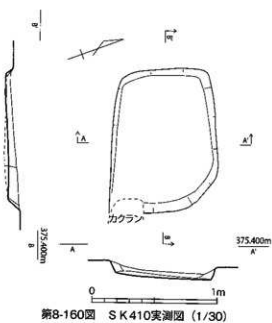
東西1.12m、南北0.84m、深さ0.08mの長方形を呈する土坑である。出土遺物はない。

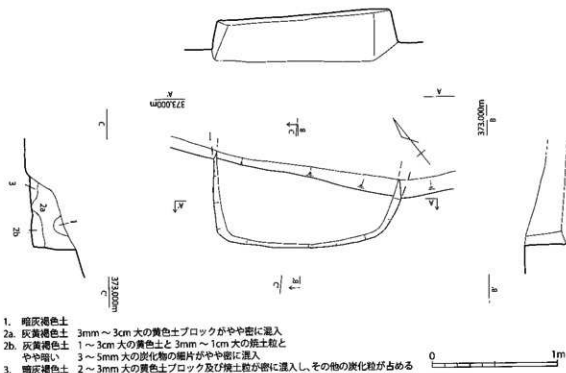




SK 411

調査区で最も高い台地上の、北東斜面部で確認された土坑である。斜面下側は削られている。残されている東西方向の大きさは1.5m、深さは0.33mである。土層からは、人為的に埋め戻された状況が窺える。図示できる遺物は出土していない。





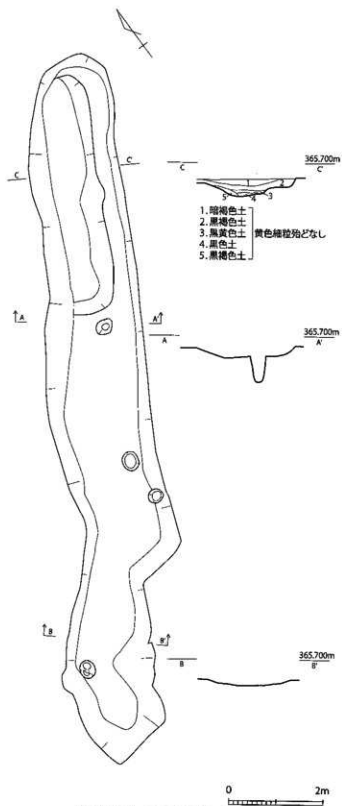
## (4) 溝

## SD22

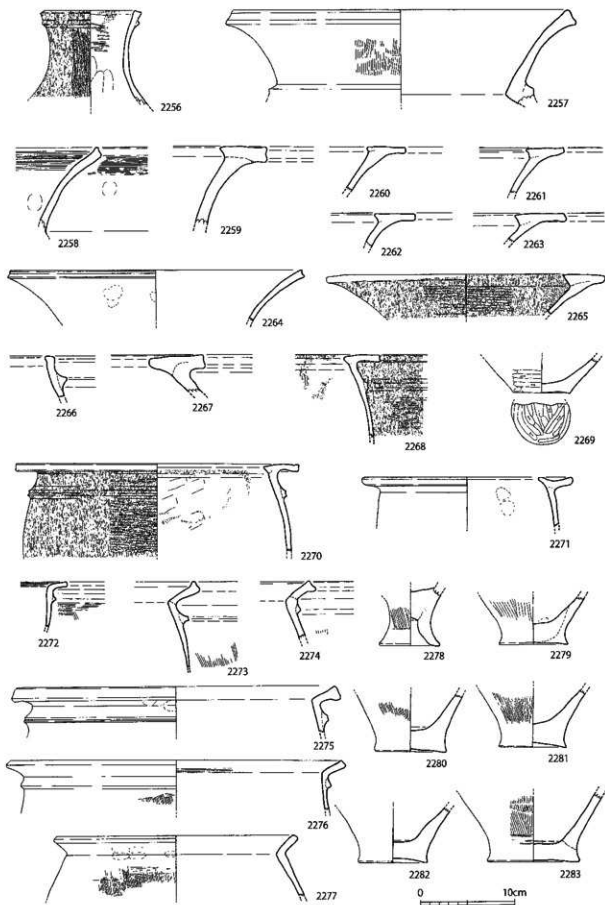
大型掘立柱建物（SB15とSB16）に接して、並行して伸びる溝状遺構である。幅は2.0～2.2m、長さは15.0m、深さは0.2～0.38mである。西側で屈曲するように曲がっており、複数の溝状遺構が切りあっている可能性があるが、確認は出来なかった。遺物も多く出土するなど、このような形状、遺物の出土状況を示す遺構は、四日市遺跡では他にない。大型掘立柱建物の主軸（桁行）とほぼ並行しており、何らかの関連性が考えられるが、それを直接示すものはない。しかしながら、同じ場所で切りあう主軸の異なる小型の掘立柱建物（SB17）の北側、同様の位置にやはり土器を多く出土する土坑（SK367）があることを考慮すれば、関連性が強く疑われる。

図示できる出土遺物は44点である。2256は口縁下に突帯を一条廻らせる長頸の壺である。2257と2258は口縁端部をわずかに摘み上げる大型の単口縁壺、2259から2264は口縁部が鋤先状をなす壺、2265は鋤先状をなす高坏か。2266は口縁下に突帯を廻らせる脚付きの鉢か。2267は鋤先状口縁部を持つやや大型の甕、2268と2270は鋤先状口縁部を持ち、口縁下に一条の断面台形の突帯を廻らせる甕、2269はそれらの底部か。2271は口縁部上面を窪ませる甕、2272から2276は口縁端部を小さく摘み上げる甕、2277は口縁部が「く」字に折れる甕、2278から2283は平底をなす甕底部。2284と2285、2287は高坏、2286は鉢か。2288は鼓状をなす器台である。2289と2290は円形に加工された土器片加工品（メンコ）、2291は後世の流れ込みの青磁碗。2292は姫島産黒曜石製の打製石鏃、2293は石鏃未成品、2295は小型の柱状片刃石斧、2296は打製石斧、2297は磨製石斧である。2298は石斧、2299は磨り石である。

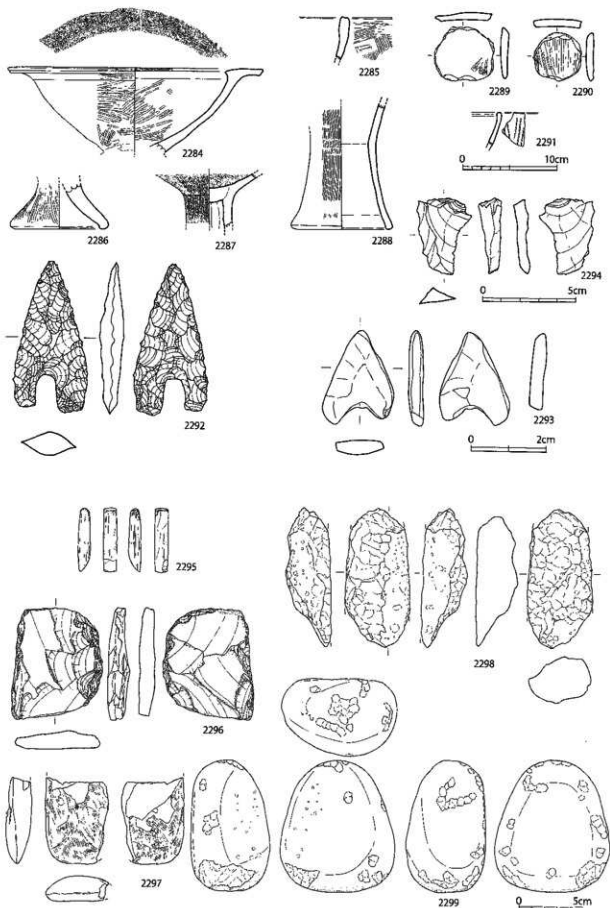
以上から、この遺構の時期は弥生時代中期後半である。



第8-162図 S D22実測図 (1/80)



第8-163図 SD22出土遺物① (1/4)

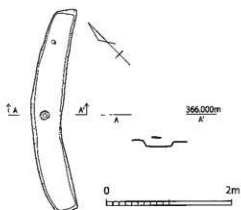


第8-164図 SD22出土遺物② (1/4, 1/2, 1/1, 1/3)

SD23

第3次調査区の北西部で確認された溝で、長さ3.2m、深さ0.1mである。

時期を示す出土遺物はなかったが、埋土から弥生時代のものだと判断した。



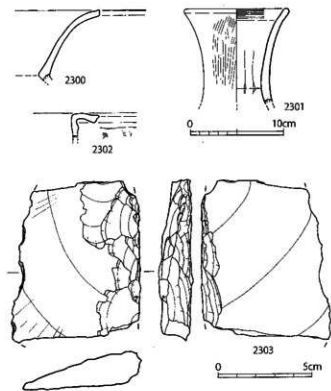
第8-165図 SD23 (1/60)

SD24

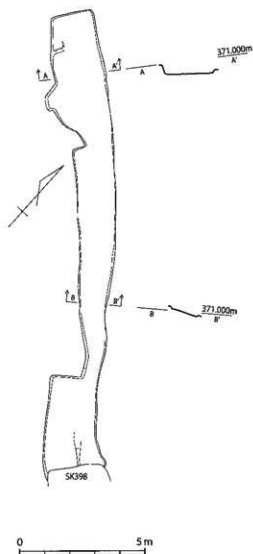
第3次調査区と第4次調査区の境、すなわち丘陵頂部から下ったところに等高線に平行に伸びる溝。幅1.0～2.0m、長さは18.0m。深さは0.1～0.3mである。

図示できる出土遺物は4点で、2300は広口の甕、2301は長頸の甕、2302は口縁部が逆「L」字状に折れる甕、2303は打製石斧である。

この土坑の時期は弥生時代中期後半である



第8-166図 SD24出土遺物 (1/4, 1/2)



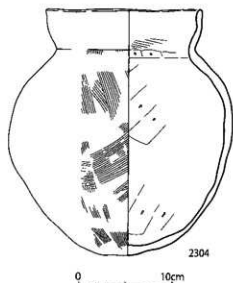
第8-167図 SD24実測図 (1/150)

S D25

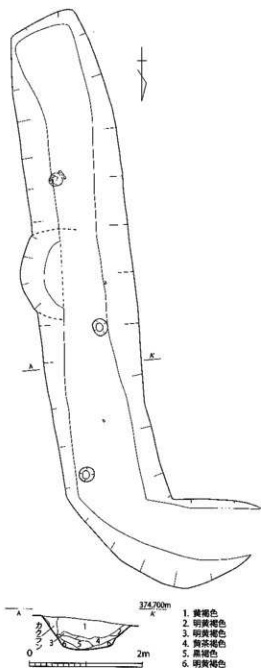
最も標高の高い台地が西側に向かって傾斜を始めた地点に位置する溝である。溝は北側でコーナーを持ち、ほぼ直角に折れ曲がる。南側は立ち上がって終わっている。幅は1.6m～1.7m、深さは0.5前後である。溝の内部から2304の土器が出土している。時期から考えて、一連の古墳である可能性もあるが、削平を受けたのか主体部は確認できなかった。

出土遺物は1点である。2304は二重口縁部がかなり崩れ、上半部が緩やかに外反しながら開く壺である。

出土遺物から、この溝の時期は古墳時代中期と考えられる。



第8-168図 S D25出土遺物 (1/4)

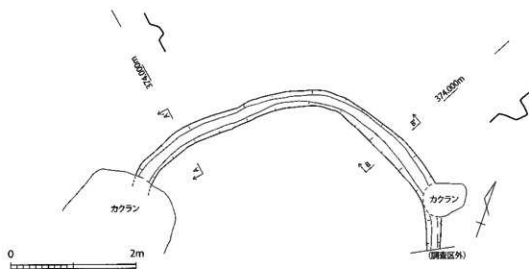


第8-169図 S D25実測図 (1/60)

## (5) 円形周溝遺構

S6

6号周溝墓に重なるように検出された溝状の遺構である。溝の幅は0.27m～0.38m、深さは0.12m～0.25mで、全体の形状は不明ながら、ややコーナー部を持つような楕円形を呈すると考えられる。出土遺物がなく時期の比定は難しいが、今報告のS5や、報告書1で報告したS1～4のような、細い溝が巡る弥生時代の遺構に類似している。



第8-170図 S6実測図 (1/60)

## 3 古墳時代

## (1) 周溝墓

## 第6号周溝墓

調査区の最も高い台地上の南東際で検出された方墳である。周溝は南側から西側にかけては残っているが、北側から東側にかけては確認できなかった。残っている周溝の北端部は削平で切られているのではなく、明らかに終わっているので、ここに陸橋部があったと思われる。周溝は幅0.6mから1.87mで、深さは0.16mから0.38mで、コーナー部はやや円を描くように出がるが、形状から方墳と判断した。

主体部は主軸を南北方向に持つ2基の石棺である。西側を第1号主体部、東側を第2号主体部と呼ぶ。

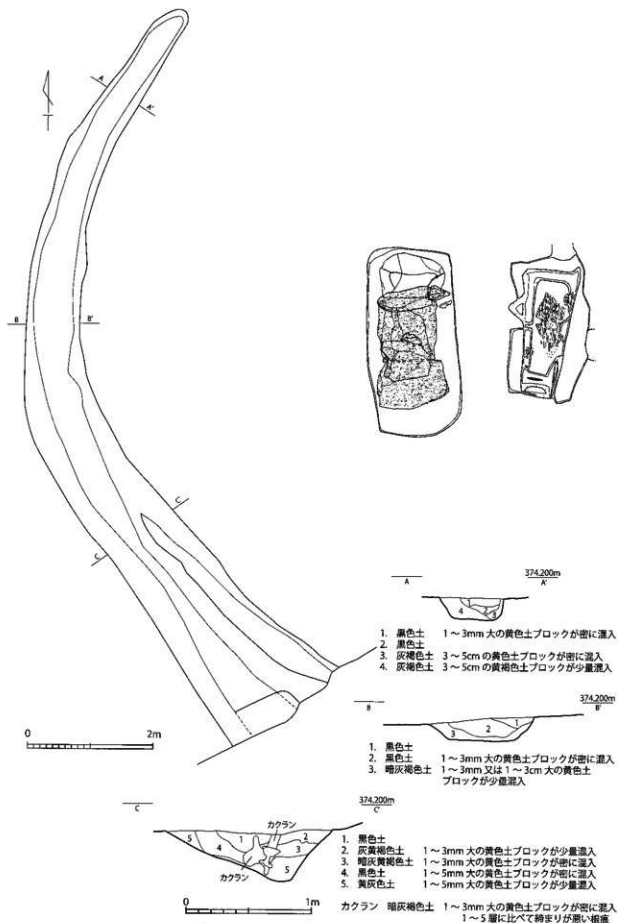
第1号主体部は南北3.0m、東西1.42m、深さ0.06cmの一段目の掘方があり、そこから箱式石棺を構築している。箱式石棺は床石はなく、側石は両側とも2枚を立て、その接合部の外側にもう一枚の石を立てている。小口は両側とも1枚の石である。蓋石は3枚の石を重ねることなく並べ、その接合部2か所にそれぞれ1石を被せている。石はすべて板状の安山岩である。石棺の内法は、南北1.8m、東西0.45m～0.5m、蓋石の裏からの深さ0.66mである。石棺内はすべてベンガラが塗布されていた。

床面の両小口側にそれぞれ枕と考えられる粘土塊があり、2体分の人骨が散乱していた。調査時の所見によると、南頭位のものが初葬で、北頭位のものが追葬である。一段目の掘方の土層観察によると、図示した位置で追葬と思われる掘り込みラインが確認されたことから、一番北側の蓋石以外を取り除き、追葬を行ったことが想定される。

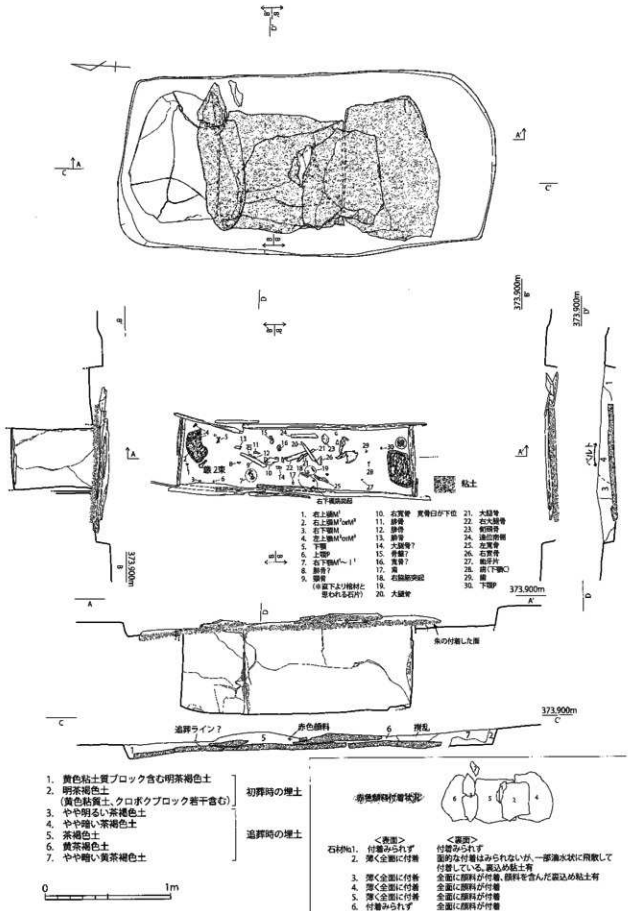
初葬の人物の頭位の東側(右側)には撰文鏡が裏向きに置かれていた。また、追葬の人物の頭位西側(右側)には鉄鍔2本が置かれていた。

第2号主体部は南北2.30m、東西1.35m、深さ7cmの一段目の掘方があり、そこから石棺を構築している。床

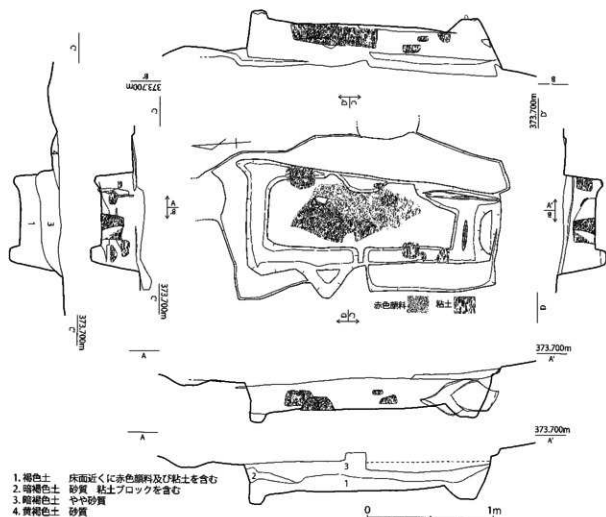




第8-171図 6号周溝墓実測図 (1/60, 1/30)



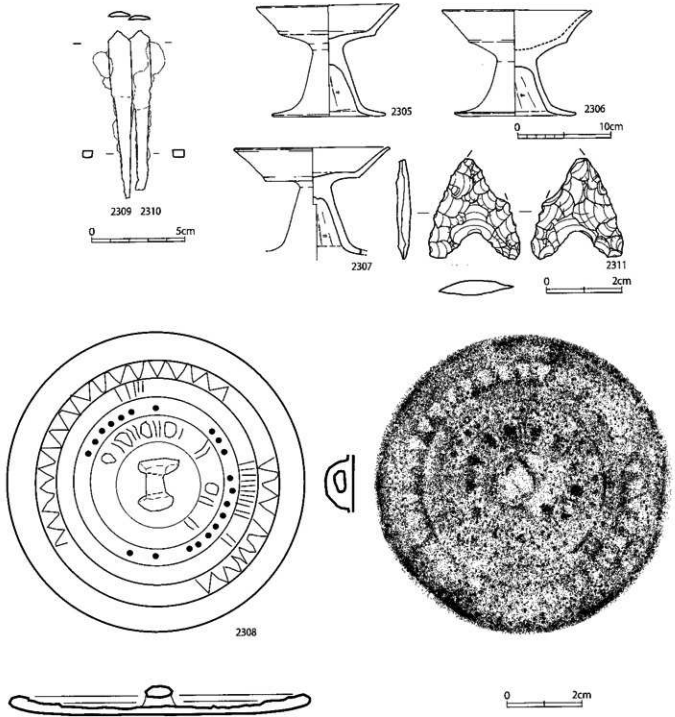
第8-172図 6号周溝墓第1主体部実測図 (1/30)



第8-173図 6号周溝墓第2主体部実測図 (1/30)

石はなく、南東端の側石が2枚立てられていた。石は板状の安山岩である。両側及び小口で石の抜き痕が確認されており、第1号主体部同様、箱式石棺と考える。石棺の内法は、長軸の南北方向が1.48mで、北側小口が幅0.5m、南側が0.35mである。人骨や遺物の出土はなかったが、北側で枕状の粘土塊を確認したことと併せて、頭位は北である。

周溝からは土器が出土している。2305から2307は高坏である。いずれも口縁部の伸びが大きい坏状をなし、裾部で大きく広がる脚部を持つ。2311は流れ込みで、姫島産黒曜石製の打製石鏃である。



第8-174図 6号周溝墓出土遺物 (1/4, 1/2, 1/1)

また、石棺内から青銅鏡1枚と、鉄族2点が出土している。2308は振文鏡で、直径は7.8cm。厚さ3mmの平縁—鋸文帯(38個)—直行する櫛歯文帯(約100本)—珠文帯(38個前後)—依形(13個)—高さ5mmの鈕となる。2309と2310は鍔着しているので、並べて副葬されたものである。2本は同形式で、一部錆びで確認できないものの鍔身は圭頭形で断面片丸造り、頸部は関があると思われる。

この土器から、この古墳の時期は古墳時代前期と考えられる。

#### 第7号周溝墓

調査区の最も高い台地上で検出された方墳である。周溝は南東に傾斜する部分で消失しているため、4分の3しか残っていない。刷溝は幅0.9m～2.6m、深さは0.7m～1.65mで、コーナー部を持ちながらも一辺は緩やかに湾曲している。

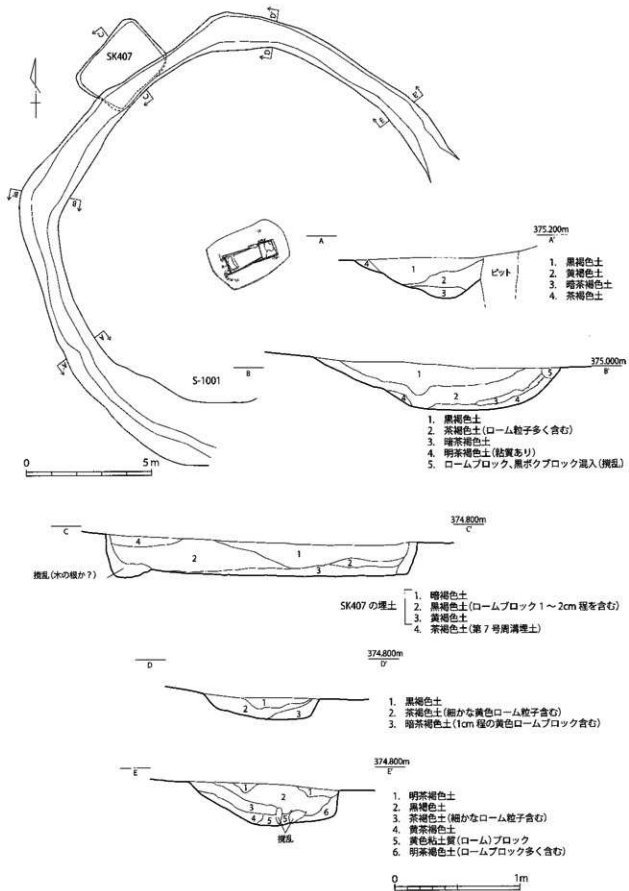
主体部は箱式石棺である。長軸3.2m、短軸1.83m～2.09mの一段目の掘方があるが、数cmしか残されておらず、蓋石も取り去られていた。しかしながら、一段目の掘方床面には、図示した位置に日置りのための白色粘土とベンガラが残されていた。

石棺は、両側石とも大きな2枚を小さな1枚で抑え込むように組み合わせられ、小口は両方とも1石である。側石の東側の一枚は内側に倒れ掛かっていた。床には石材はない。石材はいずれも板状の安山岩である。

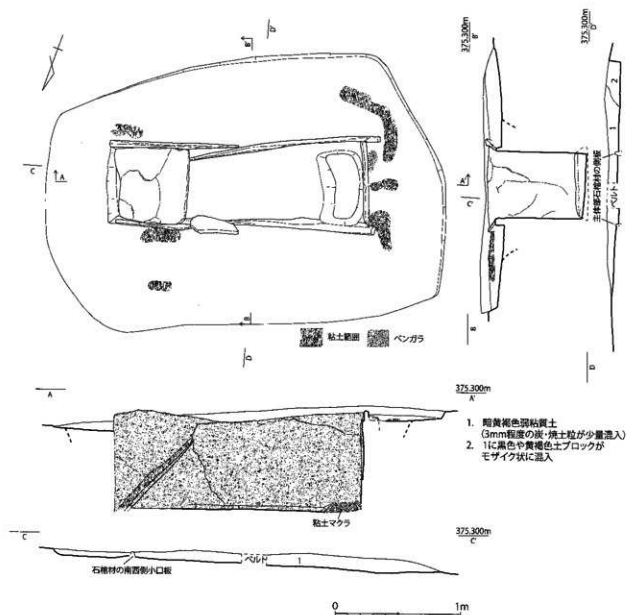
頭位は西で、粘土枕が作られていた。人骨も残存しておらず、石棺内からは出土遺物も無かった。

周溝から遺物が出土している。2312と2313は丸底で球形胴の甕で、2312は二重口縁が崩れた直立する口縁部を持つ。内面はケズリ、外面はハケ調整である。2314は高坏で、坏部の屈曲が弱く、脚部は裾部が直線的に屈曲し開く。2315から2320は流れ込みで、2315は弥生時代中期の甕、2316は全周を丸く磨ったメンコ状土器片加工品である。2317は泥岩製の石包丁、2318から2320は流紋岩製の剥片で、旧石器時代のものである。

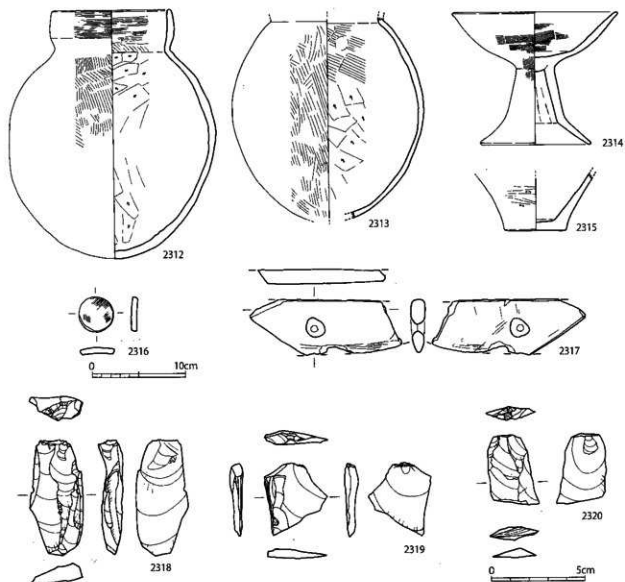
これらの土器から、この古墳の時期は6号周溝墓に後出する古墳時代前期と考えられる。



第8-175図 7号溝溝墓実測図 (1/150, 1/30)



第8-176図 7号周清墓主体部実測図 (1/30)



第8-177図 7号周溝墓出土遺物 (1/4, 1/2)



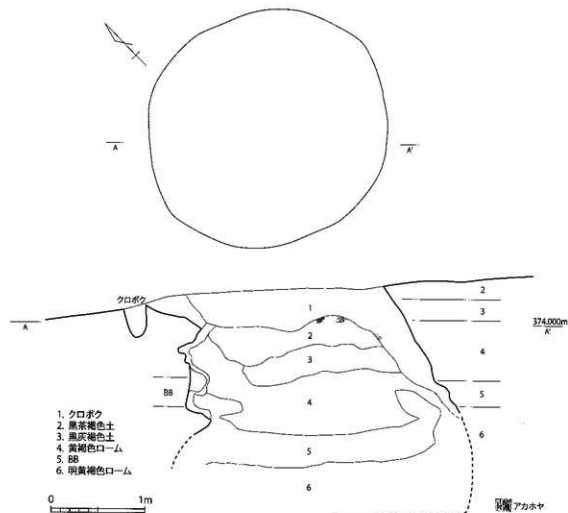
4 中・近世

(1) 土坑

S K 406

状況から、当初は風倒木痕の可能性があると考え掘り下げたが、土層堆積が逆転、あるいは垂直方向になることもなく、整序で堆積していた。危険のため、すべて床面まで下げることはできなかったが、最終的には天井が落ちた地下式土坑であると判断した。入口部も含めて崩落していると考えられ、構造をうかがい知ることはできなかった。遺物などの出土はなく時期の特定はできなかった。

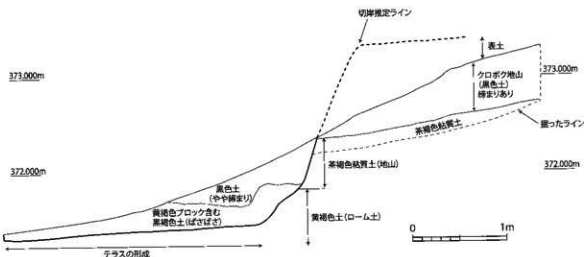
なお、四日市遺跡全体では、第1次調査区で他に2基の地下式土坑が確認されている。



(2) 切岸

最も標高の高い台地は、北東に向かって傾斜するが、地山まで掘り下げたところ、地山を大きくカットした部分が確認された。台地上からは中世前半期の土師質土器が出土していることから、このカットされた部分は、中世城郭にかかわる「切岸」であった可能性が高い。しかしながら、確実な時期を押しえることはできなかった。断面図からわかるように、現状の段差は0.96mほどであるが、本来の高さは2mほどになるものと考えられる。

台地上が城郭だとすると、中世の遺構がないかどうか気がなるが、確実に中世のものと考えられる遺構はなかった。台地周囲に切岸を取りまわしただけの城郭と考えられる。



第8-179図 切岸断面実測図(1/40)

## 5 まとめ

四日市遺跡全体に関する総括は、来年度刊行予定の最終報告書で触れることになるが、今回の報告に関わる遺構、遺物で特に注目すべき点についてだけ、簡単にまとめておきたい。

今回の報告部分でもっとも注目されるものは、弥生時代中期と想定される大型掘立柱建物である。40㎡以上のものが3棟確認された(来年度報告分にも1棟ある)。検出された地点は、台地全体の中で最も東寄りの部分にあたり、さらに細かく見ると、南に延びる丘陵上に1棟とそこから下った地点に2棟(建替え)となる。いずれも構造的には同様で、不規則に並ぶ隅柱で囲まれた内部に棟持ち柱が2本立つものである。久住氏の分類に当てはめると(Ⅲ)、中期前半から古墳時代初頭にみられる屋内棟持ち柱ありの「久保園タイプ」ということになる。この大型建物と切り合いを持つ小型の掘立柱建物も同様に屋内に2本の棟持ち柱があるので、同一場所で主軸を変えながら、規模を拡大しての建て替えと考えられる。そうすると、ほぼ同一場所で2回の建て替えを行ったことになり、この場所が長期にわたり特殊な空間であったことを示唆する。明確に祭祀に関わる遺物の出土はなかったが、建物に伴うと考えられる溝(SD22)からの一定量の土器の出土は、飲食、祭祀などの共同体に関わる行為が行われたことを示唆しているのではなかろうか。

また、最も標高の高い第4次調査区でも大型建物が1棟確認された。構造的には今回報告するSB15、SB16、SB17などと同様である。しかしながら、最も標高の高い部分に立地することから、何らかの特別な建物であった可能性が高いだろう。

これらのことについては、全体の報告がなされる来年度に改めて触れたい。

(註) 久住猛雄「北部九州における弥生時代の特定環溝区画と大型建物の展開」『日本考古学協会2003年遊覧大会資料集』2003年

## 第9章 おわりに

平成13(2001)年に刊行された『玖珠町史(上巻)』では、周知遺跡として四日市遺跡が取り上げられているものの、未調査のため遺跡についての言及はない。工業団地造成のため、発掘調査が始まったのは、その翌年からである。調査は16次にも及び、平成29年度に終了した。一部すでに削平を受けていた部分を除き、台地の平坦面積約100,000㎡すべてを調査したことになる。弥生時代を中心とした150基近い竪穴建物や大型掘立柱建物、多くの土坑、石棺などの墓、古墳時代前期から中期の円形、方形の周溝墓、古代の土塚墓、中世の寺院や城跡跡などを検出し、多くの成果を上げることができた。中でも最も大きな成果は、台地全面を調査したということであろう。この総括については、最終報告が出る来年度に行うとして、ここでは本報告に関わる部分で、重要と考えられる点について若干のまとめをしておきたい。ただし、時間的にはこの遺跡の中心をなす弥生時代に限ることとする。

弥生時代の多くの遺構の中でも注目されるのは、116㎡に達する大型掘立柱建物をはじめとした掘立柱建物が17基確認されていることで、その中から二つのタイプを抽出することができる。一つは、やや不揃いの隅柱を5～9本持つ大型のもので、面積はSB6の約32㎡を最小に、SB15の116㎡まで7棟ある。いずれも、内部に棟持ち柱を有するという構造上の共通点がある。興味深いのは、SB17を除くと、最小のSB6が最も西側にあり、東に行くほど面積が大きくなるという点である。この建物が、あるまるとり毎に1棟建てられているとしたら、少なくとも4集団がいたことになろうが(ただし、集団を明確に区画する溝などの遺構や自然地形は存在しない)、それら集団間の優劣が建物規模に現れているとも解釈できよう。最も大きなSB15と次に大きいSB16は同一地点での建て替えであり、その前身であるSB17も含めると、長期にわたってこの場所が四日市台地全体の中で特異な場所であったことが想定できる。さらにそこから見上げる丘上(第4次調査区)に3番目に大きなSB20が建っていた。このように、この台地の最も東側は何らかの意味がある場所であった。

さらに、このタイプの建物の主軸方向(桁行)が北から東へ30度前後振れるもの(SB6、7、20)と北から西へ60度振れるもの(SB8、15、16)に分かれることである。両者は大旨直行することも意味があるように思える。特にSB20の場合は幅が狭い尾根の上に、わざわざ軸を尾根に平行にして、建物前面(平側)の空間があまり取れないようになっている。このことは、この建物は内部で行われる行為に意味があったということを示しているようにも見える。

次に、1間×2間の規格を有する掘立柱建物が5棟(内1棟は来年度報告分)ある。面積は30㎡前後で、しっかりした柱穴掘方を有するという共通点がある。これらは、四日市台地中央から東側に分布が偏る。このことは、前記したタイプの掘立柱建物が、東に行くほど大きくなることも背景を同じくするものであろう。

では、台地全体で竪穴建物や土坑の分布や規模などの違いが顕著に見られるかというと、そうでもない。西側に行くほど台地の幅が狭くなり、生活できる面が少なくなるので、遺構の絶対数は少なくなっているが、密度は大きくは変わらない。遺構密度や規模などに現れない何らかの要素が、台地の東西で優劣を生んだのであろう。

四日市遺跡は、玖珠盆地を眼下に見下ろす四日市台地上にある。このような台地は、四日市台地のすぐ東側にある十の釣や、玖珠盆地の東端にあたる岩室の旦の原の台地があり、いずれも弥生時代の遺跡が確認されている。しかしながら、台地面積や盆地との位置関係など(水田耕作地の確保など)を勘案すると、四日市台地が最も有利である。この台地上で弥生時代中期後半に大規模な集落が営まれていた。おそらく、玖珠川流域の拠点集落であったのは間違いないであろう。しかしながら、その集落跡に成人用墓地は営まれていなかった(弥生時代終末と考えられる石棺墓群はあるが)。これは、集落が比較的短時間で廃棄されたためなのか(切り合いがほとんど無い)、別な場所に墓地が作られたからなのか、今後検討を要する課題であろう。

弥生時代中期後半には、おそらく100件近くの竪穴建物が営まれていた。すべてが同時存在とは言えないが、切り合いがほとんど無く、極めて短期間の内に集落形成、そして廃棄がなされたと考えられる。この理由についても、今後検討していく必要がある。

## 遺物觀察表

四日市遺跡土器観察表

No.	発掘年	発掘場所	土器の種類	数量	重量	形状・特徴	土質			調査者	調査内容		
							硬さ	色	質				
3-20	22	SH45	弥生土器 罎	(28.6)	21.9+e	外面はヨコナデ・ナデ・ハケ、内面はヨコナデ・ナデ	少	少	少	外面にスス付着	第9次調査1区 S040	29	
3-20	23	SH45	弥生土器 罎	(23.0)	15.8+e	外面はヨコナデ・ナデ・ハケ、内面はヨコナデ・ナデ	多	多	多		第9次調査1区 B-4 包含層目録・S040 - 一括	28・20	
3-20	24	SH45	弥生土器 罎	(24.7)	3.9+e	外面はヨコナデ、内面はヨコナデ・ナデ	少	少	少	口縁部外面にスス付着	第9次調査1区 S040	24	
3-20	25	SH45	弥生土器 罎	(28.0)	5.2+e	外面はヨコナデ・ナデ・ハケ、内面はヨコナデ・ナデ	少	少	少	口縁部外面にスス付着	第9次調査1区 S040	13	
3-20	26	SH45	弥生土器 罎	(26.8)	8.7+e	外面はヨコナデ・ナデ・ハケ、内面はヨコナデ・ナデ	多	多	多	外面にスス付着	第9次調査1区 S040 B-4 包含層目録・S040 - 一括	24	
3-20	27	SH45	弥生土器 罎		23.7+e	外面はナデ・ハケ、内面はナデ	少	多	多	外面にスス付着	第9次調査1区 S040	11・13・19	
3-20	28	SH45	弥生土器 罎		18.2+e	外面はナデ・ヨコナデ・ハケ、内面はナデ	多	多	少	多	第9次調査1区 S040	24	
3-20	29	SH45	弥生土器 罎		6.5+e (6.6)	外面はナデ・ヨコナデ・ナデ	多	多	多		第9次調査1区 S040		
3-20	30	SH45	弥生土器 罎	(28.0)	12.5+e	外面はヨコナデ・ナデ・ミダケ、内面はヨコナデ・ナデ・ミダケ	多	多	多		第9次調査1区 S040	14	
3-20	31	SH45	弥生土器 罎	(19.8)	7.4+e	外面はヨコナデ・ナデ・ハケ、内面はヨコナデ・ナデ	多	少	少	内面に間違っており赤褐色の影あり	第9次調査1区 S040	7・10	
3-20	32	SH45	弥生土器 罎?		3.7+e	外面はナデ・ヨコナデ・粘付突起、内面はナデ	多	少	多	外面に丹塗あり	第9次調査1区 S040		
3-20	33	SH45	弥生土器 罎		7.0+e	外面はミダケ、内面はミダケ	少	少	少		第9次調査3区 S040	16	
3-23	35	SH46	弥生土器 罎	(20.6)	7.1+e	外面はヨコナデ・ミダケ、内面はヨコナデ・ナデ	多	多	多		第8次調査2区 S2002	№7	
3-23	36	SH46	弥生土器 罎			外面はヨコナデ・ナデ、内面はヨコナデ	少	少	少		第8次調査S-72 ケブトレ上層		
3-23	37	SH46	弥生土器 罎		12.3+e	外面はヨコナデ・ナデ、内面はヨコナデ	多	多	多	外面に丹塗あり	第8次調査S-72	7	
3-23	38	SH46	弥生土器 罎	-	22.7+e	外面は横一線のみがき、粘付層突起、内面はナデ	多	多	多		第8次調査2区 S2001・S2000南側	36.1	
3-23	39	SH46	弥生土器 罎	4.9+e	5.5	外面はタテ方向のハケ・ヨコナデ・ナデ、内面はナデ	少	多	少		第6次調査S-72		
3-23	40	SH46	弥生土器 罎	-	4.9+e	7.0	外面はナデ、内面はナデ・粘付突起	多	多	少		第8次調査2区 S2002	№6
3-23	41	SH46	弥生土器 罎	長さ 8.5+e	幅 2.3	外面はヘラミダケ・ナデ、内面はヘラミダケ	多	多	少		第6次調査S-72	11	
3-23	42	SH47	弥生土器 罎	5.1+e	(7.0)	外面はタテ方向のハケ・ヨコナデ・ナデ、内面はナデ	少	少	多		第6次調査S-71	1	
3-23	44	SH47	弥生土器 罎	3.9+e	6.9	外面はナデ・タテ方向のハケ・ヨコナデ、内面はナデ	多	少	多	外面にスス付着	第6次調査S-71	11	
3-23	45	SH47	弥生土器 罎		7.5+e	8.0	外面はタテ方向のハケ・ヨコナデ・産層土層、内面はナデ	少	多		産層定形	第6次調査S-71	4・6
3-27	51	SH48	弥生土器 罎	(30.0)	90+e (28.5)	外面はヨコナデ・タテ方向のハケ、内面はヨコナデ・ナデ	多	多	多	外面にスス付着(内外面に部分的赤塗あり)	第7次調査4区 S-075	10・63・70	
3-27	52	SH48	弥生土器 罎	(21.4)	17.0	9.8	外面はヨコナデ・ナデ・タテハケ長ナデ、内面はヨコナデ・ナデ	多	多		第7次調査4区 24FS075 ベルト層	31・32・31・34・33・36・37・47・68	
3-27	53	SH48	弥生土器 罎				外面はヨコナデ・タテ方向のハケ、内面はヨコナデ・ナデ	少	少	少	第7次調査S-075	41	
3-27	54	SH48	弥生土器 罎				外面はヨコナデ・タテ方向のハケ、内面はヨコナデ・ナデ	少	少	少	第7次調査S-075	6	
3-27	55	SH48	弥生土器 罎		34+e		外面は横一線のみがき、粘付層突起、内面はナデ・タテ方向のハケ	多	多	少	内面にスス付着	第7次調査4区 S-075	
3-27	56	SH48	弥生土器 罎				外面はヨコナデ、内面はヨコナデ	少	少	少	第6次調査S-75 P-6級出土層	7	
3-27	57	SH48	弥生土器 罎				外面はヨコナデ・ヨコ方向のヘラミダケ、内面はヨコナデ・ナデ	多	多	少	第7次調査S075	29	
3-27	58	SH48	弥生土器 罎		9.5+e		外面はタテ方向のハケ、内面はナデ	少	少	少	外面にスス付着	第7次調査4区 S-075	
3-27	59	SH48	弥生土器 罎		7.5		外面はタテハケ長ナデ・ヨコナデ、内面はナデ	多	多		第7次調査4区 S075	55・72・No77	
3-27	60	SH48	弥生土器 罎		60+e (7.4)		外面はタテ方向のハケ・ヨコナデ・ナデ、内面はナデ	多	多	多	内面条件、外面部(分)にスス付着	第7次調査S-075	34
3-27	61	SH48	弥生土器 罎		30+e	7.8	外面はヨコ方向のナデ・ナデ、内面は横一線が見られる	多	多	多		第7次調査 S-075・S-012 中層	30
3-27	62	SH48	弥生土器 罎		4.9+e (7.2)		外面はタテ方向のハケ長ヨコナデ・ナデ、内面はナデ・粘付突起	少	多	多		第7次調査S-075	39・75

年度	区画番号	名称	種別	面積 (㎡)	延床面積 (㎡)	用途	構造	築年	備考	備考	備考				
3-27	63	SH48	養生土留	変	3.3+ a	(7.2)	外置はタテ方向のハケ・ヨコナデ、ナデ、内置はナデ・指圧面	多	多	多	多	内面外壁、外置付着。底面にスス付着	第7次調査S-075	9	
3-27	64	SH48	養生土留	変	4.8+ a	(7.0)	外置はナデ、タテ方向のハケ・ヨコナデ、内置はナデ	多	多	多	多		第6次調査S-075 P-6抽出	5	
3-30	74	SH49	養生土留	変			外置はヨコナデ・タテ方向のハケ、内置はヨコナデ・ナデ	少	少	少	少		第6次調査S-54	6	
3-30	75	SH49	養生土留	壁付	5.6+ a	(10.0)	外置はタテ方向のハケ・ヨコナデ、内置はナデ・ヨコナデ	少	少	少	少		第6次調査S-54	9	
3-30	76	SH48	養生土留	台付柱	17.6	17.5	10.0	外置はヨコナデ・タテ方向のハケ・指圧面、内置はヨコナデ・指圧面・ナデ	多	多	多	多	柱内面に黒染	第6次調査S-34	1
3-32	80	SH50	養生土留	変	(23.8)	29.3	6.8	外置はヨコ方向のハケ後ヨコナデ・タテ方向のハケ・ナメ方向のハケ・ヨコナデ・ナデ、内置はヨコナデ・ナデ	多	多	少	多	外置にスス付着	第6次調査S-79	1
3-32	81	SH50	養生土留	変	(25.4)	14.3+ a		外置はタテ方向のハケ・ヨコナデ、内置はナデ・ヨコナデ	多	多	多	多		第6次調査S-79	3
3-32	82	SH50	養生土留	変				外置はタテ方向のハケ・ヨコナデ、内置はナデ・ヨコナデ	多	多	多	多		第6次調査S-79	7
3-32	83	SH50	養生土留	変	8.0	4.1+ a		外置はヨコ、タテ方向ヘラミダキ、内置は指圧面・ロコ方向ヘラミダキ	少	少	少	少	丹塗り	第6次調査S-79	2
3-32	84	SH50	養生土留	変				外置はヘラミダキ・削み目取帯、内置は工具によるナデ	少	少	少	少	黒染あり	第6次調査S-79	7
3-32	85	SH50	養生土留	変	6.2+ a	7.3		外置はヨコ方向ヘラミダキ・底面ヘラミダキ、内置はヘラミダキ・ナデ	多	多	多	多	外置に黒染あり	第6次調査S-79	5
3-32	86	SH50	養生土留	変	6.5+ a	(7.0)		外置はタテ方向のハケ・ヨコナデ・底面ナデ、内置はナデ	多	多	多	少		第6次調査S-79	4
3-32	87	SH50	養生土留	変	6.8+ a	7.8		外置はタテ方向のハケ・ヨコナデ・底面ナデ、内置はナデ	多	多	少	少	内面底面にコゲ付着	第6次調査S-79	2
3-32	88	SH50	養生土留	壁付	(10.0)			外置はナデ・ヨコナデ、内置はナデ・ヨコナデ	少	多	少	少		第6次調査S-79	2
3-32	89	SH50	養生土留	壁付	12.8+ a	11.6		外置はタテ方向のハケ・ヨコナデ、内置はナデ・ヨコナデ	多	多	多	多		第6次調査S-79	7・8
3-34	90	SH51	養生土留	変	(28.8)		13.6	外置はヨコナデ・指圧面・タテ方向のハケ・ナメ方向のハケ・ナデ、内置はヨコナデ・ナデ・指圧面	多	多	多	多	鉄板のため両面に書架 スス付着	第6次調査S-100 サブトレント 一括	10・2・3
3-34	91	SH51	養生土留	変	(27.0)	13.7+ a		外置はタテ方向のハケ・ヨコナデ、内置はナデ・ヨコナデ	多	多	多	多	外置にスス・コゲ付着	第6次調査S-100 サブトレント 一括	10・2・3
3-34	92	SH51	養生土留	変				外置はヨコナデ・指圧面・タテ方向のハケ・ナメ方向のハケ・ナデ、内置はヨコナデ・ナデ・指圧面	多	多	多	多	鉄板のため両面に書架 スス付着	第6次調査S-100 サブトレント 一括	10・2・3
3-34	93	SH51	養生土留	変				外置はタテ方向のハケ・ヨコナデ、内置はヨコナデ	多	多	多	多		第6次調査S-100 B・B区・ベルト 付保層引替	10
3-34	94	SH51	養生土留	変				外置はタテ方向のハケ・ヨコナデ、内置はナデ・ヨコナデ	多	多	多	多		第6次調査S-100	8
3-34	95	SH51	養生土留	変	17.4	(6.4)		外置は全壁に不況方向のヘラミダキ(壁端は削撃している)、内置はヨコナデ・ナデ、中置にヨコ方向のケズリ・底面に書架・ケズリ	多	多	多	多	表面に丸く削撃した跡が4ヶ所、表面に付着・黒染あり	第6次調査S-100	9
3-34	96	SH51	養生土留	壁付	3.8+ a	(12.0)		外置はヘラミダキ、内置はヨコナデ	少	多	少	少	外置丹塗り	第6次調査S-100 5・B区 壁ペイント	10
3-36	97	SH52	養生土留	変	(34.0)	4.0+ a		外置はヨコナデ・ハケ・削み目、内置はヨコナデ	少	少	少	少		第9次調査3区 S016	8
3-36	98	SH52	養生土留	変	4.1+ a			外置はヨコナデ・変帯、内置はナデ	少	少	少	少		第9次調査3区 S016	12
3-36	99	SH52	養生土留	変	4.5+ a			外置はミダキ・変帯、内置はミダキ	少	少	少	少		第9次調査3区 S016	4・14
3-36	100	SH52	養生土留	変	30.7+ a	7.2		外置はミダキ・変帯、内置はナデ・指圧面	少	少	少	少		第9次調査3区 S016	9・11・13
3-36	101	SH52	養生土留	壁付	3.2+ a			外置はヨコナデ・ミダキ、内置はヨコナデ・ミダキ	少	少	少	少		第9次調査3区 S016	3
3-36	102	SH52	養生土留	壁付	8.8+ a	(10.7)		外置はハケ・ヨコナデ、内置はナデ・ヨコナデ	少	少	少	少		第9次調査3区 S016	2・3
3-36	103	SH52	養生土留	変	7.0+ a	(7.7)		外置はハケ・ヨコナデ、内置はナデ	少	少	少	少		第9次調査3区 S016	8
3-36	104	SH52	養生土留	変	3.5+ a	(6.8)		外置はヨコナデ後ハケ・ヨコナデ、内置はナデ	少	少	少	少		第9次調査3区 S016	7
3-36	105	SH52	養生土留	壁	2.1+ a	(7.1)		外置はナデ、内置はヨコナデ	少	少	少	少		第9次調査3区 S016	12
3-39	106	SK203	養生土留	変	1.8+ a			外置はヨコナデ、内置はヨコナデ	多	多	多	多	内外に丹塗りあり	第9次調査1区 S049	2
3-41	107	SK204	養生土留	変	(28.3)	25.5+ a		外置はヨコナデ・ナデ・ハケ、内置はヨコナデ・ナデ	多	多	多	多	外置にスス付着	第9次調査1区 S041	3・8
3-41	108	SK204	養生土留	変	(30.2)	13.7+ a		外置はヨコナデ・ナデ・ハケ、内置はヨコナデ・ナデ	多	多	多	多	外置にスス付着	第9次調査1区 S041	7



品目	品名	規格	単位	寸法			質量	材質	備考	仕様			備考	備考	
				幅	高さ	奥行				色	形状	備考			
356	146	SD17	養生土器	変	(23.6)			外周はヨコナデ、タテハケ後ヨコナデ、タテハケ後ナデ、内周はヨコナデ、ナデ	多	少				第7次調査S012	29
356	130	SD17	養生土器	変				外周はヨコナデ、内周はヨコナデ	多	多	少			第7次調査S012	
356	151	SD17	養生土器	変	(33.4)			外周はヨコナデ、工具用、内周はヨコナデ	少	多				第7次調査S012	
356	152	SD17	養生土器	鉢	(25.5)	95±a		外周はヨコナデ、ナデ、ハケ、内周はヨコナデ、丁取ナデ	多	多	少	外周に黒塗装		第9次調査1区S012	4
356	153	SD17	養生土器	変	(9.2)			外周はヨコナデ、タテハケ後ナデ、内周はヘラミガキ後ナデ	多	多	多			第7次調査S012	
356	154	SD17	養生土器	鉢				外周はヨコナデ、ヘラミガキ、内周はナデ	少		少			第7次調査S012	
356	156	SD17	養生土器	台付鉢	62±a	(9.0)		外周はタテハケ、ヨコナデ、内周はナデ	多	多	少			第7次調査S012	42
356	156	SD17	養生土器	変				外周はタテハケ後ナデ、内周は工具ナデ、ナデ	多	多				第7次調査S012	13、16
356	157	SD17	養生土器	変	3.0±a	7.0		外周はタテハケ、ヘラミガキ、底面ナデ、内周はナデ	少	多	多			第7次調査S012	
356	158	SD17	養生土器	変	2.5±a	7.4		外周はヨコナデ、ヨコナデ、ナデ、内周は底面	少	多	多			第9次調査1区S012	
356	159	SD17	養生土器	変		(6.0)		外周はタテハケ後ナデ、ヨコナデ、ナデ、内周はナデ	多	多	多			第7次調査S012 C-4	
356	160	SD17	養生土器	変	6.0±a	6.6		外周はナデ、ヨコナデ、ハケ、内周はナデ	多	多	少			第9次調査1区S012	
356	161	SD17	養生土器	変		(7.2)		外周はヨコナデ、ナデ、内周はナデ	多	多	少			第7次調査S012	
356	162	SD17	養生土器	変	4.2±a	(7.0)		外周はタテハケ、ヨコナデ、底面ナデ、内周はナデ	多	多	少			第7次調査S012	19
356	163	SD17	養生土器	変	5.2±a			外周はタテハケ、ナデ、内周はナデ	少	多	少			第7次調査S012	
356	164	SD17	養生土器	変	6.4±a	6.6		外周はナデ、ヨコナデ、ハケ、内周はナデ	多	多	少			第9次調査1区S012	4
356	165	SD17	養生土器	変		(6.0)		外周はタテハケ後ナデ、ヨコナデ、ナデ、内周はナデ	多	多	多			第7次調査S012	
356	166	SD17	養生土器	変	3.6±a	(6.5)		外周はナデ、ヨコナデ、ハケ、内周はナデ	多	多	多			第9次調査1区S012	8
356	167	SD17	養生土器	変	6.5±a	(7.0)		外周はタテハケ、ヨコナデ、底面ナデ、内周はナデ	多	多	多			第7次調査S012	30
356	168	SD17	養生土器	変	5.3±a	(7.0)		外周はタテハケ、ヨコナデ、底面ナデ、内周はナデ	多	多	多			第7次調査S012	25
356	169	SD17	養生土器	変	6.0±a	6.7		外周はナデ、ヨコナデ、ナデ、内周はナデ	多	多	少			第9次調査1区S012	1
356	170	SD17	養生土器	変	2.8±a	8.6		外周はナデ、ヨコナデ、ハケ、内周はナデ	多	多	少			第9次調査1区S012	
356	171	SD17	養生土器	変	3.0±a	(3.0)		外周はヨコナデ、ヘラミガキ、底面ナデによるナデ、内周はナデ、ヨコナデ	多	多	少			第7次調査S012	5
356	172	SD17	養生土器	変	(8.0)	16.3	(11.2)	外周はヨコナデ、タテハケ後ナデ、内周はヨコナデ、ナデ、ナデ	少	多				第7次調査S012	
357	173	SD17	養生土器	変	(9.6)	17.7	(10.2)	外周はヨコナデ、タテハケ後ナデ、内周はヨコナデ、ナデ	少	多				第7次調査S012 トレンチ・北側ベ ルト	30
357	174	SD17	養生土器	変	(27.0)			外周はナデ後ナデ、ヨコナデ、内周はヨコナデ	多	多				第7次調査S012	22
357	175	SD17	養生土器	変				外周はヨコナデ、ハケ後ナデ、内周はヨコナデ	多	多				第7次調査S012	
357	176	SD17	養生土器	変	10.9±a	4.3		外周はタテハケ後ヘラミガキ、内周は底面ナデ、ナデ	少	多	多	脚部		第7次調査S012	19
357	177	SD17	養生土器	変	5.3±a	(12.8)		外周はヨコナデ、底面、内周はヨコナデ、底面	多	多	多	脚部		第7次調査S012	
357	180	SD18	養生土器	変	8.1±a			外周はヨコナデ、底面、内周はヨコナデ	少	少	少			第9次調査3区S012	1
357	191	SD18	養生土器	変	7.1±a	6.5		外周はナデ、ヨコナデ、内周はナデ、底面	少	少	少			第9次調査3区S012	10
357	192	SD18	養生土器	変	(7.0)	7.1		外周は底面により不明、ヨコナデ、内周は工具ナデ、ヨコナデ	少	少	少			第6次調査S-3	
357	196	SK217	養生土器	変	(10.9)	3.7±a		外周はヨコナデ、内周はヨコナデ	少	少	少			第9次調査3区S015	
357	218	SD15	養生土器	変	(33.2)	5.6±a	-	外周はヨコナデ、底面、内周はヨコナデ、ヨコナデ	多	多	多			第8次調査2区S2001・D-1(II)部	36f
357	219	SD15	養生土器	変	2.2±a	(3.6)		外周は底面、ヨコナデ、底面	少	多	少			第8次調査2区S2001	
357	220	SD15	養生土器	変	5.5±a	8.6		外周は底面、底面、ナデ、内周はナデ	多	多	少			第8次調査2区S2001	36f
357	221	SD15	養生土器	変	3.6±a	-		外周はヨコナデ、内周はヨコナデ	少	多	多			第8次調査2区S2001	
357	222	SD15	養生土器	変	2.2±a	-		外周は底面(底面)、内周は底面(底面)	-	-	-	脚部、中国製か?		第8次調査2区S2001	



区分	名称	所在地	用途	面積 (㎡)	延床 面積 (㎡)	構造	基礎	躯体	屋根	外装	内装	設備	備考	建築時期	所在地
376	223	SD15	駅前 駅	(102)	14+a	-	-	外装は施設、内装は施設	-	-	-	-	機軸	第6次調査2区 S2001	№1
376	224	SD15	駅前 駅	-	27+a	44	-	外装は施設、高層・特殊仕様 内装は施設	-	-	-	-	機軸	第6次調査2区 S2001	№2
376	225	SD15	駅前 駅前	-	47+a	(124)	-	外装はヨコナデ、内装は建具	少	少	少	-	機軸	第6次調査2区 S2001	№3
376	226	SP6	張生土器 曹	-	10+a	-	-	外装はナデ、内装はハケ	少	多	少	-	機軸	第6次調査2区 S2002	
376	229	SP6	張生土器 曹	(102)	78+a	-	-	外装はヨコナデ・ハケ、内装はナデ	少	多	少	-	機軸	第6次調査2区 S2000	
379	230	8-2次棟 大	張生土器 曹	(188)	76+a	-	-	外装はヨコナデ・ハケ、内装はヨコナデ・ナデ	多	多	多	-	機軸	第6次調査2区 S2003	№1
379	231	8-2次棟 大	張生土器 曹	-	84+a	-	-	外装はヨコナデ、ミガキ・貼付窓等、内装はナデ	少	多	少	-	機軸	第6次調査2区 S2010	№1
380	232	張生土器 曹	(205)	117+a	-	-	-	外装はタテ方向のハケ・ナメ方内のハケ・ヨコナデ、内装はヨコナデ・ヨコナデ	多	多	-	外装にスス付着	第6次調査C4ト レンチ 黒色土		
380	233	張生土器 曹	(290)	-	-	-	-	外装はヨコナデ・タテ方向のハケ・ナメ方、内装はヨコナデ・タテ方向のハケ・ナメ方	少	多	-	外装にスス付着	第6次調査グリッ ドF5 黒色土		
380	234	張生土器 曹	(216)	-	-	-	-	外装はヨコナデ・タテハケ・ヨコナデ、内装はヨコナデ	多	多	-	機軸	第7次調査B-5		
380	235	張生土器 曹	(184)	-	-	-	-	外装はヨコナデ、内装はヨコナデ	多	多	-	機軸	第6次調査グリッ ドF8 黒色土		
380	236	張生土器 曹	(124)	-	-	-	-	外装はヨコナデ・適合窓・タテ方向のハケ・ナメ方、内装はヨコナデ・適合窓・タテ方向のハケ・ナメ方	多	多	-	機軸	第6次調査グリッ ド4 トレンチ内 黒色土		
380	237	張生土器 曹	(102)	-	-	-	-	外装はヨコナデ・タテ方向のハケ・ナメ方、内装はヨコナデ・タテ方向のハケ・ナメ方	少	多	-	内外にスス付着	第6次調査C3グ リッド		
380	238	張生土器 曹	(242)	-	-	-	-	外装はヨコナデ・貼付窓等、内装はヨコナデ・貼付窓等	少	多	-	機軸	第6次調査		
380	239	張生土器 曹	(184)	-	-	-	-	外装は強いヨコナデ・ナデ・外装、内装は強いヨコナデ・ナデ、窓等	少	多	少	機軸	第6次調査グリッ ド4 トレンチ内 黒色土		
380	240	張生土器 曹	(184)	-	-	-	-	外装はヨコナデ・タテ方向のハケ・ナメ方、内装はヨコナデ・タテ方向のハケ・ナメ方	少	多	少	機軸	第6次調査グリッ ドF8 黒色土		
380	241	張生土器 曹	(184)	-	-	-	-	外装はヨコナデ・お取り、内装はヨコナデ・お取り	少	多	-	機軸	第6次調査グリッ ド4 トレンチ内 黒色土		
380	242	張生土器 曹	(184)	-	-	-	-	外装はヨコナデ・ミガキ(機軸)、内装はヨコナデ・ミガキ(機軸)	少	多	-	機軸	第6次調査B5 黒色土		
380	243	張生土器 曹	(250)	-	-	-	-	外装はヨコナデ・貼付窓等、内装はヨコナデ・貼付窓等	多	多	少	外装にスス付着	第6次調査グリッ ドF9 黒色土		
380	244	張生土器 曹	(184)	-	-	-	-	外装は貼付窓等、内装は貼付窓等	少	少	-	機軸	第6次調査B5		
380	245	張生土器 曹	(124)	-	-	-	-	外装はヨコナデ・タテ方向のハケ・ナメ方、内装はヨコナデ・タテ方向のハケ・ナメ方	少	多	-	機軸	第6次調査グリッ ドF12 黒色土		
380	246	張生土器 曹	(184)	-	-	-	-	外装はナデ・タテ方向のハケ・ナメ方、内装はナデ・タテ方向のハケ・ナメ方	少	多	少	機軸	第6次調査表上		
380	247	張生土器 曹	(184)	-	-	-	-	外装はヨコナデ、内装はヨコナデ	少	少	-	機軸	第7次調査		
380	248	張生土器 曹	(184)	-	-	-	-	外装は強いタテ方向のハケ・ナメ方・タテ方向のナメ方・ヨコナデ、内装は強いタテ方向のハケ・ナメ方・タテ方向のナメ方・ヨコナデ	少	少	-	機軸	第6次調査		
380	249	張生土器 曹	(94)	-	-	-	-	外装はタテ方向のヘラミガキ・ヘラミガキ・ナデ、内装はタテ方向のヘラミガキ・ヘラミガキ・ナデ	多	多	-	機軸	第6次調査グリッ ドF8 黒色土		
380	250	張生土器 曹	(84)	-	-	-	-	外装はナデ、内装はナデ	少	多	多	機軸	第7次調査C4		
380	251	張生土器 曹	(26)	26	-	-	-	外装はナデ、内装はナデ	少	多	-	機軸	第6次調査グリッ ドF8 黒色土		
380	252	張生土器 曹	(74)	-	-	-	-	外装はナデ、内装はナデ	多	多	-	機軸	第7次調査		
380	253	張生土器 曹	(90)	-	-	-	-	外装はタテ方向のハケ・ナメ方・タテ方向のハケ・ナメ方、内装はヨコナデ・ヨコナデ	多	多	-	機軸	第6次調査B5 黒色土		
380	254	張生土器 曹	(76)	76	-	-	-	外装はタテハケ・ナメ方・タテハケ・ナメ方・ヨコナデ・ナデ、内装はナデ	多	多	-	機軸	第7次調査C3	1	
380	255	張生土器 曹	(90+a)	70	-	-	-	外装はタテ方向のハケ・ヨコナデ・貼付窓等、内装はナデ	多	多	-	機軸	第6次調査C1グ リッドF11 黒色土		

No.	品名	規格	寸法			重量	材質	寸法				備考	数量	単位	備考		
			長さ	幅	高さ			長さ	幅	高さ	寸法						
3-80	256	養生土器	壺				外周はタテ方向のハケ後ナゲ はヨコナゲ。内周はタテ方向 のハケ後ナゲ。ヨコナゲ	多	多	少					第6次調査区		
3-82	266	養生土器	壺	-	11+a	-	外周はヨコナゲ・ミガキ・白 塗り。内周はナゲ・白塗り	少	多	少	少				第6次調査区2区 C-2 (1層)		
3-82	267	養生土器	壺	-	55+a	(50)	外周はナゲ・磨減しているが ハケ残。内周はナゲ	少	多	少	多				第6次調査区2区 D-1 (8層)		
3-82	268	陶器 燗甗	壺	-	49+a	-	外周はヨコナゲ。内周はヨコ ナゲ		少	少	少				第6次調査区2区 C-2 (1層)		
3-82	269	瓦葺土器	鉢	-	43+a	-	外周はヨコナゲ・ナゲ。内周 はヨコナゲ・ナゲ	少	少	少	少				第6次調査区2区 D-1 (1層)		
3-82	270	磁器	壺	(15.0)	114+a	6.2	外周は高柄・高底。内周は丸 筒・高底	-	-	-	-	特製			第6次調査区2区 C-1 (1層)		
3-83	280	養生土器	壺	(25.0)	43+a	-	外周はヨコナゲ・ナゲ・ハケ 。内周はヨコナゲ	少	多	多	多				第9次調査区1区 B-4 包含層5層		
3-83	281	養生土器	壺	(27.9)	39+a	-	外周はヨコナゲ・ナゲ。内周 はヨコナゲ・ナゲ	多	多	多	多				第9次調査区1区 B-4 包含層5層		
3-83	282	養生土器	壺		48+a	-	外周はナゲ・ハケ。内周はナゲ	多	多	少	多				第9次調査区1区 B-5	4	
3-83	283	養生土器	壺		54+a	(6.7)	外周はナゲ・ヨコナゲ・ハケ 。内周はナゲ	多	多	少	多				第9次調査区1区 C-4 包含層5層		
3-83	284	養生土器	壺		46+a	(6.8)	外周はナゲ。内周はナゲ	多	多	少	多				第9次調査区1区 C-6 包含層	17	
3-90	303	SH53	養生土器	壺	30.3	27.8	6.2	外周はヨコナゲ・タテ方向の ハケ後ヨコ。ナメ。タテ方 向のミガキ。内周はヨコナゲ 後ヨコミガキ。タテ方向のナゲ 。ナメ方向のナゲ。横張 りナゲ	少	多	多			外周に黒色顔料あり	第8次調査区1区 S013 東北ベル ト南	10・49・50・51・ 52・53・56・57・ 60	
3-90	304	SH53	養生土器	壺	18.0	15.6	6.8	外周はヨコナゲ・タテ方向の ハケ・ナゲ。内周はヨコナゲ ・横張後ナゲ	多	多	多				第8次調査区1区 S013	67	
3-90	305	SH53	養生土器	壺	(21.8)			外周はヨコナゲ・タテ方向の ハケ後ヨコナゲ。内周はヨコ ナゲ・ナゲ。ヨコ方向のスト リあり	多	多	多				第8次調査区1区 S013	27	
3-90	306	SH53	養生土器	蓋重器	(11.3)			外周はヨコナゲ後ヨコミガ キ。袖付二内側帯。タテ方向 のハケ・ヨコ方向のミガキ。 内周はナゲ後ヨコ方向のミガ キ	少	少	少			内側に赤色顔料あり	第8次調査区1区 S013		
3-90	307	SH53	養生土器	管成 土器		(4.5)		外周はタテ方向のヘラナゲ・ 印圧筒。内周はヨコ方向の工 具ナゲ	少	少	少	少			第8次調査区1区 S013 東北ベル ト		
3-90	308	SH53	養生土器	壺	(28.2)	46.2	9.0	外周はヨコナゲ。縦張後ナゲ 方向のナゲ。ヨコナゲ後ヨコ 方向のヘラミガキ。ナメ方 向のナゲ。内周はヨコナゲ後 ヘラミガキ。ナメナゲ。タテ 方向のナゲ。縦張後ナゲ	多	多	多	多			第8次調査区1区		
3-91	309	SH53	養生土器	壺	(30.0)	45.0	9.2	外周はヨコナゲ・ナゲ。袖付 印字筒。内周はヨコナゲ・ ナゲ。縦張	多	多	少	少			外周には黒色・内 周は黒から黒部 ①・ヨ13P10a1	30・1・5・7・9・ 19・21・25・26・ 31・34・37・39・ 42・44・48	
3-94	312	SH54	養生土器	壺	(19.6)			外周はヨコナゲ・工具痕。内 周はヨコナゲ	多	少				外周の一部にスス 付	第8次調査区1区 S014		
3-94	313	SH54	養生土器	壺	(23.8)			外周はヨコナゲ・工具痕。内 周はヨコナゲ・工具痕	少	多					第8次調査区1区 S014		
3-94	314	SH04	養生土器	壺				外周は14年製袋付後ヨコナゲ ・ナゲ。内周はナゲ	少	少	少	少			第8次調査区1区 S014 P2		
3-94	315	SH54	養生土器	壺				外周は袖付袋付後ヨコナゲ・ ナゲ。ヨコヘラミガキ。内周 はナゲ・盤合	少	少	少	少			第8次調査区1区 S014		
3-96	316	SK220	養生土器	壺	-	5.0+a	(6.6)	外周は低いハケ・ヨコナゲ・ ナゲ。内周はナゲ・指先	多	多	少	多			第8次調査区1区 S022		
3-96	317	SK220	養生土器	壺	-	2.5+a	(6.4)	外周は低いハケ・工具でナゲ ・ナゲ。内周は丸筒	多	多	多	少			第8次調査区1区 S022	№2	
3-98	318	SK221	養生土器	壺	(19.6)			外周はヨコナゲ。タテ方向の ハケ。内周はヨコナゲ・ナゲ	多	少	少	少			第8次調査区1区 S022 一層	1・3	
3-98	319	SK221	養生土器	壺	(25.6)			外周はヨコナゲ・ハケ製袋付 の工具痕。内周はヨコナゲ・ ナゲ	多	多	少	少			内面に丹塗りの痕 跡あり	第8次調査区1区 S027	2
3-98	320	SK221	養生土器	壺				外周はタテ方向のハケ・ヨコ ナゲ。内周はナゲ・横合後 ナゲ	少	少	少	多			第8次調査区1区 S027		
3-98	321	SK221	養生土器	壺		(7.7)		外周はタテ方向のハケとナゲ ・ナゲ。内周はナゲ	少	少	少	少			第8次調査区1区 S027		
3-100	322	SK222	養生土器	壺				外周は14年製袋付後ヨコナゲ ・ヨコ方向のヘラミガキ。 内周はナゲ	少	多	多	多			第8次調査区1区 S019-③		
3-100	323	SK222	養生土器	壺		(6.3)		外周はタテ方向のナゲ・ヨコ ナゲ・ナゲ。内周はナゲ	多	多	多	多			第8次調査区1区 S022	3	
3-100	324	SK222	養生土器	燗甗	(11.3)	17.3	(11.8)	外周はヨコナゲ。タテ方向の ハケ後ヨコナゲ・ナゲ。内周 は横張後ナゲ	多	多	少	多			第8次調査区1区 S022 S019④	(S022) 1・2	

種別	品名	規格	単位	寸法 (mm)			形状・質量の特長	質量			備考	関係規格 (JIS等)		
				寸法	質量	単位		質量	単位	質量				
3-102	305	SK220	炭素鋼	302	339	-	外面はヨコナテ、上端・下端・ナテ・舟盛り、内面はナテ	多	多	少	多	第8次調査1区 S04	No.1-12	
3-106	328	SO19	炭素鋼				外面はナテ、内面はヨコナテ	少	少			第8次調査1区 S04		
3-108	329	HD20	九州産鋼	(240)	3.3+a	-	外面は丸筒、内面は直筒	-	-	-	-	検査	第8次調査1区 S04	
3-108	330	SD20	炭素鋼	鉄	-	4.8+a	-	外面は直筒、内面は丸筒	-	-	-	検査	第8次調査1区 S04	
3-110	331	SX216	炭素鋼	鋼	-	6.3+a	-	外面はヨコナテ、船付側のみ突出、内面はヨコナテ、下舟でのナテ	少	多	-	多	第8次調査1区 E-4 S010	
3-110	332	SX218	炭素鋼	小型鋼	(9.6)	3.0+a	-	外面はヨコナテ・ナテ、内面はナテ	少	少	少	少	第8次調査1区 E-4 S010	
3-110	333	SX216	炭素鋼	鋼	-	2.5+a	-	外面は直状・ナテ、内面はナテ	少	-	少	多	第8次調査1区 E-4 S010	
3-110	334	SX216	炭素鋼	鋼	-	3.4+a	-	外面はヨコナテ、ヨコハケ・船のハケ・ミダキ・船の目、内面はナテ・ハケ	多	多	少	少	第8次調査1区 E-4 S010	
3-110	335	SX216	炭素鋼	鋼	-	1.6+a	-	外面はヨコナテ、船付側のみ突出、内面はナテ・ミダキ	少	少	-	多	第8次調査1区 E-4 S010	
3-110	336	SX216	炭素鋼	鋼	-	3.0+a	-	外面はヨコナテ、ナテ及びミダキ、内面はミダキ	少	少	-	多	第8次調査1区 E-4 S010	
3-110	337	SX216	炭素鋼	鋼	-	3.6+a	(21.6)	外面はヨコナテ・ナテ、内面はナテ	少	多	多	少	第8次調査1区 E-4 S010	
3-110	338	SX216	炭素鋼	鋼	-	4.2+a	-	外面はナテ、内面はナテ・船付側	-	-	少	多	第8次調査1区 E-4 S010	
3-110	339	SX216	炭素鋼	鋼	-	2.5+a	6.8	外面は斜めハケ・ナテ、内面はナテ・船付側	少	少	少	多	第8次調査1区 E-4 S010	
3-110	340	SX216	炭素鋼	鋼	-	4.8+a	(3.0)	外面はナテ、ミダキ及びナテ、内面はナテ・船付側	多	多	-	多	第8次調査1区 E-4 S010	
3-110	341	SX218	炭素鋼	鋼	-	3.7+a	-	外面はヨコナテ、上舟でのナテ、内面は工具でのナテ	-	少	-	少	第8次調査1区 E-4 S010	
3-110	342	SX216	炭素鋼	鋼	(23.2)	4.5+a	-	外面はヨコナテ・工具でのナテ、内面は直筒	少	少	-	少	第8次調査1区 E-4 S010	
3-110	343	SX216	炭素鋼	鋼	(23.8)	3.8+a	-	外面はヨコナテ・ヘラ削り、内面はナテ	少	多	-	少	第8次調査1区 E-4 S010	
3-110	344	SX216	炭素鋼	鋼	(13.6)	3.6+a	-	外面はヨコナテ・ヘラ削り、内面はヨコナテ	多	少	-	少	第8次調査1区 E-4 S010	
3-110	345	SX218	炭素鋼	鋼	(23.0)	3.5+a	-	外面はヨコナテ・ヘラ削り、内面は工具でのナテ・船付側	-	多	-	少	第8次調査1区 E-4 S010	
3-110	346	SX216	炭素鋼	鋼	-	3.7+a	-	外面はヨコナテ・スタンプ文、内面はナテ	少	少	少	少	第8次調査1区 E-4 S010	
3-110	347	SX216	炭素鋼	鋼	-	1.0+a	(11.2)	外面はナテ・ヘラ削り、内面はナテ	少	少	-	少	第8次調査1区 E-4 S010	
3-110	348	SX216	炭素鋼	鋼	-	1.8+a	5.4	外面は丸筒・ヨコナテ、内面は直筒	-	-	-	-	検査	第8次調査1区 E-4 S010
3-110	349	SX216	炭素鋼	鋼	-	5.2+a	5.2	外面は丸筒・ヨコナテ、内面はヨコナテ	-	-	-	-	検査	第8次調査1区 E-4 S010
3-110	350	SX216	炭素鋼	鋼	(19.8)	3.3+a	-	外面は丸筒、内面は丸筒	-	-	-	-	検査	第8次調査1区 E-4 S010
3-110	351	SX216	炭素鋼	鋼	(6.0)	2.2+a	-	外面は丸筒、内面は丸筒	-	-	-	-	検査	第8次調査1区 E-4 S010
3-110	352	SX216	炭素鋼	鋼	-	2.6+a	(8.2)	外面は丸筒・ヨコナテ、内面は丸筒・直筒	-	-	-	-	検査	第8次調査1区 E-4 S010
3-110	353	SX216	炭素鋼	鋼	-	3.9+a	-	外面はヨコナテ、内面はヨコナテ・直筒	-	少	-	少	第8次調査1区 E-4 S010	
3-110	354	SX216	炭素鋼	鋼	-	2.4+a	(4.0)	外面は直筒・船底、内面は丸筒	-	-	-	-	検査	第8次調査1区 E-4 S010
3-110	355	SX216	炭素鋼	鋼	(3.6)	1.4+a	-	外面は丸筒、内面は丸筒・直筒	-	-	-	-	検査	第8次調査1区 E-4 S010
3-112	370		炭素鋼	鋼				外面はナテ・ヨコナテ、船底ナテ、内面はヨコナテ	少	少			内側に舟盛りあり	第8次調査1区 C-3 包含
3-112	371		炭素鋼	鋼				外面はナテ・ヘラ削り・ヨコナテ、内面はヨコナテ	少	少			内側に舟盛りあり	第8次調査1区 C-3 包含
3-112	372		炭素鋼	鋼				外面は船先突出船付後ヨコナテ・ヨコ方向のヘラ削り、内面はナテ	多	多			内側の一部と外側に舟盛りあり	第8次調査1区 C-3 包含
3-112	373		炭素鋼	鋼	(14.0)	3.2+a	-	外面は直筒・舟盛り残る、内面は直筒	少	多				第8次調査1区 D-4 包含
3-112	374		炭素鋼	鋼	(24.6)			外面はヨコナテ・タテ方向のヘラ削り、内面はヨコナテ・ナテ	多	多				第8次調査1区 C-3 包含
3-112	375		炭素鋼	鋼	(2.8)			外面はヨコナテ・船付側・タテ方向のナテ、内面はヨコナテ・ナテ	多	多			外側にスチ付	第8次調査1区 C-3 包含
3-112	376		炭素鋼	鋼	(25.2)			外面はヨコナテ・タテ方向のヘラ削り、内面はヨコナテ・タテ方向のヘラ削り	少	多				第8次調査1区 B-3 包含
3-112	377		炭素鋼	鋼	(22.0)	2.0	-	外面はナテ・ヨコナテ、内面はヨコナテ	少	多	少	少		第8次調査1区 D-3 包含
3-112	378		炭素鋼	鋼	(12.4)	5.0+a	-	外面はヨコナテ・ナテ・直状文・船付側、内面はナテ・ヨコナテ	多	多	少	多		第8次調査1区 D-5 包含

No.	品名	規格	寸法		重量	単位	検査			備考	検査項目
			長さ	幅			種類	回数	回数		
3-112	379	養生土壁	壁		(8.5)		外周はタテ方向のヘウミゴキ・コナテ、内周はナテ	多	多	多	第9次調査1区C-3 包合壁
3-112	380	養生土壁	壁		5.6		外周はコナテ	少	多	多	第8次調査1区C-3 包合壁
3-112	381	養生土壁	壁		(5.9)		外周はタテ方向のヘウミゴキ・ナテ、内周はナテ・指ナテ	多	多	多	外周に赤色顔料あり
3-112	382	養生土壁	壁				外周はタテ方向のヘウミゴキ・ナテ、内周はナテ	少	少	少	外周に内塗りあり
3-112	383	養生土壁	垂樋				外周はタテ方向のヘウミゴキ、内周はコナテ側のヘウミゴキ	多	少	多	第8次調査1区C-3 包合壁
3-112	384	養生土壁	壁合	(10.0)	13.3 + a	-	外周はコナテ・指ナテ、内周はタテ・ナテ	少	多	少	第8次調査1区D-5 壁合
3-112	385	養生土壁	鋼板	-	3.0 + a	(7.6)	外周はタテ・コナテ、内周はナテ・コナテ	少	多	少	第8次調査1区中巻トロンテ
3-112	386	養生土壁	コンクリート壁	3.4	3.5	-	外周は指での測量、内周は指での測量	多	多	多	第8次調査1区D-3 壁合
3-112	387	陶器	すり鉢	-	7.8 + a	-	外周はコナテ、内周はコナテ・指	少		少	第8次調査1区D-4 壁合
3-115	405	土留壁	高床	(13.2)	4.6 + a		外周はコナテ・ナテ、内周はコナテ	少	少	多	第9次調査4区
3-115	406	土留壁	高床	(13.6)	3.6 + a		外周はコナテ・ナテ、内周はコナテ	少	少	少	第9次調査4区1
3-115	407	土留壁	高床		3.3 + a		外周はコナテ・ナテ、内周はナテ	少	少	少	第9次調査4区1
3-115	408	陶器	水鉢				外周はコナテ・指、内周はコナテ	少	少	少	第9次調査4区1
3-117	429	土留壁	高床	(11.0)	5.0 + a		外周はコナテ、内周はコナテ	少		少	第9次調査4区1-3 2階上部
3-117	430	土留壁	高床		4.15 + a		外周はコナテ・覆具の強いナテ、内周はコナテ・ヘウミゴキ・ナテ	少	少	少	第9次調査4区3
3-118	442	土留壁	高床	(14.2)	3.9 + a		外周はコナテ、内周はコナテ	少		少	第9次調査4区3
3-118	443		洗口		5.4 + a		外周はコナテ	少		少	第9次調査4区3
3-118	444		蓋		4.15 + a	10.3	外周はコナテ・糸切り紙・防蝕、内周はコナテ	少	少	少	第9次調査4区3
4-4	434	包合壁	隔室土壁	漆喰			内外両面既成	多	少	少	第12次調査区域3 包合壁 2層上壁
4-4	456	包合壁	隔室土壁	漆喰			内外両面既成	少	少	少	第12次調査区域3 包合壁 2層上壁
4-8	456	SH55	養生土壁	壁			内外両コナテ	少	少	少	第12次調査区域3 壁穴2
4-8	457	SH55	養生土壁	壁			内外両コナテ	少		少	第12次調査区域3 壁穴2
4-8	458	SH55	養生土壁	壁			外周コナテ、ミギキ、内周コナテ	少		少	第12次調査区域3 壁穴2
4-8	459	SH55	養生土壁	壁	2.2 + a	(6.8)	外周コナテ	多	多	多	第12次調査区域3 壁穴2
4-11	461	SH56	養生土壁	壁			外周コナテ、ミギキ、ハケ内塗りミギキ	少	少	少	内外両赤色顔料
4-11	462	SH56	養生土壁	壁			外周コナテ、覆ミギキ、内周コナテ、覆ミギキ	少	少	少	内外両赤色顔料
4-11	463	SH56	養生土壁	壁			外周コナテ、覆ミギキ、内周コナテ	少	少	少	内外両赤色顔料
4-11	464	SH56	養生土壁	壁			外周コナテ、覆ミギキ、内周コナテ	少	少	少	内外両赤色顔料
4-11	465	SH56	養生土壁	壁			外周コナテ、ナテ、内周コナテ	少	少	少	内外両赤色顔料
4-11	466	SH56	養生土壁	壁	(20.4)		外周コナテ、指ナテ、内周コナテ、指ナテ、指ナテ	少	少	少	外周にスス付
4-11	467	SH56	養生土壁	壁	(29.2)	7.6 + a	外周コナテ、指ナテ、内周コナテ	少	少	少	第12次調査区域3 壁穴6
4-11	468	SH56	養生土壁	壁	(28.8)	4.9 + a	外周コナテ、指ナテ、内周コナテ	少	少	少	第12次調査区域3 壁穴6
4-11	469	SH56	養生土壁	壁	(37.8)	8.0 + a	外周コナテ、指ナテ、内周コナテ	少	多	多	外周にスス付
4-11	470	SH56	養生土壁	壁			外周コナテ、指ナテ、内周コナテ	少	少	少	外周にスス付
4-11	471	SH56	養生土壁	壁			外周コナテ、指ナテ、内周コナテ	少	少	少	第12次調査区域3 壁穴6
4-11	472	SH56	養生土壁	壁			外周コナテ、ミギキ、内周コナテ	少	少	少	内外両赤色顔料
4-11	473	SH56	養生土壁	壁			外周コナテ、ハケ、ヘウミ内周コナテ	少	少	少	第12次調査区域3 壁穴6
4-11	474	SH56	養生土壁	壁	30.9	11.4	外周コナテ、指ナテ、内周コナテ	少	少	少	第12次調査区域3 壁穴6
4-11	475	SH56	養生土壁	壁			外周コナテ、指ナテ、内周コナテ	少	少	少	第12次調査区域3 壁穴6

No.	品名	規格	数量	単位	備考	仕入先			備考				
						品名	数量	単位					
4-11	476	SH56	養生土器	壺		10+ a	5.8	外周ヨコナテ 内面ナテ	少	少	少	第12次調査区域3 壺穴6	P97
4-11	477	SH56	養生土器	壺		6.9+ a	(7.0)	外周ヨコナテ、縦ハケ 内面ナテ	少	少	多	第12次調査区域3 壺穴6	P73, P100
4-11	478	SH56	養生土器	壺		6.5+ a	7.0	外周ヨコナテ、縦ハケ 内面ナテ	少	少	多	第12次調査区域3 壺穴6	P94
4-11	479	SH56	養生土器	壺		3.10	3.3+ a	外周ナテ 内面ヨコナテ、ナテ	少	少	少	外周にスス付着	
4-16	480	SH57	養生土器	壺	(27.6)	14.4+ a		外周ヨコナテ、縦ハケ 内面ヨコナテ、ナテ	少	少	少	外周にスス付着	P20, P75, P81, P91
4-16	480	SH57	養生土器	壺	(26.6)	13.2+ a		外周ヨコナテ、縦ハケ 内面ヨコナテ、ナテ	少	少	少	外周にスス付着	P20, P22, P22, P28, P29, P99
4-16	481	SH57	養生土器	壺	(28.6)	12.1+ a		外周ヨコナテ、縦ハケ 内面ヨコナテ、ナテ	多	多	多		
4-16	482	SH57	養生土器	壺	(30.2)	8.1+ a		外周ヨコナテ、縦ハケ 内面ヨコナテ、ナテ	少	少	少	外周にスス付着	P16, P54カ
4-16	483	SH57	養生土器	壺	(29.2)	16.3+ a		外周ヨコナテ、縦ハケ 内面ナテ	多	少	多		
4-16	494	SH57	養生土器	壺	(29.8)	20.8+ a		外周ヨコナテ、縦ハケ 内面ヨコナテ、ナテ	少	少	少		
4-16	495	SH57	養生土器	壺	(27.4)	17.7+ a		外周ヨコナテ、縦ハケ 内面ヨコナテ、ナテ	少	多	多		
4-16	496	SH57	養生土器	壺	(30.0)	11.1+ a		外周ヨコナテ、縦ハケ 内面ヨコナテ、ナテ	少	少	多		
4-16	497	SH57	養生土器	壺	20.6	10.9+ a		外周ヨコナテ、縦ハケ 内面ヨコナテ、ナテ	少	少	少	外周にスス付着	
4-16	498	SH57	養生土器	壺	8.0	12.1+ a		外周ヨコナテ、縦ハケ 内面ヨコナテ、ナテ、シボリ	少	少	少		
4-16	499	SH57	養生土器	壺	又は12 高坪			内周ヨコナテ	少	少	少		
4-16	500	SH57	養生土器	壺	又は12 高坪			内周ヨコナテ	少	少	少		
4-16	501	SH57	養生土器	高坪		4.5+ a	(2.8)	外周ヨコナテ、縦ハケ 内面ヨコナテ、ナテ	少	少	多		
4-17	502	SH57	養生土器	壺		4.0+ a	(3.6)	外周ナテ、縦ハケ 内面ナテ、微窪	多	少	少	内周面にスス付着	P72
4-17	503	SH57	養生土器	壺		4.8+ a	(6.8)	外周ナテ、ミゴキ(?) 内面ナテ	少	少	少		
4-17	504	SH57	養生土器	壺		3.3+ a	4.0	外周ナテ 内面ナテ	少	少	少		
4-17	505	SH57	養生土器	壺		3.2+ a	(6.6)	外周ヨコナテ、縦ハケ 内面ナテ、微窪	少	少	少		
4-17	506	SH57	養生土器	壺		4.9+ a	(6.2)	外周ヨコナテ、縦ハケ 内面ナテ、ケスリ	少	少	多		
4-17	507	SH57	養生土器	壺		4.9+ a	(7.3)	外周ヨコナテ、ナテ、縦ハケ 内面ナテ、微窪	少	少	多		
4-17	508	SH57	養生土器	壺		6.3+ a	(5.6)	外周縦ハケ、ヨコナテ 内面ナテ	少	少	少		
4-21	512	SH58	養生土器	壺	(20.8)	6.4+ a		外周ヨコナテ、丁家ナテ 内面ヨコナテ、丁家ナテ	少	少	少	内外周の一部にスス付着	P63, P66, P84
4-21	513	SH58	養生土器	壺				外周ヨコナテ、ミゴキ、突帯 内面ヨコナテ、ナテ	少	少	少	内周に赤色顔料	
4-21	514	SH58	養生土器	壺				外周ヨコナテ 内面ヨコナテ、ミゴキ	少	少	少		
4-21	515	SH58	養生土器	壺				外周ヨコナテ、胎付突帯 内面ナテ、微窪	少	少	少		
4-21	516	SH58	養生土器	壺				外周ヨコナテ、胎付突帯 内面ナテ、微窪	少	少	少	外周にスス付着	
4-21	517	SH58	養生土器	壺	(20.0)	16.4+ a		外周ヨコナテ、縦ハケ 内面丁家ナテ、ヨコナテ	少	少	少	外周にスス付着	
4-21	518	SH58	養生土器	壺	(30.6)	12.2+ a		内外周ヨコナテ、ナテ	多	多	多		
4-21	519	SH58	養生土器	壺	(22.2)	5.3+ a		外周ヨコナテ、ナテ、縦ハケ 内面ヨコナテ、ナテ	少	少	少	口縁部にスス付着	P8
4-21	320	SH58	養生土器	壺	(28.6)	7.0+ a		内外周ヨコナテ、ナテ	少	多	少	外周にスス付着	P17
4-21	521	SH58	養生土器	壺	(19.0)	8.7+ a		外周ヨコナテ 内面ヨコナテ、ナテ	多	少	少	外周にスス付着	P64
4-21	522	SH58	養生土器	壺				外周ヨコナテ、縦ハケ、突帯 内面ヨコナテ、ナテ	少	少	少		
4-21	523	SH58	養生土器	壺				内外周ヨコナテ	少	少	多	黒褐色土器	P54
4-21	524	SH58	養生土器	壺		5.9+ a	(7.2)	内外周ナテ	少	少	少		
4-21	525	SH58	養生土器	壺		9.2+ a	7.1	外周ヨコナテ、縦ハケ、ナテ 内面ナテ	少	多	多		
4-21	526	SH58	養生土器	壺		10.1+ a	(7.6)	外周縦ハケ、ヨコナテ 内面丁家ナテ	少	少	多		
4-21	527	SH58	養生土器	壺		6.0+ a	6.4	内周ヨコナテ、ヨコナテ、ナテ 内面ナテ	多	多	多		
4-21	528	SH58	養生土器	壺		6.7+ a	(7.0)	外周縦ハケ、ナテ 内面ナテ	多	少	少		
4-21	529	SH58	養生土器	壺		6.5+ a	3.3	外周縦ハケ、ナテ 内面丁家ナテ	多	少	少		

No.	品名	規格	単位	数量	単位	原産国・産地			備考			備考
						原産国	産地	備考	備考	備考	備考	
424	302	SH59	養生土器	蓋	(27.6)	6.2+ e	外産品ハク、ヨコナテ 内産ヨコナテ、ナテ	少	少	少	第12次調査区域3 区画1	P90
424	303	SH59	養生土器	蓋	(28.6)	7.0+ e	外産品ハク、ヨコナテ 内産ヨコナテ、ナテ、指付蓋	少	多	多	第12次調査区域3 区画1	P95、P96
424	304	SH59	養生土器	蓋			外産品ハク、ヨコナテ、突帯 内産ヨコナテ、ナテ、指付蓋	少	多	少	外産品にスス付蓋	P19
424	305	SH59	養生土器	蓋			外産品ハク、ヨコナテ、突帯 内産ヨコナテ、ナテ	少	少	少	内外両赤色顔料	第12次調査区域3 区画1
424	306	SH59	養生土器	蓋	(28.6)	2.5+ e	外産品ハク、ヨコナテ 内産ヨコナテ、ナテ	少	少	少	第12次調査区域3 区画1	P51
424	307	SH59	養生土器	蓋又は口 縁			内産品ミガキ	少	少	少	内外両赤色顔料	第12次調査区域3 区画1
424	308	SH59	養生土器	蓋			外産品ヨコナテ 内産品ミガキ	少	少	少	内外両赤色顔料	第12次調査区域3 区画1
424	309	SH59	養生土器	蓋			内産品ヨコナテ	少	少	少	内外両赤色顔料	第12次調査区域3 区画1
424	340	SH59	養生土器	鉢	(21.4)	5.7+ e	外産品ハク、ヨコナテ、工具蓋 内産品ヨコナテ、ナテ	少	少	少		第12次調査区域3 区画1
424	341	SH59	養生土器	蓋		5.0+ e	(7.0) 内産品ミガキ	少	少	少		第12次調査区域3 区画1
424	342	SH59	養生土器	蓋		5.0+ e	7.5 外産品ハク、ヨコナテ 内産品ナテ	少	多	多		第12次調査区域3 区画1
424	343	SH59	養生土器	蓋		7.8+ e	8.3 外産品ハク、ナテ 内産品ナテ	少	少	少		第12次調査区域3 区画1
424	346	SH60	養生土器	蓋			外産品指付突帯、ナテ 内産品ナテ	少	多	多		第12次調査区域4 区画1
424	347	SH60	養生土器	蓋			外産品ヨコナテ後ミガキ、ナテ 内産品ヨコナテ後ミガキ	多	多	少	内外両赤色顔料	第12次調査区域4 区画1
424	348	SH60	養生土器	蓋	(31.0)		外産品ヨコナテ、縦ハケ後ナテ 内産品ヨコナテ	少	多	多		第12次調査区域4 区画1
424	349	SH60	養生土器	蓋			外産品ヨコナテ、縦ミガキ 内産品ヨコナテ、横ミガキ	少	多	多	内外両赤色顔料	第12次調査区域4 区画1
424	350	SH60	養生土器	高坪			外産品蓋 内産品蓋、しぼり蓋	少	多	少		第12次調査区域4 区画1
424	351	SH60	養生土器	高坪			外産品ハク、縦ミガキ 内産品しぼり蓋、ナテ	多	多	多	外産品赤色顔料	第12次調査区域4 区画1
424	352	SH60	養生土器	鉢	(13.2)	7.0	(6.0) 外産品ハク、ヨコナテ 内産品ヨコナテ、工具ナテ	少	多	多		第12次調査区域4 区画1
424	353	SH60	養生土器	高坪			(9.1) 外産品ハク、ナテ 内産品工具ナテ、指ナテ	少	多	多		第12次調査区域4 区画1
424	354	SH60	養生土器	蓋			(6.0) 外産品ハク、ナテ 内産品指ナテ	多	多	多		第12次調査区域4 区画1
424	355	SH60	養生土器	蓋			6.2 外産品ハク、ナテ、ヨコナテ 内産品ナテ	多	多	少		第12次調査区域4 区画1
424	356	SH60	養生土器	蓋			7.8 外産品ハク、ナテ、ヨコナテ 内産品工具ナテ、ナテ	多	多	多		第12次調査区域4 区画1
424	357	SH60	養生土器	蓋			6.8 外産品ハク、ナテ 内産品ナテ	少	多	少		第12次調査区域4 区画1
424	358	SH60	養生土器	蓋			16.6 外産品ハク、ナテ、ミガキ 内産品ヨコナテ	少	多	多		第12次調査区域4 区画1
431	374	SH61	養生土器	蓋			16.6 内産品ヨコナテ	少	少	少	外産品赤色顔料	第12次調査区域4 区画1
431	375	SH61	養生土器	蓋			内産品ミガキ	少	少	少	外産品赤色顔料	第12次調査区域4 区画1
431	376	SH61	養生土器	蓋	(11.2)		外産品ヨコナテ、縦ハケ 内産品ヨコナテ、指ナテ	多	多	多		第12次調査区域4 区画1
431	377	SH61	養生土器	蓋	(14.8)		外産品ヨコナテ、指付突帯 内産品ヨコナテ、ナテ	多	多	多		第12次調査区域4 区画1
431	378	SH61	養生土器	高坪 又は高坪			内産品ヨコナテ	少	多	多	外産品赤色顔料	第12次調査区域4 区画1
431	379	SH61	養生土器	蓋			内産品ヨコナテ	少	多	少	スス付蓋	第12次調査区域4 区画1
431	380	SH61	養生土器	蓋			内外両ヨコナテ	多	多	多		第12次調査区域4 区画1
431	381	SH61	養生土器	蓋	(24.0)		外産品ハク、ヨコナテ 内産品ヨコナテ、ナテ	多	多	多		第12次調査区域4 区画1
431	382	SH61	養生土器	蓋	(32.8)		外産品ハク、ヨコナテ 内産品ヨコナテ、ナテ	多	多	多		第12次調査区域4 区画1
431	383	SH61	養生土器	蓋	28.2	39.5	6.1 外産品ハク、ヨコナテ 内産品ヨコナテ、工具ナテ	多	多	多	外産品にスス付蓋	第12次調査区域4 区画1
431	384	SH61	養生土器	蓋	34.9	41.3	8.3 外産品ハク、ヨコナテ 内産品ヨコナテ、工具ナテ	多	多	多	二色顔料 外産品にスス付蓋	第12次調査区域4 区画1
431	385	SH61	養生土器	蓋	38.8	51.1	8.2 外産品ハク、ヨコナテ、ナテ 内産品工具ナテ	多	多	多		第12次調査区域4 区画1
431	386	SH61	養生土器	高坪	(30.5)		外産品ハク、ヨコナテ 内産品ヨコナテ、ナテ	多	多	多		第12次調査区域4 区画1
431	387	SH61	養生土器	高坪	(11.0)		外産品ハク、工具ナテ 内産品ヨコナテ	少	多	多		第12次調査区域4 区画1
431	388	SH61	養生土器	高坪	(18.0)		外産品ミガキ 内産品ナテ、しぼり蓋	少	多	多	外産品赤色顔料	第12次調査区域4 区画1
431	389	SH61	養生土器	高坪	(18.0)		外産品ミガキ 内産品ナテ、ヨコナテ	少	少	少	外産品赤色顔料	第12次調査区域4 区画1
431	390	SH61	養生土器	蓋	(30.8)		外産品ナテ 内産品ヨコナテ、ナテ	少	多	多		第12次調査区域4 区画1
431	391	SH61	養生土器	蓋	(6.4)		外産品ミガキ 内産品ナテ	少	多	多	外産品赤色顔料	第12次調査区域4 区画1

品名	規格	材質	寸法 (mm)	重量	用途	寸法 (mm)		用途	寸法 (mm)	重量	用途	寸法 (mm)	重量	用途		
						外径	内径									
4-32	592	SH51	鉄生十形	鋼			7.1	内径コナテ		多	多			外周赤色顔料	第12次調査区域4 燃火2 燃出時	
4-32	593	SH45	鉄生十形	鋼			(6.8)	外周縦ハケ、ナテ、ヨコナテ 内径コナテ		多	多				第12次調査区域4 燃火2 燃出時	
4-32	594	SH61	鉄生十形	鋼			(7.4)	外周縦ハケ、ヨコナテ、ナテ 内径コナテ		多	多				第12次調査区域4 燃火2 燃出時	
4-32	595	SH51	鉄生十形	鋼			6.6	外周ヨコナテ、ナテ 内径コナテ		多	多				第12次調査区域4 燃火2 燃出時	
4-32	596	SH45	鉄生十形	鋼			6.8	外周縦ハケ、ナテ、ヨコナテ 内径コナテ		多	多	少			第12次調査区域4 燃火2 燃出時	
4-32	597	SH51	鉄生十形	鋼			7.4	外周ナテ、ヨコナテ 内径コナテ		多	多	少			第12次調査区域4 燃火2 燃出時	
4-32	598	SH61	鉄生十形	鋼			8.9	外周縦ハケ、ナテ、ヨコナテ 内径コナテ		多	多			内径にスス付着	第12次調査区域4 燃火2 燃出時	
4-32	599	SH45	鉄生十形	鋼			(8.2)	外周縦ハケ、ナテ 内径コナテ		多	多			外周にスス付着	第12次調査区域4 燃火2 燃出時	
4-32	600	SH51	鉄生十形	鋼			6.4	外周縦ハケ、ヨコナテ 内径コナテ		多	多	少			第12次調査区域4 燃火2 燃出時	
4-35	616	SK224	鉄生十形	鋼				外周縦ハケ、ナテ、ヨコナテ 内径コナテ		少	少	多			第12次調査区域4 燃火2 燃出時	
4-35	617	SK224	鉄生十形	鋼				内径ヨコナテ		少	少	少		外周にスス付着	第12次調査区域4 燃火2 燃出時	
4-35	618	SK224	鉄生十形	鋼		5.0+e	7.0	外周縦ハケ、ヨコナテ 内径コナテ		少	少	多			第12次調査区域4 燃火2 燃出時	
4-37	619	SK225	鉄生十形	鋼				外周ヨコナテ		少	多	少			第12次調査区域4 燃火2 燃出時	
4-37	620	SK225	鉄生十形	鋼				外周ヨコナテ、縦ハケ 内径ヨコナテ		少	少	少		外周にスス付着	第12次調査区域4 燃火2 燃出時	
4-41	622	SK227	鉄生十形	鋼				外周縦ハケ、ヨコナテ 内径ヨコナテ、ナテ		少	少	少			第12次調査区域4 燃火2 燃出時	
4-41	623	SK227	鉄生十形	鋼				外周縦ハケ、ヨコナテ 内径ヨコナテ、ナテ		少	少				第12次調査区域4 燃火2 燃出時	
4-41	621	SK227	鉄生十形	鋼				外周縦ハケ、ヨコナテ 内径ヨコナテ		少	少	少		内径に赤色顔料	第12次調査区域4 燃火2 燃出時	
4-46	626	SK230	鉄生十形	鋼		10.0+e		外周縦ハケ、ヨコナテ 内径ヨコナテ		少	少	少		外周赤色顔料	第12次調査区域4 燃火2 燃出時	
4-46	627	SK230	鉄生十形	鋼		0.7+e	(6.8)	外周縦ハケ、ヨコナテ 内径コナテ		少	多	少			第12次調査区域4 燃火2 燃出時	
4-48	628	SK230	鉄生十形	鋼				外周ヨコナテ 内径ニギキ		少	少	少			第12次調査区域4 燃火2 燃出時	
4-50	629	SK233	鉄生十形	鋼		0.001	3.5+e	外周ナテ、紐付突物 内径コナテ		少	少	少			第12次調査区域4 燃火2 燃出時	
4-50	630	SK233	鉄生十形	鋼				外周縦ハケ、ナテ、ヨコナテ 内径コナテ、ナテ		多	多	多			第12次調査区域4 燃火2 燃出時	
4-50	631	SK233	鉄生十形	鋼				外周縦ハケ、ヨコナテ 内径コナテ、ナテ		少	少	少		内径赤色顔料	第12次調査区域4 燃火2 燃出時	
4-50	632	SK233	鉄生十形	鋼		5.0+e	(6.0)	外周縦ハケ、ヨコナテ 内径コナテ、紐止		少	少	少			第12次調査区域4 燃火2 燃出時	
4-50	633	SK233	鉄生十形	鋼		7.0+e	7.2	外周ヨコナテ 内径コナテ		多	多				第12次調査区域4 燃火2 燃出時	
4-52	634	SK234	鉄生十形	鋼				外周ヨコナテ、紐付突物 内径コナテ		多	多				第12次調査区域4 燃火2 燃出時	
4-54	635	SK235	鉄生十形	鋼		(18.2)		外周ヨコナテ、紐付突物 内径コナテ		少	多			内径にスス付着	第12次調査区域4 燃火2 燃出時	
4-54	636	SK235	鉄生十形	鋼				外周ナテ、縦ハケ 内径コナテ、ナテ		少	多			内径にスス付着	第12次調査区域4 燃火2 燃出時	
4-54	637	SK235	鉄生十形	鋼			(6.8)	外周縦ハケ、ナテ、ヨコナテ 内径コナテ		少	多				第12次調査区域4 燃火2 燃出時	
4-57	641	SK236	鉄生十形	鋼		(20.0)		外周縦ハケ、ヨコナテ、ナテ 内径コナテ		多	多			外周にスス付着	第12次調査区域4 燃火2 燃出時	
4-37	642	SK236	鉄生十形	鋼		(27.8)		外周縦ハケ、ヨコナテ、ナテ 内径コナテ		多	多				第12次調査区域4 燃火2 燃出時	
4-59	643	SK237	鉄生十形	鋼				外周縦ハケ、ヨコナテ、ナテ 内径コナテ		少	多			外周にスス付着	第12次調査区域4 燃火2 燃出時	
4-62	644	SK238	鉄生十形	鋼				外周縦ハケ、ヨコナテ 内径コナテ		少	多				第12次調査区域4 燃火2 燃出時	
4-65	646	SK241	鉄生十形	鋼		9.9	16.9	11.7	外周縦ハケ、縦ハケ 内径コナテ、ナテ、紐付突物		少	少	少			第12次調査区域4 燃火2 燃出時
5-6	617	SH62	鉄生十形	鋼		17.0+e	4.3+e		外周ニギキ、ヨコナテ 内径コナテ	多	多	多		外周に赤色顔料	第14次調査区域 燃火2	
5-6	648	SH62	鉄生十形	鋼		5.8+e	9.0		外周ヨコナテ、ハケメ 内径コナテ	少	少	少	多		第14次調査区域 燃火2	
5-6	649	SH62	鉄生十形	鋼		(20.4)	8.6+e		外周ヨコナテ、ハケメ 内径コナテ	多	多	多			第14次調査区域 燃火2	
5-6	650	SH62	鉄生十形	鋼		(28.4)	23.5+e		外周ヨコナテ、ハケメ 内径コナテ	少	少	少		外周にスス付着	第14次調査区域 燃火2	
5-6	651	SH62	鉄生十形	鋼		(21.8)	26.1 取付		外周ヨコナテ、紐付突物 内径コナテ	少	少	少		外周にスス付着	第14次調査区域 燃火2	
5-6	652	SH62	鉄生十形	鋼		(7.1)			外周ヨコナテ 内径コナテ	少	少	少		外周にスス付着	第14次調査区域 燃火2	





種別	種名	学名	高さ	幹径	樹形	葉	花	果	用途	備考					
5-23	707	SH72	赤生十郎	葉	149+e	(5.8)	外葉ヨコナテ、ハケメ 内葉ナテ	少	少	少	少	第14次調査区 S900	1		
5-23	708	SH72	赤生十郎	葉	52+e	(6.7)	外葉ヨコナテ、ハケメ 内葉ナテ	少	少	少	少	第14次調査区 S900	1		
5-23	709	SH72	赤生十郎	高环	121+e		外葉ミガキ 内葉ナテ、シボリ直	少	少	少	少	外周に赤色顔料	第14次調査区 S900		
5-25	714	SH73	赤生十郎	葉	樹形最大径 (37.2)		外葉ヨコナテ、ハケメ、ミガキ 内葉ナテ、指汗直	少	少	多		第14次調査区 S905	7・8		
5-25	715	SH73	赤生十郎	高环	(28.7)	6.9+e	外葉ヨコナテ、ミガキ 内葉ナテ、ミガキ	多	多	多	多	外周に赤色顔料	第14次調査区 S905	1	
5-25	716	SH73	赤生十郎	小庭園	(7.7)	6.6+e	外葉ヨコナテ、尖型、ハケメ 内葉ナテ、指汗直	多	多	多	多		第14次調査区 S905		
5-25	717	SH73	赤生十郎	小庭園		9.2+e	6.0	外葉ヨコナテ、尖型、ハケメ 内葉ナテ、指汗直	多	多	多	多		第14次調査区 S905	
5-28	721	SK251	赤生十郎	高环		6.5+e	(34.8)	外葉ヨコナテ、ミガキ 内葉ナテ	少	少	多	多	外周に赤色顔料	第14次調査区 S106	2
5-30	722	SK252	赤生十郎	葉		11.2	(8.2)	外葉ヨコナテ、ハケメ 内葉ナテ	少	少	少	少		第14次調査区 S108	
5-31	724	SK253	赤生十郎	葉	(21.8)		樹形最大径 (37.0)	外葉ヨコナテ、尖型、ハケメ 内葉ナテ、指汗直	少	少	多		第14次調査区 S104	2・6・19	
5-31	725	SK253	赤生十郎	葉	(25.7)	13.1+e		外葉ヨコナテ、ハケメ 内葉ナテ	少	少	少	少	外周にスス付着	第14次調査区 S106	2
5-31	726	SK253	赤生十郎	葉			7.3	外葉ヨコナテ、ハケメ、指汗直 内葉ナテ、指汗直	多	多	多	多		第14次調査区 S104	1
5-32	727	SK254	赤生十郎	葉		3.7+e		外葉ヨコナテ、ハケメ 内葉ナテ	多	少	多	多		第14次調査区 S103	
5-32	728	SK254	赤生十郎	高环		1.1+e		外葉ヨコナテ、側目 内葉ナテ、ミガキ	多		少	少	外周にスス付着	第14次調査区 S103	
5-32	730	SK255	赤生十郎	葉	(24.7)	6.2+e		外葉ヨコナテ、ハケメ 内葉ナテ	少	少				第14次調査区 S109	
5-34	731	SK255	赤生十郎	葉		6.4+e	(5.7)	外葉ヨコナテ、ハケメ、ミガキ 内葉ナテ	多	多	多	多		第14次調査区 S109	
5-34	732	SK255	赤生十郎	葉		7.8+e	7.2	外葉ヨコナテ、ハケメ 内葉ナテ	少	少	少	少		第14次調査区 S109	
5-34	733	SK255	赤生十郎	合付株		6.0+e	(8.4)	外葉ヨコナテ、ハケメ 内葉ナテ	少	多	多	多		第14次調査区 S109	
5-36	734	SK256	赤生十郎	葉	19.2	18.8+e		外葉ヨコナテ 内葉ナテ	少	多	多	多	外周にスス付着	第14次調査区 S100	32・34・40
5-36	735	SK256	赤生十郎	葉	(25.8)	21.0+e		外葉ヨコナテ、ハケメ 内葉ナテ	多	多	少	多	外周にスス付着	第14次調査区 S100	45
5-36	736	SK256	赤生十郎	葉	(26.4)	11.5+e		外葉ヨコナテ、ハケメ 内葉ナテ	少	少	少	少		第14次調査区 S100	8・30
5-36	737	SK256	赤生十郎	葉	(27.6)	16.7+e		外葉ヨコナテ、ハケメ 内葉ナテ	少	少				第14次調査区 S100	8
5-36	738	SK256	赤生十郎	葉	(27.8)		樹形最大径 (37.0)	外葉ヨコナテ、ハケメ 内葉ナテ、指汗直	多	多	少	少		第14次調査区 S100	4・45
5-36	739	SK256	赤生十郎	葉	(28.6)		樹形最大径 (37.0)	外葉ヨコナテ、ハケメ 内葉ナテ、指汗直	多	多	多	多		第14次調査区 S100	39
5-36	740	SK256	赤生十郎	葉	内径 (25.6) 外径 (34.0)			外葉ヨコナテ、H字突型、ハ 内葉ナテ、指汗直、指汗直	少	少	少	少	外周に赤色顔料	第14次調査区 S100	1・8
5-36	741	SK256	赤生十郎	葉	(14.1)		樹形最大径 (16.9)	外葉ヨコナテ 内葉ナテ	多	多	多	多	外周に赤色顔料	第14次調査区 S100	20・39
5-36	742	SK256	赤生十郎	葉		6.0+e	6.8	外葉ヨコナテ、ハケメ 内葉ナテ	多	多	多	多	外周にスス付着	第14次調査区 S100	11
5-36	743	SK256	赤生十郎	葉		6.3+e	6.6	外葉ヨコナテ、ハケメ 内葉ナテ	少	多	多	多		第14次調査区 S100	28
5-36	744	SK256	赤生十郎	葉		8.3+e	8.6	外葉ヨコナテ、ハケメ 内葉ナテ	多	多	多	多	外周にスス付着	第14次調査区 S100	12
5-36	745	SK256	赤生十郎	合付			0.03	外葉ヨコナテ、ミガキ 内葉ナテ	少	少	少	少		第14次調査区 S100	
5-36	746	SK256	赤生十郎	合付	9.5	16.8	13.0	外葉ヨコナテ、ハケメ 内葉ナテ	少	多	多	多		第14次調査区 S100	7・15・16・45
5-37	747	SK256	赤生十郎	高环		23.4+e		外葉ナテ 内葉ナテ、シボリ直	多	多	多	多		第14次調査区 S100	3・5・41
5-37	748	SK256	赤生十郎	高环	(29.8)	6.0+e		外葉ヨコナテ、ミガキ 内葉ナテ、ミガキ	多	多	多	多	内外周に赤色顔料	第14次調査区 S100	33・60・43
5-36	751	SK267	赤生十郎	葉	(20.1)	2.5+e		外葉ヨコナテ、ハケメ 内葉ナテ	少	少	少	少		第14次調査区 S076	1・18・20、一部
5-36	752	SK267	赤生十郎	葉		80.3+e		外葉ヨコナテ、ミガキ 内葉ナテ	少	少	少	少		第14次調査区 S076	8・12、一部
5-36	753	SK267	赤生十郎	葉	(20.9)	13.3+e		外葉ヨコナテ、ハケメ 内葉ナテ	少	少	少	少	外周にスス付着	第14次調査区 S076	14
5-36	754	SK267	赤生十郎	葉	19.2	5.7+e		外葉ヨコナテ、ハケメ 内葉ナテ	多	多	多	多		第14次調査区 S076	17、一部
5-36	755	SK267	赤生十郎	石函										第14次調査区 S076	
5-41	757	SK258	赤生十郎	葉		9.2+e		外葉ヨコナテ 内葉ナテ、ミガキ	少	多				第14次調査区 S085	7

No.	品名	規格	寸法 (mm)			単位	備考	備考	備考	備考	備考				
			幅	高さ	長さ										
5-41	758	SK258	養生土器	薬	8.3 × e	6.6	外周ヨコナデ	少	少	外周に赤色顔料	第14次調査区 S083	3			
5-41	759	SK258	養生土器	薬	7.1 × e	8.0	外周ヨコナデ・ハケム 内周ナデ	少	少	外周に赤色顔料	第14次調査区 S085	3			
5-02	762	SK259	養生土器	薬	13.6	3.4	2.3	外周ヨコナデ・ミガキ 内周ナデ・ミガキ	多	多	少	多	外周に一部赤色 顔料	第14次調査区 S080	2
5-42	763	SK259	養生土器	薬	4.6 × e	8.4	外周ヨコナデ・ミガキ 内周ナデ・内周直	多	少	少	多	外周に赤色顔料	第14次調査区 S080	1	
5-42	764	SK259	養生土器	薬	8.3 × e	7.4	外周ヨコナデ・内周直	多	少	少	多	外周に赤色顔料	第14次調査区 S080	4	
5-44	765	SK260	養生土器	薬	(32.0)	6.3 × e	外周突出	少	少	少	内周にスス付着	第14次調査区 S070	1		
5-44	766	SK260	養生土器	高坪	31.0	24.0 × e	外周ミガキ 内周ミガキ・ナデ・シボリ直	多	多	多	多	第14次調査区 S070	6・7		
5-41	767	SK260	養生土器	高坪	9.8 × e	外周ミガキ 内周ミガキ・ナデ・シボリ直	少	多	少	少	内周面に赤色顔料	第14次調査区 S070	9		
5-44	768	SK260	養生土器	高坪	13.0 × e	9.6	外周ヨコナデ・ハケム 内周ナデ	少	多	少	少	第14次調査区 S070	8		
5-45	769	SK261	養生土器	薬	7.4 × e	(14.3)	外周ヨコナデ・ハケム 内周ナデ	少	少	少	少	第14次調査区 S070	3		
5-47	770	SK262	養生土器	薬	26.6	26.0	25.9	外周ミガキ・ナデ 内周ナデ	少	少	少	少	外周に赤色顔料	第14次調査区 S115	1
5-47	771	SK262	養生土器	薬	26.4	35.2	18.1	外周ヨコナデ・ハケム 内周ナデ	少	少	少	少	第14次調査区 S115	1	
5-49	772	SK263	養生土器	薬	33.4	11.1- e	外周ヨコナデ・M字突部・ミ ガキ 内周ナデ・内周直	少	少	少	少	外周に赤色顔料	第14次調査区 S060	7	
5-49	773	SK263	養生土器	薬	(28.0)	25.6 × e	外周ヨコナデ・ハケム 内周ナデ	多	多	多	多	外周にスス付着	第14次調査区 S060	6	
5-49	774	SK263	養生土器	薬	(25.6)	8.7 × e	外周ヨコナデ・ハケム 内周ナデ	多	多	多	多	第14次調査区 S060	11		
5-49	775	SK263	養生土器	薬	4.3 × e	7.0	外周ヨコナデ・ハケム 内周ナデ・内周直	多	多	多	少	外周にスス付着	第14次調査区 S060	1	
5-49	776	SK263	養生土器	高坪	(24.6)	7.8 × e	外周ヨコナデ 内周ミガキナデ	少	少	少	内周面に赤色顔料	第14次調査区 S060	3・9・10・一括		
5-00	777		養生土器	薬	8.7 × e	外周ヨコナデ・M字突部・ミ ガキ 内周ナデ	少	少	少	少	内周面に赤色顔料	第14次調査区 S060	1		
5-50	778	巨倉直	養生土器	薬	3.0 × e	外周ヨコナデ 内周ナデ	多	多	多	多	外周に赤色顔料	第14次調査区 S060	24		
5-50	779		養生土器	小型直 (17.0)	10.7	外周ヨコナデ 内周ナデ	多	多	多	多	第14次調査区 S060	1			
5-00	780		養生土器	小型直 (7.5)	11.3	(5.4)	外周ヨコナデ・突部・ハケム 内周ナデ	多	多	多	多	第14次調査区 S045・S050	1		
6-3	801	SH74	養生時代	薬	27.5	9.6	外周ヨコナデ・ハケム 内周ナデ	多	多	多	多	第15次調査区 S025	8		
6-3	802	SH74	養生時代	薬	27.2	13.4 × e	外周ヨコナデ・ハケム 内周ナデ	多	多	多	多	第15次調査区 S025	25		
6-3	803	SH74	養生時代	薬	28.6	16.5 × e	外周ヨコナデ・ハケム 内周ナデ	多	多	多	多	外周にスス付着	第15次調査区 S025	11・24・27	
6-3	804	SH74	養生時代	薬	(31.8)	7.0 × e	外周ヨコナデ・突部・ハケム 内周ナデ	少	多	少	少	第15次調査区 S025	17		
6-3	805	SH74	養生時代	薬	4.5 × e	7.3	外周ヨコナデ・ハケム 内周ナデ	少	多	多	多	第15次調査区 S025	2		
6-3	806	SH74	養生時代	薬	8.2 × e	5.8	外周ヨコナデ・ハケム 内周ナデ	多	多	多	多	外周にスス付着	第15次調査区 S025	19	
6-3	807	SH74	養生時代	薬	11.4 × e	外周ヨコナデ・突部・ハケム 内周ナデ	少	多	少	少	第15次調査区 S025	15			
6-5	810	SH75	養生時代	薬	(27.2)	11.4 × e	外周ヨコナデ・ハケム 内周ナデ	多	多	多	多	第15次調査区 S030	68		
6-5	811	SH75	養生時代	薬	(31.0)	10.5 × e	外周ヨコナデ・三角突部・ハ ケム 内周ナデ	多	多	多	多	第15次調査区 S030	58・69		
6-5	812	SH75	養生時代	薬	5.0 × e	6.8	外周ヨコナデ・ハケム 内周ナデ	多	多	多	多	第15次調査区 S030	102		
6-5	813	SH75	養生時代	薬	6.6 × e	(7.0)	外周ヨコナデ・ハケム 内周ナデ	多	多	多	多	第15次調査区 S030	71		
6-5	814	SH75	養生時代	薬	8.0 × e	(7.4)	外周ヨコナデ・ハケム 内周ナデ	多	多	多	多	第15次調査区 S030	70・103		
6-5	815	SH75	養生時代	薬	10.0 × e	(9.0)	外周ヨコナデ・ハケム 内周ナデ	多	多	多	多	内周にスス付着	第15次調査区 S030	73	
6-5	816	SH75	養生時代	薬	10.7 × e	(7.7)	外周ヨコナデ・ハケム 内周ナデ	多	多	多	多	内周にスス付着	第15次調査区 S030	94	
6-5	817	SH75	養生時代	薬	4.8 × e	(10.0)	外周ヨコナデ・ハケム 内周ナデ	多	多	多	多	第15次調査区 S030	7・49		
6-5	818	SH75	養生時代	小型直	6.7 × e	外周ヨコナデ・ハケム・ミガキ 内周ナデ・内周直	少	少	少	少	第15次調査区 S030	27			
6-5	819	SH75	養生時代	薬	6.3 × e	(12.0)	外周ヨコナデ・ハケム 内周ナデ・内周直	少	少	少	少	第15次調査区 S030	62		
6-5	820	SH75	養生時代	高坪 球型	(26.7)	8.2 × e	外周ヨコナデ・ミガキ 内周ナデ・ミガキ	少	少	少	少	内周面に赤色顔料	第15次調査区 S030	5	
6-5	821	SH75	養生時代	高坪 球型	8.4 × e	外周ミガキ 内周ナデ・シボリ直	多	多	多	多	外周に赤色顔料	第15次調査区 S030	15		

No.	No.	品名	種類	時期	寸法 (mm)			重量 (g)	材質	説明、特殊仕様	測定				備考	検出時期 (土曜日まで)		
					外径	高さ	厚さ				外径	高さ	厚さ	外径				
6-5	822	SH75	戦中時代	巻			6.5±a		外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ	少	少	少			第15次調査区 S030	38、39		
6-8	831	SH76	戦中時代	巻			11.8±a		外周ヨコナテ内周ナテ	多	多	多	内面に赤色顔料		第15次調査区 S030	4		
6-8	832	SH76	戦中時代	巻	(30.4)		7.8±a		外周ヨコナテ内周ナテ	多	多	多	外周にスチ付合		第15次調査区 S045 (S020W)	9		
6-8	833	SH76	戦中時代	巻			2.8±a		外周ヨコナテ、安巻内周ナテ			少	内周面に赤色顔料		第15次調査区 S030			
6-8	834	SH76	戦中時代	巻			9.7±a	7.9	外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ	多	多	多			第15次調査区 S030	7		
6-8	835	SH76	戦中時代	巻	高坏	坏部			外周ヨコナテ内周ナテ	多	多	多			第15次調査区 S030	1		
6-8	838	SH76	戦中時代	巻			25.4	25.0±a	外周ヨコナテ、ハケメ、指圧痕	少	少	少			第15次調査区 S045 (S020W)	3、6		
6-8	839	SH76	戦中時代	巻	高坏		25.0±a	17.2	外周ナテ内周ナテ、シボリ痕	少	少	多			第15次調査区 S045 (S020W)	2、3		
6-10	842	SH77	戦中時代	巻	(30.4)		5.0±a		外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ	多	多	少			第15次調査区 S030	3		
6-10	843	SH77	戦中時代	巻	(21.6)		13.2±a		外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ	少	少	少	外周にスチ付合		第15次調査区 S019	4		
6-10	844	SH77	戦中時代	巻			5.2±a	(9.0)	外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ	多	多	多			第15次調査区 S019	8		
6-10	845	SH77	戦中時代	巻	台		9.4	16.0	12.0	外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ	少	少	少			第15次調査区 S019	8	
6-10	846	SH77	戦中時代	巻	高坏	坏部	29.8	7.9±a		外周ヨコナテ、ミガキ内周ナテ	少	少	少	外周にスチ付合内周面に赤色顔料		第15次調査区 S019	8	
6-12	848	SH78	戦中時代	巻	(31.6)		10.3±a		外周ヨコナテ内周ナテ	多	多	多			第15次調査区 S040	20		
6-12	849	SH78	戦中時代	巻	高坏	坏部	(33.6)	4.2±a		外周ヨコナテ、顔目傷等内周ナテ	少	少	少			第15次調査区 S040	3、8	
6-12	850	SH78	戦中時代	巻			(44.2)	8.1±a		外周ヨコナテ、顔目傷等、ハケメ内周ナテ	少	少	少			第15次調査区 S040	8	
6-12	851	SH78	戦中時代	巻			(28.4)	10.2±a		外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ	多	多	多			第15次調査区 S040	13	
6-12	852	SH78	戦中時代	巻	高坏	坏部		14.7±a		外周ナテ内周ナテ、シボリ痕	多	多	少			第15次調査区 S019	9	
6-12	853	SH78	戦中時代	巻	(28.6)		7.1		外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ	多	多	少			第15次調査区 S040	37、38		
6-12	854	SH78	戦中時代	巻	(20.0)		6.6±a		外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ	少	少	少			第15次調査区 S040	18		
6-12	855	SH78	戦中時代	巻			(28.4)	8.7±a		外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ	少	少	多	外周にスチ付合		第15次調査区 S040	8	
6-12	856	SH78	戦中時代	巻			(26.0)	5.7±a		外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ	少	少	少			第15次調査区 S040	12	
6-12	857	SH78	戦中時代	巻			(22.0)	7.3±a		外周ヨコナテ内周ナテ			多			第15次調査区 S040	20	
6-12	858	SH78	戦中時代	巻			5.8±a	(8.2)		外周ヨコナテ内周ナテ	少	多	多			第15次調査区 S040	1	
6-12	859	SH78	戦中時代	巻			14.4±a	(6.5)		外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ	少	多	多			第15次調査区 S040	2	
6-12	860	SH78	戦中時代	巻	(34.4)		5.2±a		外周ヨコナテ、安巻、ハケメ内周ナテ、指圧痕	少	少	少			第15次調査区 S040	3		
6-12	861	SH78	戦中時代	巻	(24.0)		15.0±a		外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ	少	多	多			第15次調査区 S040	17		
6-12	862	SH78	戦中時代	巻			4.3±a		外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ	少	多	多			第15次調査区 S040	12		
6-12	863	SH78	戦中時代	巻			(6.8)		外周ヨコナテ、ミガキ内周ナテ、指圧痕	多	多	少	外周に赤色顔料		第15次調査区 S040	27		
6-12	864	SH78	戦中時代	巻			4.9±a	6.2		外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ	少	少	少			第15次調査区 S040	49	
6-12	865	SH78	戦中時代	巻	台		10.2	16.9	16.1	10.9	外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ、指圧痕	少	少	多			第15次調査区 S040	29
6-12	866	SH78	戦中時代	巻	台		11.4	16.3	17.3	12.4	外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ、指圧痕	少	少	多			第15次調査区 S019	29
6-12	867	SH78	戦中時代	巻	台		(16.0)	12.3±a		外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ	少	少	少			第15次調査区 S040	29	
6-12	868	SH78	戦中時代	巻	台		10.8±a	10.5		外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ	少	少	少			第15次調査区 S040	29	
6-12	869	SH78	戦中時代	巻	高坏	坏部	(13.2)	5.0±a		外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ	少	少	少			第15次調査区 S040	20、28	
6-12	870	SH78	戦中時代	巻	高坏	坏部	(20.2)	6.3±a		外周ヨコナテ、ミガキ内周ナテ	多	多	多			第15次調査区 S040	2、8、18	
6-12	871	SH78	戦中時代	巻			3.0±a	6.4		外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ	多	多	多			第15次調査区 S040	12	
6-12	875	SH79	戦中時代	巻	高坏	坏部	11.4	15.0±a		外周ヨコナテ、ミガキ内周ナテ、ミガキ	少	少	少	内周面に赤色顔料		第15次調査区 S040	5	
6-12	876	SH79	戦中時代	巻			4.7±a	6.6		外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ	多	多	多			第15次調査区 S040	1	
6-12	883	SH80	戦中時代	巻			18.5±a		外周ヨコナテ、クダキ、ケズリ内周ナテ、指圧痕	多	多	多			第15次調査区 S019	45		
6-12	884	SH80	戦中時代	巻			20.6±a		外周ヨコナテ、クダキ、ハケメ内周ナテ、指圧痕、工具痕	多	多	多			第15次調査区 S015	18		

No.	No.	No.	No.	No.	No.	No.			No.			No.	No.
						No.	No.	No.	No.	No.	No.		
6-15	885	SH80	戦中時代	巻	(38)	16.4	外題ヨコナテ、タタキ、ハクメ内題ナシ、帯なし、工口紙	少	多	多	第15次調査区S015	11	
6-15	886	SH80	戦中時代	巻	(162)	13.0+a	外題ヨコナテ、タタキ、帯なし内題ナシ、帯なし	多	多	多	第15次調査区S015	47	
6-15	887	SH80	戦中時代			14.5+a	外題ヨコナテ、タタキ、クズリ内題ナシ、帯なし、ハクメ	多	少	多	第15次調査区S015	7・8	
6-15	888	SH80	戦中時代	巻	(197)	10.7+a	外題ヨコナテ、タタキ、ハクメ内題ナシ、帯なし、ハクメ	多	多	多	第15次調査区S015	8	
6-15	889	SH80	戦中時代	巻	(163)	10.7+a	外題ヨコナテ、タタキ、ハクメ内題ナシ、帯なし、ハクメ	多	多	多	第15次調査区S015	7	
6-15	890	SH80	戦中時代	巻	(149)	8.0+a	外題ヨコナテ、タタキ、ハクメ内題ナシ、ハクメ	多	多	多	第15次調査区S015	3	
6-15	891	SH80	戦中時代	巻	(126)	16.5+a	外題ヨコナテ、タタキ、ハクメ内題ナシ、ハクメ	多	多	少	第15次調査区S015	47	
6-15	892	SH80	戦中時代	巻		19.0+a	外題ヨコナテ、ハクメ内題ナシ、ハクメ、帯なし	多	多	多	第15次調査区S015	23	
6-15	893	SH80	戦中時代	序言口付紙	134	18.0+a	外題ヨコナテ、ハクメ内題ナシ、ハクメ	多	多	多	第15次調査区S015	17	
6-15	894	SH80	戦中時代	巻	132	13.0	外題ヨコナテ、タタキ、ハクメ内題ナシ、ハクメ、クズリ	少	多	多	第15次調査区S015	12	
6-15	895	SH80	戦中時代	高坪塚部		8.1+a	外題ヨコナテ、ハクメ内題ナシ、ハクメ、ミガキ	多	多	多	第15次調査区S015	15	
6-15	896	SH80	戦中時代	高坪塚部	(212)	2.3+a	外題ヨコナテ、ハクメ、ミガキ内題ナシ、ミガキ	少	多	少	第15次調査区S015	3	
6-15	897	SH80	戦中時代	高坪塚部		(7.2+a)	外題ヨコナテ、ハクメ内題ナシ、帯なし	多	多	多	外題に赤色染料	5	
6-15	898	SH80	戦中時代	合符紙	105	7.1	(7.4)	外題ヨコナテ、ハクメ、帯なし内題ナシ、ミガキ、帯なし	多	少	多	第15次調査区S015	34・9
6-15	899	SH80	戦中時代	合符紙	147	4.1+a	外題ヨコナテ、ハクメ、タタキ内題ナシ、工口紙、帯なし	多	多	多	第15次調査区S015	46	
6-20	904	SH81	戦中時代	巻	292	10.5+a	外題ヨコナテ、ハクメ、工口紙、帯なし、ミガキ、帯なし	多	多	多	第15次調査区S010	15・29・32	
6-20	905	SH81	戦中時代	巻	(141)	8.6+a	外題ヨコナテ、ハクメ、タタキ内題ナシ、ハクメ	多	多	多	第15次調査区S010	3	
6-20	906	SH81	戦中時代	巻	(162)	13.5+a	外題ヨコナテ、ハクメ、クズリ内題ナシ、ハクメ	少	多	多	第15次調査区S010	5・8	
6-20	907	SH81	戦中時代	巻		19.4+a	外題ヨコナテ、ハクメ、タタキ内題ナシ、ハクメ、ミガキ	少	多	多	第15次調査区S010	36	
6-20	908	SH81	戦中時代	巻	(166)	12.7+a	外題ヨコナテ、ハクメ内題ナシ、クズリ	多	多	多	第15次調査区S010	7	
6-20	909	SH81	戦中時代	巻	(198)	6.3+a	外題ヨコナテ、ハクメ、タタキ内題ナシ、ハクメ	少	多	多	外題にスス付	17・18	
6-20	910	SH81	戦中時代	巻		13.8+a	外題ヨコナテ、ハクメ、ミガキ内題ナシ、ハクメ、クズリ、帯なし	多	多	多	第15次調査区S010	10	
6-20	911	SH81	戦中時代	巻	130	12.0	外題ヨコナテ、ハクメ内題ナシ、クズリ、ミガキ	少	多	多	第13次調査区S010	27	
6-20	912	SH81	戦中時代	巻	140	7.4	外題ヨコナテ、クズリ内題ナシ、ハクメ	少	多	多	第15次調査区S010	24	
6-20	913	SH81	戦中時代	巻	132	6.4	外題ヨコナテ、クズリ、帯なし内題ナシ、ハクメ	少	多	多	第15次調査区S010	11	
6-20	914	SH81	戦中時代	巻	(104)	4.1	外題ヨコナテ、クズリ内題ナシ、ミガキ	多	多	多	第15次調査区S010	25	
6-20	915	SH81	戦中時代	高坪塚部	212	7.0+a	外題ヨコナテ、ハクメ、ミガキ内題ナシ、ハクメ、ミガキ	多	多	多	第15次調査区S010	33	
6-20	916	SH81	戦中時代	高坪塚部		7.2+a	外題ヨコナテ、ハクメ内題ナシ	多	多	多	第15次調査区S010	4	
6-20	917	SH81	戦中時代	合符紙	41+a	11.2	外題ヨコナテ、ハクメ内題ナシ	少	多	多	第15次調査区S010	26	
6-20	918	SH81	戦中時代	合符紙	63+a	13.2	外題ヨコナテ、ハクメ内題ナシ	少	多	多	第15次調査区S010	128	
6-20	919	SH81	戦中時代	合符紙	135+a	(124)	外題ヨコナテ、ハクメ、クズリ内題ナシ、ミガキ、ハク	多	多	多	第15次調査区S010	3	
6-23	922	SH82	戦中時代	巻	(330)	12.9+a	外題ヨコナテ、ハクメ、帯なし内題ナシ、ミガキ、帯なし	多	多	多	第15次調査区S025	32	
6-23	923	SH82	戦中時代	巻		4.2+a	外題ヨコナテ、帯なし内題ナシ	多	多	多	第15次調査区S025		
6-23	924	SH82	戦中時代	巻		3.8+a	外題ヨコナテ、帯なし内題ナシ、ハクメ	多	多	多	第15次調査区S025		
6-23	925	SH82	戦中時代	巻		2.9+a	外題ヨコナテ、帯なし内題ナシ、ハクメ	多	多	多	第15次調査区S025		
6-23	926	SH82	戦中時代	巻	(188)	11.2+a	外題ヨコナテ、帯なし内題ナシ、ハクメ、帯なし	少	多	多	第15次調査区S025	2・20	
6-23	927	SH82	戦中時代	巻	(160)	15.0+a	外題ヨコナテ、ハクメ内題ナシ、ハク	多	多	多	第15次調査区S025	47	
6-23	928	SH82	戦中時代	巻	15.8	14.1+a	外題ヨコナテ、ハクメ、クズリ内題ナシ、ハク	少	多	多	外外題にスス付	23	
6-23	929	SH82	戦中時代	巻		12.5+a	外題ヨコナテ、タタキ内題ナシ、ハク	多	多	多	第15次調査区S025	3・5	
6-23	930	SH82	戦中時代	巻		5.0+a	(3.0)	外題ヨコナテ、ハクメ内題ナシ	少	多	多	第15次調査区S025	29
6-23	931	SH82	戦中時代	合符紙		4.7+a	9.8	外題ヨコナテ、ハクメ、ミガキ内題ナシ、ハク	多	多	多	第15次調査区S025	7



No.	No.	No.	No.	No.	No.			No.				No.	No.			
					No.	No.	No.	No.	No.	No.	No.			No.		
6-38	984	SK271	弥生時代	壺	30.8	32.0	6.8	外周ヨコナダ、ミガキ、扁平 内面ナデ	少	少	少	少	外周に赤色顔料	第15次調査区 S014	21	
6-38	985	SK271	弥生時代	鉢台	9.2	16.2	(11.6)	外周ヨコナダ、ハケメ 内面ナデ、指圧痕、シボリ痕	少	多	多	多		第15次調査区 S014	16	
6-38	986	SK271	弥生時代	鉢内	10.5	16.9	12.2	外周ヨコナダ、ハケメ 内面ナデ、指圧痕	少	多	多	多		第15次調査区 S014	18	
6-38	987	SK271	弥生時代	鉢台	10.3	16.8	12.0	外周ヨコナダ、ハケメ 内面ナデ、指圧痕	少	多	多	多		第15次調査区 S014	19	
6-38	988	SK271	弥生時代	鉢台	10.2	17.0	11.7	外周ヨコナダ、ハケメ 内面ナデ、指圧痕	少	多	多	多		第15次調査区 S014	20	
6-39	989	SK271	弥生時代	壺	(35.0)	18.2	a	外周ヨコナダ 内面ナデ、指圧痕	少	多	少	少	口縁部に立派な裏 の彫刻あり	第15次調査区 S014	10・17	
6-39	990	SK271	弥生時代	甗	7.5	a		外周ヨコナダ、ミガキ 内面ナデ	少	少	少	少	外周に赤色顔料 内面にスス付着	第15次調査区 S014	3	
6-39	991	SK271	弥生時代	壺	11.1	a		外周縮減 内面ナデ	多	多	多	多		第15次調査区 S014	14	
6-39	992	SK271	弥生時代	壺	(34.0)	7.0	a	外周ヨコナダ、ハケメ、突帯 内面ナデ	少	少	少	少	外周面にスス付着	第15次調査区 S014	4	
6-39	993	SK271	弥生時代	瓶	(28.6)	19.2	6.2	外周ヨコナダ、ハケメ 内面ナデ、指圧痕	多	多	多	多		第15次調査区 S014	6・7・13・15	
6-39	994	SK271	弥生時代	壺	6.8	a	(6.8)	外周ヨコナダ、ミガキ 内面ナデ	少	少	少	少	外周に赤色顔料 内面にスス付着	第15次調査区 S014	5	
6-41	995	SK272	弥生時代	小皿	(9.8)	8.3	(8.7)	外周ヨコナダ、ミガキ 内面ナデ、指圧痕	少	少	少	少		第15次調査区 S022		
6-41	996	SK272	弥生時代	壺	(31.0)	4.3	a	外周ヨコナダ、ミガキ、扁平 内面ナデ	少	少	少	少	外周面に赤色顔料	第15次調査区 S022	6	
6-41	997	SK272	弥生時代	壺	10.0	a		外周ヨコナダ、ハケメ、扁平 内面ナデ	少	多	少	少		第15次調査区 S022	4	
6-41	998	SK272	弥生時代	鉢台	6.8	a	(12.0)	外周ヨコナダ、ハケメ 内面ナデ、シボリ痕	多	多	少	少		第15次調査区 S022	5	
6-42	1002	SK273	弥生時代	壺	3.8	a	6.1	外周ヨコナダ、ミガキ 内面ナデ	多	多	少	多	外周に赤色顔料	第15次調査区 S023	2	
6-42	1003	SK273	弥生時代	壺	6.3	a	7.0	外周ヨコナダ、ハケメ 内面ナデ	多	多	多	多		第15次調査区 S023	1	
6-43	1004	SK274	弥生時代	壺	9.5	a		外周ヨコナダ、ハケメ、突帯 内面ナデ	多	多	多	多		第15次調査区 S024	5	
6-44	1005	SK275	弥生時代	壺	(22.5)	7.3	a	外周縮減 内面縮減	少	少	少	少		第15次調査区 S026	2	
6-44	1006	SK275	弥生時代	壺	(24.2)	12.0	a	外周ヨコナダ、ハケメ 内面ナデ	少	少	少	少	外周にスス付着	第15次調査区 S026	13	
6-44	1007	SK275	弥生時代	壺	5.4	a	6.8	外周ヨコナダ、ハケメ 内面ナデ	多	少	多	多	外周にスス付着	第15次調査区 S026	7	
6-44	1008	SK275	弥生時代	高杯 鉢底	(17.6)	7.3	a	外周ヨコナダ、ミガキ 内面ナデ	多	少	少	少	内周面に赤色顔料	第15次調査区 S026	9・13	
6-44	1009	SK275	弥生時代	壺	(27.0)	3.7	a	外周ヨコナダ 内面ナデ	多	多	少	少		第15次調査区 S026	5	
6-46	1012	SK276	弥生時代	壺	7.6	a		外周ヨコナダ、ハケメ、突帯 内面ナデ、指圧痕	多	少	少	少		第15次調査区 S017	14・15・16・27	
6-46	1013	SK276	弥生時代	壺	12.0	a	8.2	外周ヨコナダ、ハケメ 内面ナデ	少	少	少	少	外周にスス付着	第15次調査区 S017	10	
6-46	1014	SK276	弥生時代	壺	5.8	a		外周ヨコナダ、ハケメ 内面ナデ	多	多	多	多		第15次調査区 S017	35	
6-46	1015	SK276	弥生時代	壺	6.8	a		外周ヨコナダ 内面ナデ	多	多	少	少	外周にスス付着	第15次調査区 S017		
6-46	1016	SK276	弥生時代	壺	5.0	a	7.8	外周ヨコナダ、ハケメ 内面ナデ	少	少	少	少		第15次調査区 S017	18	
6-46	1017	SK276	弥生時代	壺	5.8	a	(7.1)	外周ヨコナダ、ハケメ 内面ナデ	多	多	多	多		第15次調査区 S017	9	
6-46	1018	SK276	弥生時代	壺	7.3	a	7.8	外周ヨコナダ、ハケメ 内面ナデ	多	多	多	多	内面にスス付着	第15次調査区 S017	36	
6-46	1019	SK276	弥生時代	高杯 鉢底	(26.0)	4.0	a	外周ヨコナダ、ミガキ 内面ナデ、ミガキ	少	少	少	少	外周面に赤色顔料	第15次調査区 S017	8	
6-46	1020	SK276	弥生時代	壺	(26.5)	8.0	a	外周ヨコナダ、ミガキ 内面ナデ、ミガキ	多	少	少	少	外周面に赤色顔料	第15次調査区 S017	19	
6-47	1025	SK277	弥生時代	壺	5.3	a		外周ヨコナダ 内面ナデ	少	少	少	少		第15次調査区 S016	1	
6-47	1026	SK277	弥生時代	壺	5.2	a		外周ヨコナダ、ミガキ 内面ナデ、ミガキ	少	少	少	少	内周面に赤色顔料	第15次調査区 S016	7	
6-47	1027	SK277	弥生時代	壺	6.5	a		外周ヨコナダ、ミガキ、突帯 内面ナデ	多	多	多	多		第15次調査区 S016	5	
6-47	1028	SK277	弥生時代	壺	4.0	a		外周ヨコナダ、ハケメ 内面ナデ	少	少	少	少		第15次調査区 S016	2	
6-49	1029	SK278	弥生時代	壺	28.0	a		外周ヨコナダ、突帯 内面ナデ、指圧痕	多	少	少	多		第15次調査区 S056	1	
6-49	1030	SK278	弥生時代	壺	5.7	a	7.0	外周ヨコナダ、ハケメ 内面ナデ	多	多	多	多		第15次調査区 S056	2	
6-51	1031	SK279	弥生時代	壺	(23.6)	12.7	a	外周ヨコナダ、ハケメ 内面ナデ	多	多	多	多		第15次調査区 S056	2・3	
6-51	1032	SK279	弥生時代	鉢台	(10.2)	17.5	a	11.2	外周ヨコナダ、指圧痕 内面ナデ、ハケメ、指圧痕	多	少	少	多		第15次調査区 S056	1

種別	地番	用途	種別	面積 (㎡)			用途・開発内容	用途				用途	用途	
				口	部	部		種別	種別	種別	種別			
6-2	1033	SK280	住宅時代	差	24+α		外周ヨコナガ、ハケメ内周ナテ	多	少	多			第15次調査区 S066	
6-2	1031	SK280	住宅時代	差	103+α		外周ヨコナガ、ハケメ内周ナテ	少	少	多	外周に赤色顔料		第15次調査区 S066	
6-5	1035	SK281	住宅時代	差	58+α		外周ヨコナテ	少	多	多			第15次調査区 S067	
6-5	1106	SK281	住宅時代	差	(29.0)	68+α	外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ、階段	少	多	多	外周にスチ付		第15次調査区 S067	
6-5	1037	SK281	住宅時代	差	(29.4)	127+α	外周ヨコナテ、ミガキ内周ナテ、ミガキ	多	少	多	内周面に赤色顔料		第15次調査区 S067	
6-5	1038	SK282	住宅時代	差	435+α	(100)	外周ヨコナテ、奥帯内周ナテ	多	多	多			第15次調査区 S068	
6-5	1039	SK282	住宅時代	差	401+α	(56)	外周ヨコナテ、ミガキ、奥帯内周ナテ、階段	多	多	多			第15次調査区 S068	
6-5	1040	SK282	住宅時代	差	27.0	165+α	外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ	多	多	多			第15次調査区 S068	
6-5	1041	SK282	住宅時代	差	45+α	9.0	外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ	多	多	多			第15次調査区 S068	
6-5	1042	SK282	住宅時代	差	96+α	6.5	外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ	多	多	多			第15次調査区 S068	
6-5	1043	SK282	住宅時代	差	(20.8)	5.6+α	外周ヨコナテ、ミガキ、奥帯内周ナテ	多	多	多	外周に赤色顔料		第15次調査区 S068	
6-5	1044	SK282	住宅時代	差	6.0+α	(8.0)	外周ヨコナテ内周ナテ、階段	多	多	多			第15次調査区 S068	
6-5	1045	SK282	住宅時代	差	(10.6)	67+α	外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ、シロイシ	多	多	多			第15次調査区 S068	
6-5	1047	SK283	住宅時代	差	6.2+α	(6.9)	外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ、階段	多	多	多			第15次調査区 S076	
6-2	1048	SK284	住宅時代	差	(25.0)	74+α	外周ヨコナテ内周ナテ	多	少	少			第15次調査区 S088	
6-2	1049	SK284	住宅時代	差	(22.8)	131+α	外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ	多	多	多			第15次調査区 S088	
6-2	1050	SK284	住宅時代	差	(24.0)	26.9	6.9	外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ	多	多	多			第15次調査区 S088、S087
6-2	1061	SK284	住宅時代	差	(27.0)	78+α	外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ	多	多	多			第15次調査区 S088	
6-2	1052	SK284	住宅時代	差	9.3	16.2	11.5	外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ、階段	多	多	多			第15次調査区 S088
6-4	1053	SK285	住宅時代	差	(28.2)	184+α	外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ、ミガキ	多	多	多			第15次調査区 S021下巻	
6-4	1054	SK285	住宅時代	差	(26.0)	278+α	外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ	多	多	多	外周にスチ付		第15次調査区 S021上巻	
6-4	1055	SK286	住宅時代	差	(27.8)	39.1	7.5	外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ、階段	多	多	多	外周にスチ付		第15次調査区 S087
6-4	1036	SK287	住宅時代	差	(26.2)	135+α	外周ヨコナテ、ミガキ内周ナテ	多	少	多			第15次調査区 S045	
6-4	1057	SK287	住宅時代	差	45.6+α		外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ	多	多	多			第15次調査区 S088	
6-4	1058	SK7	住宅時代	差	52+α		外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ	多	少	少	外周にスチ付		第15次調査区 S063	
6-7	1060		住宅時代	差	23.7	102+α	外周ヨコナテ内周ナテ	少	少	多	外周にスチ付		第15次調査区 S066、S070、S067	
6-7	1061		住宅時代	差	(26.6)	83+α	外周ヨコナテ、奥帯内周ナテ	少	少	少			第15次調査区 S106	
6-7	1062		住宅時代	差	139+α		外周ヨコナテ、ミガキ、奥帯内周ナテ、階段	少	少	少	内周面に赤色顔料		第15次調査区 S109	
6-7	1063		住宅時代	差	183+α		外周ヨコナテ、ミガキ内周ナテ、ミガキ	少	少	少	内外面に赤色顔料外周にスチ付		第15次調査区 S065、S070	
6-7	1064		住宅時代	差	(14.2)	163+α	外周ヨコナテ、ミガキ内周ナテ、ミガキ	少	少	多	外周に赤色顔料		第15次調査区 S106	
6-7	1065		住宅時代	差	(9.8)	6.0+α	外周ヨコナテ、ミガキ内周ナテ、階段	少	少	少	内周面に赤色顔料		第15次調査区 S106	
6-7	1066		住宅時代	差	(12.0)	83+α	外周ヨコナテ、ハケメ、ミガキ内周ナテ	少	多	少			第15次調査区 S106	
6-7	1067		住宅時代	差	(28.6)	142+α	外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ	少	少	少			第15次調査区 S106	
6-7	1068		住宅時代	差	(30.2)	35.2	(7.0)	外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ	少	少	少	外周にスチ付		第15次調査区 S065、S070
6-7	1069		住宅時代	差	63+α		外周ヨコナテ、タチキ内周ナテ、ハケメ	多	多	多			第15次調査区 階段	
6-7	1070		住宅時代	差	44+α		外周ヨコナテ、タチキ内周ナテ、ハケメ	多	多	多			第15次調査区 階段	
6-7	1071		住宅時代	差	85+α		外周ヨコナテ、タチキ内周ナテ、ハケメ	少	少	多			第15次調査区 階段	
6-7	1072		住宅時代	差	9.5	164-17.0	11.4	外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ、階段	少	少	少			第15次調査区 S106
6-7	1073		住宅時代	差	9.5	16.6	(33.2)	外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ、階段	少	少	少			第15次調査区 S106
7-3	1082	SK83	住宅時代	差	23+α		外周ヨコナテ、ミガキ内周ナテ、ミガキ	少			外周に赤色顔料		第15次調査区 S330	

No.	品名	規格	寸法			質量	形状			備考	備考欄の付く番号	
			口径	厚さ	長さ		高さ	幅	長さ			
7.3	1083	SH83	張生土器	甕		5.0+a	外蓋ヨコナテ、ハケメ内蓋ナテ	少	多	少		第13次調査区 S300
7.3	1084	SH83	張生土器	甕		5.0+a	外蓋ヨコナテ、ハケメ、突帯内蓋ナテ	少	多	少		第13次調査区 S300
7.3	1085	SH83	張生土器	甕		3.8+a	11.5 外蓋ヨコナテ内蓋ナテ	多	多	多		第13次調査区 S300
7.3	1086	SH83	張生土器	甕		5.5+a	(7.1) 外蓋ヨコナテ、ハケメ内蓋ナテ	多	多	多		第13次調査区 S300
7.3	1087	SH83	張生土器	高坏		14.3+a	外蓋ヨコナテ、ミガキ内蓋ナテ、ミガキ、隠し痕	少	多	少	外内面に赤色顔料	第13次調査区 S300
7.3	1088	SH83	張生土器	甕		6.0+a	外蓋ヨコナテ、ハケメ内蓋ナテ	少	少	少	外面にスス付着	第13次調査区 S300
7.4	1089	SH83	張生土器	甕		13.2+a	外蓋ヨコナテ、突帯内蓋ナテ、隠し痕	多	少	少		第13次調査区 S285、S286+注1) 1) S280柱穴1) 2) S300)
7.4	1090	SH83	張生土器	甕	(27.4)	8.6+a	外蓋ヨコナテ、ケズリ内蓋ナテ	多	多	少	外面にスス付着	第13次調査区 S285、S286+注1)
7.4	1091	SH83	張生土器	甕	(14.8)	6.7+a	外蓋ヨコナテ、ハケメ内蓋ナテ	多	多	多		第13次調査区 S285
7.4	1092	SH83	張生土器	甕		4.8+a	4.7 外蓋ヨコナテ、ハケメ内蓋ナテ	多	多	多	外面にスス付着	第13次調査区 S285
7.4	1093	SH83	張生土器	钵	(8.1)	9.0+a	外蓋ヨコナテ、ハケメ内蓋ナテ	多	多	多		第13次調査区 S285 +注1)
7.4	1096	SH84	張生土器	甕		4.7-a	(20.0) 外蓋ヨコナテ、ハケメ内蓋ナテ	少	多			第13次調査区 S305
7.4	1097	SH84	張生土器	甕	(18.0)	12.0+a	外蓋ヨコナテ、ハケメ内蓋ナテ、ケズリ	多	多		外内面にスス付着	第13次調査区 S305
7.4	1098	SH84	張生土器	小型甕		8.5	5.3 外蓋ヨコナテ、ミガキ内蓋ナテ	多	多	多	外面に赤色顔料	第13次調査区 S305
7.4	1099	SH84	張生土器	香合		8.0+a	外蓋ヨコナテ、ハケメ内蓋ナテ、隠し痕	多				第13次調査区 S305
7.4	1100	SH85	張生土器	甕		9.3+a	外蓋ヨコナテ、ミガキ内蓋ナテ、ケズリ	少				第13次調査区 S290
7.4	1101	SH85	張生土器	甕		12.3+a	外蓋ヨコナテ内蓋ナテ	少	多			第13次調査区 S290)
7.4	1102	SH85	張生土器	高坏		1.3+a	外蓋ヨコナテ、ミガキ内蓋ナテ、ミガキ	少			外面に赤色顔料	第13次調査区 S290 柱2)
7.4	1105	SH85	張生土器	甕		7.1+a	外蓋ヨコナテ、突帯内蓋ナテ	多				第13次調査区 S290 柱3)
7.4	1104	SH85	張生土器	甕	(20.6)	4.8+a	外蓋ヨコナテ、ハケメ内蓋ナテ	多	多	多	外面にスス付着	第13次調査区 S290
7.4	1105	SH85	張生土器	甕	(14.1)	14.3	6.0 外蓋ヨコナテ、ミガキ内蓋ナテ	多	多	多		第13次調査区 S290
7.4	1106	SH85	張生土器	鉢		3.3+a	外蓋ヨコナテ内蓋ナテ	少			外面に赤色顔料	第13次調査区 S290
7.4	1107	SH85	張生土器	甕		2.9+a	外蓋ヨコナテ内蓋ナテ	多			内面にスス付着	第13次調査区 S290
7.4	1108	SH85	張生土器	高坏	上唇径 14	8.7+a	外蓋ヨコナテ、ミガキ内蓋ナテ、シガキ内蓋ナテ	少	多	多	外面に赤色顔料	第13次調査区 S290
7.4	1109	SH85	張生土器	甕		4.8+a	(7.4) 外蓋ヨコナテ、ハケメ内蓋ナテ	多			内面にスス付着	第13次調査区 S290
7.4	1110	SH85	張生土器	甕		4.0+a	(8.4) 外蓋ヨコナテ、ハケメ内蓋ナテ	少	多		外面にスス付着	第13次調査区 S290 柱)
7.4	1111	SH85	張生土器	甕		5.3+a	7.5 外蓋ヨコナテ、ハケメ内蓋ナテ	多	多	多	外面にスス付着	第13次調査区 S290
7.4	1112	SH86	張生土器	甕		3.1+a	7.0 外蓋ヨコナテ、ハケメ内蓋ナテ	多	多	多		第13次調査区 S290+注)
7.4	1113	SH85	張生土器	甕		10.3+a	7.0 外蓋ヨコナテ、ハケメ内蓋ナテ	多	多	多		第13次調査区 S290
7.4	1121	SH86	張生土器	小型甕	(11.0)	3.8+a	外蓋ヨコナテ内蓋ナテ	少		少		第13次調査区 S219C
7.4	1122	SH86	張生土器	甕		4.7+a	外蓋ヨコナテ	少		少	内内面にスス付着	第13次調査区 S219C
7.4	1123	SH86	張生土器	甕		5.0+a	外蓋ヨコナテ、ハケメ内蓋ナテ	少		少		第13次調査区 S215A
7.4	1124	SH86	張生土器	甕	(20.2)	5.0+a	外蓋ヨコナテ、ハケメ内蓋ナテ、ハケ	多	多	多		第13次調査区 S215
7.4	1125	SH86	張生土器	甕	(20.2)	6.0+a	外蓋ヨコナテ、ハケメ内蓋ナテ	多		少		第13次調査区 S215B
7.4	1126	SH86	張生土器	甕	(37.0)	8.5+a	外蓋ヨコナテ、ミガキ内蓋ナテ	多	多	少	多	第13次調査区 S215
7.4	1127	SH86	張生土器	甕	(32.0)	4.3+a	外蓋ヨコナテ、ハケメ内蓋ナテ、ハケ	多	多	少	多	第13次調査区 S215
7.4	1128	SH86	張生土器	甕		3.2+a	(6.0) 外蓋ヨコナテ、ミガキ内蓋ナテ	多	多	多	多	第13次調査区 S215
7.4	1129	SH86	張生土器	甕		15.0+a	8.0 外蓋ヨコナテ、ハケメ内蓋ナテ、隠し痕	多	多	多	外面にスス付着	第13次調査区 S219 隠し
7.4	1133	SH87	張生土器	甕	(32.2)	2.7+a	外蓋ヨコナテ、ミガキ内蓋ナテ	少		少	外面に赤色顔料	第13次調査区 S219 隠し
7.4	1134	SH87	張生土器	甕		6.0-a	外蓋ヨコナテ、ハケメ内蓋ナテ	少	少	多		第13次調査区 S219 柱穴1)



No.	種別	製品	規格	寸法 (mm)			用途・規格の特長	形状			備考	備考(単位・寸法)
				口径	長さ	厚さ		外径	寸法	寸法		
7-13	SH87	養生土盤	黒	60±			外周コナテ、ハケム内周ナテ	多	少	少	外周にスチ付着	第13次調査区 S210 円穴 4
7-13	SH88	養生土盤	黒	51±	(70)		外周コナテ、ハケム内周ナテ	少	少	多		第13次調査区 S210 円穴 D
7-13	SH87	養生土盤	黒	70±	(70)		外周コナテ、ハケム内周ナテ	少	多	多	内周にスチ付着	第13次調査区 S210 円穴 1
7-13	SH87	養生土盤	黒	63±	73		外周コナテ、ハケム内周ナテ	多	多	多	内外周にスチ付着	第13次調査区 S210 船体検査
7-13	SH87	養生土盤	黒	10.6±			外周コナテ、ミガキ内周ナテ、シボ付	少	多	少	外周に赤色顔料	第13次調査区 S210 柱穴 3
7-15	SH88	養生土盤	黒	96±	(188)		外周コナテ、ミガキ、突帯内周ナテ	少	少	少		第13次調査区 S205 船体
7-15	SH88	養生土盤	黒	53±			外周コナテ、ハケム内周ナテ	少	少	少		第13次調査区 S205 船体
7-15	SH88	養生土盤	黒	39±			外周コナテ、突帯内周ナテ	少	少	少		第13次調査区 S205 船体
7-15	SH88	養生土盤	黒	92±	(28.4)		外周コナテ、ハケム内周ナテ	少	少	少	外周にスチ付着	第13次調査区 S205 船体
7-17	SH89	養生土盤	黒	30.0	93±		外周コナテ、突帯内周ナテ	少	少	少		第13次調査区 S205 船体
7-17	SH89	養生土盤	黒	62±	(34.4)		外周コナテ、ミガキ内周ナテ	少	多	多		第13次調査区 S205 船体
7-17	SH89	養生土盤	黒	69±			外周コナテ、ハケム、突帯内周ナテ	多	少	多		第13次調査区 S205 船体
7-17	SH89	養生土盤	黒	12.6±			外周コナテ、ハケム、突帯内周ナテ、凹位置	多	多	少		第13次調査区 S205 船体
7-17	SH89	養生土盤	黒	10.1±			外周コナテ、ミガキ内周ナテ	少	多	少	外周に赤色顔料	第13次調査区 S205 船体
7-17	SH89	養生土盤	黒	5.1±	63		外周コナテ、ハケム、ミガキ内周ナテ、凹位置	少	多	多	凹部打ち欠き	第13次調査区 S205 船体
7-17	SH89	養生土盤	黒	3.4±			外周コナテ内周ナテ	少	少	多	内外周にスチ付着	第13次調査区 S205 船体
7-17	SH89	養生土盤	黒	9.1	57±		外周コナテ、ハケム、突帯内周ナテ	少	少	少		第13次調査区 S205 船体
7-17	SH89	養生土盤	黒	9.1±	(5.4)		外周コナテ、ミガキ内周ナテ	多	多	多	外周に赤色顔料	第13次調査区 S205 船体
7-17	SH89	養生土盤	黒	200.8	62±		外周コナテ内周ナテ	少	多	少		第13次調査区 S205 船体
7-17	SH89	養生土盤	黒	4.9±	(23.8)		外周コナテ、ミガキ内周ナテ、ミガキ	外周に赤色顔料	第13次調査区 S205 船体			
7-17	SH89	養生土盤	黒	24.2			外周コナテ、ケズリ内周ナテ	少	少	少		第13次調査区 S205 船体
7-17	SH89	養生土盤	黒	32.2	77±		外周コナテ、ハケム内周ナテ	少	多	少		第13次調査区 S205 船体
7-17	SH89	養生土盤	黒	27.4	57±		外周コナテ、ハケム内周ナテ	多	多	少		第13次調査区 S205 船体
7-17	SH89	養生土盤	黒	27.6	125±		外周コナテ、ハケム内周ナテ	少	多	少		第13次調査区 S205 船体
7-17	SH89	養生土盤	黒	27.2	75±		外周コナテ、ハケム内周ナテ	少	多	少		第13次調査区 S205 船体
7-17	SH89	養生土盤	黒	25.8	149±		外周コナテ、ハケム内周ナテ	少	多	少	外周にスチ付着	第13次調査区 S205 船体
7-17	SH89	養生土盤	黒	32.6	80±		外周コナテ内周ナテ	少	少	多		第13次調査区 S205 船体
7-18	SH89	養生土盤	黒	31.5	32.6	63	外周コナテ、ミガキ、突帯内周ナテ、凹位置	多	少	多	外周に赤色顔料 凹部打ち欠き	第13次調査区 S205 船体
7-18	SH89	養生土盤	黒	10.4±	(5.4)		外周コナテ、ハケム内周ナテ	多	多	多		第13次調査区 S205 船体
7-18	SH89	養生土盤	黒	18.0	24.3	6.8	外周コナテ、ミガキ内周ナテ、ミガキ	多	多	多	外周に赤色顔料	第13次調査区 S205 船体
7-18	SH89	養生土盤	黒	27.0	97±		外周コナテ、ハケム内周ナテ	多	多	多	外周にスチ付着	第13次調査区 S205 船体
7-18	SH89	養生土盤	黒	27.6	107±		外周コナテ、ハケム内周ナテ	多	多	少		第13次調査区 S205 船体
7-18	SH89	養生土盤	黒	30.0	7.4±		外周コナテ、ハケム内周ナテ	多	多	多		第13次調査区 S205 船体
7-18	SH89	養生土盤	黒	5.4±	6.9		外周コナテ、ハケム内周ナテ、凹位置	多	多	多		第13次調査区 S205 船体
7-18	SH89	養生土盤	黒	5.9±	8.4		外周コナテ、凹位置	少	多	多		第13次調査区 S205 船体
7-18	SH89	養生土盤	黒	6.0±	8.0		外周コナテ、ミガキ内周ナテ、凹位置	多	多	多		第13次調査区 S205 船体
7-18	SH89	養生土盤	黒	67±	(9.0)		外周コナテ内周ナテ	多	多	多		第13次調査区 S205 船体
7-18	SH89	養生土盤	黒	14.2	8.4		外周コナテ、ハケム内周ナテ	少	少	少		第13次調査区 S205 船体
7-18	SH89	養生土盤	黒	15.2	14.4±		外周コナテ、ミガキ内周ナテ、ミガキ、凹位置	少	少	少	内外周に赤色顔料	第13次調査区 S205 船体
7-18	SH89	養生土盤	黒	18.8	15.6±		外周コナテ、ハケム、ミガキ内周ナテ、ミガキ	少	少	少	内外周に赤色顔料	第13次調査区 S205 船体

種別	品番	品名	単位	JIS 7060			用途・適用・特長	寸法				備考	部材明細表・寸法図			
				内径	外径	肉厚		全長	外径	内径	肉厚			全長		
7-18	1177	SH89	炭素土器	器台	47×a	(9.8)	外周ヨコナデ・ハケメ内周ナデ	少	少	少	少	少	第13次調査区 S105	58		
7-18	1178	SH89	炭素土器	高坪	56×a	(14.6)	外周ヨコナデ・ミガキ内周ナデ	少	少	少	少	少	第13次調査区 S102			
7-21	1186	SH90	炭素土器	壺	(17.4)	10.0±a	外周ヨコナデ・ミガキ・突帯・四斜段文内周ナデ	多	多	少	少	少	第13次調査区 S109・S170A	6 (S230)		
7-21	1187	SH90	炭素土器	壺	(8.7)	13.0±a	外周ヨコナデ・ミガキ内周ナデ	少	多	少	少	少	第13次調査区 S103			
7-21	1188	SH90	炭素土器	壺	18.7±a		外周ヨコナデ・ミガキ内周ナデ・撥圧痕	多	多	少	少	多	外周に赤色顔料	第13次調査区 S170	7	
7-21	1189	SH90	炭素土器	壺	(26.0)	4.5±a	外周ヨコナデ・ハケメ内周ナデ	多	多	少	多	多		第13次調査区 S170	17	
7-21	1191	SH90	炭素土器	壺	7.5±a		外周ヨコナデ・ハケメ内周ナデ	多	多	多	多	多		第13次調査区 S170	10・27・28・一括	
7-21	1191	SH90	炭素土器	壺	25.2±a	4.4	外周ヨコナデ・ハケメ内周ナデ	多	多	多	多	多	外周にスス付着	第13次調査区 S170	21	
7-21	1192	SH90	炭素土器	壺	13.0±a	10.3	外周ヨコナデ・ハケメ内周ナデ・撥圧痕	多	多	多	少	少		第13次調査区 S170	10	
7-21	1193	SH90	炭素土器	壺	21.2	33.1	7.6	外周ヨコナデ・ミガキ内周ナデ・撥圧痕	多	多	多	多	多		第13次調査区 S170・S170C	26・27・28
7-21	1194	SH90	炭素土器	壺	12.0±a	8.9		外周ヨコナデ・ハケメ内周ナデ・工具痕	多	多	多	多	多		第13次調査区 S170	13
7-21	1196	SH90	炭素土器	鉢	(0.6)	14.2±a		外周ヨコナデ・ハケメ内周ナデ	多	多	多	多	多		第13次調査区 S170	9
7-22	1196	SH90	炭素土器	台付鉢	21.2	25.7	10.0	外周ヨコナデ・ハケメ内周ナデ・付着物痕	少	少	少	少	少	外周にスス付着	第13次調査区 S170・S170C	22・23・24
7-22	1197	SH90	炭素土器	器台	8.1±a	(9.8)		外周ヨコナデ・ハケメ内周ナデ・撥圧痕	多	多	多	多	多		第13次調査区 S170	6
7-22	1198	SH90	炭素土器	高坪	11.4±a	17.4		外周ヨコナデ・ミガキ内周ナデ・シボリ痕	少	少	少	多	多	外周に赤色顔料	第13次調査区 S170	13
7-22	1199	SH90	炭素土器	高坪	22.0	25.0		外周ヨコナデ・ミガキ内周ナデ・シボリ痕	多	多	多	多	多	内・外周に赤色顔料	第13次調査区 S170・S170B	2・3
7-22	1200	SH90	炭素土器	高坪	34.1	30.0±a		外周ヨコナデ・ミガキ内周ナデ・ミガキ・ナズリ	多	多	少	少	少	内周に赤色顔料	第13次調査区 S170	14・16・20・22
7-24	1204	SH91	炭素土器	壺	20.4	23.8±a		外周ヨコナデ・ハケメ内周ナデ	多	多	多	多	多	内・外周にスス付着	第13次調査区 S105	1・2
7-26	1205	SH92	炭素土器	壺	17.0	14.3±a		外周ヨコナデ・工具痕内周ナデ・撥圧痕	少	少	少	少	少		第13次調査区 S105・S153土坑1・S155土坑2・S155c・S154・S150	34・66
7-26	1206	SH92	炭素土器	壺	(7.8)	8.7±a		外周ヨコナデ・ミガキ・突帯内周ナデ・撥圧痕	少	少	少	少	少	外周に赤色顔料	第13次調査区 S155 土坑4・5	
7-26	1207	SH92	炭素土器	壺	5.3±a	7.2		外周ヨコナデ・ハケメ内周ナデ・撥圧痕	少	少	少	少	少	外周にスス付着	第13次調査区 S105	79
7-26	1208	SH92	炭素土器	壺	14.0±a			外周ヨコナデ・丁取ミガキ・突帯内周ナデ	多	少	少	多	多		第13次調査区 S155 土坑1・土坑2・S155c・S126	2
7-26	1209	SH92	炭素土器	壺	14.7±a	8.4		外周ヨコナデ・ハケメ内周ナデ	多	多	少	少	少		第13次調査区 S155	36
7-26	1210	SH92	炭素土器	壺	(22.0)	9.9±a		外周ヨコナデ・ハケメ内周ナデ	多	多	多	少	少		第13次調査区 S155土坑2	48
7-26	1211	SH92	炭素土器	壺	(28.2)	6.5±a		外周ヨコナデ・ハケメ内周ナデ	多	多	多	多	多		第13次調査区 S155土坑2	
7-26	1212	SH92	炭素土器	壺	(29.2)	16.0±a		外周ヨコナデ・ハケメ内周ナデ	少	多	少	少	少		第13次調査区 S105・S155土坑2・S155c・S156	54・56・9
7-26	1213	SH92	炭素土器	壺	(29.0)	8.0±a		外周ヨコナデ・ハケメ内周ナデ	少	多	多	多	多		第13次調査区 S155	46
7-26	1214	SH92	炭素土器	壺	(26.2)	15.3±a		外周ヨコナデ・ハケメ内周ナデ	少	少	少	少	少		第13次調査区 G-98155	62・80
7-26	1215	SH92	炭素土器	壺	(25.4)	4.7±a		外周ヨコナデ・ハケメ内周ナデ	多	多	多	多	多	外周にスス付着	第13次調査区 S155	72
7-26	1216	SH92	炭素土器	壺	27.0	33.0±a		外周ヨコナデ・ハケメ・工具痕・撥圧痕内周ナデ	多	多	多	少	少		第13次調査区 S155	6・2
7-26	1217	SH92	炭素土器	壺	(26.2)	8.2±a		外周ヨコナデ・ハケメ内周ナデ	少	少	少	少	少		第13次調査区 S155	51
7-26	1218	SH92	炭素土器	壺	27.0	8.5±a		外周ヨコナデ・ハケメ内周ナデ	多	多	多	多	多	外周にスス付着	第13次調査区 S155	8
7-27	1219	SH92	炭素土器	壺	(28.4)	19.8±a		外周ヨコナデ・ハケメ内周ナデ	少	多	少	少	少	外周にスス付着	第13次調査区 S155	74・76
7-27	1220	SH92	炭素土器	壺	16.3±a	(30.0)		外周ヨコナデ・ハケメ内周ナデ	多	多	多	多	多		第13次調査区 S155土坑2	1
7-27	1221	SH92	炭素土器	壺	(28.8)	33.2	7.1	外周ヨコナデ・ハケメ内周ナデ	少	少	少	少	少	外周にスス付着	第13次調査区 G-98155	1
7-27	1222	SH90	炭素土器	壺	(28.4)	8.2±a		外周ヨコナデ・ハケメ・突帯内周ナデ	少	少	少	少	少		第13次調査区 G-98155	79
7-27	1223	SH92	炭素土器	壺	(32.6)	6.0±a		外周ヨコナデ・突帯内周ナデ	多	多	多	少	少		第13次調査区 S153	87
7-27	1224	SH92	炭素土器	壺	23.9±a	(31.6)		外周ヨコナデ・ハケメ・突帯内周ナデ	多	多	少	多	多		第13次調査区 S153	73

No.	品名	規格	寸法 (mm)			重量 (g)	原料・製法の特長	色			備考	商品付録の表示		
			全長	幅	厚			外	内	底				
7-27	1225	SH92	養生土盤	黄	23.0 ± a	7.8	外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ、撥汗底	多	多	多	多	外周にスス付着	第13次調査区 S150	53・74
7-27	1226	SH90	養生土盤	黄	4.6 ± a	6.3	外周ヨコナテ、ミガキ内周ナテ	多	多	多	多	外周に赤色顔料	第13次調査区 S155 上層 4	3
7-27	1227	SH92	養生土盤	黄	6.2 ± a	6.4	外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ	多	多	多	多		第13次調査区 S155 上層 2	10
7-27	1228	SH92	養生土盤	黄	6.0 ± a	18.0	外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ	多	多	多	多		第13次調査区 S155 上層 2	41
7-27	1229	SH92	養生土盤	黄	7.9 ± a	7.3	外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ	多	多	多	多	外周にスス付着	第13次調査区 S155 上層 2	2
7-27	1230	SH92	養生土盤	黄	9.0 ± a	6.1	外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ	多	多	多	多		第13次調査区 S155	12・14
7-28	1231	SH92	養生土盤	黄	(18.3) 16.3 ± a	22.0	外周ヨコナテ、ミガキ内周ナテ	少	少	少	少	外周に赤色顔料	第13次調査区 S156・S156c	64
7-28	1232	SH90	養生土盤	黄	18.2	8.8 (6.3)	外周ヨコナテ、ハケメ、ミガキ内周ナテ	多	多	多	多		第13次調査区 S155・S155c	3・7・30・21・22
7-28	1233	SH92	養生土盤	黄	(11.0) 8.6	4.0	外周ヨコナテ内周ナテ	少	少	少	少		第13次調査区 S156・S156b・S156d	
7-28	1234	SH92	養生土盤	黄	9.3 ± a	(9.9)	外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ、シボリ底、上具裏	多	多	多	多		第13次調査区 S155・S156a上層 1・S156d	82・85
7-28	1235	SH92	養生土盤	黄	8.8 ± a	(11.2)	外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ、シボリ底	少	少	少	少		第13次調査区 S156a上層 5・S156d	2・4
7-28	1236	SH92	養生土盤	黄	11.0 ± a	(11.7)	外周 不明内周 ヨコナテ、シボリ底	少	少	少	少	外周に赤色顔料	第13次調査区 S155	28・29・30
7-28	1237	SH92	養生土盤	黄	15.0 ± a	15.6	外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ	少	少	少	少		第13次調査区 S156	47・48
7-28	1238	SH92	養生土盤	黄	(6.2) 7.4	(9.6)	外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ、シボリ底、撥汗底	多	多	多	多			1
7-28	1239	SH92	養生土盤	黄	(8.4) 16.4	(13.2)	外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ	少	少	少	少		第13次調査区 S156	57
7-28	1240	SH92	養生土盤	黄	(29.2) 8.3 ± a		外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ、ミガキ	少	少	少	少	内周面に赤色顔料	第13次調査区 S155	59
7-28	1241	SH92	養生土盤	黄	14.2 ± a		外周ヨコナテ、ミガキ、内周ナテ、シボリ底	多	多	多	多	外周に赤色顔料	第13次調査区 S155a上層 2	3
7-30	1244	SH93	養生土盤	黄	7.8 ± a		外周ヨコナテ、ミガキ、M字突起内周ナテ	多	多	多	多	外周に赤色顔料外周にスス付着	第13次調査区 S150a上層 1	1
7-30	1245	SH93	養生土盤	黄	6.7 ± a	(21.2)	外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ	少	多	少	少	内周面にスス付着	第13次調査区 S150	13
7-30	1246	SH93	養生土盤	黄	2.8 ± a	8.0	外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ	多	多	多	多		第13次調査区 S150a上層 2	1
7-30	1247	SH93	養生土盤	黄	6.6 ± a	(7.2)	外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ	多	多	多	多		第13次調査区 S150	10
7-30	1248	SH93	養生土盤	黄	6.5 ± a	(11.2)	外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ、撥汗底	少	多	多	多		第13次調査区 S150	2
7-30	1249	SH93	養生土盤	黄	7.1 ± a	(17.0)	外周ヨコナテ、ミガキ内周ナテ	多	多	多	多	内周面に一部赤色顔料	第13次調査区 S150c	
7-30	1258	SH95	養生土盤	黄			外周ヨコナテ内周ナテ	少	少	少	少		第13次調査区 S140	35
7-30	1259	SH95	養生土盤	黄			外周ヨコナテ内周ナテ	少	多				第13次調査区 S100	134
7-30	1260	SH95	養生土盤	黄			外周ヨコナテ、ミガキ内周ナテ	少	多			内周面に赤色顔料	第13次調査区 S140	107
7-30	1261	SH93	養生土盤	黄	(30.0)		外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ	少	多				第13次調査区 S100	134
7-30	1262	SH95	養生土盤	黄	(28.8) 7.8 ± a		外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ	多	多	少	少	外周にスス付着	第13次調査区 S140	34・58
7-30	1263	SH95	養生土盤	黄	27.0	32.8 6.0	外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ	多	少	少	多	外周にスス付着	第13次調査区 S100	36・40
7-30	1264	SH95	養生土盤	黄	(25.2) 20.5 ± a	6.2	外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ、撥汗底	少	多	多	多	外周にスス付着	第13次調査区 S140	73・97・124・120
7-30	1265	SH95	養生土盤	黄	(19.8)		外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ	少	多			内周面にスス付着	第13次調査区 S100	110
7-30	1266	SH95	養生土盤	黄	(23.0) 9.6 ± a		外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ、撥汗底	少	多	多	多	外周にスス付着	第13次調査区 S100	9
7-30	1267	SH95	養生土盤	黄	24.0		外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ	少	多				第13次調査区 S100	75・76・77・111・142
7-30	1268	SH95	養生土盤	黄	(98.4) 10.5 ± a		外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ	少	少				第13次調査区 S100	111・116・119・132
7-30	1269	SH95	養生土盤	黄	(31.6) 14.0 ± a		外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ	少	多	少	少	外周にスス付着	第13次調査区 S100	6
7-30	1270	SH95	養生土盤	黄	(33.6) 12.5 ± a		外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ	少	少				第13次調査区 S100	117
7-30	1271	SH95	養生土盤	黄	(37.0) 29.3 ± a		外周ヨコナテ、ハケメ内周ナテ	少	少			外周にスス付着	第13次調査区 S100	43・63・72・82・85・84・87・113
7-30	1272	SH95	養生土盤	黄	29.6		外周ヨコナテ、ハケメ、突起内周ナテ	少	多			外周にスス付着	第13次調査区 S100	133
7-30	1273	SH95	養生土盤	黄	(31.6) 10.1 ± a		外周ヨコナテ、ミガキ、M字突起内周ナテ、ミガキ	少	少	少	少	外周に赤色顔料	第13次調査区 S100	24・66・96

品名	規格	単位	寸法 (mm)			材料・塗料内装	加工			備考	検査内容 (JIS基準)		
			幅	高さ	長さ		内装	外装	仕上げ				
7-34 1274	SH95	養生上巻	巻	175	84 - 21.6	6.4	外装ヨコナデ・ハケメ内装ナデ	少	多		外装に赤色顔料	第13次調査区 S100	140
7-34 1275	SH95	養生上巻	巻		25.3 + e	7.0	外装ヨコナデ・ハケメ内装ナデ・断縁	少	多	少	外装にスス付	第13次調査区 S100	45
7-34 1276	SH95	養生上巻	巻		10.6 + e	(7.0)	外装ヨコナデ・ハケメ内装ナデ	少	多			第13次調査区 S100	120 - 122 - 123
7-34 1277	SH95	養生上巻	巻		14.4 + e	7.5	外装ヨコナデ・ハケメ内装ナデ	少	少			第13次調査区 S100	64 - 99
7-34 1278	SH95	養生上巻	巻		5.4 + e	7.5	外装ヨコナデ・ハケメ内装ナデ	少	少	多		第13次調査区 S100	23
7-34 1279	SH95	養生上巻	巻			6.7	外装ヨコナデ・ハケメ内装ナデ	少	多		外装にスス付	第13次調査区 S100	126
7-34 1280	SH95	養生上巻	巻			6.6	外装ヨコナデ・ハケメ内装ナデ	少	多		外装にスス付	第13次調査区 S100	106
7-34 1281	SH95	養生上巻	巻		5.9 + e	7.0	外装ヨコナデ・ハケメ内装ナデ	少	少			第13次調査区 S100	103
7-34 1282	SH95	養生上巻	巻	(14.6)			外装ヨコナデ・ハケメ内装ナデ・断縁	少	多			第13次調査区 S100	112
7-35 1283	SH95	養生上巻	巻				外装ヨコナデ・ハケメ内装ナデ	多	多		口縁部に絶縁溝付	第13次調査区 S100	
7-35 1284	SH95	養生上巻	巻				外装ヨコナデ内装ナデ	多	少	少		第13次調査区 S100	39
7-35 1285	SH95	養生上巻	巻	(13.2)	10.5	4.6	外装ヨコナデ・ハケメ内装ナデ	少	多			第13次調査区 S100	
7-35 1286	SH95	養生上巻	巻				外装ヨコナデ・ミダキ・突物内装ナデ・ハケメ	少	少			第13次調査区 S100	96
7-35 1287	SH95	養生上巻	巻	(29.8)			外装ヨコナデ・ミダキ・突物内装ナデ・ミダキ	少	多		内外装に赤色顔料	第13次調査区 S100	125 - 127 - 128 - 130
7-35 1288	SH95	養生上巻	巻		11.8 + e	8.4	外装ヨコナデ・ハケメ内装ナデ・断縁	少	少	少	多	第13次調査区 S100	74 - 90 - 100
7-35 1289	SH95	養生上巻	巻	10.0	15.3	12.0	外装ヨコナデ・ハケメ内装ナデ・断縁	少	少	少	多	第13次調査区 S100	3 - 4
7-35 1290	SH95	養生上巻	巻	9.3	15.7	11.3	外装ヨコナデ・ハケメ内装ナデ	少	少			第13次調査区 S100	25 - 126 - 137
7-35 1291	SH95	養生上巻	巻	9.8	16.0	(10.2)	外装ヨコナデ・ハケメ内装ナデ・断縁	少	少	少	多	第13次調査区 S100	80 - 85 - 88
7-35 1292	SH95	養生上巻	巻	9.6	16.9	12.4	外装ヨコナデ・ハケメ内装ナデ・断縁	多	少	多		第13次調査区 S100	2 - 3
7-35 1302	SH96	養生上巻	巻				外装ヨコナデ・ハケメ内装ナデ	少	多		外装にスス付	第13次調査区 S985	96
7-38 1303	SH96	養生上巻	巻		6.2 + e		外装断縁内装断縁	多	多	多		第13次調査区 S985	39
7-38 1304	SH96	養生上巻	巻				外装ヨコナデ・ハケメ内装ナデ	少	少		外装にスス付	第13次調査区 S985	
7-38 1305	SH96	養生上巻	巻				外装ヨコナデ・断縁内装ナデ	少			外装に赤色顔料	第13次調査区 S985	
7-38 1306	SH96	養生上巻	巻				外装ヨコナデ・ミダキ・断縁内装ナデ	少	多		内外装に赤色顔料	第13次調査区 S985	78
7-38 1307	SH96	養生上巻	巻	28.0	4.0 + e		外装ヨコナデ・ハケメ内装ナデ	多	多	少		第13次調査区 S985	41
7-38 1308	SH96	養生上巻	巻	(27.0)	26.5 + e		外装ヨコナデ・ハケメ内装ナデ・断縁	少	少		外装にスス付	第13次調査区 S985	15 - 44 - 45 - 64
7-38 1309	SH96	養生上巻	巻		5.0 + e	6.0	外装ヨコナデ・ハケメ内装ナデ・断縁	多	多	多	外装にスス付	第13次調査区 S985	32
7-38 1310	SH96	養生上巻	巻		7.5 + e	(6.8)	外装ヨコナデ・ハケメ内装ナデ	多	多	多		第13次調査区 S985	3
7-38 1311	SH96	養生上巻	巻		6.4 + e	6.8	外装ヨコナデ・ハケメ内装ナデ・断縁	多	多	少	外装にスス付	第13次調査区 S985	51
7-38 1312	SH96	養生上巻	巻		6.1 + e	6.8	外装ヨコナデ・ハケメ内装ナデ・断縁	多	多	多		第13次調査区 S985	30
7-38 1313	SH96	養生上巻	巻		6.1 + e	7.2	外装ヨコナデ・ハケメ内装ナデ・断縁	多	少	少		第13次調査区 S985	40
7-38 1314	SH96	養生上巻	巻		3.0 + e	5.8	外装ヨコナデ・ハケメ内装ナデ	多	多	多	外装に赤色顔料	第13次調査区 S985	10
7-38 1315	SH96	養生上巻	巻		3.7 + e	6.2	外装ヨコナデ・ハケメ内装ナデ・断縁	多	多	少		第13次調査区 S985	33
7-38 1316	SH96	養生上巻	巻		5.3 + e	(6.0)	外装ヨコナデ内装ナデ	少	多	少		第13次調査区 S985	4
7-38 1317	SH96	養生上巻	巻	(11.6)	5.6 + e		外装ヨコナデ・ハケメ・断縁内装ナデ	少	多	多	絶縁管付	第13次調査区 S985	62
7-38 1318	SH96	養生上巻	巻		6.0 + e		外装ヨコナデ内装ナデ	多	多	多	外装に赤色顔料	第13次調査区 S985	2
7-38 1319	SH96	養生上巻	巻		12.3 + e		外装ヨコナデ・ミダキ・突物内装ナデ・断縁	少	少	多	外装に赤色顔料	第13次調査区 S985	83
7-40 1322	SH97	養生上巻	巻	(33.4)	8.1 + e		外装ヨコナデ内装ナデ	少	少			第13次調査区 S980	30
7-40 1323	SH97	養生上巻	巻			2.0	外装ヨコナデ・ミダキ・突物内装ナデ	少	多		内外装に赤色顔料口縁部付寸大	第13次調査区 S980	81
7-40 1324	SH97	養生上巻	巻	(17.8)	7.8 + e		外装ヨコナデ・ハケメ内装ナデ	多	多	少	外装にスス付	第13次調査区 S980	61
7-40 1325	SH97	養生上巻	巻	19.6			外装ヨコナデ・ハケメ内装ナデ	少	多		外装にスス付	第13次調査区 S980	54 - 57 - 58
7-40 1326	SH97	養生上巻	巻	(24.6)	11.7 + e		外装ヨコナデ内装ナデ	少	少			第13次調査区 S980	32

品名	規格	単位	数量			単位	品名	規格	単位	数量	品名	規格	単位	数量	品名	規格	単位	数量
			数量	数量	数量													
7-40	1327	SH97	養生土脚	巻	(26.6)		外覆ロコナデ・ハケメ内蓋ナデ			少	多							第13次調査区 S080
7-40	1328	SH97	養生土脚	巻	(30.2)		外覆ロコナデ・ハケメ内蓋ナデ			少	多			外覆にスス付巻				第13次調査区 S090
7-40	1329	SH97	養生土脚	巻	26.4	30.4+α	外覆ロコナデ・ハケメ内蓋ナデ			少	多	少	少	外覆にスス付巻				第13次調査区 S090
7-40	1330	SH97	養生土脚	巻	(15.8)	6.4+α	外覆ロコナデ・ハケメ内蓋ナデ			少	多	少	少	外覆にスス付巻				第13次調査区 S080
7-40	1331	SH97	養生土脚	巻	(23.8)	9.5+α	外覆ロコナデ・ハケメ内蓋ナデ			少	多	少	少	外覆にスス付巻				第13次調査区 S080
7-40	1332	SH97	養生土脚	巻		15.3+α	6.0	外覆ロコナデ・ミガキ内蓋ナデ・帯圧巻		多	多	少	多	外覆に赤色顔料				第13次調査区 S080
7-40	1333	SH97	養生土脚	巻		16.0+α	6.0	外覆ロコナデ・ハケメ内蓋ナデ・帯圧巻		少	多	少	多	外覆にスス付巻				第13次調査区 S080
7-41	1334	SH97	養生土脚	巻		2.1+α	4.6	外覆ロコナデ・ハケメ内蓋ナデ		少	多							第13次調査区 S080
7-41	1335	SH97	養生土脚	巻		4.3+α	6.0	外覆ロコナデ・ミガキ内蓋ナデ		少	少			外覆に赤色顔料				第13次調査区 S080
7-41	1336	SH97	養生土脚	巻		3.2+α	(7.6)	外覆ロコナデ・ミガキ内蓋ナデ		少	少			内外覆に赤色顔料				第13次調査区 S080
7-41	1337	SH97	養生土脚	巻		3.5+α	6.6	外覆ロコナデ・ミガキ内蓋ナデ		少	少	少	少	外覆に赤色顔料・帯圧にスス付巻				第13次調査区 S080
7-41	1338	SH97	養生土脚	巻		3.6+α	6.0	外覆ロコナデ・ハケメ内蓋ナデ		少	少	少	少	外覆にスス付巻				第13次調査区 S080
7-41	1339	SH97	養生土脚	巻		6.5+α	(6.4)	外覆ロコナデ・ハケメ内蓋ナデ・帯圧巻		多	多	多	多	外覆にスス付巻				第13次調査区 S080
7-41	1340	SH97	養生土脚	巻		6.3+α	(7.4)	外覆ロコナデ・ハケメ内蓋ナデ		多	少							第13次調査区 S080
7-41	1341	SH97	養生土脚	巻			6.8	外覆ロコナデ・ハケメ内蓋ナデ		多	多							第13次調査区 S080
7-41	1342	SH97	養生土脚	巻		6.2+α	7.6	外覆ロコナデ・ハケメ内蓋ナデ		少	少			外覆にスス付巻				第13次調査区 S080
7-41	1343	SH97	養生土脚	巻		6.3+α	5.8	外覆ロコナデ・ハケメ内蓋ナデ・帯圧巻		多	多	多	少					第13次調査区 S080
7-41	1344	SH97	養生土脚	巻			6.5	外覆ロコナデ・ハケメ内蓋ナデ		少	多			外覆にスス付巻				第13次調査区 S080
7-41	1345	SH97	養生土脚	巻			6.5	外覆ロコナデ・ハケメ内蓋ナデ		少	多			内外覆にスス付巻				第13次調査区 S080
7-41	1346	SH97	養生土脚	巻		6.1+α	6.6	外覆ロコナデ・ハケメ内蓋ナデ		少	少							第13次調査区 S080
7-41	1347	SH97	養生土脚	巻				外覆ロコナデ・ミガキ・鉛字塗布内蓋ナデ		少	多		少					第13次調査区 S080
7-41	1348	SH97	養生土脚	巻	(9.0)	5.5	5.2	外覆ロコナデ・クズリ・帯圧巻内蓋ナデ・帯圧巻		多	多	多	多	内外覆にスス付巻				第13次調査区 S080
7-41	1349	SH97	養生土脚	巻	5.3	6.3		外覆ロコナデ・帯圧巻内蓋ナデ・帯圧巻		少	少	少	多					第13次調査区 S080
7-41	1350	SH97	養生土脚	巻	(7.6)	16.2	(11.0)	外覆ロコナデ・ハケメ内蓋ナデ		少	多							第13次調査区 S080
7-43	1357	SH98	養生土脚	巻	25.2			外覆ロコナデ・ハケメ内蓋ナデ		少	多			外覆にスス付巻				第13次調査区 S045生穴1 帯圧巻
7-43	1356	SH98	養生土脚	巻			6.1	外覆ロコナデ・ハケメ内蓋ナデ		多	多			外覆にスス付巻				第13次調査区 S045
7-43	1359	SH98	養生土脚	巻			7.6	外覆ロコナデ・ハケメ内蓋ナデ		少	多			内外覆にスス付巻				第13次調査区 S045 帯圧巻
7-43	1360	SH98	養生土脚	巻			7.2	外覆ロコナデ・ミガキ内蓋ナデ		多	多			外覆に赤色顔料				第13次調査区 S045
7-43	1361	SH98	養生土脚	巻	(20.4)			外覆ロコナデ・クズリ・ハケメ内蓋ナデ		少	多			外覆にスス付巻				第13次調査区 S045
7-46	1368	SH100	養生土脚	巻				外覆ロコナデ内蓋ナデ		少	少							第13次調査区 S020 P1
7-46	1369	SH100	養生土脚	巻		6.5+α	7.4	外覆ロコナデ・ハケメ内蓋ナデ・帯圧巻		多	少	多						第13次調査区 S020 P2
7-46	1370	SH100	養生土脚	巻	(12.8)	14.1	8.8	外覆ロコナデ・ミガキ内蓋ナデ・シボリ紙		少	少	少						第13次調査区 S020 P2
7-46	1371	SH100	養生土脚	巻		15.4+α	(14.6)	外覆ロコナデ・ミガキ内蓋ナデ・シボリ紙		少	少							第13次調査区 S025・S020
7-49	1373	SH101	養生土脚	巻	17.0	18.1	6.4	外覆ロコナデ・ハケメ内蓋ナデ		少	少		少					第13次調査区 S025
7-49	1374	SH101	養生土脚	巻				外覆ロコナデ・ハケメ内蓋ナデ		少	少							第13次調査区 S025
7-49	1375	SH101	養生土脚	巻				外覆ロコナデ・ハケメ内蓋ナデ		少	少							第13次調査区 S025
7-52	1377	SH103	養生土脚	巻				外覆ロコナデ・ハケメ内蓋ナデ		少	多							第13次調査区 S026
7-52	1378	SH103	養生土脚	巻	(24.6)	6.1+α		外覆ロコナデ・ハケメ内蓋ナデ		少	少							第13次調査区 S026
7-52	1379	SH103	養生土脚	巻		3.5+α	5.6	外覆ロコナデ・ハケメ内蓋ナデ・工具巻・帯圧巻		少	少							第13次調査区 S026
7-52	1380	SH103	養生土脚	巻		5.7+α	(10.5)	外覆ロコナデ・ハケメ内蓋ナデ・シボリ紙		少	少							第13次調査区 S026



品名	規格	単位	寸法 (mm)			重量 (g)	色別			備考	検査項目・検査方法
			寸法	寸法	寸法		色別	色別	色別		
7-77 1408	SK299	衛生土器	男		24±e	外蓋ヨコナテ、内蓋内蓋ナテ	少	少	少		第13次調査区 S288
7-77 1409	SK299	衛生土器	男		60±e	外蓋ヨコナテ、内蓋ナテ	多	多	多		第13次調査区 S288
7-77 1430	SK299	衛生土器	男	(26.6)	11.5±e	外蓋ヨコナテ、ハケメ内蓋ナテ	少	少	少	外蓋にスス付着	第13次調査区 S288、S289、S290、S291
7-77 1431	SK299	衛生土器	男		5.1±e	70 外蓋ヨコナテ、ハケメ内蓋ナテ	多	多	多		第13次調査区 S288
7-77 1432	SK299	衛生土器	男		5.8±e	90 外蓋ヨコナテ、ハケメ内蓋ナテ	多	多	多		第13次調査区 S288
7-77 1433	SK299	衛生土器	女		5.8±e	外蓋ヨコナテ、ミガキ内蓋ナテ、ミガキ	少	少	少	内外面に着色顔料	第13次調査区 S289
7-79 1426	SK300	衛生土器	男	(20.2)	4.2±e	外蓋ヨコナテ内蓋ナテ	多	多	多		第13次調査区 S270
7-79 1436	SK300	衛生土器	男	(32.0)	9.5±e	外蓋ヨコナテ、ハケメ、内蓋ナテ	少	少	多	外蓋にスス付着	第13次調査区 S270
7-79 1437	SK300	衛生土器	男		9.2±e	外蓋ヨコナテ、ハケメ、内蓋ナテ	少	多	少		第13次調査区 S270
7-79 1438	SK300	衛生土器	男		3.0±e	60 外蓋ヨコナテ内蓋ナテ	少	少	多		第13次調査区 S270
7-81 1140	SK301	衛生土器	男	(26.4)	19.0±e	外蓋ヨコナテ、ハケメ、内蓋ナテ	多	多	多		第13次調査区 S245
7-83 1441	SK302	衛生土器	男	(24.6)	5.0±e	外蓋ヨコナテ、ハケメ内蓋ナテ	多	多	多		第13次調査区 S245
7-83 1442	SK302	衛生土器	女	(26.6)	6.9±e	外蓋ヨコナテ、ハケメ内蓋ナテ	多	多	多		第13次調査区 S245
7-83 1443	SK302	衛生土器	男	(27.0)	9.6±e	外蓋ヨコナテ、ハケメ内蓋ナテ	多	多	多	外蓋にスス付着	第13次調査区 S245
7-83 1444	SK302	衛生土器	男		13.0±e	(13.0) 外蓋ヨコナテ、ハケメ内蓋ナテ	多	多	多		第13次調査区 S245
7-85 1445	SK303	衛生土器	女		13.1±e	13.1 外蓋ヨコナテ、ミガキ、内蓋ナテ	少	少	少	外蓋に着色顔料	第13次調査区 S235、S245-1格、S220
7-85 1446	SK303	衛生土器	男		11.0±e	18.7 外蓋ヨコナテ、ミガキ内蓋ナテ	少	少	少	内面に着色顔料	第13次調査区 S235、S220
7-85 1447	SK303	衛生土器	男	(28.2)	8.3±e	外蓋ヨコナテ、ハケメ内蓋ナテ	少	少	少		第13次調査区 P-7 S235
7-85 1448	SK303	衛生土器	女		5.3±e	(6.2) 外蓋ヨコナテ、ハケメ内蓋ナテ	少	少	少	外蓋にスス付着	第13次調査区 P-7 S235
7-85 1449	SK303	衛生土器	男		4.5±e	外蓋ヨコナテ内蓋ナテ	少	少	少		第13次調査区 S235
7-85 1450	SK303	衛生土器	女		1.7±e	外蓋ヨコナテ内蓋ナテ	少	少	少		第13次調査区 S235
7-86 1481	SK304	衛生土器	長身型		8.2±e	92 外蓋ヨコナテ、ミガキ、内蓋ナテ	少	少	少	内外面に着色顔料	第13次調査区 S220
7-86 1452	SK304	衛生土器	男		5.4±e	(5.8) 外蓋ヨコナテ、ハケメ内蓋ナテ	少	少	少		第13次調査区 S220
7-86 1453	SK304	衛生土器	男		6.35±e	(6.5) 外蓋ヨコナテ、ハケメ内蓋ナテ	少	少	少	外蓋にスス付着	第13次調査区 S220
7-86 1454	SK304	衛生土器	女		8.8±e	(6.5) 外蓋ヨコナテ、ハケメ内蓋ナテ	多	多	多	外蓋にスス付着	第13次調査区 S220
7-86 1455	SK304	衛生土器	男		10.3±e	(6.0) 外蓋ヨコナテ、ハケメ内蓋ナテ、無任直	多	多	多		第13次調査区 S220
7-86 1456	SK304	衛生土器	男	(20.6)	17.1±e	外蓋ヨコナテ、ハケメ、内蓋ナテ	多	多	多	外蓋にスス付着	第13次調査区 S220
7-88 1488	SK305	衛生土器	男	(27.8)	8.8±e	外蓋ヨコナテ、無任直内蓋ナテ、取付直	少	多	少		第13次調査区 S240
7-88 1459	SK305	衛生土器	男	(40.6)	9.1±e	外蓋ヨコナテ内蓋ナテ	少	少	少		第13次調査区 S240
7-88 1460	SK305	衛生土器	男	(22.0)	7.8±e	外蓋ヨコナテ、ハケメ内蓋ナテ	多	多	多		第13次調査区 S240
7-88 1461	SK305	衛生土器	男		16.8±e	9.6 外蓋ヨコナテ、ハケメ内蓋ナテ、取付直	少	少	少		第13次調査区 S240
7-88 1462	SK305	衛生土器	女		6.3±e	9.0 外蓋ヨコナテ、内蓋ナテ	多	少	多		第13次調査区 S240
7-88 1463	SK305	衛生土器	男		5.0±e	6.6 外蓋ヨコナテ、ハケメ内蓋ナテ	多	多	多		第13次調査区 S240
7-88 1464	SK305	衛生土器	男		8.5±e	6.2 外蓋ヨコナテ、ハケメ内蓋ナテ、取付直	多	多	多		第13次調査区 S240
7-88 1465	SK305	衛生土器	男		7.8±e	(10.8) 外蓋ヨコナテ、ハケメ内蓋ナテ	多	多	多		第13次調査区 S240
7-88 1466	SK305	衛生土器	男		13.3±e	(10.6) 外蓋ヨコナテ、ハケメ内蓋ナテ、取付直	少	少	少		第13次調査区 S240
7-88 1467	SK305	衛生土器	女		7.2±e	(10.8) 外蓋ヨコナテ、ハケメ内蓋ナテ、取付直	少	少	少		第13次調査区 S240
7-90 1469	SK306	衛生土器	女		9.1±e	8.8 外蓋ヨコナテ、ハケメ内蓋ナテ	少	少	少		第13次調査区 S190
7-92 1470	SK307	衛生土器	女	(25.4)	15.1±e	外蓋ヨコナテ、ハケメ内蓋ナテ	多	少	少	外蓋にスス付着	第13次調査区 S160
7-92 1471	SK307	衛生土器	男	(29.8)	15.0±e	外蓋ヨコナテ、ハケメ内蓋ナテ	少	少	少		第13次調査区 S160

年度	品目	品名	単位	平成 3 年度			産地・産地の特長	品質				備考	調査対象の生産者		
				生産量	生産額	単価		糖度	糖比	糖比	糖比			糖比	
7-96	1472	SK307	養生土糖	電	138+e	7.0	外産ヨコナテ、ミガキ内産ナテ	多	多	多	多	外産に赤色原料	第13次調査区 S190	7-11	
7-96	1473	SK310	養生土糖	電	274	342	7.0	外産ヨコナテ、ハケメ内産ナテ	多	多	多	外産にスス付糖	第13次調査区 S191	1-33	
7-96	1474	SK310	養生土糖	電	(194)	112+e		多	多	多	少		第13次調査区 S191	9	
7-96	1475	SK310	養生土糖	電	(256)	149+e		多	多	多	少		第13次調査区 S191	14-16	
7-96	1476	SK310	養生土糖	電	262	119+e	8.0	外産ヨコナテ、ミガキ内産ナテ	少	少	少	少	外産に赤色原料	第13次調査区 S191	28
7-96	1477	SK310	養生土糖	電	103+e	7.3	外産ヨコナテ、ハケメ内産ナテ、鹿児島産	多	多	多	多		第13次調査区 S191	26	
7-300	1480	SK312	養生土糖	電	(28.1)	105+e		多	多	多	多	外産にスス付糖	第13次調査区 S192	3	
7-100	1481	SK312	養生土糖	電	63+e		外産ヨコナテ、ミガキ内産ナテ	多	少	少	少	外産に赤色原料	第13次調査区 S192	8	
7-300	1482	SK312	養生土糖	電	62+e	7.6	外産ヨコナテ、ハケメ内産ナテ	少	少	少	少		第13次調査区 S192		
7-101	1484	SK313	養生土糖	電	(27A)	53+e		少	少	少	少	外産に赤色原料	第13次調査区 S193	3	
7-101	1485	SK313	養生土糖	電	32+e	(9A)		多	多	多	多		第13次調査区 S194	8	
7-105	1485	SK314	養生土糖	電	1.6+e		外産ヨコナテ、ミガキ内産ナテ、ミガキ	多	少	少	多	内産に赤色原料	第13次調査区 S219	2	
7-103	1487	SK314	養生土糖	電	95+e		外産ヨコナテ、ミガキ、兵庫県内産ナテ	少	少	少	多	内産に赤色原料	第13次調査区 S219	3	
7-103	1488	SK314	養生土糖	電	83+e	7.2	外産ヨコナテ、ハケメ内産ナテ、鹿児島産	多	多	少	多		第13次調査区 S219	8	
7-102	1489	SK314	養生土糖	電	85+e	7.0	外産ヨコナテ、ハケメ内産ナテ、鹿児島産	多	多	多	多		第13次調査区 S219	5-11	
7-105	1490	SK315	養生土糖	電	171+e		外産ヨコナテ、ミガキ内産ナテ	多	多	多	多	外産に赤色原料	第13次調査区 S196、S192	9-45、58 (S196)	
7-105	1491	SK315	養生土糖	電	94+e		外産ヨコナテ内産ナテ	少	多	少	少		第13次調査区 S196	27	
7-105	1492	SK315	養生土糖	電	71+e	6.6	外産ヨコナテ、ハケメ内産ナテ	少	多	少	少	内産にスス付糖	第13次調査区 S196	48	
7-105	1493	SK315	養生土糖	電	(242)	100+e		多	少	少	少	外産にスス付糖	第13次調査区 S196	60	
7-105	1494	SK315	養生土糖	電	1&1	224	8.0	外産ヨコナテ、ハケメ内産ナテ	多	多	多	多	外産にスス付糖	第13次調査区 S196	41
7-105	1495	SK315	養生土糖	電	(33A)	259+e		少	少	少	少	外産に赤色原料	第13次調査区 F-9 S196	42	
7-105	1496	SK313	養生土糖	電	142+e	10&	外産ヨコナテ、ハケメ内産ナテ、鹿児島産	多	多	多	多	外産にスス付糖	第13次調査区 S196、S192	32-59	
7-105	1497	SK315	養生土糖	電	(28A)	118+e		少	少	少	少		第13次調査区 S196	32-59	
7-105	1498	SK315	養生土糖	電	(24B)	293	7.3	外産ヨコナテ、ハケメ、鹿児島産内産ナテ、鹿児島産	多	多	多	多		第13次調査区 S192、S196	60 (S196)
7-105	1499	SK315	養生土糖	電	45.6	381	10.4	外産ヨコナテ、ハケメ内産ナテ	少	多	少	少	外産にスス付糖	第13次調査区 S196	8-7、8-9、11-12、14-15、16-17、18-19、20-23、24-25、26-28、29-35、36-39、40-43、62
7-107	1500	SK316	養生土糖	電	180+e		外産ヨコナテ、ミガキ、M宇内産ナテ	多	多	多	多	外産に赤色原料	第13次調査区 S148	17	
7-107	1501	SK316	養生土糖	電	182+e	8.6	外産ヨコナテ、ミガキ内産ナテ	多	多	多	多	外産にスス付糖	第13次調査区 S148	10	
7-107	1502	SK316	養生土糖	電	(280)	89+e		多	多	多	多	外産にスス付糖	第13次調査区 S148	16	
7-107	1503	SK316	養生土糖	電	(28.4)	89+e		多	多	多	少		第13次調査区 S148	1	
7-107	1504	SK316	養生土糖	電	(30A)	184+e		少	多	少	少		第13次調査区 S148	27	
7-109	1506	SK317	養生土糖	電	20+e		外産ヨコナテ、ミガキ内産ナテ、ミガキ	多	多	多	少	外産に赤色原料	第13次調査区 S145		
7-109	1507	SK317	養生土糖	電	50+e		外産ヨコナテ、ハケメ内産ナテ	多	多	多	多		第13次調査区 S145		
7-109	1508	SK317	養生土糖	電	30+e	10.7	外産ヨコナテ内産ナテ	少	多	少	少		第13次調査区 S145	7	
7-109	1509	SK317	養生土糖	電	64+e	7.8	外産ヨコナテ、ハケメ内産ナテ	多	多	多	多		第13次調査区 S148	20	
7-300	1510	SK317	養生土糖	電	79+e	6.4	外産ヨコナテ、ハケメ内産ナテ	少	多	少	少		第13次調査区 S145	4	
7-109	1511	SK317	養生土糖	電	52+e	(150)	外産ヨコナテ、ハケメ内産ナテ	少	多	少	少		第13次調査区 S145	5	
7-111	1513	SK318	養生土糖	電	93+e		外産ヨコナテ内産ナテ	少	多	少	少		第13次調査区 S194	9	
7-111	1514	SK318	養生土糖	電	76+e		外産ヨコナテ、ハケメ内産ナテ	少	多	少	少		第13次調査区 S194		
7-111	1515	SK318	養生土糖	電	(19.8)	137+e		多	多	多	多		第13次調査区 S194	6	



品名	規格	用途	寸法 (mm)			重量 (kg)	備考	加工				備考	規格	単位	
			幅	厚	長さ			形状	表面	裏面	側面				その他
7-111	1516	SK318	張生土粉	藍	(24.6)	7.0±e		外周ヨコナテ・ハケメ内周ナテ	多	多	多	多		第13次調査区 S184	2
7-111	1517	SK318	張生土粉	藍	(26.2)	8.0±e		外周ヨコナテ・ハケメ内周ナテ	多	多	多	多	内周面に赤色顔料	第13次調査区 S184	5
7-111	1518	SK318	張生土粉	藍	(27.2)	8.0±e		外周塗成内周ナテ	少	多	少			第13次調査区 S184・S184・補	8
7-111	1519	SK318	張生土粉	藍	(28.0)	10.0±e		外周ヨコナテ・ハケメ内周ナテ	多	多	多			第13次調査区 S184	1
7-111	1520	SK318	張生土粉	藍	(34.0)	8.5±e		外周ヨコナテ・ハケメ内周ナテ	多	多	多			第13次調査区 S184	2
7-112	1521	SK319	張生土粉	藍	5.6	6.0±e		外周ヨコナテ内周ナテ・指圧痕	多	多	多			第13次調査区 S120	
7-112	1522	SK319	張生土粉	藍		6.5±e		外周ヨコナテ・ハケメ内周ナテ	多	多	少			第13次調査区 S120	1
7-112	1523	SK319	張生土粉	藍		12.5±e	(30.2)	外周ヨコナテ・両面内周ナテ・指圧痕	少	多	少	少		第13次調査区 S120	4・5・15
7-112	1524	SK319	張生土粉	藍		7.1±e	(6.6)	外周ヨコナテ・ミガキ内周ナテ	多	多	少			第13次調査区 S120	1
7-112	1525	SK319	張生土粉	藍		3.4±e	5.8	外周ヨコナテ・ハケメ内周ナテ	多	多	多			第13次調査区 S120	14
7-112	1526	SK319	張生土粉	藍		9.2±e	(5.8)	外周ヨコナテ内周ナテ	多	多	多	多		第13次調査区 S120	13
7-114	1528	SK320	張生土粉	藍	(28.2)			外周ヨコナテ内周ナテ	多	多				第13次調査区 S113	7
7-114	1529	SK320	張生土粉	藍	(26.8)	2.0±e		外周ヨコナテ内周ナテ・ミガキ	多	多	少	少		第13次調査区 S113	26
7-114	1530	SK320	張生土粉	藍	(26.0)	4.3±e		外周ヨコナテ・緩字塗布・割目内周ナテ	少	少	多	多	外周に赤色顔料	第13次調査区 S113	22
7-114	1531	SK320	張生土粉	藍	(26.2)			外周ヨコナテ・ハケメ・両面内周ナテ	少	多				第13次調査区 S113	28・31・33・37・38
7-114	1532	SK320	張生土粉	藍	(29.4)			外周ヨコナテ内周ナテ	少	多				第13次調査区 S113	3
7-114	1533	SK320	張生土粉	藍	(25.2)	11.4±e		外周ヨコナテ・緩字突起内周ナテ	多	多	多	多		第13次調査区 S113	15
7-114	1534	SK320	張生土粉	藍	(15.8)	14.7	6.4	外周ヨコナテ・ミガキ内周ナテ	少	少	多	少	内周面に赤色顔料	第13次調査区 S113	5
7-114	1535	SK320	張生土粉	藍		4.1±e	8.1	外周ヨコナテ内周ナテ	多	多	多			第13次調査区 S113	28
7-114	1536	SK320	張生土粉	藍		5.7±e	7.4	外周ヨコナテ・ハケメ内周ナテ	多	多	多	多	外周にスス付	第13次調査区 S113	
7-114	1387	SK320	張生土粉	藍		5.8±e	7.4	外周ヨコナテ・ハケメ内周ナテ	多	多	多	多		第13次調査区 S113	21
7-114	1538	SK320	張生土粉	藍			7.7	外周ヨコナテ・ハケメ内周ナテ	少	多			内周面にスス付	第13次調査区 S113	41
7-114	1539	SK320	張生土粉	藍白	8.8	16.4	10.4	外周ヨコナテ・ハケメ内周ナテ・指山	少	少	少	少		第13次調査区 S113	27・30・32
7-114	1540	SK320	張生土粉	藍白	8.6	14.4	10.0	外周ヨコナテ・ハケメ内周ナテ・指圧痕	少	多	少	少	外周にスス付	第13次調査区 S101	31・34・39・40
7-116	1543	SK321	張生土粉	藍	(28.0)			外周ヨコナテ・ハケメ内周ナテ	少	多			外周にスス付	第13次調査区 S101	
7-116	1544	SK321	張生土粉	藍			(8.2)	外周ヨコナテ内周ナテ	少	多				第13次調査区 S101	
7-118	1545	SK322	張生土粉	藍		10.8±e		外周ヨコナテ・ハケメ・M字突布内周ナテ・指圧痕	少	少				第13次調査区 S062	16
7-118	1546	SK322	張生土粉	藍	(27.6)			外周ヨコナテ・ハケメ内周ナテ	少	多			外周にスス付	第13次調査区 S082	1
7-118	1547	SK322	張生土粉	藍	(22.0)			外周ヨコナテ・ミガキ・両面内周ナテ・ミガキ	多	多				第13次調査区 S082	3・4・5・7・8・10
7-118	1548	SK322	張生土粉	藍	(27.6)			外周ヨコナテ・ハケメ内周ナテ	少	多				第13次調査区 S082	6
7-118	1549	SK322	張生土粉	藍白			(10.6)	外周ヨコナテ内周ナテ	少	多				第13次調査区 S080	12
7-120	1551	SK323	張生土粉	高坪				外周ヨコナテ・ミガキ内周ナテ・シロ付	少	多			外周に赤色顔料	第13次調査区 S078	
7-122	1552	SK324	張生土粉	藍				外周ヨコナテ・ハケメ内周ナテ	少	少				第13次調査区 S086	7
7-122	1554	SK324	張生土粉	藍	(20.4)	7.9±e		外周ヨコナテ・ハケメ内周ナテ	少	少				第13次調査区 S086	
7-122	1555	SK324	張生土粉	藍	26.0	9.0±e		外周ヨコナテ・ハケメ内周ナテ	少	少				第13次調査区 S086	4
7-122	1560	SK324	張生土粉	藍	(30.0)	10.8±e		外周ヨコナテ・ハケメ内周ナテ	少	少	少		外周にスス付	第13次調査区 S086	1
7-125	1560	SK325	張生土粉	藍	(17.8)			外周ヨコナテ・ミガキ内周ナテ・ミガキ	多	多			外周にスス付	第13次調査区 S057	8
7-125	1561	SK326	張生土粉	藍				外周ヨコナテ・ハケメ内周ナテ	少	多				第13次調査区 S057	
7-125	1562	SK326	張生土粉	藍	(24.4)	25.0	(7.6)	外周ヨコナテ・ハケメ内周ナテ・指圧痕	多	多	少	多	外周にスス付	第13次調査区 S057	2・4・6・7・27
7-125	1563	SK326	張生土粉	藍	(29.0)			外周ヨコナテ・ミガキ・ハケメ内周ナテ	少	多			外周にスス付	第13次調査区 S057	14
7-125	1564	SK326	張生土粉	藍			5.8	外周ヨコナテ・ミガキ内周ナテ	多	多			外周にスス付	第13次調査区 S057	

種別	品番	名称	規格	容積 (L)			原料・調剤の状況	有効成分				用法	承認年月日(平成)		
				内容	総量	単位		有効成分名	含有率	剤形	承認				
7-127	1565	SK327	当牛土器	坐	20.6	121+e	外用ヨコナダ・ハケメ内服ナダ	多	多	多	多	外用にスス付	第13次調査区 S061	1	
7-127	1566	SK327	当牛土器	座	27.0		外用ヨコナダ・ハケメ内服ナダ	少	多				第13次調査区 S061	4	
7-127	1567	SK327	当牛土器	座	28.6		外用ヨコナダ・ハケメ内服ナダ	少	多				第13次調査区 S061	8	
7-127	1568	SK327	当牛土器	座	22.6	26.5	6.6	外用ヨコナダ・ハケメ内服ナダ	少	少			第13次調査区 S061	2	
7-127	1569	SK327	当牛土器	座		7.0		外用ヨコナダ・ハケメ内服ナダ	少	多			第13次調査区 S061	7-8	
7-127	1570	SK327	当牛土器	座	15.0+e	11.2		外用ヨコナダ・ハケメ内服ナダ	少	少	多		第13次調査区 S061	8	
7-127	1371	SK327	当牛土器	洗剤	(21.6)	11.4	5.1	外用ヨコナダ・ハケメ内服ナダ・指圧板	少	多	多	外用にスス付	第13次調査区 S081	3	
7-129	1374	SK328	当牛土器	座	12.5+e	7.0		外用ヨコナダ・ミガキ内服ナダ	多	多	多	多	第13次調査区 S038 P7		
7-129	1375	SK328	当牛土器	座	9.8	16.8	11.0	外用ヨコナダ・ハケメ内服ナダ・指圧板	多	多	少	少	第13次調査区 S038 P6		
7-129	1576	SK328	当牛土器	座	(28.4)	16.0+e		外用ヨコナダ・ハケメ内服ナダ	多	多	多	多	外用にスス付	第13次調査区 S038 P2 P10	
7-129	1577	SK328	当牛土器	座	12.5+e	(6.4)		外用ヨコナダ・ハケメ内服ナダ	多	多	少	多	外用にスス付	第13次調査区 S038 P8 P9	
7-131	1578	SK329	当牛土器	座	6.4+e	8.6		外用ヨコナダ・ハケメ内服ナダ	多	多	少	多		第13次調査区 S044 P4	
7-133	1581	SK330	当牛土器	座		8.4		外用ヨコナダ・ハケメ内服ナダ	多	多				第13次調査区 S072	36
7-133	1582	SK330	当牛土器	座	(8.0)	5.7+e		外用ヨコナダ・ミガキ内服ナダ	少	少				第13次調査区 S072	
7-133	1383	SK330	当牛土器	座		8.2+e	(8.8)	外用ヨコナダ・ミガキ内服ナダ	多	多	多	多	外用に着色剤	第13次調査区 S072	17-18
7-133	1584	SK330	当牛土器	座	(17.8)			外用ヨコナダ・ハケメ内服ナダ	少	多			外用にスス付	第13次調査区 S072	30-36-37
7-133	1585	SK330	当牛土器	座	(8.0)	5.7+e		外用ヨコナダ・ミガキ内服ナダ	少	少				第13次調査区 S072	
7-133	1586	SK330	当牛土器	座	27.4			外用ヨコナダ・ハケメ内服ナダ	多	多			外用にスス付	第13次調査区 S072	25-27-28
7-133	1587	SK330	当牛土器	座	25.0	14.1+e		外用ヨコナダ・ハケメ内服ナダ	少	少				第13次調査区 S072	2-28-30
7-133	1388	SK330	当牛土器	座	(30.8)			外用ヨコナダ・ハケメ内服ナダ	多	多			外用にスス付	第13次調査区 S072	26-77
7-133	1389	SK330	当牛土器	座	(32.4)			外用ヨコナダ・ハケメ内服ナダ	多	多				第13次調査区 S072	32
7-133	1500	SK330	当牛土器	座	(20.6)			外用ヨコナダ・ハケメ内服ナダ	少	多				第13次調査区 S072	29-65
7-133	1501	SK330	当牛土器	座	14.9+e	(6.0)		外用ヨコナダ・ハケメ内服ナダ	多	多	多	多	外用に着色剤	第13次調査区 S072	49-50
7-133	1582	SK330	当牛土器	座	16.9+e	6.7		外用ヨコナダ・ハケメ内服ナダ	多	多	少		外用にスス付	第13次調査区 S072	65
7-134	1593	SK330	当牛土器	座	3.0+e	(8.0)		外用ヨコナダ内服ナダ	多	多	多	多		第13次調査区 S072	1
7-134	1394	SK330	当牛土器	座	3.2+e	6.8		外用ヨコナダ・ミガキ内服ナダ	多	多	少	少	外用に着色剤	第13次調査区 S072-S043	45
7-134	1595	SK330	当牛土器	座	5.1+e	6.6		外用ヨコナダ・ハケメ内服ナダ	多	多	少	多		第13次調査区 S072	33
7-134	1396	SK330	当牛土器	座	7.0+e	6.9		外用ヨコナダ・ハケメ内服ナダ	少	多	多		外用にスス付	第13次調査区 S072	63
7-134	1597	SK330	当牛土器	座	7.2+e	6.5		外用ヨコナダ・ハケメ内服ナダ	少	多				第13次調査区 S072	67
7-134	1598	SK330	当牛土器	座	6.1			外用ヨコナダ・ハケメ内服ナダ	少	多				第13次調査区 S072	76
7-134	1599	SK330	当牛土器	座	13.7+e	9.0		外用ヨコナダ・ハケメ内服ナダ	少	少	多			第13次調査区 S072	14
7-134	1600	SK330	当牛土器	座	18.2	8.7+e		外用ヨコナダ・ミガキ内服ナダ	少	少	多			第13次調査区 S072	60
7-134	1601	SK330	当牛土器	座	18.0	3.8+e		外用ヨコナダ・ミガキ内服ナダ	多	多	多	多	外用に着色剤	第13次調査区 S072	13-18-34
7-134	1602	SK330	当牛土器	座	(27.8)	6.4+e		外用ヨコナダ・ハケメ内服ナダ	多	多	多	多	外用に着色剤	第13次調査区 S072	23
7-134	1603	SK330	当牛土器	座				外用ヨコナダ・ミガキ内服ナダ	少	少	多		外用に着色剤	第13次調査区 S072	38
7-137	1607	SK332	当牛土器	座	11.0+e			外用ヨコナダ・M字交管内服ナダ	多	多	多		外用に着色剤	第13次調査区 S132	
7-137	1608	SK332	当牛土器	座	3.8+e	7.8		外用ヨコナダ・ハケメ内服ナダ	多	多	多			第13次調査区 S132	2
7-137	1609	SK332	当牛土器	座	6.5+e	(7.0)		外用ヨコナダ・ハケメ内服ナダ	多	多	多			第13次調査区 S132	
7-137	1610	SK332	当牛土器	座	(21.2)			外用ヨコナダ・ミガキ内服ナダ	少	少	少		内服に着色剤	第13次調査区 S132	18
7-137	1611	SK332	当牛土器	座	20.2+e	8.0		外用ヨコナダ・ハケメ内服ナダ	少	少	多	多	外用にスス付	第13次調査区 S132	1
7-137	1612	SK332	当牛土器	座	(36.0)	11.1+e		外用ヨコナダ・ハケメ内服ナダ	少	少	少			第13次調査区 S132	6-7
7-137	1613	SK332	当牛土器	座	(28.0)	14.5+e		外用ヨコナダ・ハケメ内服ナダ	少	少	少		外用にスス付	第13次調査区 S132	3

No.	No.	No.	No.	No.	No.			No.			No.	No.			
					No.	No.	No.	No.	No.	No.					
7-137	1614	SK332	赤生土層	砂		13.0+e		130	外層ヨコナデ、ハケメ内層ナデ	多	多	少		第13次調査区 S132	
7-137	1613	SK332	赤生土層	腐珪		13.0+e	(130)		外層ヨコナデ、内層ナデ、シボリ腐	多	多	多	外層に赤色顔料	第13次調査区 S132	
7-140	1617	SK334	赤生土層	砂		4.0+e			外層腐珪質土内層ナデ	多	多	多	少	第13次調査区 S204	
7-140	1618	SK334	赤生土層	腐珪	(32)	4.5+e			外層ヨコナデ、34字突帯内層ナデ	少	多	多	多	第13次調査区 S064	
7-142	1620	SK335	赤生土層	腐珪		21.2+e	6.6		外層ヨコナデ、ハケメ、突帯内層ナデ、粗粒質	多	多	多	多	第13次調査区 S015 P5	
7-142	1621	SK335	赤生土層	腐珪	(15.4)	6.1+e			外層ヨコナデ、ミガキ、掌孔内層ナデ、ミガキ	少	少	多		第13次調査区 S015 P1	
7-142	1622	SK335	赤生土層	腐珪	(15.2)	14.3	7.0		外層ヨコナデ内層ナデ	少	多			第13次調査区 S015	
7-142	1623	SK336	赤生土層	腐珪	16.2	17.0	7.2		外層ヨコナデ、ケズリ、掌孔内層ナデ	多	多	多	多	外層にスス付着	第13次調査区 S015
7-142	1624	SK336	赤生土層	腐珪		7.0+e	(6.6)		外層ヨコナデ、ハケメ内層ナデ	少	少	少		第13次調査区 S015 P6	
7-142	1625	SK336	赤生土層	腐珪	(23.8)	8.9+e			外層ヨコナデ内層ナデ	少	多			第13次調査区 S015 P2	
7-142	1626	SK336	赤生土層	腐珪		26.5			外層ヨコナデ、ハケメ内層ナデ	多	多			第13次調査区 S015 P8	
7-142	1627	SK335	赤生土層	腐珪		28.4			外層ヨコナデ、ハケメ内層ナデ	多	多		外層にスス付着	第13次調査区 S015 P1、S015	
7-142	1628	SK335	赤生土層	腐珪	(29.6)	11.4+e			外層ヨコナデ、ハケメ内層ナデ	多	多	少	外層にスス付着	第13次調査区 S015 P1、S015	
7-142	1629	SK335	赤生土層	腐珪	(29.6)	12.5+e			外層ヨコナデ、ハケメ内層ナデ	少	少		外層にスス付着	第13次調査区 S015 P1、S015	
7-142	1630	SK336	赤生土層	腐珪	(31.6)				外層ヨコナデ、ハケメ内層ナデ	少	多			第13次調査区 S015	
7-142	1631	SK336	赤生土層	腐珪	(26.6)				外層ヨコナデ内層ナデ	多	多		外層にスス付着	第13次調査区 S015	
7-142	1632	SK336	赤生土層	腐珪	(30.4)	37.5	7.1		外層ヨコナデ、突帯内層ナデ	多	多		外層にスス付着	第13次調査区 S015	
7-142	1633	SK336	赤生土層	腐珪	(26.0)				外層ヨコナデ、突帯内層ナデ	少	多			第13次調査区 S015	
7-142	1634	SK333	赤生土層	腐珪	(30.6)	6.0+e			外層ヨコナデ、突帯内層ナデ	多	少	少	多	第13次調査区 S015 P38	
7-142	1635	SK333	赤生土層	腐珪	(31.2)	26.6+e			外層ヨコナデ、ハケメ内層ナデ	少	多		外層にスス付着	第13次調査区 S015 P40、P44、P50、P61	
7-142	1636	SK335	赤生土層	腐珪	(30.4)				外層ヨコナデ、ハケメ内層ナデ	少	多		外層にスス付着	第13次調査区 S015	
7-142	1637	SK336	赤生土層	腐珪	(21.0)	13.0+e			外層ヨコナデ、ハケメ内層ナデ	少	多	少	多	第13次調査区 S015 P28	
7-142	1638	SK336	赤生土層	腐珪	(23.8)	30.8	(7.4)		外層ヨコナデ、ハケメ内層ナデ	多	少	多		第13次調査区 S015 P19	
7-144	1639	SK336	赤生土層	腐珪		6.4			外層ヨコナデ、ミガキ内層ナデ	多	多	少	外層にスス付着	第13次調査区 S015	
7-144	1640	SK336	赤生土層	腐珪		6.4			外層ヨコナデ内層ナデ	少	多		内層にスス付着	第13次調査区 S015	
7-144	1641	SK336	赤生土層	腐珪		11.7	6.0		外層ヨコナデ、ハケメ内層ナデ	多	多	多	多	外層にスス付着	第13次調査区 S015 P2、P19
7-144	1642	SK336	赤生土層	腐珪		8.2			外層ヨコナデ、ケズリ内層ナデ	多	多			第13次調査区 S015	
7-144	1643	SK335	赤生土層	腐珪		13.8+e	7.2		外層ヨコナデ、ハケメ内層ナデ	多	多	多	多	第13次調査区 S015 P59	
7-144	1644	SK333	赤生土層	腐珪		10.6			外層ヨコナデ、ハケメ内層ナデ	少	多		外層に赤色顔料	第13次調査区 S015	
7-144	1645	SK333	赤生土層	腐珪	17.7	3.4			外層ヨコナデ、ハケメ内層ナデ、ケズリ、シボリ腐	少	多		内層にスス付着	第13次調査区 S015	
7-144	1646	SK333	赤生土層	腐珪		8.0+e			外層ヨコナデ、ハケメ内層ナデ	多	多	多	外層にスス付着	第13次調査区 S015 P27	
7-144	1647	SK333	赤生土層	腐珪	(21.0)	5.3+e			外層ヨコナデ、ミガキ内層ナデ、ミガキ	少	少	少		第13次調査区 S015 P4	
7-144	1648	SK333	赤生土層	腐珪	(8.6)	10.9+e			外層ヨコナデ、ハケメ内層ナデ	少	少			第13次調査区 S015 P18、P24	
7-144	1649	SK333	赤生土層	腐珪	(8.4)	12.8+e			外層ヨコナデ、ハケメ内層ナデ、ケズリ	少	少	少		第13次調査区 S015 P6	
7-144	1650	SK333	赤生土層	腐珪	(11.6)	17.8	(12.8)		外層ヨコナデ、ハケメ内層ナデ	多	多	少	少	第13次調査区 S015 P63、P62	
7-144	1651	SK333	赤生土層	腐珪		13.4+e	12.8		外層ヨコナデ、ミガキ内層ナデ	少	多	多	多	外層に赤色顔料	第13次調査区 S015 P29
7-147	1636	SK336	赤生土層	腐珪	(27.8)	32.4	(8.8)		外層ヨコナデ、ハケメ内層ナデ	少	少	少		第13次調査区 S065	
7-147	1639	SK336	赤生土層	腐珪	9.8	15.4	10.0		外層ヨコナデ内層ナデ、粗粒質	少	少	少		第13次調査区 S005	
7-149	1650	SK338	赤生土層	腐珪		8.7+e	(6.6)		外層ヨコナデ内層ナデ	多	多	多	外層に赤色顔料	第13次調査区 S130	
7-151	1461	SK339	赤生土層	腐珪		11.4+e	5.2		外層ヨコナデ、ハケメ内層ナデ	多	多	少		第13次調査区 S325	
7-152	1662	SK340	赤生土層	腐珪		5.3+e	(34.0)		外層ヨコナデ内層ナデ、粗粒質	多	多	少	多	第13次調査区 S329	

車種	年式	車名	色	寸法			重量	エンジン	駆動方式	変速機	燃費				備考			
				全長	全幅	全高					内径	外径	軸間	軸距				
F182	1683	SK340	緑生土器	変	4.6+e	(6.0)	外置ヨコナデ・ミガキ内置ナデ	多	多	多	多	多	多	多	多	車13次調査区S523		
F155	1664	SK342	赤生土器	変	3.4+e		外置ヨコナデ・ミガキ・穿孔内置ナデ・ミガキ	少	少	少	少	少	少	少	内面に赤色顔料	車13次調査区S524		
F165	1685	SK342	緑生土器	変	5.0+e	(7.0)	外置ヨコナデ・ハケメ内置ナデ	少	多	多	多	多	多	多	内面にスス付着	車13次調査区S554		
F156	1666	SK343	赤生土器	変	5.4+e	4.8	外置ヨコナデ・ハケメ・ケズリ内置ナデ	少	多	多	多	多	多	多	多	車13次調査区S510		
F154	1667	SK344	赤生土器	変	(24.0)	3.2+e	外置ヨコナデ・ミガキ内置ナデ・ミガキ	少	少	少	少	少	少	少	外面に赤色顔料	車13次調査区S190	9-11	
F158	1668	SK344	赤生土器	変	8.7+e		外置ヨコナデ・ミガキ内置ナデ	少	少	少	少	少	少	少	外面に赤色顔料	車13次調査区S190	4-8	
F158	1669	SK344	赤生土器	変	4.7+e		外置ヨコナデ・ミガキ・34字突帯内置ナデ	少	少	少	少	少	少	少	外面に赤色顔料	車13次調査区S190	13	
F158	1670	SK344	赤生土器	鉢	7.4+e		外置ヨコナデ・ハケメ内置ナデ	少	少	少	少	少	少	少	内面にスス付着	車13次調査区S190	7	
F156	1671	SK344	赤生土器	変	(19.2)	8.9+e	外置ヨコナデ・ハケメ内置ナデ	多	多	多	多	多	多	多	外面にスス付着	車13次調査区S190	7-9	
F158	1672	SK344	赤生土器	高坪	14.7+e	(17.0)	外置ヨコナデ・ハケメ内置ナデ・シボ肌・指圧痕	少	少	少	少	少	少	少	外面に赤色顔料	車13次調査区S190	6-15、16	
F150	1673	SK345	赤生土器	変	5.0+e		外置ヨコナデ・ハケメ内置ナデ	多	多	多	多	多	多	多	多	車13次調査区S190		
F161	1674	SK346	赤生土器	変	(26.2)		外置ヨコナデ内置ナデ	少	多	多	多	多	多	多	外面にスス付着	車13次調査区S190	9-10、12	
F161	1675	SK346	赤生土器	鉢			外置ヨコナデ内置ナデ	少	多	多	多	多	多	多	多	車13次調査区S190	19	
F162	1677	SK347	赤生土器	変	(27.6)		外置ヨコナデ内置ナデ	少	多	多	多	多	多	多	多	車13次調査区S190		
F163	1676	SK348	赤生土器	変	8.5+e		外置ヨコナデ内置ナデ・指圧痕	多	多	少	少	少	少	少	多	車13次調査区S247 P1		
F165	1679	SK349	赤生土器	変	25.6+e	(26.4)	外置ヨコナデ・ハケメ内置ナデ	多	多	少	多	多	多	多	外面にスス付着	車13次調査区S230		
F167	1680	SK350	赤生土器	変	15.1+e	10.5	外置ヨコナデ・ミガキ内置ナデ	少	少	少	少	少	少	少	少	車13次調査区S175・S175-1橋・S192-1橋	1	
F167	1681	SK350	赤生土器	鉢	4.5+e		外置ヨコナデ・ミガキ内置ナデ・ミガキ	少	少	少	少	少	少	少	内面に赤色顔料	車13次調査区S175	2	
F167	1682	SK350	赤生土器	鉢	(17.0)	5.2+e	外置ヨコナデ・ハケメ内置ナデ	少	少	少	少	少	少	少	外面に赤色顔料	車13次調査区S175	1	
F169	1683	SK351	赤生土器	変	27.6	18.0+e	7.2	外置ヨコナデ・ハケメ内置ナデ	少	少	少	少	少	少	少	車13次調査区S237	7-9、13、14、16、17、19	
F169	1684	SK351	赤生土器	変	4.4+e		外置ヨコナデ・ハケメ内置ナデ	少	少	少	少	少	少	少	外面にスス付着	車13次調査区H9 S237	1	
F171	1685	SK352	赤生土器	変	(20.8)	3.1	6.8	外置ヨコナデ・ハケメ・ミガキ・34字突帯内置ナデ	多	多	多	多	多	多	多	外面に赤色顔料	車13次調査区S180	1
F171	1687	SK352	赤生土器	変	24.7+e	8.1		外置ヨコナデ・ミガキ内置ナデ	少	少	少	少	少	少	少	外面にスス付着	車13次調査区I0 S180・S185	1-2、9-10、11、15-16
F173	1688	SK353	赤生土器	変	(14.3)	37.9+e		外置ヨコナデ・ハケメ・ミガキ・突帯内置ナデ・ハケメ	少	少	少	少	少	少	少	多	車13次調査区S185	3-4、5、6
F173	1689	SK353	赤生土器	変	7.1+e			外置ヨコナデ・ハケメ内置ナデ	少	多	少	少	少	少	少	多	車13次調査区S185	
F173	1690	SK353	赤生土器	変	3.8+e	7.4		外置ヨコナデ・ハケメ内置ナデ	少	多	多	多	多	多	多	多	車13次調査区S185	12
F172	1691	SK353	赤生土器	高坪鉢	(19.0)	14.5+e		外置ヨコナデ・ケズリ内置ナデ	多	少	少	少	少	少	少	多	車13次調査区S185	13
F176	1692	S09	赤生土器	変	2.9+e			外置ヨコナデ・ミガキ内置ナデ	少	多	多	多	多	多	多	多	車13次調査区S883	
F176	1693	S89	赤生土器	聯合	8.0+e			外置ヨコナデ・ハケメ内置ナデ	多	多	多	多	多	多	多	多	車13次調査区S283	
F179	1694	S811	赤生土器	変	2.0+e	(7.0)		外置ヨコナデ内置ナデ	少	少	少	少	少	少	少	多	車13次調査区S289	
F179	1695	S811	赤生土器	変	2.5+e	(11.0)		外置ヨコナデ内置ナデ	少	多	多	多	多	多	多	外面に赤色顔料	車13次調査区S280	
F181	1696	S012	赤生土器	変	(29.6)			外置ヨコナデ・指圧痕内置ナデ	少	多	多	多	多	多	多	外面にスス付着	車13次調査区S268	6
F181	1697	S812	赤生土器	変				外置ヨコナデ・沈積内置ナデ	少	多	多	多	多	多	多	多	車13次調査区S271	3-4
F181	1698	S812	赤生土器	変	6.8			外置ヨコナデ・ミガキ内置ナデ	少	多	多	多	多	多	多	外面に赤色顔料	車13次調査区S271	2
F181	1699	S012	赤生土器	変	(31.4)			外置ヨコナデ・ハケメ内置ナデ	多	多	多	多	多	多	多	多	車13次調査区S271	1
F181	1701	S812	赤生土器	変	4.0+e			外置ヨコナデ内置ナデ	多	多	多	多	多	多	多	多	車13次調査区S149	
F183	1703	3号調査区	赤生土器	変	16.4	31.5		外置ヨコナデ・ハケメ・ケズリ・タタキ・突帯内置ナデ・ハケメ・指圧痕	多	多	多	多	多	多	多	外面にスス付着	車13次調査区S270	1
F183	1704	3号調査区	赤生土器	変				外置ヨコナデ内置ナデ	少	少	多	多	多	多	多	外面に赤色顔料	車13次調査区S270	

No.	品名	規格	寸法	形状・構造等			重量	備考	備考	備考	備考	備考	備考	
				寸法	寸法	寸法								
7-183 1703	5号鋼線鋼	張生土器	飾	(16.6)									第13次調査区SK070	4
7-186 1706	4号鋼線鋼	張生土器	覆		6.8+α								第13次調査区SK065	12
7-186 1707	4号鋼線鋼	張生土器	覆		4.2+α								第13次調査区SK063	15
7-186 1708	4号鋼線鋼	張生土器	覆		3.3+α	(0.8)							第13次調査区SK065	6
7-186 1709	4号鋼線鋼	張生土器	覆		6.6+α	(6.2)							第13次調査区SK065	4
7-186 1710	4号鋼線鋼	張生土器	高坏		18.0	9.4+α							第13次調査区SK065	4
7-188 1713	3号鋼線鋼	張生土器	高坏										第13次調査区SK060	
7-188 1714	5号鋼線鋼	張生土器	覆										第13次調査区SK060	
7-188 1715	5号鋼線鋼	張生土器	覆										第13次調査区SK060	3
7-188 1716	5号鋼線鋼	張生土器	覆	(13.1)	5.1								第13次調査区SK060	2
7-188 1717	5号鋼線鋼	上層部	蓋	15.8	15.0+α								第13次調査区SK060	9-8
8-2 1719	SH108	張生土器	飾										第2次調査区SH44	10
8-2 1720	SH108	張生土器	蓋										第2次調査区SH44	一括
8-2 1721	SH108	張生土器	蓋		5.7+α	(8.4)							第2次調査区SH44	31
8-2 1722	SH108	張生土器	高坏	(17.4)	4.5+α								第2次調査区SH44	一括
8-2 1723	SH108	張生土器	高坏?										第2次調査区SH44	一括
8-5 1725	SK354	張生土器	覆	30.5	32.2+α								第2次調査区SK129	1-2, 3, 5, 6, 13, 18, 19, 21
8-5 1726	SK354	張生土器	蓋	(32.6)	9.7+α								第2次調査区SK129	4, 7, 10
8-5 1727	SK354	張生土器	蓋		8.3+α	7.4							第2次調査区SK129	6
8-5 1728	SK354	張生土器	蓋										第2次調査区SK129	一括
8-5 1729	SK354	張生土器	飾	(13.8)	8.9								第2次調査区SK129	7
8-7 1730	SK355	張生土器	覆										第2次調査区SK127	一括
8-7 1731	SK355	張生土器	覆		6.2+α	7.0							第2次調査区SK127	一括
8-9 1732	SK356	張生土器	蓋	(23.8)	31.2	6.7							第2次調査区SK137	一括
8-9 1733	SK356	張生土器	覆	(26.6)	30.85	(7.7)							第2次調査区SK137	一括
8-11 1734	SK357	張生土器	蓋			(20.7)							第2次調査区SK130	36
8-11 1735	SK357	張生土器	蓋										第2次調査区SK130	47
8-11 1736	SK357	張生土器	蓋		4.2+α								第2次調査区SK130	53
8-11 1737	SK357	張生土器	蓋										第2次調査区SK130	一括
8-11 1738	SK357	張生土器	蓋										第2次調査区SK130	一括
8-11 1739	SK357	張生土器	蓋	(22.2)	31.3	7.0							第2次調査区SK130	81, 38, 66, 67
8-11 1740	SK357	張生土器	蓋		8.2+α								第2次調査区SK130	15
8-11 1741	SK357	張生土器	高坏	(27.8)	8.2+α								第2次調査区SK130	6
8-13 1744	SK358	張生土器	高坏										第2次調査区SK130	一括
8-13 1745	SK358	張生土器	蓋										第2次調査区SK130	14
8-13 1746	SK358	張生土器	蓋										第2次調査区SK130	一括
8-13 1747	SK358	張生土器	蓋										第2次調査区SK130	一括

品名	数量	単位	規格	備考	検査項目	検査結果	検査内容	検査結果	検査内容	検査結果	検査内容	検査結果	検査内容	検査結果	検査内容	検査結果	検査内容	検査結果		
8-13	1748	SK308	養生土部	壁	(23.8)	3.7±a													第2次調査SK132	12
8-13	1749	SK328	養生土部	柱	(12.0)	9.1±a													第2次調査SK132	33
8-15	1750	SK329	養生土部	窓															第2次調査SK133	一括
8-15	1751	SK359	養生土部	窓															第2次調査SK133	2
8-15	1752	SK359	養生土部	窓															第2次調査SK133	13
8-15	1753	SK359	養生土部	窓															第2次調査SK133	6
8-15	1754	SK329	養生土部	窓	(23.2)	3.7±a													第2次調査SK133	一括
8-15	1755	SK359	養生土部	窓															第2次調査SK133	一括
8-15	1756	SK329	養生土部	窓	6.3±a	(6.6)													第2次調査SK133	28
8-15	1757	SK359	養生土部	柱															第2次調査SK133	一括
8-15	1758	SK359	養生土部	窓															第2次調査SK133	一括
8-19	1760	SK361	養生土部	窓	(35.8)	9.9±a													第2次調査SK134	3
8-19	1761	SK361	養生土部	窓															第2次調査SK134	10
8-19	1762	SK361	養生土部	窓	14.7±a	8.5													第2次調査SK134	11・17・18
8-19	1763	SK361	養生土部	窓	(35.6)	6.0±a													第2次調査SK134	10
8-19	1764	SK361	養生土部	窓	(33.2)	19.3±a													第2次調査SK134	8・13・15・16・18・25
8-19	1765	SK361	養生土部	窓	(26.5)	16.8±a													第2次調査SK134	12・13・18
8-19	1766	SK361	養生土部	窓	(26.0)	8.7±a													第2次調査SK134	5・13
8-19	1767	SK361	養生土部	柱	(24.8)	12.0±a													第2次調査SK134	1・9・11
8-19	1768	SK361	養生土部	窓		9.0±a	16.6												第2次調査SK134	4・13・25・26
8-19	1769	SK361	養生土部	窓		8.0±a	(15.7)												第2次調査SK134	10・18
8-21	1770	SK363	養生土部	窓															第2次調査SK135	1
8-21	1771	SK363	養生土部	窓	(26.0 / 32.3)	31.4±a	(28.6)												第2次調査SK135	2
8-21	1772	SK363	養生土部	窓		5.3±a	(6.6)												第2次調査SK135	3
8-23	1774	SK364	養生土部	開口部	(34.0)	10.5±a													第2次調査SK135	一括
8-23	1775	SK364	養生土部	窓															第2次調査SK135	一括
8-23	1776	SK364	養生土部	窓															第2次調査SK135	一括
8-23	1777	SK364	養生土部	窓															第2次調査SK135	一括
8-23	1778	SK364	養生土部	窓	(29.2)	3.0±a													第2次調査SK135	一括
8-23	1779	SK364	養生土部	窓	(28.2)	5.1±a													第2次調査SK135	一括
8-23	1780	SK364	養生土部	窓		8.2±a	7.2												第2次調査SK135	一括
8-23	1781	SK364	養生土部	窓	(9)	16.3	(10.2)												第2次調査SK135	一括
8-25	1782	SD21	鋼筋	籠		4.6±a													第2次調査SD01	

No.	No.	No.	No.	No.	No.	No.			No.	No.	No.		
						No.	No.	No.					
8-27	1761	SS	弥生土層	溝	(29.4)	8.8+α	外周はヨコナデ・タテ方向のハケ、内周はヨコナデ・ナデ	少	少		第2次調査SH45	10・22・32	
8-27	1765	SS	弥生土層	溝	(27.7)	10.5+α	外周はヨコナデ・ナメ方方向のハケ、内周はヨコナデ・ナデ	多	多	少	第2次調査SH45	一括	
8-27	1766	SS	弥生土層	溝		8.0+α	外周はヨコナデ・ナメ方方向のハケ、内周はヨコナデ・ナデ	多	多		第2次調査SH45	一括	
8-27	1767	SS	弥生土層	溝		1.8+α	外周はヨコナデ・ミガキ、内周はミガキ	少	少	内側に丹塗りあり	第2次調査SH45	16	
8-27	1768	SS	弥生土層	溝			外周はヨコナデ、内周はヨコナデ	多	多		第2次調査SH45	一括	
8-27	1769	SS	弥生土層	溝	(22.6)	2.1+α	外周はナデ、内周はミガキ・ナデ・埋戻	多	多	内側に丹塗りあり	第2次調査SH45	77	
8-29	1790	SH109	弥生土層	竪	(17.5)	7.8+α	外周はヨコナデ・平敷竹管による奥山山面文・跡みど・ナメ方方向のハケ、内周はヨコナデ・ナメ方方向のハケ	多	多		第2次調査SH43	28	
8-29	1791	SH109	弥生土層	溝		5.1+α	外周はタテ方方向のハケ後ナデ・ミガキ・尊孔、内周はヨコナデ・ナメ方方向のハケ後ナデ	少	多	尊孔2個セフト1組付存	第2次調査SH43	一括	
8-29	1792	SH109	弥生土層	竪	(15.9)	5.5+α	外周はヨコナデ・タテ方方向のハケ後ナデ、埋戻状文、内周はヨコナデ	少	少	少	第2次調査SH43	一括	
8-29	1793	SH109	弥生土層	竪	(17.0)	5.4+α	外周はヨコ方方向のナデ・花籠・ナデ・タテ方向のハケ、内周はミガキ・上真土・埋戻	少	少	多	第2次調査SH43	235	
8-29	1794	SH109	弥生土層	竪	(18.2)	7.5+α	外周はヨコナデ・タテ方方向のハケ・ナメ方方向のハケ、ナメ方方向のハケ、ナメ方方向のハケ、内周はミガキ・ナメ方方向のハケ	多	多	口縁部に黒塗あり	第2次調査SH43	12	
8-29	1795	SH109	弥生土層	竪		27.0+α	外周はタテ方方向のハケ・ナメ方方向のハケ、内周はナメ方方向のハケ	多	多		第2次調査SH43	6・11・14・15・22・196	
8-29	1796	SH109	弥生土層	竪			外周は埋戻状文、内周はナデ	少	少	少	第2次調査SH43	一括	
8-29	1797	SH109	弥生土層	溝	(15.0)	5.5+α	外周はナデ・タテ方向のハケ、内周は工具によるナデ・埋戻	少	少	少	第2次調査SH43	180	
8-29	1798	SH109	弥生土層	溝	(15.0)	26.3+α	外周はヨコナデ・タテ・ハケ・タテ半截タテハケ・ナデ、内周はヨコハケ・ナデ・埋戻	少	少	外側にスス付着	第2次調査SH43	42・43・182・261・262・263	
8-29	1799	SH109	弥生土層	溝	(14.2)	14.5+α	外周はヨコナデ・ナメ方方向のハケ・タテ方、内周はナメ方方向のハケ	多	多		第2次調査SH43	110・112	
8-30	1800	SH109	弥生土層	溝		25.5+α	外周はナメ方方向のハケ・タテ半截ハケナズリ、内周はナデ	多	多	外側に黒塗あり	第2次調査SH43	176・202・120・204・193・208・201・204	
8-30	1801	SH109	弥生土層	溝	(15.4)	14.0+α	外周はタテ方方向のハケ後ナデ・タテ方方向のハケ後ナデ、内周はヨコ方方向のハケ後ナデ・多方向のハケ後ナデ・埋戻	少	少	少	外側にスス付着	第2次調査SH43	25・26・32・100
8-30	1802	SH109	弥生土層	溝	(14.3)	23.8+α	外周はヨコナデ・タテ方向のハケ後ナデ、内周はヨコナデ・多方向のハケ	少	少	多	第2次調査SH43	1・2・3・4・8・9・22・72・88・256・259	
8-30	1803	SH109	弥生土層	溝	10.4	9.4+α	外周はタテ方方向のハケ・平行タテ半截タテ方方向のハケ、内周はヨコ方方向のハケ	少	少	黒塗あり	第2次調査SH43	225・223・206	
8-30	1804	SH109	弥生土層	溝	(16.2)	8.7+α	外周はヨコナデ・ナメ方方向のハケ、内周はヨコナデ・ナメ方方向のハケ	多	多		第2次調査SH43	64	
8-30	1805	SH109	弥生土層	溝	(16.2)	6.1+α	外周はタテ方方向のハケ・ヨコナデ、内周はタテ方方向のハケ・ヘラ状工具によるナデ・埋戻、ヨコナデ	多	少	少	第2次調査SH43	241	
8-30	1806	SH109	弥生土層	溝	(16.5)	5.0+α	外周はヨコナデ・タテ方方向のハケ、内周はヨコ方方向のハケ・ナデ	多	多		第2次調査SH43	66・80	
8-30	1807	SH109	弥生土層	溝	(12.3)	7.1+α	外周はヨコナデ・ナデ・ナメ方方向のハケ、内周はナデ・ナメ方方向のハケ	多	多		第2次調査SH43	111・113	
8-30	1808	SH109	弥生土層	竪	11.6	6.0+α	外周はヨコナデ・タテ方方向のハケ、内周はヨコ方方向のハケ・ナデ・埋戻	少	多	多	第2次調査SH43	215	
8-30	1809	SH109	弥生土層	竪			外周はヨコナデ・ナメ方方向のハケ後ナデ、内周はヨコナデ・ナメ方方向のハケ後ナデ	少	少	少	第2次調査SH43	275	
8-30	1810	SH109	弥生土層	溝			外周はヨコナデ・タテ方方向のハケ後ナデ、内周は多方向のハケ後ナデ・埋戻	少	少	少	第2次調査SH43	266	
8-30	1811	SH109	弥生土層	溝		14.0+α	外周はタテ方・工具ナデ、内周はナデ・下真ナデ・ナメ方方向のハケ・埋戻	多	多	内周の一部にスス付着	第2次調査SH43	62	
8-30	1812	SH109	弥生土層	竪		11.2+α	外周は工具ナデ・ナメ方方向のハケ・タテ方、内周はナデ	多	多	多	内周一部埋戻	第2次調査SH43	67

No.	品名	規格	数量	単位	寸法	形状・取組の概要	取組			備考	取組時期・回数				
							高	幅	厚						
8-30	1813	SH109	張生土飾	舞付鉢	(19.2)	178	144	外周はヨコナゲ・ハケ後ミダキ・タテ方向のハケ、内周はヨコナゲ・取組	多	多	少	外周にスチ付着	第2次調査SH43	91・45・63	
8-30	1814	SH109	張生土飾	舞付鉢	(22.3)	180	144	外周はタテ方向のハケ・ハケ後ヨコナゲ、内周は工具・ヨコ方向のハケ	多	少	多		第2次調査SH43	154・155	
8-30	1815	SH109	張生土飾	舞付鉢	22.6	110±a		外周はタテ方向のハケ・板状工具によるタテ方向のナゲ、内周はヨコ方向のハケ・後ミダキ・ヨコ方向のハケ後タテ方向のミダキ	多	多	多		第2次調査SH43	51・33・59	
8-30	1816	SH109	張生土飾	舞付鉢	12.5	6.3±a		外周はタテ方向のハケ・ハラケズリ、内周は多方向のハケ	少	少	少		第2次調査SH43	148・204	
8-30	1817	SH109	張生土飾	鉢	(8.5)	5.8±a		外周はヨコナゲ・ナゲ・取組後、内周はツツ・ナメ方向のハラ・取組	多	多	多	外周に丹塗りあり	第2次調査SH43	70	
8-30	1818	SH109	張生土飾	鉢	12.8	7.3±a		外周はヨコナゲ・ナゲリ、内周はナゲ・ヨコナゲ	少	多	少		第2次調査SH43	77・178・281	
8-30	1819	SH109	張生土飾	鉢	12.6	5.9±a		外周はタテリ・ナゲ、内周はナゲ・取組後	少	多	多		第2次調査SH43	230	
8-30	1820	SH109	張生土飾	鉢	13.5	7.4		外周はタテ方向のハケ・工具・ナゲ、内周はヨコ・ミダキ	多	多	多	少		第2次調査SH43	173・250
8-30	1821	SH109	張生土飾	鉢	(10.1)	7.2±a		外周はヨコナゲ・工具・ナゲ・タタキ、内周はナゲ・工具・ナゲ・タタキ・逆て取組	多	多	多	外周に黒墨塗り	第2次調査SH43	17	
8-30	1822	SH109	張生土飾	鉢	11.8	6.8		外周はヨコ方向のナゲ・ハケのような取組後、内周はヨコナゲ・ハラ・工具	多	少	少	外周の底部分にスチ付着	第2次調査SH43	203	
8-30	1823	SH109	張生土飾	鉢	(7.5)	3.7		外周はナゲ後逆取組、内周はナゲ後取組	多	多	多		第2次調査SH43	29	
8-31	1824	SH109	張生土飾	蓋	19.6±a			外周はタテ方向のハケ・タタキ・ナゲ、内周は取組後・上ミダキ・タテ方向のハケ	多	多	多	外周にスチ付着	第2次調査SH43	33・34・35・50	
8-31	1825	SH109	張生土飾	蓋	3.6±a	(13.1)		外周はヨコ方向のハケ・ミダキ、内周はタテ方向のハラ後ナゲ	少	少	少		第2次調査SH43	115	
8-31	1826	SH109	張生土飾	蓋	3.8±a	12.0		外周はタテ方向のハケ・ヨコナゲ、内周はナゲ	多	少	少		第2次調査SH43	143	
8-31	1827	SH109	張生土飾	高坪				外周は板状工具によるケズリ後ミダキ、内周は多方向のハケ後多方向のミダキ	少	少	少		第2次調査SH43	306	
8-31	1828	SH109	張生土飾	高坪	5.0±a			外周はハケ状工具によるナゲ・タテ方向のミダキ、内周はハケ状工具によるナゲの後逆ミダキ	多	多	多		第2次調査SH43	142	
8-31	1829	SH109	張生土飾	高坪	8.9±a	(14.6)		外周は取組・板状工具によるヨコ方向のナゲ、内周は取組後・板状工具によるタテ方向のナゲ	多	多	多	穿孔2つ(2ヶ所)	第2次調査SH43	136	
8-31	1830	SH109	張生土飾	変	11.0±a			外周はヨコナゲ・取付突部・タテ方向のハケ後ナゲ、内周はヨコナゲ・ナメ方向のハラ後ナゲ・取組後	少	少	少		第2次調査SH43	290・310	
8-31	1831	SH109	張生土飾	変	6.0±a			外周は取付突部・ナゲ、内周はナゲ	多	多	多		第2次調査SH43	95	
8-31	1832	SH109	張生土飾	変	27.9	5.3±a		外周はヨコナゲ・取付タテハケ、内周は取付ヨコハケ	多	少	少		第2次調査SH43	221・165・192・234・238・229・240	
8-31	1833	SH109	張生土飾	取組後	(6.8)	2.7±a		外周はナゲ、内周はナゲ	少	少	少	外周に赤色顔料あり	第2次調査SH43	160	
8-31	1834	SH109	張生土飾	蓋	(20.8)	2.7±a		外周はヨコ方向のミダキ、内周はヨコ方向のミダキ	少	少	少	内外共に赤色顔料あり	第2次調査SH43	153	
8-35	1839	SH110	張生土飾	変				外周はヨコナゲ、内周はヨコナゲ	少				第3次調査SH49	95	
8-37	1840	SH111	張生土飾	小瓶	(9.4)	8.0±a		外周はヨコナゲ・タテ方向のハラ・内周はヨコナゲ	少	多			第1次調査SH16	一冊	
8-37	1841	SH111	張生土飾	小瓶		7.0±a		外周はヨコナゲ・タテ方向のハラ・内周はヨコナゲ	少	少			第1次調査SH16	一冊	
8-37	1842	SH111	張生土飾	変	4.8±a	8.4		外周はタテ方向のハラ・ヨコナゲ・ナゲ、内周はナゲ	少	少	少		第1次調査SH16	95	
8-37	1843	SH111	張生土飾	小瓶	4.6±a			外周は工具によるヨコ方向のナゲ、内周は工具によるナゲ	少				第1次調査SH16	一冊	
8-37	1844	SH111	張生土飾	器台	5.2±a			外周はタテ方向のハラ・ヨコナゲ、内周は工具によるヨコナゲ	少				第1次調査SH16	一冊	
8-37	1845	SH111	張生土飾	器台	7.4±a			外周はタテ方向のハラ・内周はナゲ・ヨコナゲ・工具によるナゲ	少				第1次調査SH16	一冊	
8-39	1849	SH112	張生土飾	蓋	(28.4)	4.1±a		外周はヨコナゲ、内周はヨコナゲ	多	多		内外にスチ付着	第1次調査SH30	139	
8-39	1850	SH112	張生土飾	蓋	3.2±a			外周はナゲ、内周はナゲ	少	少		内外に丹塗りあり	第1次調査SH30	一冊	
8-39	1851	SH112	張生土飾	蓋	(15.0)	16.2±a	(31.0)	外周はヨコミダキ・タタミダキ・工具・ナゲ、内周はヨコミダキ・ナゲ	多	少	少	取付突部が1つは取組後付いたかもしくは取組後に付いたかがあるか?	第1次調査SH30	115	





品名	規格	単位	寸法			重量	材質				備考	検査項目	検査方法	
			長さ	幅	厚さ		種類	状態	加工	処理				
8-47 1905	SH115	養生土器	要	(29)φ	32±a								第3次調査SH48	101
8-47 1906	SH115	養生土器	要						少				第3次調査SH48	89
8-47 1907	SH115	養生土器	要						少	少			第3次調査SH48	96
8-47 1908	SH115	養生土器	要		39±a				多	多	外周にスス付着		第3次調査SH48	33
8-47 1909	SH115	養生土器	要	(24)φ	43±a				少	少			第3次調査SH48	112
8-47 1910	SH115	養生土器	要		74±a	7.8			少				第3次調査SH48	58
8-47 1911	SH115	養生土器	要		62±a	6.9			少	多	少		第3次調査SH48	118
8-47 1912	SH115	養生土器	要		59±a	6.9			少	少	少		第3次調査SH48	82
8-47 1913	SH115	養生土器	要		65±a	7.5			多	多	多	外周にスス付着	第3次調査SH48	34
8-47 1914	SH115	養生土器	要		65±a	(7.0)			多	多	多		第3次調査SH48	19
8-47 1915	SH115	養生土器	要		66±a	7.1			多	多	多	外周にスス付着	第3次調査SH48	30
8-47 1916	SH115	養生土器	要		35±a	(7.3)			少	少	少		第3次調査SH48	108
8-49 1919	SH116	養生土器	要		25±a				多	多	少	山溝部にスス付着	第3次調査SH47	38
8-49 1920	SH116	養生土器	要						少				第3次調査SH47	46
8-49 1921	SH116	養生土器	要	(14.5)	6.5±a				多	多	多		第3次調査SH47	一括
8-49 1922	SH116	養生土器	要		7.3±a				多	多	少	内外にスス付着	第3次調査SH47	33
8-49 1923	SH116	養生土器	要	(27.0)	170±a				多	多	多	外周にスス付着	第3次調査SH47	41・64
8-49 1924	SH116	養生土器	要	(29.2)	136±a				少	少	少	外周にスス付着	第3次調査SH47	34・43・65
8-49 1925	SH116	養生土器	要	(24.4)	119±a				少	少	少		第3次調査SH47	5
8-49 1926	SH116	養生土器	要	23.8	115±a				多	多	多	外周にスス付着	第3次調査SH47	32・43
8-49 1927	SH116	養生土器	要	20.5	157±a				少	少	少		第3次調査SK130	3・9・10・11・13・14・15・19・61・63
8-49 1928	SH116	養生土器	要		82±a	(8.3)			少	少	少		第3次調査SH47	37
8-49 1929	SH116	養生土器	長期品		141±a	4.6			多	多	少	外周に赤色染料あり	第3次調査SH47	2・26・45
8-49 1930	SH116	養生土器	要						少			内周にスス付着	第3次調査SH47	35
8-49 1931	SH116	養生土器	要	(9.5)	70±a				少	少	少		第3次調査SH47	36
8-49 1932	SH116	養生土器	要	20.7	15.0	25.4			多	多	多	SK130として取り上げたが、最終的にはSH47と同一仕様と判別	第3次調査SK150	4・20・21・22・28・62・63
8-51 1935	SH116	養生土器	要	(20.6)	6.0				多	多	多		第3次調査SH47	6
8-51 1936	SH116	養生土器	要						少	多	多		第3次調査SH47	1・5
8-51 1937	SH116	養生土器	要		93±a				多	多	多		第3次調査SH47	21
8-51 1938	SH116	養生土器	要		68±a	(8.0)			多	多	多		第3次調査SH47	11・12・16
8-51 1939	SH116	養生土器	要		67±a	(8.6)			多	多	多		第3次調査SH47	10
8-51 1940	SH116	養生土器	要	(10.8)	32±a				少	少	少		第3次調査SH47	3
8-51 1941	SH116	養生土器	要	8.0	16.8	(11.0)			少	少	少		第3次調査SH47	7・8

年次	調査年度	調査種別	調査対象	調査対象の状況			調査結果				調査結果の概要	備考		
				調査対象の状況	調査対象の状況	調査対象の状況	調査結果	調査結果	調査結果	調査結果				
8-31	1942	SH116	弥生土器	静台	8.3	16.9	10.4	外周はタテ方向のハケ残ナゲ、内周は工上ナゲ・指環痕・ミガネ	少	少	少	少	第3次調査SH147	8
8-31	1943	SH116	弥生土器	静台	(8.2)	16.7	(10.3)	外周はヨコナゲ、タテ方向のハケ残ナゲ、内周はナゲ・指環痕	少	少			第3次調査SH147	2
8-33	1944	SH117	弥生土器	竪	31.1±e		8.0	外周はナゲ、足付部帯・ミガネ、内周はナゲ(高脚)	多	多	多	外周にスチ付着	第3次調査SH145	(SH145) 7・8・9・10・12・62・(SH145) 6
8-33	1945	SH117	弥生土器	竪	29.2±e		4.7	外周はヨコ方向のナゲ・上高ナゲ、脚部部帯・ミガネ・内周はナゲ・指環痕・指環痕	少	少	少		第3次調査SH145	29・33・38・37・40・41・42・53・60・61
8-33	1946	SH117	弥生土器	竪	22.3	33.2	7.5	外周はヨコナゲ、ナメ方向のハケナゲ、内周はヨコナゲ・ナゲ	多	多	少		第3次調査SH145	45・49・60・51
8-33	1947	SH117	弥生土器	竪	(16.0)	32±e		外周はヨコナゲ・ナゲ、内周はヨコナゲ・ナゲ	多	多		内周の一部と外周に丹塗りあり	第3次調査SH145	一括
8-33	1948	SH117	弥生土器	竪	(27.1)	10.5±e		外周はヨコナゲ・ナメ方向のハケ(厚塗)、内周はヨコナゲ・ヨコ方向のハケ・ナゲ	多	多		外周にスチ付着	第3次調査SH145	23
8-33	1949	SH117	弥生土器	竪	(28.7)	9.6±e		外周はヨコナゲ・タテ方向のハケ、内周はヨコナゲ・ナゲ	多	多		外周にスチ付着	第3次調査SH145	63
8-33	1950	SH117	弥生土器	竪	19.8	20.3±e		外周はヨコナゲ・タテ方向のハケ残ナゲ、内周はヨコナゲ・ミガネ	少	少	少		第3次調査SH145	31・38
8-33	1951	SH117	弥生土器	竪	(23.4)	8.4±e		外周はヨコナゲ・ナメ方向のハケ、内周はヨコナゲ・ナゲ	多	多		外周にスチ付着	第3次調査SH145	21
8-33	1952	SH117	弥生土器	竪	6.5±e	(7.5)		外周はタテ方向のハケ・ヨコナゲ・ナゲ、内周はナゲ	多	多	少		第3次調査SH145	27
8-34	1953	SH117	弥生土器	竪	(46.6)	9.2±e		外周はヨコナゲ・足付部帯・ナゲ、内周はヨコナゲ・ナゲ	多	多		外周にスチ付着	第3次調査SH145	22
8-34	1954	SH117	弥生土器	静台	(10.8)	6.7±e		外周はヨコナゲ・指環痕・ナゲ、内周はナゲ	多	多	多	外周にスチ付着	第3次調査SH145	59
8-34	1955	SH117	弥生土器	静台	9.0±e	(10.0)		外周はナゲ・ナメ方向のハケ、内周は上高ナゲ・ヨコナゲ	多	多	少		第3次調査SH145	4
8-36	1980	SH118	弥生土器	不明				外周はナゲ・ヨコナゲ・突部、内周はナゲ	少	少	少		第4次調査SH1017	29
8-36	1961	SH118	弥生土器	竪				外周はヨコナゲ、内周はヨコナゲ	少	少			第4次調査SH1017	17・18
8-36	1962	SH118	弥生土器	竪	(24.9)	6.3±e		外周はヨコナゲ・タテ方向のハケ、内周はヨコナゲ	少	少	少		第4次調査SH1017	30
8-36	1963	SH118	弥生土器	竪	(30.0)	11.0±e		外周はヨコナゲ・タテ方向のハケ残ナゲ、内周はヨコナゲ・ナゲ	多	多	少	外周にスチ付着	第4次調査SH1017	12・24
8-36	1964	SH118	弥生土器	竪				外周はタテ方向のハケ、内周は丁寧ナゲ・ヨコナゲ	少	少	少		第4次調査SH1017	2
8-36	1965	SH118	弥生土器	竪				外周はヨコナゲ・ハケ、内周はヨコナゲ	少	少	少		第4次調査SH1017	14
8-36	1966	SH118	弥生土器	竪	7.8±e	(7.8)		外周はタテ方向のハケ・ヨコナゲ、内周はナゲ・高足突部	少	少	少		第4次調査SH1017	23
8-36	1967	SH118	弥生土器	竪	10.7±e	7.2		外周はタテ方向のハケ・ヨコナゲ・不定方向のナゲ、内周はナゲ	少	少	少		第4次調査SH1017	19・27
8-36	1968	SH118	弥生土器	竪	15.3±e	7.3		外周はタテ方向のハケ・ヨコナゲ、内周はナゲ	少	少	少		第4次調査SH1017	4・8
8-36	1969	SH118	弥生土器	竪	9.0±e	7.0		外周はタテ方向のハケ・ヨコナゲ・ナゲ、内周は工上ナゲ・ナゲ	少	多			第4次調査SH1017	21
8-36	1970	SH118	弥生土器	竪	8.5±e	6.5		外周はタテ方向のハケ・ヨコナゲ、内周はナゲ	少	少			第4次調査SH1017	13
8-36	1971	SH118	弥生土器	竪環	(25.2)	6.0±e		外周はミガネ、内周はナゲ	少	少		内・外周に赤色顔料あり	第4次調査SH1017	11
8-36	1972	SH118	弥生土器	竪環				外周はハケ残ナゲ、内周はナゲ	少	少			第4次調査SH1017	一括
8-38	1975	SH119	弥生土器	竪	(34.0)	7.4±e		外周はヨコナゲ・脚付三角突部・工上ナゲ、内周はヨコナゲ・ミガネ	多	多		内側に丹塗りあり	第4次調査SH1003	10
8-38	1976	SH119	弥生土器	竪	2.4±e			外周はヨコナゲ、内周はヨコナゲ	多	多			第4次調査SH1003	9
8-38	1977	SH119	弥生土器	竪	1.9±e			外周はヨコナゲ、内周はヨコナゲ	多	多			第4次調査SH1003	26
8-38	1978	SH119	弥生土器	竪	2.5±e			外周はヨコナゲ、内周はヨコナゲ	多	多			第4次調査SH1003	30
8-38	1979	SH119	弥生土器	静台	(10.2)	4.2±e		外周はヨコナゲ・タテ方向のハケ、内周はナゲ・指環痕	多	多			第4次調査SH1003	1
8-40	1982	SH120	弥生土器	竪	20.7±e	6.2		外周はヨコナゲ・ミガネ・突部、内周はナゲ・指環痕	少	少	少		第5次調査SH1007	18
8-40	1983	SH120	弥生土器	無取込	(19.1)	4.4±e		外周はヨコナゲ・ミガネ、内周はヨコナゲ・ナゲ	多	多		外周に丹塗りあり	第5次調査SH1007	一括
8-40	1984	SH120	弥生土器	竪	15.0±e	8.4		外周はタテ方向のハケ残ナゲ、内周は工上ナゲ・指環痕	少	少	少		第5次調査SH1007	15

年次	品名	用途	規格	数量	単位	備考	備考	備考	備考	備考	備考	備考		
840	1985	SH120	養生土器	型	43+e	(80)	外面はナナメ方向のハケ・ヨコナゲ・ナゲ、内面はナゲ	多	多			第5次調査S1007	14	
840	1986	SH120	養生土器	型	38+e	78	外面はナナメ方向のハケ・ナゲ、内面はナゲ	多	多			第5次調査S1007	53	
840	1987	SH120	養生土器	型	39+e	(76)	外面はナナメ方向のハケ・ナゲ、内面はナゲ	多	多		内面に片盛りあり	第5次調査S1007	24	
840	1988	SH120	養生土器	型	1.8+e	(72)	外面はヨコナゲ・ナゲ、内面はナゲ上ナゲ・ナゲ	多	多		内面に片盛りあり	第5次調査S1007	一括	
840	1989	SH120	養生土器	型	28.7	129+e	外面はヨコナゲ・ナゲ方向のハケ・ナゲ、内面はヨコナゲ・上ナゲ	少	少	少		第5次調査S1007	25・31・59	
840	1990	SH120	養生土器	型	26.7	121+e	外面はヨコナゲ・ナゲ方向のハケ・ナゲ、内面はヨコナゲ・ナゲ	少	少	少	外側にスス付着	第5次調査S1007	59・61・62・73	
840	1991	SH120	養生土器	型	40+e	72	外面はナナメ方向のハケ・ヨコナゲ・ナゲ、内面はナゲ	多	多			第5次調査S1007	45	
840	1992	SH120	養生土器	型	28.8	91+e	外面はヨコナゲ・ナゲ(縦溝)、内面はナゲ・ヨコナゲ	多	多	多		第5次調査S1007	38	
840	1993	SH120	養生土器	型	28.6	158+e	外面はヨコナゲ・工具ナゲ・タタキ、内面はヨコナゲ・ナゲ・工具ナゲ	少	少	多		第5次調査S1007	25・56・57	
840	1994	SH120	養生土器	型	28.2	170+e	外面はヨコナゲ・ナゲ方向のハケ・ナゲ、内面はヨコナゲ・丁張ナゲ	少	少	少	外側にスス付着	第5次調査S1007	53	
840	1996	SH120	養生土器	型	29.2	135+e	外面はヨコナゲ・ナゲ方向のハケ、内面はヨコナゲ・上ナゲ	少	少		外側にスス付着	第5次調査S1007	27・55・56	
841	1996	SH120	養生土器	型	27.0+e	68	外面はナゲ方向のハケ・ヨコナゲ・ナゲ、内面はナゲ	多	少	多		第5次調査S1007	36・26・28・63	
841	1997	SH120	養生土器	型	99+e		外面はヨコナゲ・ナメ方向のハケ、内面はヨコナゲ・ナゲ	多	多			第5次調査S1007	63	
841	1998	SH120	養生土器	型	11.14+e		外面はヨコナゲ・ナメ方向のハケ、内面はヨコナゲ・ナゲ	多	多		外側にスス付着	第5次調査S1007	67	
841	1999	SH120	養生土器	型	4.5+e		外面はヨコナゲ・工具ナゲ、内面はヨコナゲ・ナゲ	多	多			第5次調査S1007	51	
841	2000	SH120	養生土器	型	6.1+e		外面はヨコナゲ・ナメ方向のハケ、内面は1.具ナゲ・ナゲ	多	多			第5次調査S1007	一括	
841	2001	SH120	養生土器	型	60+e	65	外面はナメ方向のハケ・ヨコナゲ・ナゲ、内面はナゲ	多	多		内面にスス付着	第5次調査S1007	67	
841	2002	SH120	養生土器	型	4.5+e	80	外面はナメ方向のハケ・ヨコナゲ・ナゲ、内面はナゲ	多	多			第5次調査S1007	一括	
841	2003	SH120	養生土器	型	29.0	103+e	外面はヨコナゲ・ナメ方向のハケ、内面はヨコナゲ・ナゲ	多	多			第5次調査S1007	26	
841	2004	SH120	養生土器	型	28.0	60+e	外面はミガキ・ヨコナゲ、貼付突起、内面はナゲ	少	少		外側に片盛りあり	第5次調査S1007	一括	
841	2005	SH120	養生土器	型	194	60	128	外面はヨコナゲ・ナメ方向のハケ・ナゲ、内面はヨコナゲ・ナゲ	多	多			第5次調査S1007	13・49
841	2006	SH120	養生土器	型	104.0	165	138.0	外面はヨコナゲ・ナメ方向のハケ・ナゲ、内面はヨコナゲ・ナゲ	多	多			第5次調査S1007	一括
841	2007	SH120	養生土器	型	106.0	161	104.0	外面はヨコナゲ・ナゲ方向のハケ・ナゲ、内面はヨコナゲ・ナゲ	少	少	少		第5次調査S1007	3・4・6・9・33
841	2008	SH120	養生土器	型	102.0	111	172.5	外面はヨコナゲ・ナゲ方向のハケ・ナゲ、内面はヨコナゲ・工具ナゲ	少			内面にスス付着	第5次調査S1007	17
841	2009	SH120	養生土器	型	11.3	115	16.8	外面はナゲ方向のハケ・ナゲ、内面はヨコナゲ・指オキエナゲ	少	少	少		第5次調査S1007	16
841	2010	SH120	養生土器	型	102.0	118	170.0	外面はヨコナゲ・ナゲ方向のハケ・ナゲ、内面はヨコナゲ・ナゲ	少	少	少		第5次調査S1007	16・47
841	2011	SH120	養生土器	型	(7.5)	149	(8.0)	外面はヨコナゲ・ナメ方向のハケ、内面はヨコナゲ・ナゲ	多	多			第5次調査S1007	一括
844	2018	SB14	養生土器	型				外面はヨコナゲ・ナゲ方向のハケ、内面はヨコナゲ・丁張ナゲ	少	少			第3次調査SB205	P9
844	2019	SB14	養生土器	型	6.4+e	(6.5)	外面はナゲ方向のハケ・ヨコナゲ、内面はナゲ	少	多			第3次調査SB236	P1	
846	2020	SB15	養生土器	型	3.8+e	(7.0)	外面はナゲ方向のハケ・ヨコナゲ、内面はナゲ	少	少	多		第3次調査SB252	P10	
846	2021	SB15	養生土器	型				外面はナゲ方向のミガキ、内面はナゲ	少	少	少	外側に赤色染料を施している	第3次調査SB242	P8
846	2024	SB16	養生土器	型				外面はヨコナゲ・方形突起、内面はナゲ	少	少			第3次調査SB243	P22
846	2025	SB16	養生土器	型				外面はヨコナゲ・工具ナゲ・丁張突起、内面は丁張ナゲ・ヨコナゲ	少	少			第3次調査SB253	取P2

No.	年度	名称	種別	大会名・種別			賞状・表彰状の付与	種別			備考	実施年度	備考	
				種別	種別	種別		種別	種別	種別				
8-68	2006	SB16	学生上級	美			外周はヨコナテ・タテ後ヨコナテ・タテ方向のハケ・内周はヨコナテ・丁字交差点・指圧	多			外周にスス付書	第3次調査SH53	P11	
8-68	2007	SB16	学生上級	美			外周はヨコナテ・タテ方向のハケ・内周はヨコナテ・ヨコナテ	多	少			第3次調査SH53	P9	
8-68	2008	SB16	学生上級	美			外周はヨコナテ・タテ方向のハケ・内周はヨコナテ・ナテ	少	少	少		第3次調査SH53	P4	
8-68	2009	SB16	学生上級	美			外周はヨコナテ・ナテ・内周はヨコナテ・ナテ	少	少			第3次調査SH53	P7	
8-68	2010	SB16	学生上級	美		6.4+e	(6.0)	外周はヨコナテ方向のハケ・ヨコナテ・内周は丁字交差点・ナテ	少		多		第3次調査SH53	P9
8-68	2011	SB16	学生上級	総合	(8.4)	5.3+e		外周はヨコナテ・タテ方向のハケ・内周はナテ・指圧区・ヨコナテ	少	少	少		第3次調査SH53	P4
8-70	2004	SB17	学生上級	美		5.0+e	(38.8)	外周はタテ方向のハケ・ナテ・内周はナテ・ヨコ方向のハケ	少	多			第3次調査SH54	P10
8-77	2035	SK365	学生上級	美		7.0+e	6.0	外周はナテ・内周は丁字交差点・ナテ・指圧区	少	少		外周に彩色紙を貼付している	第3次調査SK156	1
8-77	2036	SK365	学生上級	美				外周はヨコナテ・内周はヨコナテ	少	少		外周にスス付書	第3次調査SK156	26
8-77	2037	SK365	学生上級	美		5.0+e	(6.9)	外周はタテ方向のハケ・ナテ・内周はナテ・指圧区	少	少			第3次調査SK156	11
8-79	2038	SK366	学生上級	美	(19.6)			外周はタテ方向のハケ・ヨコ方向のハケ・内周はヨコナテ・ヨコナテ	多		多		第3次調査SK157	6・9・10
8-79	2039	SK366	学生上級	美				外周はナテ・ヨコナテ・内周はヨコナテ・ナテ・指圧区	少				第3次調査SK157	一括
8-79	2040	SK366	学生上級	美		19.4	6.6+e	外周はタテ方向のハケ・内周はナテ・ヨコナテ	多	多			第3次調査SK157	3・10
8-81	2041	SK367	学生上級	美				外周はナテ・ナテ後ハケ・ヨコナテ・内周はヨコナテ・ヨコナテ	多		多	内外周丹塗り	第1次調査SK399	一括
8-81	2042	SK367	学生上級	美	(36.0)	7.7+e		外周はタテハケ・ヨコナテ・内周はヨコナテ・指圧区	多		多		第1次調査SK399	一括
8-81	2043	SK367	学生上級	美		11.3+e	5.9	外周はナテ・内周はナテ	多				第1次調査SK399	一括
8-81	2044	SK367	学生上級	総合	(46.0)	3.2+e		外周はヨコナテ・美・内周はヨコナテ	少	多		外周にスス付書	第1次調査SK399	一括
8-81	2045	SK367	学生上級	美	(22.2)	3.7+e		外周はヨコナテ・タテハケ・内周はヨコナテ・ナテ	少	多		外周にスス付書	第1次調査SK399	一括
8-81	2046	SK367	学生上級	美	(31.0)	20.2+e		外周はナテ・ヨコナテ・内周はナテ・ヨコナテ	少	多		外周にスス付書	第1次調査SK399	一括
8-81	2047	SK367	学生上級	美	(30.6)	10.0+e		外周はヨコナテ・タテハケ・美・内周はヨコナテ・ナテ・指圧区	少	多	少	外周に墨付	第1次調査SK399	一括
8-81	2048	SK367	学生上級	美		4.8+e	6.8	外周はナテ・ヨコナテ・内周はナテ・指圧区	多		多	外周に丹塗り	第1次調査SK399	一括
8-81	2049	SK367	学生上級	美		6.3+e	(8.8)	外周はタテハケ後ヨコナテ・ヨコナテ・内周はハケナテ	少	多			第1次調査SK399	一括
8-81	2050	SK367	学生上級	美		9.7+e	7.9	外周はタテハケ・ヨコナテ・ナテ・ナテ・内周はナテ・指圧区	少	多	多	外周にスス付書	第1次調査SK399	一括
8-81	2051	SK367	学生上級	美	(26.6)	6.8+e		外周はナテ・ヨコナテ・ヨコナテ後ハケ・美・内周は丁字交差点・ヨコナテ後ハケ・ヨコナテ	多		多	内外周丹塗り	第1次調査SK399	一括
8-81	2052	SK367	学生上級	美	(11.2)	4.0+e		外周は不明(新築)・内周はナテ・ヨコナテ・指圧区	多				第1次調査SK399	一括
8-81	2053	SK367	学生上級	美	(11.2)	5.0+e		外周は不明(新築)・内周はナテ・ヨコナテ	少	多		二次補修	第1次調査SK399	一括
8-81	2054	SK367	学生上級	総合		7.6+e	13.0	外周はタテハケ・ヨコナテ・内周はヨコナテ・ナテ・ヨコナテ・指圧区	少	多			第1次調査SK399	一括
8-83	2057	SK369	学生上級	美		4.7+e		外周はヨコナテ・内周はヨコ方向のナテ	少	少	少		第1次調査SK110	一括
8-83	2058	SK369	学生上級	美		2.3+e		外周はヨコナテ・内周はヨコナテ・ヨコミギ後ハケ(暫定)	少	少	少	内外周に丹塗りあり 外周にスス付書	第1次調査SK110	一括
8-83	2059	SK369	学生上級	美		3.9+e	(6.5)	外周はナテ・ヨコナテ・ハケ・内周はナテ	少	少	少		第1次調査SK110	一括
8-84	2060	SK370	学生上級	美		6.1+e	(7.0)	外周はナテ方向のハケ・ヨコナテ・ナテ・内周はナテ	多	多		外周にスス付書	第5次調査SH49	一括
8-84	2061	SK370	学生上級	美		5.9+e	(7.2)	外周はナテ方向のハケ・ヨコナテ・内周はナテ	多	多			第5次調査SH49	一括
8-84	2062	SK370	学生上級	美		8.3+e		外周はヨコナテ・船付三角交差点・内周はナテ	多	多		外周に丹塗りあり	第5次調査SH49	一括
8-84	2063	SK370	学生上級	美	(8.8)	4.0	(8.8)	外周はハケミギ(暫定)・内周はナテ	多	多			第5次調査SH49	P1
8-88	2069	SK373	学生上級	美		5.8+e	8.0	外周は丁字交差点・内周は工具ナテ・指圧区	少	少			第3次調査SK142	34
8-88	2070	SK373	学生上級	美	(20.7)	8.3+e		外周はヨコナテ・タテ方向のハケ後ナテ・内周はヨコナテ・ナテ	少	少	少		第3次調査SK142	15

品名	規格	数量	単位	寸法	重量	材料			備考					
						種別	仕様	状態						
8-88	2071	SK373	鉄生土器	壺	87×e	72	外周はナメ方向のハケ・ヨコナゲ・ナゲ、内周はナメ	多	多	多	第3次調査SK142	16		
8-88	2072	SK373	鉄生土器	壺	79×e	70	外周はナメ方向のハケ・ヨコナゲ・ナゲ、内周はナメ	多	多	多	第3次調査SK142	20		
8-88	2073	SK373	鉄生土器	壺	73×e	(70)	外周はナメ方向のハケ・ヨコナゲ、内周はナメナゲ	多	少	少	第3次調査SK142	59		
8-88	2074	SK373	鉄生土器	壺	78×e	73	外周はナメ方向のハケ・ヨコナゲ・ナゲ、内周はナメ	多	多	少	第3次調査SK142	46		
8-88	2075	SK373	鉄生土器	壺	55×e	83	外周はナメ方向のハケ・ヨコナゲ、内周はナメ	多	多	少	第3次調査SK142	56		
8-88	2076	SK373	鉄生土器	壺	63×e	68	外周はヨコナゲ・ナゲ方向のハケ、内周はナメ	少	少	少	第3次調査SK142	32		
8-88	2077	SK373	鉄生土器	壺			外周はヨコナゲ・ミダキ、内周はヨコナゲ				第3次調査SK142	46		
8-90	2079	SK374	鉄生土器	壺	11×e	a	外周はヨコナゲ、内周はヨコナゲ	多	多		第3次調査SK149	一括		
8-90	2080	SK374	鉄生土器	壺	27×e	a	外周はヨコナゲ・ナゲ、内周はナメ方向のハケ・ナゲ	多	多		第3次調査SK149	一括		
8-90	2081	SK374	鉄生土器	壺	61×e	a	外周はヨコナゲ・ナメ方向のハケ、内周はヨコナゲ・ナゲ	多	多		第3次調査SK149	7		
8-90	2082	SK374	鉄生土器	壺	38×e	a	外周はヨコナゲ、内周はヨコナゲ・ナゲ	多	多	少	第3次調査SK149	14		
8-90	2083	SK374	鉄生土器	壺	55×e	a	外周はヨコナゲ・ナメ方向のハケ、内周はヨコナゲ	多	多		第3次調査SK149	28		
8-92	2086	SK375	鉄生土器	壺	(16.6)	6.7	外周はヨコナゲ、内周はヨコナゲ	多	多		第3次調査SK147	16		
8-92	2087	SK375	鉄生土器	壺	(26.4)	31.3	(57)	外周はヨコナゲ・変形・ナゲ方向のナゲ・ナゲ、内周はヨコナゲ・底冠縁・工具ナゲ	少	少		第3次調査SK147	6・17・21・23	
8-92	2088	SK375	鉄生土器	壺	(21.0)	194×e	a	外周はヨコナゲ・ナゲ方向のハケ・ナゲ、内周はヨコナゲ・ナゲ	少	少		第3次調査SK147	2・23・26	
8-92	2089	SK375	鉄生土器	壺	26.6	182×e	a	外周はヨコナゲ・ナゲ方向のハケ・ナゲ、内周はヨコナゲ・工具ナゲ	少	少	少	第3次調査SK147	23・26	
8-92	2090	SK375	鉄生土器	壺	(31.0)	119×e	a	外周はヨコナゲ・ナゲ方向のハケ、内周はヨコナゲ・ナゲ	多	少	少	第3次調査SK147	20,21	
8-92	2091	SK375	鉄生土器	壺	(31.1)	42×e	a	外周はヨコナゲ・底冠縁・ナゲ、内周はヨコナゲ・ナゲ	多	多		第3次調査SK147	23	
8-92	2092	SK375	鉄生土器	壺	62×e	72	外周はナメ方向のハケ・ヨコナゲ・ナゲ、内周はナメ	多	多		第3次調査SK147	15		
8-95	2095	SK376	鉄生土器	壺	35×e	(101)	外周はナメ方向のハケ、内周はナメ	少	少	少	第3次調査SK145	15		
8-95	2096	SK376	鉄生土器	壺			外周はヨコ方向のミダキ・頸部・近于突部、内周はヨコナゲ・ナゲ				第3次調査SK145	2		
8-95	2097	SK376	鉄生土器	壺			外周はヨコナゲ、内周はヨコナゲ	少	少		第3次調査SK145	14		
8-97	2098	SK377	鉄生土器	壺	(24.2)	51×e	a	外周はヨコナゲ・ナゲ方向のハケ、内周はヨコナゲ・ナゲ	少	少		第3次調査SK155	2	
8-97	2099	SK377	鉄生土器	壺	26.4	41×e	a	外周はヨコナゲ・ナゲ方向のハケ、内周はヨコナゲ・ナゲ	少	少		第3次調査SK155	1	
8-100	2100	SK379	鉄生土器	壺	61×e	a	外周はヨコナゲ 変形・ヨコ方向のナゲ、内周はヨコ方向のナゲ	少	少	少	第1次調査SK108	10		
8-100	2101	SK379	鉄生土器	壺	11.9×e	a	外周はハケ目縁とミダキ・ヨコ方向のミダキ 変形、内周はヨコナゲ・ナゲ	少	少	少	内周：スス付着	第1次調査SK108	2	
8-100	2102	SK379	鉄生土器	壺	82×e	a	外周はヨコナゲ ハケ目 突部、内周はヨコナゲ ナゲ	少	少	少	外周：スス付着	第1次調査SK108	9	
8-100	2103	SK379	鉄生土器	壺	(22.4)	64×e	a	外周はヨコナゲ ハケ目、内周はヨコナゲ ナゲ	少	少	少	外周：スス付着	第1次調査SK108	4
8-100	2104	SK379	鉄生土器	壺	77×e	(82)	外周はハケ目 ヨコナゲ ナゲ、内周はナメ	少	少	少	第1次調査SK108	一括		
8-102	2108	SK380	鉄生土器	壺	(28.4)	43.8	9.4	外周はナメ ヨコナゲ ナゲ方向のミダキ 変形・ヨコ方向のミダキ 変形・ヨコ方向のミダキ 変形・ヨコ方向のミダキ 変形	多	多	多	外周：底冠縁	第13次調査SK307	一括
8-103	2109	SK380	鉄生土器	壺	33.5	36.6	6.0	外周はミダキ突部 変形・ヨコ方向のミダキ 変形・ヨコ方向のミダキ 変形	多	多	少	内周：再磨り	第13次調査SK307	一括
8-103	2110	SK380	鉄生土器	壺	23.4×e	11.6	a	外周はナメハケ ヨコナゲ・ナゲ、内周はナメ	多	多		第13次調査SK307	一括	
8-105	2111	SK381	鉄生土器	壺				外周はナメ 丁字ナゲ、内周はナゲ 底冠縁	少	少	少	第1次調査SK107	一括	
8-105	2112	SK381	鉄生土器	壺	4.6×e	a		外周はヨコナゲ ナゲ 突部、内周はヨコナゲ ナゲ	少	多	多	第1次調査SK107	一括	
8-105	2113	SK381	鉄生土器	壺	(21.0)	57×e	a	外周はヨコナゲ ナゲハケ目、内周はヨコナゲ ナゲ	少	少		第1次調査SK107	一括	
8-105	2114	SK381	鉄生土器	壺	7.5×e	(7.0)	a	外周はナメハケ目 ヨコナゲ・ナゲ、内周はナメ	少	少	多	第1次調査SK107	一括	
8-105	2115	SK383	鉄生土器	壺	3.8×e	a		外周はハケ目 ヨコナゲ、内周はヨコナゲ ナゲ	少	少	少	外周：スス付着	第1次調査SK108	一括



No.	品名	規格	寸法	重量	単位	備考	検査項目			検査結果	検査回数	検査内容
							目視	測定	試験			
8-114	2137	SK386	養生土器	鉢			外面はヨコナデ・指汗取・ナデ、内面は工具によるナデ・ヨコナデ	多	多	少		第3次調査SK154 14
8-114	2138	SK386	養生土器	鉢台	(6.4)	6.4+a	外面はヨコナデ・タテ方向のハケ、内面はナデ・鏡り度・ヨコナデ	多	多	多		第3次調査SK154 27
8-118	2163	SK388	養生土器	薬	(29.2)	5.3+a	外面はヨコナデ・工具ナデ、内面はヨコナデ・ナデ			少	外側にスス付着	第3次調査SK158 2
8-118	2164	SK388	養生土器	鉢台		5.4+a (10.3)	外面はヨコナデ・タテ方向のハケ・ナデ、内面はヨコナデ	少	少			第3次調査SK158 1
8-120	2165	SK389	養生土器	薬	(28.4)	15.5+a	外面はヨコナデ・ナメ方向のハケ・ナデ、内面はヨコナデ・ナデ	多	少		外側にスス付着	第3次調査SK141 4・8
8-120	2166	SK389	養生土器	薬		9.6+a 7.6	外面はナメ方向のハケ・ヨコナデ・ナデ、内面はナメ	多	多			第3次調査SK141 10
8-121	2167	SK390	養生土器	薬	(21.2)	7.3+a	外面はヨコナデ・タテ方向のハケ、内面は丁家ナデ・ヨコナデ	少	多	少	外側にスス付着	第3次調査SK153 1
8-121	2168	SK390	養生土器	小皿	(7.8)	6.5 (4.7)	外面はヨコナデ・ヨコ方向のミガキ・ナデ、内面はナデ・指汗取・ヨコナデ	少	多	少	内外面に赤色顔料を塗す	第3次調査SK153 3
8-124	2169	SK391	養生土器	高坪	110/230	7.0+a	外面はヨコナデ・ミガキ、内面はナデ・ヨコナデ・指汗取	少	多	少		第3次調査SK152 1
8-126	2170	SK392	養生土器	薬	(22.6)	7.2+a	外面はヨコナデ・タテ方向のハケ、内面はヨコナデ・工具ナデ		少	少	外側にスス付着	第3次調査SK144 4
8-126	2171	SK392	養生土器	薬			外面はヨコナデ・タテ方向のハケ、内面はヨコナデ・ナデ	少	少	少		第3次調査SK144 一括
8-126	2172	SK392	養生土器	高坪			外面はナメ方向のミガキ、内面はヨコ方向のミガキ	少	少	少		第3次調査SK144 2
8-127	2173	SK393	養生土器	皿		4.4+a (7.0)	外面はナデ (薬種)、内面はナデ (摩滅)	多	多	多	内外ともに摩滅	第3次調査SK148 2
8-127	2174	SK393	養生土器	薬		8.1+a 7.2	外面はタテ方向のハケ・ヨコナデ、内面はナデ	少	少	少		第3次調査SK148 1
8-127	2175	SK393	養生土器	薬		5.6+a	外面はヨコナデ・頭目目録付表裏、内面はナデ	多	多	多		第3次調査SK148 一括
8-127	2176	SK393	養生土器	薬		5.0+a (6.6)	外面はナメ方向のハケ (摩滅)・ナデ、内面はナデ	多	多	多	外周摩滅	第3次調査SK148 3
8-130	2177	SK394	養生土器	薬	(28.4)	11.5+a	外面はヨコナデ・タテ方向のハケ・ナデ、内面はヨコナデ・工具ナデ	多	多	少		第3次調査SK146 2-7
8-130	2178	SK394	養生土器	薬	(18.4)	6.1+a	外面はヨコナデ・ナデ、内面はヨコナデ・工具ナデ	少	少	少		第3次調査SK146 1
8-130	2179	SK394	養生土器	薬	(19.0)	7.1+a	外面はヨコナデ・タテ方向のハケ・ナデ、内面はヨコナデ・ナデ		少	少		第3次調査SK161 12
8-130	2180	SK394	養生土器	鉢台	9.5	16.1 (12.8)	外面はヨコナデ・ナメ方向のハケ、内面はナデ・指汗取	多	多	多		第3次調査SK146 9
8-130	2181	SK394	養生土器	鉢台		15.7+a 10.2	外面はナメ方向のハケ (摩滅)、内面は工具ナデ・ナデ	多	多	多		第3次調査SK146 10
8-130	2182	SK394	養生土器	鉢台	(9.4)	8.7+a	外面はヨコナデ・タテ方向のハケ・ナデ、内面は指汗取・ナデ			少		第3次調査SK146 4
8-132	2184	SK395	養生土器	薬	(19.1)	19.1 8.0	外面はヨコナデ・ハケ・工具ナデ、内面はヨコナデ・工具ナデ	多	多	多		第3次調査SB55 36
8-132	2185	SK395	養生土器	薬	(28.4)	15.7+a	外面は薬種・ヨコ方向のミガキ・ヨコ方向のミガキ・タテ方向のミガキ、内面は丁家ナデ・指汗取			少		第3次調査SB55 34・25
8-132	2186	SK395	養生土器	薬	(29.0)	8.4+a	外面はヨコナデ・タテ方向のハケ、内面は丁家ナデ・ヨコナデ	少	少	少	外側にスス付着	第3次調査SB56 35
8-132	2187	SK395	養生土器	薬			外面はヨコナデ・タテ方向のハケ、内面はヨコナデ・指汗取	少	少	少		第3次調査SB56 13
8-132	2188	SK395	養生土器	薬			外面はヨコナデ・ヨコ方向のミガキ、内面はナデ・ヨコナデ	少	少	多	外側にスス付着	第3次調査SB56 1
8-132	2189	SK395	養生土器	薬	(23.2)	7.2+a	外面はヨコナデ・タテ方向のハケ、内面はヨコナデ・ナデ	少	少	少		第3次調査SB56 6
8-132	2190	SK395	養生土器	鉢	(23.8)	12.5+a	外面はヨコナデ・タテ方向のハケ、内面はヨコナデ・丁家ナデ	少	少	少		第3次調査SB56 一括
8-132	2191	SK395	養生土器	薬			外面はヨコ方向のハケ・タテ方向のハケ、内面はナメナデ・ヨコ方向のハケ	多	多	多		第3次調査SB55 25・26
8-132	2192	SK395	養生土器	鉢			外面はナデ・不明、内面はナデ・指汗取	多	少	多	外面に赤色顔料を塗している	第3次調査SK146 15
8-132	2193	SK395	養生土器	鉢			外面はヨコナデ・タテ方向のミガキ、内面はヨコナデ・工具によるナデ	少	少	少		第3次調査SK146 一括
8-132	2194	SK395	養生土器	成し皿			外面はヨコナデ・タテ方向のハケ、内面はハケ・ナデ	少	少	少		第3次調査SK146 7



No.	種別	名称	種	寸法 (mm)		質量 (kg)	用途・設置の状況	寸法 (mm)			備考	規格・標準 (JIS)		
				外径	内径			長さ	外径	長さ			寸法	
8-137	2196	SK396	養生土脚	並	132+α	(6.0)	内面はミガキ・ナダ、内面は 圧延レナダ	少	少			第3次調査SK146	2・3	
8-137	2198	SK397	養生土脚	縦	(26.0)	6.5+α	外面はヨコナダ・沈没、内面 はミガキ・防付内帯・ヨコ 方向のハケ	多	多			第3次調査SK151	1	
8-137	2199	SK397	養生土脚	横	(16.4)	3.6+α	外面はヨコ方向のミガキ・ヨ コナダ、内面はヨコ方向のミ ガキ・ナダ	少	少	少		第3次調査SK151	23	
8-137	2200	SK397	養生土脚	縦			外面はタテ方向のハケ・ヨコ ナダ、内面はヨコ方向のハ ケ・ヨコナダ	少	少		外面にスス付帯	第3次調査SK151	16	
8-137	2201	SK397	養生土脚	横	(31.6)	11.6+α	外面はヨコナダ・三角突起 ・ハケ後ヨコナダ・タテ方向 のハケ、内面はナダ・鋼底 ・ヨコナダ	少	少	少		第3次調査SK151	17	
8-137	2202	SK397	養生土脚	縦	(25.0)	8.9+α	外面はヨコナダ・ナメ方角 のハケ、内面はヨコナダ・ナ ダ	多	多			第3次調査SK151	12・14	
8-139	2203	SK398	養生土脚	横			外面は突帯・ヨコ方向のミガ キ、内面はナダ	少	少	少	黒く塗っている	第3次調査SK159	一括	
8-139	2204	SK398	養生土脚	並			外面はヨコナダ、内面はヨコ ナダ			少		第3次調査SK159	一括	
8-139	2205	SK398	養生土脚	並			外面はヨコナダ・タテ方向 のハケ後ナダ、内面はヨコナ ダ・ナダ	少	少	少		第3次調査SK159	一括	
8-139	2206	SK398	養生土脚	小取	7.6	9.2	4.6	外面はヨコナダ・タテ方向 のハケ、内面はヨコナダ・防 付帯・ナダ	少	少	少		第3次調査SK159	一括
8-139	2207	SK398	養生土脚	小取	10.8	8.2	4.6	外面はヨコナダ・工具による 調整の成ミガキ・内面は工 具によるナダ・ナダ・ヨコ方 向のハケ	少	少	少		第3次調査SK160	2
8-139	2208	SK398	養生土脚	小取	10.8	4.4	6.3	外面はタテ方向のハケ後ナ ダ、内面はナダ・防付帯	少	少	少		第3次調査SK159	2
8-141	2209	SK399	養生土脚	並			外面はヨコ方向のミガキ・突 帯、内面はナダ・防付帯	少	少	少		第4次調査SK1019	13	
8-141	2210	SK399	養生土脚	並		7.2+α	外面はミガキ、内面はナダ	多	多			第4次調査SK1019	4・7	
8-141	2211	SK399	養生土脚	高取			外面はヨコナダ、内面はヨコ ナダ	少	少	少		第4次調査SK1019	5	
8-141	2212	SK399	養生土脚	並	(30.0)	8.3+α	外面はヨコナダ・タテ方向 のハケ後ナダ、内面はヨコナ ダ・工具ナダ	少	少	少		第4次調査SK1019	8・9	
8-141	2213	SK399	養生土脚	並			外面はヨコナダ・タテ方向 のハケ、内面はヨコナダ・ナ ダ					第4次調査SK1019	一括	
8-141	2214	SK399	養生土脚	防付 帯?	(13.3)	15.0+α	外面はタテ方向のミガキ・ヨ コ方向のミガキ・防付帯等、 内面はヨコナダ・防付帯・防 付帯	少	多	多	内面の一部と外面 全部に赤色塗料あり	第4次調査SK1019	3	
8-141	2215	SK399	養生土脚	高取	(23.0)	5.6+α	外面はミガキ・ヨコナダ・ナ ダ、内面はミガキ	多	多		内面に丹塗りあり	第4次調査SK1019	1・2・12	
8-143	2218	SK400	養生土脚	並	(26.5)	10.7+α	外面はヨコナダ・ナメ方角 のハケ、内面はヨコナダ・タ テ方向のハケ	多	多		外面にスス付帯	第4次調査SK1018	3	
8-143	2219	SK400	養生土脚	並	(28.3)	4.4+α	外面はヨコナダ・ナメ方角 のハケ・工具底(鋼底埋込) 、内面はヨコナダ・ナダ	多	多			第4次調査SK1018	2	
8-145	2221	SK401	養生土脚	並口型		10.1+α	外面はナメ方角のミガキ ・内面はヨコナダ・ナダ・ 丁重ナダ・丁重底	少	少	少		第4次調査SK1004	6・28・24	
8-145	2222	SK401	養生土脚	並			外面はヨコナダ、内面はヨコ 方向のミガキ・ヨコナダ	少	少	少	内・外面に赤色塗 料あり	第4次調査SK1004	2	
8-147	2228	SK402	養生土脚	並口型	(35.3)	9.7+α	外面はヨコナダ・ミガキ、内 面はヨコナダ・ミガキ	多	多			第4次調査SK1002	19・38	
8-147	2224	SK402	養生土脚	並	(32.2)	4.0+α	外面はヨコナダ、内面はヨコ ナダ	多	多			第4次調査SK1002	51	
8-147	2225	SK402	養生土脚	並口型		7.0+α	外面はミガキ・ナダ、内面は ミガキ・ナダ	多	多			第4次調査SK1002	36	
8-147	2226	SK402	養生土脚	並?			外面はヨコナダ・ナダ・三角 突起、内面はヨコナダ・ナダ	少	少			第4次調査SK1002	1	
8-147	2227	SK402	養生土脚	並	(15.7)	16.8+α	外面はヨコナダ・ナダ、内面 はヨコナダ・ナダ	多	多		内面の一部と外面 に丹塗りあり	第4次調査SK1002	41・63	
8-147	2228	SK402	養生土脚	並	(37.4)	5.6+α	外面はヨコナダ・ナダ、内面 はヨコナダ・ナダ	多	多			第4次調査SK1002	42	
8-147	2229	SK402	養生土脚	並	(26.5)	7.3+α	外面はヨコナダ・タテ方向 のハケ、内面は丁重ナダ・ヨ コナダ	少	少			第4次調査SK1002	32	
8-147	2230	SK402	養生土脚	並		4.1+α	外面はヨコナダ・ナダ、内面 はヨコナダ・ナダ	多	多			第4次調査SK1002	一括	
8-147	2231	SK402	養生土脚	並口型		10.1+α	外面はナメ方角のミガキ ・内面はヨコナダ・ナダ・ 丁重ナダ・丁重底	少	少	少		第4次調査SK1002	22	
8-147	2232	SK402	養生土脚	並		6.1+α	6.7	外面はタテハケ・ヨコナダ、 内面はナメ方角のミガキ	少	少			第4次調査SK1002	11
8-147	2233	SK402	養生土脚	並		9.7+α	7.0	外面はナメ方角のハケ・ヨ コナダ・ナダ、内面はナダ	多	多			第4次調査SK1002	52

品名	規格	単位	寸法			材質	重量			備考	納入仕向	
			幅	高さ	奥行		重量	容積	体積			
8-147 2234	SK402	佛生土器	空	7.9 + a	7.5	外周はタナメ方向のハケ・ヨコナデ・ナデ、内周はナデ	多	多	多		第4次調査S1002	61
8-147 2235	SK402		蓋?			外周はヨコナデ・三角突帯、内周はヨコナデ・ナデ	少	少	少		第4次調査S1002	21
8-147 2236	SK402	佛生土器	蓋	1.5 + a		外周はヨコナデ、内周はヨコナデ	多	多	少	山形部に黒染あり	第4次調査S1002	55・60
8-147 2237	SK402	佛生土器	蓋	6.3 + a		外周はナデ・三角突帯付突帯、内周はナデ	多	多	多		第4次調査S1002	38
8-150 2242	SK403	佛生土器	(232)	10.7 + a		外周はヨコナデ・タナメ方向のハケ、内周はヨコナデ・ナデ	多	多	多	外周にスス付	第4次調査S1009	一括
8-150 2243	SK403	佛生土器	蓋			外周はタナメ方向のハケ・ヨコナデ、内周はナデ・ヨコナデ	少	多	多		第4次調査S1009	13
8-150 2244	SK403	佛生土器	蓋	7.0 + a	6.6	外周はタナメ方向のハケ・ヨコナデ、内周は工具ナデ・ナデ	少	多	多		第4次調査S1009	8・16
8-150 2245	SK403	佛生土器	蓋	7.1 + a	6.3	外周はタナメ方向のハケ・ヨコナデ、内周はナデ	少	少	少		第4次調査S1009	17
8-150 2246	SK403	佛生土器	蓋			外周はヨコナデ、内周はヨコナデ	少	少	少	内・外周に赤色染料あり	第4次調査S1009	一括
8-153 2249	SK405	佛生土器	皿	30.1 - a	5.3	外周はハラミギキ・突帯、乳孔、内周はハラミギキ・器底・ナデ・工具ナデ	少	少	少	器底後に乳一か所	第4次調査S1010	11
8-153 2250	SK405	佛生土器	皿	27.2	8.6	外周はナデ・器付突帯、内周はナデ(器底)	多	多	多	外周に黒染あり	第4次調査S1010	(S1010) 2・3・5・6・7・8・(S1009) 15
8-153 2251	SK405	佛生土器	蓋?			外周はタナメ方向のミガキ、内周はナデ・点	多	少	少		第4次調査S1010	1
8-154 2252	SK407	佛生土器	蓋	6.3 + a	5.7	外周はタナメ方向のハケ・ヨコナデ、内周は工具ナデ・ナデ	少	少	少		第4次調査S1015	1
8-137 2253	SK408	佛生土器	蓋 (28.9)	12.0 + a		外周はヨコナデ・タナメ方向のハケ・ナデ、ナデ	少	少	少	外周にスス付	第4次調査S1012	3
8-159 2254	SK409	佛生土器	皿	12.2 + a	6.2	外周はタナメ方向のハケ・ナデ、内周はナデ	多	多	多		第4次調査S1013	1・3
8-159 2255	SK409	佛生土器	蓋 (25.4)	2.1 + a		外周はヨコナデ、内周はヨコナデ	少	多	多		第4次調査S1013	一括
8-163 2256	SD22	佛生土器	蓋	9.6	10.1 + a	外周はヨコナデ ナデハク 1条の器突帯、内周はナデヨコナデ 器ナデ	少	少	少	外周と内周の一部に赤色染料	第1次調査SD-01	一括
8-163 2257	SD22	佛生土器	皿 (38.8)	9.8 + a		外周はヨコナデ ナデハク 突帯、内周はナデ	少	少	少		第1次調査SD-01	一括
8-163 2258	SD22	佛生土器	皿			外周はヨコナデ 器底、内周はヨコナデ ナデ	少	少	少		第1次調査SD-01	一括
8-163 2259	SD22	佛生土器	皿			外周はナデ ヨコナデ、内周はナデ ヨコナデ	少	多	多		第1次調査SD-01	一括
8-163 2260	SD22	佛生土器	蓋	4.8 + a		外周はナデ、内周はナデ	多	多	多	丹塗りが剥落	第1次調査SD-01	一括
8-163 2261	SD22	佛生土器	蓋	4.9 + a		外周はナデ、内周はナデ	多	多	多		第1次調査SD-01	一括
8-163 2262	SD22	佛生土器	皿	3.7 + a		外周はナデ、内周はナデ	多	多	多		第1次調査SD-01	一括
8-163 2263	SD22	佛生土器	蓋	3.1 + a		外周はナデ、内周はナデ	多	多	多		第1次調査SD-01	一括
8-163 2264	SD22	佛生土器	底付皿 (31.0)	5.4 + a		外周はヨコナデ ナデ 器底、内周はヨコナデ 工具によるナデ ナデ	多	多	多		第1次調査SD-01	一括
8-163 2265	SD22	佛生土器	高杯 (29.5)	4.2 + a		外周はミガキ ナデ、内周はミガキ ナデ	多	多	多	内周に丹塗りあり	第1次調査SD-01	一括
8-163 2266	SD22	佛生土器		6.6 + a		外周はヨコナデ 器底縁しく 器底部あり 乳付・三角突帯、内周はヨコナデ ナデ	多	多	多		第1次調査SD-01	一括
8-163 2267	SD22	佛生土器	蓋			外周はヨコナデ、内周はヨコナデ	少	少	少		第1次調査SD-01	一括
8-163 2268	SD22	佛生土器	蓋			外周はヨコナデのミガキ ヨコナデ 器突帯、内周はナデ	少	少	少	内周に赤色染料あり	第1次調査SD-01	一括
8-163 2269	SD22	佛生土器	皿	3.8 + a	16.0	外周はミガキ、内周はナデ	多	多	多	内周に丹塗りあり	第1次調査SD-01	一括
8-163 2270	SD22	佛生土器	皿 (30.0)	9.3 + a		外周はヨコナデのミガキ ヨコナデ 器突帯、内周はナデ	少	少	少	内周に赤色染料あり	第1次調査SD-01	一括
8-163 2271	SD22	佛生土器	蓋 (15.6)	5.3 + a		外周はヨコナデ ナデ、内周はナデ ヨコナデ 器底	多	多	少		第1次調査SD-01	一括
8-163 2272	SD22	佛生土器	蓋			外周はヨコナデ ナデ、ヨコハク ナデハク 1条の器付三角突帯、内周は工具によるヨコナデ ヨコナデ	多	多	多	内周に赤色染料あり 内周にスス付	第1次調査SD-01	一括
8-163 2273	SD22	佛生土器	皿			外周はナデ ヨコナデ ナデハク 器底縁の器底部、内周はヨコナデ ナデ	多	少	多		第1次調査SD-01	一括
8-163 2274	SD22	佛生土器	蓋			外周は工具によるヨコナデ ナデハク 1条の器付三角突帯、内周は工具によるヨコナデ 器底ナデ	少	少	少		第1次調査SD-01	一括
8-163 2275	SD22	佛生土器	蓋 (33.6)	5.0 + a		外周はヨコナデ ナデ 器付突帯、内周はヨコナデ ナデ	多	多	多		第1次調査SD-01	一括

品名	数量	標準	仕様	寸法			備考	単位			備考	備考	
				全長	幅	厚		個	箱	箱			
8-163 2276	SD22	養生土器	薬	(35.0)	5.3+e		外面は工具によるヨコナテ タテハケ、貼付工角突、内 面はヨコナテ、工具によるヨ コナテ	少	多	多		第1次調査SD-01	一括
8-163 2277	SD22	養生土器	薬	(32.4)	6.4-a		外面はヨコナテ、ナテ、タテ 方向のハケ、内面はヨコナテ 主に横方向のケズリ、ナテ 側圧面	多	多	多		第1次調査SD-01	一括
8-163 2278	SD22	養生土器	薬		5.5+e	5.4	外面はナメ方角のハケ、工 具ナテ、内面はナテ	多	多			第1次調査SD-01	一括
8-163 2279	SD22	養生土器	薬		5.0+e	(7.2)	外面はナメ方角のハケ、ナ テ、内面はナテ、側圧面	多	多		養生土器、外面に スチ付	第1次調査SD-01	一括
8-163 2280	SD22	養生土器	薬		6.1+e	7.5	外面はナメ方角のハケ、ナ テ、内面はナテ	多	多			第1次調査SD-01	一括
8-163 2281	SD22	養生土器	薬		6.2+e	7.0	外面はナメ方角のハケ、ナ テ、内面はナテ	多	多		養生土器	第1次調査SD-01	一括
8-163 2282	SD22	養生土器	薬		5.9+e	7.2	外面は側面、内面はナテ	多	多		養生土器	第1次調査SD-01	一括
8-163 2283	SD22	養生土器	薬		7.0+e	9.5	外面はナメ方角のハケ、ヨコナテ ナテ、内面はナテ、側面ナテ、ナ テ、側圧面	少	多	多	内、外面に非色面 付あり	第1次調査SD-01	一括
8-164 2284	SD22	養生土器	薬	(27.0)	8.9+e		外面はナテ、ヨコナテ、ヘラ ケズリ、ヘラミガキ、側圧 面、内面はヨコナテ、ヘラミ ガキ、ヘラケズリ、ナテ	多	多	多		第1次調査SD-01	一括
8-164 2285	SD22	養生土器	薬		4.5+e		外面はハケ、ナテ、内面は上 具ナテ、ナテ	多	多	多		第1次調査SD-01	一括
8-164 2286	SD22	養生土器	薬		4.8+e	(9.6)	外面はナテ、ケテハケ、内面 は工具によるヨコナテ、ナテ	多	多	多		第1次調査SD-01	一括
8-164 2287	SD22	養生土器	薬		5.7+e		外面はナメ方角のハケ、ケ テ方向のハケ、内面はミガキ 側り面	少	少		内側に付あり	第1次調査SD-01	一括
8-164 2288	SD22	養生土器	薬		1.00+e	9.5	外面はナメ方角のハケ、ヨコナテ ナテ、内面はナテ	少	少	少		第1次調査SD-01	一括
8-164 2291	SD22	養生土器	薬		3.6+e		外面は、内面は				シノダあり、金 的に貫入あり	第1次調査SD-01	一括
8-166 2300	SD24	養生土器	薬				外面はヨコナテ、内面はヨコ ナテ	少		少		第3次調査SD-01	1・20・21・22・ 28・62・63
8-166 2301	SD24	養生土器	薬	(11.0)	9.9+e		外面はナメ方角のハケ、ヨコ ナテ、内面はナテ、ヨコ方 向のハケ、側り面	少		少		第3次調査SD-01	5
8-166 2302	SD24	養生土器	薬				外面はヨコナテ、工具ナテ、 内面はヨコナテ					第3次調査SD-01	一括
8-166 2304	SD25	養生土器	薬	16.3	26.0		外面はヨコナテ、ケテ方向の ハケ、ナメ方角のハケ、内 面はヨコナテ、ハケ、ケズリ	多	少	多		第5次調査SD104	1
8-174 2305	6号調査品	土器器	薬	15.0	12.7	11.4	外面はヨコナテ、内面はヨコ ナテ、ヘラケズリ	多	少	少		第4次調査SD100	1
8-174 2306	6号調査品	土器器	薬	15.7	11.2	11.6	外面はヨコナテ、内面はヨコ ナテ、ヘラケズリ	少	少	少		第4次調査SD100	2
8-174 2307	6号調査品	土器器	薬	16.2	11.3+e		外面はヨコナテ、内面はヨコ ナテ、ヘラケズリ	少	少	少		第4次調査SD100	4
8-177 2312	7号調査品	土器器	薬	12.3	26.2		外面は工具によるヨコナテ、 ヨコナテ、ケテ方向のハケ、 ナテ、内面は工具によるヨコ ナテ、ハケ、ケズリ	少	少	少		第4次調査SD101	23
8-177 2313	7号調査品	土器器	薬		21.1+e		外面はナメ方角のハケ、内面 は側面ハケ、横いケズリ、側 り面	多	少	少		第4次調査SD101	1・2・6
8-177 2314	7号調査品	土器器	薬	(17.2)	4.0	11.2	外面は多方向のハケ、ナテ、 ナテ、内面は多方向のハケ、 ナテ、ヘラケズリ	少	少	多		第4次調査SD101	10
8-177 2315	7号調査品	土器器	薬		5.6+e	6.4	外面は側面、内面は下側ナ テ	少	少	少		第4次調査SD104	9
8-177 2316	7号調査品	土器器	薬		3.1+e	8.3	外面はヨコ方角のハケ、ナ テ、内面は工具ナテ、ナテ	多	少			第4次調査SD101	一括

四日市遺跡須恵器観表

遺跡名	調査年度	調査区画	調査位置	調査内容	調査結果	調査者	調査機関	
3-83	285	須恵器	須恵器				第9次調査1区 120 観測トレンチ	
3-115	306	須恵器	坏壺 (124)	42+a	胎形はロクロ 内面はヨコナ ア 外面はヨコナア、回転ヘ ラケズリ	胎土は灰石、白色粒子が少 量 色調は灰褐色 焼成は良 好	第9次調査4区3	
3-115	397	須恵器	坏壺 (298)	26+a	胎形はロクロ 内外ともにヨ コナア	胎土は白 1~3mmの白 色粒子が少量 色調は暗 灰色 焼成は良好	第9次調査4区1	
3-115	398	須恵器	坏壺	17+a	胎形はロクロ 内外ともにヨ コナア	胎土は白 1~2mmが少 量 色調は灰褐色 焼成 は良好で外壁に自然釉	第9次調査4区1	
3-115	399	須恵器	高坏 (74)	68+a	胎形はロクロ 口縁部はヨコ ナア 外面はヨコナア、ナ ズリ 内面はナア 胴部内面は ヨコナア	胎土は角閃石、灰石、赤 色粒子が少量 色調は ぶい灰色 焼成は良好	第9次調査4区1	
3-115	400	須恵器	高坏	70+a (102)	胎形はロクロ 内面はヨコナ ア、ナア 外面はナズリ	胎土は角閃石、灰石、赤 色粒子を含む 色調は灰 褐色 焼成は不良	第9次調査4区1	
3-115	401	須恵器	高坏	61+a (82)	胎形はロクロ 内面はヨコナ ア、ヘラ配子 外面はヨコナ ア	胎土は白色粒子が少量、 灰石が少量 色調は灰褐 色 焼成は良好	第9次調査4区1	
3-115	402	須恵器		58	466+a	胎形はロクロ 内面はヨコナ ア、ヘラ配子 外面はヨコナ ア、タタキ	色調は暗灰色 焼成は良 好	第9次調査4区1
3-115	403	須恵器	須恵器	117+a	144	胎形はロクロ 内外ともにヨ コナア	胎土は白色粒子が少量、 灰石に黒色粒子が多い 色調は灰褐色 焼成は良 好で自然釉により黒変、 節面の荒れあり	第9次調査4区1
3-115	404	須恵器	甕	24+a (64)	胎形はロクロ 内面はヨコナ ア、オウシ配 外面はヨコナ ア、ナズリ	胎土は灰石、白色粒子が少 量 色調は内面がぶい 灰色、外面が灰褐色 焼成は不良	第9次調査4区1	
3-116	410	須恵器	坏壺 (121)	38+a	胎形はロクロ 内面はヨコナ ア 外面はヨコナア、回転 ヘラケズリ	胎土は角閃石、灰石が少 量、石高が少量 色調は 灰褐色 焼成は良好	第9次調査4区2	
3-116	411	須恵器	坏壺 (130)		成形はロクロ 内外共にヨコ ナア	胎土は白色粒子が少量 色調は暗灰色 焼成は良 好	外周上部に少量の 打ち欠きと口縁部 の一部に打ち欠き あり	第9次調査4区 2・22 露上部
3-116	412	須恵器	坏壺 (135)	4.0	成形はロクロ 内面はヨコナ ア 外面は回転ヘラケズリ、 ヨコナア	胎土は白色粒子が少量 色調は暗褐色 焼成は良 好	第9次調査4区 2・22 露上部	
3-116	413	須恵器	坏壺	144	3.7	胎形はロクロ 内面はヨコナ ア 外面はヨコナア、一部口 縁ヘラケズリ、回転ヘラケ ズリ	胎土は角閃石、灰石、白 色粒子が少量、黒色粒子 が少量 色調は灰色 焼 成は不良	第9次調査4区②
3-116	414	須恵器	坏壺 (152)		成形はロクロ 内外共にヨコ ナア	胎土は白色粒子が少量 色調は暗褐色 焼成は良 好	第9次調査4区 22 露上部	
3-116	415	須恵器	坏壺 (167)	37+a	成形はロクロ 内面はヨコナ ア、ヨコナア	胎土は白色粒子が少量 色調は灰色 焼成は良好	第9次調査4区 2・22 露上部	
3-116	416	須恵器	坏壺 (1026)	22+a	胎形はロクロ 内外ともにヨ コナア	胎土は角閃石、灰石、白 色粒子が少量 色調は暗 褐色 焼成はやや不良	第9次調査4区 22露上部	
3-116	417	須恵器	坏壺 (140)	31+a	(160)	胎形はロクロ 内面はヨコナ ア 外面はヨコナア、回転ヘ ラケズリ	胎土は白色粒子が少量 石高が少量 色調は灰色 色調は良好	第9次調査4区 22 露上部
3-116	418	須恵器	坏壺 (140)	29+a	(160)	成形はロクロ 内面はヨコナ ア 外面はヨコナア、回転ヘ ラケズリ	胎土は灰石、白色粒子が少 量 色調は灰色 焼 成は良好	打ち欠き 第9次調査4区②
3-116	419	須恵器	坏壺 (116)	24+a	(160)	成形はロクロ 内外ともにヨ コナア	胎土は角閃石、灰石が少 量、白色粒子が少量 焼 成は良好	打ち欠き 第9次調査4区②
3-116	420	須恵器	坏壺 (120)	29+a	(140)	成形はロクロ 内面はヨコナ ア 外面はヨコナア、回転ヘ ラケズリ	胎土は灰石、白色粒子が少 量 色調は灰色 焼成 は良好	打ち欠き 第9次調査4区②
3-116	421	須恵器	高坏 (143)	17.7 (143)	成形はロクロ 内面はヨコナ ア、絞り痕 外面はヨコナ ア、胴部中央に泥線2本、口 縁部部に厚み 外から内へ泥 形部厚化した筒形の透かし が口縁に3ヶ所あると思われ る	胎土は白色粒子が少量 色調は灰色 焼成は良好	胴部端部に打ち欠 き4ヶ所あり	第9次調査4区 2・22 露上部
3-116	422	須恵器	高坏 (120)	2.7	成形はロクロ 内面はヨコナ ア、絞り痕 外面はヨコナ ア、泥線2本	胎土は白色粒子が少量 色調は灰色 焼成は良好 で内面に自然釉	第9次調査4区 22 露上部	
3-116	423	須恵器	高坏	57+a	9.6	胎形はロクロ 内外ともにヨ コナア	胎土は灰石、白色粒子が少 量 色調はぶい灰色一 部黄褐色 焼成は不良	第9次調査4区②

No.	種名	科名	学名	分布	生育	生育	葉の形状・葉脈		花の形状・色	果	採取地・標本番号
							葉の形状	葉脈			
3-116 424	狭葉藤	ハソウ	(13.8)				葉形はワカ 内面はヨコナデ、葉縁に鋭角歯 外面門部部一葉部はヨコナデ、葉縁に一葉下一葉上の縁部葉状を並列を成すで二葉に接する(有欠)		葉上は灰色細粒子が少量、色調は暗灰色、葉裏は暗灰色、葉縁は良好で外面に自然物		第9次調査4区2
3-116 425	狭葉藤	ハソウ			9.5		葉形はワカ 内面はヨコナデ、外面はヨコナデ、葉縁下方に鋭角ヘラケズリ後ろキ目 内面はヨコナデ、葉縁1.5mmの乳1ヶ所(乳の場に行ふ欠)		葉上は白色粒子が少量、色調は灰褐色、葉縁は適色		第9次調査4区2
3-116 426	狭葉藤	ハソウ		15.6+	e		葉形はワカ 内面はヨコナデ、乳1ヶ所あり 外面葉縁はヨコナデ、葉部一葉部にかけて鋭角ヘラケズリ 葉部に土着の保命珠あり		葉上は角閃石、長石、石英が少量、白色粒子が少量、色調は暗灰色、葉縁は良好		第9次調査4区2
3-117 427	狭葉藤	環状	5.0	13.3			葉形はワカ 内面はヨコナデ、外面ヨコナデ、葉縁中央は鋭角歯、葉縁は鋭角ヘラケズリ		葉上は石英、白色粒子が少量、長石が少量、色調は暗灰色、葉縁は良好	葉部は線状をなす、門脈環状の穴、口部全部打ち欠き	第9次調査4区2
3-117 428	狭葉藤	環状	5.0	13.9			葉形はワカ 内面はヨコナデ、外面はヨコナデ、葉縁ハカケズリ、後ろキ目		葉上は角閃石、長石、石英が少量、白色粒子が少量、色調は暗灰色、葉縁は良好	門脈環状の穴打ち欠き多くある	第9次調査4区2
3-118 431	狭葉藤	環状	(15.4)	2.6+	e		葉形はワカ 内面はヨコナデ、外面はヨコナデ、葉縁ハカケズリ、鋭角ヘラケズリ、ハカケズリ		葉上は白色粒子、褐色粒子が少量、色調は暗灰色、葉縁は良好		第9次調査4区3
3-118 432	狭葉藤	環状	(14.2)	3.2+	e		葉形はワカ 内面はヨコナデ、外面はヨコナデ、葉縁ハカケズリ		葉上は白色粒子が少量、色調は暗灰色、葉縁は良好		第9次調査4区3
3-118 433	狭葉藤	環状	(14.6)	2.8+	e		葉形はワカ 内外ともにヨコナデ		葉上は角閃石、白色粒子が少量、葉縁は良好で外面に自然物		第9次調査4区3
3-118 434	狭葉藤	環状	(14.8)	3.8			葉形はワカ 内面はヨコナデ、外面はヨコナデ、葉縁ハカケズリ、鋭角ヘラケズリ		葉上は石英、白色粒子が少量、色調は暗褐色、葉縁は良好		第9次調査4区3
3-118 435	狭葉藤	環状	(14.1)	4.3			葉形はワカ 内面はヨコナデ、外面はヨコナデ、葉縁ハカケズリ、鋭角ヘラケズリ、後ろキ目(有図)		葉上は長石、石英が少量、白色粒子が少量、色調は暗灰色、葉縁は良好		第9次調査4区3
3-118 436	狭葉藤	環状	(11.3)	3.15+	e		葉形はワカ 内外ともにヨコナデ		葉上は長石、白色粒子、褐色粒子が少量、色調は暗褐色、葉縁は良好		第9次調査4区3
3-118 437	狭葉藤	環状	(13.2)	3.75+	e		葉形はワカ 内面はヨコナデ、外面はヨコナデ、葉縁ハカケズリ		葉上は角閃石、白色粒子が少量、色調は暗褐色、葉縁は普通		第9次調査4区3
3-118 438	狭葉藤	環状		4.93+	e	(123)	葉形はワカ 内面はヨコナデ、外面はヨコナデ、カキ目		葉上は石英が少量、白色粒子が少量、色調は暗褐色、葉縁は良好で外面に自然物		第9次調査4区3
3-118 439	狭葉藤	有葉高杯	12.0	7.3+	e		葉形はワカ 内面はヨコナデ、外面はヨコナデ、葉縁ハカケズリ		葉上は長石、白色粒子、褐色粒子が少量、色調は暗褐色、葉縁は良好		第9次調査4区3
3-118 440	狭葉藤	有葉の葉(花)	(8.6)	4.2			葉形はワカ 内面はヨコナデ、外面はヨコナデ、葉縁ハカケズリ、ハカケズリ		葉上は長石、白色粒子が少量、褐色粒子が少量、色調は暗褐色、葉縁は良好		第9次調査4区3
3-118 441	狭葉藤	葉		4.25+	e		葉形はワカ 内面はヨコナデ、外面はヨコナデ、カキ目		葉上は石英が少量、白色粒子が少量、色調は暗褐色、葉縁は良好		第9次調査4区3
3-119 446	狭葉藤	ハソウ	(13.2)	3.4+	e		葉形はワカ 内外ともにヨコナデ		葉上は長石、白色粒子が少量、褐色粒子が少量、色調は暗褐色、葉縁は良好		第9次調査4区1-2
3-119 447	狭葉藤	環状		6.2+	e	30.1	葉形は不明 内面はナデ、外面はヨコナデ		葉上は角閃石、長石、石英を含む、色調は暗褐色、葉縁は不良		第9次調査4区1-2
3-119 448	狭葉藤	環状		1.7+	e		葉形はワカ 内面はヨコナデ、外面はヨコナデ、葉縁ハカケズリ		葉上は角閃石、長石、白色粒子が少量、葉縁は内面に鋭角歯、外面が暗褐色、葉縁は不良		第9次調査4区2-3、第10区
3-119 449	狭葉藤	環状		1.1+	e		葉形はワカ 内面はヨコナデ、外面はヨコナデ、葉縁ハカケズリ		葉上は長石、角閃石、白色粒子が少量、色調は内面がより暗褐色で外面が暗褐色、葉縁は不良		第9次調査4区2

四日市遺跡土製品観察表

調査年度	調査地点	遺物	寸法			重量	材質・形状	調査時期・出土層	
			長さ(mm)	幅(mm)	高さ(mm)				
3-25	46	S-71	メンコ(筒)	5.5	6.0	9.7	31.6		
3-25	47	S-54	平板状筒	3.8	2.7	2.6			第6次調査 No.7, No.9
3-25	48	S-71	上段板状筒	2.2+a	2.3+a	2.1-g			No.9
3-27	85	S-075	メンコ	2.6	2.8		4.2		第5次調査 第7次調査4区 第7次調査SD13-1層
3-87	178	SD17	メンコ	2.3	2.1	0.5			第6次調査 第7次調査
3-76	226	S-22	メンコ	4.4	4.9	0.6			赤色顔料 白色顔料
3-80	257		メンコ	3.9	4.4	0.5			第7次調査
3-110	356	E-4 S010	メンコ	5.6	5.3	0.8	31.5		第8次調査1区
3-110	357	E-4 S010	土埴	6.1	1.3	0.3	5.1		第8次調査1区
3-110	358	E-4 S010	土埴	3.7	2.5	0.5	9.7		第8次調査1区
3-110	359	E-4 S010	土埴	3.4	2.4	0.4	9.8		第8次調査1区
3-110	360	E-4 S010	土埴	3.4	2.4	0.6	6.8		第8次調査1区
4-9	450	SH55	板筒	3.4	2.1	1.5	7.7	土師質 調整：ナデ 胎印痕 色調：黒灰色	第12次調査A区区域3層区2
4-13	480	SH26	板筒	3.7	2.4	2.3	14.2	土師質 調整：ナデ 色調：にぶい黄褐色	第12次調査B区区域3層区4
4-12	481	SH26	結輪帯?	3.3	3.2	0.4	4.7	調整：外) ハケメ ナデ 内) ナデ 色調：にぶい黄褐色	第12次調査B区区域3層区6
4-18	509	SH57	板筒	3.8	2.4	2.3	17.5	土師質 調整：ナデ 色調：にぶい褐色	第12次調査B区区域3層区7
4-22	530	SH58	瓦	2.2	2.3	2.2	7.7	土師質 孔径：0.5~0.6	第12次調査B区区域3層区8
4-25	544	SH59	土器片加工品	1.7	1.9	0.65	1.9	弥生土器の転用品 調整：内) ナデ 色調：黒) にぶい黄褐色(外) 黒) にぶい褐色	第12次調査B区区域3層区1
4-29	568	SH60	土器片加工品	2.8	2.3	0.7	5.0	弥生土器の転用品 調整：外) タテハタ後ナデ 内) ナデ 色調：淡褐色 打ち欠き	第12次調査B区区域4層区1
4-29	569	SH60	土器片加工品	3.1	3.7	0.4	5.8	弥生土器の転用品 調整：内) ナデ 色調：黄褐色	第12次調査B区区域4層区1
4-29	590	SH60	土器片加工品	3.6	3.2	0.8	9.9	弥生土器(筒)の転用品 調整：外) ヨコナデ ナデ 内) ナデ 色調：淡褐色 打ち欠き	第12次調査B区区域4層区1
4-29	591	SH60	土器片加工品	4.8	4.9	0.6	21.5	弥生土器の転用品 調整：外) ヨコナデ 内) ヨコナデ ナデ 色調：淡褐色 打ち欠き	第12次調査B区区域4層区1
4-29	592	SH60	土器片加工品	4.2	4.8	0.8	18.5	弥生土器(丹塗りの転用品 調整：外) タテ方向のミガキ 丹塗り 内) ヨコ方向のミガキ 丹塗り 色調：赤褐色 打ち欠き	第12次調査B区区域4層区1
4-29	593	SH60	土器片加工品	5.1	4.6	0.7	16.8	弥生土器の転用品 調整：外) タテハタ後ナデ 内) ナデ 色調：赤褐色 内) 淡褐色 打ち欠き	第12次調査B区区域4層区1
4-29	594	SH60	土器片加工品	4.9	4.7	0.7	17.8	弥生土器の転用品 調整：外) ナデ 内) タテハタ後ナデ 色調：淡褐色 打ち欠き	第12次調査B区区域4層区1
4-29	595	SH60	土器片加工品	4.0	5.5	0.6	18.7	弥生土器の転用品 調整：外) ハタ後ナデ 内) ナデ 色調：淡褐色 打ち欠き	第12次調査B区区域4層区1
4-29	596	SH60	土器片加工品	3.8	4.7	0.8	15.8	弥生土器(丹塗りの転用品 調整：外) 丹塗り 内) ナデ 色調：赤褐色	第12次調査B区区域4層区1
4-29	597	SH60	土器片加工品	5.5	4.9	0.6	17.7	弥生土器の転用品 調整：外) タテハタ後ナデ 内) ナデ 色調：淡褐色 内) 淡褐色 打ち欠き	第12次調査B区区域4層区1
4-29	598	SH60	土器片加工品	6.1	5.3	0.8	35.3	弥生土器の転用品 調整：外) ナデハタ後ナデ 内) ナデ 色調：淡褐色 打ち欠き	第12次調査B区区域4層区1
4-29	599	SH60	土器片加工品	5.3	5.9	0.8	31.0	弥生土器(丹塗りの転用品 調整：内) ナデ 色調：淡褐色 打ち欠き	第12次調査B区区域4層区1
4-29	570	SH60	土器片加工品	7.0	7.1	0.8	51.2	弥生土器の転用品 調整：外) タテ方向のミガキ 内) ナデ 色調：淡褐色 打ち欠き	第12次調査B区区域4層区1
4-33	601	SH61	土器片加工品	2.8	3.3	0.4	23.4	弥生土器の転用品 調整：外) タテハタ後ナデ 内) ナデ 色調：淡褐色 打ち欠き	第12次調査B区区域4層区1
4-33	602	SH61	土器片加工品	5.0	4.9	0.7	23.6	弥生土器の転用品 調整：外) ミガキ後丹塗り 内) ナデ 色調：黄褐色 内) 黒灰色 打ち欠き	第12次調査B区区域4層区2
4-33	603	SH61	土器片加工品	3.7	3.3	0.4	7.7	弥生土器の転用品 調整：外) タテ方向のミガキ後丹塗り 内) ナデ 色調：淡褐色 内) 淡褐色 打ち欠き	第12次調査B区区域4層区2
4-33	604	SH61	土器片加工品	4.0	3.8	0.8	16.7	弥生土器の転用品 調整：外) 胎付突帯 ナデ 内) ナデ 色調：淡褐色 打ち欠き	第12次調査B区区域4層区2
4-33	605	SH61	土器片加工品	3.2	3.6	0.6	10.8	弥生土器の転用品 調整：外) ヨコハタ後ナデ 内) ナデ 色調：淡褐色 内) 黒灰色	第12次調査B区区域4層区2
4-33	606	SH61	土器片加工品	3.6	4.3	0.8	5.5	弥生土器の転用品 調整：外) タテハタ後ナデ 胎付突帯 内) ナデ 色調：淡褐色 打ち欠き	第12次調査B区区域4層区2
4-33	607	SH61	土器片加工品	5.6	4.4	0.5	19.1	弥生土器の転用品 調整：外) タテハタ後ナデ 内) ナデ 色調：淡褐色 内) 黒灰色 打ち欠き	第12次調査B区区域4層区2
4-33	608	SH61	土器片加工品	4.7	4.2	1.1	27.4	弥生土器の転用品 調整：外) タテハタ後ナデ 内) ナデ 色調：淡褐色 内) 淡褐色 打ち欠き	第12次調査B区区域4層区2

品番	品名	単位	寸法				質量	備考	検査項目
			長さ	幅	厚さ	重量			
4-33 609	SH61	土器片加工品	32	36	0.8	96	衛生土器の取用品 調整：外；タテハタ横ナデ 内) ナデ 色調：黄褐色 打ち欠き	第12次調査区S-6 4 疑状	
4-42 635	SK227	土器片加工品	36	37	0.4	65	衛生土器の取用品 調整：内外) ナデ 色調：黄褐色	第12次調査区区域 3 S009	
5-21 698	SH70	土器片加工品	24	25	0.5	40	衛生土器(片断り)の取用品 調整：外；ナデメノ内)のミ ギキ 片断り 内) ナデ 色調：黄褐色	第14次調査区S-40	
5-19 686	SH98	鉢蓋草	(6.5)	(6.5)	10.0	19.1	調整：外) ハケメ ナデ 内) ナデ 色調：にがい黄褐色	第14次調査区 S-302	
5-19 687	SH68	投彈	4.5	2.9	2.8	26.3	土器質 調整：ナデ 色調：淡褐色	第14次調査区S-030 P7	
5-26 719	SK249	土器片加工品	6.2	5.4	1.0	40.3	衛生土器の取用品 調整：内外) ナデ 色調：黄褐色	第14次調査区S-011	
5-37 749	SK256	投彈	5.0	2.5	2.3	25.0	土器質 調整：ナデ 色調：淡褐色	第14次調査区S-100 P16	
5-30 781	包金箔	土器片加工品	4.4	4.3	1.1	18.7	衛生土器の取用品 調整：内外) ナデ 色調：黄褐色	第14次調査区	
5-30 782	包金箔	土器片加工品	3.7	3.4	0.9	11.2	衛生土器の取用品 調整：内外) ナデ 色調：一部に片断り、 にがい黄褐色	第14次調査区	
5-30 783	包金箔	土器片加工品	4.0	4.0	0.9	16.3	衛生土器の取用品 調整：内外) ナデ 色調：黄褐色	第14次調査区	
5-30 784	鉢蓋草		4.5	4.3	0.8	16.1	調整：外) ハケメ ナデ 内) ナデ 色調：黄褐色 穿孔 径：0.3cm	第14次調査区S-096 P12	
5-30 785	鉢蓋草		3.5	3.7	0.4	7.0	調整：外) ハケメ ナデ 内) ナデ 色調：黄褐色 穿孔 径：0.4cm 土器製用	第14次調査区S-095 P2	
5-50 796	鉢蓋草		2.8	2.8	0.6	5.6	調整：外) ハケメ ナデ 内) ナデ 色調：外縁に片断り、 黄褐色 穿孔径：0.3cm 片断り土器製用	第15次調査区S-095 P3	
6-16 877	SH79	投彈	3.6	2.2	2.2	12.8	土器質 調整：ナデ 色調：淡褐色	第15次調査区S-069 P7	
6-41 999	SK272	鉢蓋草	5.6	5.6	1.0	31.8	調整：外) ハケメ ナデ 内) ナデ 色調：黄褐色 穿孔 径：0.5cm	第15次調査区S-002 P5	
6-46 1028	SK276	勾玉	3.35	1.2	2.3	6.1	両面平凸 一部に赤色顔料を塗める	第15次調査区S-017 P17	
7-28 1242	SH92	土器片加工品	3.6	4.9	0.6	8.2	衛生土器(片断り)の取用品 調整：外) ミヨ方向のミギ キ 片断り 内) ナデ 色調：赤褐色 打ち欠き	第15次調査区S-185 d	
7-30 1260	SH93	投彈	4.0	2.5	2.4	17.7	土器質 調整：ナデ 色調：灰白色	第13次調査区S-100 P1	
7-30 1281	SH93	投彈	4.4	2.7	2.8	24.3	土器質 調整：ナデ 色調：灰白色	第13次調査区S-190 P2	
7-30 1282	SH95	投彈	4.6	2.5	2.3	19.5	土器質 調整：ナデ 色調：灰白色	第13次調査区S-150 P3	
7-30 1283	SH96	投彈	4.2	2.4	2.4	17.5	土器質 調整：ナデ 色調：灰白色	第13次調査区S-130 P7	
8-16 1759	SK369	勾玉	3.9	1.6		9.8	黄褐色	第2次調査区SK134	
8-44 1862	SH114	メシコ						第13次調査区S025	
8-58 1980	SH119	メシコ	5.4	6.1	0.9			第4次調査区S303	
8-84 2064	SK370	勾玉				2.0		第3次調査区S1693 10	
8-164 2299	SD22	メシコ	5.7	6.3	0.8			第1次調査区SD-01 一拵	
8-164 2290	SD22	メシコ	5.2	6.2	0.7			第1次調査区SD-01 一拵	

四日市遺跡石器観察表

No.	発掘層	種類	石種	測定				備考	調査報告(1) 27頁	
				長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)			
3-8	埋合資料 1	埋合資料	粘岩	12.6	7.7	7.5	670		(173) 26-25-41	
3-9	1	石核	粘岩	9.9	6.8	7.5	530		第9次調査 1区S063 B3 41	
3-9	2	石核	粘岩	6.5	6.2	5.6	140.7		第9次調査 1区S063 B3 41	
3-9	3	剥片	粘岩	2.5	4	0.6	3		第9次調査 1区S063 B3 7	
3-9	4	剥片	粘岩	3.5	3.1	0.7	5.7		第9次調査 1区S063 D3 26	
3-10	埋合資料 2	埋合剥片	泥岩	13.2	8.8	6.6	651.9	光面番号1-A-10埋合剥片	第9次調査 1区S063 D3 B3 28-38 38-43 29-36 74-42	
3-11	埋合資料 2	埋合剥片	泥岩	6.2	8.8	6.5	399.8	光面番号1-1~1.8埋合剥片	第9次調査 1区S063 D3 B3 29-36 71-42	
3-12	5	SX8	剥片	泥岩	7.8	7.2	3.8	117.5		第9次調査 1区S063 B3 36
3-12	6	SX8	剥片	泥岩	2.9	6.1	1.1	22.2		第9次調査 1区S063 B3 29
3-12	7	SX8	石核	泥岩	8.2	3.9	4.3	198.4		第9次調査 1区S063 B3 42
3-12	8	SX8	剥片	泥岩	2.3	4.5	0.9	6.4		第9次調査 1区S063 D3 74
3-12	9	SX8	剥片	泥岩	2.1	2.2	0.4	2.2		第9次調査 1区D3 55
3-12	10	SX8	剥片	泥岩	2.7	2.8	0.7	3.1		第9次調査 1区S063 B3 43
3-13	埋合資料 2B	埋合剥片	泥岩	9.1	8.3	4.6	302.1	光面番号1-1、2埋合剥片	第9次調査 1区S063 B3 28-38	
3-13	11	剥片	泥岩	8.6	4.1	2.6	87.7		第9次調査 1区S063 B3 28	
3-13	12	SX8	石核	泥岩	8.2	6.8	4.1	234.4		第9次調査 1区S063 B3 38
3-14	13	SX8	ナイフ形石核	鎌倉安楽層礫石	3.4	1.1	0.4	1.6	透明物	第9次調査 1区S063 B3 44
3-14	14	SX8	石核	三塚土層礫石	7.55	2	1.1	18.6		第9次調査 1区S063 D3 B3 (133) 32
3-14	15	SX8	不明	武山灰質泥岩	3	2.6	1	3.5		第9次調査 1区S063 B3 47
3-14	16	SX8	剥片	泥岩	3.4	2.6	1	8.9		第9次調査 1区S063 B3 39
3-14	17	SX8	剥片	強化した剥片(破砕物)	1.6	3.2	0.8	10.4		第9次調査 1区S063 B3 25
3-14	18	SX8	剥片	泥岩	3.6	2.6	0.6	4.2		第9次調査 1区S063 B3 25
3-14	19	SX8	剥片	泥岩(流紋岩に転る)	4	3.4	1.6	14.6	埋合しない部分と同一層	第9次調査 1区S063 B3 37
3-14	20	SX8	剥片	泥岩	8.6	4.3	2.6	49.8		第9次調査 1区S063 B3 34
3-14	21	SX8	礫石	角閃石雲母片	6.8	3.2	1.6	42.3		第9次調査 1区S063 B3 20
3-21	34	SH45	石核	角閃石雲母片	22.6	18.9	12	9		第9次調査 1区S063 32
3-23	42	SH46	磨石石斧	泥岩	9.5	7.1	0.6	40.1		第9次調査 2区S062 2
3-23	49	SH47	磨石・磨石	内野安山岩	13.8	12.4	4.8	125.0		3
3-23	50	SH47	磨石	内野安山岩	10.7	6.8	5.2	71.0		5
3-23	66	SH48	石核	メササイト	2.8	1.4	0.2	0.6		第9次調査2区S075 1
3-23	67	SH48	石核	龍島産黒曜石	2.2	1.3	0.3	0.7		第7次調査2区S075 1
3-23	68	SH48	石核	メササイト	2.5	1.9	0.4	2.1		第7次調査2区S075 7
3-23	69	SH48	磨石石核 米流石	頁岩	2.1	1.5	0.2	0.8		第7次調査2区S075 27
3-23	70	SH48	磨石石核	凝結片岩	4	1.9	0.3	3.2		第7次調査2区S075 19
3-23	71	SH48	剥片	珉化木	1.8	2.6	0.9	5.1		第7次調査 4区S075 1
3-23	72	SH48	破石	泥岩	3.4	1.4	1.2~1.4	12.6		第7次調査 1区S12 1
3-23	73	SH48	破石	内野安山岩	11.2	8.6	6	800		第7次調査2区S12 6
3-30	77	SH49	打製石斧	泥岩	3.9	4.1	0.8	14.1		第6次調査2区S04 3
3-30	78	SH49	破石	泥岩	4.1	2.3	1.1	17.7		第6次調査2区S04 6
3-41	119	SK254	石核	龍島産黒曜石	3.8	2.1	0.9	4.7		第9次調査2区S04 4
3-41	119	SK256	石核	角閃石雲母片	37.8	22.5	12.6	36		第9次調査 1区S041 9
3-41	119	SK256	石核	雲母片	28.9	28.4	12.3	38		第7次調査SH40 1
3-54	135	SK211	石斧	泥岩	40.5	29	11.7	175	扁平打製石斧と同じ素材	第9次調査 1区S04 2
3-57	179	SD17	ステレレバー	龍島産黒曜石	5.6	6.9	2.1	42.6		第7次調査2区S12 2
3-57	180	SD17	打製石斧	泥岩	12.7	7	1.1	101.6	7次 S012(1層)と埋合	第6次調査2区S12 6
3-57	181	SD17	扁平打製石斧	泥岩	15.6	7.9	0.83	153.5		第9次調査 1区S012 (4-4)埋合層上層
3-57	182	SD17	扁平打製石斧	泥岩	5.8	7.3	1.3	58.4		第9次調査 1区S012 1
3-58	183	SD17	打製石斧	泥岩	16.6	7.4	2.4	285.7	7次 S012と埋合	第6次調査2区S12 6
3-58	184	SD17	磨石	角閃石雲母片	9.2	8.8	4.3	90		第7次調査2区S12 4
3-58	185	SD17	磨石	角閃石雲母片	11.9	9.2	5.1	80		第7次調査2区S12 11
3-58	186	SD17	磨石・破石	角閃石雲母片	7	6.6	3.4	250		第7次調査2区S12 25
3-58	187	SD17	石核了	泥岩	3.8-a	3.1+a	5	6.3		第9次調査 1区S012 2
3-58	188	SD17	石核了	輝緑凝灰岩	2.6	3.8+a	0.4	3.9		第7次調査2区S12 1
3-58	189	SD17	磨製石核	凝結片岩	2.2+a	1.5	0.2	1		第7次調査2区S12 北側ベルト
3-64	191	SK213	石核	龍島産黒曜石	3	1.8	0.4	1.3	透明なし	第9次調査 2区S028 2
3-64	194	SK212	石核	鎌倉安楽層礫石	3.5	5.5	2.2	37.5		第9次調査 3区S036 3
3-80	258	石核	龍島産黒曜石	3.1	1.9	0.4	1		第7次調査2区S012埋合層	
3-80	259	石核	メササイト	2.1	1.3	0.4	0.9		第7次調査2区S12 1	
3-81	260	打製石斧	泥岩	12.1	6.5	1.5	147		第6次調査埋合層埋合時	
3-82	271	石核	龍島産黒曜石	1.6	2.3	0.5	1.6		第8次調査 2区A-1 21	
3-82	272	石核	龍島産黒曜石	2.4	1.8	0.3	1		第8次調査 2区C-1 埋合層	
3-82	273	石核	龍島産黒曜石	2.4	1.7	0.4	0.9		第9次調査 2区B土層	
3-82	274	石核	龍島産黒曜石	2	2.25	0.45	2.1		第8次調査 2区C-1 埋合層	
3-82	275	石核	龍島産黒曜石	2.1	2.45	0.3	2		第8次調査 2区B埋合層	



採出地	採出層	産物	産種	産層	品質				備考	採出層・採出区
					採出率(%)	品位	品位	品位		
3-82	279	輝石	輝石	輝石	3.15	1.69	0.26	2.9		第9次調査 区包合層 D3
3-83	286	輝石	輝石	輝石	2	3.9	1.7	8.9		第9次調査 区包合層 D3
3-83	287	輝石	輝石	輝石	3.9	2.4	0.7	4.9	使用済あり	第9次調査 区包合層 D3
3-83	288	輝石	輝石	輝石	3.1	3.2	0.7	3		第9次調査 区包合層 D3
3-83	289	輝石	輝石	輝石	2.8	2.6	0.6	4.6		第9次調査 区包合層 D4
3-83	290	輝石	輝石	輝石	4.3	2.1	0.8	5.2		第9次調査 区包合層 D3
3-84	291	石炭	チャート	チャート	2.9	1.8	0.4	1.7	灰合	第9次調査 区包合層
3-84	292	石炭	輝石	輝石	3.1	1.8	0.4	1.6		第9次調査 区包合層
3-84	293	石炭	輝石	輝石	3.2	2.3	0.9	5.6		第9次調査 区包合層 C5
3-84	294	石炭	輝石	輝石	3.2	7	1.4	1.9		第9次調査 区包合層 II
3-84	295	輝石	輝石	輝石	10.1	6	1.3	7.5	全体的に輝石が凝結	第9次調査 区包合層 II
3-84	296	輝石	輝石	輝石	10.8	9.4	1.1	13.94		第9次調査 区包合層 II
3-85	297	輝石	輝石	輝石	8.7	8.8	0.9	43		第9次調査 区包合層 II
3-85	298	輝石	輝石	輝石	5.6	4	1.5	38.6		第9次調査 区包合層 II
3-85	299	輝石	輝石	輝石	6.2	4.6	4.1	129.1		第9次調査 区包合層 II
3-85	300	輝石	輝石	輝石	13.8+e	9.8	4.7	68.0		第9次調査 区包合層 II
3-85	301	輝石	輝石	輝石	3	1.5	0.8	7		第9次調査 区包合層 II
3-91	310	SH2	輝石	輝石	29.5	21.7	10.1	15000	上層中や輝石が ススか?	第9次調査 区包合層 II
3-91	311	SH2	輝石	輝石	30.8	25.4	12	13500		第9次調査 区包合層 II
3-98	328	SK221	輝石	輝石	4.6	13.6	0.7	61.1		第8次調査 1区D-5 3006 1階
3-98	327	SK221	輝石	輝石	4.4	13.7	0.7	65.3	灰合	第8次調査 1区D-5 3006 1階
3-110	361	SK10	輝石	輝石	1.78	1.7	0.48	1.1		第8次調査 1区D-5 3006 1階
3-110	362	SK10	輝石	輝石	2.95	2.15	2	1.5		第8次調査 1区D-5 3006 1階
3-111	363	SK10	輝石	輝石	4.5	8.6	0.75	32.4	立巻	第8次調査 1区D-4 3010 D-4 3階
3-111	364	SK10	輝石	輝石	10.0+e	5.2+e	4.2+e	946.2		第8次調査 1区D-4 3010
3-111	365	SK10	輝石	輝石	8.6	6.1	1.6	73.5		第8次調査 1区D-4 3010
3-111	366	SK10	輝石	輝石	6.4	5.5	0.9	37.1		第8次調査 1区D-4 3010
3-111	367	SK10	輝石	輝石	6.5	4.3	0.8	28.3	節理で割れた輝石の塊だけ加工	第8次調査 1区D-4 3010
3-111	368	SK10	輝石	輝石	4.4	4	2.6	47.8	天幕灰石	第8次調査 1区D-4 3010
3-112	388	石炭	チャート	チャート	1.9	2.05	0.5	1.4	チャート (白色6割・灰色4割)	第8次調査 区包合層
3-112	399	石炭	輝石	輝石	4.65	6.5	0.6	35.3		第8次調査 区包合層
3-112	390	石炭	輝石	輝石	5.1	1.4	1.4	10.4		第8次調査 1区D-4 3階
3-113	391	輝石	輝石	輝石	10.4	7.7	1.5	138.8		第8次調査 1区D-4 3階
3-113	392	輝石	輝石	輝石	12.4	5.1	1.5	130.5		第8次調査 1区D-4 3階
3-113	393	輝石	輝石	輝石	15.5	14.2	5	163.0		第8次調査 1区D-4 3階
3-113	394	輝石	輝石	輝石	9.2	8.8	6	720		第8次調査 1区D-4 3階
3-115	409	石炭	輝石	輝石	21.8+e	14.9	4.0	4000	灰合	第9次調査 4区C
3-118	445	輝石	輝石	輝石	4.2	4.3	1.5	46.9		第9次調査 4区C
4-2	400	輝石	輝石	輝石	5.8	6.4	2.9	148.2		第12次調査 区包合層
4-3	451	輝石	輝石	輝石	4.4	2.3	0.6	4.5		第12次調査 区包合層
4-3	452	輝石	輝石	輝石	2.6	3.7	0.9	5.8		第12次調査 区包合層
4-3	453	輝石	輝石	輝石	3.55	1.5	0.9	8.7		第12次調査 区包合層
4-13	482	SH56	輝石	輝石	3.9+e	1.5	0.3	0.8		第12次調査 区包合層
4-13	483	SH56	輝石	輝石	2.4	1.39	0.2	0.8		第12次調査 区包合層
4-14	484	SH56	輝石	輝石	1.0+e	4.4+e	0.8	17.3		第12次調査 区包合層
4-14	485	SH56	輝石	輝石	3.0	2.8+e	0.9	13.5		第12次調査 区包合層
4-14	486	SH56	輝石	輝石	4.3+e	3.0+e	1.0	7.7		第12次調査 区包合層
4-14	487	SH56	輝石	輝石	15.7	4.6	2.2	267.8	スス付	第12次調査 区包合層
4-14	488	SH56	輝石	輝石	10.0	4.2	2.8	212.2		第12次調査 区包合層
4-19	510	SH57	輝石	輝石	2.61+e	3.0+e	0.2+e	2.1		第12次調査 区包合層
4-19	511	SH57	輝石	輝石	13.9+e	9.2	6.0	100.0		第12次調査 区包合層
4-22	531	SH58	輝石	輝石	4.0+e	1.6	0.25	0.8		第12次調査 区包合層
4-26	545	SH59	輝石	輝石	11.8	3.9	3.6	300		第12次調査 区包合層
4-30	571	SH60	輝石	輝石	10.4	8.5	6.8	800		第12次調査 区包合層
4-30	572	SH60	輝石	輝石	13.4	5.1	4.1	490		第12次調査 区包合層
4-30	573	SH60	輝石	輝石	5.2	2.7	0.65	21.3		第12次調査 区包合層
4-34	619	SH61	輝石	輝石	1.20	9.6	4.8	800		第12次調査 区包合層
4-34	611	SH61	輝石	輝石	13.2+e	11.3+e	8.0	2000		第12次調査 区包合層
4-34	612	SH61	輝石	輝石	15.3+e	12.9+e	8.6	2560		第12次調査 区包合層
4-34	613	SH61	輝石	輝石	13.5+e	10.3	1.8	450		第12次調査 区包合層
4-34	614	SH61	輝石	輝石	7.0+e	4.5+e	1.8	65.9		第12次調査 区包合層
4-34	615	SH61	輝石	輝石	6.8	2.7	1.3	31.5		第12次調査 区包合層
4-38	621	SK225	輝石	輝石	16.8	5.4	4.3	720		第12次調査 区包合層
4-55	639	SK235	輝石	輝石	4.5	12.0+e	0.7	95.3		第12次調査 区包合層
4-55	639	SK235	輝石	輝石	2.9+e	4.0+e	0.4	7.4		第12次調査 区包合層
4-55	640	SK235	輝石	輝石	3.1+e	2.4+e	0.4	3.5		第12次調査 区包合層
4-63	645	SK238	輝石	輝石	3.3	3.4	1.0	16.1		第12次調査 区包合層
5-8	694	SH62	輝石	輝石	27+e	12.4+e	4.7	28.5		第14次調査 区包合層
5-8	695	SH62	輝石	輝石	13.7	13.1	3.8	1150.0		第14次調査 区包合層

No.	No.	No.	No.	No.	粒径				備考	調査年度(1/2)と場所	
					最大径(mm)	平均径(mm)	標準偏差(mm)	形状係数			
5-9	609	SH83	礫石	角閃石安山岩	11.5 ± e	11.2	5.3	956.0	第14次調査区S005	6	
5-13	673	SH85	礫石(縦片)	閃岩	10.5 ± e	4.5 ± e	3.7	354.3	第14次調査区S020	10	
5-13	674	SH86	石炭	結晶黒曜石	30 ± e	1.5 ± e	0.35	1.2	第14次調査区S020	27	
5-17	681	SH87	台石	安山岩	13.5	24.6	9.4	1100.0	第14次調査区S006	10	
5-19	688	SH88	石炭	マスコイト?	2.2	1.8	0.3	0.9	第14次調査区S030	中央ビット	
5-19	689	SH88	似石(縦片)	砂岩	8.4 ± e	7.8	5.3	382.4	第14次調査区S030	2	
5-19	690	SH88	輝綠石帯	輝綠片岩	14.0 ± e	5.4 ± e	4.3 ± e	510.0	第14次調査区S030	2	
5-19	691	SH88	台石	安山岩	26.4	26.3	10.2	1190.0	第14次調査区S040	3	
5-21	699	SH70	石包丁	閃輝岩	3.0	6.2	0.6	22.0	第14次調査区S040	4	
5-20	710	SH72	結晶岩	閃片	5.2	5.0	1.1	26.9	第14次調査区S040	4	
5-23	711	SH72	打撃石類	閃輝岩	4.6	2.2	0.6	6.4	第14次調査区S040	2	
5-23	712	SH72	打撃石類	マスコイト?	3.5	1.5	0.35	2.1	第14次調査区S040	2	
5-23	713	SH72	湖片	紫色結晶岩(輝綠岩)	2.6	2.1	0.8	4.0	第14次調査区S040	2	
5-26	718	SH73	台石	安山岩	30.7	36.0	12.2	2300.0	第14次調査区S045	1	
5-27	720	SK250	礫石	砂岩?	7.8	7.1	2.3	166.5	第14次調査区S050	1	
5-30	726	SK250	石包丁	輝綠凝灰岩	3.9	6.8 ± e	0.8	30.2	第14次調査区S050	1	
5-32	729	SK251	石包丁	輝綠凝灰岩	4.1	6.7	0.6	24.2	第14次調査区S050	1	
5-37	750	SK256	台石	安山岩	46.2	15.0 ± e	8.3	540.0	第14次調査区S070	44	
5-39	736	SK257	砂岩	泥岩	6.0	6.1	0.7	46.3	第14次調査区S070	1	
5-41	760	SK256	石包丁	輝綠凝灰岩	3.9	8.8	0.8	49.0	第14次調査区S085	1	
5-41	761	SK258	石炭	緑泥岩黒曜石	1.9	1.7	0.4	1.5	第14次調査区S085	1	
5-50	787	SH76	礫石	砂岩片岩	1.8	2.0	0.3	1.0	第14次調査区S085	1	
5-30	788	SH76	輝綠石帯	輝綠片岩	2.7 ± e	1.7	0.2	1.6	第14次調査区S085	1	
5-50	790	SH76	石包丁	結晶黒曜石	2.8	1.65	0.4	1.3	第14次調査区S085	1	
5-50	790	SH76	石包丁	紫色結晶岩	3.4	1.9	0.4	2.2	第14次調査区S085	1	
5-50	791	SH76	石包丁	紫色黒曜石(輝綠岩)	3.9	4.0	0.7	4.8	第14次調査区S085C	1	
5-51	792	SH76	砂岩片岩	泥岩	3.8	3.7	0.7	12.7	第14次調査区S090?	1	
5-51	793	SH76	礫石	泥岩	5.6	2.6	0.4	7.7	第14次調査区S090	1	
5-51	794	SH76	砂岩片岩	安山岩	8.1 ± e	3.7	3.7	296.6	第14次調査区S090	1	
5-51	795	SH76	礫石	砂岩	9.5	6.3	1.8	162.0	第14次調査区S090	1	
5-51	796	SH76	礫石	砂岩	9.0	7.0	4.8	47.0	第14次調査区S090	1	
5-51	797	SH76	礫石	泥岩	18.4	8.3	7.6	210.0	第14次調査区S090	1	
5-51	798	SH76	打撃石帯	凝灰質安山岩	8.3	8.3	1.3	112.7	第14次調査区S094	1	
5-51	799	SH76	打撃石帯	凝灰質安山岩	14.0	7.6	1.6	190.1	第14次調査区S090	1	
5-51	800	SH76	打撃石帯	凝灰質安山岩	22.5	33.3	13.0	1500.0	第14次調査区S090	10	
5-51	801	SH76	打撃石帯	安山岩	10.7	4.7	3.1	394.0	第14次調査区S095	1	
5-51	802	SH76	打撃石帯	安山岩	10.7	9.9	5.4	940.0	第14次調査区S095	12	
5-51	803	SH76	打撃石帯	泥岩	4.4	3.65	1.1	22.1	第14次調査区S090	1	
5-51	804	SH76	打撃石帯	泥岩	2.3	1.4	0.5	3.6	第14次調査区S090	1	
5-51	805	SH76	打撃石帯	輝綠片岩	2.4	1.3	0.15	0.7	第14次調査区S090	1	
5-51	806	SH76	打撃石帯	泥岩	7.6	2.8	2.6	83.6	第14次調査区S090	1	
5-51	807	SH76	打撃石帯	輝綠安山岩	7.5	6.2	1.0	45.6	第14次調査区S090	1	
5-51	808	SH76	打撃石帯	輝綠安山岩	9.2	7.1	1.1	101.9	第14次調査区S090	1	
5-51	809	SH76	打撃石帯	安山岩	26.5	22.2	6.0	450.0	第14次調査区S090	1	
5-51	810	SH76	打撃石帯	安山岩	31.1	19.5	16.6	34.5	第14次調査区S090	1	
5-51	811	SH76	打撃石帯	砂岩	2.9	1.9	1.0	5.8	第14次調査区S090	1	
5-51	812	SH76	打撃石帯	泥岩	3.1	3.1	0.9	9.9	第14次調査区S090	1	
5-51	813	SH76	打撃石帯	輝綠片岩	16.9	16.7 ± e	8.8	4000.0	第14次調査区S046 (S-000?)	1	
5-51	814	SH76	打撃石帯	輝綠片岩	3.5	2.4	0.25	3.3	第14次調査区S019	1	
5-51	815	SH76	打撃石帯	チャート	7.1	8.2	7.0	520.0	第14次調査区S040	1	
5-51	816	SH76	打撃石帯	安山岩	11.95	6.2	5.4	980.0	第14次調査区S040	30	
5-51	817	SH76	打撃石帯	安山岩	18.8	23.6	8.8	5400.0	第14次調査区S040	24	
5-51	818	SH76	打撃石帯	輝綠黒曜石	3.05	3.65	1.15	14.4	第14次調査区S010	4	
5-51	819	SH76	打撃石帯	輝綠黒曜石	3.35	1.5	0.85	3.8	第14次調査区S010	3	
5-51	820	SH76	打撃石帯	安山岩	13.1	9.4	4.2	470.0	第14次調査区S009	1	
5-51	821	SH76	打撃石帯	角閃石安山岩	11.7	8.7	4.75	760.0	第14次調査区S009	1	
5-51	822	SH76	打撃石帯	泥岩	7.7	4.9	3.6	250.0	第14次調査区S009	1	
5-51	823	SH76	打撃石帯	輝綠片岩	1.8 ± e	1.5	0.5	0.6	第14次調査区S015	1	
5-51	824	SH76	打撃石帯	安山岩	13.3	10.7	8.6	1340.0	第14次調査区S015	1	
5-51	825	SH76	打撃石帯	小礫石	4.07	3.5	0.9	265.9	第14次調査区S015	1	
5-51	826	SH76	打撃石帯	砂岩	31.9	27.4	12.0	1860.0	第14次調査区S015	1	
5-51	827	SH76	打撃石帯	輝綠岩	4.9 ± e	4.4 ± e	0.7	18.0	第14次調査区S010	1	
5-51	828	SH76	打撃石帯	輝綠片岩	16.8	15.7	5.1	2180.0	第14次調査区S010	1	
5-51	829	SH76	打撃石帯	輝綠片岩	3.4 ± e	1.7	1.0	7.8	第14次調査区S010	1	
5-51	830	SH76	打撃石帯	輝綠片岩	13.8	5.3	5.2	600.0	第14次調査区S010	1	
5-51	831	SH76	打撃石帯	輝綠片岩	9.3	8.2	5.0	530.0	第14次調査区S010	1	
5-51	832	SH76	打撃石帯	角閃石安山岩	15.8	8.9	4.5	5.8	1000.0	第14次調査区S010	1
5-51	833	SH76	打撃石帯	安山岩	12.5	12.3	4.8	1250.0	第14次調査区S010	1	
5-51	834	SH76	打撃石帯	輝綠片岩	20.8	18.2	4.8	2560.0	第14次調査区S010	1	
5-51	835	SH76	打撃石帯	安山岩	20.6	18.3 ± e	3.0	8.3	1600.0	第14次調査区S010	1
5-51	836	SH76	打撃石帯	安山岩	15.6	13.1	4.55	1920.0	第14次調査区S010	1	
5-51	837	SH76	打撃石帯	輝綠凝灰岩	5.0	7.1 ± e	0.8	39.8	第14次調査区S009(砂岩)	1	
5-51	838	SH76	打撃石帯	砂岩	8.5	3.0	2.1	114.0	第14次調査区S005	2	

No.	No.	No.	No.	No.	No.			No.	No.	No.
					No.	No.	No.			
6-27	568	SK285	緑石	砂岩?	10.6	7.7	4.0	560.0		
6-30	970	SK286	黒石	砂岩?	10.1	9.7	3.7	850.0		3
6-34	978	SK289	砂岩		2.7	2.4	2.0	16.8		12
6-41	1000	SK272	台石	安山岩	37.2	33.0	8.7	125	24800.0	10
6-41	1001	SK272	台石	安山岩	38.2	28.0	6.7	108	14000.0	10
6-44	1050	SK275	石巻丁	粘板岩?	35+e	6.7+e	5.0	16.4		11
6-44	1051	SK275	緑石	安山岩	30.8	9.1	6.7	910.0		3
6-46	1071	SK278	石巻	砂岩	2.0	1.4	0.2	0.5		2
6-46	1022	SK275	緑石	砂岩	4.2+e	4.3+e	1.9+e	3.0		2
6-46	1024	SK275	石巻	安山岩						2
6-58	1046	SK282	石巻丁	輝綠岩	31.2	21.4	8.3	60.8		12
6-58	1046	SK282	石巻丁	輝綠岩	31.2	11.5	0.7	49.5		19
6-48	1059	SH7	緑石	泥岩	4.4+e	1.2+e	1.0+e	3.1		19
6-72	1094		石巻	輝綠岩	2.25+e	1.8	0.4	1.0		19
6-72	1095	赤坂	石巻	黒輝石	2.7	2.3	0.4	1.9		19
6-72	1076	赤坂	石巻丁	粘板岩?	3.45+e	2.8+e	5.5	10.3		19
6-72	1077	横出印	石巻	黒輝石	2.4	1.5	0.8	3.7		19
6-72	1078		砂岩	黒色黒輝石	5.7	4.2	2.0	27.2		19
6-72	1079	サブレ	緑石・砂石	安山岩	13.5	4.8	4.3	430.0		19
6-72	1080		打撃石跡	凝灰質安山岩	12.4	5.5	1.4	149.4		22
6-72	1081		黒石	砂岩?	13.2	4.9	2.8	200.0		22
7-4	1094	SH33	緑石	安山岩	11.1	9.5	5.3	770.0		4
7-4	1095	SH43	緑石	安山岩	20.0	13.0	10.0	325.0		4
7-9	1114	SH36	砂岩	黒輝石	3.0	4.3	6.9	12.0		6-13
7-9	1115	SH35	砂岩	黒輝石	5.8	5.8	0.9	28.0		6-13
7-9	1116	SH45	砂岩	サマイト?	6.5	7.2	1.8	48.0		6-13
7-9	1117	SH35	凝灰岩	粘板岩?	3.9	1.5	0.2	2.5		6-13
7-9	1118	SH35	緑石	安山岩	10.7	9.1	7.6	105.0		6-13
7-9	1119	SH45	台石	凝灰岩	32.2	25.1	12.9	1700.0		19
7-9	1120	SH36	黒石	安山岩	6.1	8.9	4.5	33.1		18
7-11	1130	SH46	石巻丁	輝綠岩	5.0	8.5	0.7	49.0		18
7-11	1131	SH46	打撃石跡	凝灰質安山岩	17.1	9.0	1.7	280.2		18
7-11	1132	SH36	台石	安山岩	43.0	29.4	8.5	1850.0		18-19
7-13	1140	SH37	緑石	砂岩?	10.7	8.7	5.3	660.0		17
7-13	1141	SH37	台石	安山岩	46.0	37.5	14.5	3400.0		18-19
7-19	1179	SH39	石巻丁	輝綠岩	4.8	11.6+e	0.8	76.5		17
7-19	1180	SH39	石巻丁	輝綠岩	6.3+e	4.3+e	0.5	15.3		13
7-19	1181	SH49	砂岩	輝綠岩	2.5	2.2	0.6	3.0		13
7-19	1182	SH39	砂岩	輝綠岩	3.4	8.2	6.7	900.0		13
7-19	1183	SH39	凝灰岩	凝灰質安山岩	11.8+e	7.8	1.9	183.6		13
7-19	1184	SH49	砂岩	安山岩	26.2	20.0	6.3	490.0		13
7-19	1185	SH39	台石	安山岩	22.6	18.1	6.3	450.0		61
7-22	1201	SH30	緑石	砂岩?	6.8	4.2	2.2	10.7		9
7-22	1202	SH40	緑石	泥岩	10.9	4.3	3.5	227.0		9
7-22	1203	SH30	台石	安山岩	39.2	31.4	17.1	3600.0		31
7-28	1243	SH32	緑石	安山岩	6.0	3.8	3.3	133.0		29
7-30	1254	SH33	泥岩	安山岩	3.1	2.9	2.4	30.4		29
7-30	1256	SH33	緑石	実砂岩?	3.0	4.1	2.7	36.2		29
7-30	1256	SH33	緑石	実砂岩?	12.0	5.8	4.2	693.0		29
7-30	1267	SH33	打撃石跡	安山岩	12.4	9.5	4.7	876.2		5
7-35	1263	SH36	砂岩	輝綠岩	3.6	4.7	0.8	9.8		6
7-35	1294	SH35	砂岩	輝綠岩	3.6	6.2	0.8	34.3		6
7-35	1295	SH35	打撃石跡	輝綠岩	3.5	2.3	0.6	4.0		6
7-38	1296	SH35	台石	安山岩	36.8	23.0	14.1	21.5		144
7-38	1297	SH45	台石	安山岩	38.9	28.2	10.8	20.8		139
7-38	1298	SH36	台石	安山岩	33.0	23.4	13.8	18.3		138
7-38	1299	SH36	台石	安山岩	18.8	11.6	4.1	1220.0		111
7-38	1300	SH45	緑石	安山岩	10.7	7.6	6.9	750.3		111
7-38	1301	SH36	石巻石序	安山岩	12.0	5.3	2.7	436.1		61
7-38	1320	SH36	台石	安山岩	19.9	13.0	8.7	3.1		112
7-38	1321	SH36	打撃石跡	凝灰質安山岩	7.2	6.7	0.7	57.8		81
7-41	1351	SH37	緑石	実砂岩?	4.2	3.2	3.6	35.8		112
7-41	1352	SH37	緑石	実砂岩?	7.4	2.3	2.2	27.8		112
7-41	1353	SH37	砂岩	実砂岩?	4.9	2.8	0.8	12.0		112
7-41	1354	SH37	砂岩	砂岩	12.0	5.4	3.6	291.5		112
7-41	1355	SH37	砂岩	安山岩	10.1	5.9	3.0	249.1		112
7-41	1356	SH37	砂岩	輝綠岩	3.5	6.5	0.5	14.7		112
7-43	1362	SH38	砂岩	輝綠岩	11.9	8.1	5.3	602.7		112
7-43	1363	SH38	砂岩	輝綠岩	11.9	8.1	5.3	602.7		112
7-43	1364	SH38	台石	安山岩	32.7	25.0	11.3	11.0		24
7-43	1365	SH38	台石	安山岩	30.8	22.6	12.3	12.0		17
7-43	1366	SH38	石巻	泥岩	6.5	3.0	1.0	13.8		16
7-44	1367	SH39	砂岩	輝綠岩	4.5	6.7	0.7	22.3		16
7-46	1372	SH100	台石	安山岩	29.6	27.1	9.3	11.0		3
7-49	1376	SH101	打撃石跡	サマイト?	2.6	2.8	0.6	3.3		3
7-53	1386	SH104	打撃石跡	安山岩	10.4	9.9	3.9	565.8		1
7-55	1389	SH106	凝灰岩	輝綠岩	2.5	1.5	0.3	1.2		1



No.	品名	用途	産地	品位				備考	
				Fe	SiO <sub>2</sub>	CaO	MgO		
8-57	1974	SH118	打製石礫	中ヌカイト	1.6	1.1	0.3	0.4	
8-58	1981	SH119	石包丁		3.6+α	4.0+α	0.2+α	3.4	第4次調査SH1003
8-62	2012	SH120	礫石	安山岩	9.5	7.6	6.4	606.2	第5次調査SH1007
8-63	2013	SH120	礫石	内阿安山岩	10.2	8.0	5.6	632.4	第5次調査SH1007
8-62	2014	SH120	礫石	片岩	8.6	6.8	1.7	96.8	第5次調査SH1007
8-62	2015	SH120	石包丁	内阿安山岩	8.6+α	14.5+α	5.8	827.8	第5次調査SH1007
8-62	2017	SH130	石包丁	流紋岩	2.8	3.8	0.5	7.4	第5次調査SH1007
8-62	2022	SH135	打製石礫	角閃安山岩	7.5	4.6	1.5	62.6	第5次調査SH1007
8-66	2023	SH16	鋼片	凝灰質頁岩	18.9	8.5	1.3	269.9	第3次調査SH52
8-68	2032	SH16	鋼片	凝灰質頁岩	9.5	4.8	1.5	98.3	第3次調査SH52
8-68	2033	SH16	石礫工具	輝岩	7.6	3.0	2.8	104.8	第3次調査SH53
8-81	2053	SK367	鋼製具	花崗岩	9.8	8.0	1.7	168.5	第5次調査SH49
8-83	2056	SK367	用途不明	凝灰岩	11.8	10.6	10.1	290.5	第5次調査SH49
8-84	2065	SK370	鋼製石礫	凝灰岩	1.9	1.5	0.15	0.8	第5次調査SH49B
8-84	2066	SK370	石包丁	輝岩製成岩	6.2	14.5	0.8	83.1	第5次調査SH49B
8-84	2067	SK370	石包丁	輝岩製成岩	5.9	14.4	0.7	78.3	第5次調査SH49B
8-85	2068	SK370	石包丁	角閃安山岩	36.4	29.3	9.6	20	第5次調査SH49B
8-85	2078	SK373	石包丁	輝石安山岩	10.4	9.8	4.5	707.2	第5次調査SH49B
8-89	2084	SK374	石包丁	輝岩	5.1	3.9	0.6	14.6	第5次調査SH49B
8-89	2086	SK374	石包丁	輝岩	7.2	1.7	0.5	9.1	第5次調査SH49B
8-93	2090	SK375	石包丁	角閃安山岩	26.6	36.6	11.9	18000.0	第5次調査SH49B
8-93	2094	SK375	石包丁	内阿安山岩	11.7	8.8	5.0	801.6	第5次調査SH49B
8-100	2103	SK379	鋼片	輝石安山岩	10.4	9.2	2.5	879.4	第1次調査SH106
8-100	2106	SK379	鋼片	輝石安山岩	10.4	9.2	2.5	879.4	第1次調査SH106
8-100	2107	SK379	鋼片	角閃安山岩	18.4	8.3	5.0	1167.7	第1次調査SH106
8-112	2138	SK386	打製石礫	片岩	2.4	2.3	0.5	3.8	第1次調査SH106
8-113	2139	SK386	打製石礫	片岩	5.5	5.0	2.8	15.4	第1次調査SH106
8-113	2140	SK386	打製石礫	片岩	11.0	6.1	1.9	185.5	第1次調査SH106
8-112	2141	SK386	石包丁	安山岩	47.6	24.1	12.0	23.0	第13次調査SH209
8-112	2142	SK386	石包丁	安山岩	36.8	34.8	11.6		第13次調査SH209
8-113	2143	SK386	石包丁	安山岩	12.7	9.5	5.7	1027.0	第13次調査SH209
8-115	2159	SK386	石包丁	角閃安山岩	35.1	22.9	10.8	12000.0	第3次調査SH154
8-115	2160	SK386	石包丁	角閃安山岩	16.9	9.6	5.8	897.3	第3次調査SH154
8-115	2161	SK386	石包丁	内阿安山岩	9.9	7.8	4.9	481.6	第3次調査SH154
8-115	2162	SK386	打製石礫	凝灰質頁岩	19.6	6.4	2	1.8	第3次調査SH154
8-130	2183	SK394	石包丁	輝石安山岩	10.8	9.1	5.7	795.8	第3次調査SH148
8-130	2190	SK396	石包丁	輝石安山岩	38.4	16.6	10.7	11000.0	第3次調査SH446
8-133	2197	SK396	打製石礫	凝灰質頁岩	6.9	3	2.6	74.4	第3次調査SH446
8-341	2216	SK399	石包丁	角閃安山岩	22.9	25.1	11.6	850.0	第4次調査SH1019
8-411	2217	SK399	石包丁	角閃安山岩	23.3	27.8	8.7	850.0	第4次調査SH1019
8-143	2220	SK400	石包丁	角閃安山岩	34.2	23.6	10.3	12000.0	第4次調査SH1019
8-147	2238	SK402	投彈?		23+α	20+α		6	
8-147	2239	SK402	打製石礫	流紋岩	5.6	4.8	0.6	26.7	第4次調査SH1002
8-148	2240	SK402	石包丁	角閃安山岩	26.0	32.6	11.6	14500.0	第4次調査SH1002
8-148	2241	SK402	石包丁	角閃安山岩	18.2+α	15.1	9.2	3000.0	第4次調査SH1002
8-190	2247	SK603	流紋岩	角閃安山岩	23.9	34.5	5.8	5600.0	第4次調査SH1009
8-195	2248	SK603	打製石礫	凝灰質頁岩	3	1.7	0.4	0.8	第4次調査SH1009
8-161	2262	SD22	石礫	凝灰質頁岩	4.0	2.0	0.6	3.4	第1次調査SD-01
8-164	2264	SD22	打製石礫	凝灰質頁岩	2.5	1.9	0.4	1.7	第1次調査SD-01
8-164	2265	SD22	打製石礫	凝灰質頁岩	4.0	3.0		8.2	第1次調査SD-01
8-164	2266	SD22	打製石礫	凝灰質頁岩	4.9	1.1	1.0	11.4	第1次調査SD-01
8-164	2267	SD22	打製石礫	凝灰質頁岩	8.7	7.1		12.8	第1次調査SD-01
8-164	2268	SD22	打製石礫	凝灰質頁岩	8.7	4.9	1.9		第1次調査SD-01
8-164	2269	SD22	打製石礫	凝灰質頁岩	10.8	9.2	3.5	216.0	第1次調査SD-01
8-164	2269	SD22	打製石礫	凝灰質頁岩	10.2	9.0	6.1	820.0	第1次調査SD-01
8-166	2300	SD24	打製石礫	安山岩	8.5	6.9	1.8	115.3	第3次調査SD-01
8-174	2311	6号調査	打製石礫	輝石安山岩	2.6+α	2.4	0.4	1.6	第3次調査SD-01
8-177	2317	7号調査	石包丁	流紋岩	2.9	8.1+α	0.75	15.7	第4次調査SH1001
8-177	2318	7号調査	鋼片	流紋岩	6.1	2.8	1.5	19.7	第4次調査SH1001
8-177	2319	7号調査	鋼片	流紋岩	5.8	3.3	0.7	7.2	第4次調査SH1001
8-177	2320	7号調査	鋼片	流紋岩	3.7	2.6	0.7	5.9	第4次調査SH1001

四日市遺跡金属器観察表

調査年度	調査地点	遺物番号	種別	形状	寸法			重量	出土地	調査区画	備考
					長さ	幅	厚さ				
3-70	195	S019	扉釘	鉄	7.1+e	1.0	12.9			第9次調査3区	
3-76	227	S2001	釘	鉄	5.7	1.4	0.8	9.0			第8次調査2区
3-81	261	遺物検出時	不明	鉄	2.8+e	2.4+e	0.5				第6次調査
3-81	282	遺物検出時	煙管	銅	3.5+e		1.0	3.3			第6次調査
3-81	283	跡子探査	煙管	銅	3.5+e		1.0	3.3			第6次調査
3-82	278	包含層(互層)	釘	鉄	2.5	2.2	0.6	3.3			第8次調査2区
3-82	279	D-4 包含層(互層)	キセル	銅	5.3	1.5	0.1	5.1			第8次調査2区
3-85	302	遺物検出時 黒ボク土(互層上層)	刀子		10.1	1.6	1.2	16.6			第9次調査
3-111	369	S010 E-4	索	鉄	口径(26φ)	長さ5.7+e	0.3	112.4			第8次調査1区
3-113	395	包含層(互層)	不明	鉄	3.4	3.8	0.4	13.6			第8次調査1区
3-26	1783	S021	不明	銅			0.1				第2次調査SD1
3-44	1896	S1114	鉄釘(資料簿)	鉄	4.25	5.4		65.4	後世の混入		第13次調査S365 表様
3-174	2308	6号西溝墓	横文鏡	青銅	直径7.8		0.13~0.25		石棺内		第4次調査S1000
3-174	2300	6号西溝墓	鏡蓋	鉄	8.8				石棺内		第4次調査S1000
3-174	2310	6号西溝墓	鏡蓋	鉄	8.2				石棺内		第4次調査S1000

四日市遺跡銭觀察表

遺跡 番号	調査 年次	調査 場所	調査 時期	調査 回数	調査 日数	調査 時間	調査 内容	調査 結果	調査 場所	
374	258	S053	坪野穴塚	北東	1009	12	22	高倉		
341	264		寛永通寶			18	22	野原水	第9次調査S053	No.1
341	265		寛永通寶		24	22	野原水	第6次調査		
342	277	2K C2	寛永通寶		24	23	野原水	第6次調査		
								第8次調査2 K-C2		No.1